

(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告第68集

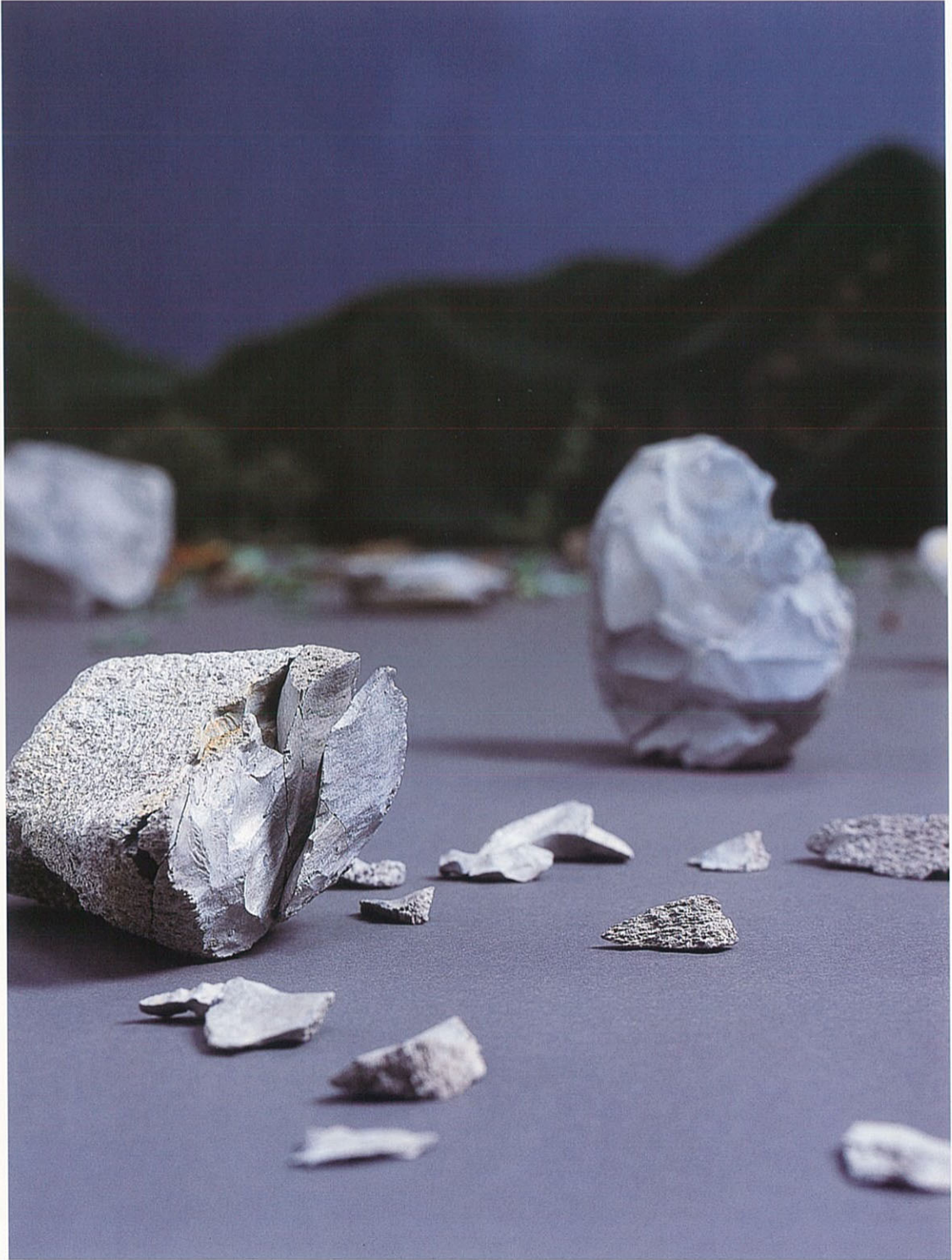
羽曳野市・美原町所在

河原城遺跡Ⅱ

南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書

2002年2月

(財) 大阪府文化財調査研究センター



2 A トレンチ黒色粘土層出土石器

序 文

本書が関わる河原城遺跡の調査は、大阪府河内地域と奈良県中和地域の主要なアクセス道路として計画された南阪奈道路の建設に先立ち行われている調査の一つである。

この南阪奈道路の予定地内では、すでに当センターが幾つかの調査を行っており、当該地の豊かな歴史を明らかにする、貴重な成果を数多く得ている。

本遺跡も、平成11年に調査を行っており、その成果は『河原城遺跡Ⅰ』として平成12年に調査報告書を刊行している。その中で、竪穴式住居が飛鳥時代のはじまりと共に、掘立柱建物へと建築様式を変え、奈良時代には鍛冶工房群へと変化する集落変遷が明らかになっている。

本書では、今回調査を行った成果を基にこの集落変遷を追認し、より詳細な検討を行った他、東除川周辺や中位段丘上の耕地開発進展の過程を考えることができた。また、重要な成果として、縄文時代の石器製作跡が見つかり、石器製作過程が検討できる資料を提示できた。

これも、大阪府土木部、同富田林土木事務所、羽曳野市教育委員会、美原町教育委員会、大阪府教育委員会をはじめ、地元関係各位の多くのご指導、ご協力の賜物であり、深く感謝いたします。

平成14年 2月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 水野 正好


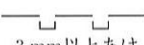
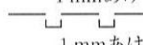
例 言


1. 本書は、大阪府羽曳野市河原城・南河内郡美原町多治井に所在する河原城遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、南阪奈道路建設工事に先立つもので、(財)大阪府文化財調査研究センターが大阪府富田林土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと実施した。
3. 現地調査は、当調査研究センター調査部長 井藤徹、(平成11年度)参事兼調整課長 中西靖人、(平成12年度以降)調整課長 赤木克視、南部調査事務所所長 瀬川健、(平成11年度)調査第2係長 阪田育功、(平成12年度以降)調査第2係長 金光正裕の指示のもと、同係技師 佐伯博光・三宮昌弘、同係専門調査員 大庭みゆきが担当した。出土遺物の写真撮影については、南部調査事務所調査第1係主任技師 立花正治が担当した。
4. 現地調査は、平成12年1月14日から平成12年11月30日までの期間で実施した。その後、整理作業・本報告書作成作業を行い、平成14年2月に完了した。
5. 自然科学分析については、放射性炭素年代測定を(株)地球科学研究所に、珪藻分析は(株)川崎地質に委託し、その結果を本書に掲載した。
6. 調査の実施にあたって、羽曳野市教育委員会・美原町教育委員会・大阪府富田林土木事務所など関係諸機関の協力を得た。また、下記の方々に御指導、御教示を賜った。(敬称略、五十音順)
伊藤栄二(奈良大学大学院生)、岡村道雄(文化庁)、高野学(羽曳野市教育委員会)、田中清美(大阪市文化財協会)、野口淳、森川実(同志社大学大学院生)、森村健一(堺市立埋蔵文化財センター)
7. 本書の執筆、編集は佐伯・三宮・大庭・山内基樹(奈良大学大学院生)・井上雅善(奈良大学学生)が行った。各執筆の分担については、目次に示している。
8. 現地調査・報告書作成作業にあたっては、南部調査事務所・古市分室の非常勤職員諸氏の協力を得た。

凡例

1. 遺構実測図の基準高については、すべて東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。
2. 平面図は、国土座標にのっとった平面直角座標系、第VI座標系に準拠し、座標数値の記載はメートル単位で表す。また、方位矢印の示す方向は座標北を示す。
3. 土色の表現に関しては、小山正忠・竹原秀夫編1998『新版標準土色帖』第8版農林水産省農林技術会議事務局監修・（財）日本色研究事業株式会社色票監修に準拠した。
4. 遺物写真の縮尺率は、不同である。石器遺物写真については、約2/3である。
5. 遺物調整の記載は、行為も痕跡も原則として同一名称とし、カタカナで記す。

遺物実測図における凡例は以下の通り

屈曲線		調整境	
強いもの	実線 —————	異種	一つあき破線 
弱いもの	二つあき破線 	同種	二つあき破線 
	3 mm以上あけ		1 mmあけ

点線は、器表のもの一釉がかり端部、断面一接合痕。ケズリ方向は  で砂粒の移動を示す。

6. 建物の柱間距離は、柱芯から柱芯の距離を記載する。
7. 遺構番号は河原城遺跡（その1）に引き続き通し番号をふっている。しかし、「溝」など遺構の性格を表す名称はその番号の後に付け、同種遺構内で番号をふる場合は「カマド1」のように、その名称の後にアラビア数字をふった。ただし、掘立柱建物に関しては、（その1）では小文字のアルファベットを、今回の調査ではローマ数字をふった。
8. 土器編年は主に陶邑編年、飛鳥編年、平城宮編年を使用した。
9. 主に建物などの方位をN 3° Eのように表記した。この場合北から東へ3° ふったという意味である。

目次

巻頭カラー図版

2 Aトレンチ黒色粘土層出土石器

序文

例言

凡例

I. 位置と環境	(大庭)	1
II. 調査に至る経緯と経過	(佐伯)	6
III. 調査の方法	(佐伯)	7
IV. 調査成果		
1. 基本層序	(三宮)	9
2. 7 Cトレンチ	(佐伯)	20
3. 12Bトレンチ	(三宮)	37
4. 13Bトレンチ	(佐伯)	45
5. 14Bトレンチ	(三宮・大庭)	51
6. 15Bトレンチ	(大庭)	69
7. A地区(2~4 Aトレンチ)	(三宮)	74
8. 2 Aトレンチ黒色粘土層出土石器群	(山内)	105
9. 出土銭貨	(三宮・大庭)	141
10. 包含層出土石器遺物	(井上)	142
V. 基礎分析・考察		
1. 河原城遺跡の集落変遷とその背景	(三宮)	158
2. 河原城遺跡出土石器群における「場の機能・性格」	(山内)	178
3. 放射性炭素年代測定	(株)地球科学研究所・三宮	182
4. 花粉・珪藻分析	(川崎地質株式会社・三宮)	187
VI. まとめ		
1. 旧石器時代	(大庭)	204
2. 縄文時代(石器群)	(三宮)	204
3. 古墳時代前期	(三宮)	205
4. 古墳時代後期~飛鳥時代	(三宮)	206
5. 奈良時代	(大庭)	207
6. 平安時代以降	(大庭)	208

挿図目次

図1	河原城遺跡と周辺地質図……………1	図46	14 B tr.4面1787・2032・2044溝 ・1786ピット・1968土坑土器出土状況……………55
図2	遺跡周辺地形図……………3	図47	14 B tr.4面建物Ⅶ……………57
図3	河原城遺跡とその周辺遺跡……………5	図48	14 B tr.4面建物Ⅷ……………57
図4	国土座標とそれに伴う地区割り……………7	図49	14 B tr.4面建物Ⅸ……………57
図5	調査区地区割り図……………8	図50	14 B tr.4面建物Ⅹ……………58
図6	調査区・トレンチ配置図……………8	図51	14 B tr.4面建物Ⅺ……………59
図7	基本層序概念模式図……………11	図52	14 B tr.4面建物Ⅻ……………59
図8	トレンチ壁断面位置図……………13	図53	14 B tr.4面柵列Ⅲ……………59
図9	7 C tr.南西壁・西壁断面……………13	図54	14 B tr.4面住居Ⅰ……………60
図10	13 B tr.北壁断面……………13	図55	14 B tr.4面住居Ⅱ……………61
図11	12 B tr.西壁・北東壁断面……………14	図56	14 B tr.4面1983カマド1……………62
図12	2 A tr.西壁断面……………15	図57	1983カマド1復元図……………64
図13	3 A tr.西壁断面……………16	図58	14 B tr.4面1937カマド2……………66
図14	3 A tr.東壁断面……………17	図59	1937カマド2復元図……………67
図15	3 A tr.北壁・4 A tr.北壁・北 ・南深掘りトレンチ断面……………18	図60	14 B tr.4面1985落ち込み底面……………67
図16	7 C tr.1面……………20	図61	15 B tr.3層・表採遺物……………70
図17	7 C tr.1～3層出土遺物……………21	図62	15 B tr.3層移動式カマド……………71
図18	7 C tr.4面……………22	図63	15 B tr.4面遺構及び出土遺物……………72
図19	7 C tr.2面1379井戸……………23	図64	2 A・3 A・4 A tr.包含層出土遺物……………77
図20	7 C tr.4面1395土坑……………23	図65	A地区3面及び1552流路最上面遺構 (4面最終)……………79・80
図21	7 C tr.4面1435土坑……………24	図66	A地区3面1635土坑・1523土坑断面……………81
図22	7 C tr.4面建物Ⅳ……………24	図67	3 A tr.遺構出土遺物 (1586・1556落ち込み)……………82
図23	7 C tr.4面建物Ⅴ……………25	図68	4 A tr.4面1534溝土器出土状況 ・出土土器、1600溝出土土器……………84
図24	7 C tr.4面柵列Ⅱ……………26	図69	A地区4面……………85・86
図25	7 C tr.4面建物Ⅵ……………26	図70	A地区北側4-1面溝群……………87
図26	7 C tr.遺構出土遺物(1360溝・1361溝 ・1366柱穴・1377落ち・1470溝)……………27	図71	A地区北側4-2面溝群及び1634杭群……………89
図27	7 C tr.4面1360・1361・1362・1378 ・1470溝断面……………28	図72	A地区1552流路出土土器……………93
図28	7 C tr.4面1360溝土器出土状況……………30	図73	3 A tr.1546流路上層出土土器……………94
図29	7 C tr.4面1378溝土器出土状況……………32	図74	4 A tr.4面1729不整形遺構出土土器 ・出土状況……………94
図30	7 C tr.4面1378溝出土遺物(その1) 須恵器……………33	図75	4 A tr.4面相当土器1・2……………95
図31	7 C tr.4面1378溝出土遺物(その2) 土師器及び石製品……………34	図76	4 A tr.4層出土土器……………97
図32	7 C tr.4面1378溝出土遺物(その3) 埴輪……………35	図77	4 A tr.5面1772土坑……………98
図33	12 B tr.包含層出土遺物……………38	図78	4 A tr.北側5面……………99
図34	12 B tr.1～4面・4面北半谷2完掘及び 1515溝断面……………39・40	図79	2 A tr.5面微高地断ち割り断面……………100
図35	谷全体及び谷内遺構推定復元図……………41	図80	黒色粘土層分布範囲及び4 A tr. 北側深掘りトレンチ位置図……………101
図36	12 B tr.谷1出土遺物……………43	図81	2 A tr.石器群出土状況図……………106
図37	12 B tr.出土遺物(1514溝・谷2)……………44	図82	石器集中部1石器遺物出土状況図……………107
図38	13 B tr.出土遺物(1～3層・1339柱穴 (建物Ⅲ))……………45	図83	石器集中部1剥片出土状況図……………108
図39	13 B tr.3面相当面建物Ⅰ……………46	図84	石器集中部1石核・楔形石器出土状況図 ……………109
図40	13 B tr.3面相当面……………47	図85	石器集中部2石器遺物出土状況図……………110
図41	13 B tr.3面相当面建物Ⅱ……………48	図86	石器集中部2剥片出土状況図……………111
図42	13 B tr.3面相当面建物Ⅲ……………48	図87	石器集中部2石核・楔形石器出土状況図 ……………112
図43	13 B tr.4面……………49	図88	接合資料2分布図……………113
図44	14 B tr.出土遺物(4面精査中・1786ピット ・1965ピット・1823溝・1968土坑 ・1953ピット・1787溝・1983カマド1 ・2032溝・2044溝)……………52	図89	接合資料3分布図……………113
図45	14 B tr.4面……………53	図90	接合資料4分布図……………114
		図91	接合資料1・2実測図……………115
		図92	接合資料3(1)実測図……………116
		図93	接合資料3(2)・4実測図……………117
		図94	接合資料5分布図……………118
		図95	接合資料5(1)実測図……………119
		図96	接合資料5(2)実測図……………120

図97	接合資料6分布図	122
図98	接合資料6(1)実測図	123
図99	接合資料6(2)実測図	124
図100	接合資料7実測図	125
図101	接合資料7分布図	126
図102	接合資料8分布図	126
図103	接合資料9分布図	127
図104	接合資料10分布図	127
図105	接合資料11分布図	128
図106	接合資料12分布図	129
図107	接合資料13分布図	129
図108	接合資料14分布図	130
図109	接合資料15分布図	130
図110	接合資料17分布図	131
図111	接合資料18分布図	132
図112	接合資料19分布図	132
図113	接合資料8・12・19実測図	133
図114	接合資料9・11(1)実測図	134
図115	接合資料11(2)・13実測図	135
図116	接合資料14・16実測図	136
図117	接合資料15・17・18実測図	137
図118	接合資料10・削器・石鏃実測図	138
図119	出土銭貨	141
図120	包含層出土石器遺物	143
図121	古墳時代～奈良時代主要集落関連遺構 模式図	160
図122	推定飛鳥時代建物の小群抽出	162
図123	周辺地形と集落推定範囲	165
図124	集落変遷模式図(その1)	169
図125	集落変遷模式図(その2)	170
図126	集落変遷模式図(その3)	171

第5章 基礎分析・考察

第4節

図2-1	試料採取層準	188
図3-1	花粉分析処理フロー	189
図3-2	珪藻分析処理フローチャート	190
図4-1	イネ科花粉の粒径比較図	193
図4-2	花粉ダイアグラム	194
図4-3	珪藻ダイアグラム	196
図4-4	珪藻総合ダイアグラム	197
図5-1	大阪市天保山の花粉ダイアグラム	199

表目次

表1	包含層出土石器遺物のトレンチ 単位での分布傾向	145
表2	2Aトレンチ出土石器群観察表(1)	146
表3	2Aトレンチ出土石器群観察表(2)	147
表4	2Aトレンチ出土石器群観察表(3)	148
表5	2Aトレンチ出土石器群観察表(4)	149
表6	2Aトレンチ出土石器群観察表(5)	150
表7	2Aトレンチ出土石器群観察表(6)	151
表8	2Aトレンチ出土石器群観察表(7)	152
表9	2Aトレンチ出土石器群観察表(8)	153
表10	2Aトレンチ出土石器群観察表(9)	154
表11	2Aトレンチ出土石器群観察表 (断ち割り出土分)	155
表12	包含層出土石器遺物観察表(1)	156
表13	包含層出土石器遺物観察表(2)	157

第5章 基礎分析・考察

第4節

表4-1	検出花粉化石種類一覧表	192
表4-2	花粉化石組成表	194
表4-3	検出された珪藻化石の種類一覧表	196
表4-4	珪藻化石組成表	197
	検出花粉化石数量表	202
	検出珪藻化石数量表	203

写真図版目次

- 図版 1 7 C tr.遺構
1. 7 C tr.4面
3. 7 C tr.1378溝土器13出土状況
2. 7 C tr.1378溝
4. 7 C tr.1378溝断面
- 図版 2 7 C tr.遺構
1. 7 C tr.建物Ⅳ
3. 7 C tr.建物Ⅳ1367柱穴（東側棟持）断面
2. 7 C tr.1379井戸断面
4. 7 C tr.建物Ⅴ
- 図版 3 7 C・12 B・13 B tr.遺構
1. 7 C tr.1395土坑炭・焼土検出状況
3. 7 C tr.1360溝土器4（韃羽口）・鉄滓出土状況
5. 13 B tr.北壁断面
7. 13 B tr.3面相当面建物Ⅲ1339柱穴断面
2. 7 C tr.1435土坑礫出土状況
4. 12 B tr.北東壁断面（段丘崖斜面堆積）
6. 13 B tr.3面相当面建物Ⅱ1310柱穴断面
- 図版 4 12 B tr.遺構
1. 12 B tr.北側2～4面谷1
3. 13 B tr.3面相当面
2. 12 B tr.4面谷2完掘状況
- 図版 5 13 B tr.遺構
1. 13 B tr.建物Ⅰ
3. 13 B tr.建物Ⅲ
2. 13 B tr.建物Ⅱ
4. 13 B tr.4面
- 図版 6 7 C・14 B tr.遺構
1. 14 B tr.4面東半北側
3. 7 C tr.建物Ⅵ
2. 14 B tr.4面東半南側
4. 14 B tr.建物Ⅶ
- 図版 7 14 B tr.遺構
1. 14 B tr.建物Ⅷ
3. 14 B tr.建物Ⅹ
2. 14 B tr.建物Ⅸ
4. 14 B tr.住居Ⅱ完掘状況
- 図版 8 14 B tr.遺構
1. 14 B tr.1786ピット土器出土状況
3. 14 B tr.カマド2検出状況
5. 14 B tr.カマド1掛口付近検出状況
2. 14 B tr.1787溝土器3出土状況
4. 14 B tr.カマド2完掘状況
6. 14 B tr.カマド1掛口付近土器出土状況
- 図版 9 14 B tr.遺構
1. 14 B tr.カマド1検出状況
3. 14 B tr.カマド1焚口付近検出状況
2. 14 B tr.カマド1完掘状況
4. 14 B tr.カマド1煙道部検出状況
- 図版10 15 B・2 A tr.遺構
1. 15 B tr.4面
3. 2 A tr.北端3～4面相当
2. 2 A tr.北端1～2面相当
- 図版11 2 A tr.遺構
1. 2 A tr.北側4-1面
3. 2 A tr.南側4面
2. 2 A tr.北側4-2面
- 図版12 3 A・4 A tr.遺構
1. 3 A tr.北側3・4面
3. 4 A tr.北端部4面
2. 4 A tr.北端部3面完掘4面検出状況
- 図版13 3 A・4 A tr.遺構
1. 4 A tr.4面南側
3. 4 A tr.4面北側
2. 3 A tr.南側3・4面
- 図版14 3 A・4 A tr.遺構
1. 3 A tr.2面銭出土状況
3. 3 A tr.4面1552流路南肩部
2. 3 A tr.3面1523土坑銭出土状況
4. 4 A tr.4面1552流路最上面
- 図版15 2 A・3 A・4 A tr.遺構
1. 3 A tr.東壁断面1546流路南肩部
3. 3 A tr.東壁断面1552流路北側肩部
2. 3 A tr.東壁断面1546流路内噴砂
4. 3 A tr.東壁断面1552流路以北

5. 3A tr.4面1534溝断面
7. 2A tr.4面1600・1631溝（重複）断面
- 図版16 2A・4A tr.遺構
1. 2A tr.4-1面1616溝断面
3. 2A tr.4面1634杭群検出状況
5. 4A tr.4面相当面土器2出土状況
6. 4A tr.4面1534溝土器出土状況
8. 4A tr.4面1600・1631溝断面
2. 2A tr.4-2面1632溝断面
4. 4A tr.4面相当面土器1出土状況
- 図版17 2A・4A tr.遺構
1. 4A tr.4層内土器1出土状況
3. 4A tr.4層内土器4出土状況
5. 2A tr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁
7. 2A tr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁中央
2. 4A tr.4層内土器2・3出土状況
4. 4A tr.南側4面以下深堀トレンチ西壁
6. 2A tr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁北端
8. 2A tr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁南端
- 図版18 2A・4A tr.遺構
1. 2A tr.黒色粘土層内石器出土状況 石器集中部1 検出はじめ
2. 2A tr.黒色粘土層内石器出土状況 石器集中部1
3. 2A tr.黒色粘土層内石器出土状況 石器集中部2
4. 4A tr.北端深堀トレンチ南壁西端
- 図版19 7C tr.出土遺物
1～11. 1378溝
- 図版20 7C・12B・14B tr.出土遺物
1・2. 1378溝 3. 12B tr.側溝 4・5. 谷1上層 6. 1968土坑 7～9. カマド1
- 図版21 14B・15B tr.出土遺物
1～3. 1776溝 4～6. 15B tr.3層 7・8. 1787溝 9. 1786ピット 10. 1781土坑
- 図版22 A地区遺構出土遺物
1～8. 1552流路 9. 1729不整形遺構 10. 1534溝 11. 1600溝 12. 1772土坑
- 図版23 A地区包含層出土遺物
1. 2A tr.北部斜面 2. 4A tr.2層 3・4. 4A tr.4面相当 5～8. 4A tr.4層 9. 4A tr.側溝
- 図版24 3A・12B・15B tr.出土遺物
1. 1586落ち込み 2. 谷1・谷2 3・4. 15B tr.3層
- 図版25 7C・4A tr.出土遺物
1・2. 7C tr.1360溝 3. 1360溝、4A tr.1679土坑、4A tr.1692・1728土坑
- 図版26 2A tr.黒色粘土層出土石器
接合資料1～4
- 図版27 2A tr.黒色粘土層出土石器
接合資料5～7
- 図版28 2A tr.黒色粘土層出土石器
接合資料8・9・11～14・19
- 図版29 2A tr.黒色粘土層出土石器
接合資料10・15～18、石鏃、削器、楔形石器
- 図版30 包含層出土石器遺物

I. 位置と環境

1. 位置と地形的環境

河原城遺跡は羽曳野市河原城、美原町多治井にかけて所在する。遺跡の北西部は羽曳野市と美原町にまたがる郡戸遺跡と隣接し、東側には東除川が北流している。また、河原城遺跡から約10km東側にはサヌカイトの産地として名高い二上山がある。

遺跡周辺の地形的環境を概観する。和歌山県との府県境である和泉山脈からは複数の丘陵や尾根が北方に向かって伸びており、そのうち北上する尾根の一端が羽曳野丘陵を、西進する先端は陶器山丘陵などの高位段丘を形成している。羽曳野丘陵と陶器山丘陵との間には、狭山池を頂点とするように中位段丘が扇状に広がっており、このうち現在の東除川と西除川に挟まれた範囲は河内台地とも呼ばれている。

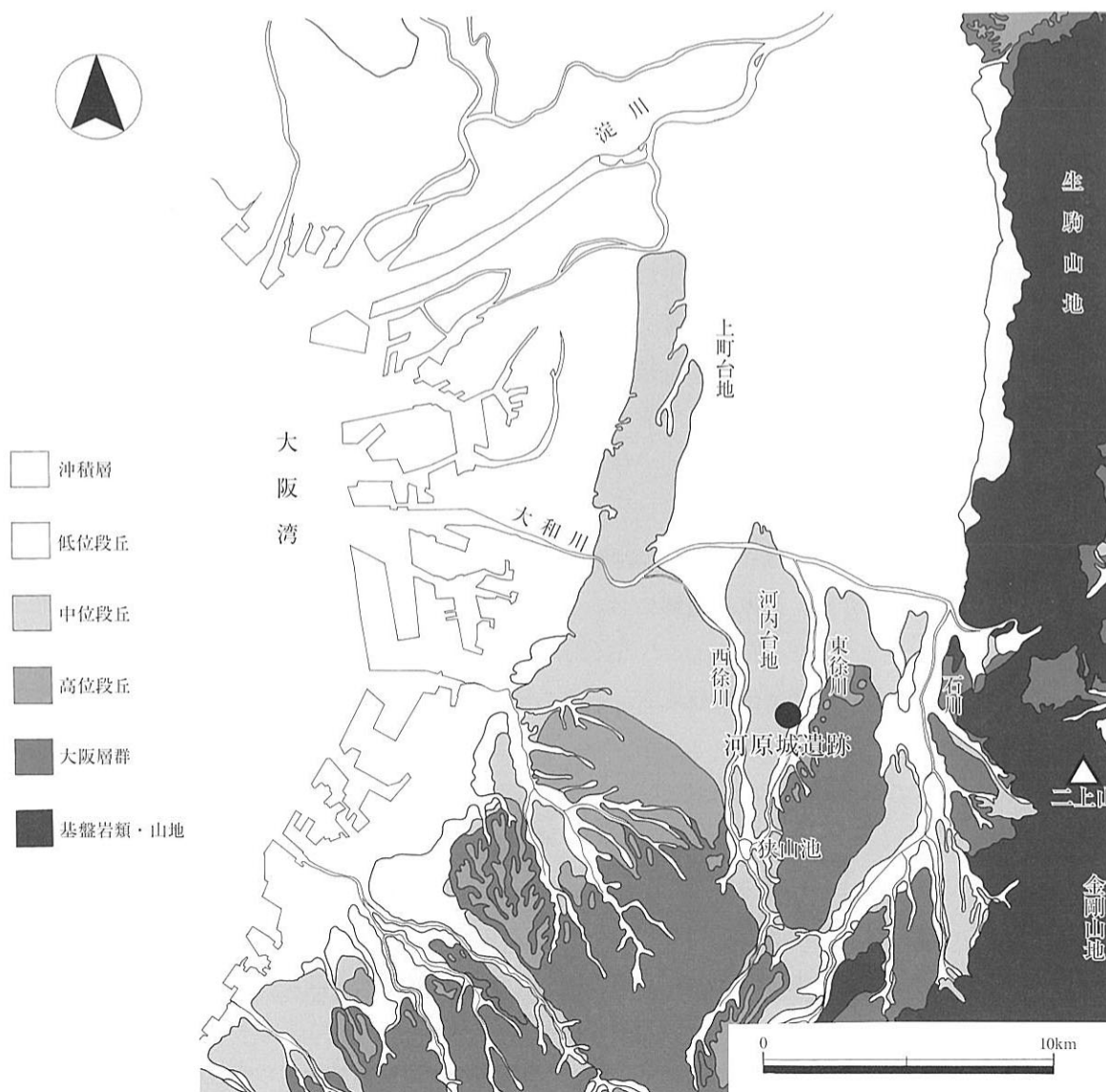


図1 河原城遺跡と周辺地質図 (S=25万分の1)

足利健亮によると、河内台地を含む中位段丘は「古天野・西除・東除川」水系（以下「古天野川」と省略して呼ぶ）の作用によって形成されたという。約15万年～10万年前頃に、この「古天野川」が羽曳野丘陵と陶器山丘陵の間を割って北流し、流路を変えながら大規模な扇状地を形成した。そして約3万年前になると、この扇状地が「古天野川」自身による下刻作用によって段丘化し、この際に「古天野川」本流である西除川水系と、東除川水系とに明確に分離された、と推定されている。

河内台地東側を流れる東除川は対岸に羽曳野丘陵が迫っていることもあり、狭く深い谷底平野を形成している。一方、台地西側を流れる西除川は扇状地形のほぼ中央を北上しており、周囲には段丘崖は発達しておらず、浅く平坦な平野が広がっている。このような両河川にはさまれた河内台地は水利が困難な土地であったが、7世紀初頭の狭山池の築造によって台地上の開発が本格化ようになる。そして近世以降には水路や溜池が整備され耕地が広がってゆく。住宅等の開発で減少したものの、現在でもこの地域では溜池が散在する古景観の名残をうかがうことができる。

河原城遺跡は河内台地東部から東除川沿いに形成された谷底平野を含む範囲に位置している。今回の調査地は東除川以西、すなわち谷底平野から低位段丘、中位段丘におよぶ傾斜地と中位段丘平坦面にわたっており、東西約300mの間で高低差は約8mをはかる。

2. 歴史的環境

河原城遺跡周辺の遺跡分布図は図3に記す通りである。ここでは河内台地上に立地し、河原城遺跡を中心として直径4km内に所在する遺跡を主に取り上げている。

遊離資料であるが後期旧石器時代から縄文時代早期に位置付けられる有舌尖頭器や翼状剥片、翼状剥片石核やその他の旧石器製作技術による石核などが周辺遺跡から出土している。これらのことから後期旧石器時代にはすでに、この河内台地上でも人々が活動していたとみられる。

縄文～弥生時代の人々の活動痕跡は概して稀薄である。丹上遺跡（14・171）では縄文時代の石鏃・石匙、弥生時代の石包丁など、真福寺遺跡（15）では弥生時代の石鏃・弥生時代後期の土器が出土している。しかしこれらは遺構からではなく後世の地層から出土したものであり、この時期の様相は不明な点が多い。そういった中で今回、河原城遺跡において縄文時代の石器集中部が検出されたことは注目されよう。

古墳時代に入ると人々の活動は活発化する。古市古墳群と百舌鳥古墳群にはさまれたこの地域では、鉄製品を多量に副葬した黒姫山古墳（3）が古墳時代中期中葉に、そこから北へ約3キロの位置には、雄略陵にも比定されている河内大塚山古墳が中期後葉に築造される。黒姫山古墳の周囲には黒姫山北古墳（2）、さる山古墳（5）、けんけん山古墳（8）、さば山古墳（4）などといった小古墳が古墳群を形成している。さば山古墳は太井遺跡の調査の際に馬蹄形周溝を有する帆立貝式前方後円墳であったことが判明した。また丹上遺跡、郡戸遺跡（28、130）などでは小型の埋没方墳もみつまっている。河原城遺跡周辺では埴輪片や紡錘車の出土もみられることから、後世に削平を受けた古墳が存在していたことが推定できる。出土埴輪は、堺市日置荘遺跡の埴輪窯跡で焼成されたものと共通する特徴をもつものも少なくない。さらに河原城遺跡から南東方向1km以内に六ツ塚河原城古墳（51）が位置する。現在、古墳自体は消失しているが、7世紀初頭に位置付けられる竜山石製家形石棺が出土している。

7世紀以降、狭山池の築造を契機に周辺地域の開発が活発化する。大規模な集落や社寺が急増し、交

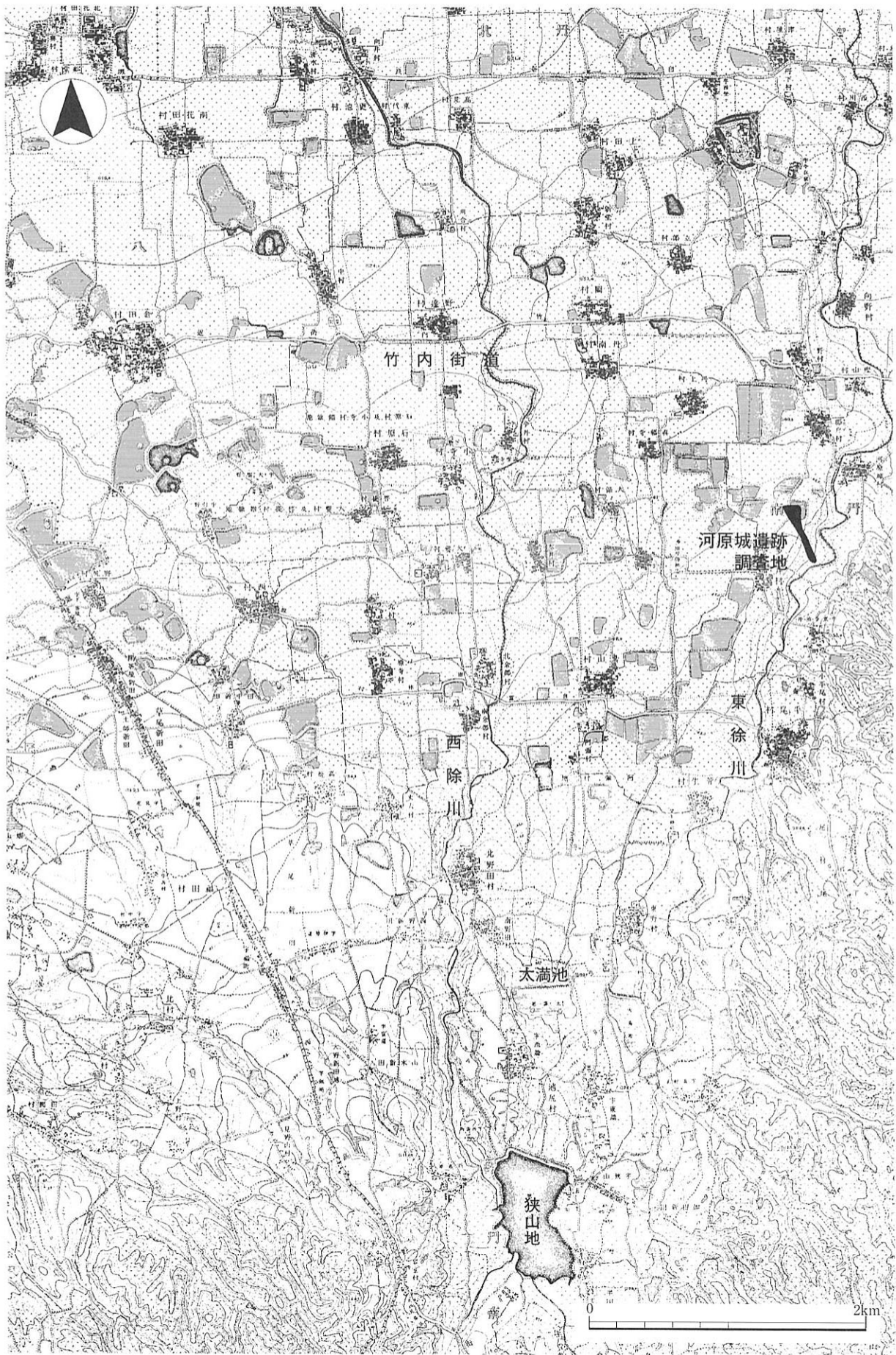


图2 遺跡周辺地形図 (明治18年測量) (S=1/40000)

通網も整備されてゆく。なお、この地域は文献上に記述のある「丹比連」、「丹比真人」などが基盤を置いた丹比郡だと考えられており、この地域での遺跡増加との関係も指摘されている。奈良時代の社寺としては黒山廃寺（9）、丹比廃寺（11）、野中寺、丹比神社（10）なども造営される。また南北には難波大道跡、東西には丹比道（174）や大津道なども整備され、平尾遺跡（12）、丹上遺跡、太井遺跡、などの大規模集落遺跡もこの周辺に営まれる。平尾遺跡では42棟の掘立柱建物や柵が整然と並んで検出されており、丹比氏の本拠地である可能性も考えられている。丹比道の南に位置する丹上遺跡では8～10世紀にかけての建物群が検出されている。

平安時代の様相は奈良時代のそれとは劇的な変化は見られない。しかし日置荘遺跡などで新たな集落が営まれていることから、地域開発が進行していたことがうかがえる。

また、平安時代から鎌倉時代にかけて、鑄造工房跡とみられる遺構がさらに認められることは注目される。これらは文献や梵鐘の銘文でも知られる「河内鑄物師」に関連するものと考えられる。真福寺遺跡では梵鐘を鑄造した遺構や、白炭を焼いた窯が検出され、鞆・埴・コップ形容器・鍋などの遺物が多量に出土している。太井遺跡では鉄滓・鞆羽口・炉壁・熱を受けた土坑などが検出され、余部遺跡、日置荘遺跡からは多量の鑄型が出土している。このような近年の発掘成果により、文字資料からだけでなく考古学的にも河内鑄物師の痕跡を追うことができるようになった。

江戸時代以降になると、この周辺には灌漑用の溜池が築かれ、耕地として利用されてゆく。この時期の景観は図2と大きく変化はないものと思われ、現代の景観にもその名残がみられる。

参考文献

市原実・吉川周作・三田村宗樹・水野清秀・林隆夫1991. 3 「大阪とその周辺地域の第四紀地質図」
『アーバンクボタ』30号

大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1995. 3 『日置荘遺跡』

大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター 1996. 3 『太井遺跡』

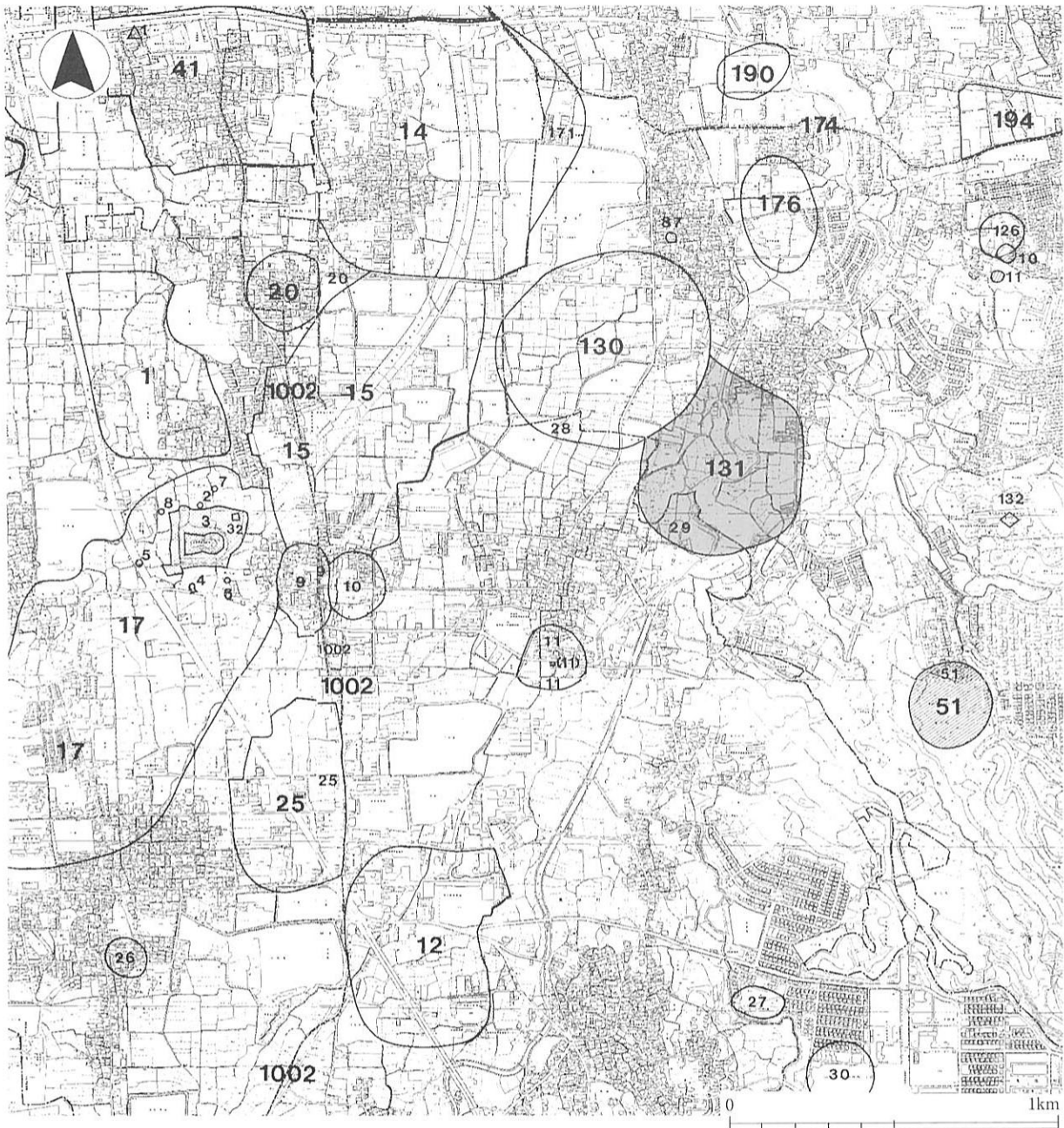
大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財調査研究センター 1997. 3 『真福寺遺跡』

財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998. 3 『丹上遺跡』

財団法人大阪府文化財調査研究センター 2000. 4 『河原城遺跡Ⅰ』

羽曳野市史編纂委員会1997. 3 羽曳野市史編纂委員会編『羽曳野市史』第1巻 本文編1

足利健亮1985 「地形発達と地質」 松原市史編纂委員会編『松原市史』第1巻



所在地	番号	名称	所在地	番号	名称	所在地	番号	名称
松原市	41	丹南遺跡	美原町	1	大保遺跡	美原町	14	丹上遺跡
羽曳野市	10	雨ヶ池北古墳		2	黒姫山北古墳		15	真福寺遺跡
	11	雨ヶ池古墳		3	黒姫山古墳		17	太井遺跡
	51	六ツ塚河原城古墳		4	さば山古墳		20	真福寺跡
	126	平下遺跡		5	さる山古墳		25	黒山遺跡
	130	郡戸遺跡		6	名称不明古墳		26	阿弥陀寺経塚
	131	河原城遺跡		7	鎮守山古墳		27	平尾窯跡群
	132	徳楽山古墳石槨		8	けんけん山古墳		28	郡戸遺跡
	171	丹上遺跡		9	黒山廃寺		29	河原城遺跡
	174	竹内街道（丹比道）		10	丹比神社		30	平尾城址
	176	郡戸東遺跡		11	丹比廃寺跡		32	どん山古墳
	194	伊賀南遺跡		12	平尾遺跡		1002	中高野街道

図3 河原城遺跡とその周辺遺跡（S=1/20,000）

Ⅱ．調査に至る経緯と経過

今回の調査の契機となった南阪奈道路は、大阪府南河内郡美原町丹上（現阪和自動車道）を起点とし、奈良県北葛城郡新庄町（国道165号線大和高田バイパス）を終点とする、総延長16.9kmの第1種3級道路（自動車専用道路）である。路線名は、一般国道165号線・166号線・府道美原太子線で、この間を国土交通省・日本道路公団・大阪府・大阪府道路公社・奈良県の合併施工によって事業が進められている。

この道路建設計画は昭和46年度まで遡る。当時、建設省（現国土交通省）近畿地方建設局浪速国道工事事務所は、南河内地域の交通渋滞の緩和と奈良県中和地域との連絡網の整備を目的として、一般国道165号線南河内バイパス道路の建設を計画した。国土交通省は、ルート選定に先立って、南河内郡美原町丹上から太子町までの間の分布調査を、財団法人元興寺仏教民俗資料研究所（現財団法人元興寺文化財研究所）に依頼し、昭和49年度にはこの結果を受けて、尺度地区での範囲確認調査を、財団法人元興寺文化財研究所が行った。調査は大阪府農林技術センターの敷地内で実施され、建設予定地周辺に遺跡が広がっている事が事実となった。

昭和50年度、国土交通省は再度、計画予定地域内の分布調査を大阪府教育委員会に依頼し、大阪府教育委員会は、協議の結果、財団法人大阪文化財センター（現財団法人大阪府文化財調査研究センター）で実施するのが適当である事を回答すると共に、財団法人大阪府文化財調査研究センターに対しても調査を実地するよう通知した。調査は、広範囲な道路計画地域を便宜上6地域に分けて昭和50年12月から実施し、弥生時代の石鏃や青磁碗をはじめ古墳時代から鎌倉時代の遺物の散布が確認された郡戸遺跡が周知されるとともに、尺度遺跡含む地区から石川までにおいても多くの遺物の散布が認められた。

昭和62年には、大阪府道路整備長期計画（レインボー計画）が策定され、この中で、南阪奈道路は、「南阪奈軸の主要な路線の一つ」と位置付けられ、「大阪と奈良を結ぶ自動車専用道路として、関西国際空港のアクセス道路として、また西名阪自動車道、国道166号の混雑緩和に寄与する」重要な路線として、平成2年12月、都市計画決定がなされた。平成5年度には、大阪府土木部道路課は大阪府教育委員会に対して事業内容を説明し、大阪府教育委員会はこれを受けて協議し、平成6年度に事業地内全域において現地を踏査し、試掘調査を必要とする地区、さらに分布調査を必要とする地区、本調査地区を確認した。

平成7年度、大阪府教育委員会は協議の結果、各事業者に対し、調査は財団法人大阪府文化財調査研究センターに委託して実施することが適当である旨を回答すると同時に、センターに対しても調査を実施するよう通知した。これを受けて、センターは各事業者と委託契約を締結し、平成8年度、太子町駒ヶ谷地区・地獄谷地区から順次、調査に着手していった。

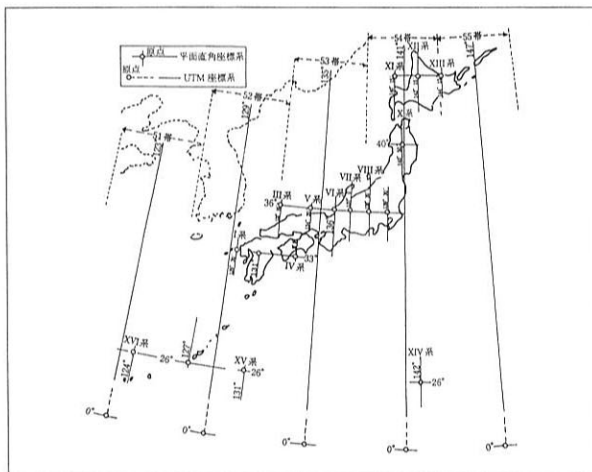
河原城遺跡が位置する、阪和自動車道から国道170号線（旧外環状線）までの4.6kmは、大阪府と大阪府道路公社が事業主体となる区間であり、大阪府土木部とセンターは平成12年1月14日付けで委託契約を結び、12年11月30日まで調査を行った。この調査が、本書が関わる調査である。

Ⅲ. 調査の方法

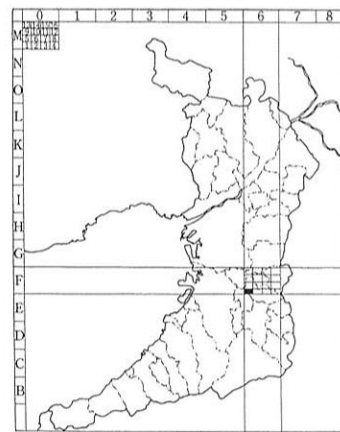
今回の調査は、前年度に行った河原城遺跡Ⅰの残地部分を対象としており、調査地の略称及び地区割り、測量の基準等は『河原城遺跡Ⅰ』に従った。

地区割り

地区割りは、国土座標（第Ⅵ座標系）を基準とし、大阪府全域を共通の方法で区割りできるように設定している。第Ⅰ区画は1/10,000地形図を使った区割りであり、縦6km、横8kmが一つの区画となり、これを南西隅を基点として縦軸A～O、横軸0～8で表示する。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmの16の区画に分割し、第Ⅰ区画と同様に南西隅を基準として、各々の1～16の番号を与えている。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画を100m毎に区画したもので、縦15、横20に区画される。これを、北東隅を基準として縦軸A～Oのアルファベットの大きい文字と、横軸0～20のアラビア数字の番号を与え、その組み合わせで区画を特定する。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10m毎に区画したもので、縦横10に区画される。これを、第Ⅲ区画と同様に北東隅を基準として縦軸a～jのアルファベットの小さい文字と、横軸0～10のアラビア数字



国土座標系図



第Ⅰ・Ⅱ区画

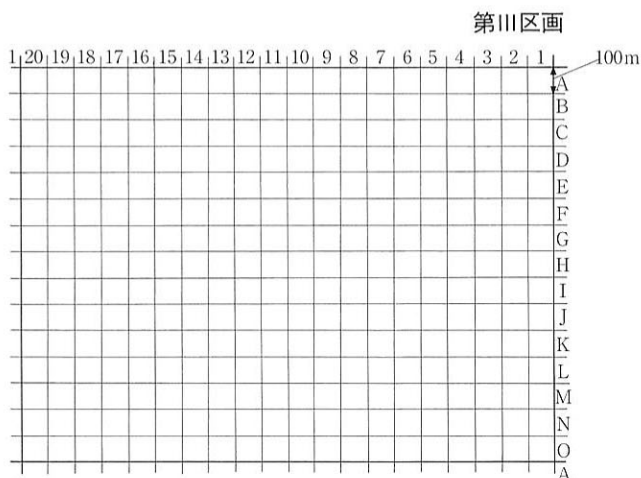


図4 国土座標とそれに伴う地区割り

字の番号を与え、その組み合わせで区画を特定する。

方位

調査における方位は、国土座標を基準とした区画割りを使用しているため、すべて座標北である。

ここでは、真北は東へ $0^{\circ}12'$ 、磁北が西へ $6^{\circ}40'$ 座標北より振れている。

測量

測量は、区画割り・方位と同様に国土座標を基準としている。この測量基準を用い、適時ヘリコプターによる航空写真からの $1/50$ の平面図と、平板による $1/100$ の平面図によって遺構全体の測量を行った。

また、遺物の出土状況などは、適時縮尺を設定して測量を行った。

トレンチ名

前述のように河原城遺跡Ⅰの残地部分を対象としているため、各トレンチ名も前回調査のトレンチ名の連番で呼称している。

ちなみに地区割りは、道路を地区区分の基準としており、南からA地区～C地区を設定している。今回調査対象地は2A～4Aと12B～15B、7Cである。

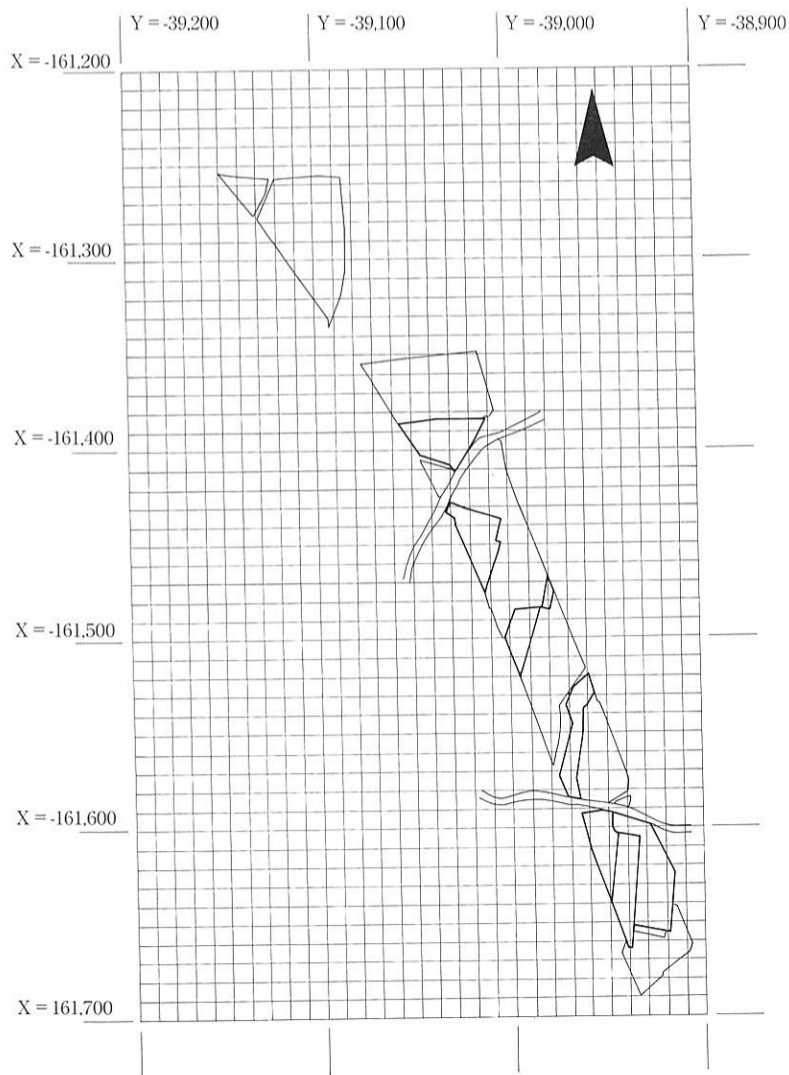


図5 調査区地区割り図 (S=1/400)

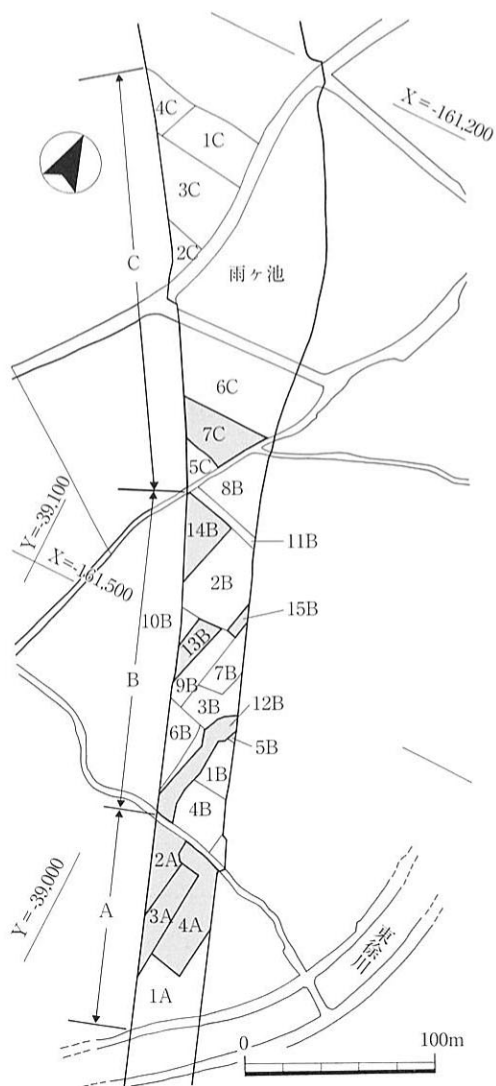


図6 調査区・トレンチ配置図 (S=1/400)

IV. 調査成果

1. 基本層序

(1) 堆積状況概観

河原城遺跡は、東除川左岸の氾濫原から、その西側の中位段丘上にかけて広がる遺跡であり、今回の調査地もその二つにまたがっている。

中位段丘は古天野川の扇状地として形成されたため、その平坦面はかなり凹凸があり、現在見られる耕地区画もその地形に沿ったものである。

段丘上は、風化礫を含む中位段丘構成層上部がその基盤を成す。東除川・西除川の下刻進行後は堆積物の供給が減少したため、元々地形的に高い部分は、現耕土下にこの層が直接出ている部分も多い。

しかし、大部分はその風化礫層を起源とする、黄褐色系粘質土層がその上に二次堆積している。そして、その上に2～3層の旧耕土の重なりが見られるのが平均的な土層である。調査区内の中位段丘平坦面側では、それら旧耕土を上から1～3層と名付け、その下の黄褐色系粘質土層を4層とした。

ただし、段丘縁辺部で段丘崖に向かって緩傾斜を示す部分や段丘崖斜面では、3層に相当する層序で茶褐色系の粘質土が堆積している事が多く、これを3層相当層とした。

この3層相当層と3層の関係についてふれておく。3層は旧耕土層の最下にある層だが、上層に比べ粘性が高く、有機物を比較的多く含有するため暗色を呈する。これは、3層が、耕地開発が成される以前に段丘上に形成された腐植土を起源とし、それをそのまま耕土として耕したためと考えられる。

そして、同じ腐植土が、斜面に二次堆積し、水平な耕地を造成する時に、元の自然地形で低かった部分に残されたのが、3層相当層であると思われる。

つまり、起源を同じくしながら、層位的には3層相当層が3層より下位になり、元々の腐食土層がもし残存していたなら、それが3層相当層より下位になるはずである。

段丘より南東の、東除川の氾濫原にあるA地区では、今回初めて堆積の状況が明らかになった。

周辺の現地地形では、河岸段丘と見られる蛇行した段差がいくつか見られ、中位段丘崖沿いには調査区よりやや下流側で下位段丘に分類されている部分もある。

調査区内では、A地区のほぼ中央を埋没流路が横切っており、これはしだいに中位段丘崖に接近しながら規模を縮小していく状況が見て取れた。

その南東側にも流路の右岸を成すような安定した堆積が見られるが、そこにも下部にラミナの見られる砂層などが存在し、氾濫原堆積物である事が分かる。

埋没流路より北は、その流路より前の段階で、東半は浸食を受けており、それが段丘からの土砂や、溢流堆積によりしだいに埋没していったようで、止水堆積の中に幾つかの土壤化面が認められる。

その西半部分は小規模な斜面堆積以外は安定した水平堆積が継続しており、東半が浸食された時に削り残された所である。その下部に今回縄文時代の石器が大量に出土した黒色粘土層が見られる。

これは後背湿地的な堆積であり、元々ある程度の面積に平坦な地形が存在したものと考えられ、この層より下に、現地形では確認できない、下位段丘が埋没している可能性もある。

埋没流路がその最終形態である1552流路に推移してからは、その岸辺には木根痕などが見られ、ある

程度腐植土の形成が進んだようである。そして、流路が機能を停止して凹地となった後、それを埋め立てて、現代に続く耕地が造成される。

現耕土下は床面貼り土と思われる黄褐色系粘質土の薄い層があり、それを1層とした。その下は基本的に二つの旧耕土が重なり、それらを上から2・3層とした。その下の遺構面は4面となるが、耕地化以前の凹地には暗色層が部分的に残存し、また、4面の基盤となる層も場所によって様々である。

暗色層は3層の素となったものとして3層系とし、それと、耕地化の際に埋め立てられたと思われる層を取り除いた状態を4面最終とした。

流路より北側は部分的な堆積で上下2面に分かれる遺構群が存在したため、その面を4-1面と4-2面に分け、その下を4層古とした。

1552流路より南側で一連の古い流路を覆う層は4層新とし、その南岸にあたる部分は北側との層位的つながりが不明確な部分もあるので、面を4面相当とし、その下は4層相当層としておいた。

それより下は、北西側で4層の下にある、やや土壌化した層を5層とし、石器群が出土した黒色粘土層は通した番号をふらずに石器包含黒色粘土層とした。

なお、3層の上面を3面とするように、面と層の番号の対応は層の上面を同じ番号とした。

(2) 各層の状況

土色・土質に関しては、まず土色を示し、次に耕土や生物擾乱を受けたもの、土壌化の進んだもの、混濁状態で堆積したものなどに関しては「粘質土・砂質土」を使用する。(場合によっては省略)

そして、主体となる粒子を記載し、その後、副次的粒子その他の成分を記載する。酸化鉄は「Fe」とし、全体に沈着する場合はそれのみで記し、管状は「管状Fe」、斑なものは「斑状Fe」とする。酸化マンガンは、肉眼で粒状に見える場合は「Mn粒」、全体に沈着した場合は「Mn」とのみ記す。

「～」を使用する場合はその範囲で前にきた方に率的に偏りがある事を示す。

なお、量の多寡の記載は調査地での相対的な感覚による。

中位段丘上

1層 2.5Y 6/6～5/1 明黄褐色から黄灰色を呈す、砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Fe・Mn粒若干あり。旧耕土であり、実際は数層の重なりであるが、質的な差はない。

2層 2.5Y 6/6～7/2 明黄褐色から灰黄色を呈す、粘質土、シルト～細砂主体、粗砂・Feあり、Mn粒若干あり。旧耕土である。場所によっては砂質土。

3層 10YR 6/2～6/4 灰黄褐色からにぶい黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Feあり、Mn粒わずかにあり。腐植土を耕作した旧耕土。今回の調査では7Cトレンチにのみ存在した。

3層相当層 10YR 4/4～4/2 褐色から灰黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中礫あり、Fe・Mn多し。12B・13B・2Aトレンチに存在する。段丘縁辺緩斜面から段丘崖斜面に堆積し、礫は段丘構成層起源で段丘崖斜面に多い。3層の起源となった腐植土が二次堆積したものと思われる。

4層 2.5Y 6/6～6/8 明黄褐色を呈する、粘質土、シルト～粘土主体、粗砂～細砂あり、Fe多し、風化礫若干あり。中位段丘構成層の二次堆積と思われる。しまりは良い。

5層 10YR 6/8～6/1 明黄褐色～褐灰色を呈する、砂質土、中砂～シルト間に中～小礫の風化礫と粗砂多し、Fe多し。中位段丘構成層上部と思われる。

中位段丘崖下～氾濫原

1層 10YR 6/6～2.5Y 6/6 明黄褐色、粘質土、粘土～細砂主体、粗砂あり、小礫わずかにあり、

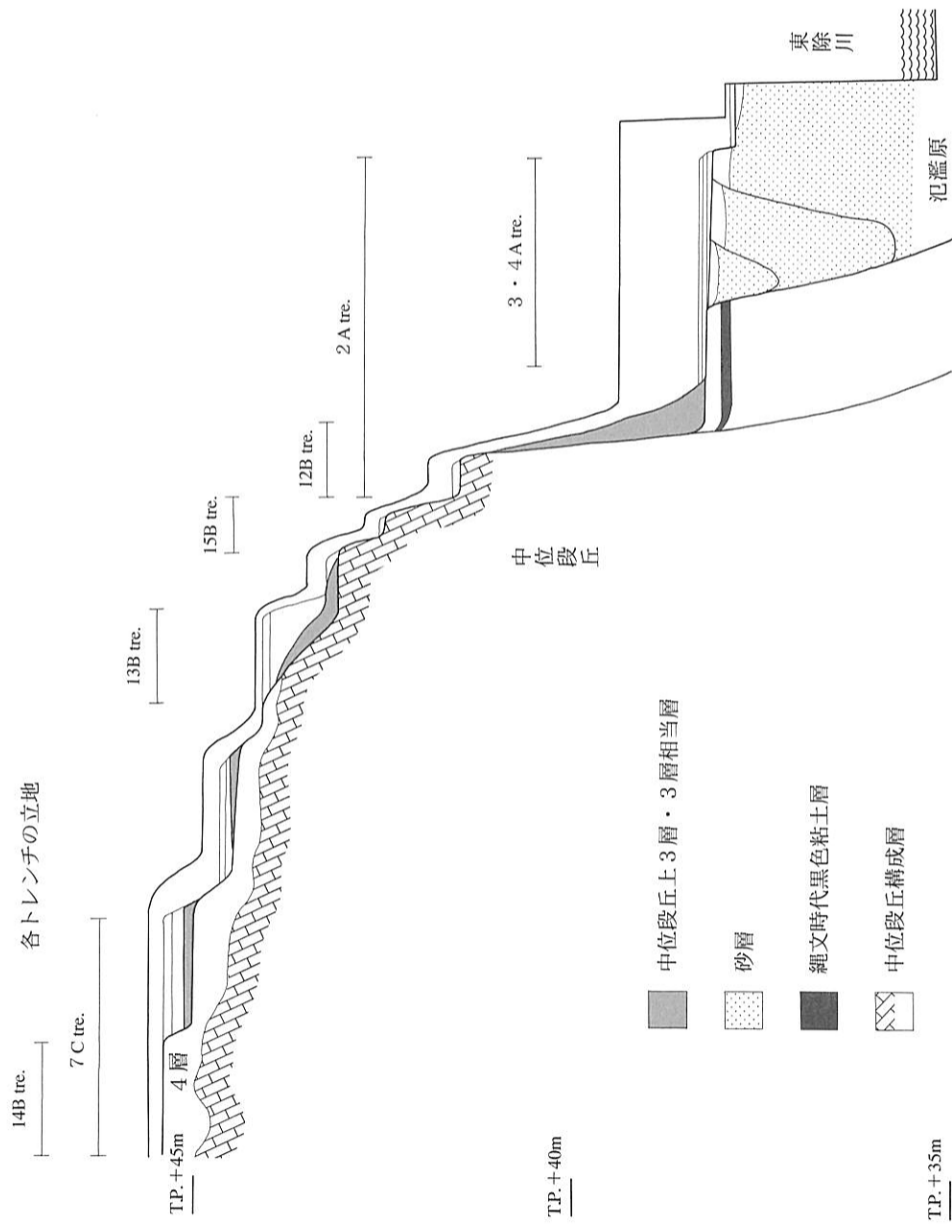


図7 基本層序概念模式図

Fe多し、Mn粒若干あり。層厚薄く、下の地盤の堅致な部分にはなく、上面平坦、現耕土床面貼り土か。

2層 2.5Y 5/1～6/3 黄灰色からにぶい黄色を呈する、砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Fe・Mn粒あり。粗砂の多寡は場所によって異なる。旧耕土である。残存状態は悪い。

3層 10YR 6/6～7.5Y 5/1 黄褐色～灰色を呈する、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂あり、Fe・Mn粒あり。旧耕土である。

3層系 2.5Y 5/3～7.5Y 5/1 黄褐色～灰色を呈する、シルト、細砂～中砂若干あり、Fe・Mn粒あり。4面の凹地にのみ残存する。腐植土系の二次堆積土で、3層の起源となったものと思われる。

4層新 上部5Y 6/2～5/2 灰オリーブ色、下部2.5GY 7/1 明オリーブ灰色、細砂～粘土、粗砂の降下若干あり、Mn粒・管状Feあり。1546流路を覆う止水堆積層。1552流路より南側にのみ存在する。

4層古 2.5Y 6/5 黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂・Fe・Mn粒あり。4-1面と4-2面を分ける4-1層もこれの二次堆積なので、同質である。1552流路より北にのみ存在する。

4層相当層 2.5Y 5/3～6/3 黄褐色～にぶい黄色、細砂～シルト、Fe・Mnあり、上部Mn粒若干あり、1546流路より南側にあり、上面は4層新上面と連続するが、遺物の示す時期は5面に対応し、北側の5面から4面に対応すると思われる。層自体は氾濫原性の止水堆積である。

5層 2.5Y 6/4～5/4 にぶい黄色～黄褐色を呈する、シルト～細砂、粗砂の降下あり、Fe・Mn若干あり、Mn粒・炭化物わずかにあり。上面がやや土壌化した止水堆積層である。4層古が遺存している部分にのみ見られる。

5層以下でA地区北西側全体に共通する層は、やや厚めのシルト層があり、その下に木根痕が良く見られる土壌化層、さらに下にまたシルト層というパターンがある。

それ以下では3A・4Aトレンチ側では段丘崖的に浸食されて北東側に落ちていく地形があり、それが小礫～粗砂の混じるシルト～粘土層で埋没している。

浸食され残った2Aトレンチ北西側はそれ以下も水平堆積が連続し、上下をシルト層にはさまれた土壌化層が見られ、その下に、石器群が包含されていた黒色粘土層が存在していた。

石器包含黒色粘土層 上下2層に分かれ、石器は上層にのみ包含される。

上層は10YR 4/1 褐灰色を呈し、粘土、Feあり、有機分多し。上部から土壌化が進行している。沼状の環境の中、分解の進んだ有機分が堆積し、その後、乾燥状態になり、酸化が進んだ層と思われる。

下層は10YR 2/1 黒色を呈し、粘土、有機分多し、あまり土壌化せず。

この二つの黒色粘土層は、調査区内ではごく限られた範囲にしか残存していないものの、ほぼ水平な止水堆積層であり、かなり広範な平坦地形が存在しないと形成されないものと思われる。

位置的には中位段丘崖直下であり、調査区の少し北側には低位段丘に分類されている地形も存在するので、この黒色粘土層は、現地形では埋没した状態にある低位段丘平坦面にのっている可能性もある。

しかし、遺物から考えれば、黒色粘土層を切り、段丘崖を形成する浸食が、縄文時代から弥生時代後期の間にあった事となり、沖積平野縁辺の下位段丘崖の形成とは時期的にずれる事となる。

黒色粘土層とその上下の堆積が、下位段丘上での事か、氾濫原の堆積の中で理解できるのかは未だ問題として残ると言えよう。

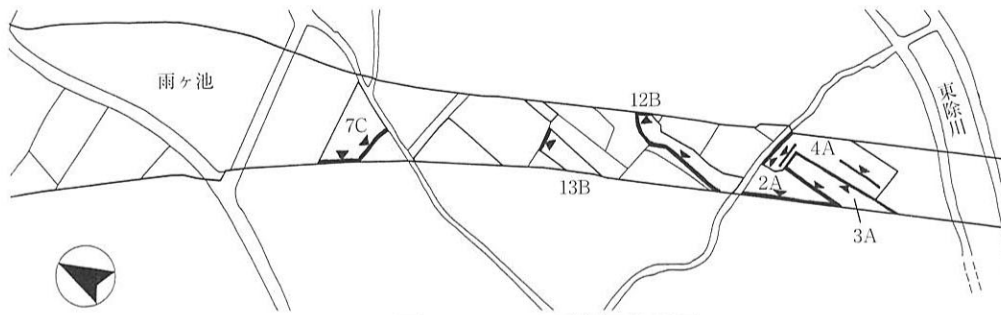
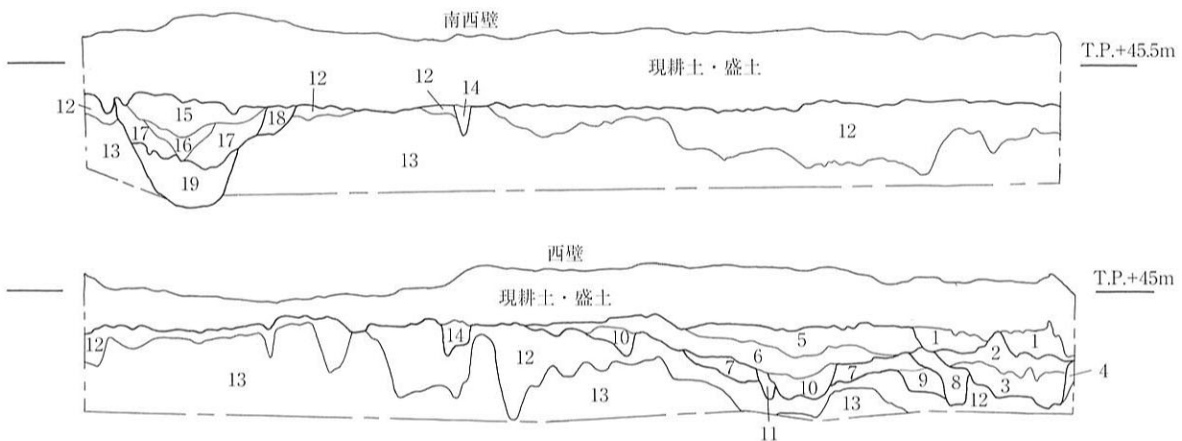
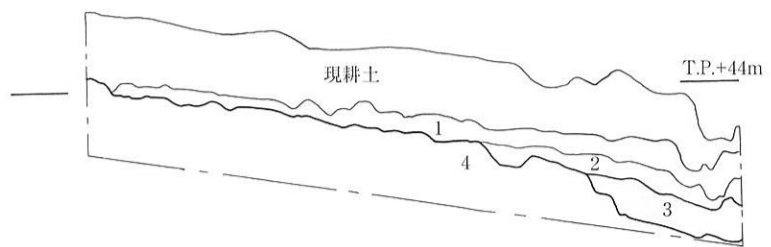


図8 トレンチ壁断面位置図



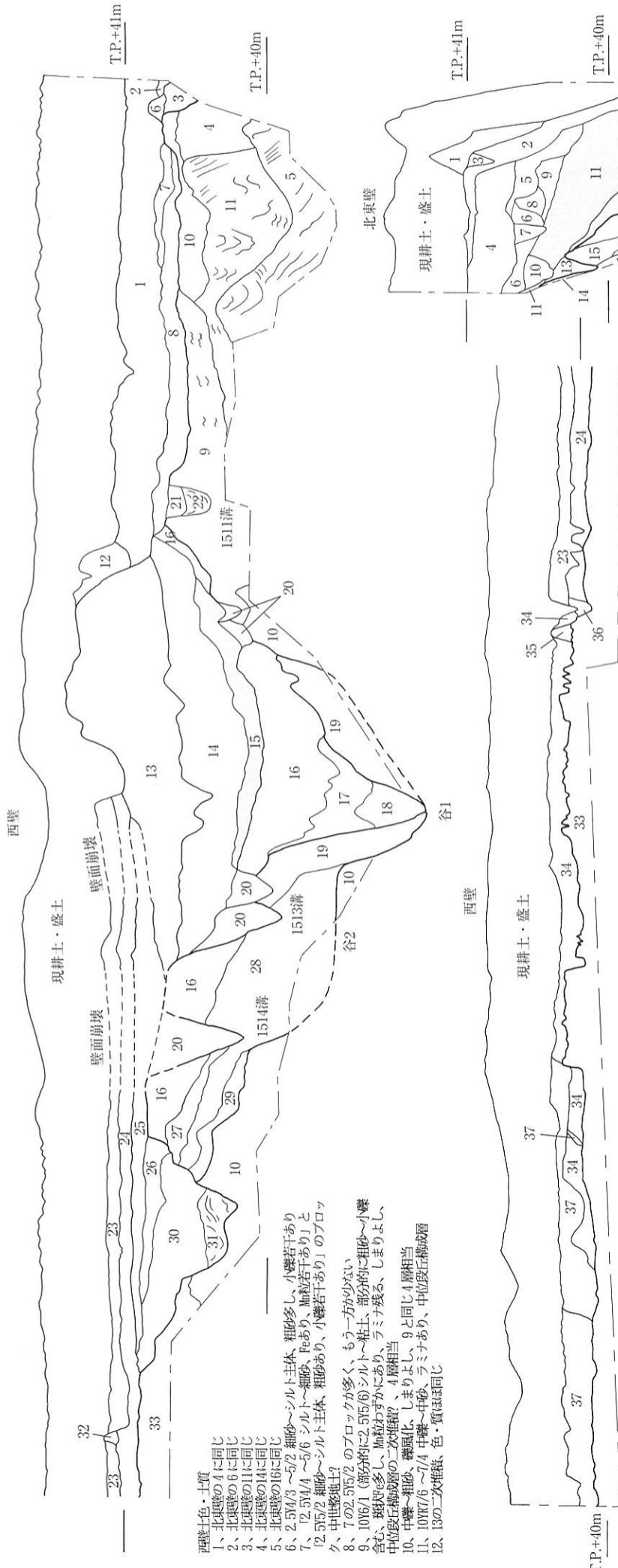
- 土色・土質
- 1、2.5Y7/6 ~6/8 シルト～粘土主体、粗砂～小礫多し、Fe上部に多し、0層、段丘構成層を削った整地土
 - 2、2.5Y6/1 ~5/1 細砂～シルト主体、粗砂あり、斑状Fe・Mn粒若干あり、1層
 - 3、2.5Y6/1 ~6/6 細砂～シルト主体、粗砂あり、Fe若干あり、Mn粒わずかにあり、1層
 - 4、7.5Y4/1 シルト主体、細砂あり、粗砂わずかにあり、畦畔?
 - 5、2.5Y6/6 ~6/4 シルト～細砂主体、粗砂・Feあり、Mn粒わずかにあり、2層
 - 6、2.5Y6/6 ~7/2 シルト～細砂主体、粗砂あり、Fe上部に多し、Mn粒若干あり、2層
 - 7、10YR6/2 ~6/4 シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Feあり、Mn粒わずかにあり、「薄黒」3層
 - 8、2.5Y6/1 シルト主体、粗砂若干あり、Fe・Mn粒わずかにあり
 - 9、2.5Y6/4 細砂～シルト主体、粗砂・Feあり、Mn粒わずかにあり
 - 10、上部「2.5Y5/6 ~6/6 シルト～細砂主体、粗砂・Feあり、Mn粒若干あり」のブロック、下部「2.5Y5/1 細砂～シルト主体、粗砂～中砂あり」の間に上部のブロックあり
 - 11、10のブロックのみ
 - 12、2.5Y6/6 ~6/8 シルト～粘土主体、粗砂～細砂若干あり、Fe多し、風化礫わずかにあり、段丘構成層上部二次堆積、4層
 - 13、10YR6/8 ~6/1 中砂～シルト間に風化礫(中～小礫)と粗砂多し、Fe多し、段丘構成層上部風化礫層、5層
 - 14、2.5Y6/3 細砂～シルト主体、粗砂・12のブロックわずかにあり
 - 15、2.5Y6/4 ~6/1 シルト～粘土主体、粗砂～細砂・Fe若干あり
 - 16、10YR5/2 粘土～シルト、細砂若干あり、粗砂・Feわずかにあり
 - 17、2.5Y5/1 ~6/3 シルト～粘土主体、細砂あり、粗砂・Fe若干あり、Mn粒上部にわずかにあり
 - 18、2.5Y6/6 シルト～粘土主体、粗砂～小礫あり、Feあり、4層二次堆積
 - 19、7.5Y5/1 シルト～細砂主体、粘土・粗砂あり、斑状Fe若干あり

図9 7Ctr.南西壁・西壁断面 (S=1/40 ← 1/160)



- 土色・土質
- 1、2.5Y4/3 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫あり、Fe・Mn若干あり、旧耕土
 - 2、2.5Y4/3 ~5/4 砂質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、小～中礫あり、Fe・Mn若干あり、整地層?
 - 3、10YR4/4 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり、中～小礫多し、Fe・Mnあり、3層相当
 - 4、10YR5/6 砂質土、細砂～粗砂主体、大～小礫多し、風化礫多し、Fe・Mn多し、しまりよし、5層

図10 13Btr.北壁断面 (S=1/40 ← 1/160)



西壁土色・土質
 1、北東壁の4に同じ
 2、北東壁の6に同じ
 3、北東壁の11に同じ
 4、北東壁の14に同じ
 5、北東壁の16に同じ
 6、2.5V4/3 ~5/2 細砂~シルト主体、粗砂多し、小礫若干あり
 7、2.5V4/4 ~5/6 シルト~細砂、Feあり、Mn粒若干ありと
 12.5V5/2 細砂~シルト主体、粗砂あり、小礫若干ありのブロック、中位段丘礫成層の二次堆積?、4層相当
 8、7の2.5V5/2 のブロックが多く、もう一方が少ない
 9、10V6/1 (部分約2.5V5/6)シルト~粘土、部分的に粗砂~小礫含む、礫粒わずかにあり、粘土、Fe、Mn、Mn粒若干ありと
 中位段丘礫成層の二次堆積?、4層相当
 10、中礫~粗砂、礫風化、しまりよし、9と同じ4層相当
 11、10V7/6 ~7/4 中礫~中砂、ラミナあり、中位段丘礫成層
 12、13の二次堆積、色・質はほぼ同じ

13. 2.5V6/3 ~5/3 細砂~シルト主体、粗砂・中~小礫あり、斑状Fe・Mn多し、大礫堆積
 14. 2.5V5/2 ~4/2 細砂~シルト主体、粗砂あり、大~小礫若干あり谷1埋土 (A為?)
 15. 2.5V4/1 ~4/2 シルト~細砂主体、粗砂あり、小~中礫わずかにあり、Mn多し、谷1埋土の堆積の可能性がある
 16. 2.5V4/3 細砂~シルト主体、粗砂多し、中~小礫若干あり、Mn多し、ブロック土、谷1埋土の堆積土か
 17. 5V3/1 シルト~細砂主体、粗砂多し、大~小礫若干あり、谷1埋土の堆積土の堆積
 18. 5V5/2 粗砂、大~小礫多し、Fe若干あり、ラミナなし、谷1埋土の堆積土の堆積
 19. 5V4/2 ~5/6 細砂~シルト主体、粗砂あり、中礫あり、谷2埋土の堆積土の堆積
 20. 2.5V4/2 シルト~細砂主体、粗砂~小礫若干あり、Fe・Mnあり
 21. 9と8のブロック
 22. 2.5V5/1 ~5/2 粗砂~細砂、Mn若干あり、ラミナあり
 23. 5V5/1 細砂~シルト主体、粗砂あり、上面~2.5V5/6 粘土のブロックまばらに付く、1層より新?
 24. 5V5/1 ~5/3 細砂~シルト主体、粗砂あり、Fe・Mn若干あり、1層より新?
 25. 2.5V5/6 ~5/1 (上部約2.5V5/6) 粘土主体、粗砂~中~小礫あり、多し、粗砂~小礫あり、Fe多し、Mn若干あり、鉄り粘土
 26. 2.5V5/3 シルト~細砂主体、粗砂あり、Fe・Mn・Mn粒あり
 27. 2.5V6/6 細砂~シルト主体、粗砂、Feあり、小礫・Mn粒若干あり、谷2二次堆積
 28. 2.5V6/4 細砂主体、極粗砂~粗砂多し、小礫あり、Feあり、谷2二次堆積
 29. 2.5V6/6 細砂~シルト主体、極粗砂~粗砂、小礫・Feあり、谷2二次堆積
 30. 2.5V5/3 ~5/2 細砂~シルト主体、粗砂多し、極粗砂~小礫・Mn粒あり、Fe若干あり
 31. 5V5/2 細砂~粗砂、小礫あり、ラミナあり、部分的にFeあり
 32. 2.5V5/1 ~5/2 質はほとんど23と同じ、下部にラミナの粗砂残す、新鮮
 33. 2.5V7/1 (上部約2.5V5/6) 粘土主体、粗砂が層行し、その間にシルト~細砂降下、上部Feあり、中位段丘礫層
 34. 10V4/1 細砂~シルト主体、粗砂若干あり、Fe・Mnわずかにあり
 35. 34と同質、層境あり
 36. 5V5/1 ~5/2 細砂~シルト主体、粗砂・Fe若干あり
 37. 34~33のブロック、場所により多寡あり、現耕土起源の整地土

北東壁土色・土質
 1、2.5V6/6 ~7/6 シルト主体、粗砂・Feあり、小礫・Mn粒若干ありのブロック土、現耕土盛土?
 2. 2.5V6/3 シルト~細砂主体、粗砂・斑状Fe・Mn粒若干あり、小礫・炭化物わずかにあり、近世堆積土
 3. 10V5/3 シルト~細砂主体、粗砂~小礫あり、Fe・Mn粒若干あり、斜面堆積土
 4. 10V4/3 ~5/2 細砂~シルト主体、粗砂多し、小礫・Mnあり、Fe若干あり、近世耕土の重なり、1層相当
 5. 2.5V5/4 ~6/3 細砂~シルト主体、粗砂あり、小礫わずかにあり、Fe・Mn若干あり、4の上面~斜面堆積土
 6. 2.5V4/2 ~5/2 細砂~シルト主体、粗砂・Feあり、小礫わずかにあり、Mn粒若干あり
 7. 2.5V6/6 シルト~細砂主体、粗砂あり、Mn粒若干あり
 8. 2.5V6/6 シルト主体、粗砂・Feあり、Mn粒若干ありと
 12.5V5/2 細砂~シルト主体、粗砂あり、Fe・Mn若干ありのブロック、近世? 造成用の堆積?
 9. 2.5V5/3 ~5/2 シルト~細砂主体、大~小礫・粗砂・Mn粒あり、Feわずかにあり、11の上段堆積土?
 10. 2.5V5/2 細砂~シルト主体、粗砂~極粗砂多し、小~中礫あり、Fe・Mn若干あり、3層相当段丘礫の礫層からの崩落土か

図11 12Btr.西壁・北東壁断面 (S=1/40 ~ 1/160)

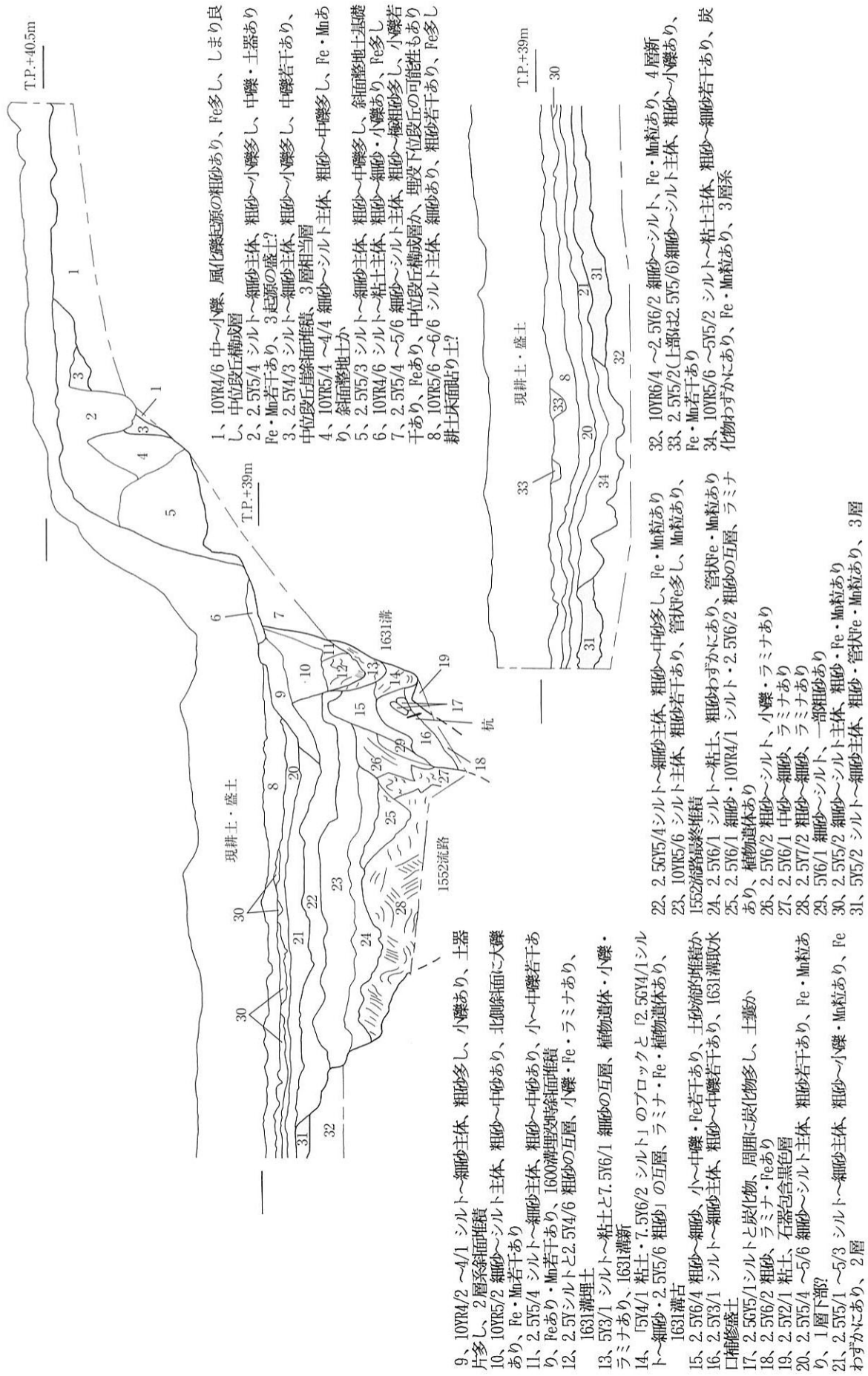
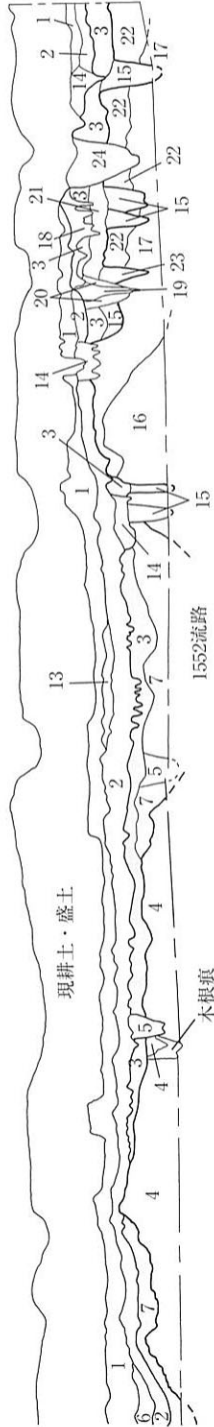
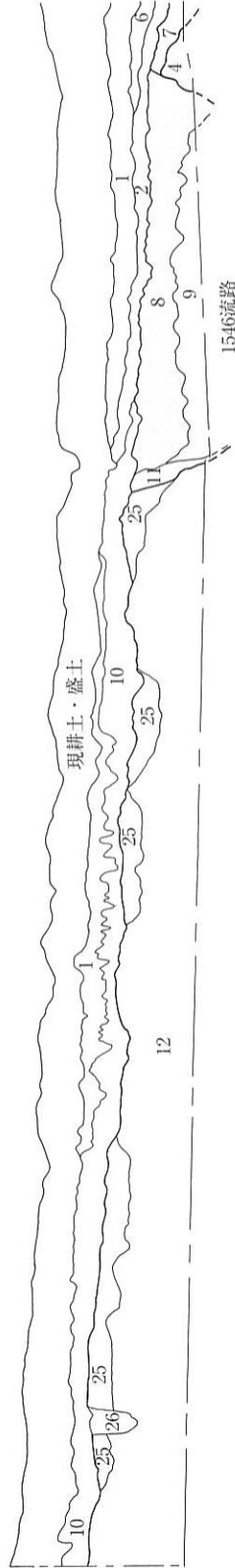


図12 2Atr.西壁断面 (S=1/40 L=1/160)

T.P.+39.5m



T.P.+39.5m

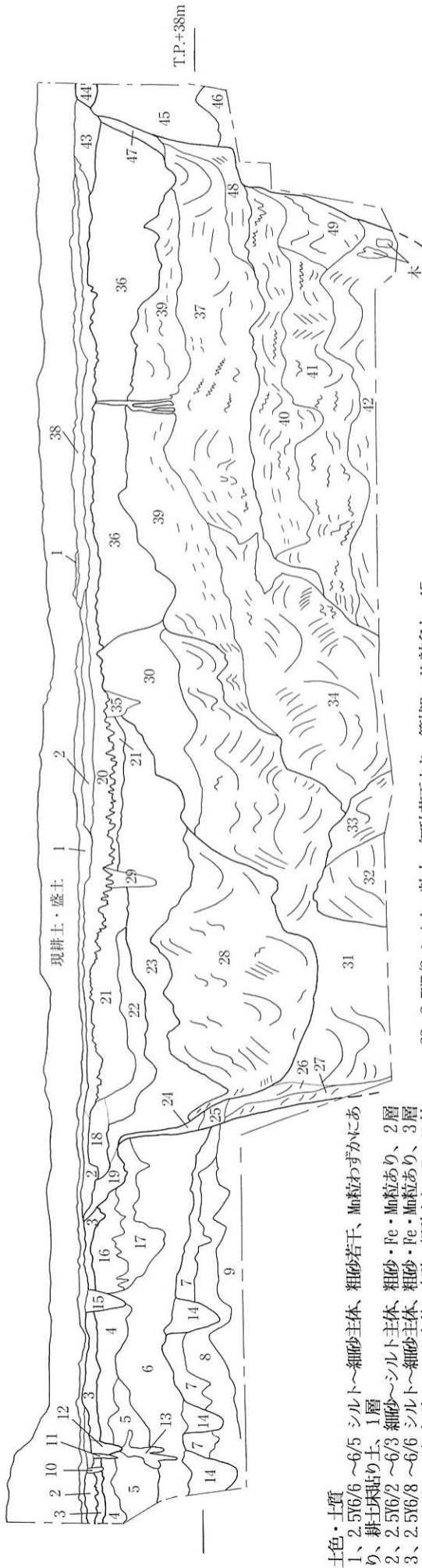


土色・土質

- 1、10YR4/6 ~6/6 粘土~細砂主体、粗砂あり、小礫わずかにあり、Fe多し、Mn粒下半に若干あり、耕土床貼り土か、1層
- 2、2.5Y5/1 ~10YR5/3 細砂~シルト主体、中砂~極粗砂多し、斑状Fe・Mn粒あり、2層
- 3、10YR6/6 ~7.5Y5/1 シルト~細砂主体、中砂~粗砂若干あり、Fe・管状Feあり、3層
- 4、2.5Y6/8 ~10Y6/1 細砂~シルト、わずかに粗砂・炭化物あり、下部に細砂多し、管状Fe・微細なMn粒あり、やや土壌化した止水堆積、4層新
- 5、10Y6/1 ~5/1 シルト~細砂主体、粗砂若干あり、管状Fe・Mn粒あり、4・3の擾乱か、4よりやや暗
- 6、1と2のブロック、1を貼る前の整地土か
- 7、7.5Y5/1 シルト、細砂若干あり、管状Fe・Mn粒あり、3層系
- 8、2.5Y5/3 ~6/6 シルト、細砂若干あり、Fe・Mn粒あり、3層系
- 9、2.5Y5/3 ~5/4 シルト~細砂、中砂若干・Fe若干あり、Mn・Mn粒あり、1552流路最終堆積か
- 10、2.5Y6/6 ~6/4 シルト主体、粗砂若干降下、Feあり、Mn粒上部にあり、2層系
- 11、2.5Y5/3 ~4/3 シルト~細砂主体、中砂・Mn粒あり、Fe若干あり、1546流路冒部
- 12、2.5Y5/3 ~4/2 細砂~シルト、中砂あり、粗砂わずかにあり、Fe若干あり、Mn・Mn粒あり
- 13、10YR6/1 ~5/1 細砂~シルト主体、粗砂多し、Fe若干あり、Mn粒あり、1層下部

- 14、2.5Y4/1 細砂~シルト主体、粗砂多し、Fe若干あり、Mn粒あり
- 15、2.5Y5/3 シルト~細砂主体、粗砂若干あり、Feあり、Mn粒あり
- 16、10YR5/2 細砂~シルト主体、中砂・Fe・Mn粒あり、自然堤防
- 17、2.5Y6/4 シルト~細砂主体、中砂・Fe・Mn粒あり、4層古
- 18、2.5Y6/3 シルト~細砂主体、粗砂~小礫多し、Fe若干あり、Mn粒あり、3層系
- 19、2.5Y5/3 ~5/1 シルト~細砂主体、部分的に粗砂あり、Fe・Mn粒若干あり
- 20、2.5Y5/1 ~6/4 シルト~細砂主体、粗砂・Fe・Mn粒若干あり、炭化物あり
- 21、2.5Y6/1 ~5/1 シルト~細砂主体、粗砂・Fe・Mn粒若干あり、3層系
- 22、2.5Y5/2 細砂~シルト主体、粗砂わずかにあり、Fe・Mn粒若干あり、炭化物あり、4層系
- 23、22内に17のブロック
- 24、2.5Y5/1 シルト~細砂主体、中砂若干あり、粗砂降下、Fe若干あり、Mn粒あり、3・17・22のブロックあり
- 25、2.5Y6/4 細砂~シルト主体、中砂あり、粗砂わずかにあり、Feあり、Mn若干あり、4層相当
- 26、2.5Y4/1 ~5/2 細砂~シルト主体、中砂~粗砂・Fe・Mn粒・炭化物・焼土あり、木の根の焼けた痕?

図13 3Atr.西壁断面 (S=1/40 ~ 1/160)



土色・土質

- 1、2.5Y6/6 ~6/5 シルト~細砂主体、粗砂若干、Mn粒わずかにあり、耕土床貼り土、1層
- 2、2.5Y6/2 ~6/3 細砂~シルト主体、粗砂・Fe・Mn粒あり、3層
- 3、2.5Y6/8 ~6/6 シルト~細砂主体、粗砂・Fe・Mn粒あり、3層
- 4、2.5Y5/6 ~5/3 細砂~シルト主体、中砂~粗砂あり、Fe・Mn粒あり、4層古
- 5、2.5Y6/4 シルト~細砂、上部深粗砂の降下あり、Fe・Mnあり、Mn粒若干あり、炭化物わずかにあり、止水堆積、5層
- 6、2.5Y6/6 ~5/4 シルト~細砂、粘土若干含む、炭化物わずかにあり、珉状Feあり、Mnわずかにあり、止水堆積、5層
- 7、2.5Y5/6 ~5/1 シルト主体、粘土・細砂・炭化物・Feあり、Mnわずかにあり、土壌化層、6層
- 8、2.5Y6/8 ~5/6 粘土~シルト、細砂若干あり、Feあり
- 9、10YR5/8 粘土~細砂、下部は10G6/1、珉状Feあり
- 10、2・3のブロック
- 11、5Y5/1 シルト~細砂、Mn粒若干あり、生痕か
- 12、2.5Y6/4 ~5/3 細砂~シルト主体、粗砂・Fe・Mn粒あり
- 13、2.5Y5/4 ~5/1 シルト~細砂、炭化物あり、木根痕
- 14、2.5Y5/6 ~6/1 粘土~シルト主体、細砂あり、炭化物若干ありブロック状か、6面逆轉埋土?
- 15、2.5Y6/6 ~6/4 細砂~シルト主体、中砂~粗砂・Fe・Mn粒あり
- 16、2.5Y6/4 細砂~中砂主体、シルト・粗砂あり、Fe・Mn若干ありMn粒あり、4面逆轉斜面堆積
- 17、2.5Y5/3 ~6/3 細砂~シルト、Mnあり、Fe若干あり、Mn粒わずかにあり、4面逆轉斜面堆積
- 18、2.5Y6/6 シルト~細砂、粗砂の降下若干あり、Fe・Mn粒あり
- 19、2.5Y6/4 ~5/3 細砂~シルト、Fe若干あり、Mn粒あり
- 20、2.5Y5/2 シルト~細砂主体、中砂~極粗砂・珉状Fe・Mn粒あり
- 21、5Y5/2 シルト~細砂主体、粗砂わずかにあり、管状Fe・Mn粒あり、1552流路埋設後止水堆積

- 22、2.5Y5/3 シルト~粘土、細砂若干あり、管状Fe・Mn粒多し、1552流路埋設後止水堆積
- 23、7.5Y6/2(上部10YR5/6 ~6/1)シルト、部分的に細砂・粘土を含む、管状Feあり、上部Mn粒若干あり、1552流路埋設時の堆積
- 24、12.5Y6/1 細砂~粘土に「10YR5/8 シルト」のブロックあり
- 25、1M4/0~6/0 シルト~細砂」に「2.5G7/1粘土~シルト」のブロックあり、ラミナあり、珉状Feあり
- 26、2.5G7/1~6/1 細砂~シルト、ラミナあり、珉状Feあり
- 27、1M4/0粘土~細砂」に「10G6/1 粘土~シルト」のブロックあり、ラミナあり、珉状Fe若干あり
- 28、2.5Y6/2 ~5/3 極粗砂~中砂、小礫あり、上部にFe・Mn若干あり、ラミナあり、やや有機物多いか、1552流路埋設時の堆積
- 29、5Y6/2 ~5/2 シルト~細砂主体、底部に須恵器片あり、下部は中砂含む、管状Fe・Mn粒あり
- 30、上部5Y6/2 ~5/2、下部2.5G7/1細砂~粘土、粗砂の降下若干あり、Mn粒あり、管状Feあり、止水堆積、4層新
- 31、上部は7.5Y6/1 シルト~中砂多し、下部は土礫・大~小礫多く含む、極粗砂~粗砂、ラミナあり、1546流路埋設時の堆積
- 32、極粗砂~中礫、ラミナあり、1546流路埋設時の堆積
- 33、10Y6/1~5/1 粗砂、ラミナ・植物遺体あり、1546流路埋設時の堆積
- 34、7.5Y7/1~6/1 粗砂、部分的に細砂~シルト状に入る、ラミナあり、1546流路埋設時の堆積
- 35、7.5Y6/2 シルト~細砂主体、中砂若干あり、管状Fe・Mn粒あり
- 36、5Y5/2 ~6/3 細砂~シルト、粗砂の降下若干あり、管状Fe・Mn粒あり、4層新上面堆積
- 37、7.5Y7/1 ~5/1 粗砂~細砂、ラミナあり、珉上Fe若干あり

- 38、2.5Y6/6 ~6/2 シルト~細砂主体、粗砂・Feあり、1層系
- 39、上部5Y6/2、下部10Y6/1細砂~シルト、上半にMn粒・粗砂の降下あり、管状Feあり、34・37の洪水終息時の堆積か
- 40、5Y4/1~5/1 粘土~細砂、粗砂~中砂のラミナあり、炭化物若干あり、41の洪水終息時の堆積か
- 41、5Y6/2 ~6/1 粗砂、中~小礫多し、植物遺体ラミナ状に散在、1546流路埋設時の堆積
- 42、中礫~粗砂、ラミナあり、1546流路埋設時の堆積
- 43、2.5Y6/6 シルト主体、細砂・粗砂若干あり、Fe・Mn粒あり
- 44、2.5Y6/6 ~6/8 シルト~細砂主体、粗砂の降下若干あり、Fe・Mn粒あり、3層
- 45、2.5Y6/3 ~5/3(上部Feで2.5Y6/6)細砂~シルト、Mnあり、Fe若干あり、上部にMn粒あり、4層古か?
- 46、上部10YR5/6、下部10R5/1 シルト~粘土主体、細砂含む、Mn粒・Feあり
- 47、2.5Y6/3 細砂~シルト、Mn・Mn粒あり、Fe若干あり
- 48、7.5Y6/1 ~4/1 細砂~シルト、粗砂若干あり、「10Y7/1シルト~粘土」のブロックあり、部分的にラミナあり
- 49、2.5Y5/1~10G5/1 中砂~シルト、ラミナあり、植物遺体あり

図14 3Atr. 東壁断面 (S=1/40) — 1/160)

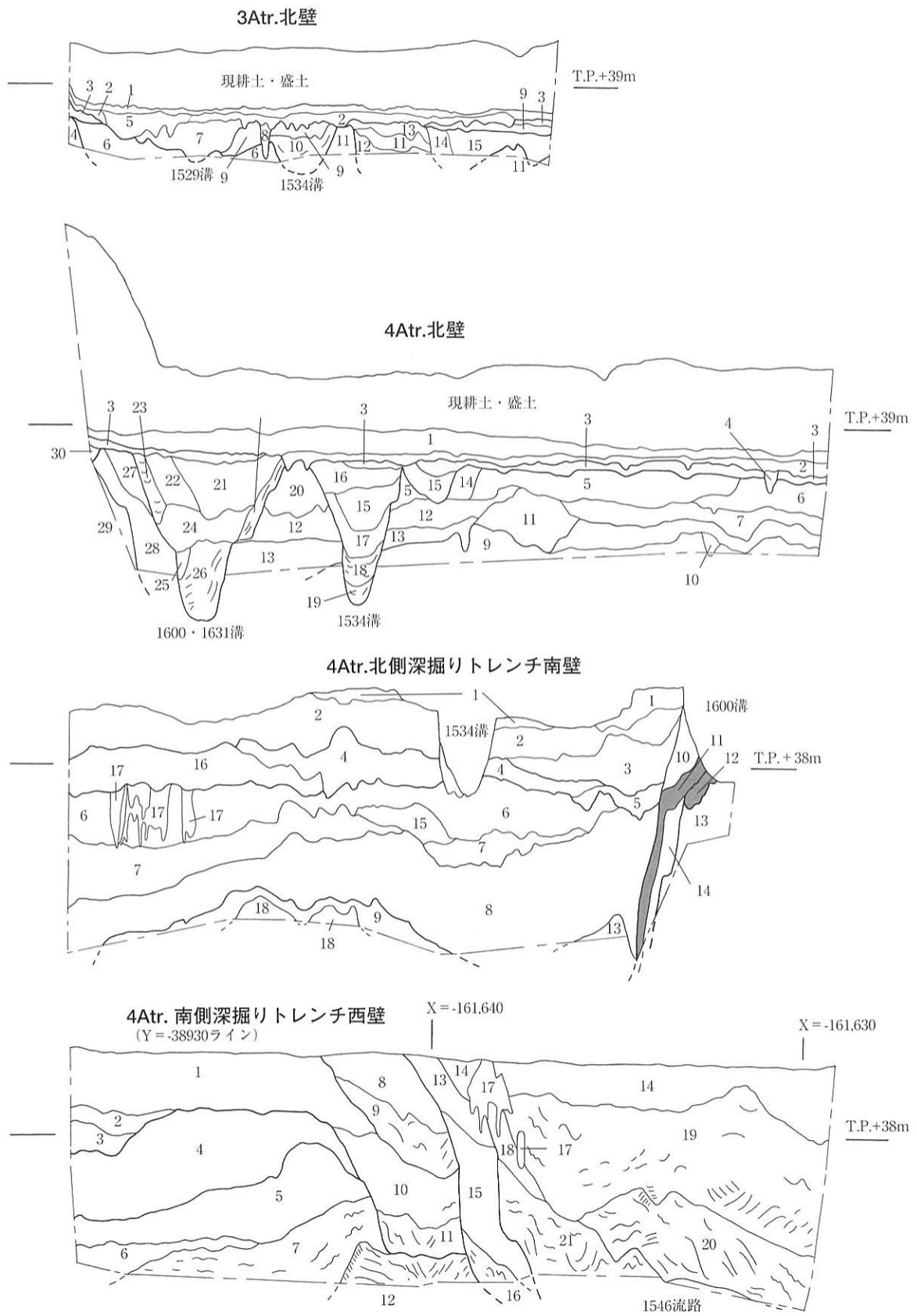


図15 3Atr.北壁・4Atr.北壁・北・南深掘りトレンチ断面 (S=1/40 — 1/160)

3 Atr, 北畠断面土色・土質

- 1、10YR4/6 ~6/6 粘土~細砂主体、粗砂あり、小礫わずかにあり、Fe多し、下半に若干Mn粒あり、1層
- 2、2.5Y5/1 ~10YR5/3 細砂~シルト主体、中~極粗砂多し、斑状Fe・Mn粒あり、旧耕土、2層
- 3、10YR6/6 ~7.5Y5/1 シルト~細砂主体、中~粗砂若干あり、Fe・Mn粒あり、3層
- 4、2.5Y6/8 ~10Y6/1 細砂~シルト、わずかに粗砂・炭化物あり、管状Fe・微細なMn粒あり、上部土壌化止水堆積、4層新
- 5、2.5Y5/1 細砂~シルト主体、粗砂~小礫多し、「2.5Y6/8 シルト、Fe・Mn粒あり」のブロックあり、4層系?
- 6、2.5Y5/3 細砂~シルト主体、粗~中砂・Fe・Mn粒あり
- 7、2.5Y5/2 粗砂~細砂、小礫・Fe若干あり、Mn多し、ラミナなし
- 8、2.5Y5/1 ~5/2 細砂~シルト主体、粗砂・Fe・Mn若干あり
- 9、2.5Y6/4 ~5/4 シルト~細砂主体、中砂若干あり、粗砂わずかに降下、Fe・Mn粒あり、3層
- 10、2.5Y5/2 ~5/3 細砂~シルト主体、粗~中砂多し、Mn・ラミナあり
- 11、2.5Y6/6 シルト、細砂あり、粗砂わずかに降下、Fe多し、Mn粒若干あり、4層古
- 12、10YR4/2 ~2.5Y5/2 細砂~中砂、Mn・Feあり、6と同層?
- 13、2.5Y5/6 ~5/4 シルト~細砂主体、中~粗砂非常に多し、Feあり、Mn粒わずかにあり、4層系?
- 14、2.5Y5/2 ~5/4 細砂~シルト主体、粗砂あり、Fe若干あり
- 15、2.5Y5/3 ~6/4 シルト~細砂主体、粗砂部分的にあり、FeありMn粒若干あり、4層系

4 Atr, 北畠断面土色・土質

- 1、2.5Y5/6 シルト~細砂主体、粗砂若干あり、Fe多し、1層
- 2、2.5Y5/1 ~5/2 細砂~シルト主体、粗砂多し、斑状Fe若干ありMn粒あり、2層
- 3、2.5Y6/6 ~6/3 シルト~細砂主体、中~粗砂若干あり、Fe・Mn粒あり、3層
- 4、2.5Y5/2 ~6/4 シルト~細砂主体、中~粗砂あり、管状Feあり
- 5、2.5Y5/4 シルト~細砂主体、中~粗砂若干あり、Feあり、Mn粒若干あり、4層
- 6、2.5Y5/4 ~6/4 細砂~シルト主体、粗~中砂・Feあり、Mn粒若干あり、4層
- 7、2.5Y5/4 シルト~細砂主体、粗砂わずかにあり、Feあり、Mn粒若干あり、4層(下半)
- 8、2.5Y5/3 ~5/2 シルト~細砂主体、中砂わずかにあり、Mn多しFe若干あり、5層(やや土壌化)
- 9、2.5Y5/4 ~6/6 シルト主体、細~中砂・Feあり、Mn若干あり
- 10、9と8の混濁
- 11、10YR4/4 ~4/3 細砂~シルト、粘土若干あり、Mn多し、Fe若干あり、5層
- 12、10YR5/6 ~5/4 シルト主体、細砂・Mn粒あり、Fe上部に多し
- 13、5Y6/1 シルト~粘土主体、細砂あり、Mn粒若干あり、
- 14、2.5Y6/6 ~6/3 細砂~シルト主体、粗~中砂多し、Feあり
- 15、2.5Y5/6 ~6/1 細砂主体、粗砂多し、Feあり、Mn若干あり
- 16、2.5Y5/4 細砂~シルト主体、粗砂・Fe・Mn粒あり
- 17、2.5Y5/6 細砂~粗砂、小礫若干あり、ラミナなし、Fe・Mnあり
- 18、2.5Y6/6 ~6/1 細砂~中砂、ラミナあり、斑状Feあり
- 19、2.5Y6/1 中砂~細砂、ラミナあり、5・12・13のブロックあり
- 20、2.5Y5/6 ~5/4 細砂~シルト主体、粗砂多し、Feあり、4層相当?
- 21、2.5Y5/1 細砂~シルト主体、粗砂~小礫あり、Fe・Mn若干あり
- 22、2.5Y5/2 細砂~シルト主体、中礫~粗砂あり、Fe・Mn若干あり段差からの斜面堆積
- 23、10YR5/1 シルト~細砂主体、小礫~粗砂多し、Fe若干あり、ラミナあり
- 24、2.5Y5/1 粘土~シルト主体、粗砂若干あり、斑状Feあり
- 25、5GY6/1シルト、斑状Feあり
- 26、2.5GY7/1粗砂、ラミナあり、西側に植物遺体多し
- 27、5Y6/2 シルト~細砂主体、小礫~粗砂若干あり、斑状Feあり、Mn粒わずかにあり
- 28、2.5Y6/1 ~6/6 細砂~シルト、小礫~粗砂あり、Feあり、段丘斜面堆積
- 29、2.5Y6/6 細砂~シルト、小礫多し、粗砂若干あり、Feあり、中位段丘風化礫層
- 30、2.5Y5/1 細砂~シルト主体、粗砂多し、28のブロックあり

4 Atr, 北畠深掘りトレンチ南畠断面土色・土質

- 1、2.5Y5/2 シルト~細砂主体、中砂~粗砂・Fe・Mn若干あり
- 2、10YR6/6 ~5/4 シルト~細砂主体、中砂若干あり、Fe・Mnあり
- 3、10YR6/4 シルト~粘土主体、細砂若干あり、Fe・Mn粒あり、西側斜面付近中~大礫あり、段丘直下斜面堆積
- 4、10YR6/4 ~5/1 シルト~粘土主体、細砂若干あり、Fe・Mn粒あり、炭化物わずかにあり、旧地表土壌化層
- 5、2.5Y6/4 ~5/1 シルト主体、細砂・炭化物若干あり、Feあり、Mn若干あり
- 6、2.5Y6/4 細砂、シルト若干あり、Feあり、上部にMn粒若干あり
- 7、5G6/1 粘土~シルト主体、細砂の降下あり、斑状Feあり
- 8、5G5/1 粘土主体、シルト~細砂わずかにあり、粗砂若干あり、斑状Fe・Mn粒あり、しまりよし
- 9、5G5/1 粗砂主体、シルト~粘土多し、Fe・Mn・ラミナなし
- 10、2.5Y5/6 シルト~粘土主体、細砂若干あり、中礫わずかにありFeあり、Mn粒わずかにあり、段丘直下斜面堆積
- 11、7.5GY4/1シルト炭化物若干あり、斑状Feわずかにあり
- 12、N1.5/0粘土、石器包含層直下の無遺物黒色層か
- 13、5G5/1 シルト~粘土、乾痕多し、Fe若干あり、しまりよし
- 14、11・12・13のブロック、斜面の小地滑りか
- 15、2.5Y5/4 ~5/1 細砂~シルト、Fe・Mn粒あり、斜面堆積
- 16、2.5Y5/6 ~5/3 シルト~細砂主体、粘土あり、炭化物わずかにあり、Feあり、旧地表土壌化層
- 17、2.5Y6/1 シルト~細砂に6のブロック、木根痕
- 18、7.5GY5/1粗砂~細砂、シルト若干あり

4 Atr, 南側深掘りトレンチ西畠断面土色・土質

- 1、2.5Y6/6 ~5/4 細砂~シルト主体、中砂~粗砂・Fe・Mnあり、4層古
- 2、2.5Y6/4 ~5/4 シルト~細砂主体、粘土若干あり、Fe・Mnあり4層系?
- 3、2.5Y6/4 ~5/4 細砂~シルト主体、Fe・Mnあり、4層系?
- 4、10YR5/6 シルト~粘土主体、細砂あり、Fe多し、Mn若干あり、4層系?
- 5、10YR6/1 粘土~シルト主体、細砂・Mn若干あり、Fe多し、炭化物わずかにあり、5層相当?
- 6、5Y6/1(Feの斑は10YR5/6)シルト~粘土、斑状Fe多し、炭化物わずかにあり、低湿地性堆積
- 7、10Y7/1~6/1(Feある所10YR6/6)細砂~シルト、粗砂若干あり、斑状Feあり、ラミナあり
- 8、2.5Y5/4 シルト~細砂主体、中砂・Fe若干あり、Mn粒多し4層
- 9、2.5Y5/4 ~5/3 中砂~細砂主体、シルト・Fe・Mnあり、炭化物わずかにあり、ラミナ残る
- 10、5Y6/1(上部Feで10YR5/8)シルト~細砂、管状Fe・Mn粒あり
- 11、7.5Y6/1 細砂~粗砂、部分的にFeあり、ラミナあり
- 12、粗砂~中礫、Feあり、ラミナあり
- 13、2.5Y6/6 ~5/3 シルト主体、細砂あり、粗砂若干あり、Mn粒多し、Feあり、4層新
- 14、2.5Y6/4 シルト~粘土主体、細砂~粗砂若干あり、Fe・Mn粒あり、4層新
- 15、7.5Y6/2 ~7.5GY5/1細砂~シルト、部分的に中砂あり、斑状Feあり、炭化物若干あり
- 16、7.5Y6/2 ~6/1 シルト~中砂、Fe部分的にあり、炭化物若干あり、ラミナあり
- 17、5Y6/1 細砂~シルト、14のブロックあり、木根痕
- 18、5Y6/1 細砂~シルト、炭化物あり
- 19、上部2.5Y5/3 下部7.5Y6/1 シルト、ラミナ状に細砂あり、上部Mn粒あり、管状Feあり、ラミナ残る
- 20、5Y6/1 シルト・5Y4/1 シルト・5Y6/2 細砂・2.5Y5/6 粗砂のラミナ、部分的にFeあり、植物遺体多し
- 21、5Y5/1 シルト・5Y6/2 細砂・10YR5/6 粗砂~小礫のラミナ、Fe部分的にあり

図15の土色・土質

2. 7Cトレンチ

(1) 概要 (図18)

7Cトレンチは、中位段丘上に位置しており、段丘平坦面の凸凹を反映しつつ、耕地の開発により大きく削平を受けている。そのため、遺構面の残りは悪い。検出した遺構面は、大きく見るとトレンチの南から北へと緩やかに下がってゆく。その中でも、東西や南北方向の凹地があり、ここでは溝を検出している。

遺構面の検出は、現耕作土を除去した段階で行っているが、トレンチの1/3程では現耕作土直下に4面を検出している。わずかに、トレンチの北東隅にある段落ち部の下で1面を検出したが、これは1段下がっているため削平を免れたためである。さらに2面・3面も4面の凹部分や、1378(溝)の最上部にしか見られず、面的な検出はできなかった。このため、トレンチ全体の遺構検出は4面で行った。

(2) 1面 (図16)

この面の平均の高さは、T.P.44.15mである。

この面では、段落ちと1263畦畔を1条検出しているのみである。1263畦畔は、座標北に対して約70度振れる段落ちに、ほぼ並行して走っている。幅は40~80cm、高さは約7cmである。

(3) 1~3層出土遺物

1~3層中からは、陶磁器や瓦、瓦器、土師器、須恵器、埴輪、金属製品、サヌカイトなどが出土している。出土遺物を大きく見ると、1層は近世以降、2層は中世以降、3層はおおよそ12世紀以降の時期に考えることができる。

図17-1は機械掘削終了面精査中に出土した、江戸時代の土師質植木鉢の底部である。図17-2は機械掘削時に出土した備前焼きのすり鉢で、近世のものである。図17-3は側溝掘削時に出土した、須恵器壺の底部である。

図17-4・6・7は第2層中、5は3面の精査中に出土した。4・6は埴輪片である。6は須恵器大甕の頸部で、波状文と3帯とそれを区切る凹線に粘土張り付けた円形付文が見られる。7は平安時代の壺Gの底部である。図17-8・9は第3層から出土した遺物で、8は土師皿、9は土師器甕の口縁部である。

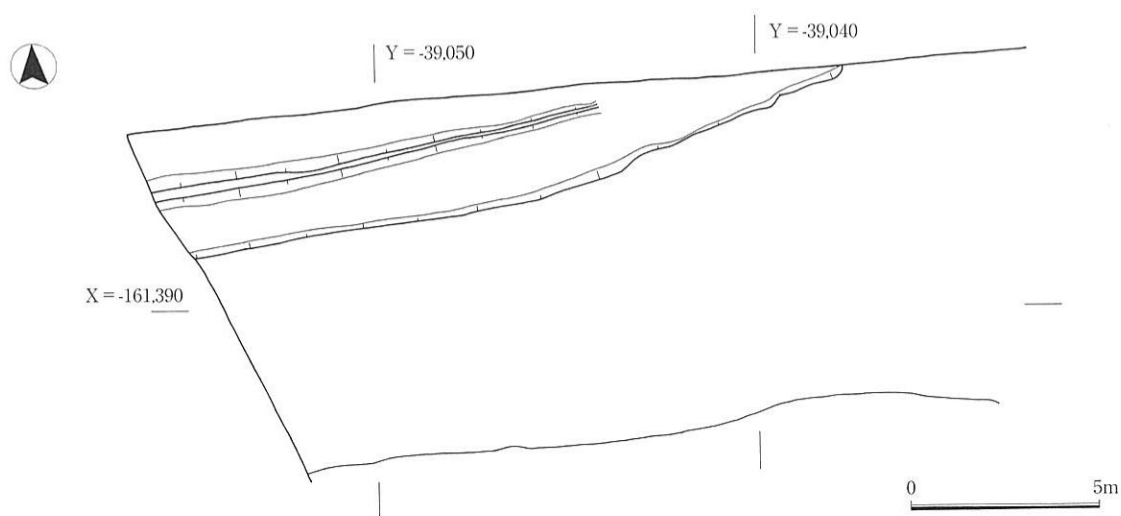


図16 7Ctr.1面 (北西部分のみ) (S=1/200)

(4) 4面

1377落ち込み (図18) 1377(落ち込み)は、耕地区画の痕跡と考えられる遺構である。西辺・南辺がほぼ直線であるが、東辺は不定形の平面形である。不定形部分は、東から水を引き込んでいた痕跡であろう。

この1377落ち込みは、1378溝がラミナの見られるシルト～中砂で埋没した後にできた凹みに人為的に埋められたと思われる、細砂～シルト主体の層の上面から切り込んでおり、かつその上層には2層に相当する層が存在することから、3面の遺構と考えられる。

落ち込み内の埋土からは、東播系の鉢や、6世紀の杯・杯蓋の破片、奈良時代の杯蓋、高杯、甕の他、平瓦、埴輪、サヌカイト片、瓦器椀片が出土している。遺物の出土量から見ると6世紀後半～奈良時代の土器が多いが、瓦器椀が見られることから中世段階の遺構と考えられる。3面の遺構であることから矛盾はない。

1379井戸 (図18・19) 1379井戸は、円形の堀方で検出時の直径は約1.1m、深さは検出面から約2.1mである。

埋土は、7層に分層できる。埋土内には、瓦や木材など、井筒として考えられる遺物が見られないことから、素掘りの井戸である可能性が高い。

底面から約0.4m上で、刷毛目のある土師器甕の胴部がまとまって出土している。

その他、埋土内から須恵器の甕、杯、杯蓋が、最上層から瓦器椀片が出土している。

この井戸は、出土遺物から見て、中世段階に周辺が耕作地化した時点に掘られた野井戸の可能性が考えられる。

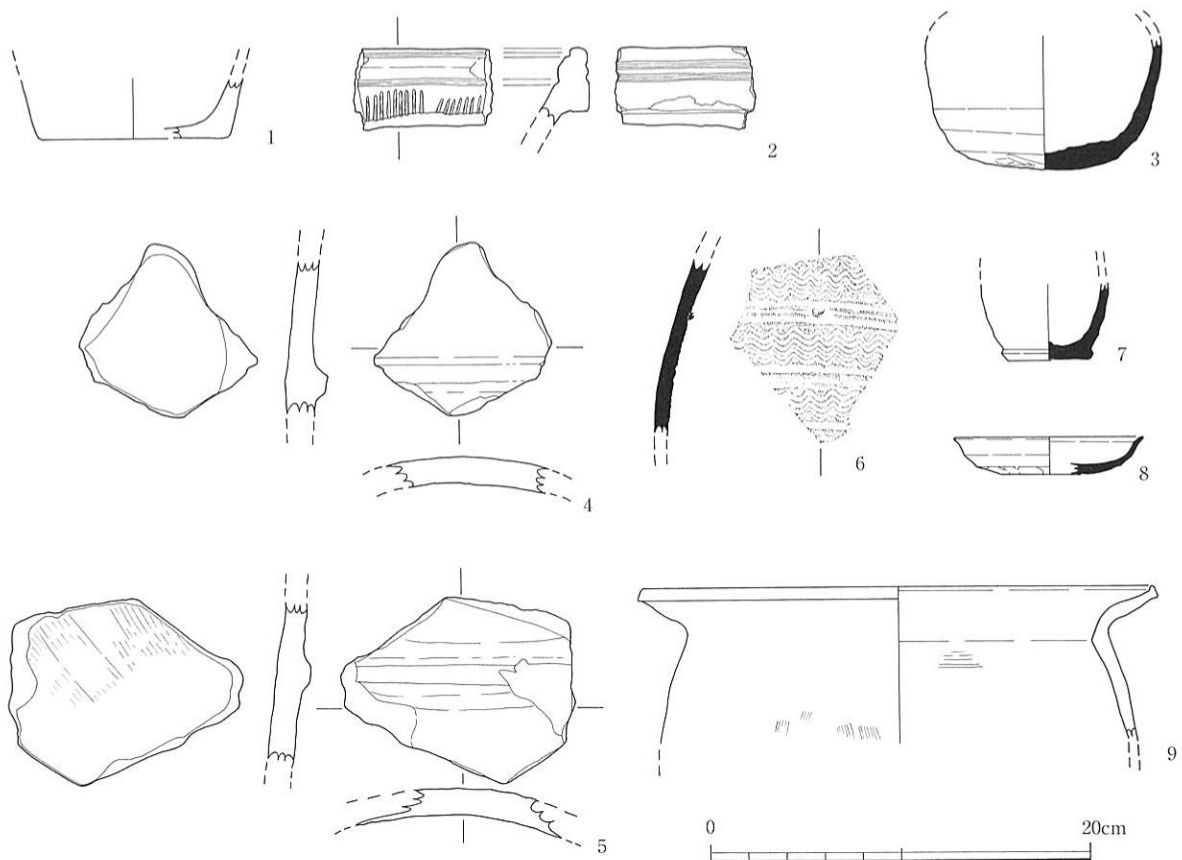


図17 7Ctr.1～3層出土遺物 (1～3:1層、4～7:2層、8・9:3層) (S=1/4)

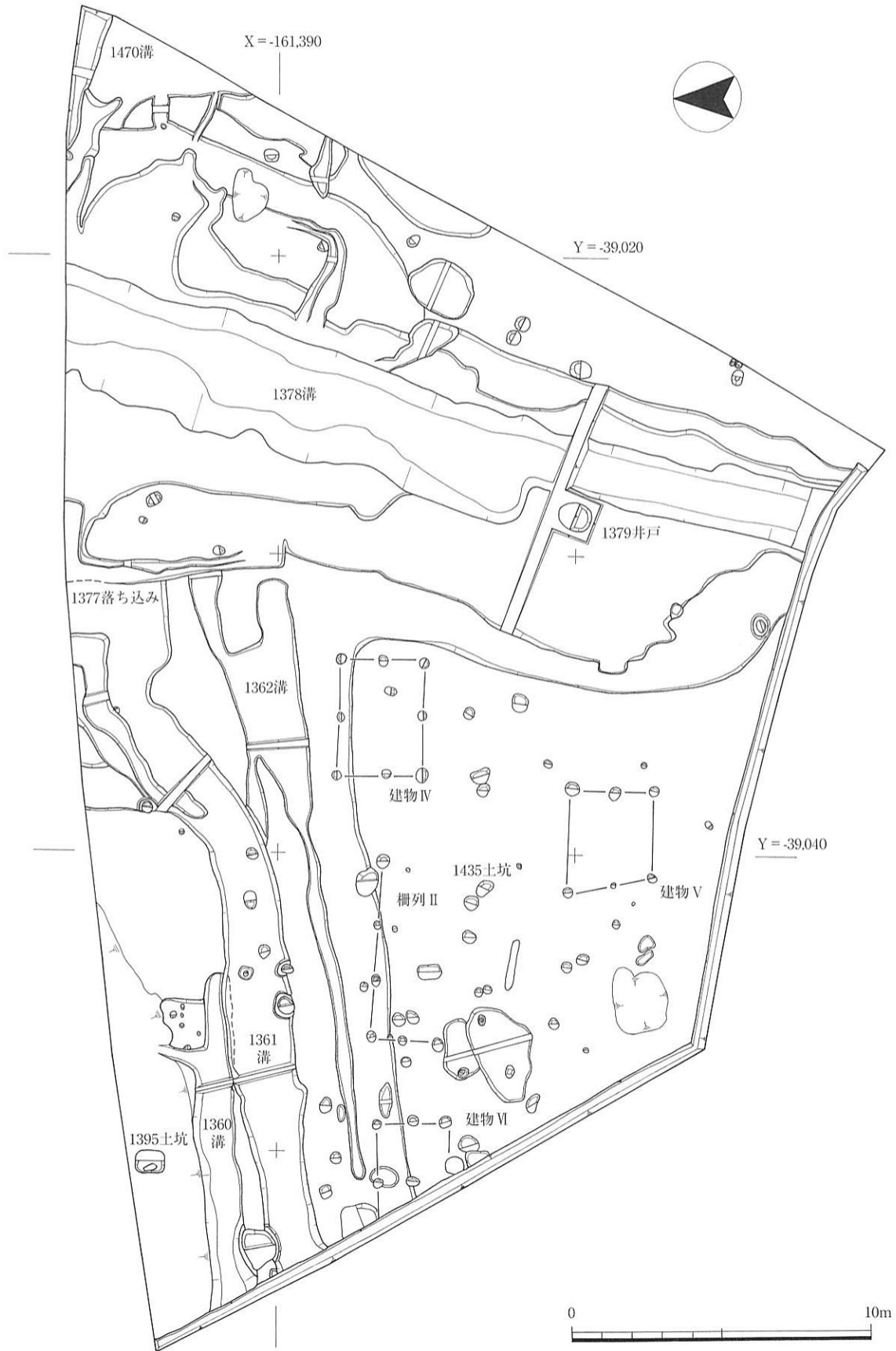


図18 7Ctr.4面 (S=1/200)

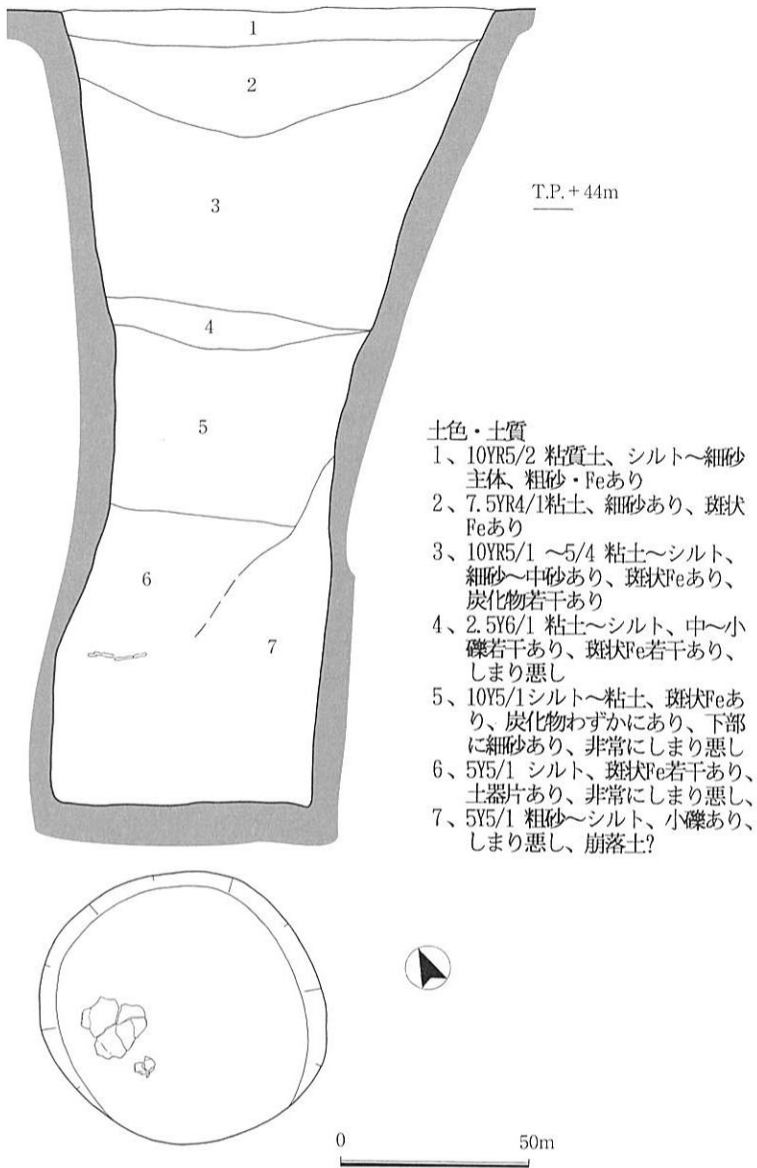


図19 7Ctr.2面1379井戸 (S=1/20)

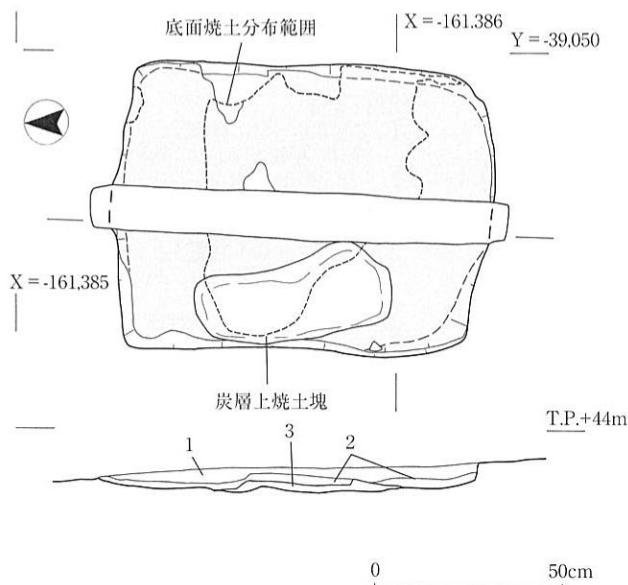


図20 7Ctr.4面1395土坑 (S=1/20)

1395土坑 (図18・20) 1395土坑は、トレンチ北東分で検出した焼土坑で、長辺約0.9m、短辺約0.75mの長方形の掘方である。

深さは浅く、深い部分でも7cmあまりで、遺構上部は後世の耕作により、大きく削平を受けている。

遺構埋土は、下層から順に焼土ブロックが入った粘土～シルト層、幅約3～7mmの茎状の繊維が見られる炭層、砂質土・細砂～シルト主体で、シルトに若干粗砂が混じりブロックが多く混入している層が堆積している。

1395土坑と同様の、炭層や焼土のブロックが入る埋土をもつ焼土坑は、隣接する前回調査地である6Cトレンチでも12基検出している。

これらの焼土坑からは、鉄滓や鍛造鉄片が出土していることから、鍛冶炉の下部構造としており、時期は出土遺物から奈良時代としている。

この点から、1395土坑は鉄滓や鍛造鉄片が出土していないものの、同様な埋土が見られることから、同じく鍛冶炉の下部構造であろう。また、時期はス

土色・土質

- 「2.5Y5/1 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Mnあり」間に「2.5Y5/6 粘質土、シルト主体、Fe多し、粗砂若干あり」のブロック多し
- 炭層 幅3～7mmの茎状の繊維、編み目などはなし。
- 2.5YR4/6～5YR4/1粘土～シルト、焼土ブロックがつぶれたものか、土坑底が焼けているのではない

り消しの無い須恵器甕の破片が出土しているのみで、特定はできないが、6Cトレンチの鍛冶炉と同様に奈良時代と考えられる。

1435土坑 (図18・21) 1435土坑は、長軸約70cm、短軸約45cmの楕円形で、深さは約45cmである。埋土内からは直径15cm前後の石が、底面の約20cm上から出土している。石は、土坑の北側でまとまって出土している。

遺構内からは、土師器の小片が出土しているのみで時期の特定は難しい。

建物Ⅳ (図18・22) 建物Ⅳは東西2間(3.9m)、南北2間(3m)の東西棟である。

柱穴は30~40cmの円形で、深さは削平のため総じて浅く、深い柱穴でも42cm程度である。

なお、隅柱の柱穴は、他の柱穴よりも若干深く掘られているようである。

検出した8基の柱穴の内、柱の抜き取り痕跡が確認できた柱穴は2基のみである。

堀方の埋土は黄褐色系の砂質土・シルト~細砂主体で粗砂を含む埋土である。

また、柱筋を座標北に合わせている。

柱穴の堀方埋土内からは、須恵器の杯身・6世紀の杯蓋、体部外面のスリ消しが見られない甕片、器種不明の土師器小片の他、サヌカイトの翼状剥片の破片が1点出土している。

時期は、既往の調査成果から、奈良時代と推定される。

建物Ⅴ (図18・23) 建物Ⅴは東西1間、南北2間の東西棟であるが、桁行(東西)方向が南側約3.6m、北側約3mと寸法が異なっている。

これは、西側の妻柱と南西隅柱が東へ偏っているためである。

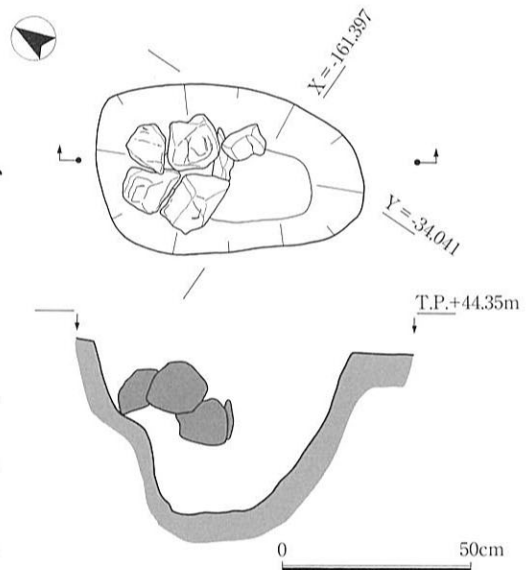


図21 7Ctr.4面1435土坑 (S=1/20)

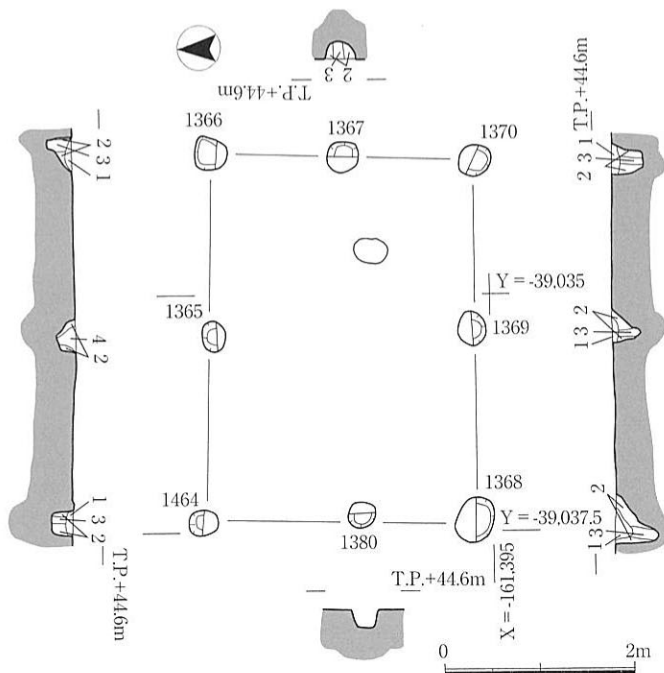


図22 7Ctr.4面建物Ⅳ (S=1/80)

土色・土質

- 1、2.5Y6/6 ~6/4 砂質土、シルト~細砂主体、粗砂・Feあり、Mn粒わずかにあり
- 2、「2.5Y6/2 砂質土、シルト~細砂主体、粗砂若干あり」の間に「2.5Y6/6 シルト Feあり」のブロックあり
- 3、2.5Y5/2 ~6/4 粘質土、シルト主体、細砂~粗砂若干あり、Fe上部に若干あり 柱痕
- 4、「2.5Y6/6 シルト~細砂、Feあり」と「2.5Y5/2 砂質土シルト~細砂主体、粗砂あり」のブロック、抜き取り痕

このため、上屋が構築できるのか疑問があるが、建物の柱筋も建物Ⅳと同様に座標北に合わせており、建物Ⅳの西側と建物Ⅴの東側の柱筋が揃っているため、ここでは建物として考えておきたい。

建物を構成する柱穴は、おおむね20～40cmの円形の掘方で、深さは建物Ⅳと同様に総じて浅く、深い柱穴でも20cm程度である。

検出した6基の柱穴の内、柱の抜き取り痕跡が確認できた柱穴は4基である。掘方の埋土は、建物Ⅳと同様の黄褐色系の砂質土・シルト～細砂主体で粗砂を含む埋土である。

柱穴の掘方埋土内からは、体部外面のスリ消しが見られない須恵器の甕片、土師器の高台付き椀、器種不明の土師器片の他、サヌカイトチップが出土しているが、いずれの土器も小片で、時期決定は難しいが、奈良時代の建物と考えられる。

建物Ⅵ (図18・25) 建物Ⅵは、南北2間の東西棟の総柱建物で、西側が調査区外のため、東西方向は2間分を検出したのみである。他の建物Ⅳ・Ⅴなどが東西2間、南北2間の東西棟であることから、建物Ⅵも東西は2間であろう。桁行(東西)方向の長さは不明であるが、梁間(南北)方向は約2.4mである。

柱穴は25～40cmの円形で、深さは他の建物に比べやや浅く、15cm程度である。検出した5基の柱穴の内、柱の抜き取り痕跡が確認できた柱穴は南東の隅柱1基のみである。他は、細砂～シルト粗砂をわずかに含む柱痕跡が見られた。掘方の埋土は、建物Ⅳと同様の黄褐色系の砂質土・シルト～細砂主体で粗砂を含む埋土である。

建物の柱筋は、建物Ⅳ・Ⅴと同様に座標北に合わせている。また、建物Ⅳの棟筋と建物Ⅵの北側柱筋がほぼ揃っている。

柱穴の掘方埋土内からは、須恵器の器台と思われる小片と器種不明の土師器の小片が出土しているのみである。いずれも小片のため、時期決定は難しいが柱筋が他建物と揃っていることなどから奈良時代と考えたい。

柵列Ⅱ (図18・24) 柵列Ⅱは、東西に3間、南北に2間の南にL字状に曲がる柵列である。柱穴は20～40cmの円形で、深さは8～29cmである。

検出した5基の柱穴の内、柱の抜き取り痕跡が確認できた柱穴は2基で、他は細砂～シルトで粗砂をわずかに含む柱痕跡が見られた。掘方の埋土は、他の建物と同様に黄褐色系の砂質土・シルト～細砂主体で粗砂を含む。

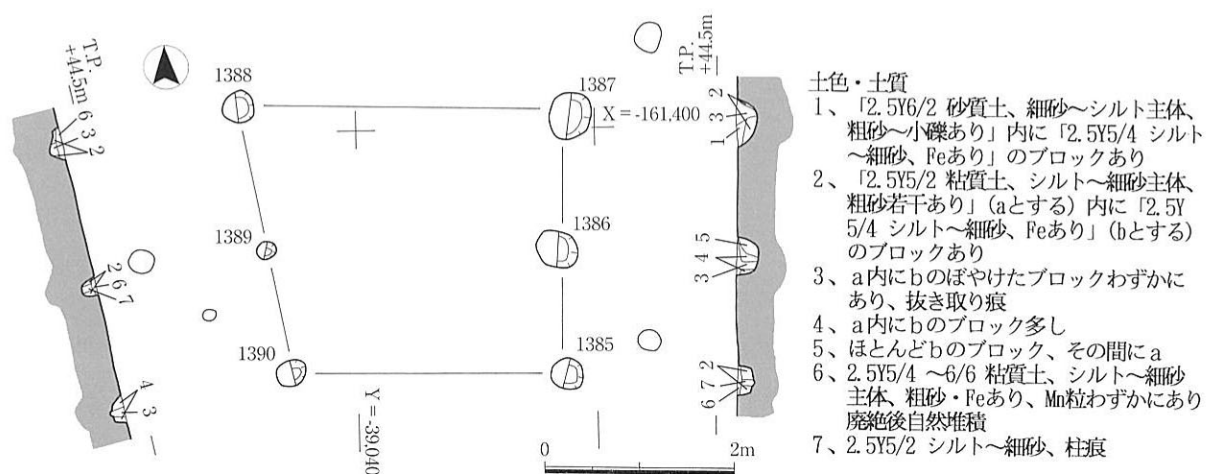


図23 7Ctr.4面建物Ⅴ (S=1/80)

柱筋は、他の建物同様に座標北に揃えている。

柱穴の堀方埋土内からは、器種不明の土師器片1点と焼成が悪い平瓦片が2点出土している。いずれも小片で時期決定は難しい。

前述したように、建物Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ及び柵列Ⅱは、座標北を意識して柱筋を揃えて建てられている。

建物Ⅳの棟筋と建物Ⅵの北側柱筋がほぼ揃っており、その線上に柵列Ⅱが位置する。建物間の距離は約12mである。また、建物Ⅵと柵列Ⅱの間は、約3mである。建物Ⅳの西側と、建物Ⅴの東側の柱筋も揃っており、建物間の距離は、約5mである。

以上のように、各々の建物・柵列は、一定の規則の上に建てられており、同時期に建てられた建物群であることが想定できる。建物群の時期については、出土遺物からは時期の特定が難しいが、奈良時代に位置づけられよう。また、今回検出した建物群は、前回の調査との関連で考えなくてはならず、この点については考察に詳述があるのでそちらを見ていただきたい。

1360溝 (図18・27) 1360溝は、トレンチ西端から東へ延びる溝で、1361溝に切られている。幅は狭い部分で約0.5m、広い部分では1.3mである。検出延長は約11m、深さは約25cmである。

埋土は、黄褐色砂質土でラミナは見られなかった。

溝内からは、羽釜片や土師器の皿や高杯片、須恵器の高杯、甕片の他、サヌカイト片が出土している。

土器1は、須恵器長頸壺の底部である。溝底から約6cm上から出土している。(図26-5・図28)

土器2は、須恵器甕の体部片、土器3は、平瓦片である。(図26-8・図28) 土器4は、溝底で検出した一辺約30cmの方形の窪み内から出土した靴の羽口である。(図26-4・図28 図版25-2) 端部には鉄滓の付着が見られる。その他、図化できる遺物として、図26の1～3・6

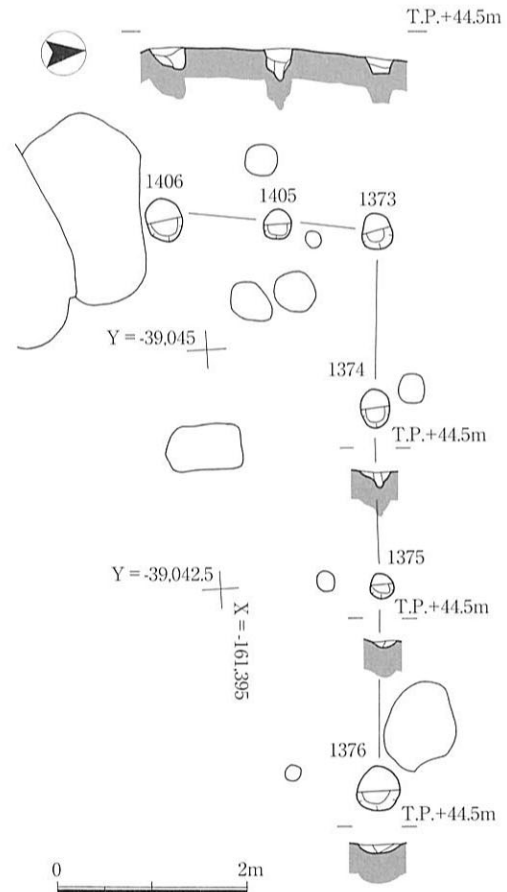


図24 7Ctr.4面柵列Ⅱ (S=1/80)

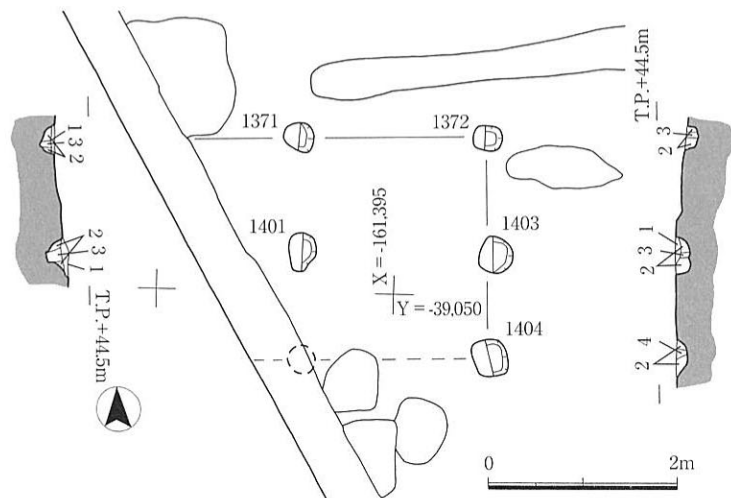


図25 7Ctr.4面建物Ⅵ (S=1/80)

土色・土質

- 1、2.5Y6/6 砂質土 細砂～シルト主体、粗砂ありFeあり、Mn粒わずかにあり、廃絶後自然堆積
- 2、「2.5Y5/3 細砂～シルト」の間に「2.5Y5/6 シルト、Feあり」のブロックと粗砂あり。
- 3、2.5Y4/3 細砂～シルト、粗砂わずかにあり。柱痕
- 4、「2.5Y5/3 細砂～シルト」に「2.5Y5/6 シルト、Feあり」のぼやけたブロック若干あり。抜き取り痕

～8がある。

1・2は甕の口縁部である。3は中国からの輸入陶器の黄釉耳付壺である。(図版25-1) 時期は10～11世紀と考えられる。製作窯は現在のところ不明である。大阪府内において、黄釉陶器が出土するのは非常に珍しく、稀有な例であろう。5・6は奈良時代の須恵器長頸壺の底部である。7・8は、凸面に縄目タタキが見られる平瓦である。その他、須恵器の壺や甕、土師器の杯、高杯、羽釜、甕片などの他、青磁、椀形滓2点(図版25-3)、サヌカイト剥片が3点出土している。

遺構の時期は、出土遺物からおおむね9世紀頃と考えられるが、黄釉耳付壺が10世紀～11世紀と考えられ、これが後世の混入でないのであれば、溝の埋没時期は、10世紀～11世紀と考えるのが妥当であろう。

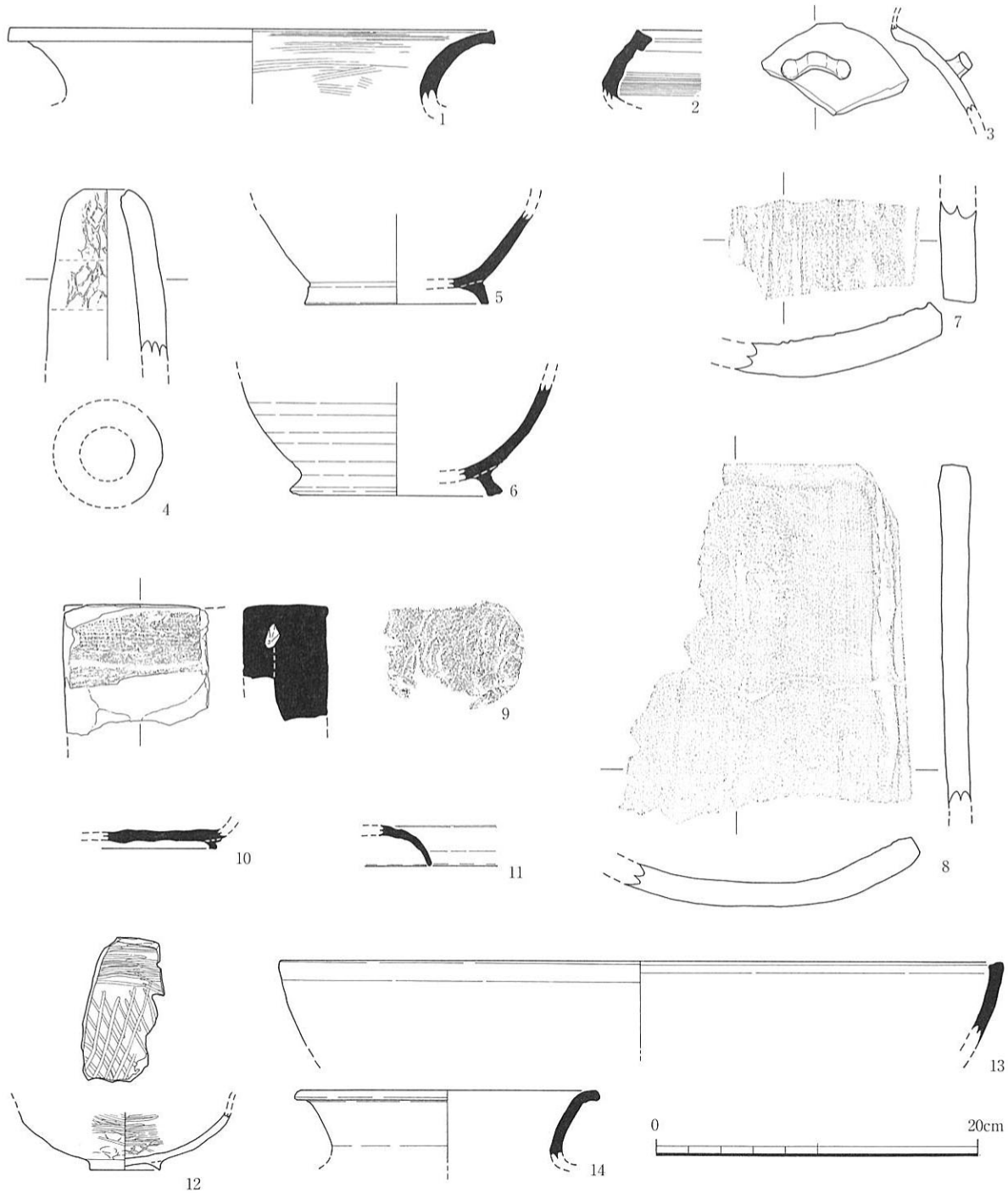


図26 7Ctr.遺構出土遺物 {1～8:1360溝(4:土器4、5:土器1、8:土器3・4)、9・10:1361溝、11:1366柱穴(建物Ⅳ)、12:1377落ち、13・14:1470溝}(S=1/4)

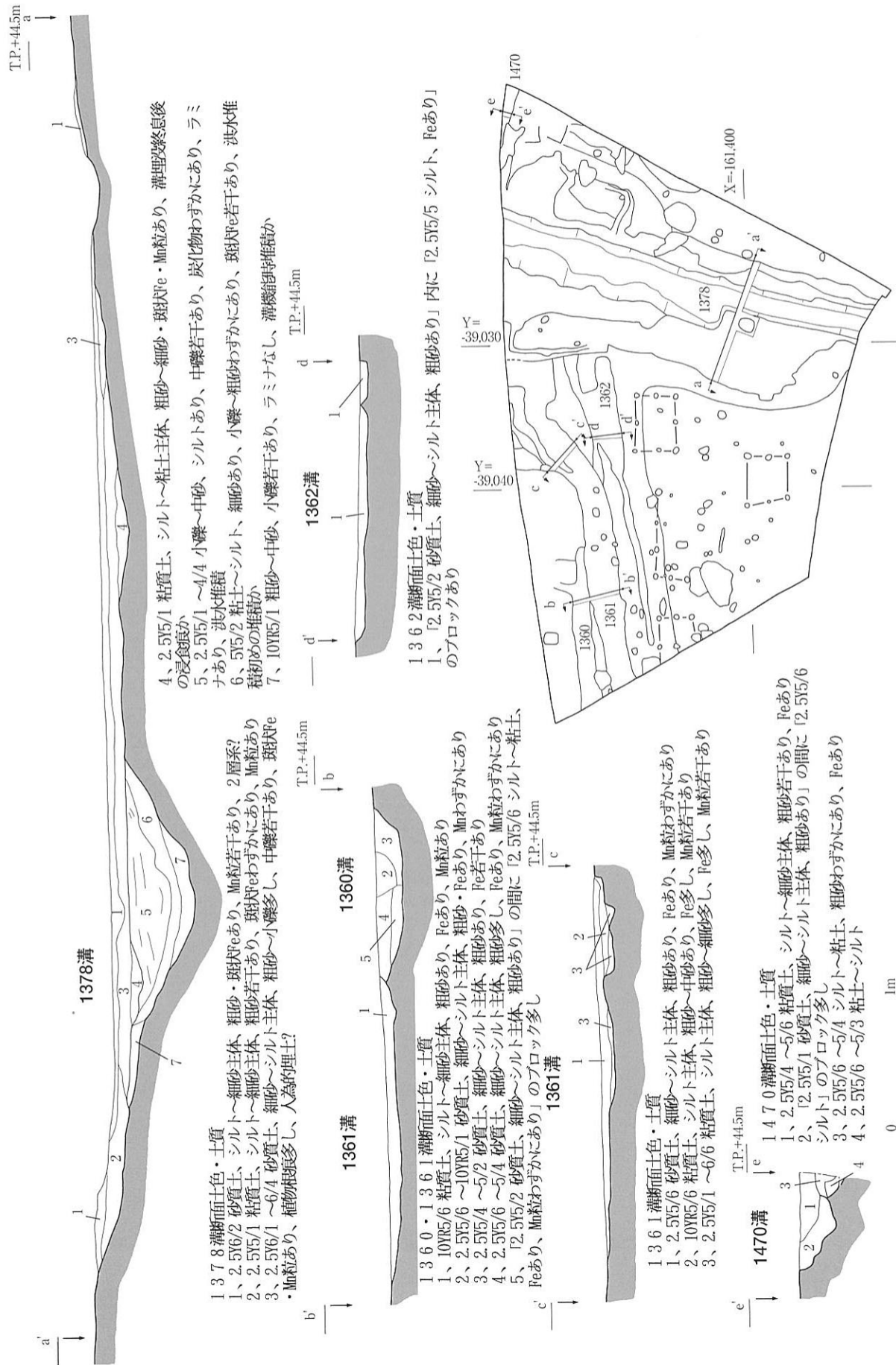


図27 7Ctr.4面1360・1361・1362・1378・1470溝断面 (S=1/40 全体図は1/400)

う。

1361溝 (図18・27) 1361溝は、切り合い関係において1360溝よりも新しい溝である。幅は1.6～2 m、深さは40cmである。溝は、両肩から非常に緩やかに底へと落ち込む、浅い皿形のような断面形状である。

検出延長は約25m、東端で北へ緩やかに曲がり幅が広がっており、そこから東では後世の耕地区画による削平のため検出できなかった。溝の埋土は、黄褐色粘質土でシルト～細砂が主体で粗砂が混じる。また、鉄分・マンガン粒が見られる。

溝内からは、須恵器の壺・杯身・杯蓋・杯・甕、土師器の甕・羽釜、瓦器碗の他、埴やサヌカイトの石核が出土している。図26-9の埴は、表面に布目痕が見られる。図26-10は須恵器高台付き杯の底部である。出土遺物は、奈良時代のものが大半を占めるが、瓦器碗片が出土していることから、13世紀頃に埋没したのであろう。

1362溝 (図18・27) 1362溝は、切り合い関係において1361(溝)よりも古い溝である。1360溝や1361溝と同様に東西方向の溝であるが、深さは非常に浅く7 cm程である。大きく削平を受けていると思われる。

このためか、遺存状態の良い場所では幅約2.3mを測るが、その他の部分では幅は0.5m程度となる。検出延長は約21mである。

埋土は、1360溝と類似しており、黄褐色砂質土でシルト～細砂が主体、粗砂が混じり、鉄分・マンガン粒が見られる。ラミナは見られない。このため、1360溝とほぼ同時期に埋没したのではないだろうか。

溝内からは、須恵器杯身・杯蓋、杯、甕、壺、高杯の破片や土師器羽釜、甕、杯、瓦器の破片の他、サヌカイトの加工のある原礫1点、チップが2点出土している。

1470溝 (図18・27) 1470溝は、トレンチ北東隅で検出しており、南東～南西へ延びている。検出延長は約5 m、深さは2.6mを測る。溝の南肩は検出しているが、北肩がトレンチ外のため幅は不明である。

埋土は、他の溝と異なり粘質土である。断面では、一度黄灰色砂質土である程度埋まった時に、再度幅の細い溝を掘ったような感じである。この幅の狭い溝は、黄灰色シルト～粘土が堆積しており、最後に黄灰色粘質土で1470溝が完全に埋まっている。

溝内からの出土遺物はなく、時期の特定は困難である。

1378溝 (図18・27) 1378溝は、既往の調査地6 Cトレンチと7 Cトレンチで検出した溝1188・1015をつなぐ、一連の溝である。本調査では1378溝と呼称しているが、溝1188と同一の溝である。

溝の断面形状はやや複雑で、検出面から緩やかに落ちてゆき、溝芯に当たる部分でやや急に落ち込む。

溝芯に当たる部分は深さ約0.6mと深く、幅は約3.2mである。溝が緩やかに落ち込み始める部分での最大幅は約6 mである。この溝が、埋没した後にできた凹地の北端に耕地区画ができる。溝の両肩には、その痕跡が見られる。

また、北端部分で検出した、ほぼ西から東へと延びる小溝は、この耕地区画へ水を供給する溝である可能性がある。

溝の埋土は、最上層に堆積した2層相当層を含め、7層に分層できる。最下層には粗砂～中砂、小礫を若干含む層が堆積している。ラミナは見られない。溝が機能していた時の堆積層ではなく、何らかの理由で流れ込んだものと考えられる。

溝内からは多数の遺物が出土しているが、溝の最下層に堆積した粗砂～中砂、小礫を若干含む層からの出土がほとんどである。

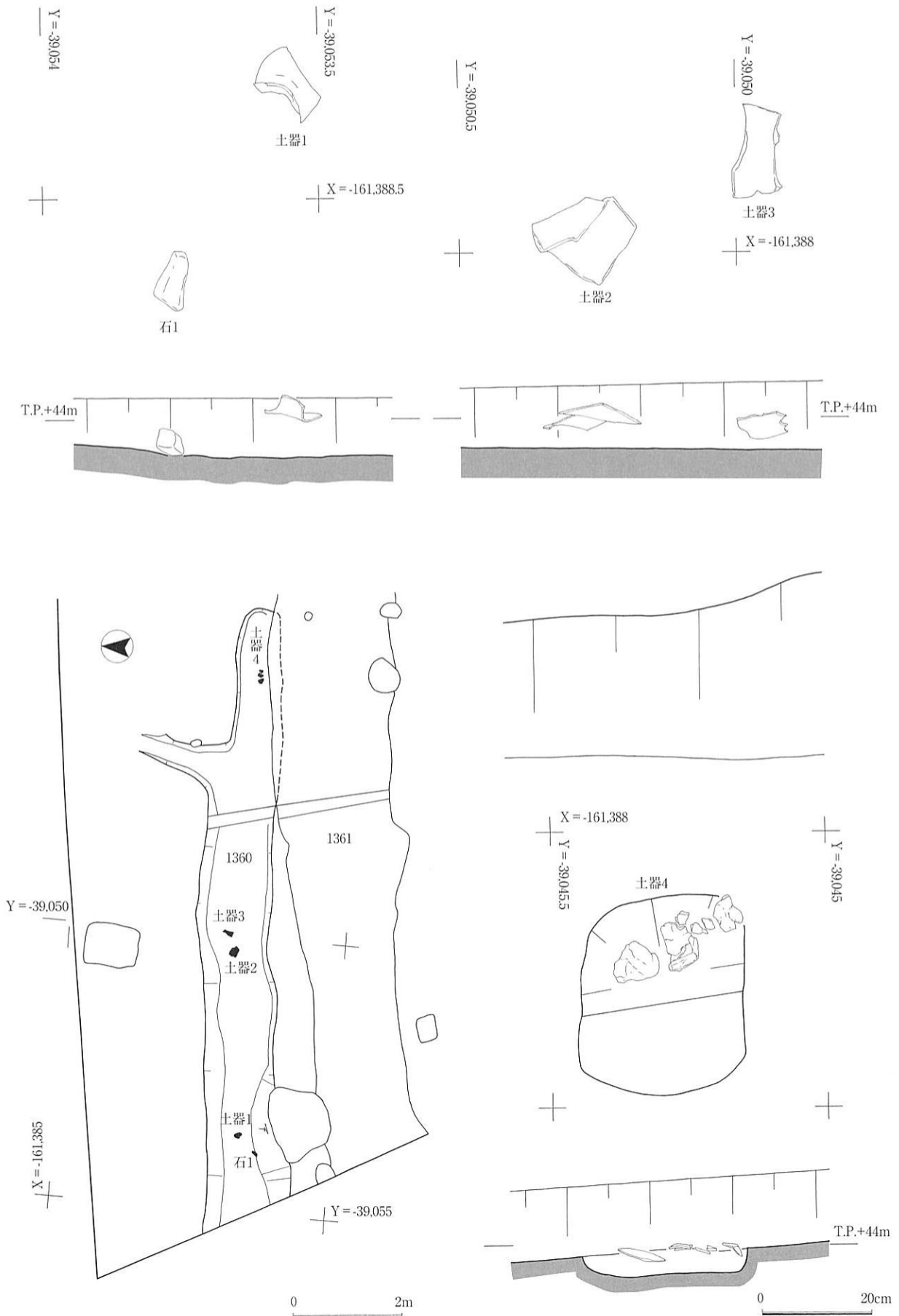


図28 7Ctr.4面1360溝土器出土状況 (S=1/10 全体図は1/100)

出土した遺物を見ると、おおむね飛鳥時代前半～奈良時代にかけてのものが多く出土しており、奈良時代でも、平城宮Ⅱ～Ⅳ頃と考えられる遺物が多く見られる。

比較的大きな破片で器種、時期などを把握できる遺物については、周辺部の土器と共に、基本的に南から順に番号を付けて出土状況を掲載している。以下、順に出土状況と、遺物について記述する。

土器1は、の平瓶で、胴部の一部が溝底から約13cm上で出土している。(図29・30-14 図版20-2) この他、土師器・須恵器の甕の小片も出土している。

土器2は、須恵器の長頸壺で、東肩部分から胴部の一部が出土している。(図29・30-10) 時期は平城宮Ⅱ～Ⅳ頃か。この他、土師器甕の小片も出土している。

土器3は、須恵器の高台付き杯と土師器の小型甕で、西肩から出土している。高台付き杯は口縁部から高台部分にかけての破片で、復元口径14.6cm、器高4.35cmである。(図29・30-23) 時期は平城宮Ⅱ～Ⅳ頃である。土師器の小型甕は、口縁から胴部にかけての破片である。(図29・31-1) 口縁部はヨコナデ、胴部外面は主に縦方向のハケ目、内面はユビ押さえ後ナデを施している。

土器4は、土師器甕の胴部片である。溝底東側で底から約10cm上で出土している。

土器5は、土師器の杯、椀、甕の破片である。溝の西側の底から約18cm上で出土している。

土器6は、溝の東肩部分から出土している取手付き甕の破片である。(図29・31-9) 外面にはタテハケが見られる。内面は剥落が著しく、調整は不明である。この他、土師器甕小片が出土している。

土器7は土師器高杯の、脚部から底部にかけてである。(図29・31-11 図版19-6・20-1) 溝底東側で底から約6cm上から出土している。外面は剥落が著しく調整は不明瞭、裾部の内面はユビ押さえが、脚部内面にはシボリ目が見られる。

土器7付近では、埴輪1・2が溝底から出土している。埴輪1は円筒埴輪の底部で、復元底径37.7cmである。外面の色調は、5YR7/6 橙色で、内面は7.5YR77/3 にぶい橙色、断面は10YR7/2 にぶい橙色である。外面の調整は荒いタテ刷毛で、内面にはユビ押さえ後、縦方向のユビナデが見られる。(図29・32-3) 日置荘西町窯跡群から出土している埴輪に酷似している。

土器8は、須恵器の高台付き杯、土師器の鉢などが溝底東側で底から約7cm上で出土している。(図29) 土師器の甕は、口縁部が残っており復元口径は33.6cmである。口縁部外面はヨコナデ、体部外面は斜め方向ハケ目が見られる。外面の色調は、7.5YR7/6 橙色である。平城宮Ⅱ・Ⅲの土器であろう。(図31-10) この他、須恵器杯の口縁部片、土師器の取手付き甕や鉢、杯などの小片も出土している他、鉄滓が1点出土した。

土器9は、須恵器の高台付き杯で、溝の東肩から出土している。(図29・30-31 図版19-3) 復元口径は16.1cm、器高は4.3cmである。焼成がやや不良である。この他にも、高台付き杯片が数点出土している。平城宮Ⅲ頃の土器である。

土器10は、須恵器の高台付き壺である。(図29・30-13) 底部が、溝底から約20cm上で出土した。

丸い胴部にやや短めの頸部が付く壺である。外面は、回転ヘラ削りの後、回転ナデを施す。この他、須恵器と土師器の甕片が出土した。

土器11は、須恵器の高台付き杯である。(図29・30-29) 溝底から2cm上で出土している。復元口径は15.7cm、器高2.85cmである。底部外面の高台内側には、高台に沿うように爪圧痕が見られる。平城宮Ⅲの土器である。この他、土師器の小片が出土している。

土器12は、須恵器の甕体部片で、溝の東肩から出土している。

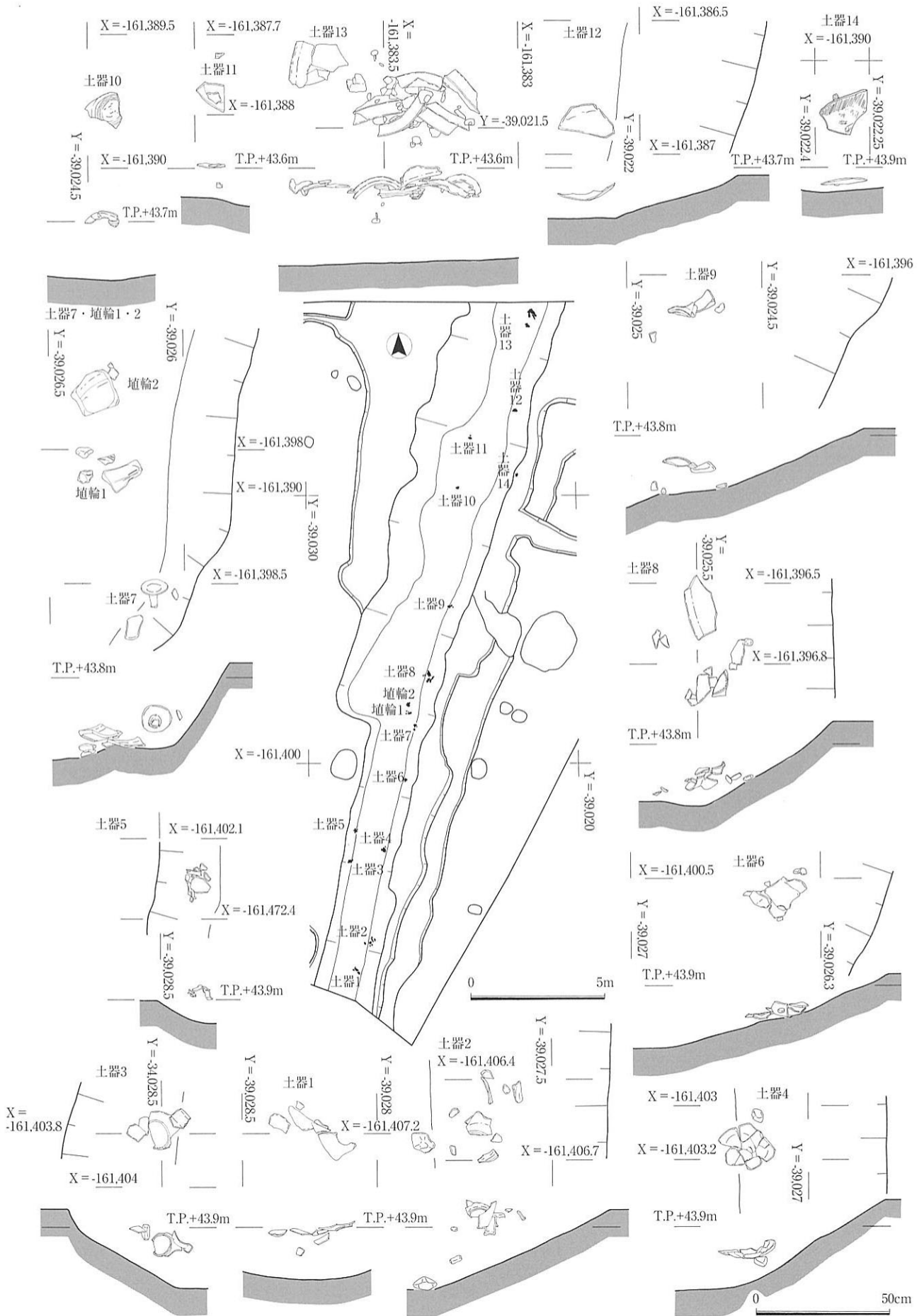


图29 7Ctr.4面1378溝土器出土状况 (全体图S=1/200、出土状况图S=1/20)

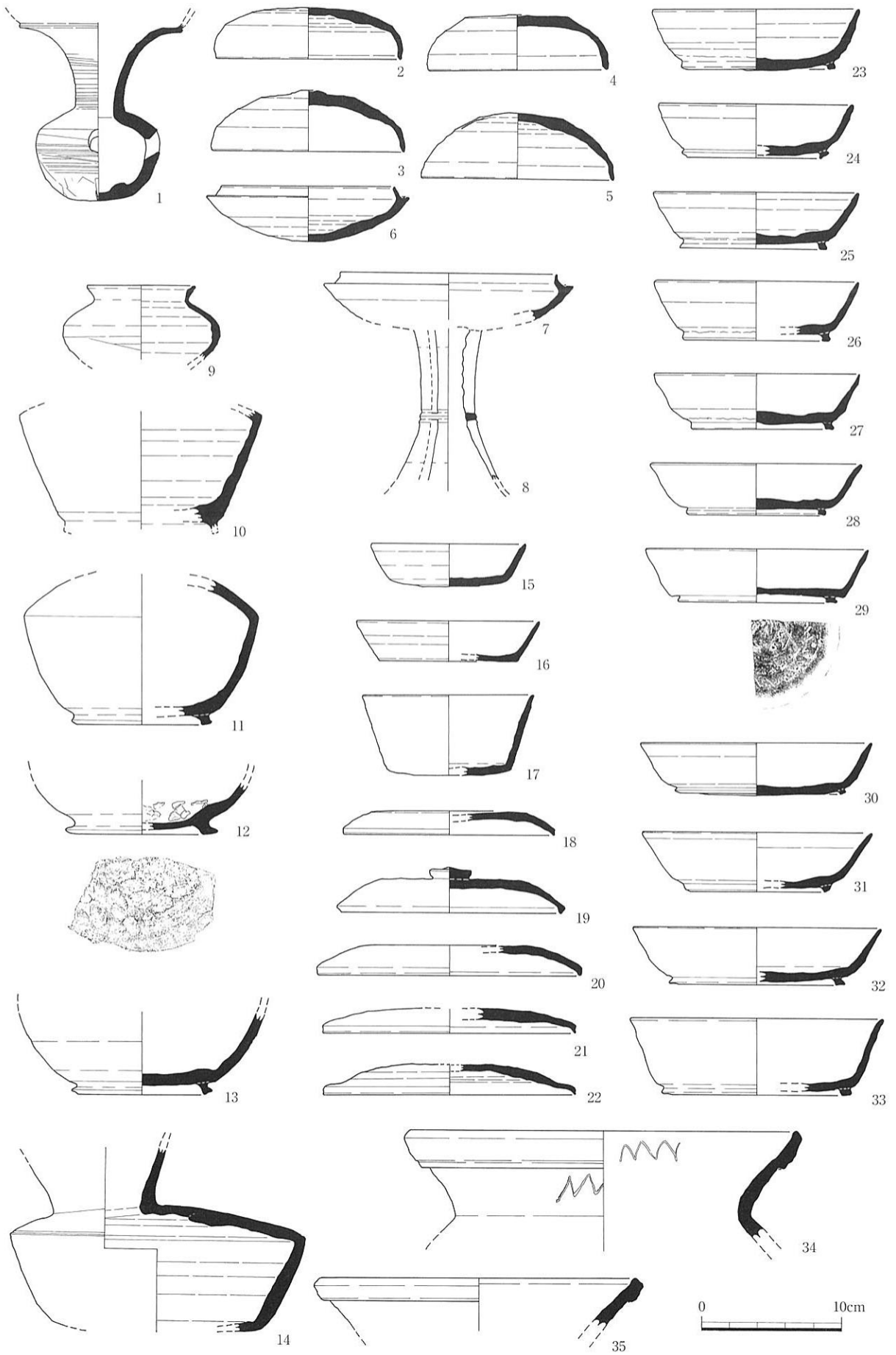


図30 7Ctr.4面1378溝出土遺物 (その1) 須恵器 (10:土器2、13:土器10、14:土器1、23:土器3、29:土器11、31:土器9) (S=1/4)

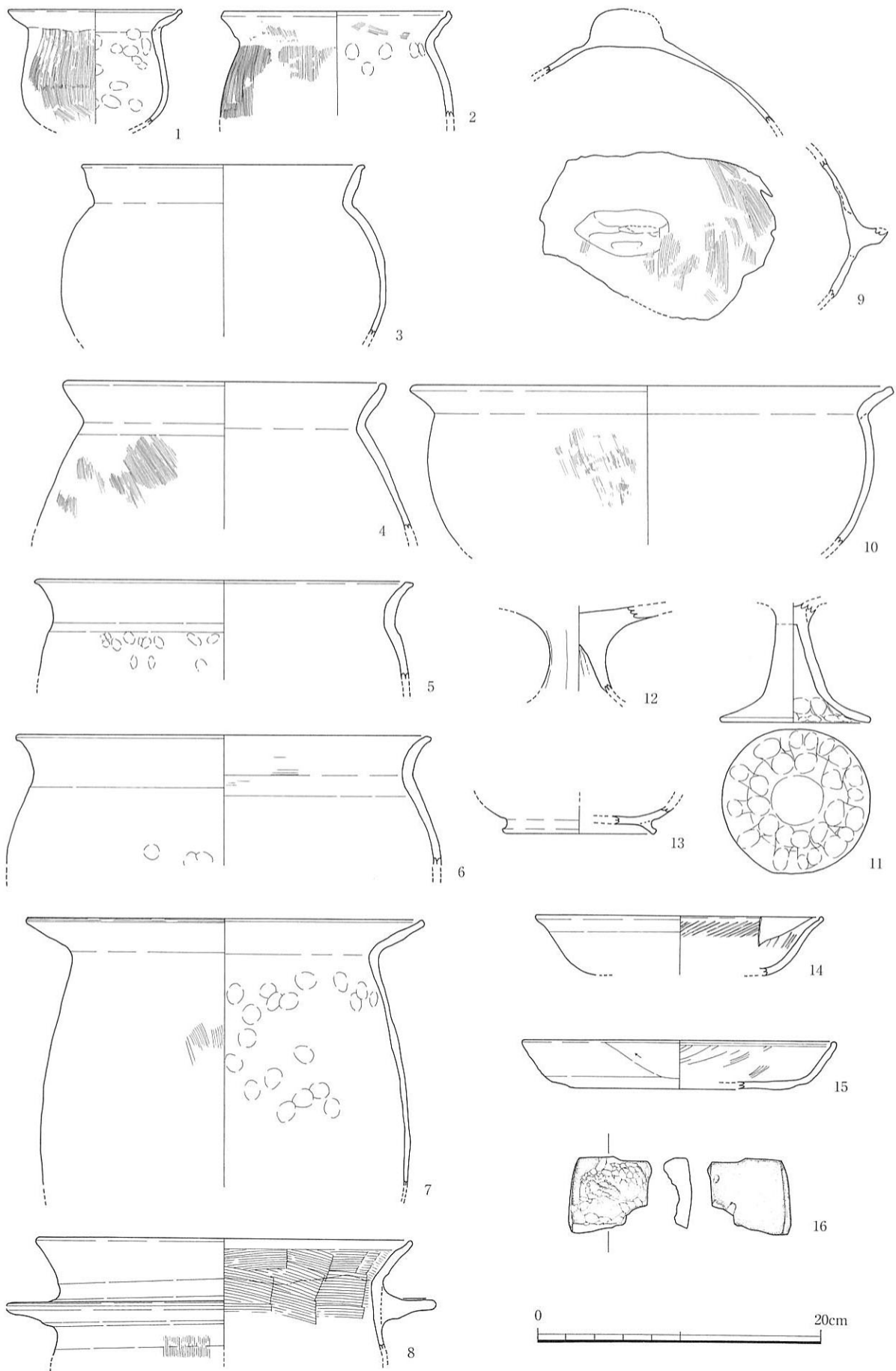


図31 7Ctr.4面1378溝出土遺物 (その2) 土師器及び石製品 (7・8:土器13、9:土器6、10:土器8、11:土器7) (S=1/4)

土器13は、土師器の甕と羽釜である。(図29・31-7・8 図版19-9) 溝の北端で、溝底から約25cm上で出土している。甕は復元口径27.6cmで、胎土は石英・長石・赤色粒を含む。色調は、外面が5 YR 7/6 橙色で、内面は10YR 8/4 浅黄橙色である。焼成は不良である。外面は、縦方向のハケを施し、内面にはユビ押えが残る。口縁端面には、磨滅のため不明瞭ではあるが、沈線が認められた。羽釜は、復元口径26cmで、胎土は石英・長石を多く含み、1mm前後の雲母・赤色粒も見られる。色調は、外面が5 YR 5/4 にぶい赤褐色で、内面も5 YR 4/4 にぶい赤褐色である。焼成は良好である。外面は、口縁部から、鐙部分の下にかけてヨコナデを、そこから下の体部には縦方向のハケを施している。口縁部内面には横方向のはけ目、口縁端部では後ヨコナデを施す。鐙部分は、ケズリ後に横方向のはけ目を施している。奈良時代の土器である。

この他にも、溝の掘削時に取り上げた遺物が多数ある。以下、その中から図化した遺物について記述する。尚、図30は須恵器、図31は土師器・石製品、図32は埴輪である。

図30-1は甕で、口頸部は大きく外反し、頸基部は比較的太い。頸部、胴部の孔の周辺には、カキ目が、胴部下半には、ハケ目が施される(図版19-11)。底部外面に、一条のヘラ描きが見られる。陶邑II-5~III-1の時期に考えられる。図30-2~5(図版19-7)は杯蓋で、外面には天井部と口縁部の稜は見られない。2・3は陶邑II-3~5、4はII-6、5はII-5~6であろうか。図30-6は杯身で、口径12.2cm、器高4.0cm、口縁部は、短く内傾する。時期は、陶邑II-3~4に当たる。図30-7は、有蓋高杯の杯部で、口径は15.4cm、内・外面ともナデ調整を行う。陶邑II-3~4である。図30-8は、有蓋高杯の脚部で、2段の長方形の透かしを3方に空ける。陶邑II-4~5に考えられる。

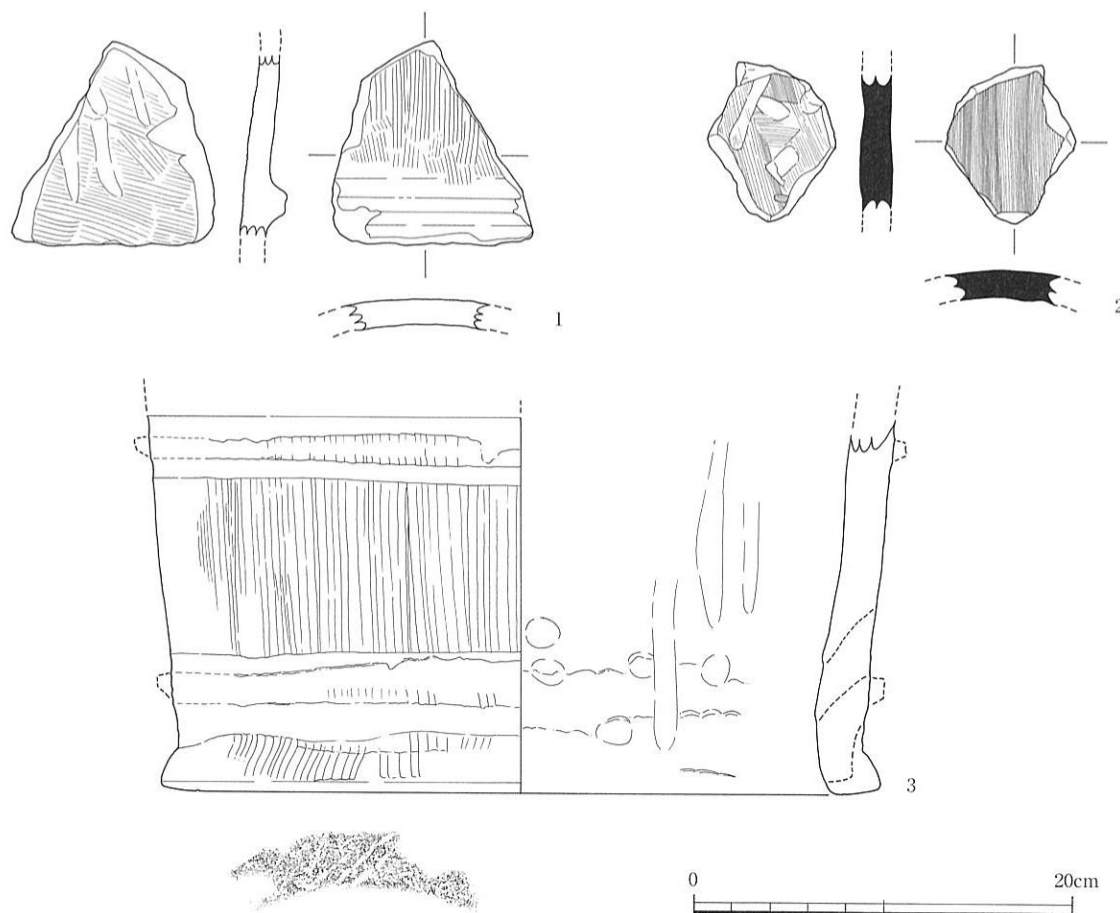


図32 7Ctr.4面1378溝出土遺物(その3) 埴輪(1・3:土師質、2:須恵質)(3:埴輪1・2)(S=1/4)

図30-9は壺である。口径は7.6cm、胴部最大径は11.2cmである。底部は欠損しているが、扁平気味の器形である。外面は、口縁部から胴部最大径の付近までヨコナデ、以下は横方向のケズリを施す。内面はヨコナデである。図30-11・12は長頸壺である。11は肩が張る器形であるが、12は丸い胴部にやや短い頸部が付く器形である。12の底部内面には、四角形の圧痕が見られる。図30-15～17は、口縁端部を丸く納める杯である。15は復元口径11cm、器高3.1cmで、内面および、外面口縁部から底部にかけは、ナデを、底部はヘラ削り後ナデを施す。16は復元口径13cm、器高2.9cmで、調整方法は15と同様である（図版30-1）。17は復元口径12.5cm、器高5.8cmと深めの杯である（図版19-5）。調整方法は15・16と同様である。いずれも、平城宮Ⅱ～Ⅲの土器である。

図30-18～22は、つまみの付く杯蓋である。19はボタン状の宝珠つまみが残っている。図30-24～33は高台付き杯である。24は復元口径13.6cm、器高3.9cmで、口縁端部は丸く納める。25は復元口径14.5cm、器高34.1cmで、口縁端部は24と同じく、丸く納めている（図版19-8）。26は復元口径14.3cm、器高4.3cmである。27は復元口径14.5cm、器高4.0cmである。28は復元口径15.0cm、器高3.7cmで、口縁端部を僅かに外へつまみ出す。30は復元口径16.3cm、器高3.8cmで、底部が高台より下へ僅かにはみ出している（図版30-2）。32は復元口径17.8cm、器高4.1cmである。33は復元口径18cm、器高5.5cmと、やや深目の杯である。24～32は平城宮Ⅰ～Ⅲに、33は平城宮Ⅴの時期に考えることができる。図30-34は甕の口縁部から頸部にかけてである（図版19-10）。内外面ともナデ調整を行っている。口縁部内面、頸部外面に、ヘラ描きが見られる。図30-35は甕の口縁部である。

図31-2は甕で、口縁端部を上方に摘み上げる。口縁部内面は横ハケ後横ナデ、外面は縦ハケ後横ナデ。体部外面は縦ハケを施す。頸部内面付近には、指押えが見られる。図31-3も甕である。剥離が著しく調整は不明である。図31-4も剥離が著しいが、口縁部外面は横ナデ、体部外面はハケを施す。図31-5・6は同器形の甕である。5の口縁部内・外面は横ナデ。体部外面はユビ押え後横ナデ、内面は横ナデを施す。内面には、煤が若干見られる。6の口縁外面は横ナデ、内面はハケ後横ナデを施す。体部外面は不定方向のナデとユビ押え、内面は縦方向のナデを施している。図31-12は高杯の脚部である。図31-13は高台付き杯の底部である。図31-14・15は口縁端部を内側に丸め込む杯である。14は小片のため不確定であるが、内面に放射線二段暗文が施文されている可能性がある。15は、放射線一段暗文が見られる（図版19-4）。13～15は平城宮Ⅱの時期のものである。図31-16は砂岩製の台石と思われる。図32-1・2は円筒埴輪である。1の外面は粗い縦ハケを施し、内面は右から左へ斜め方向のハケを施す。胎土は石英・チャート・長石を含む。色調は内・外面とも10YR 8/4 浅黄橙である。2は須恵質で、外面は縦ハケ、内面はユビ押えとハケ目が見られる。胎土は石英・長石・角閃石・黒色粒を含む。色調は外面が2.5YR 7/2～7.5Y 7/1 灰黄～灰白色、内面は7.5Y 7/1 灰白色である。

（5）まとめ

本トレンチでは、4面で奈良時代と考えられる掘立柱建物3棟と柵列を検出した。その北側には、東西方向の溝を3条と、東側には飛鳥時代前半～奈良時代にかけて徐々に埋没していったと考えられる溝を検出している。面的には検出できなかったが、この溝はその後、掘立柱建物が廃絶し、大きな窪みになった段階の平安時代に、耕作地として利用し始め、現在にいたるという経過を考えることができた。

なお、既往の調査成果を踏まえた、建物の変遷については考察を参照していただきたい。

3. 12B トレンチ

(1) 概要 (図34)

12B トレンチは、中位段丘縁辺の細長い耕地区画と、そこから東に落ちる段丘崖斜面に設定された。南半はかなり削平を受けているようで、現耕土直下に風化礫を含んだ中位段丘構成層の5層が直接見えている状態であった。

北半には、(その1)の調査でも検出されていた小規模な開析谷が埋没している。

谷は、肩部が大きく広がり、全て自然の斜面堆積で埋没している谷2と、それを切って形成され、下層は水成堆積層(図11西壁断面の17・18)で埋没し、上層はブロック土など人為的な層(同前の14~16)で埋没している谷1に分けられる。ほぼ重複しているが、どちらも東南東に開口する。

谷の周辺の段丘崖斜面には、中位段丘層起源の多量の礫と土器の小片を含んだ3層相当層が斜面堆積している。それは上下2層に分かれ、下層のほうが有機分が多く、上層のほうが礫が多い、二次堆積による地層の逆転が見られる。

その上に、いくつかの整地層や耕土が見られ、最終的には谷上面も含め、平坦化される。また、段丘崖斜面には一部、貼り土も見られる。

遺構としては、南半には現耕土床面の段差などしかないが、北半では、谷内斜面に走る何本かの溝の他、平坦な部分に各時期の溝やピットが見られる。

このトレンチでは、中位段丘崖の堆積状況が把握できた他、(その1)の調査で確認された、古墳時代後期から水場として利用され、奈良時代には木組みの井戸が設置された、谷の形状と埋没過程が明らかになった。さらにその谷が埋没後、耕地として造成されていく姿も確かめられた。

なお、この谷の最奥部と見られる地点には今も幅、長さとも4~5mの小さな溜め池があり、湧水地点である事を暗示している。

(2) 包含層遺物 (図33)

図33の1・2は段丘崖法面に人為的に貼られた土から出土した。3~6は北端部に遺存していた1層と、それに相当する、谷上面の旧耕土から出土した。7は側溝掘削中に出土したが、状況から見て3層相当層に包含されていた可能性が強い。

1は土師質の平瓦片である。下面は縄目のタタキが端部まで入る。上面は布目、端部よりやや内側に布の端部か紐状の痕跡がある。そこから端部までと端部面は欠損激しく調整不明。

2は伊賀焼きの摺り鉢片である。7.5YR 7/6~6/4を呈する。全体に回転ナデ後内面に摺り目。

3は堺摺り鉢片である。10YR 6/4~7.5YR 5/4を呈する。全体に回転ナデ後内面に摺り目。

4・5は土師質の泥面子片である。成型は型押しによる。どちらも直径3cm強に復元できる。表面に沈線による絵があるようだが図柄は分からない。

6は銅製の煙管吸い口である。内部に篠竹らしき木質が遺存する。太い部分に14条の沈線を巡らす。全体に銹化進むが鍍金などは認められない。

7は土師器壱片である(図版20-3)。一個体の30%ほどが出土している。5YR 6/6~4YR 6/6を呈し、砂粒は石英・長石の他、赤色粒・クサリ礫を若干含む。器表剥落のため調整不明だが、頸部外面にヨコユビナデ、胴部内面にヨコナデの痕跡が残る。あまり時期を限定できる要素はないが、幅広く横断面が扁平な把手や、内面がナデで仕上げられている事などから、奈良時代のものと思われる。

上記のものに加え、図化不能の小片も概観して包含層の時期について考えておきたい。

1層は、古墳時代後期～奈良時代の須恵器、土師器の破片も出土しているが、土師器の焙烙や染め付けも出土しており、ほぼ江戸時代に耕作されていた耕土と思われる。

2層は残存していた部分が非常に限られるが、染め付けなど近世の遺物が見られず、最新の遺物としては瓦器碗の小片1点があるのみなので、中世頃の耕土としておきたい。

3層相当層は土器はさほど多くなく、ほとんどは古墳時代後期から奈良時代の須恵器、土師器で、奈良時代のもは宝珠つまみの須恵器坏蓋片と土師器坏片などが見られる。しかし、1片のみであるが、瓦質こね鉢片が見られる。これは3層相当層でも上層から出土しているもので、13B・15Bトレンチなど、中位段丘上面の緩斜面に堆積した3層相当層の時期よりも新しい遺物である。このトレンチの段丘崖斜面堆積3層相当層の上層に関しては、案外新しい堆積なのかもしれない。

(3) 2～4面

谷1 (図33・35・36)

幅10m前後、深さ2mほどで、東南東に開口する中位段丘開析谷である。谷2が深さの半分以上埋没した後、そこを再び下刻して形成された。(その1)の調査で谷352としているものより新しい。

(その1)の谷352内井戸462の底と底部のレベルがほぼ同じなので、湧水があったと思われる。

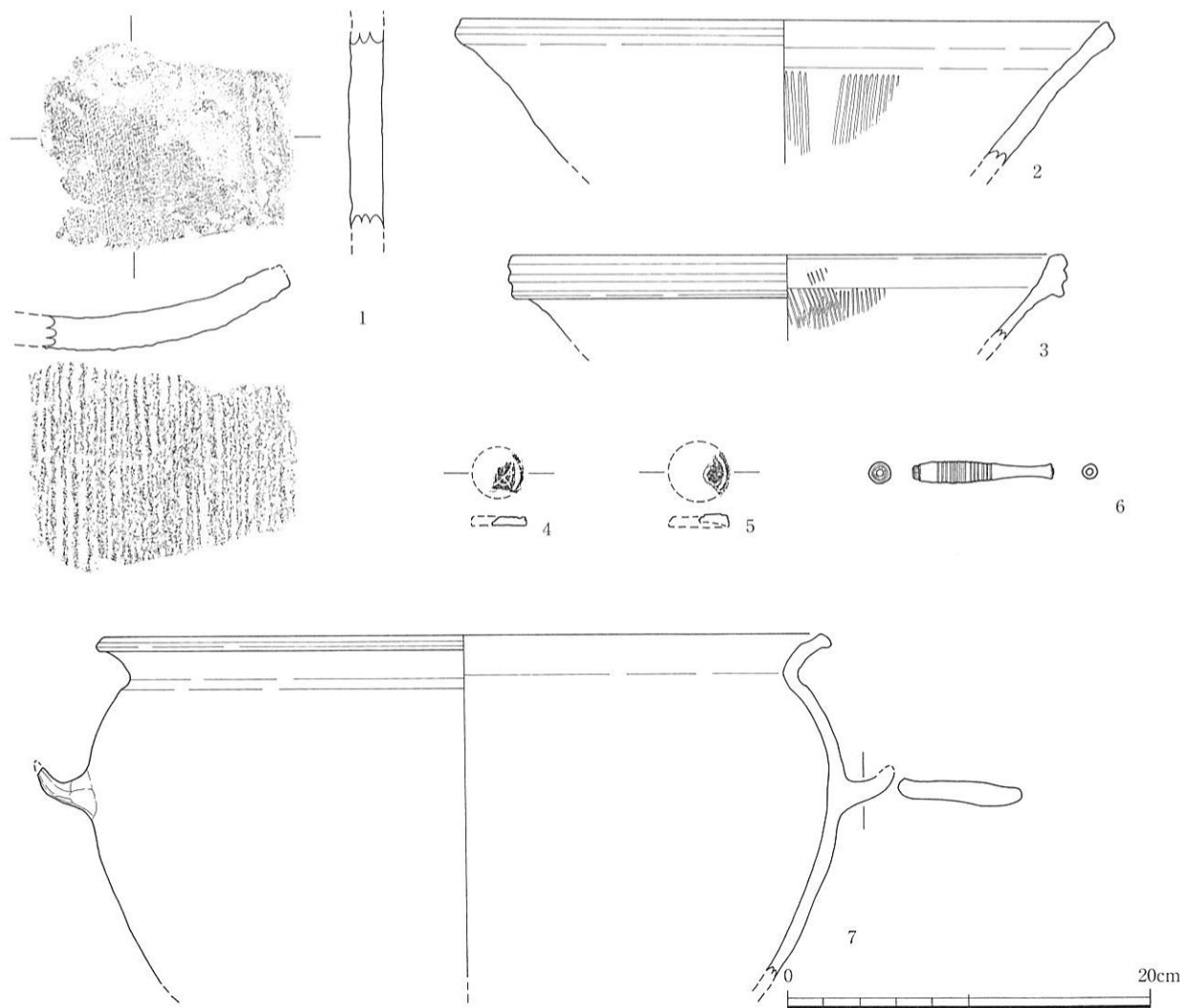
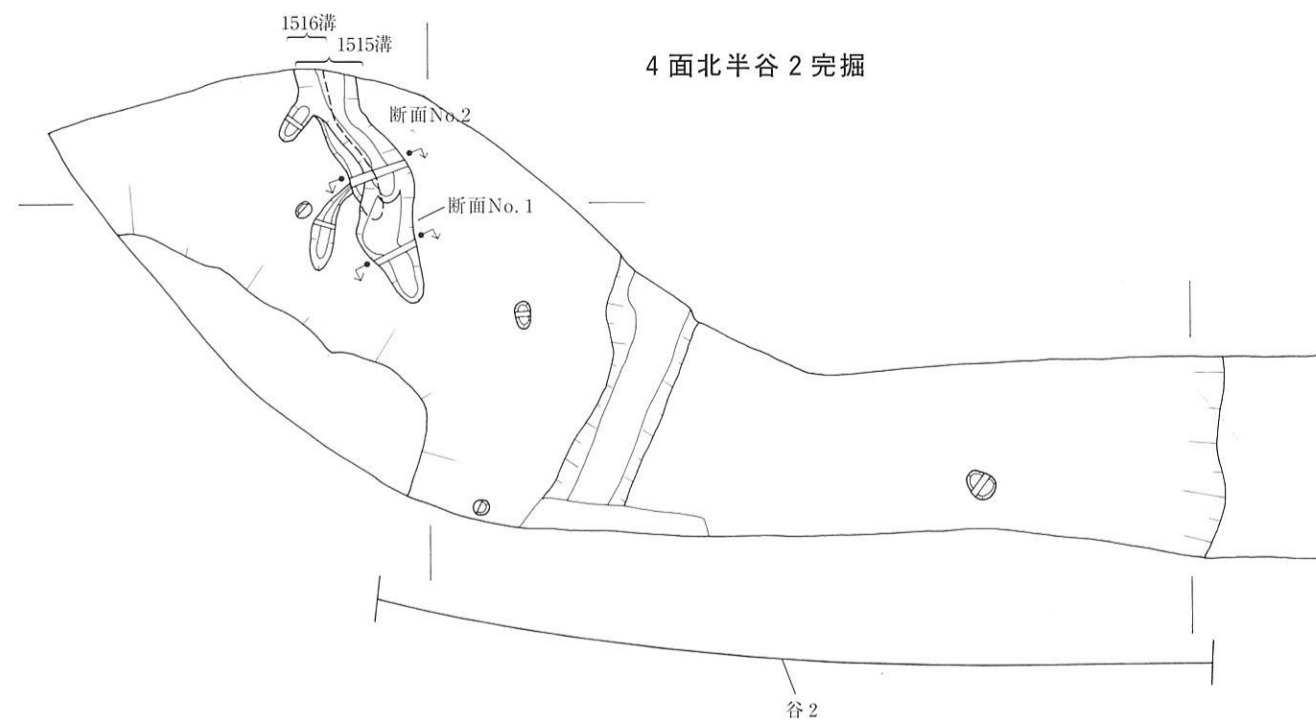
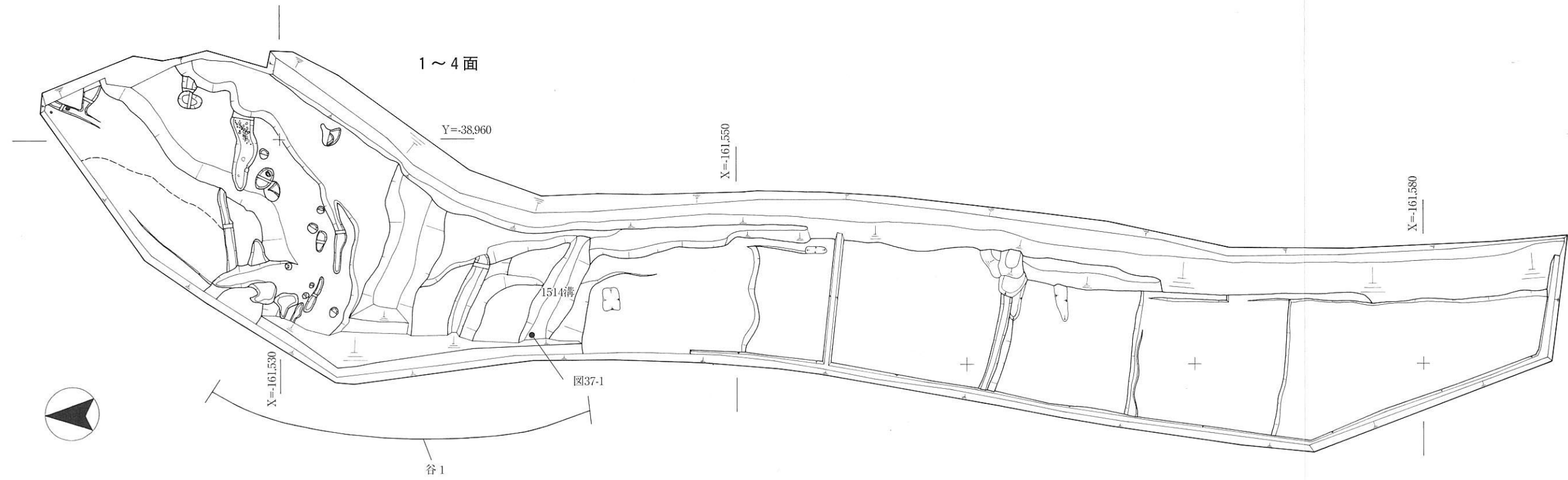
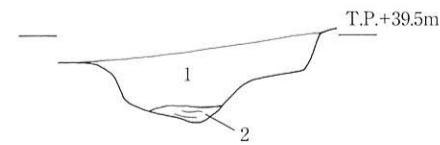


図33 12Btr.包含層出土遺物 (1・2:南東法面盛土、3~6:1層、7:北東端側溝) (S=1/4)

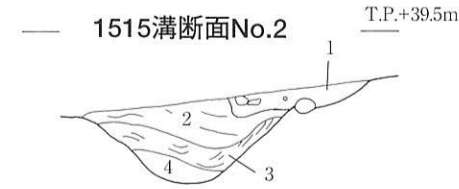


1515溝断面No.1



断面No.1土色・土質
 1、2.5Y4/1 砂質土、中砂〜シルト主体、粗砂〜中礫非常に多し、大礫・Fe若干あり
 2、2.5Y4/1 ~2.5Y6/6 中砂〜シルト、ラミナあり、Feまだらにあり中〜大礫若干あり

1515溝断面No.2



断面No.2土色・土質
 1、10YR5/1 砂質土、細砂〜シルト主体、粗砂〜大礫あり、1516溝埋土
 2、2.5Y5/2 ~5/1 砂質土、細砂〜シルト主体、粗砂〜小礫あり、ラミナあり、Fe・Mn若干あり
 3、5Y4/1 粗砂〜シルト、ラミナあり
 4、5Y4/1 粗砂〜粘土、大〜小礫あり、混濁流的堆積

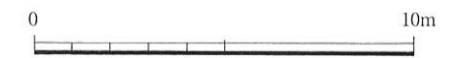


図34 12Btr.1~4面・4面北半谷2完掘 (S=1/200) 及び1515溝断面 (S=1/200)

埋土最下層は礫混じりの粗砂層でラミナがない。土砂流的堆積と思われる(図11西壁断面の18)。その上には湿地的なオリブ黒色を呈する粘質土が堆積する。遺物の取り上げに関してはこの2層を下層とし、これより上を上層とした。

上層埋土はほとんど人為的埋土と思われる。まずブロック土が50cmほどの厚さで入る(図11西壁断面の16)。これは下の粘質土層との層境が凹凸激しくかみ合っている所からも、軟弱な土の上に入れられた埋め立て土と思われる。同層は谷の南側斜面にも厚く盛られ、その部分は南の肩部分と平坦化する。

この時点で、谷内は南側で段丘平坦面と一体化している所と、北寄りの流芯付近でそこから一段落ちた平坦地、と二段になり、下段には、層厚10cmほどの、攪拌をうけたと思われる粘質土層が残存している。それはおそらく耕土と思われ、谷の埋め立てが耕地の造成に伴うものであった事を示していると考えられる。

この面で南北の段差に沿って、その肩部と裾部に溝が掘られる。谷斜面の堆積が複雑で、平面的には谷完掘時点で残存した形を確認するにとどまったが、断面からは計7本の溝の存在が知られる。

これらの溝は(その1)の調査でも谷の西側肩部に6本、北東肩部に1本、残りの悪いものでも平面的な肩部の凹凸程度には痕跡を留めている。

おそらく、段の上の溝は段丘崖際の耕地区画への給水と段丘崖下への導水、段の下の溝は下段の耕地区画の給排水と、段丘崖下への導水の機能を持った水路と考えられる。

その後、再び埋め立てられ完全に平坦化する。そして1層の成立時点で、現在調査区の西を通る水路の大畦畔が上を通るようになる。

出土遺物は(図36)基本的に中位段丘上から流れ込んだもので、細片が多い。

図36-1(図版20-5)は須恵器短頸壺(平城宮壺A)である。外側は回転ナデ後ミガキ。内面は上半の回転ナデ後、下半に左傾タテナデが二段に入る。上段は左が右を切り、底部のものは右が左を切る。

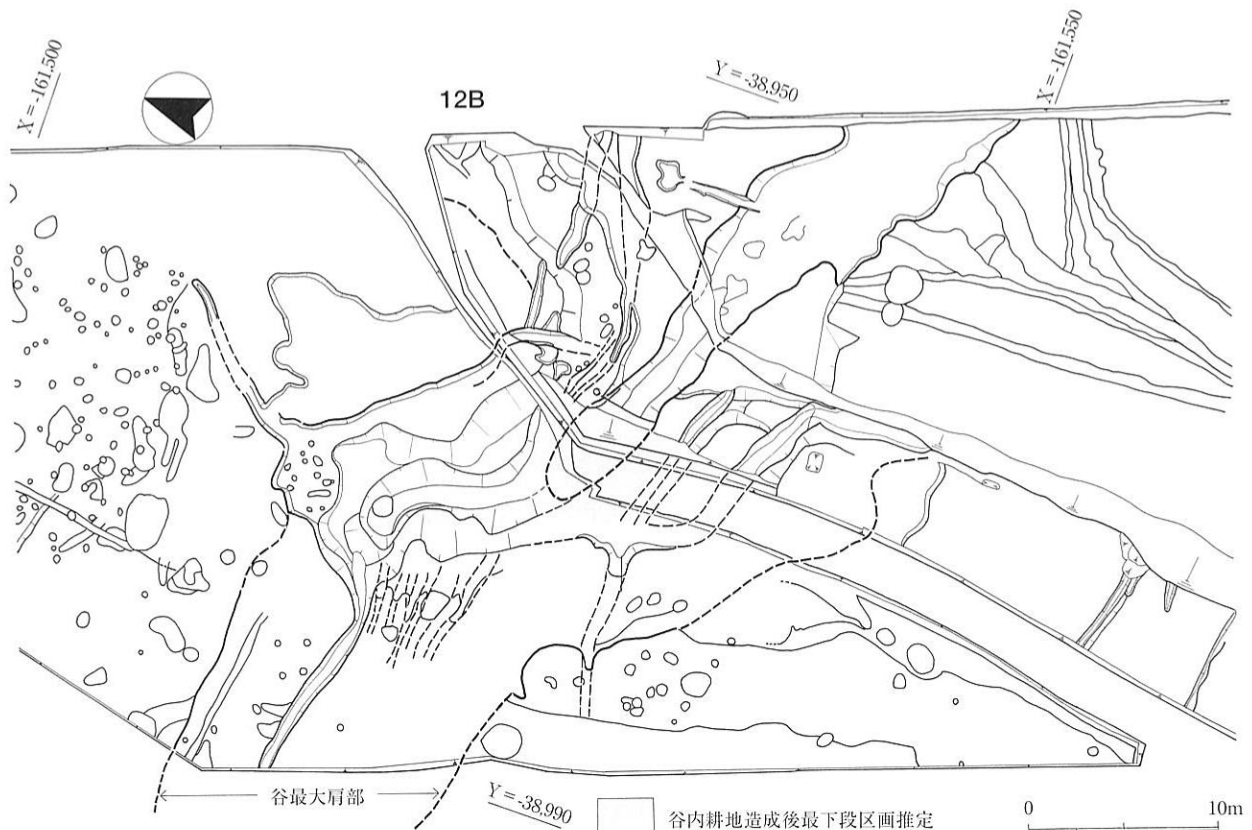


図35 谷全体及び谷内遺構推定復元図 (S=1/400)

奈良時代を通じてあるが、肩部の張りが弱く、外面の回転ナデを消す傾向は平城宮Ⅲ～Ⅴ型式ぐらいか。

図36-2も須恵器短頸壺片である。胎土に砂粒は少なく、石英、長石の他に微小な黒色粒がある。内面と外面上半に回転ナデ、外面下半はその後、やや左下がりのヨコナデを粗く入れる。その上に刷毛の端部のような工具のアタリが数条認められる。無蓋広口短頸壺のバリエーションの一つで、陶邑編年のⅣ-2～4に類例があるが、平城京城には少ないようである。その中でも器壁が薄く、ミズビキの痕跡をあまり残さない事を古相と見れば平城宮Ⅲ型式に併行するぐらいか。

図36-3は須恵器甕片である。全体に回転ナデだが、頸部内面にはその前のヘラケズリの痕か。外面肩部にはカキ目があった可能性高い。胎土には石英・長石の他、わずかにチャートの砂粒あり。このタイプの口縁端部で、口縁が長く、無文のものは大体奈良時代に限定されると思われる。

図36-4も須恵器甕片（平城宮甕D）である。回転ナデで、口縁外面はその前にヨコハケ、頸部には緩い沈線。この口縁の甕は平城宮Ⅱ型式からⅤ型式まであり、その中では時期を限定できない。

図36-5は土師器甕片である。胴部外面のタテハケを頸部のやや下まで達するヨコナデが消す。口縁は内外面ともヨコナデ、胴部内面は調整不明瞭だが、頸部下半はケズりらしき痕跡、それより下はハケか。色調は5YR7/4を呈し、石英と赤色粒を含む。微細粒で長石・雲母もある。時期は限定しがたい。

図36-6は土師質の埴輪片である。ハケ目は粗く、刻み目を入れた板状の工具によって入れたものと思われる。タガはハケの後に付け、タガの位置の内面にはハケを切るユビオサエが残る。胎土は石英・長石・クサリ礫を含み、微細粒には角閃石も含まれる。口径を復元するには破片が小さく、また、歪んでいるが、かなり大きな円筒埴輪のようで、いわゆる日置荘型埴輪と思われる。

図36-7は土師器碗片（平城宮碗C）である。色調は7.5YR7/4を呈し、胎土は精製だが、赤色粒を若干含む。外面下半にユビオサエが顕著に入るのは平城宮Ⅴ型式からのようで、平安京Ⅰ期古～中型式でなくなり、9世紀には見られない。

図36-8は須恵器杯（平城宮杯A-Ⅲ）である。胎土に石英の他、長石・黒色粒をわずかに含む。内面に「X」字状の火襷が見られる。平城宮Ⅴ型式から平安京Ⅱ期中型式までのものである。

図36-9（図版20-4）は須恵器圈脚円面硯片である。胎土に石英・黒色粒若干と長石をわずかに含む。45°ほどの角度で残る二つの透かしは上下長がかなり違うので、長方形と十字形の組み合わせと想定した。時期を限定する要素を欠くが、脚端部の屈曲が強く、接地部分が不明瞭な形態と、長方形と十字形の透かしの組み合わせは、各々、興福寺一乗院で奈良時代末～平安時代初の類例がある。

図36-10はいぶし瓦の丸瓦片である。上面は縄目がナデで半消しになっている。下面は布目の上にハケが入る。端部はケズリ。

図36-11は須恵質平瓦片である。上面に布目、下面に縄目、布目には剥がす際のスレ痕が残る。縄目には直交する沈線1本と焼成以前の磨滅が残る。端部はケズリ。

図36-12～14（図版24-2）は（その1）の調査でも出土した、須恵質円筒状の井戸枠の破片と思われるものである。その上下、どちらかの端部と思われる。基本的に内面は同心円文タタキ、端部外側に平行タタキを斜めに入れた後、突帯を貼り、その接合部をナデた後、縦方向に揃えた平行タタキを入れる。内面には弱いナデがタタキの上に入る。長石・石英の他、わずかにクサリ礫を含む胎土で、同一個体の可能性もある。

図化できた遺物も含め、谷1内の遺物は平城宮Ⅲ型式から平安京Ⅱ期中型式までのものが多く、特に8世紀後半のものが目立つが、古いものでは古墳時代後期の土器も見られ、特に須恵器の杯などは、細

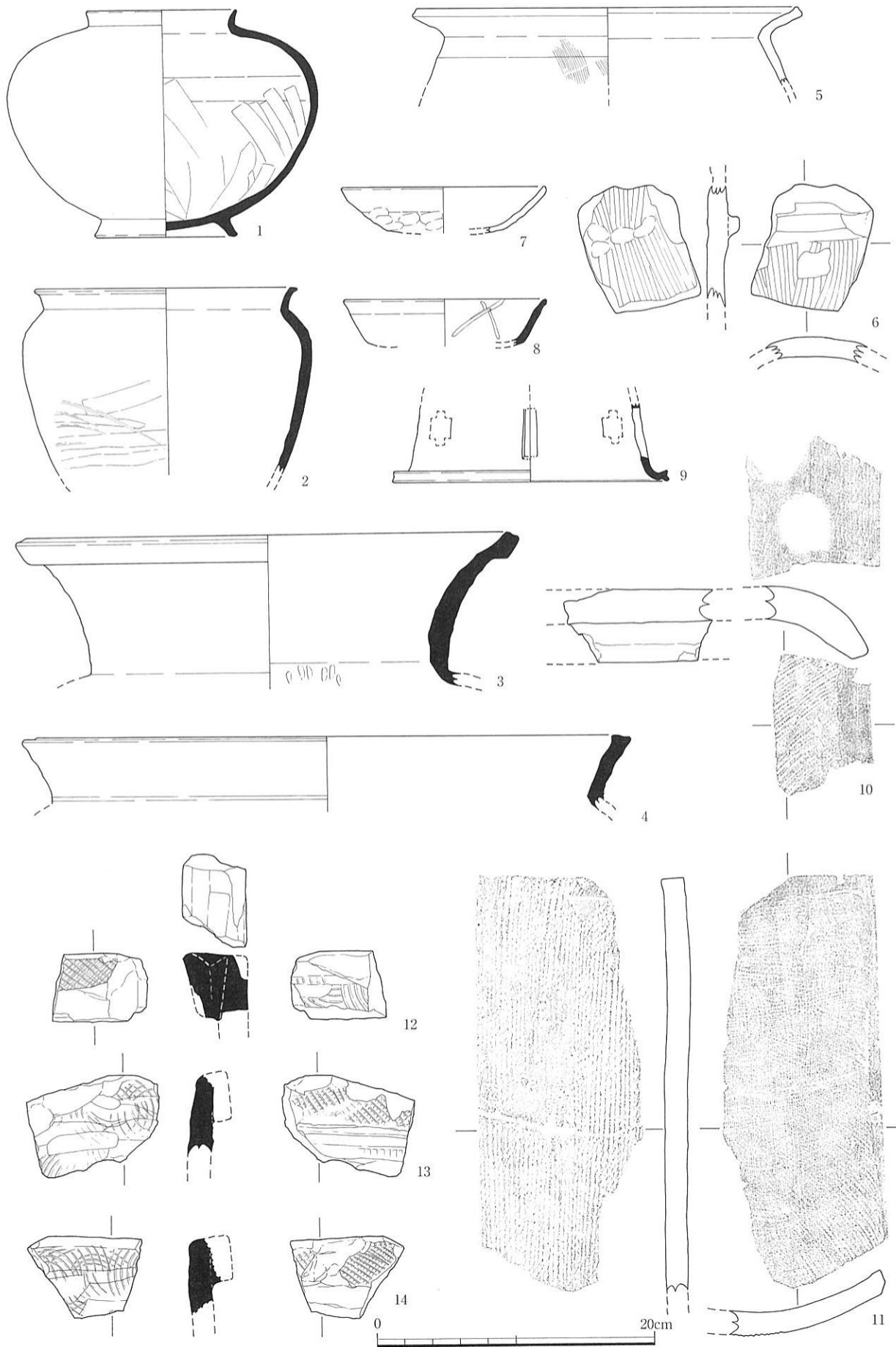


图36 12Btr.谷1出土遺物 (1~13:上層、14:下層) (S=1/4)

片だが、破片数では奈良時代の杯と同じくらいの数は出土している。その後、飛鳥時代から平城宮Ⅰ～Ⅱ型式にあたる時期は、その時期にあっても良い遺物はあるが、積極的に限定できる遺物はない。新しい時期のものは、非常に微量ながら、下層においても瓦器碗片が見られ、上層には東播系摺り鉢片も見られる。

この事から谷1の埋没と耕地化は中世以降の事と考えられ、形成時期は（その1）の調査の谷352の最下層より後、おそらく、その谷内にあった井戸462の埋没時期である平城宮Ⅳ型式以降の時期（8世紀後半以降）と思われる。

谷2（図34・37） 谷1に先行する谷で、南側の肩が谷1より広く、えぐれかたも強い。深さはあまり変わらないようである。主に中位段丘上4層の二次堆積で埋没し、遺物の出土した埋土は最終段階の土砂流的堆積（図11西壁断面の19）のみである。（その1）の調査の谷352に対応するものと考えられる。

出土遺物で図化できたのは図37-2のみである。これも須恵質の井戸枠と思われるが、谷1のものとは形態が異なる。反対側の端部か。

他の遺物としては古墳時代後期の須恵器が多いが、奈良時代のものも含まれ、1点のみ、糸切り底の須恵器花瓶の細片があるので、半分の深さまで埋没したのは平安時代に入ってからのものであると思われる。

その他、弥生土器壺底部の破片があるのが注目される。

1514溝（図34・37） 谷1の南側斜面に、谷の方向に平行して走る溝の一つで、谷を埋めて耕地を造成した最初の段階に、その上段の肩部に掘られた溝である。

本来は深さ約60cm、幅2mほどあったと思われる。真っ直ぐ南東に伸び、段丘崖に抜ける。

出土遺物は須恵器甕片と土師器高杯脚部片（図37-1）とがある。須恵器甕片は外面平行タタキ、内面は同心円文タタキで擦り消しはない。高杯脚部片は磨滅激しいが、精製胎土で若干の赤色粒が見られる。上半は中実で下半の内面にはシボリ痕、身部との接合は差し込み型である。この型式の脚部は奈良時代にはほとんどなく、飛鳥時代以前のものかと思われる。但し、2点ともこの溝の時期を直接示すものではないと思われる。

1515溝（図34） 谷1・2より北側で、段丘崖下側で検出した溝である。谷2を完掘した時点で検出したが、面的には段丘上の2～3面に対応する遺構と思われる。近世の1層系の埋土を持つ1516溝とほぼ重複する。段丘崖直下から北東に伸びていく溝で、本来は段丘上の溝から落ちてきた水を受けて導水していくものだったと思われ、同じような導水形態はトレンチ北側に現在も残る。

遺物は須恵器・土師器の小片が若干出土しただけだが、これを切る1516溝に瓦器片や燻し瓦片があり、この溝もおそらく近世ぐらいのものであろう。

その他の遺構（図34） 主に谷より北側や谷内に溝やピットが散在するが、谷1を完掘した時点での2～4面相当の遺構は瓦器の小片の入るものが見られ、溝類は耕作関連の導水路と思われるものばかりである。一応、ピットも含めて、谷内に耕地が造成された以降、古くとも中世以降の遺構と見て大過ないものと思われる。

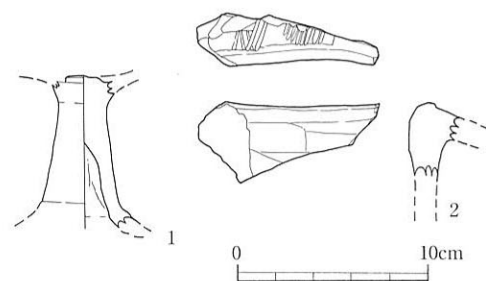


図37 12Btr.出土遺物（1：1514溝、2：谷2）（S=1/4）

4. 13B トレンチ

(1) 概要

13B トレンチは、中位段丘上から東の段丘崖へ向かって緩やかに下る斜面部分に、設定されたトレンチである。斜面地に位置しているため、トレンチ西側の高い部分は、耕作による削平を強く受けている。

そのため、現耕作土及び旧耕作土を重機によって除去すると、段丘構成層上部と思われる5層が露出する。

これに対して、5層が下がってゆくトレンチ東側においては3層相当層と、その上部に見られる整地土と考えられる層が、削平を免れて残存していた。

遺構検出は、3層相当層の上面で行い、次いでトレンチ全面を4層上面まで下げた面で行った。

(2) 1・2層相当層出土遺物

1・2層相当層からは、染め付けの破片、近世の平瓦片、瓦器片の他、須恵器甕、杯身・杯蓋、高杯、高台付き杯の破片や、土師器甕、杯の破片などが出土している。出土量から見ると6世紀代の遺物が多いが、後世の耕作に伴う造成などで混入したものであろう。1・2層相当層の時期は近世以降と考えられる。

出土遺物の中から図化したものに、須恵器甕の溶着資料がある(図38-1)。これは、甕肩部片に、杯蓋の天井部片が熔着し、さらにその上に杯(杯身か杯蓋かは不明)の口縁部の痕跡が見られる。

(3) 3層相当層面(図40)

3層相当層上面で検出した主な遺構に、掘立柱建物3棟(建物Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)、柵列Ⅰがある。建物Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの柱筋は揃っておらず、建てられた時期が異なっている可能性が考えられる。

またその際、建物ⅠとⅡは近接しているため、同時存在は考えられないであろう。柵列Ⅰは、建物Ⅱの柱筋と揃えており、この建物に伴う柵列であろう。

この他、小穴を十数基検出したが、建物としてまとまるものはなかった。

建物Ⅰ(図39) 建物Ⅰはトレンチ北側で検出した、総柱の掘立柱建物である。柱筋は座標北から西へ約12度振れている。規模は東西2間の約3m、南北2間の約3mである。南北、東西方向とも柱間は約1.5m等間である。

柱穴は、いずれもほぼ隅丸方形に近い。柱痕跡が見られる柱穴は6基、あと2基には柱の抜き取りが見られる。

掘方の埋土は、おおむね黄褐色系の砂質土、細砂～シルト主体で粗砂や小礫を若干含む。抜き取り痕跡の埋土は、オリーブ褐色砂質土、細砂～シルト主体で粗砂を若干含んでいる。

柱穴からは、古墳時代中～後期の須恵器・土師器の小片が多く出土しているが、建物の時期決定は難しく、周辺の遺構の時期と考え合わせ、飛鳥時代以降と考えたい。この他、柱穴からスサ入りの焼土塊

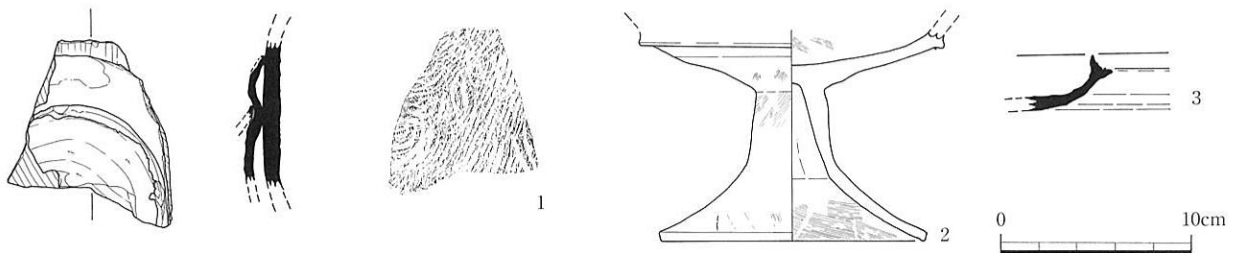


図38 13B tr.出土遺物(1:東側斜面 1・2層相当、2:3層相当、3:1339柱穴(建物Ⅲ))(S=1/4)

が1点出土している。

建物Ⅱ (図41) 建物Ⅱは、トレンチほぼ中央で検出した南北棟で東西両側に庇が付く。柱筋は座標北から西へ約12度振れている。

東西は4間(約6.3m)、南北は3間(約4.5m)である。身舎の桁行(東西)方向の柱間はほぼ1.8mの等間で、梁間(南北)方向の柱間はほぼ1.5mの等間である。西側の庇の出は1.2m、東側の庇の出は1.5mと、西側に比べやや長い。また、東側庇の柱穴は、身舎や西側庇の柱筋と揃っておらず、庇を構成する柱穴が1基検出されていない。このため、建物Ⅱは西庇付南北棟の可能性も考えられる。

柱穴は、いずれもほぼ隅丸方形に近い。柱痕跡が見られる柱穴は6基、あと2基には柱の抜き取りが見られる。

堀方の埋土は、建物Ⅰと同じ黄褐色系の砂質土、細砂～シルト主体で粗砂や小礫を若干含むである。

柱痕跡が見られるもの、抜き取り痕が見られるもの混在している。

柱穴からは、5世紀後半～6世紀後半の須恵器・土師器片の出土が多く見られるが、建物Ⅱの時期の特定は難しい。

建物Ⅲ (図42) 建物Ⅲは、調査区南端部で検出した総柱の掘立柱建物である。座標北から西へ約12度振れる。

規模は東西2間の約3.5～4.0m、南北2間の約3.5～4.0mとばらつきが見られる。当然南北、東西方向とも柱間でも約1.5～2.0mとばらつきが見られる。

特に中央の柱穴が大きく南へずれているため、柱筋は南北方向にきれいに通る。このことから、建物Ⅲは、南北棟の掘立柱建物であろう。

柱穴は、いずれもほぼ隅丸方形に近い。いずれの柱穴にも、柱痕跡が見られる。また、堀方の埋土は、建物Ⅰ・Ⅱと同じ黄褐色系の砂質土、細砂～シルト主体で粗砂や小礫を若干含むである。

1339(柱穴)からは、6世紀中頃の須恵器杯身(図38-3)が出土している他、須恵器・土師器片が数点出土したのみで、建物の時期は難しいが、これまでの調査成果を考え合わせ、飛鳥時代以降と考えたい。

柵列Ⅰ 柵列Ⅰは、建物Ⅰの東側で4間分を検出している。柱間は北から3間が2m前後、4間目は3mと長くなっている。また、検出した一番北端の柱穴は、東へずれている。これらの点から、おおむ

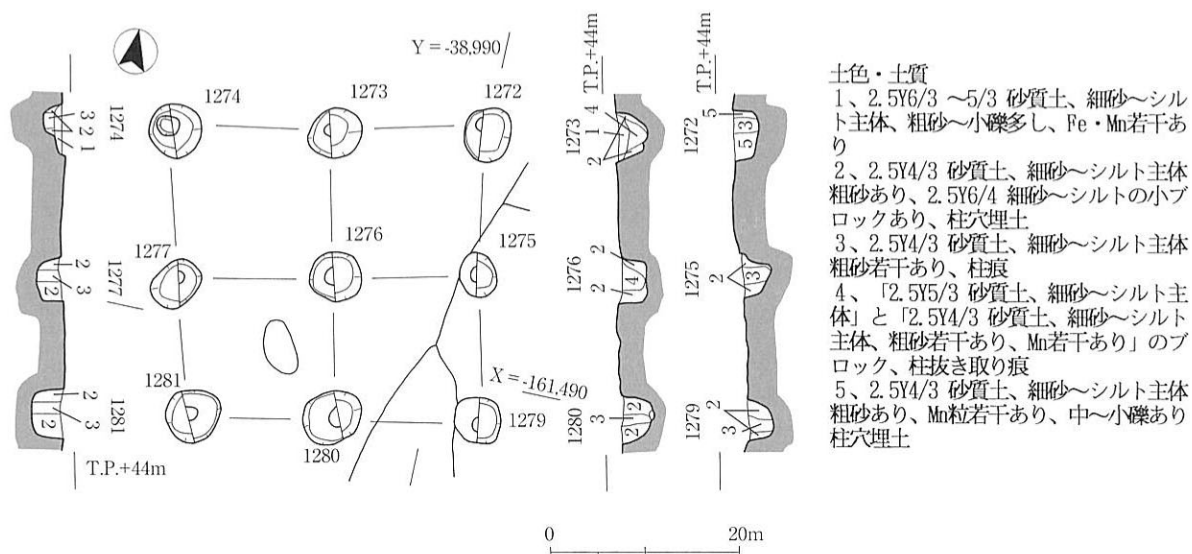


図39 13Btr.3面相当面建物Ⅰ (S=1/80)

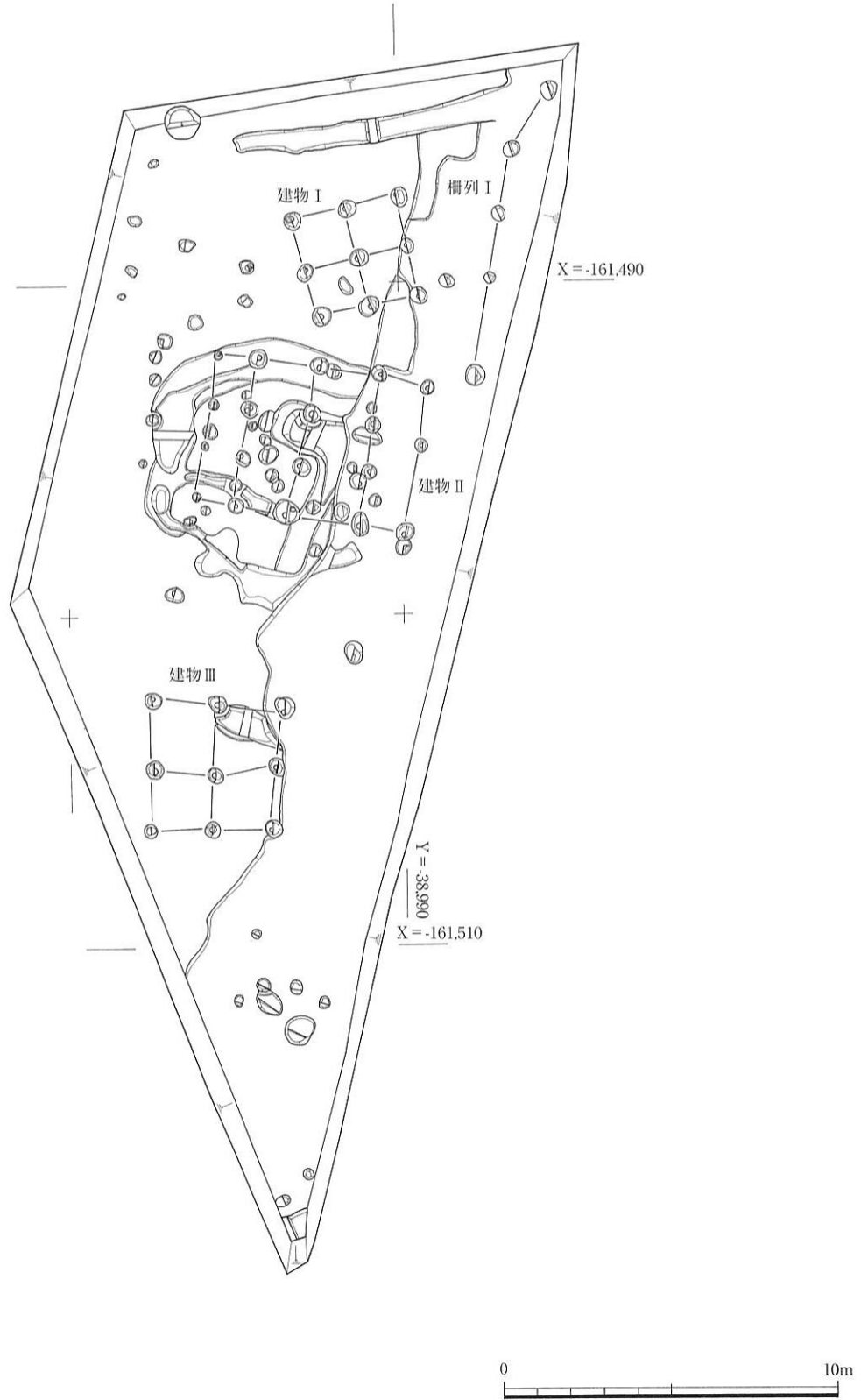
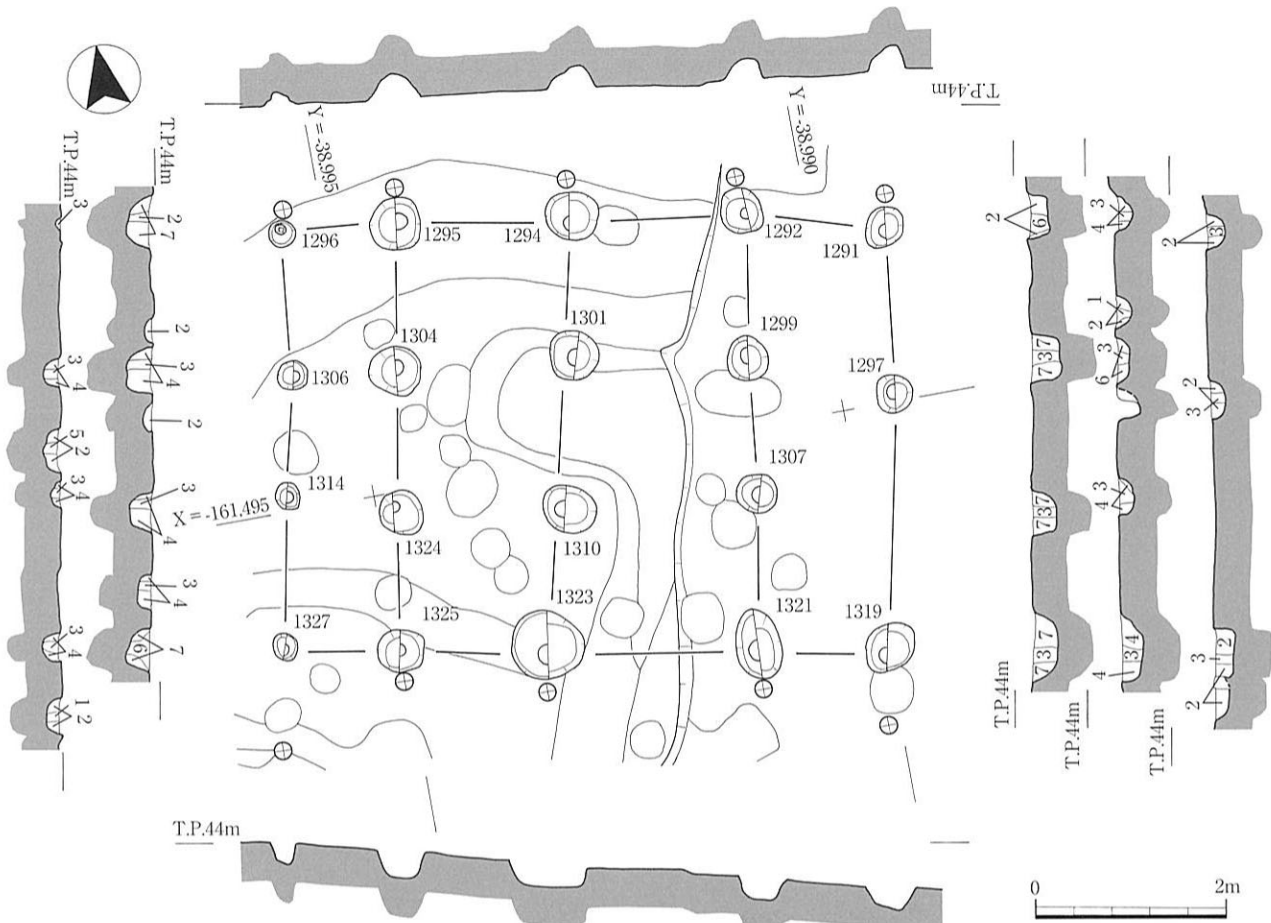


图40 13Btr.3面相当面 (S=1/200)

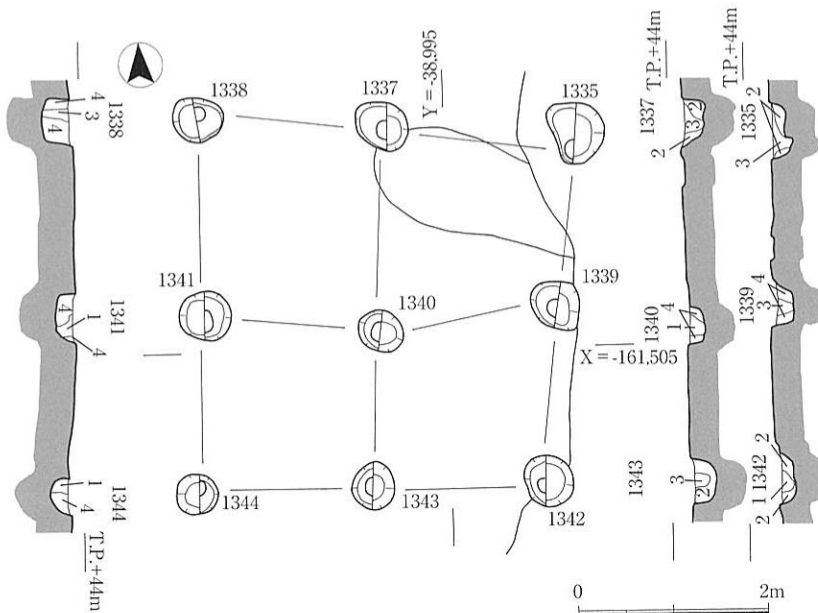


土色・土質

- 1、10YR4/4 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂わずかにあり、Feあり、柱痕
- 2、10YR5/4 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、小～中礫若干あり、Feあり、Mn若干あり、埋土
- 3、10YR3/4 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂わずかにあり、Fe・Mnあり、柱痕

- 4、「2.5Y5/6 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Feあり」のブロック、2、間にあり、埋土
- 5、2と3のブロックと小礫、抜き取り痕?
- 6、2.5Y4/3 砂質土、シルト～細砂主体、上部粗砂～小礫あり、抜き取り痕
- 7、「10YR4/3 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂わずかにあり、Fe・Mnあり」と「2.5Y5/4 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、Feあり」のブロックと中～小礫わずかにあり、埋土

図41 13Br.3面相当面建物Ⅱ (S=1/80)



- 1、10YR4/3 砂質土、細砂～シルト主体粗砂多し、小礫若干あり、Mnあり、柱穴抜き取り痕
- 2、10YR4/4 砂質土、細砂～シルト主体粗砂若干あり、中～小礫Mn・Feあり、柱穴埋土
- 3、10YR4/4 砂質土、細砂～シルト主体粗砂若干あり、中～小礫上部に若干ありMn粒あり、Fe・Mnあり、柱痕
- 4、2内に「10YR5/6 粘質土、シルト～細砂主体、Fe多し」の小ブロック若干あり、柱穴埋土

図42 13Br.3面相当面建物Ⅲ (S=1/80)

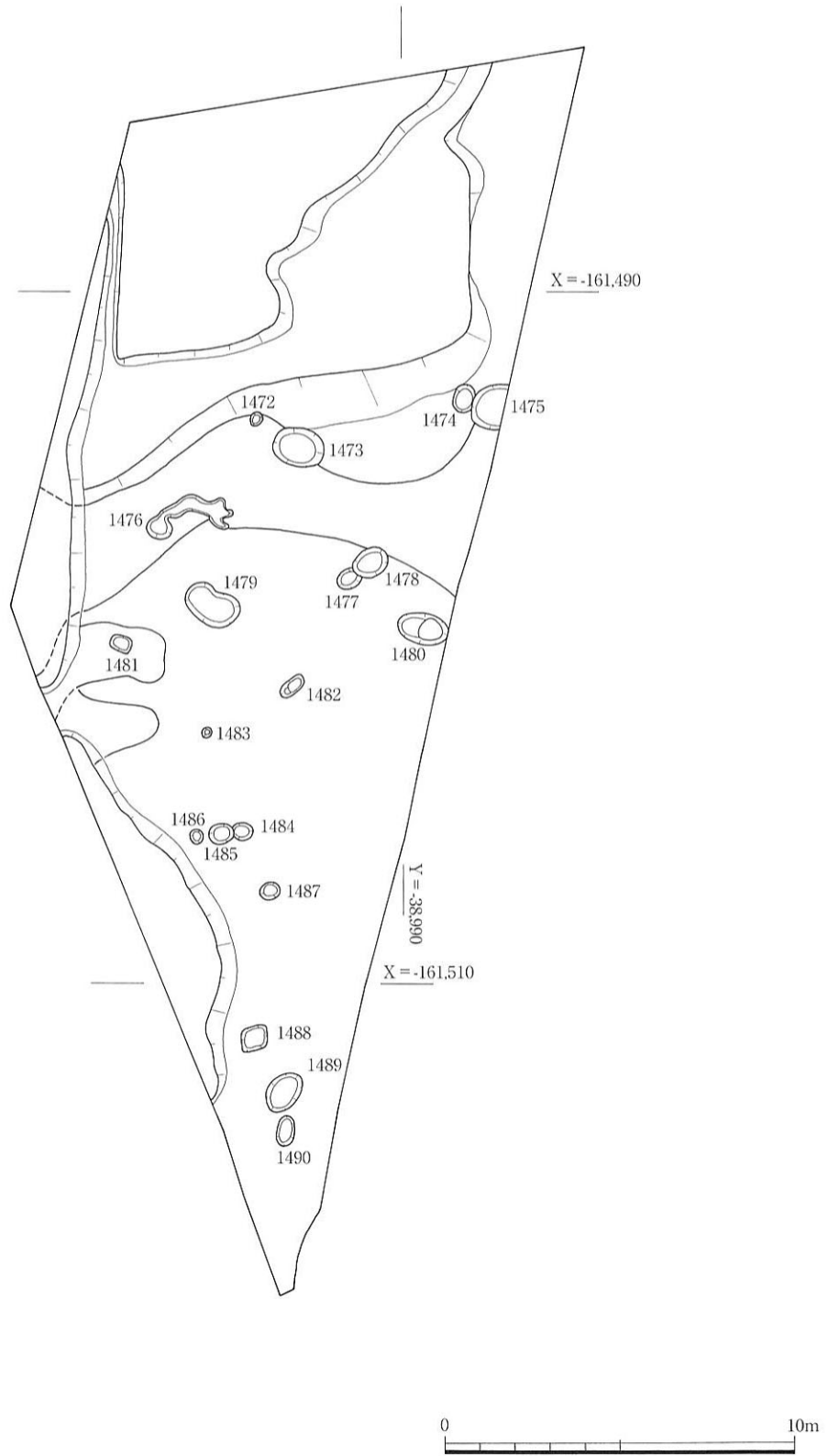


图43 13Btr.4面 (S=1/200)

ね柱筋は建物Ⅱと揃うが、柵列Ⅰとした一連の柱穴は、隣接する既往の調査区との関連で考える必要があるかもしれない。

(4) 第4面

この面では、土坑・小穴の他、自然微地形を検出するにとどまった。

地形は大きく、西から東へ傾斜しており、調査区東端部でさらに東へ落ち込んでいる。また、大きく北東から南西へ延びる最大0.35mの深さがある窪みを検出した。

検出した遺構の多くからは、遺物が出土していないが、1480土坑から器種・時期不明の土師器小片とサヌカイトの剥片が各1点出土している。

この他、この面を検出する際の3層相当中から庄内期の高杯が1点出土している(図38-2)。この高杯は、杯部に段を有しているが、そこから上部は欠損している。脚部外面から底部外面にかけては、ハケ目後ナデを施している。底部内面はハケ目、脚部内面にはヘラ削りが見られる。残存高は、11.1cmである。

(5) 小結

本トレンチでは、前述したように西から東への斜面地に位置しているため、耕作による削平を強く受け、検出した建物Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、柵列Ⅰを構成する柱穴の深さは30cm前後であった。

建物や柵列の、時期の決定は難しいが、おおむね飛鳥時代以降に属すると考えられた。

その内、建物Ⅱ・柵列Ⅰは同時期存在を考えることができるが、これも柵列Ⅰで述べたように断定できないところである。なお、1つだけ確実な点は、建物ⅠとⅡは柱筋が揃っておらず、建物間の距離が近すぎるなどから、同時存在は考えられないことである。

また、第3層相当中から庄内期の高杯が出土していることから、既往の調査や今回の調査で検出することができなかった庄内期に属する遺構が周辺に存在する可能性を考えることができよう。

5. 14B トレンチ

(1) 概要

当トレンチは中位段丘が平坦面から緩やかに東南東方向へ傾斜し始める位置にある。1～3層はほとんど残存しておらず、現代の耕土を重機で除去したのち、人力で遺構検出作業を行った(4面)。当トレンチを含めたB地区では竪穴式住居や掘立柱建物やカマド等、住居の痕跡が多数確認できるが、段丘上という削平を受け易い場所であるため大半の遺構は残存状況が良好とは言い難い。さらに遺構から出土した遺物はほとんどが細片、少量であったため時期を特定しにくいものが多い。しかし遺構検出面直上の耕土から出土した遺物をみると、奈良・平安時代や中近世の遺物片も少量含まれるものの大半が古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器・土師器であることから、遺構の形成時期もこの頃が中心であったと考えられる。

(2) 4面(図45)

排土の仮置き空間を確保するため、14Bトレンチはまず東半分を調査し、反転して西半分の調査に着手した。遺構検出面である4面は、後世の耕作等によって削平され平坦化していたが、周囲の地形や遺構の残存状況から見ると本来は緩やかに南東方向へ傾斜する地形であったと思われる。今回の調査では、掘立柱建物が(その1)調査時に検出された1棟の続きを含めて7棟、竪穴式住居2棟、柵列1条、さらにカマド2基などを検出した。

4面直上出土遺物(図44-1・2) 4面精査時にサヌカイト剥片・石器、陶磁器細片、須恵器・土師器細片が出土したが、そのうち図化可能なものは2点のみであった。

1は須恵器坏B蓋で、復元口径は20.9cmである。外面は回転ヘラケズリ後最終的にヨコナデを施し、端部には沈線が1条めぐり。平城宮Ⅰ～Ⅲである。2は須恵器甕である。体部のみ残存する。体部外面下半部はヘラケズリを行い、穿孔は外面から施す。6世紀代のものと考えられる。

1786ピット(図46・44-3) 当トレンチ北側に位置し、直径約55cmの不整円形で、深さ5～7cmである。須恵器甕片1片とともに底から土師器甕1個体が潰れた状態で出土した。

甕(図44-3・図版21-9)は復元口径24.9cm、器高26.0cmをはかる。外面は3～4条/cm単位のタテハケを上下に2段施した後、口縁部と底部近くにヨコナデを施す。内面は横方向の板ナデ、底部付近は右上がり方向のユビナデが確認できる。口縁部内面もヨコナデを施す。底部の孔は穿孔後に端面をユビオサエで整える。残存状態から底部中央に直径約4.0cmの円形孔とその周縁に楕円形孔3つを配していたと復元できる。把手部は平面形が細長い三角形で厚さは1cm前後と薄めである。焼成は良好で、内外断面ともに橙色(7.5YR6/6)、底部は一部黒褐色(2.5Y3/1)を呈し、胎土には2～3mmの石英を少量含む。飛鳥～奈良時代のものであろう。

甕本体はほぼ半分が残存している。体部片が底についていた出土状況からみて、横転した状態で埋没し、その後削平を受け、上半部が欠失してしまったものと考えられる。

1953ピット(図45・44-7) 竪穴式住居Ⅱの東側に位置し、東西約50cm、南北約40cmの不整円形で、深さは約22cmである。柱痕跡は確認していないが形状からみて建物の柱穴であった可能性がある。当遺構からは須恵器坏身片と土師器鉢が出土した。土師器鉢(図44-7)は復元口径18.0cmをはかる。体部外面の下半部には横方向のミガキが残る。口縁部外面は浅い沈線が1条めぐり。内面調整は口縁部がヨコナデ、それ以外はナデである。焼成は良好で、内外面ともににぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。

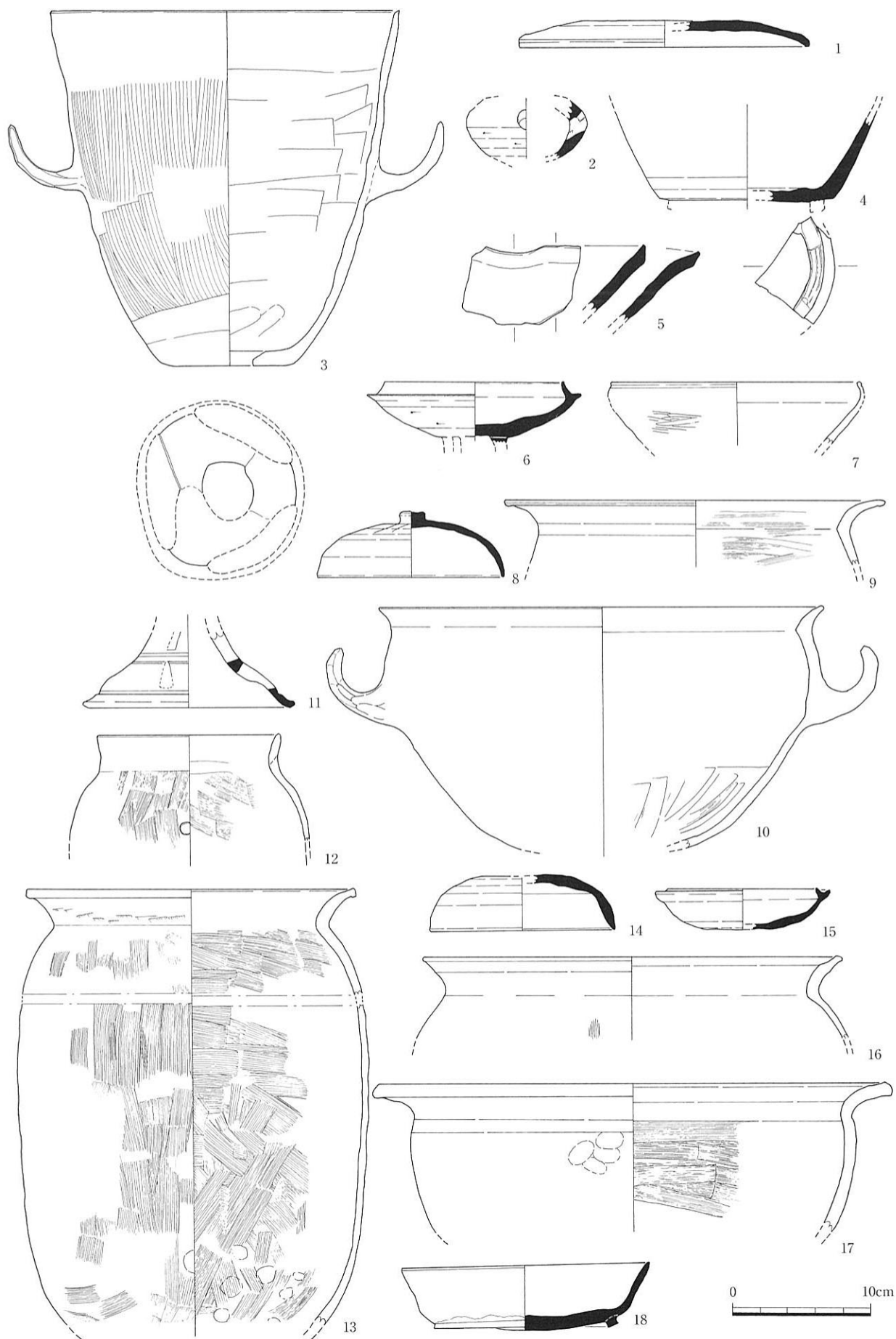


図44 14Btr.出土遺物(1~2:4面精査中、3:1786ピット、4:1965ピット(住居Ⅱを切る)、5:1823溝、6:1968土坑(住居Ⅱに切られる)7:1953ピット、8~10:1787溝(土器1~3)、11~13:1983カマド1、14~16:2032溝(14:土器1、16:土器2)、17・18:2044溝(17:土器1、18:土器2))(S=1/4)

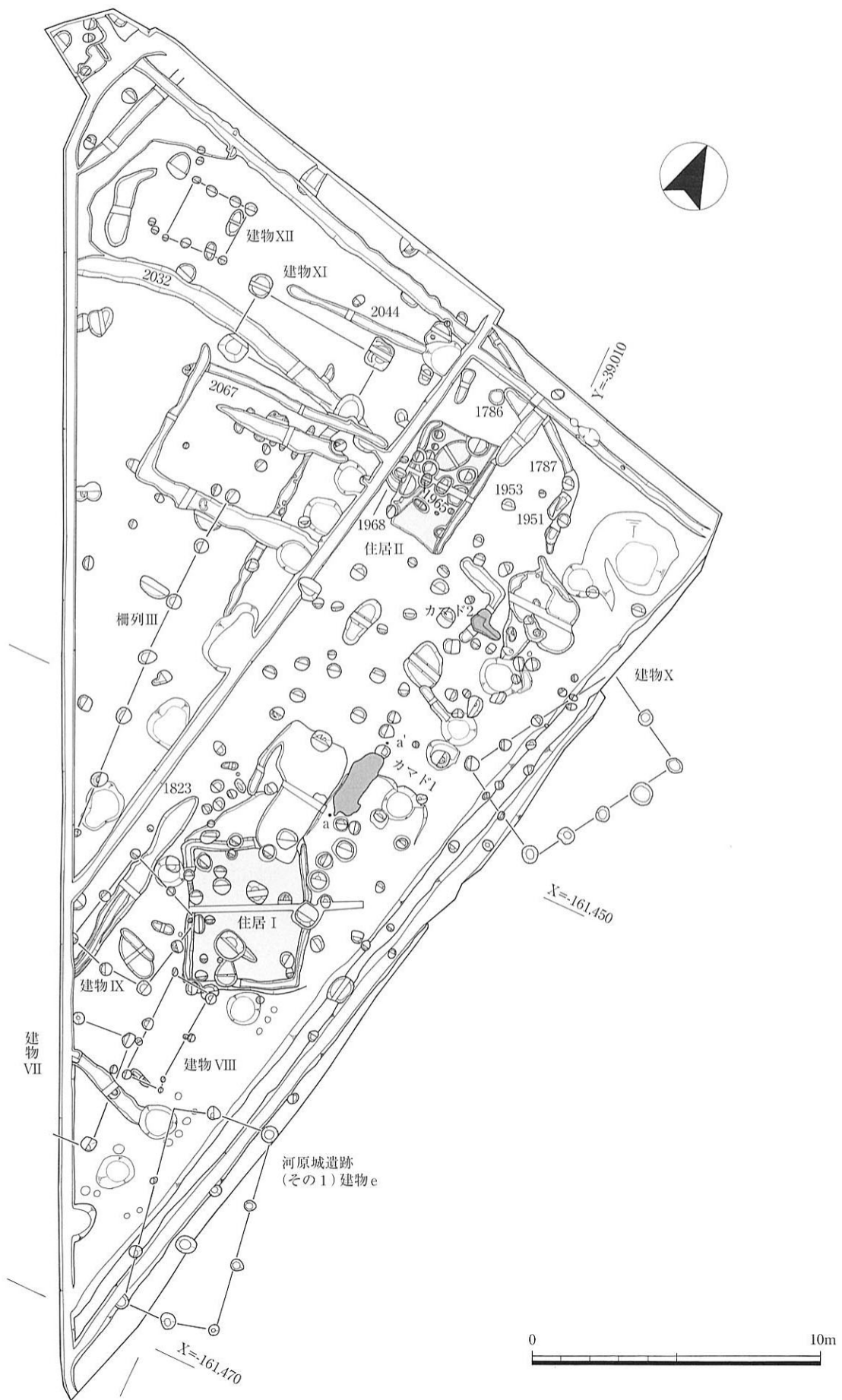


図45 14Btr.4面 (S=1/200)

胎土には0.5mm以下の石英、長石を含む。平城宮Ⅳに位置付けられる。

1965ピット（図45・44・4） 直径約40～50cmの不整円形で、深さ約4～5cmあり、竪穴式住居Ⅱを切っている。これに組み合う遺構は確認できなかったが、建物の柱穴の可能性もある。須恵器・土師器細片が出土し、このうち須恵器壺を図化した（図44・4）。壺は体部下半部のみ残存していた。底部の高台が剥離しており、外面の一部には灰降下がみられる。8世紀代のものであろう。

1968土坑（図45・46・44・6、図版20・6） 竪穴式住居Ⅱに切られ、側溝や他の土坑にも切られているため本来の平面形は不明である。深さは7～11cmである。須恵器高杯6が身部分を伏せた状態で出土した。6は口径12.9cmをはかり、剥離痕からみて三方透かしの脚部が付いていたことがわかる。胎土には1mm以上の長石や石英が含まれる。坏身の形状から陶邑編年Ⅱ-3～4に属するものであろう。

後述する西側で検出した2032溝からもほぼ同時期の遺物が出土していること、また両遺構の位置関係から考えて、これらは一連の溝であった可能性もある。

1787溝（図45・46・44・8～10） 本調査区の北側に位置し、（その1）調査区の溝979の続きである。北側（その1）調査区側から南東方向にのび、本調査区内で南南東に折れ曲がる。深さは最深30cmあった。須恵器・土師器細片が散在して出土したが、図化可能なものは3点のみであった。

8（図版21・7）は須恵器つまみ付き高坏蓋である（土器1）。底から浮いた状態で上を向いて出土した。口径13.4cm、器高4.8cmである。つまみは特異なボタン状を呈する。天井部外面に直線2本のヘラ記号が刻まれる。杯蓋の編年を援用すれば陶邑編年Ⅱ-2～3の可能性もある。

9は土師器甕口縁部である（土器2）。土器1のやや上部から数片が重なるように出土した。復元口径は27.0cmである。口縁部には内外面ともにヨコナデを施し、端部には緩やかな沈線が巡る。体部内面に約13条/cm単位の細かなヨコハケを施す。体部外面調整は風化により明瞭ではないが、部分的にユビオサエが確認できる。色調は内外面ともに橙色（2.5YR6/6）を呈する。

10（図版21・8）は土師器鍋である（土器3）。1787溝を切る1951土坑により、体部の半分が削平されていた。復元口径32.5cm、残高17.5cmをはかる。外面は把手より下半に右下がりのヨコナデを施し、把手は接合後ナデで仕上げる。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。内面には把手接合時のユビオサエと、下半部のタテハケ後ヨコナデ調整が確認される。内外断面ともに明黄褐色（5YR5/8）を呈する。胎土には1～3mmの石英を中心として1mm前後の長石、雲母を含む。

出土遺物数も限られており当遺構の詳細な性格は不明である。時期も6世紀以降としか言えない。

1823溝（図45・44・5） 竪穴式住居Ⅰの東側に位置し、方向は北北東－南南西である。南側へ行くにつれ深くなり、最深10cm前後をはかる。須恵器・土師器細片が散在して出土し、このうち須恵器片口ねり鉢5を図化した。小片のため口径は復元できなかった。内外面ともに回転ナデを施す。12世紀前半頃の東播系須恵器とみられる。

出土遺物数も限られており詳細な遺構の時期・性格は不明である。

2032溝（図45・46・44・14～16） 本調査区北西に位置する東西方向の溝で、建物ⅩⅠに切られている。幅は80cm内外、底面のレベルはほぼ平坦で最深13cm前後であった。須恵器・土師器細片が多数散在しており、このうち3点を図化した。14は須恵器坏蓋で、底面に近いところで口縁を下向きにして出土した（土器1）。復元口径は13.3cm、器高は3.9cmをはかる。陶邑編年Ⅱ-2～3に属する。15は須恵器坏身で、復元口径10.8cm、器高3.0cmをはかる。飛鳥Ⅰに属すると考えられる。16は土師器甕で、潰れた状態で底から浮いて出土した（土器2）。復元口径は30.0cmである。口縁部は内外面ともにヨコナデを施し、体部

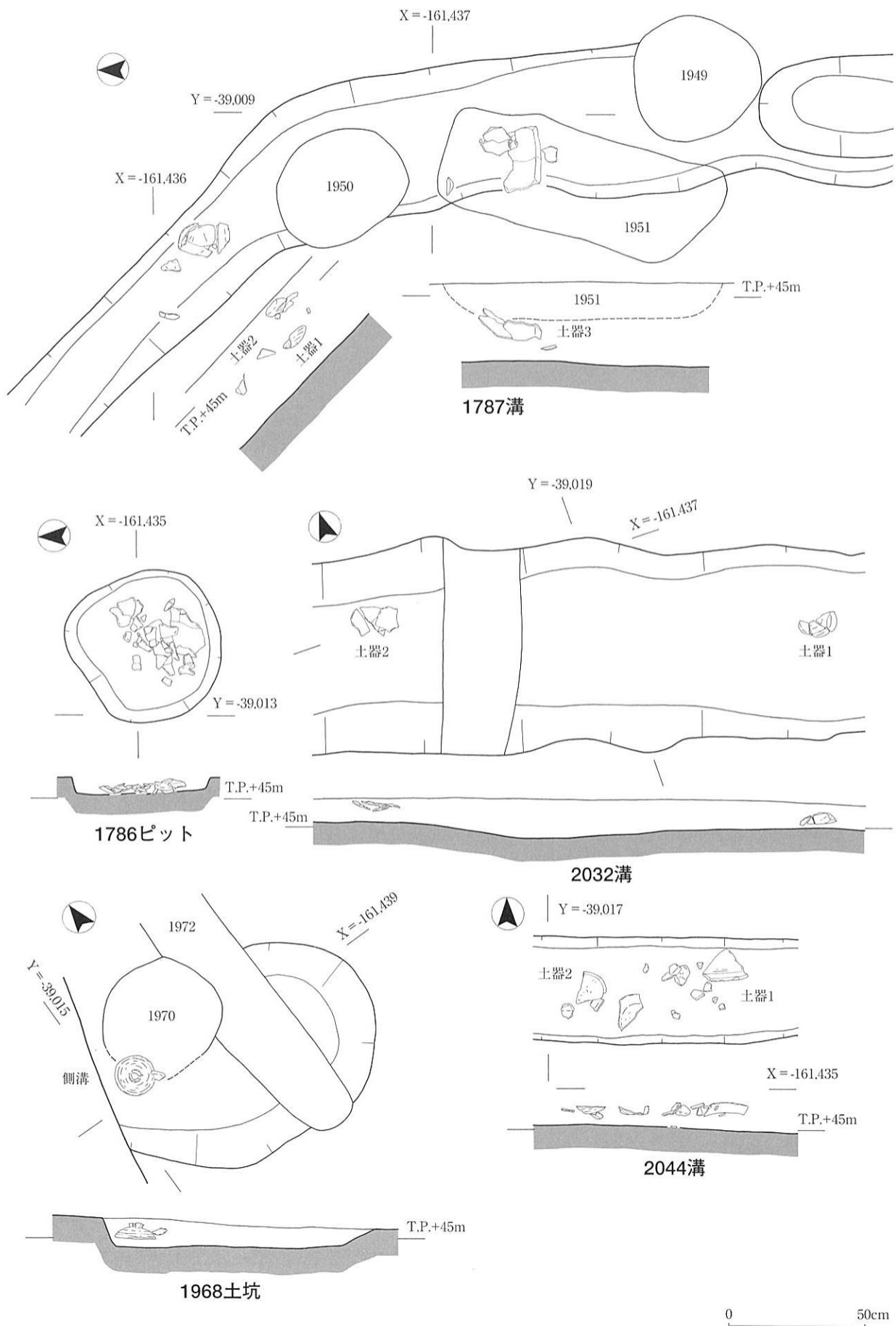


図46 14Btr.4面1787・2032・2044溝・1786ピット・1968土坑土器出土状況 (S=1/20)

内面はナデ、体部外面はタテハケが確認される。焼成は良好で、内外断面ともににぶい赤褐色（5 YR 5 / 4）を呈する。胎土には1～3 mmの石英、長石が含まれる。

細片も含めた出土遺物を検討したところ、6～7世紀の遺物が大半であった。また建物XIに切られていることから、この時期の遺構と考えたい。しかし、詳細な遺構の性格は不明である。

2044溝 (図46・44-17・18) 建物XIの北側に位置し、ほぼ東西方向にのびる溝である。幅約30～40cmで、東に向かって緩やかに深くなり、最深は8 cmあった。須恵器・土師器、瓦の細片が出土し、2点を図化した。17は土師器塙である(土器1)。復元口径は36.4cmをはかる。体部外面にはヨコナデとユビオサエ、内面はヨコハケを施す。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。焼成は良好で、色調は橙色(2.5YR 6 / 6)を呈する。18は須恵器坏Bである(土器2)。復元口径は18.0cm、器高は4.8cmをはかる。高台端部面は外側が上がっている。17と18はいずれも平城宮Ⅲ～Ⅴに位置付けられる。

2044溝は南側に約350cm離れた2067溝と平行しており、同時に存在していた可能性が高い。またこの2067溝は建物VIを切ることから、2044溝も建物VIに伴うものではなく、これに後出することとなる。出土遺物は細片のものが多く、8世紀代のものが大半をしめていた。遺構の詳細な性格は明確ではない。

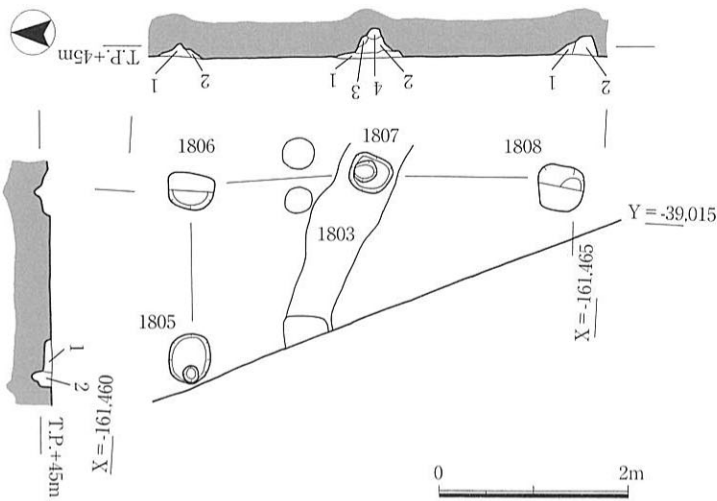
建物Ⅶ (図45・47) 本調査区の南西端に位置し、柱穴1805、1806、1807、1808で構成される。南北2間、東西1間以上あるものと推定されるが、建物の西半は調査区外におよんでおり、詳細な平面規模は不明である。柱痕跡は柱穴1805で確認でき、直径約18cmあった。柱間距離は南北・東西とも約200cm、南北全長は約400cmで、南北柱筋の方位はN 4° Wである。柱穴の平面形態は1辺約50cm前後の隅丸方形である。柱穴の深さは1807が約32cmと深く、その他は15～20cm前後であり、1807が棟持柱になる可能性もある。また遺構検出面は後世の削平を受けているため、実際の柱穴は検出時よりさらに深かったと考えられる。

柱穴からは須恵器・土師器小片しか出土していないため遺構自体の詳細な時期決定は困難であるが、埋土の質・色調が他の6～7世紀の遺構と同じであることからこれと同時期と考えたい。

建物Ⅷ (図45・48) 柱穴1792、1793、1794、1795、1796、1798、1801、1802で構成される。1792、1793、1796で柱痕跡を確認し、直径12～15cm前後あった。桁行390cm(2間)、梁行140cm(2間)の南北に細長い側柱建物で、方位はN 4° Eである。柱間距離は桁行方向が170cm～200cm、梁行方向が60～80cmあった。南側梁行中央の柱は他遺構に切られているため確認できなかった。柱穴は直径20～40cmの正円形で、深さ9～22cmとばらつきがみられるが、隅柱が他よりも深い傾向がある。柱穴からは須恵器・土師器片が少量出土した。

北側梁行の柱穴1792、1798、1796が住居Ⅰの南隅部を切っているため、建物Ⅷは住居Ⅰに後行するのは明らかである。また(その1)掘立柱建物eと建物Ⅶ、Ⅸのそれぞれとも接近し過ぎており、同時に併存していたとは考え難い。規模と構造からみて、住居ではなく物置小屋のようなものの可能性もある。

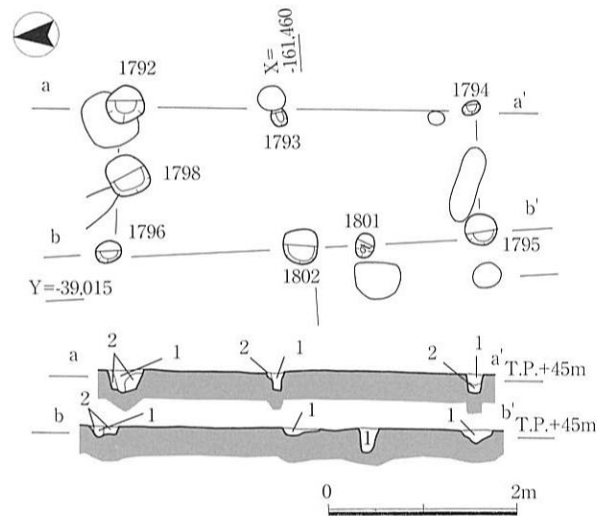
建物Ⅸ (図45・49) 柱穴1810、1811、1812、1813、1815、1816、1819、1825で構成される。1812で柱痕跡を確認し、直径約19cmをはかる。桁行330～350cm(2間)、梁行320cm(2間)の正方形に近い側柱建物で、方位はN12° Eである。柱間距離は梁行方向が150～170cm、桁行方向が130～180cmと不揃いである。柱穴の平面形態は直径35～48cmのやや不整円形を主体とし、北東隅柱のみが長軸70cm、短軸約45cmの楕円形である。深さは12～19cm前後である。柱穴からの出土遺物はなかった。大きさや形態から倉の可能性も指摘できよう。



土色・土質
 A、2.5Y5/3 ~4/2 粘質土、シルト～細砂主体、
 中砂～粗砂若干あり、Mnあり、Fe若干あり、3層系
 B、2.5Y6/6 粘質土、シルト～粘土主体、粗砂・Feあ
 り、Mn粒わずかにあり、4層系
 C、2.5Y5/2 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、
 Fe若干あり、2層系?

- | | |
|---|--|
| 1805柱穴
1、Bのブロックのみ
2、AにわずかにBの
小ブロック | 1807柱穴
1、C内にBのブロックわ
ずかにあり、1803溝の埋土
2、A内にBのブロック
3、同上、ややB多し
4、Aのみ |
| 1806柱穴
1、A内にBのブロック
2、ほとんどBの
ブロックの間にA | 1808柱穴
1、A内Bのブロック若干
あり
2、Bのブロック多し、そ
の間にA |
| | 1809柱穴
1、Bのブロックのみ |

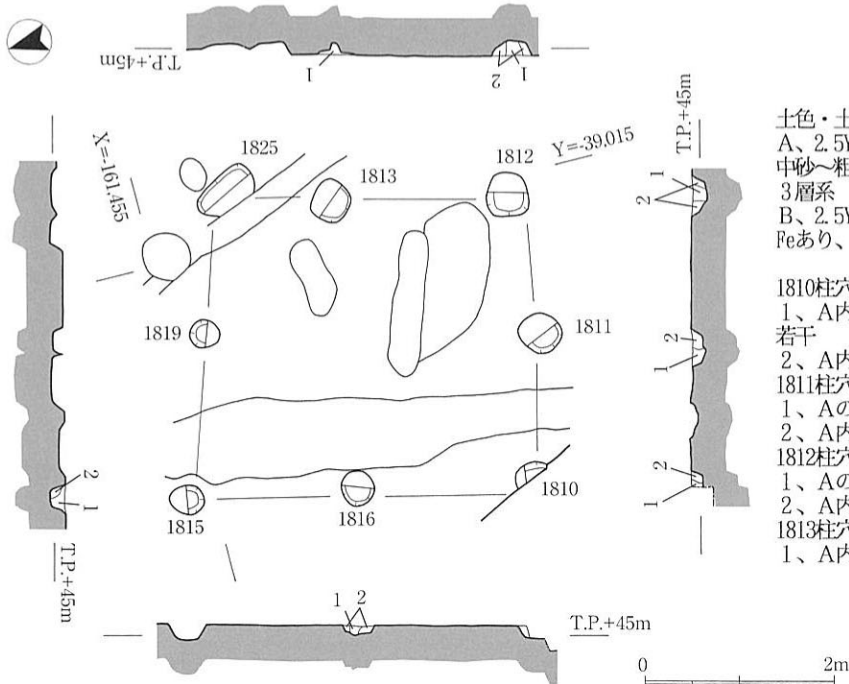
図47 14Btr.4面建物Ⅶ (S=1/80)



土色・土質
 A、2.5Y5/3 ~4/2 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干あ
 り、Mnあり、Fe若干あり、3層系
 B、2.5Y6/6 粘質土、シルト～粘土主体、粗砂・Feあり、Mn粒わず
 かにあり、4層系

- | | |
|---|---------------------------------|
| 1792柱穴
1、A内Bの小ブロックあり
2、A内Bのブロック多し | 1796柱穴
1、Aのみ
2、A内Bのブロック多し |
| 1793柱穴
1、Aのみ
2、A内Bのブロック | 1802柱穴
1、Bのみ |
| 1794柱穴
1、A内Bのブロック
2、Aのみ | 1801柱穴
1、A内Bのブロック上部に多し |
| | 1795柱穴
1、A内わずかにBのブロック |

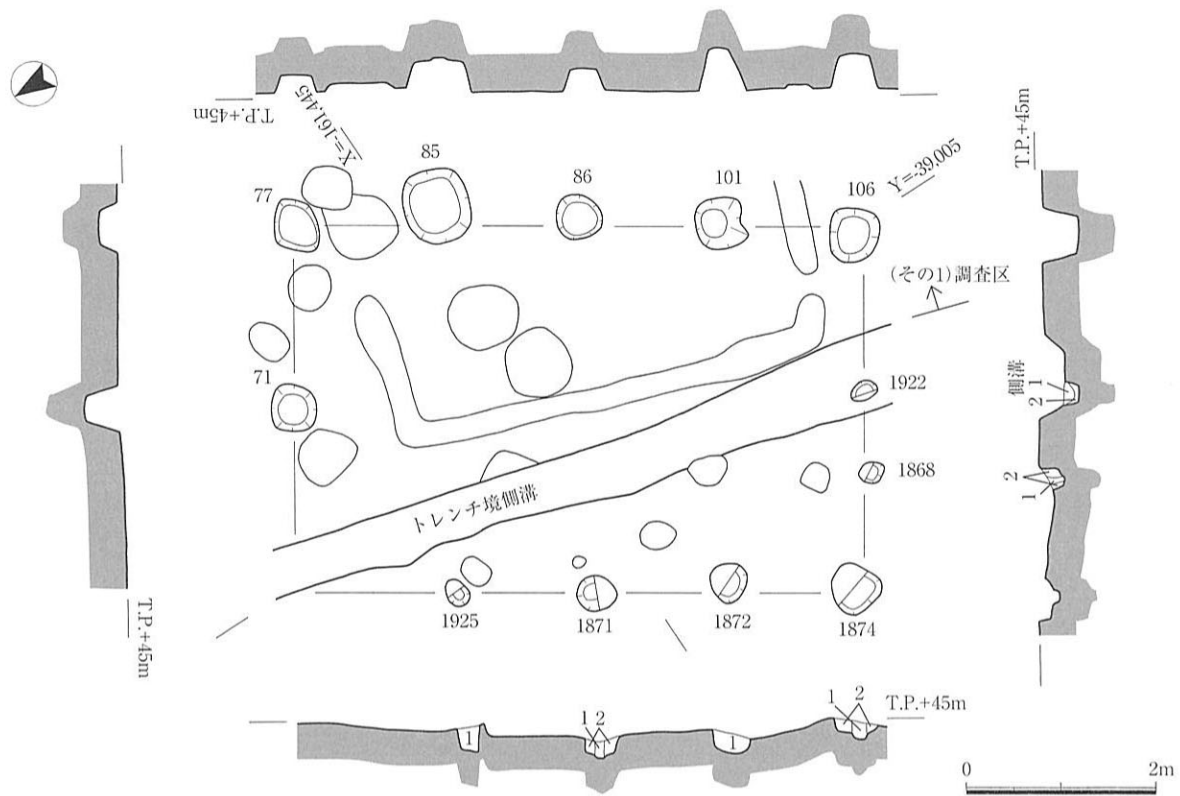
図48 14Btr.4面建物Ⅷ (S=1/80)



土色・土質
 A、2.5Y5/3 ~4/2 粘質土、シルト～細砂主体、
 中砂～粗砂若干あり、Mnあり、Fe若干あり、
 3層系
 B、2.5Y6/6 粘質土、シルト～粘土主体、粗砂・
 Feあり、Mn粒わずかにあり、4層系

- | | |
|---|--|
| 1810柱穴
1、A内Bの小ブロック
若干
2、A内Bのブロック | 1814柱穴
1、Aのみ
2、A内Bのブロック |
| 1811柱穴
1、Aのみ
2、A内Bのブロック | 1815柱穴
1、Aのみ
2、AとBの混濁 |
| 1812柱穴
1、Aのみ
2、A内Bのブロック | 1816柱穴
1、A内Bの
小ブロック
2、Bのブロック間に
わずかにAあり |
| 1813柱穴
1、A内Bの小ブロック | |

図49 14Btr.4面建物Ⅸ (S=1/80)



土色・土質
 A、2.5Y5/3 ~4/2 粘質土、シルト～細砂主体、中砂～粗砂若干・Mnあり、Fe若干あり、3層系
 B、2.5Y6/6 粘質土、シルト～粘土主体、粗砂・Feあり、Mn粒わずかにあり、4層系

1925柱穴
 1、Aのみ
 1871柱穴
 1、Aのみ
 2、A内Bのブロック
 1872柱穴
 1、AないわずかにBの小ブロック

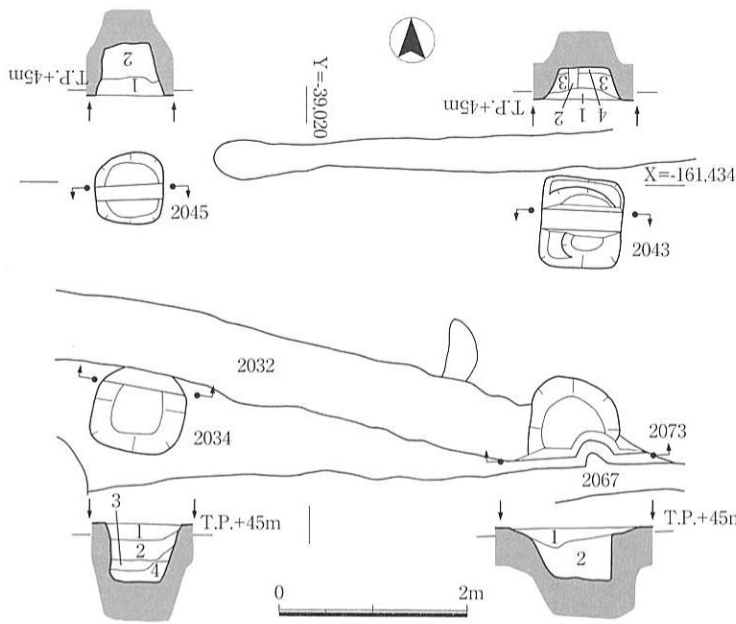
1874柱穴
 1、Aのみ
 2、ほとんどBのブロック、間に若干Aあり
 1868柱穴
 1、A内Bの小ブロック若干あり
 2、A内Bのブロック
 1922柱穴
 1、A内Bのブロック
 2、Aのみ

図50 14Btr.4面建物X (S=1/80)

建物X (図45・50) (その1) 調査区で検出された柱穴71、77、85、86、101、106と今回の調査区の柱穴1871、1872、1874、1868、1922、1925とで構成される。桁行約630cm (4間)、梁行約388cm (北側2間、南側3間)の側柱建物で、方位はN32° Eと東側へ大きくふれている。柱間距離は桁行方向が144～158cm、梁行方向が北側185cm、南側89～170cmである。柱穴の直径は、南側梁行中央の柱穴1868と1922および、西側桁行の柱穴1925が24cm前後と小さく、その他は42～80cm前後である。特に東側桁行の柱穴85は他と比較して大きい。柱穴の深さは20～42cmであった。隅柱の柱穴1874は直径約17cmの柱痕跡が確認され、柱穴1871は直径10cmと小さかった。遺物は柱穴のひとつから土師器細片が出土したのみである。当調査区内では比較的大きな建物であるが、(その1) 調査区で検出した建物の中では平均的な規模である。

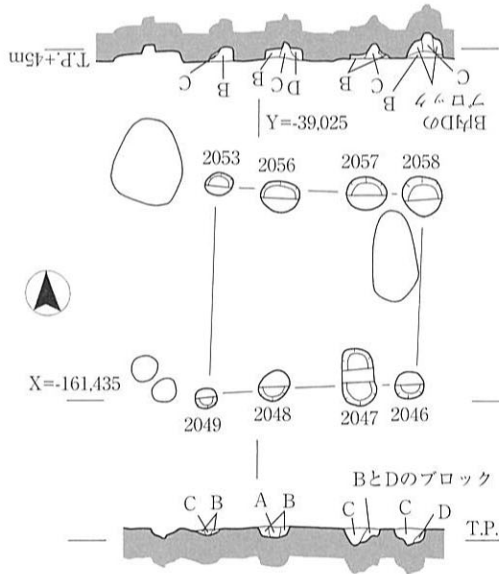
建物XI (図45・51) 柱穴2034、2043、2045、2073で構成される。東西が475cm、南北が235cmの東西に細長い1間×1間の建物で、方向はN3.6° Eである。柱穴2043は一辺が約86cmの隅丸方形で深さが約35cm、他の柱穴は直径80～104cmの不整形円形であり、深さは60～63cmとほぼ同じである。柱痕は柱穴2043でのみ確認でき、その直径は約11cmをはかる。断面設置位置が柱位置をはずした可能性が高い。柱穴2073は2032溝を切り、2067溝に切られている。柱穴からは須恵器・土師器細片が少量出土した。

建物XII (図45・52) 柱穴2046～2049、2053、2056～2058からなる側柱建物で、桁行216cm (3間)、梁



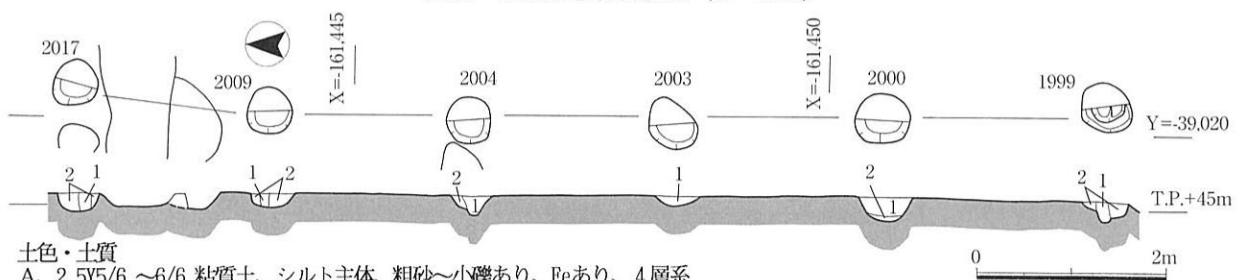
- 2045柱穴断面土色・土質
 1、2.5Y4/3 シルト～細砂主体、粗砂～中砂若干あり
 Mnあり、Fe若干あり
 2、2.5Y4/3 シルト～細砂主体、粗砂あり、中～小礫
 わずかにあり、Mnあり、Fe若干あり
- 2043柱穴断面土色・土質
 1、2.5Y5/3 シルト～細砂主体、粗砂・Mn・Feあり
 2、2.5Y5/3 ～4/3 シルト～細砂主体、粗砂わずかに
 あり、Mnあり、Fe若干あり、柱痕
 3、「2.5Y5/6 シルト主体、粗砂あり、Feあり」のブ
 ロック多し、その間に4と小～中礫若干あり
 4、2.5Y3/2 シルト～細砂主体、中～粗砂・Mnあり
- 2034柱穴断面土色・土質
 1、2.5Y5/3 シルト～細砂主体、粗砂・Mn・Feあり
 2、2.5Y5/2 シルト主体、粗砂～小礫わずかにあり、
 Mn・Fe若干あり、「2.5Y5/4 シルト主体、Feあり」の
 小ブロック若干あり
 3、「2.5Y5/4 シルト主体、粗砂～小礫ありFeあり、
 Mn粒あり」のブロック土
 4、2.5Y4/2 シルト～細砂主体、粗砂・Mn粒あり
- 2073柱穴断面土色・土質
 1、2043の1に同じ、2032溝の埋土
 2、2043の3に同じ

図51 14Btr.4面建物 XI (S=1/80)



- 土色・土質
 A、2.5Y4/4 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり
 Mnあり、Fe若干あり、柱痕
 B、2.5Y5/3 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫あ
 り、Mnあり、Feあり
 C、2.5Y4/3 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫あ
 り、Mnあり、Fe若干あり、柱抜き取り痕
 D、2.5Y5/6 粘質土、シルト主体、粗砂～小礫多し、Fe
 あり

図52 14Btr.4面建物 XII (S=1/80)



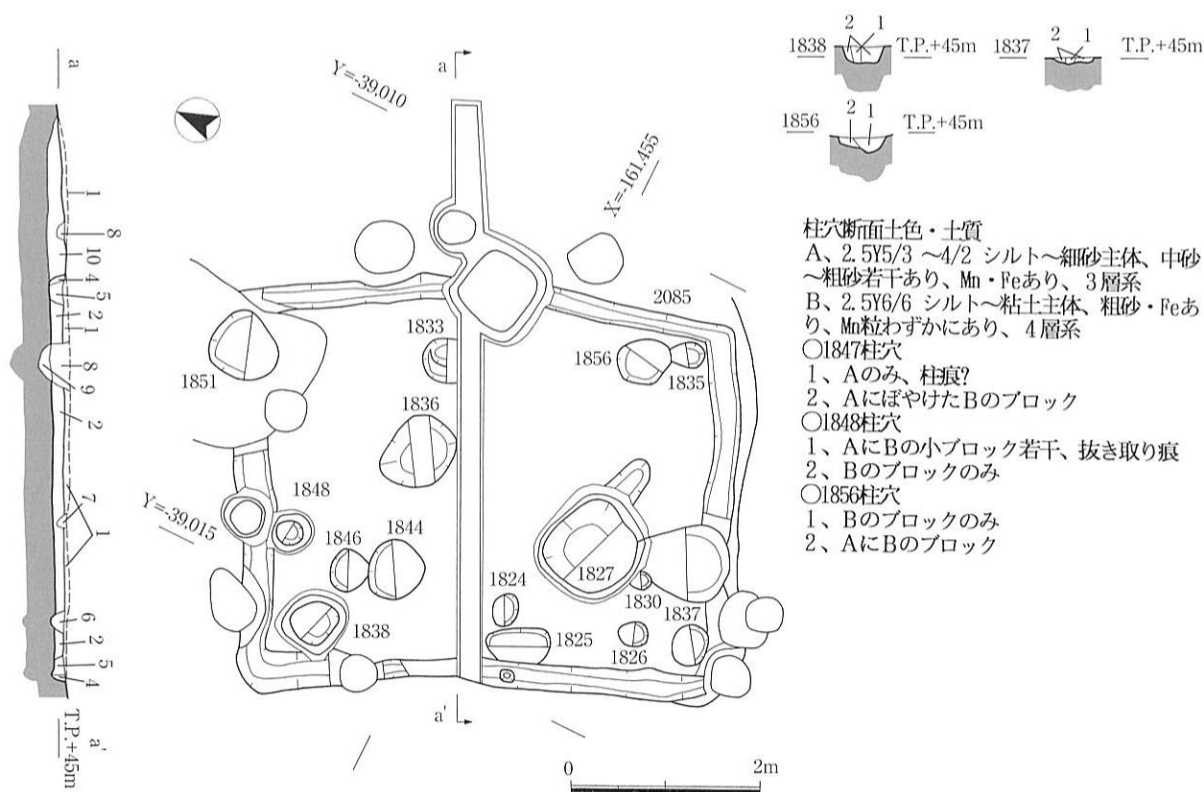
- 土色・土質
 A、2.5Y5/6 ～6/6 粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり、Feあり、4層系
 B、2.5Y5/4 粘質土、シルト～細砂主体、粗砂若干あり、Mn粒若干あり、Feわずかにあり
 3層系
 C、2.5Y5/3 粘質土、シルト～細砂主体、中砂から粗砂若干あり、3層系
- 2017柱穴
 1、AとBのブロック、抜き取り痕
 2、Aのブロック多く、その間にB
- 2009柱穴
 1、B内にAの小ブロックわずかに
 あり、柱痕
 2、Aのブロック多し、その間にB
- 2004柱穴
 1、B内にAのブロック若干あり、抜き取り痕
 2、A・Bのブロックほぼ同数
- 2003柱穴
 1、Aのブロックと、わずかにBのブロックあり
- 2000柱穴
 1、B内にAのブロックわずかにあり
 2、Cのみ
- 1999柱穴
 1、B内にAの小ブロックわずかにあり、柱痕

図53 14Btr.4面柵列 III (S=1/80)

行212cm(1間)の正方形に近い建物である。方向はN²°Eである。柱穴2048以外の全ての柱穴で柱の抜き取り痕が確認できた。柱間距離は桁行方向が56~90cmで、他の建物と比較して狭い。南側桁行2047柱穴は長軸約60cm、短軸約35cmの楕円形であるが、その他は直径約25~43cmの不整形円形を呈する。深さは約5~28cmと不揃いだ。西側へ行くほど浅くなる傾向がある。梁行の長さの割には中央に柱の痕跡は検出できなかった。柱穴からの出土遺物はなかった。

建物XIIは建物XIと方位、柱筋をそろえており、同時併存していたと思われる。

柵列Ⅲ(図45・53) 直径約50~60cmの不整形円形の柱穴2017、2009、2004、2003、2000、1999で構成される南北方向の柵である。北側から1間目の柱穴を境にして向きを若干変えている。方位は南側がN¹°Wとほぼ正方位を指向するのに対し、北側はN⁹°Eと、約10°のずれがある。削平を受けているため検出柱穴の深さは10~15cm前後と浅いが、実際はさらに深かったと想定される。柱穴2004、2017は柱を抜き取った痕跡が確認できる。また柱穴1999、2009では直径12cm前後の柱痕が確認された。各柱穴からは須恵器・土師器の細片が出土している。柵列Ⅲはさらに南北にも続いていたことが予想されるが、遺構の重複や調査区の制限により、柱穴は抽出することはできなかった。(大庭)



柱穴断面土色・土質

A、2.5Y5/3 ~4/2 シルト~細砂主体、中砂~粗砂若干あり、Mn・Feあり、3層系

B、2.5Y6/6 シルト~粘土主体、粗砂・Feあり、Mn粒わずかにあり、4層系

○1847柱穴

1、Aのみ、柱痕?

2、AにぼやけたBのブロック

○1848柱穴

1、AにBの小ブロック若干、抜き取り痕

2、Bのブロックのみ

○1856柱穴

1、Bのブロックのみ

2、AにBのブロック

a~a' 断面土色・土質

1、2.5Y5/3 シルト主体、粗砂あり、Mn・Fe若干あり、二次堆積

2、「2.5Y4/3 シルト主体、粗砂~中砂あり、Mnあり、Fe若干あり」の間に「2.5Y6/4 シルト~細砂主体、粗砂~中砂若干あり、Feあり」のややぼやけたブロックあり、住居床面整地土

3、2.5Y6/4 シルト~細砂主体、粗砂~小礫・Feあり、中礫若干あり

4、2.5Y5/4 シルト~細砂主体、中砂・Fe・Mn若干あり、しまり悪し、住居壁体痕か

5、「2.5Y4/3 ~5/3 シルト~細砂主体、粗砂~中砂あり」の間に「2.5Y6/4 シルト~細砂主体、Feあり」の小ブロックあり

6、2.5Y5/3 シルト~細砂主体、粗砂~中砂若干あり、住居床面遺構

7、2.5Y5/4 シルト~細砂主体、粗砂あり、Feあり、Mnわずかにあり、3層系二次堆積

8、2.5Y4/3 シルト~細砂主体、粗砂~小礫若干あり「2.5Y6/4 シルト、粗砂あり」の小ブロック若干あり

9、「2.5Y6/4 シルト、粗砂あり」のブロックの集まり

10、2に似るが、2.5Y6/4 のブロックがぼやけず、大きく、多い、人為的埋土(整地土)

図54 14Br.4面住居 I (S=1/80)

住居 I (図45・54) (その1) の調査では14 B トレンチの東側に竪穴式住居が集中していた。この住居もその群の中に含まれるが、他の住居のほとんどが、N17° Eに軸を揃えるのに対して、これだけはN25° Wを指向する。5.4m×4.4mの平面規模を持つ。

1985落ち込み内に立地しているが、ここには1983カマド1の存在が示すように、少なくとももう1棟の住居が重複していた可能性が高い。ただし、この住居が、落ち込み埋土最上面で検出された事から、切り合的には最新のものと言える。

かなり削平を受けていると思われ、廃絶後の埋土は部分的に薄く残るのみで、床面の遺構かどうか分からない土坑・ピットもある。床面は底面から整地土を敷いて形成している。

壁溝は完周し、その中の小ピットはあまり多く認められない。柱穴は竪穴の四隅で壁溝ぎりぎりに位置するタイプで非常に浅い。柱穴の浅いタイプの竪穴式住居としては比較的大きいものと言える。

炉・カマドの痕跡は認められない。入口の方向を類推できる遺構もない。ただし地形と、隣接する住居から見れば、北東側に開口していた可能性が強い。

住居に伴う遺物は出土しなかったが、1985落ち込み内には陶邑編年のⅡ-3～4頃の須恵器蓋坏片があり、(その1)の調査で検出された竪穴式住居が、すべて6世紀後半から7世紀初頭におさまる事から見れば、この住居もその期間の後半、6世紀末から7世紀初頭のものと思われる。

住居Ⅱ (図45・55) ほぼ南北に長軸を持つ、4.4m×2.9mほどの長方形の住居である。南側の幅は2.4mとやや狭い。強く削平を受け、壁溝の他は一部に薄く床面整地土と思われる層が残存していたのみである。壁溝は二つの長辺にのみ確認でき、柱穴は認められない。炉・カマドらしきものもない。

住居内のピット・土坑から若干の遺物が出土している。確実に住居に切られている1968土坑からは須恵器高坏身部が出土している(図44-6)。また、確実に住居を切っている1965ピットからは須恵器壺片が出土している(図44-4)。そこから考えられる住居の時期は6世紀末から7世紀末、おそらくは7世紀初頭頃のものであろう。

1983カマド1 (図45・56・57・44-11～13、図版20-7～9) 住居Ⅰの北側、1985落ち込みの北肩部にある。付随する住居址は確認できなかったが、1985落ち込みを完掘した状態を見ると、北側肩のラインが「コ」の字状になり、その中央部にこのカマドが位置するので、1985落ち込み埋土内に、竪穴式住居Ⅰに先行する住居が存在し、それに付随するカマドであった可能性は高いと思われる。

全体的に東側上方から力を受け、上部構造が西側に倒れ込んだような状況である。掛口付近からやや後方にかけての東側壁体の破損が最も激しい。

煙突部と掛口以外は、上部構造のものと思われる焼土がかなりの厚さで堆積していた。それもブロック状ではなく、中も上面も良く焼けた状態であった。その下は焚口から掛口後方まで、密に炭化物が堆積していた。焼土は倒壊後も上下から強い火を被ったような状況であり、その下の炭化物も通常のカマドの使用で燃え尽きるならほとんどが灰になるはずで、これだけ多量に炭化物として残るのは、燃焼中

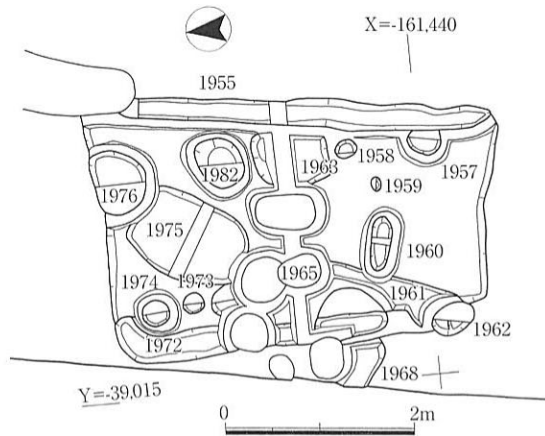
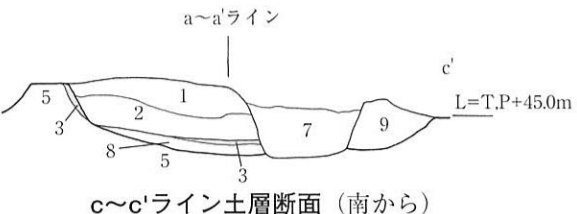
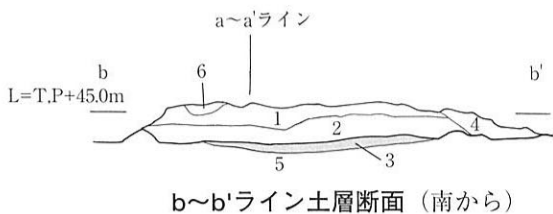
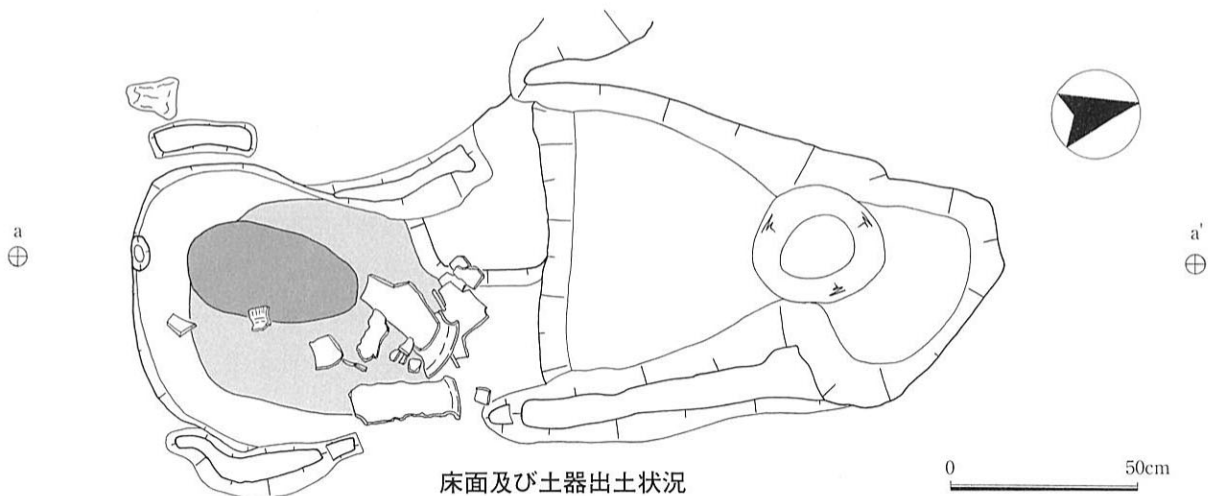
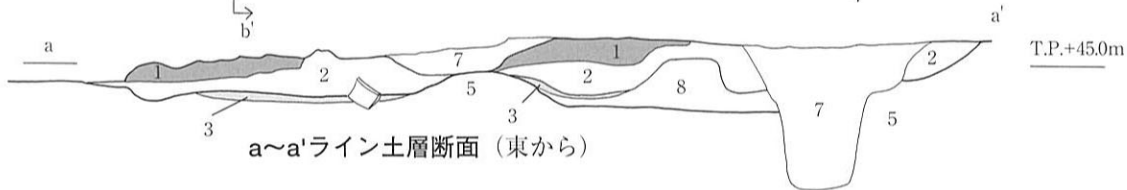
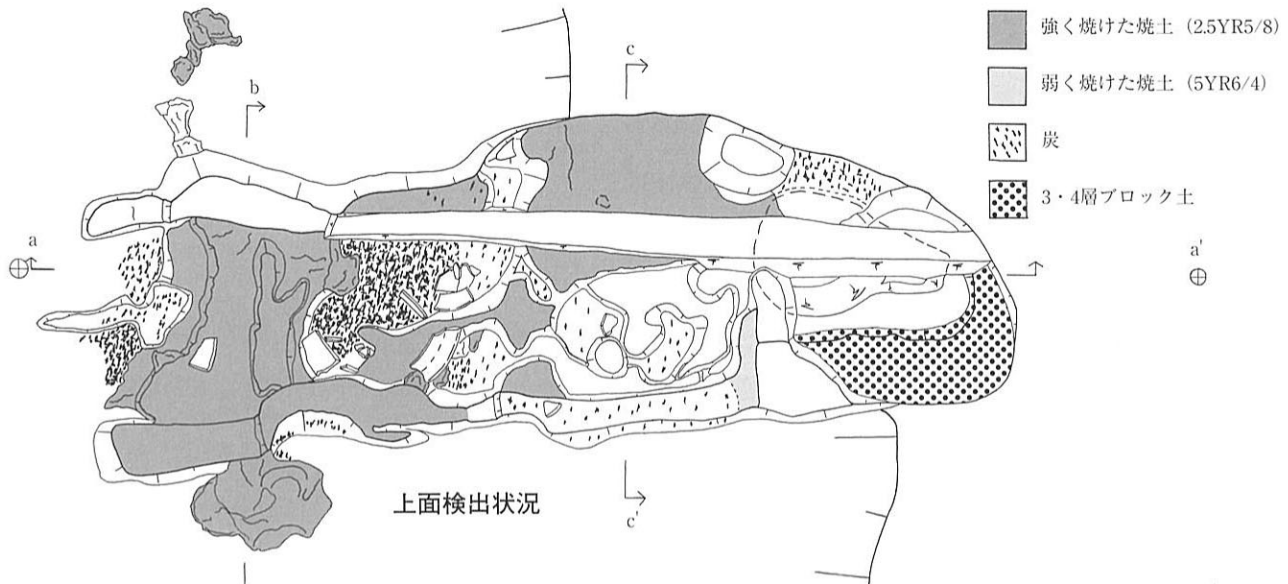


図55 14 B tr.4面住居Ⅱ (S=1/80)



土色・土質

- ①2. 5YR5/8~4/4(明赤褐~にぶい赤褐) 粘質土、シルト主体、粗砂あり、下の方ほど良く焼ける。5Y6/4(オリーブ黄)の小ブロック若干混じる。
- ②炭層。間にシルト質の灰(5Y6/4)若干あり。
- ③2. 5YR4/6(赤褐)粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~小礫あり、⑤上部の被火赤変か。
- ④2. 5YR5/4(にぶい赤褐)質は①に同じ、被火の程度の差か。

- ⑤2. 5Y6/6(明黄褐)粘質土、シルト~細砂主体、粗砂~小礫あり、Feあり、Mn粒若干あり、4・5層
- ⑥5Y6/4(オリーブ黄)シルト、Feあり、ブロック。
- ⑦2. 5Y5/2(黄灰)粘質土、シルト~細砂主体、粗砂あり、Fe・炭若干あり。
- ⑧2. 5Y5/6~5/4(黄褐)シルト~粘土、小礫・炭わずかにあり、整地土。
- ⑨10YR4/3(にぶい黄褐)粘質土、Mn多し、シルト主体、粗砂あり。(3層)と2. 5Y5/4(黄褐)粘質土、シルト主体、粗砂あり、Feあり。(4層)のブロック。

図56 14Br.4面1983カマド1(S=1/20) (a・a'のポイントは図45にあり)

に上部構造が覆い被さり封じ込められたためと思われる。

これは付随する住居自体が燃え、焼け落ちる中で、カマドも倒壊した事を示していると考えられる。

焚口は、両側の壁が一旦内弯した後、さらに前面に伸びる。その部分は壁の厚さは薄い。そこには崩落した焼土はあまりなく、焚口から掛口にかけての天井部は、むしろ焚口側にずれながら倒れ込んだ可能性があるのにこの部分までは達していない事から見ると、この薄い壁の部分は上部構造はなく、焚口の両裾に土手状に取りつくものであったようだ。焚口での燃料の散らばりを防ぐ工夫か。

焚口から掛口に至る部分には燃焼室前半の天井部と思われる焼土が厚く堆積していた。復元図ではその前端部をそのまま焚口天井部としたが、掛口側で掛口の位置と大きさを復元してもそれ以上に焼土の少ない部分があるので、上述したように、天井部が掛口から焚口へ向かって斜めに倒れ込んだと見て、この部分をもう少し短く復元した方が良かったかも知れない。

掛口は、焼土の少ない部分があり、そこに土師器甕が一個体割れて散乱し、さらにその位置のカマド底面が台状に削り出されていたため特定できた。底面の台状部が、東半分ほどが崩れているのは、支柱が元々あり、それを除去したせいかも知れない。支柱の平均的な高さは10cm程なので、そこから土師器甕の器高によりカマド天井の高さを、胴部径から掛口の径を復元した。掛口付近で燃焼室の幅がやや狭くなるのは、重量の掛かる掛口を支えるため、壁を厚くしているものと思える。

掛口より後ろの落ち込んだ天井の断面を見ると、やや掛口側に傾いて崩落し、煙道側は後の削平を受けているが、内面（下面）に突出した部分がある。燃焼室から煙道に入る部分で、無駄に熱を逃がさないために、天井から板状の張り出しを付ける類例があるが、これもそういったものかも知れない。

床面では掛口の台状部より後は燃焼室前半と同じ高さまで下がるが、そこにシルト～粘土を敷いている。これは締まりも良くなく、わずかに炭化物も混じっているので、全体形をつかみにくかったが、断面などを見るとその上面が被火赤変しており、この層上面がカマド使用時の床面であった事が分かる。

また、その土が煙道前面で高く盛られて、再び台状部が作られている。これは先述の天井部の張り出しと共に煙道への空気の動きを屈曲させて燃焼室からの熱の逃げを防ぐ効果もあると思われるが、それだけでなく、煙突からの、雨水などの湿気の、燃焼室への侵入を防ぐ効果もあるのかも知れない。

この付近から後ろは炭化物の密集度合いが減り、断面で炭層と把握される層も、灰と思われるシルト状の粒子が増える。また、この部分が1985落ち込みの肩を上がり切った位置に当たり、カマドの付随する住居址が存在していたなら、その竪穴の肩にあたる部分と考えられる。

さらに後方に燃焼室と煙道部の境がある。ここでは東側から中軸に向かって壁状の突出が削り出して作られていた。西側は後世の攪乱で破壊されているが、同じものがあつたと思われる。

煙道部は、その後ろで、先ず全体的に浅く掘り下げ、その中にさらに溝状に煙道を掘り下げている。浅い部分にはブロック土が充填されており、煙道部から煙突にかけての上部構造の基盤部分が残存しているものと思われる。煙道の幅は、燃焼室の内側の幅が大体50cm強あるのに対し、20～30cmの幅に復元できる。

壁体の材料は、被火赤変の弱い部分を見ると、元々、シルト主体粗砂混じりの黄褐色系粘質土を使用しているようで、調査区の4層系統の土と思われる。また、煙道付近のブロック土は4層と3層の土がブロックとして混じったものである。強く被火している部分も粗砂が入っているので、水澆などを経た材を使っているのではないようである。

また、カマド内から須恵器片が11片出土しているが、いずれも小片で被火の痕跡もなく、量の少なさ

からいっても壁体に入れたものではなさそうである。礫なども認められない。

しかし、壁体の中に、若干の炭化物を含むものがあるのは確実である。これは壁体の中に入っていた植物遺体が炭化したものと思われる。土器焼成の窯の窯壁内にスサのネガが見られる事があるが、カマドの場合、それほど高温にならないため、植物遺体本体が炭化したまま残存しているのではないだろうか。ただし、故意に混入させたものか、壁体材として加工していく途中で自然に混入したものかは判断しかねる。

1983カマド1から出土した土器は、土師器甕2個体と須恵器は甕片1・蓋杯片7・脚部片3がある。その内、図化できたのは土師器甕2個体と須恵器脚部片であった。(図44-11~13)

11(図版20-8)は須恵器脚部片である。台付壺の脚部と思われる。三方透かしで、上段長方形、下段三角形の透かし。全体に回転ナデで仕上げる。胎土には石英・長石若干あり。3片が接合したが、全周の1/4ほどしか残存しておらず、二次的被火の痕跡もないので、支柱に転用された可能性は薄い。

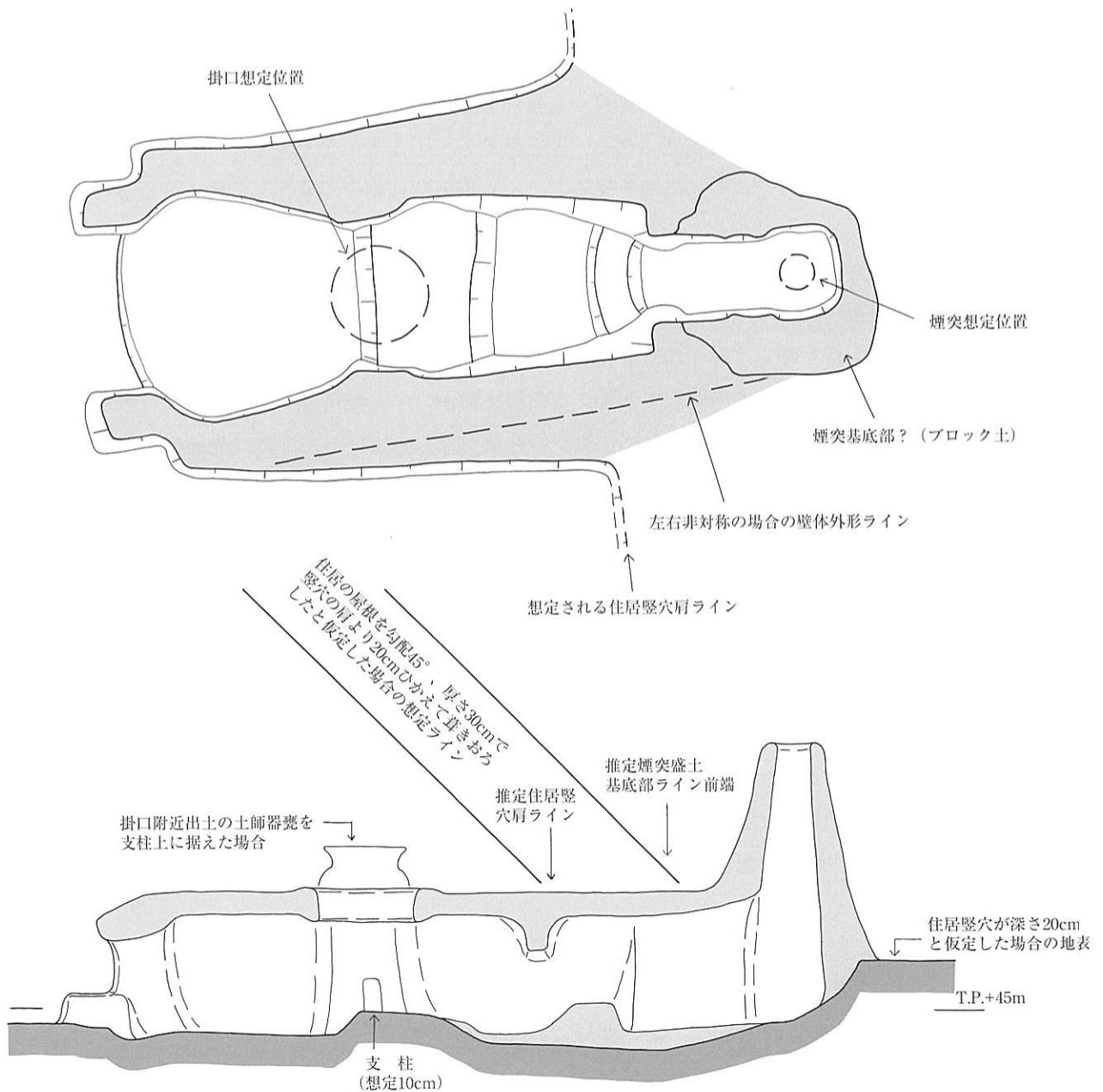


図57 1983カマド1復元図

陶邑編年のⅡ-3～4のものである。

12(図版20-7)は土師器の甕である。色調は5YR6/4を呈し、胎土に石英・長石の他、赤色粒を含む。口縁は内外面ともヨコナデを施す。肩部よりやや下がった胴部に一か所、回転穿孔具を使用したと見られる径9mmほどの孔が外面から開けられている。焼成後穿孔である。接合はしないが、同一個体と思われる胴部破片があり、器高18cm以上の長胴甕である事が分かる。残存率は1/4に満たず、カマド内部の広範囲に破片が広がっていたため、胴部の穿孔とも合わせ、用途がいま一つ良く分からない。時期としては古墳時代後期から飛鳥時代前半のものか。

13(図版20-9)は土師器の甕である。色調は5YR4/6を呈し、胎土に石英・長石・赤色粒を含む他、微細粒子には雲母も見られる。口縁部はヨコナデで仕上げるが、外面では中程から下にハケ目のアタマの痕跡が残り、内面はナデ前にヨコハケの痕跡がある。外面のタテハケは上から下に入れていき底部では次第に右に傾き、その下にわずかにユビオサエが残る。内面は上半にヨコハケをした後、それより下に右下がりのハケを施し、最後に左下がりのハケが散在する。底部はハケ前のユビオサエが残る。内面下部にわずかに炭化物の付着が見られる。

掛口付近に破砕状態で集中しており、ほぼ1個体分の破片がある。口縁部は掛口の位置で横置状態で割れた形で、胴部は掛口から焚口方向の焼土の下より出土した。掛口に据えてあったものが、底部から焚口方向のカマド内部に滑り込み、上から圧力がかかって割れたような状況である。

胴部の、最大径部分が長く、カマドに良く適応した長胴甕と言える。ハケの省略が一切なく、口径が胴部最大径より小さい事、また器壁が薄めで、底部内面がユビオサエ後ハケである事などから見ると、新しくとも飛鳥Ⅱ型式までのもので、6世紀後半から7世紀前半の間のものであると思われる。

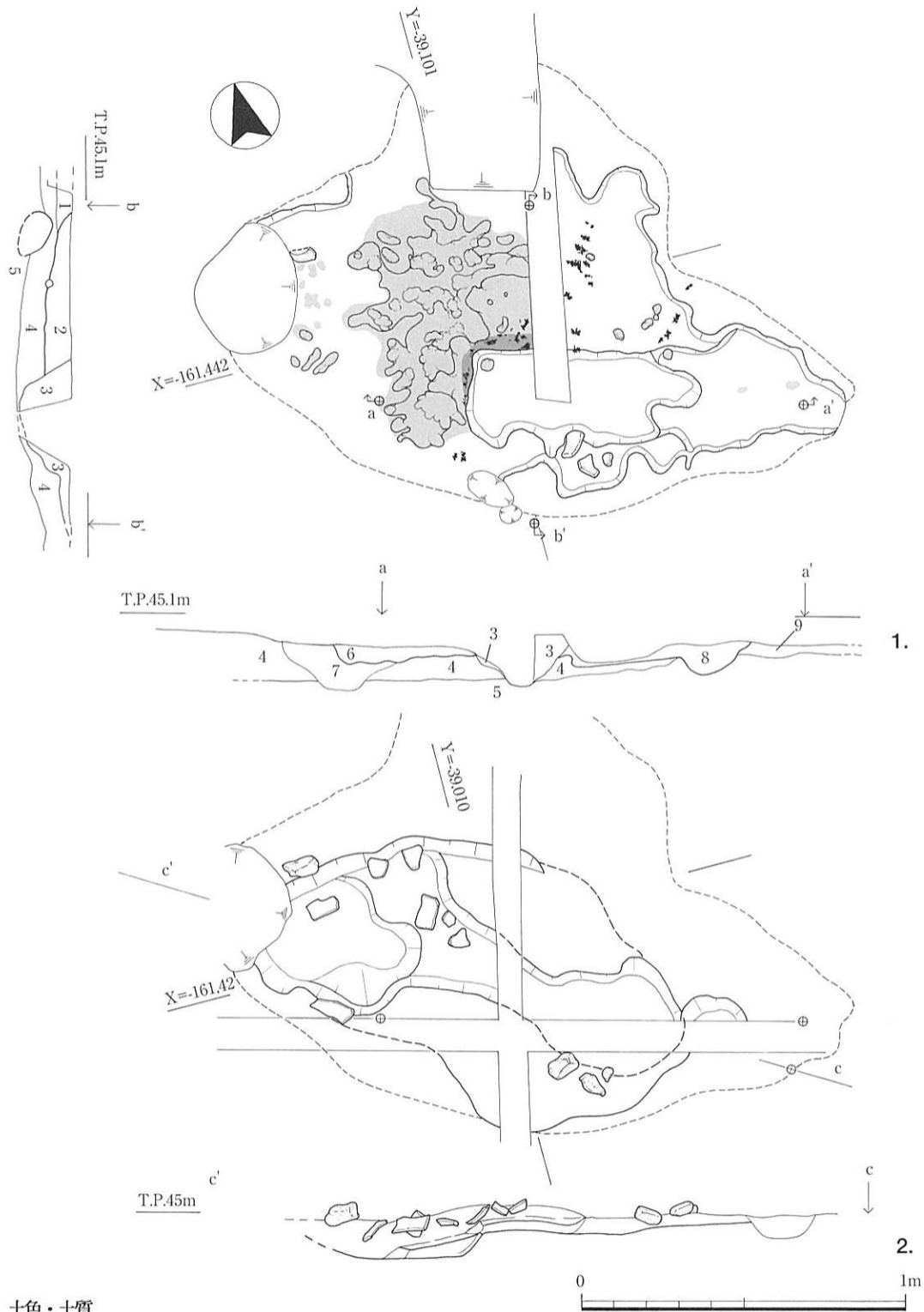
図化できなかったものも須恵器蓋杯片などを見ると陶邑編年のⅡ-3～4型式のものであると思われる。

以上を踏まえ、このカマドの時期を考えると、陶邑編年のⅡ-3～4を廃絶期と見るのが妥当と思われる、付随した住居が6世紀後半の末を抜いた時期に限定できるとすれば、それを切っていたであろう住居Ⅰの年代とも整合する。

全長2.5mというこのカマドは、古墳時代に限らず、竪穴式住居の造り付けカマドとしては、おそらく近畿地方では最大級のものであると思われる、関東地方の古墳時代後期のカマドを彷彿とさせるが、それ以外は、壁体に土器片や石を入れない、掛口は一つ、など、近畿地方のカマドの特徴を保っている。(三宮)

1937カマド2(図45・58・59) 当調査区北東部の住居Ⅱと建物Ⅹの間で検出された。このカマド2を備えていた住居は検出されていない。検出時、北西-東南の長軸約200cm、短軸約135cmの範囲に焼土や炭が散在していた。特に北西部に焼土や炭が集中しており、こちらが燃焼部であると考えられた。また、この集積物に混じって黄色の砂質ブロックが多数含まれており、これらは崩壊したカマドの壁体片と考えられる。上記集積物の除去後、燃焼部付近から須恵器・土師器細片・石が出土したが、図化に耐えるものはなかった。これらは一個体には復元できないため、壁体材として使用された可能性もある。平面の形態は、燃焼部が最大幅約55cmと広く、煙道入口は幅約30cmで、先にゆくにつれすばまってゆき、最も細い部分は幅15cm前後となる。煙道端部では再度やや広がり、最大幅は約35cmをはかる。断面の形態は燃焼部のレベルが深さ約15cmと最も低く、煙道の手前で立ち上がり、さらに煙道先端部へゆくにつれ緩やかに高くなり、最も浅い部分では5cmにも満たない。

本来、楕円状土坑の上に堤状に粘土を貼ってカマドの天井部をつくったと考えられるが、天井部への立ち上がり部分は残存していなかった。



土色・土質

- 1、2. 5Y6/4 砂質土、シルト～極細砂主体、上面にはわずかに焼土あり、3層系?
- 2、10YR5/3 ~5/4 砂質土、シルト主体、粗砂含む、焼土の小ブロックあり、特に下面に炭と共に集中、カマド内埋土
- 3、10YR5/3 砂質土、シルト主体、粗砂含む、4層のブロックあり、別遺構か
- 4、10YR6/6 粘質土、シルト～細砂主体、小礫若干含む、わずかに炭化物あり、4層の二次堆積か
- 5、10YR5/6 粘質土、シルト主体、粗砂含む、Mn若干あり、4層
- 6、2. 5YR4/6の焼土の中に「10YR5/4 砂質土、細砂主体、粗砂含む」のブロックあり底面に炭あり、東側は炭の下にも焼土あり、カマド内埋土
- 7、10YR6/6 砂質土、シルト～細砂主体、粗砂わずかに含む、底部に炭化物若干ありカマド使用時には既に埋没、別遺構?
- 8、10YR5/4 砂質土、細砂主体、粗砂～小礫多く含む、Fe・Mn粒あり、煙道部埋土
- 9、10YR5/4 砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～小礫多く含むが8よりは少ない、Mn若干あり、一部やや黒く焼ける?、3層系?

図58 14Btr.4面1937カマド2(S=1/20) (1:検出状況、2:完掘状況)

住居東辺の中央部にカマドがあったと想定すると、カマド2の西側に位置する住居Ⅱに切られる状況が復元される。つまり竪穴式住居Ⅱより先行すると考えられる。そこから推測すると6世紀代から7世紀の頃のものと思われる。しかし、カマド2はもともと住居に伴うものではなく屋外カマドであった可能性も捨てきれない。(大庭)

1985落ち込み(図60) 緩やかに東南東へ傾斜する14B トレンチ4面の地勢の中で、元々は浅い浸食痕として形成された自然地形だったと思われる。その中に次第に3層相当層が堆積していき、様々な段階において遺構が切り込んでいるため、実際は埋土内に幾つかの遺構面をもっていると思われる。

埋土最上面から住居Ⅰが切り込んでいたため、落ち込みの南側の外形は、その住居の2辺が形作った

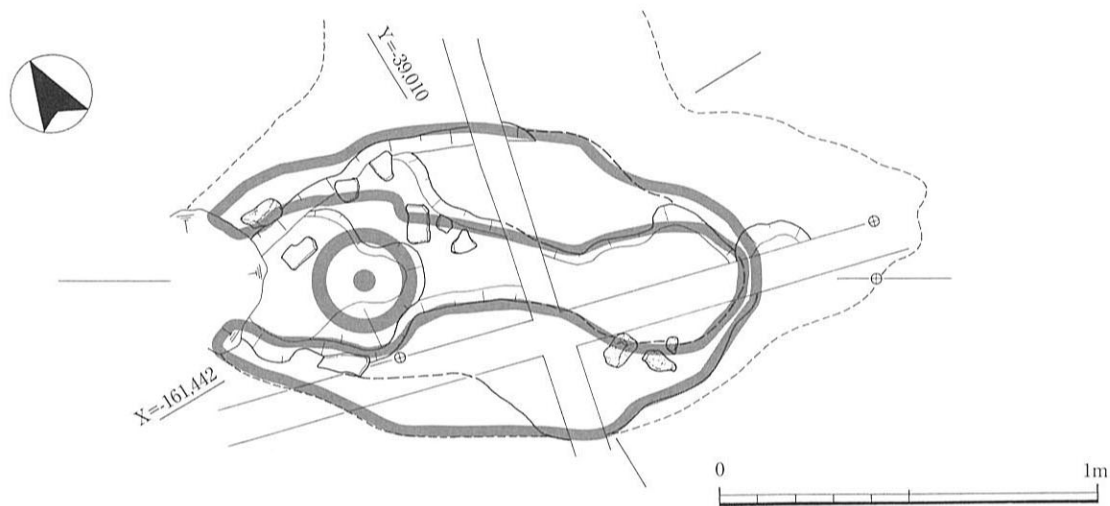


図59 1937カマド2復元図

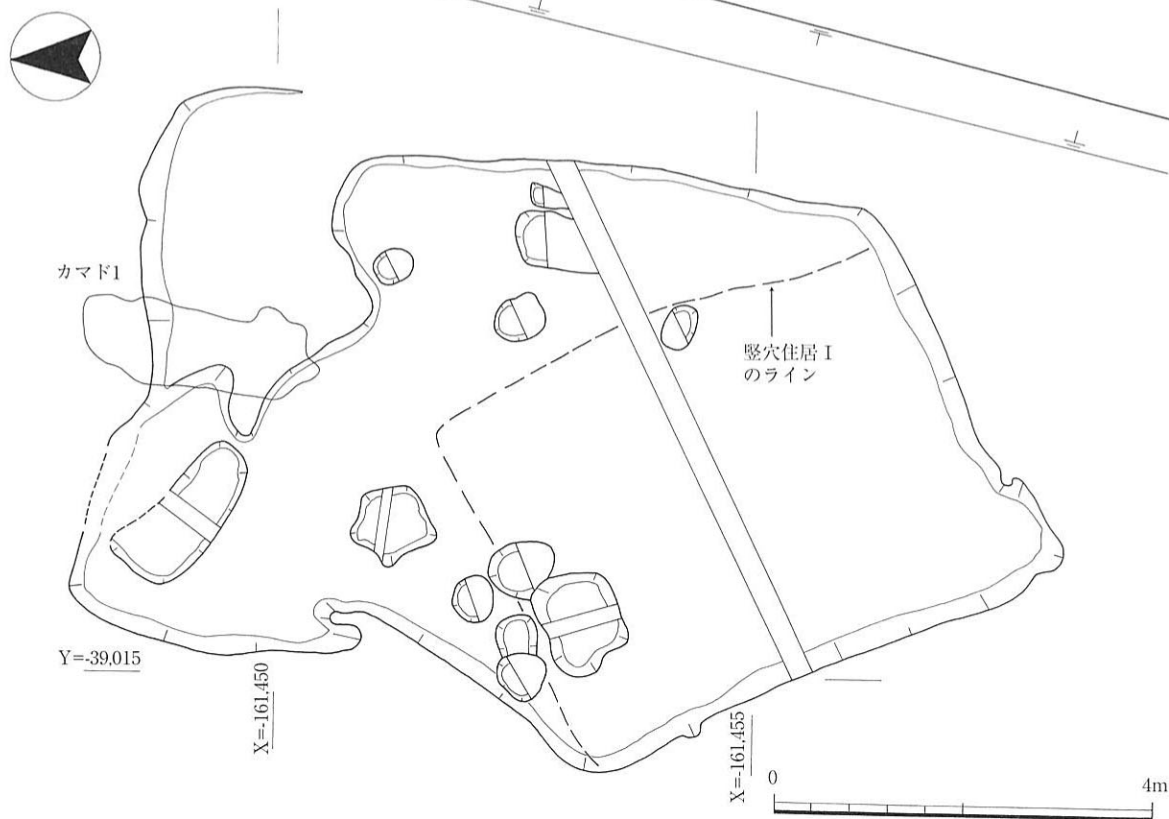


図60 14Btr.4面1985落ち込み底面 (S=1/80)

ようになっている。

完掘してみると、北側に同じように方形の一部を成すような「コ」の字形の肩部が現れた。1983カマド1がその直線的な一辺の中央に位置する事や、壁溝の一部ともとれるような形も現れた事から、住居Iより下に、同じくこの落ち込みを切った住居がもう1棟存在した可能性が高いと思われる。

床面や柱穴の把握はできなかったものの、その想定される住居の方向性は(その1)の調査で隣接地で検出された竪穴式住居群とほぼ一致する。また、住居I以外の落ち込み内埋土の包含遺物が、その住居のものだとすれば、カマド1内の遺物の時期と一致する。検出は出来なかったものの、カマド1が付随する住居が存在していたであろう事は認めて良いと思われる。

さらに極論すれば、落ち込みの外形は、上述した以外にも直線的な部分がある。また、底部で検出した1987ピットには土師器甕の小片と共に焼土が入っていた事などを見ると、さらにもう1棟、住居が重複していた可能性もあながち否定できないであろう。

落ち込み自体の存続時期は、形成時期は良く分からないが、完全に埋没するのは、住居Iが作られる時期としておいて良いだろう。(三宮)

(3) 小結

以上14Bトレンチで検出された遺構、それに伴う遺物を報告した。しかし、記述した他にも遺構は多数検出されている。これらのうち近現代水路以外の大半は、確認された住居群などと同時期の可能性が高い。また、柱穴の可能性もあるものも多数存在するが、明確な組み合わせが確認できなかったため詳細は記述していない。今回の調査では、(その1)検出集落群の続きが確認され、その中でも既知の建物とは方位・規模が異なる建物の存在が知られた。これらの調査成果をも踏まえた集落変遷の考察は後章に譲ることとする。(大庭)

6. 15B トレンチ

(1) 概要

当調査区はB地区東側、つまり中位段丘が東側に下がっていく緩やかな傾斜地に位置する。限られた調査面積のため溝や土坑を数基確認したのみであったが、隣接する(その1)の2Bトレンチでは6世紀後葉から8世紀まで断続的に継続する掘立柱建物や竪穴住居などの生活遺構、6世紀後半に埋葬された土器棺などが検出されている。また、当調査区で検出された土坑のひとつが(その1)掘立柱建物kの柱穴であることがわかった。

(2) 包含層出土遺物(図61・62)

当調査区では第2層までを重機で除去し、第3層を人力で掘削した。図61-1・2は表採遺物であり、図61-3～22、図62-1～3は第3層出土遺物である。

表採・第3層出土遺物(図61・62) 1は須恵器壺体部片である。同種個体とみられる土器片が溶着している。自然釉がかかり藁のような繊維状のものが固められて遺存しており、溶着片の間にまで入りこんでいる。外面調整はカキメ、内面はナデを施す。

2(図版21-5)は弥生土器底部片である。底径は6.0cmである。胎土は暗茶褐色を呈し、長石・石英・雲母・角閃石を含む特徴から生駒西麓産と考えられる。

3は須恵質埴輪片である。外面は荒いタテハケ、内面はタテナデのちヨコナデを施す。タガは断面台形である。色調は外面が黄灰色(2.5Y 6/1)、内断面が灰白色(2.5Y 7/1)を呈する。形状の特徴から6世紀前半代の日置荘系埴輪と考えられる。

4は須恵器壺体部である。外面は全体にカキメを施した後、頸部にヨコナデを行う。外面上半部に自然釉がかかる。

5は須恵器壺底部である。外面はヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。

6～8は土師器高杯である。6は胎土が精製である。風化が甚だしいため杯部内面のヨコナデ以外の調整は不明である。7・8の脚柱部はいずれも外面を縦方向に板ナデで調整しており、内面はシボリ痕と縦方向のユビナデが確認できる。いずれも焼成は良好で、内外断面は橙色(5YR 6/6～5YR 7/6)を呈する。7・8の時期は古墳時代後期から飛鳥時代初めと思われる。

9・10は土師器把手である。いずれも平面形が三角形で、部分的にユビナデやユビオサエ調整が確認できるが、表面の剥離や風化のため詳細は不明である。ともに内外断面は橙色(5YR 6/6)を呈する。

11(図版24-3)は須恵器中空円面硯である。残存高は2.0cm、復元径は12.0cmである。外面下半は回転ヘラケズリ、外面上半から内面は回転ナデを施す。上端部は欠失するが、立ち上がりがわずかに残存する。奈良時代のものと考えられる。今回の調査では12Bトレンチの谷1から圈脚円面硯片が、(その1)調査時には中空円面硯と蹄脚円面硯片が出土している。

12は須恵器甕である。外面は上半部ヨコナデ、下半部はケズリ調整である。内面は体部を回転ナデの後、屈曲部を縦方向のユビナデ、その後頸部をヨコナデする。

13(図版21-6)は土師器碗である。口径は12.0cm、残高4.9cmをはかる。外面はユビオサエ、内面はナデののち口縁端部をヨコナデ調整し、底部外面には不定方向にナデを施す。胎土は精製で、石英、長石が含まれる。平城宮Vであろう。

14は須恵器坏身である。焼成はやや不良で、内断面はにぶい褐色(7.5YR 6/3)、外面は灰白色(5

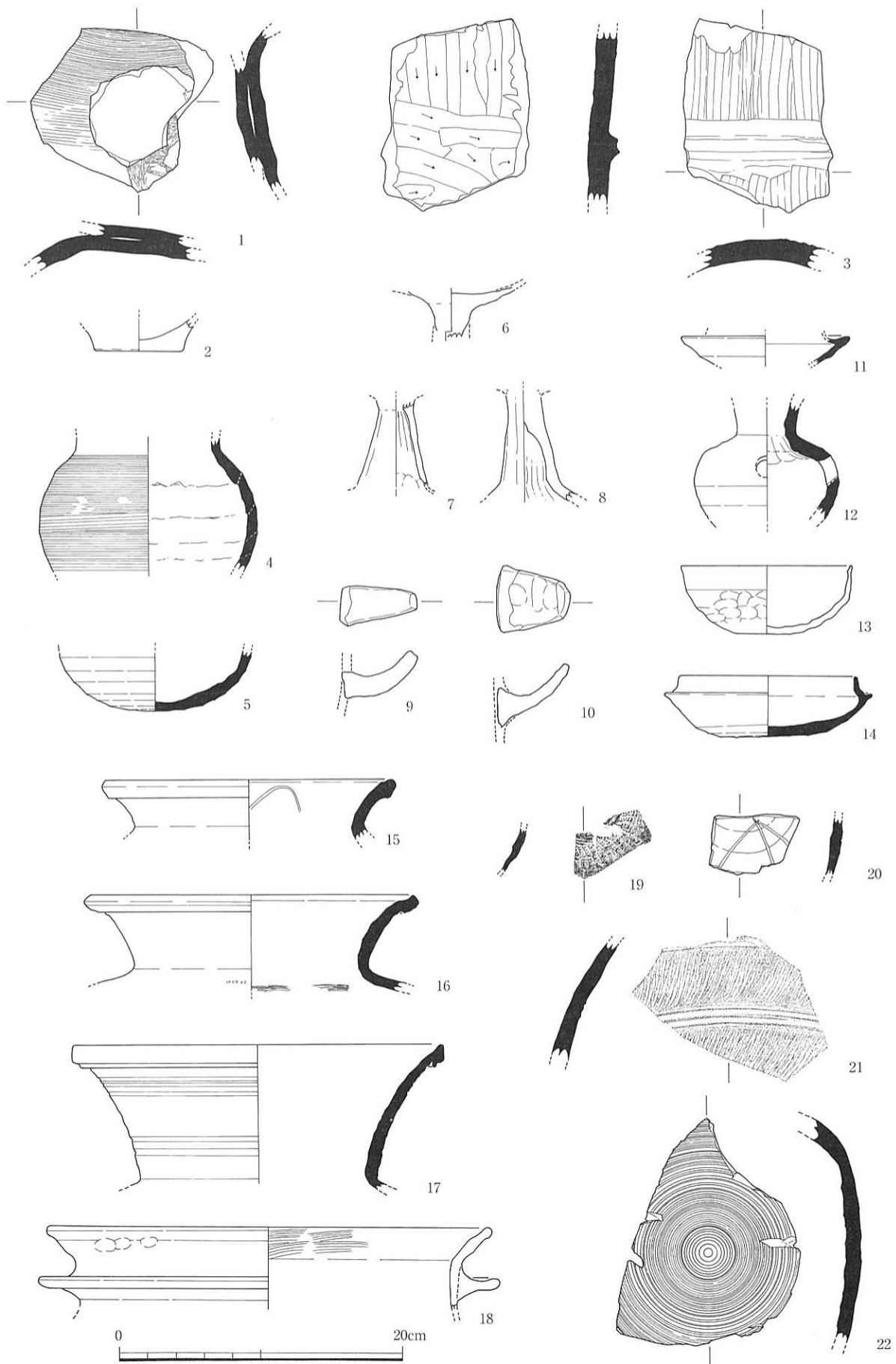


图61 15Btr.3層・表採遺物 (1・2:表採、3~22:3層) (S=1/4)

Y 7/1) を呈する。1～3mmの石英を多く含む。陶邑編年Ⅱ-1～3に位置付けられる。

15～17は須恵器甕の口縁部である。15は内外面ともに回転ナデ調整で、鋸歯文に似たジグザグのヘラ記号を内外面部分的に施す。内面には降灰痕がある。16は体部外面を縦方向に平行タタキし、口縁部内外面に回転ナデを施す。体部内面には同心円文タタキが一部確認できる。外面全体に降灰痕がある。

17は内外面ともにヨコナデで調整する。口縁部内面と体部外面に自然釉と小窯壁片がまばらに付着する。飛鳥から奈良時代に属する。

18は土師器羽釜である。復元口径は31.0cmである。口縁部の調整は外面ユビオサエ後ヨコナデ、内面はヨコハケである。残存部内ではタガ貼りつけのための指押さえは確認できなかった。焼成は良好で、内外断面はにぶい赤褐色(5YR 5/4)を呈する。

19(図版21-4)は須恵器壺もしくは高杯の蓋である。回転ナデで整形した後天井部に回転カキメと列点文をめぐらす。焼成は良好で、色調は内外面が灰色(N 4/0)、断面が紫灰(5RP 5/1)である。小片のため全体の形状は判らないが、色調や天井部の文様からみて、陶質土器の可能性もある。

20は須恵器坏蓋片である。外面調整は回転ヘラケズリとナデで、天井部に直線3本のヘラ記号が刻まれている。内外面は灰色(N 5/0)、断面はにぶい赤褐色(5YR 5/4)を呈する。

21は須恵器甕の頸部片である。頸部外面に沈線を挟んで上下に粗雑な縦長の波状文を施す。内面には降灰痕が確認できる。

22は須恵器提瓶体部片である。外面はカキメを、内面はユビオサエ後回転ナデを施す。外面の一部に降灰痕がみられる。陶邑Ⅱ-2～5の時期と考えられる。

図62-1～3(図版24-4)は土師器移動式カマド片である。11片出土したが、図化可能なものはこの3点のみであった。全体的な焼成や色調、雲母や石英、長石が含まれるなど胎土の特徴から、これらは同一個体と考えられる。なお(その1)調査時にも移動式カマド片が出土している。

1は体部下端片とみられる。外面はタテハケ主体で一部ヨコハケが確認できる。内面と端部はヨコナデとユビオサエが部分的に残存する。内外面はにぶい黄橙色(10YR 7/3)、断面は褐灰色(10YR 4/1)を呈する。

2は焚口付近片とみられる。外面は10条/cm単位のタテハケ、内面はユビナデ調整を行う。外面はに

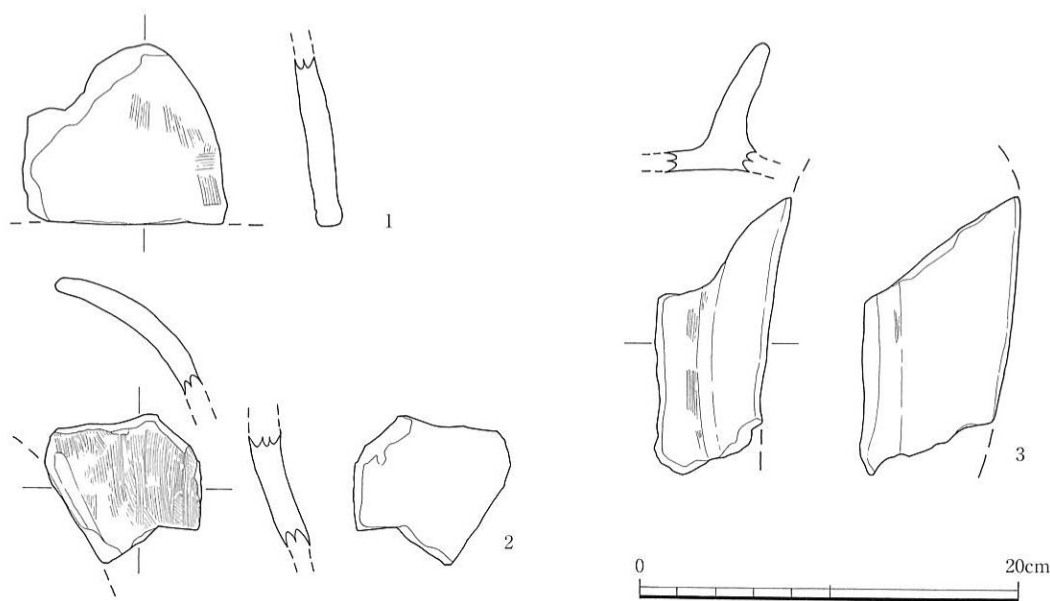


図62 15Btr.3層移動式カマド (S=1/4)

ぶい橙色 (7.5YR 6/4)、内面はにぶい褐色 (7.5YR 5/3)、断面は灰色 (N 4/0) を呈する。

3は底片である。タテハケを一部で確認できたが、風化のため詳細な調整は不明瞭である。内外面はにぶい橙色 (7.5YR 6/4)、断面は灰色 (N 4/0) を呈する。

(3) 第4面

(その1)の2Bトレンチで検出された掘立柱建物kの柱穴と、7Bトレンチ溝882の続きを確認した。その他、土坑数基を検出した。

1776溝 (図63-1~3、図版21-1~3) (その1) 7Bトレンチ溝882の続きである。今回の調査範囲では、北東-南西方向の、不整形な形状を確認できた。深さ10cm前後で、高低差は見られない。

1776溝からは多量の須恵器・土師器細片や土師質丸瓦片が出土したが、図化可能なものは以下の3点のみであった。1 (図版21-1) は須恵器坏身である。復元口径は12.8cm、復元器高は4.7cmである。外面は上半部回転ナデ、下半部は回転ヘラケズリを施す。陶邑II-1~3と考えられる。2 (図版21-3) は須恵器甕である。口径14.2cm、残高12.5cmをはかる。口縁部は内外面とも回転ナデ、外面は体部に平行タタキを施した後頸部から体部全体にカキメを施す。体部内面には同心円文タタキが残る。焼成はやや不良で、内面は灰色 (7.5Y 6/1)、外面は灰黄色 (2.5Y 6/2)、断面はにぶい橙色 (5YR 6/4) を呈する。3 (図版21-3) は土師器片口鉢である。内面はナデ調整を行う。外面は下半部に棒状工具によるナデ、中間部は部分的にユビオサエが残る。内外面ともに口縁部はヨコナデを施す。焼成は良好であり、

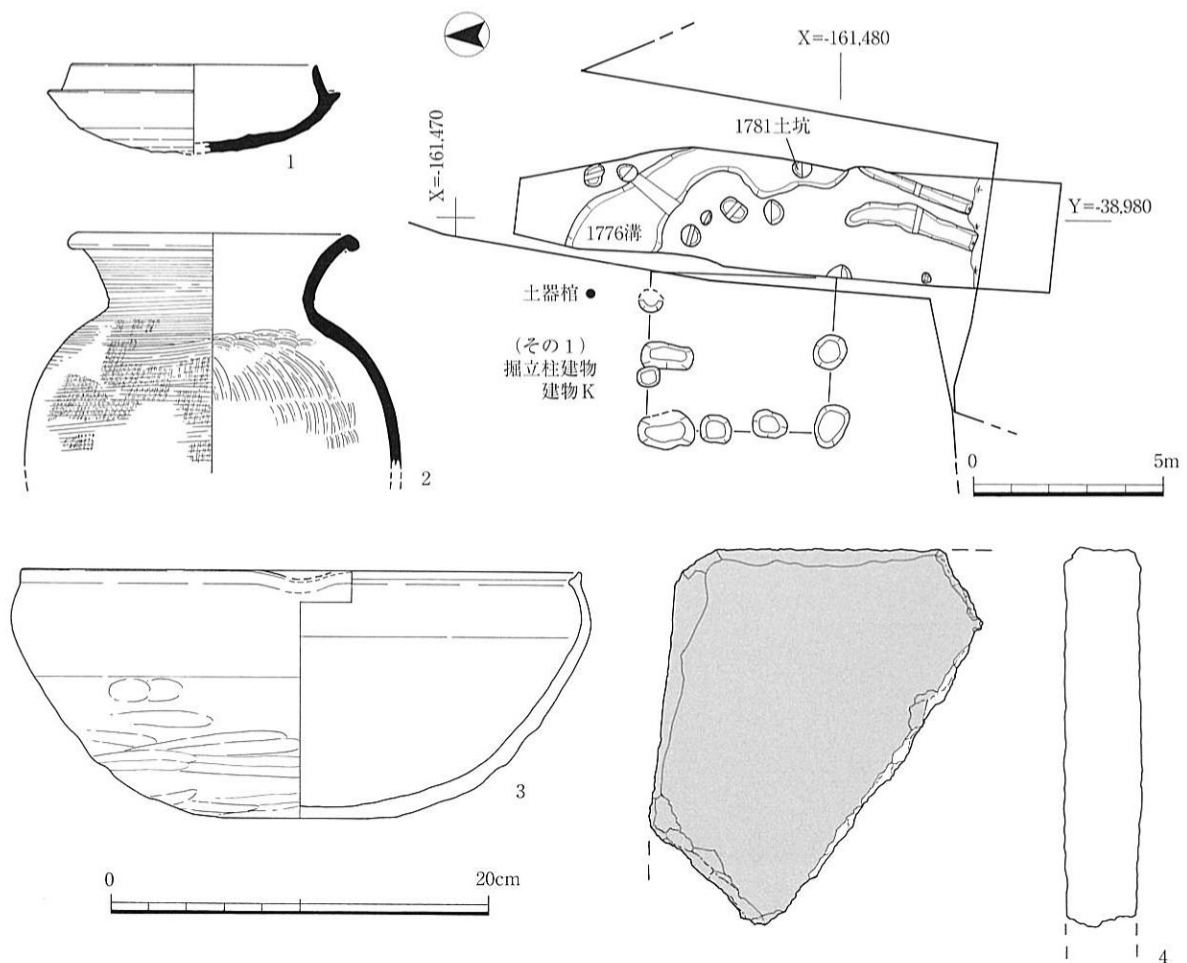


図63 15Btr.4面遺構 (S=1/200) 及び出土遺物 (1~3: 1776溝、4: 1781土坑) (S=1/4)

内外断面ともににぶい赤褐色（5 YR 6 / 4）を呈する。胎土には石英、長石が包含される。奈良時代のものである。明確な遺構の時期・性格は不明である。

1781土坑（図63 - 4、図版21-10） 当調査区の東側に位置する直径約50cmの円形土坑で、深さは7 cm程度である。周辺調査区で建物が多数検出されている状況から考えると、この土坑も建物にともなう柱穴であった可能性も指摘できる。

この土坑の肩部から凝灰岩製磚が出土した（図63 - 4）。この磚は厚さ4.0cm、残存長13.8cm × 14.5cmをはかり、磚本来の角は直角ではなく「へ」字状にやや広がる。割れ口1辺を除いては全ての面に被火の痕跡がある。割れ面3辺中2辺にも被火痕があることから、破片となった磚が火災等で火を受け、その後もう1辺が割れてから埋没したとみられる。この磚は土坑の肩部から出土しており、礎石に用いられたとは言いがたい。他の出土遺物は須恵器・土師器小片のみであるが、周辺の遺構から考えてこの磚も7～8世紀の所産だと想定したい。

（その1）**掘立柱建物k**（図63） 今回の調査では掘立柱建物kの南東隅の柱穴1782を検出した。調査区域の制限により全体の半分程度しか検出できなかったが、直径約60cm・深さ26cm程度と思われる。これは掘立柱建物kの他の柱穴規模とほぼ同じである。建物東桁行は調査区外のため検出できなかったが、西桁行約440cm（3間）、梁行南側380cm・北側360cm（2間）の側柱建物に復元できる。方位はN1.2° Wである。柱間距離は西側桁行が約145cm、南側梁行190cm、北側梁行180cmとなる。またこの建物は、柱穴の平面規模や深さが他の建物に比べて大きく深い。これは傾斜地に位置し、削平を大きく受けていないためと考えられる。当調査の柱穴1782では遺物が出土しなかったが、（その1）の報告では6～7世紀の遺構と位置付けられている。

（4） 小結

当調査区の面積は限られているが、（その1）掘立柱建物kの柱穴や溝882の続きが確認され、（その1）でも出土をみた被火痕跡のある磚が出土している。遺構から出土した遺物は全て細片だが、6世紀後葉～奈良時代の遺物が散見できる。

集落や遺構の変遷は後章の考察に譲ることとする。

7. A地区（2～4Aトレンチ）

（1）概要

A地区はそのほとんどが中位段丘から南東に下った部分にあたり、周囲の現地形としては、東除川に向かって下る緩い傾斜に耕作地の区画がなされ、2～3の大きめの段差が見られる。

その段差は基本的に東除川の左岸氾濫原の中での河岸段丘に分類されているが、一部、調査区より下流側で低位段丘に分類されている部分もある。

中位段丘崖は12Bトレンチから続くものが2Aトレンチ北端にかかるが、そこで大きく西に屈曲し、現在宅地のコンクリート擁壁となっている段丘崖に抜ける。

今回の調査区内では、調査結果から見れば、2Aトレンチの中位段丘崖直下の限られた範囲以外は縄文時代以降に一旦浸食され、その後の堆積で再び平坦化した事が判明した。

中位段丘崖直下で縄文時代石器を包含していた黒色粘土層は、平坦な地形がある程度は広がっていた時に形成されたと思われる、氾濫原の中で一時的に形成された後背湿地のようなものと思われる。かなりしまりの良い層の上ののっぺりはいるが、その下に下位段丘構成層が存在する可能性は低いように思われる。むしろ沖積層の形成と軌を一にしたものではないだろうか。

その後、黒色層の広がりより東側、3A・4Aトレンチの北端部も堆積が進み、南端部にも安定した地表面が出来、その間を西から東へ1546流路が通る状況になる。これがA地区北側の5面時点での状況である。しかし、南端部は面の高さが既に北の4面と同じくらいであった可能性が強い。現在は削平を受けて平坦だが、自然堤防のような地形であったと思われる。これが弥生時代後期頃の事である。

1546流路は、平面的にはかなり幅広の流路と確認されるが、断面を見ると幾つかの段階を経て北に流路を移動していく状況が分かる。これは次第に蛇行を強めている動きで、北岸には堆積物を供給して4面を形成し、最終的には1552流路となる。この間が弥生時代後期から古墳時代前期の期間である。

この4面時点では1546流路の上も地表化するのので、その上層を4層新とし、北側の5面上に堆積した層を4層古とした。また南端部はあまり堆積物の供給がないまま、この時点でほぼ北側と高さと同じになるので、その面を4面相当とした。また北側の一部に薄い堆積により遺構の新旧を分別できる部分があったのでそれを4-1面・4-2面と分けた。

この面で、古墳時代後期に1552流路北岸に多くの溝が繰り返し掘られる。これは流路蛇行の攻撃面を取水位置として、段丘崖下のやや高い緩斜面帯を通して氾濫原に導水する用水路と思われ、この時期東除川の氾濫原が耕地開発された事を示すと考えられる。

しかし、おそらく洪水による河道の直線化により、1552流路が半分埋没した凹地としてその機能を終えると、調査区内はやや凹凸のある地形で二次堆積が進行する。この時点でも自然地形を利用した小規模な耕地が存在していた可能性もあるが、現在につながるような形で全面的に耕地化が成されるのは、流路痕などの凹地を埋め立てて、その上に3層が形成される時である。

これ以降、3～1層は耕土の重なりになるのであるが、3層はその中でも有機分の溶脱が少なめで、4面凹地に堆積した二次堆積土と似通った部分がある。これは、耕地化の際に腐植を含んだ表土を利用したためと思われる。そのため、4面凹地に堆積した暗色を呈する層は3層系とした。

この耕地化の時期は遺物により、遡っても中世の範囲内と考えられる。以後、基本的に現在にまで引き継がれる耕地区画が存続し続けるようである。

(2) 上部包含層遺物 (図64)

以下では2～4 Aトレンチで1～3層内や中位段丘崖斜面などで出土した遺物を上部包含層遺物として一括して述べる。これにより、包含層とその上下の面の時期を大体把握できるものと思われる。

側溝出土の遺物もここに含めるが、その中には4面以下の包含遺物の可能性の強いものもある。

図64-1～4は2 Aトレンチの中位段丘崖斜面から出土したもので、層位的には図12の断面の2～5にあたり、段丘上3層相当層利用の人為的盛土と思われる。

1は須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英・長石を含み微細粒子にはチャート・雲母もわずかにある。陶邑編年Ⅱ-3～5にあるもので、おそらくその前半であろう。

2は須恵器蓋杯身片である。胎土には長石・石英を含む。内部底面に同心円文タタキの痕跡残る。陶邑編年Ⅱ-1のものである。

3 (図版23-1)は須恵器長頸壺である。内面は口縁回転ユビナデ、頸部はそれを切って縦のユビナデ、胴部は回転ナデ、底部に棒状工具の突き込みの痕跡残る。外面は底部回転ヘラケズリの他は回転ナデ。胎土に石英・長石・黒色粒を含む。口縁に4条の縦沈線のヘラ記号があり、口縁端部に一か所外側からの打ち欠きと思われる割れがある。陶邑編年のⅡ-3から飛鳥Ⅱ型式ぐらゐまでか。

4は土師器把手片。胎土に石英・長石・赤色粒を含む。調整はユビナデ。時期は限定できない。他に図化不能の小片に黒色土器B類が存在するので、層自体は10世紀半ば以降のものと思われる。

図64-6～8・13・15～17・30～36は1・2層、主に2層から出土した遺物である。

6は土師器椀片 (平城宮椀C)。10YR7/3を呈し、胎土は精製。平城宮V型式、8世紀後葉か。

7は土師器甕片。5YR5/4を呈し、胎土にクサリ礫わずかにあり、外面煤付着。平安時代以降。

8は土師器鉢片である。外面は粘土接合痕残りながらもユビオサエ後ヨコナデ、内面はヨコハケ?後ヨコナデ、口縁は内外面共最後に強いヨコナデ入る。5Y7/6を呈し、胎土には石英・長石・赤色粒の他にチャート・雲母もわずかにある。類例を特定しがたく、時期不明のものである。

13は甕の羽口片である。羽口の先端部分で外面に発泡した金属滓が付着する。外径5.4cm、内径2.8cmほどに復元できる。胎土には石英のみが残留する。

15は須恵器蓋杯蓋片である。胎土に長石・黒色粒を含む。時期は奈良時代としか限定できない。

16は須恵器長頸壺蓋片である。胎土に石英・長石・黒色粒含む。陶邑編年のⅡ-5～Ⅲ-1ぐらゐか。

17は3面出土だが、実質は2層である。須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英・黒色粒の他、わずかにチャート含む。奈良時代。

30は須恵器高杯身部片である。胎土に石英・黒色粒含む。陶邑編年のⅡ-3～4か。

31は須恵器蓋杯身部片である。胎土に長石・石英の他、黒色粒多い。歪みがあり、正確な口径は不明である。陶邑編年のⅡ-2～3のものである。

32も須恵器蓋杯身部片である。胎土に石英・長石あり。陶邑編年Ⅱ-3～4。

33も須恵器蓋杯身部片。胎土に石英・長石多し。受け部に蓋端部の溶着片。陶邑編年Ⅱ-3～4か。

34 (図版23-2)は須恵質軒丸瓦片である。(その1)の谷352出土のものと同型の奈良時代のもの。

35は土師器椀片である。精製胎土で若干の石英とわずかのチャートを含む。口縁のヨコナデ以外調整不明。残存率悪く、復元径に不安がある。外面下半には粘土接合痕を残す。

36も土師器椀片である。精製胎土でわずかに長石・石英を含む。両者とも平城宮椀C類か。平城宮V型式・平安京I期古型式頃と思われる。

図化できたものは以上だが、他に、2層には灰釉陶器、黒色土器など平安時代の遺物も一定程度あって、さらに瓦器椀が存在するのは確実である。耕土として形成された初現の年代は確定できないが、耕作時期が中世頃であるのは確実であろう。

なお、銭も2枚出土している(図119)。皇宋通宝(1039年～)と祥符通宝(1008年～)である。

また、1層には、陶器片や染め付けの小片が見られ、江戸時代以降のものであるのは確実である。

図64-5・10・11・15・18～29は3層出土の遺物である。

5は須恵器平瓶口縁片である。内外面とも回転ナデで粘土接合痕を残す。胎土には石英・長石の他、黒色粒を多く含む。飛鳥Ⅰ～Ⅲ型式の中におさまるか。

10は土師器甕片。5YR6/6を呈し、石英・長石・赤色粒を含む。調整不明で、時期を特定できない。

11は土師器把手片である。10YR7/2を呈し、石英の他、長石・赤色粒をわずかに含む。ユビナデ・ユビオサエにより成形。時期は特定できない。

14は土師器高杯脚部片である。7.5YR6/4を呈し、精製胎土だが、石英・長石・赤色粒・角閃石がわずかに入る。内面は上半シボリ痕、下半二段にユビオサエ、外面は不明瞭だが、脚柱部にタテナデ、脚裾部にヨコナデのようである。時期は古墳時代後期から飛鳥時代とまでしか言えない。

18は須恵器長頸壺の蓋片。胎土に長石含む。天井部外面に自然釉。陶邑編年のⅡ-3～Ⅲ-3頃。

19は須恵器無蓋高杯身部片か、杯身片の可能性もある。胎土には石英・長石若干あり。陶邑編年Ⅱ-5ぐらいか。杯なら飛鳥時代全般にあり得る法量であるが、ケズリがここまで上がるものは少ない。

20は須恵器無蓋高杯身部片である。胎土に石英・長石あり。陶邑編年Ⅱ-3～4ぐらいか。

21は高杯身部片と思われる。杯身としては法量的にあり得ない。胎土に石英・長石を含む。陶邑編年のⅡ-3～4のものである。

22は須恵器蓋片である。器表は青灰色だが、断面は赤味を帯びる。つまみの大きさや櫛描き列点文から長頸壺の蓋の可能性が高い。胎土には石英・長石わずかにあり。陶邑編年のⅡ-3～5か。

23は須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英・長石・黒色粒含む。天井部外面の回転ヘラケズリ部分に一部手持ちのヘラケズリが加わる。陶邑編年Ⅱ-2～4にある。

24は須恵器蓋杯身片である。胎土に石英・長石・黒色粒あり。陶邑編年Ⅱ-3前後のものであろう。

25も須恵器蓋杯身片である。胎土に石英・長石あり、微細粒子に黒色粒もある。時期は24と同じ。

26も須恵器蓋杯身片である。胎土には石英・長石を含む。時期は陶邑編年Ⅱ-1～4。

27は須恵器蓋片である。器表はN5/1を呈し、断面は10R5/1と赤い。長頸壺の蓋と思われるが、やや口径が大きめで、特異なつまみ、焼成状況から見ると、舶載の陶質土器や初期須恵器の可能性も否定できない。その意味もあり、時期は特定できない。

28は須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英・長石・黒色粒若干あり。陶邑編年のⅡ-3～4である。

29は須恵器蓋杯身片である。胎土に石英・長石・黒色粒若干あり。陶邑編年のⅡ-3～4である。

図化できなかった小片も、以上のものと同じく陶邑編年Ⅱ-3～5が圧倒的に多く、その中でもⅡ-3～4が多い。また、飛鳥時代のものも若干あり、その中で時期が限定できるものは飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式のものが多いようである。また奈良時代のものも少数ある。

しかし、小片の中にわずかながら、黒色土器A類が1片、瓦器椀が2片出土しており、これが、3層が耕土として成立した時期を示していると思える。11世紀後半以降の事か。

ただ、遺物の多い6世紀後半から7世紀前半の時期は段丘上の古い方の集落の時期と一致すると同時

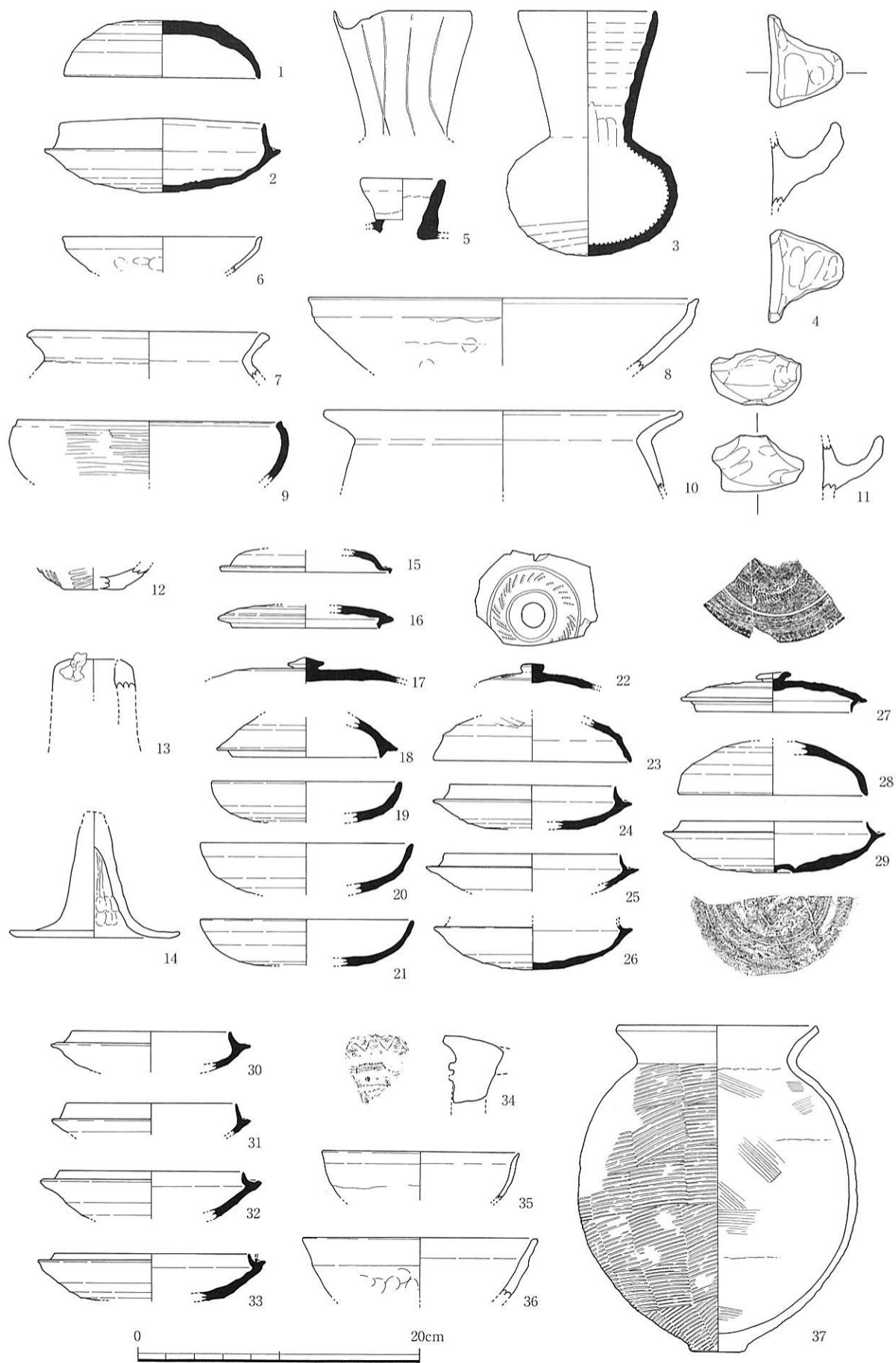


图64 2A·3A·4A tr.包含層出土遺物 ([2Atr.] 1~4: 北側段上斜面堆積、6~8: 1·2層、9: 側溝、5·10·11: 3層 [3Atr.] 12: 側溝、13·15·16: 2層、14·18~29: 3層、17: 3面 [4Atr.] 30~36: 2層、37: 側溝) (S=1/4)

に、ここA地区の4面の溝群の掘削、存続の時期を暗示しているとも言える。

図64-9・12・37は側溝出土である。

9は須恵器鉄鉢形鉢片である。内面回転ナデ、外面ヨコミガキ、口縁部内面に漆が付着する。胎土は精製で、微小粒子に石英・長石・角閃石を含む。この法量に安定するのは平城宮Ⅲ～Ⅴ型式の間か。

12は弥生土器甕底部片である。10YR 7/3 を呈し、胎土に石英・長石を含む。Ⅴ様式のものである。

37(図版23-9)は弥生土器甕である。10YR 5/2 を呈し、胎土に石英・長石・チャートを含む。Ⅴ様式系の甕だが、胴下半まで丸く、異様に球胴化した形は河内Ⅵ様式でも後半、庄内式併行期の可能性もある。残存率50%以上あり、4Aトレンチでも北側で出土しているため、おそらくはその周辺で、4層内に無遺構で包含されていた、完形率の高い土器群と同じ層内にあったものと思われる。

(3) 3面(図65)

3面は、現存する最古の耕土である3層の上面であり、比較的平坦である。ただし、今回の調査区の北端部と南端部では残りが悪く、この時点ですでに4面の見えている部分も多かった。つまりその部分では、本来段差が存在していた可能性もある。遺構密度が高くなかったため、3面検出のものを残しつつさらに下げて、4面と同時に調査した。図65では1552流路の埋土上面の遺構と3層系の土が堆積していた4面の最終時点の遺構を同時に表現した。

3面の遺構は、3層が耕土である時点で形成されたとと思われるものは少なく、大部分は2層が形成され、3面が耕土床面化した時期のものであるようだ。実際には浅い鋤溝が密集していたが、それらは検出前に掘削し、除去した。ただ、幅が広く、深めの鋤溝は結果として残存した。

A地区の段丘崖下の今回の調査区は、現在の耕地区画で大まかに言えば、長軸をN7°Eに持つ3枚の短冊形の区画にかかっているが、3面でも、一部その方向性に整合する遺構が見られた。

2Aトレンチ北端の段丘崖は、現耕土直下では一段の落ちになっていたが、その肩部には盛土が見られた。それは段差の下裾に土手状の盛土を置いてから、その上の斜面上に盛土するような形で、それを取り除くと二段になった落ちの形が現れた。

面的には段丘崖下の4面に相当する面だが、この面にある程度の期間存続したと思われる水路の跡がある事と、これが、最初の耕地化に伴う地盤整形である事を考えると、この形が3層が耕土であった時期にはほぼ対応するものと思われる。

1635土坑(図66) 4Aトレンチ北西端で検出された。この部分では3層はほとんど残存していなかったが、重複する4面の遺構を全て切っていた事と埋土から、3面の遺構と判断した。

一部調査区外へ出ているが、深さ50cm、幅3.9m、長さは4.3m以上ある長方形の土坑と思われ、長軸方向は現在の耕地区画と一致する。壁の傾斜はやや緩いが底面は幅2mほどが平坦である。

埋土は、底に、有機分を含んだシルト～粘土が止水堆積し、その上に肩部から砂層が流入する。そして、3層起源の人為的埋土と思われる層で埋没する。上は2層が覆う。

遺物は図化可能なものはなかったが、布目のある燻し平瓦片があり、須恵器では甕・高台杯片、特に甕口縁部片では平安京Ⅱ期古型式以降のものと思われるものがある。土師器は羽釜の鏝片・甕片など。青磁碗の小片が一つあり、瓦器も碗とこね鉢の小片がある。

この土坑は3面の遺構の中で珍しく、3層が耕土の時に存在していた事が層位的に確認できる遺構である。埋土からは、ある程度の時期滞水していて、洪水と思われる砂の流入の後、埋め立て平坦化して、2層が形成されたと考えられる。おそらく洪水は2層の起源となる土砂を供給したものであろう。

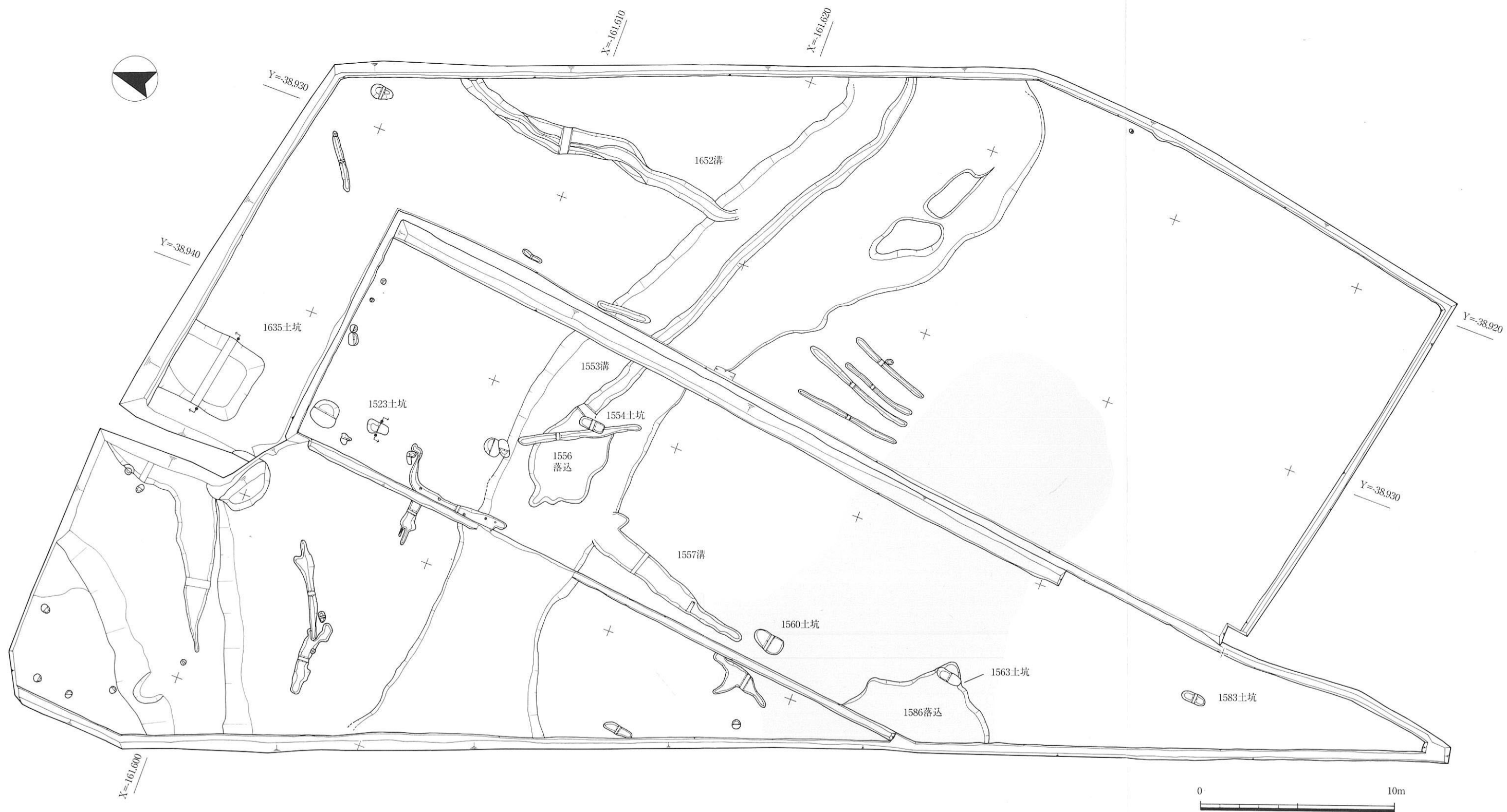


図65 A地区3面及び1552流路最上面遺構(4面最終)(S=1/200)(トーン部分は1586落込を中心とした凹地)

つまり、遺構内の遺物は3層から2層へ耕土が変わる時期を示していると言える。瓦器にこね鉢が存在する事から、それは、平安京VI期以降、13世紀以降の事と考えられる。

遺構の性格は明確にしがたいが、耕地区画の端にあり、方向性も耕地区画に沿う事から、耕地内の施設であると見られ、その大きさや、滞水状態にあった事などから考えれば、水溜めの可能性が高い。段丘崖下である事や、埋没した溝を切っている事から見ると、多少の湧水もあったかも知れない。

1523土坑 (図66) 3 A トレンチ北西側にあり、ほぼ南北に長軸を持つ長方形に近い土坑で、北側の幅がやや広い。幅70~50cm、長さ1.2m、深さ24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち、底面は幅45cmほどで平坦である。砂の中に4層系のブロックのある埋土で、下層の方がブロックが多い。壁沿いに幅1~2cmの砂のみの層があり、板を抜き取った跡に砂が入ったような状況である。銭が1点、底部面に貼り付いた状況で出土した。腐食が激しく、取り上げ時に破碎した。他に遺物は出土していない。

興味深いのは1554・1560・1563・1583など、規模・方向・形状・埋土などがほぼ共通する土坑がトレンチ内に散在する事である。いずれも遺物の出土はない。

記憶にあるかぎりでは切り込みは2面まではあがらない。3面で埋土に砂が入っていると言うことは2層を形成するきっかけとなった洪水堆積物がまだそのままある時点で土坑を4層内にまで掘り込み、その4層のブロックと周辺の洪水砂で埋め戻したと考えるのが妥当であろう。

遺構の性格は特定しがたいが、洪水後の復旧作業時の一連の作業に関係した遺構と思われる。

その他の遺構 鋤溝は多くあったが、検出したものは若干である。中には今の耕地区画と違う方向性もある。切り合いで見るとその鋤溝は古く、新しいものは現在の耕地区画の方向と合う。他に井戸が2基あるがこれは切り込み面がさらに新しいと思われる。トレンチ際で完掘はできなかった。

段丘崖の2段の段差は、上段斜面に溝があり、中段はその先から段差際を北に回り込む溝がある。段丘上から一旦小段に水を落とし、その面で北へ水を廻していく水路と思われる。中段の平坦面はその溝の幅よりもっと広く、段丘崖を上がる里道のような道があった可能性もある。

(4) 1552 流路最上面遺構及び同時期遺構 (4面最終) (図65・67)

3層除去後、3層の起源となるような有機分の多い3層系の土が4面の凹地に残存していた。それを更に除去すると1552流路の最終埋土の上面に遺構が検出され、4面からその面にかけて走る溝も見られた。また、3層系埋土が下がる落ち込みもあった。それらを、他の4面の遺構と別に、4面最終段階、3層の耕地造成直前までの、3層系の土層に対応する遺構として捉え、ここに独立して記述する。

1556落ち込み 1552流路埋土上面で、3 A トレンチでの部分のほぼ中央で検出された不定型な落ち込み

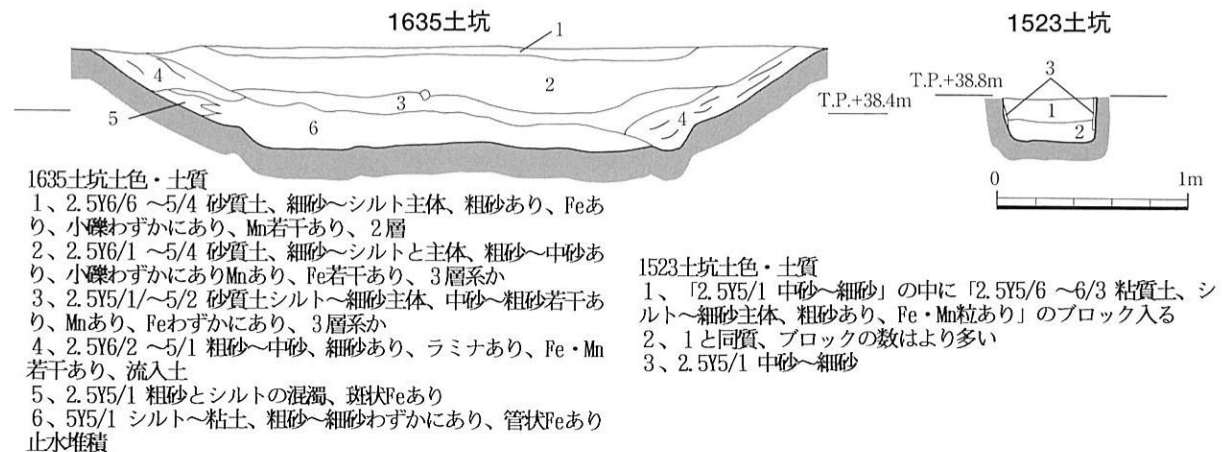


図66 A地区3面1635土坑断面(南から)・1523土坑断面(南から)(S=1/40)

である。3層の下面に一条の鋤溝が検出され、それより3層系の層をはさんで下で検出された。南北3.8m、東西5.4m、深さ18cmを測る。特に人為的な形態は認められないが、1557溝に向けてと北西側に輪郭がやや突出するのが気になる。元々は溝が伸びていたかも知れない。

出土遺物で図化出来たのは図67-6・7である。

6は須恵器短頸壺片である。胎土に石英・長石・黒色粒を含む。内外面共回転ナデ。古墳時代後期から飛鳥時代のものである。

7は高坏身部片。胎土は石英・長石を含む。三方透かしの長脚である。陶邑編年のⅡ-3～4頃か。

これら以外は土師器の小片が出土しているのみである。器種は不明。

1553溝 1556落ち込みの東側に切り合いなしでつながり、1552流路埋土上面の凹地の中を東南東に伸び、流路の形に沿って東に向きを変えてから調査区外へ出る。幅70～80cm、深さ20cm前後の溝である。底部のレベルから見ても1556落ち込みから東へ排水する水路と思われる。遺物は出土していない。調査時点では流路跡の凹地を埋め立てる前に排水して乾燥させるための水路かと考えたが、後述の1557・1652溝などにつながっていた可能性などを考えるとそうとも言いきれない。

1557溝 3Aトレンチの中央西寄りに南南西から北北東を指向している。幅1.5m～90cm、深さ12cm・現存の長さ9.6mのほぼ直線の溝である。

北側は1552流路の肩から、最上層上面に少しのび、その斜面に開口して終わっている。南側は1586落ち込みに向かったの緩い斜面で次第に細くなって開口して終わる。

図化できた遺物はないが、須恵器は蓋杯片や高坏脚部片が5片ほどあり、土師器は器種不明の小片が13片出土している。須恵器は陶邑編年Ⅱ-3～4の時期のものである。

この溝はその位置が重要である。南側の1586落ち込み周辺には3層系の土が堆積する自然地形の凹地が広がり、その凹地と1552流路跡の凹地との間は自然堤防状の小規模な微高地がある。1557溝はその微高地を横切って、南北の凹地をつないでいる形になる。

これは1586落ち込みを中心とした凹地の排水路として機能できる溝である。そして1552流路側に排水したとすると丁度その水は1556落ち込みに入る事になる。

その事は3層の耕地開発の前に、自然の凹凸を利用し、少なくとも排水の水路体系を持った耕地が存在していた可能性を示すのである。取水は現東除川の方に移動した河道からであろうか。

1652溝 4Aトレンチの北側の4面をほぼ南北に走るが、1552流路内では、肩部の斜面堆積と、埋土最上層の上を通り、南端でやや方向を東に向けて、斜面で途切れている。幅1.5m～80cm、深さは平均30cm程度。やや蛇行し、断面で確認はできなかったものの、掘り直しがあるようである。

南端の位置と方向から見て、1553溝に排水する水路だったと思われる。1557溝と機能的に共通し、北

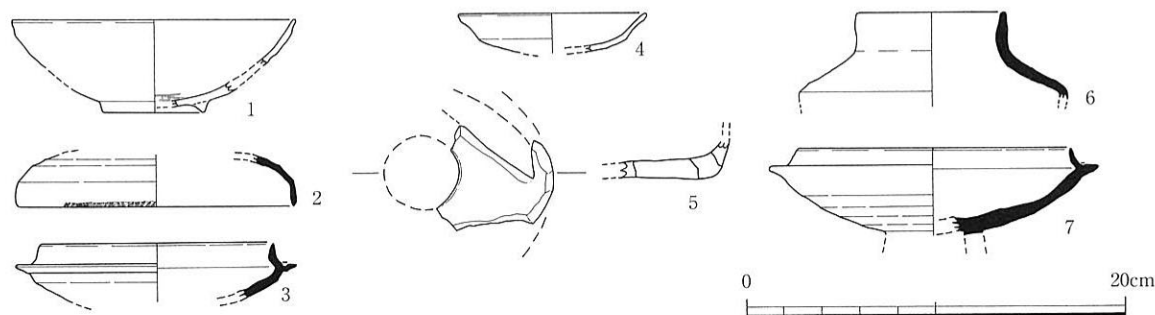


図67 3Atr.遺構出土遺物 (1～5:1586落ち込み、6・7:1556落ち込み (1552流路上面)) (S=1/4)

側にも耕地の存在を推測でき、流路跡の凹地に通る1553溝に水を集める水路体系が南北に広がっていたと考えられる。北側は位置的に見て、12Bトレンチの開析谷などから取水していたのであろうか。

1586落ち込み 実際には明確な肩はない。1552流路から南へ5～10mいくと、3層直下に3層系の堆積があり、その下面が緩く下がっていく。これは全体では幅10mほどの後背湿地状の凹地になるが、3Aトレンチ西端で、さらに落ち込んでいき、土層もやや粘質の高い層に変化し、包含される遺物もやや増えたので、その土層の範囲を落ち込みとして遺構扱いにした。

調査区内での深さは25cmほど、1552流路南岸の最高所からの比高差は35cm、幅は最大7.8mほどだが、調査区西外側にさらに広がり、深さも深くなりそうである。

この形は1586落ち込みを中心とした凹地が、流路の破堤的な水流により浸食された地形で、それ故に流路の上流側に近い部分ほど浸食が激しい事を意味している。

出土遺物で図化できたのは図67-1～5（図版24-1）である。

1は瓦器椀片である。磨滅が激しく内面のミガキもほとんど残っていないが、見込みには格子状のミガキが入っていたようである。和泉型のⅡ期でも古い時期のものか、12世紀前～中葉と考えられる。

2は須恵器蓋杯蓋片。口縁端部外面に密に刻み目が施されている。陶邑編年Ⅱ-3～4頃のものか。

3は須恵器蓋杯身片である。高杯身部片の可能性もある。陶邑編年Ⅱ-3～4のものか。

4は瓦器皿片である。歪みがあり、口径・傾きの復元にはやや不安がある。やや磨滅するが、口縁部周辺にはミガキはないようである。平安京Ⅵ期以降、12世紀末葉以降13世紀までのものか。

5は土師器甑底部片である。5YR6/6を呈し、精製胎土。中心孔と回りに3孔あるタイプである。飛鳥時代から奈良時代のものか。

図化出来なかった遺物では古墳時代後期と奈良時代の土器が多いが、瓦器では以上の他、甕らしき胴部片も存在する。全体的には、瓦器で皿や煮沸具が一般化する13世紀代に埋没したものと思われる。

2・3層の年代について ここで問題となるのは、1586落ち込み内の遺物が、それを中心とした凹地の形成の上限年代を示すかである。先述の通り、2層が形成されたのも13世紀以降である。その前に平坦化を伴う耕地開発の3層と自然地形を利用した耕地化の可能性のある3層系がある。その3層系より層位的に低い落ち込みの遺物の示す年代も13世紀頃である。

しかし、3層系の土が耕土であれば、落ち込み埋土が一度それを切って堆積しても再びその上を耕作すれば切り合いは消滅する。2層が洪水堆積物起源の耕土の可能性が高い事を見ても、それまでは洪水堆積物の供給のある地形であったとすれば、この落ち込みの遺物は、むしろ、3層系の土が耕作を受けなくなった時期、即ち3層が形成された時期の上限を示していると思われる。

つまり、その付近の凹地はおそらく1552流路が埋没して機能を停止する飛鳥時代前半頃から存在し、何度か洪水を受けながらもいつしか自然地形に合わせた耕地が作られる。それも13世紀をさほど遡らない時期と思われるが、最後に1586落ち込みの形成と埋没が成され、程なく平坦化を伴い3層を耕土とする比較的規模の大きな開発が13世紀代に行われたものと思われる。

ついで、洪水の堆積物を利用して2層が形成されるが、それ以降の土砂の供給は著しく減少する事から、2層形成後、東除川の下刻が進行し、現在4Aトレンチ南外側にある河岸段丘が形成されたものと思われる。近世初め頃の事であろうか。

おそらくこれらの動向は上流の狭山池の歴史とある程度連動するものと思われるが、今の所、その関係性を明確にはできない。

(5) 北側 4-1～2面 (図69・70・71)

A地区の4面で、1552流路より北側では、古墳時代の溝が多く検出された。それらは、4Aトレンチ北端西半から3Aトレンチ北端、2Aトレンチ北側段丘崖直下にかけて密集している。

その中で、2Aトレンチでは、溝が上下に重複しており、その間に薄く、4層系の二次堆積土が堆積していた。そこでそれらを4-1面・4-2面と分け、遺構の新旧関係を表現する事にした。

この部分は1552流路の蛇行の攻撃面に当たり、溝のほとんどは流路からの取水関係のものである。

1534溝 (図70・68-1～3) 幅2.9～2.7m・深さ90cmほどの溝である。検出した長さの内、1552流路に近いほうの半分は二段掘りの断面形を呈し、流路に直線的に取りつくものと、西に屈曲し、2A・3Aトレンチ境で斜めに取りつくものとに分岐している。これは検出した埋土最上面では現れないが、3Aトレンチ側断面で見ると、明らかに掘り直しが見られ、この分岐が新旧関係にあったものと推測される。その場合、西に屈曲する方が、流路肩部に近づいた部分で二次堆積層に覆われていたので、切り合い上、古いと思われる。

最終的にこの溝は洪水堆積物で埋没して機能を終える。しかし、その堆積物は流路に近い方が厚く、洪水で取水口が埋没した後、徐々に二次堆積で埋没していった状況が推測される。

遺物は少なく、土器は2点しか出土していない。(図68-2・3)

2 (図版22-10) は須恵器長頸壺である。出土状況では、溝を埋没させた洪水砂層上面にあり、口縁部の3/4を欠失するが、磨滅もほとんどなく、ほぼ溝埋没時の同時期的遺物と考えて良いものである。

器表は5PB6/1～7/1を呈し、断面は5P5/1を呈する。胎土には石英・長石をわずかに含む。調整は回転ナデを基調とするが、胴部外面中程はヘラによるナデで、下半は不定方向の静止ナデ、内面頸部下半にはユビオサエが一例巡る。内面底部には降灰痕。陶邑編年I型式のものだが、外面胴部下半に回転調整を欠く点でI-2まで遡り得て、口縁部が明確な二段構成を取らず、上半が直立する事と法量を龜の基準に沿ってみると、I-4まではあり得る器形である。

3は土師器高杯身部片である。7.5YR6/6を呈し、長石と赤色粒を含む。外面にタテハケが残り、脚部との接合部には輪状に凹部が残る。時期は特定しがたい。

1点の遺物のみで時期を云々するのは危険であるが、2の須恵器壺が、他の溝や1552流路埋没時の遺物よりはるかに古く、この溝が、A地区での取水溝掘削の端緒となった可能性は高い。

1600溝 (図70・68-4) 幅1.9m～1.1m、深さ40cm前後の断面逆台形の溝で、調査区内では全体で

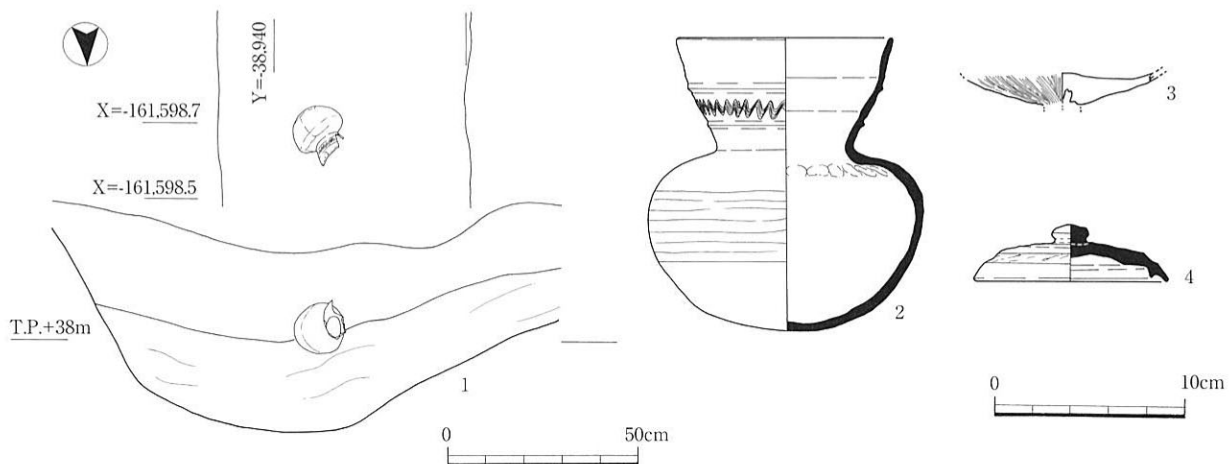


図68 1: 4Atr.4面1534溝土器出土状況 2・3: 4Atr.1534溝出土土器 4: 2A・4面1600溝出土土器



图69 A地区 (2~4Atr.) 4面 (S=1/200)

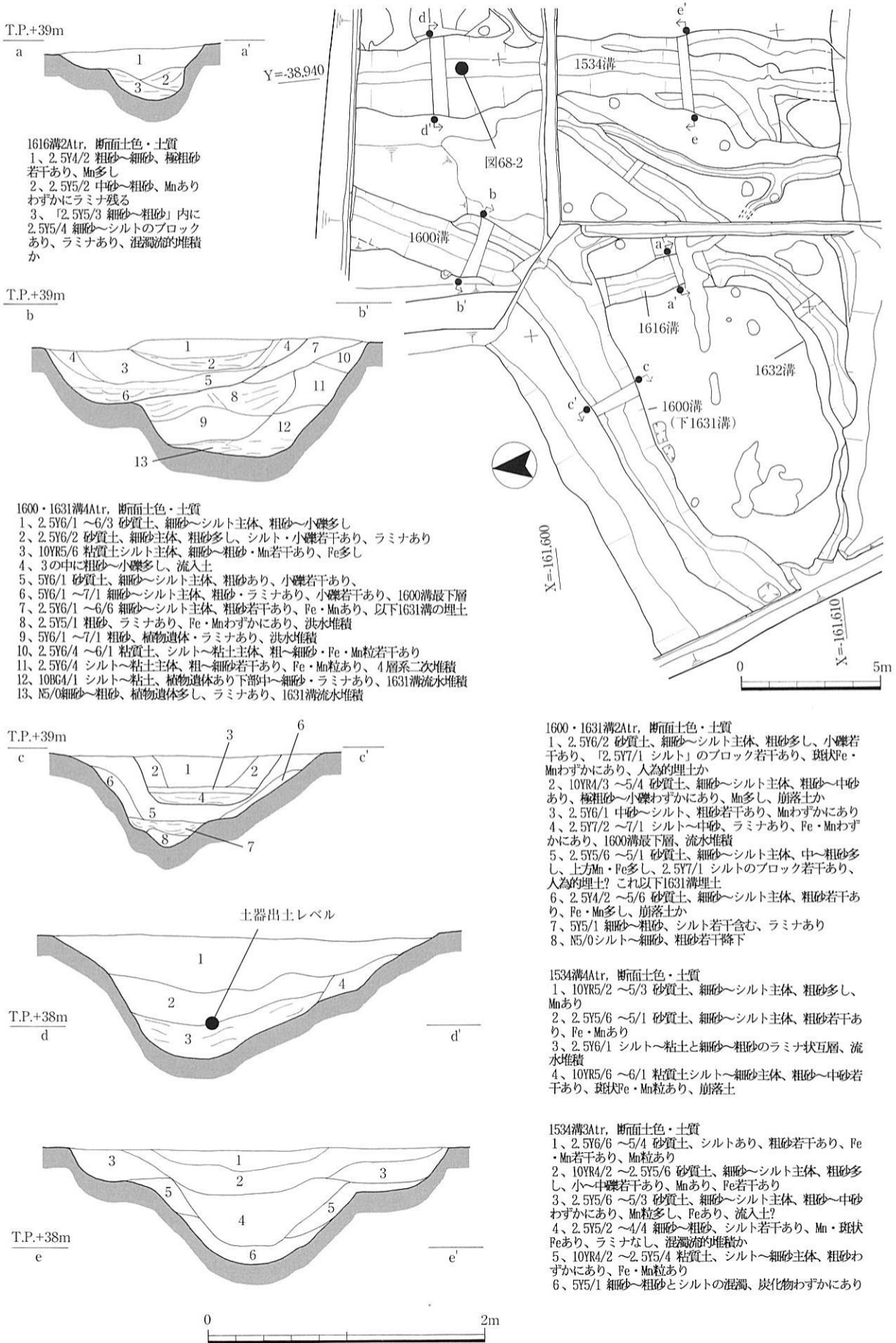


図70 A地区北側4-1面溝群平面図 (S=1/200)・断面図 (S=1/40)

1631溝の上に重複している。1631溝が洪水で浸食され、埋没した後、一部は盛土による整形も含め、再掘削したものと思われる。4 A トレンチ側の断面でさらにもう1回再掘削されたように見えるのは、まったく別の溝が重複している可能性が高い。最終的にはブロック土で埋められている。

そのブロック土では1616溝を切っており、それより後まで存続していたと思われるが、同時期存在していた可能性があるかどうかは確認できなかった。

遺物は少ないが、1631溝との分別はできている。土師器の高杯・甕の小片9片、須恵器の甕・蓋杯の小片10片などがあり、6世紀代のものも見られるが、完形の杯蓋が1点出土している。図68-4（図版22-11）の端部は内外面共回転ナデ、天井部内面は静止ナデ、外面は粘土皺の残るユビナデが1条巡り、そこからつまみまではヘラケズリ。胎土には石英・長石・チャート・黒色粒を含む。

内面のかえりより外側から外面端部までが明確な境を持って黒色を呈し、3枚以上重ね焼きしていた事が分かる。陶邑編年のⅢ-2に位置づけられる。溝群の中では最新の遺物である。

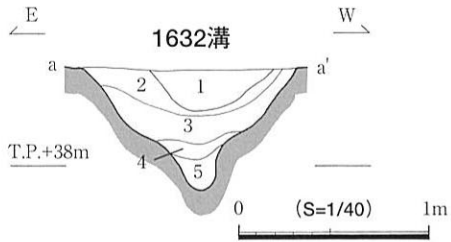
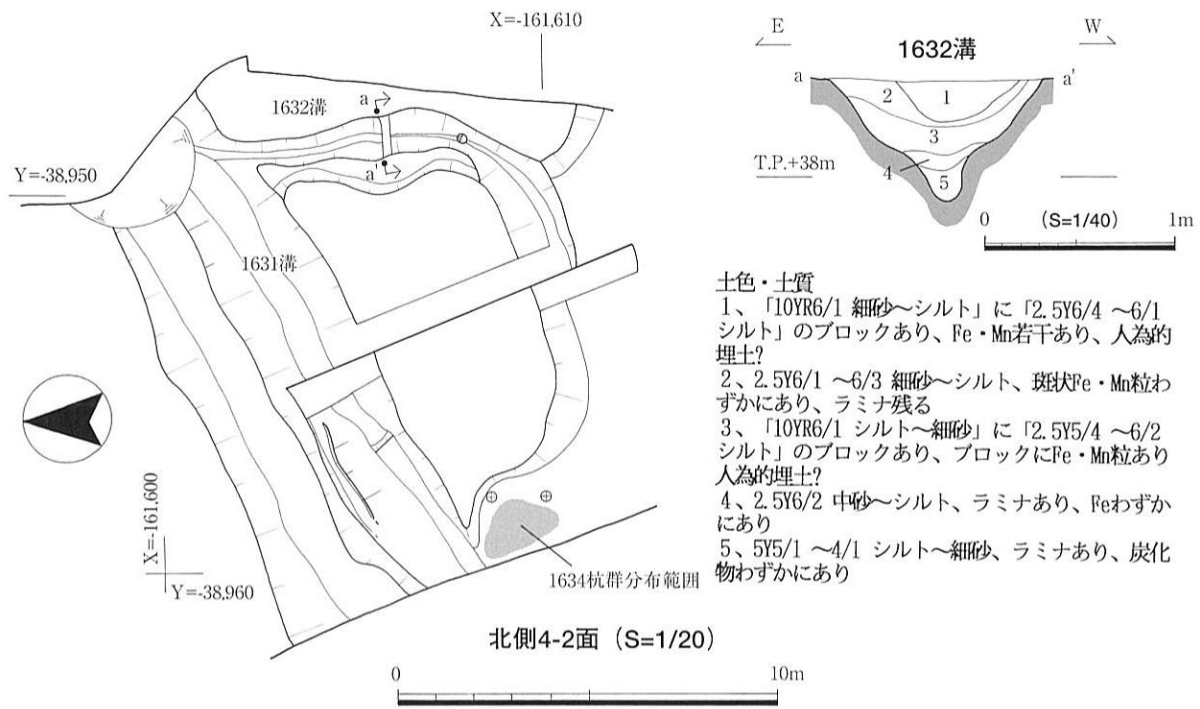
1616溝（図70） 幅1m前後、深さ40cm弱ほどの溝である。平面的には1632溝とほぼ重複するが、深さ等はかなり違う。底面のレベルは1600溝とほぼ一致する。埋土最上面では1600溝に切られた形になるが、こちらの溝は最上層まで洪水砂で埋没しているので、最終的に人為的埋土が入るか入らないかで切り合い状の形になったのかも知れない。北から南に伸び、大きく西に屈曲してから1552流路に斜めに取りつすが、その部分はかなり肩部が浸食されているようである。遺物は出土していない。

1529・1530・1641溝（図69） 4-1面段階では、1534溝と1616溝の間にこれらの溝が存在する。1530溝は平均幅40cmほど、深さは最大でも14cm、平均5cmに満たない浅い溝で、1552流路に直角に付くが、そこから緩く北東に曲がり、1529溝に平行に走った後、合流する。1529溝は平均幅80cmほど、深さ16～14cmほどで、1616溝との関係は明らかでないが、近い部分でも底のレベルはこちらが6cmほど高い。北側で1641溝と合流する。1641溝は肩崩れが激しく、北が3面の遺構に切られているが、幅1.6～1.4m、深さ26～43cm。4 A トレンチでのみ検出し、3 A トレンチでの形は分からない。底のレベルは1534溝より40cmほど高いが、1600溝よりは20cmほど低い。

全体的に、南から北に、小さな溝が大きな溝へ次々と合流していくが、取水口付近の溝の形態としては理解しづらい。可能性としては、流路の水位と必要な水量によって、高さの違う取水口を使う工夫だろうか。存続時期は1534溝の後、1616溝の前に位置づけられる。遺物は出土していない。

1631溝（図70・71） 1600溝の下に重複する溝で、肩部は大部分4-1層に覆われている。幅1.8～1.9m、深さ60～80cmほど。肩部の流入土等を見ると、かなり存続期間は長そうだが、洪水砂で埋没する際はかなり浸食を受けたようで、特に取水口に近い部分は下刻が激しく、1600溝を掘削する前に、一度ブロック土で埋めている。この溝の取水口はそれ以前にも、1634杭群で後述するように、数度の破壊と補修を繰り返しているようだ。1632溝とは最終の洪水砂のレベルがほぼ等しく、同時期存在の可能性もあるが、その砂はこちらが粗砂で1632が細砂、また1632の方が底のレベルが20cmほど低く、取水口付近の浸食も激しい等、こちらより先行する要素がある。遺物は出土していない。

1632溝（図71） 1616溝の下に重複する溝でその北側には肩部を見せていたが、この溝から南東側は4-2面が大きく落ち込み、4-1層が厚めに堆積しているので、4-1面では肩が見えなかった。幅1.1mほど、深さ60cmほどで、元々は断面「V」字形の溝が深さ40cmほどの断面半円形の溝に再掘削されたようである。先述したように、1631溝より先行していた可能性が強い。取水口部分はかなり浸食を受けているが、この溝が切っている流路肩部の斜面堆積層も存在する。溝内の埋土にはそんなに粗い粒子は



- 土色・土質
- 1、「10YR6/1 細砂〜シルト」に「2.5Y6/4 ~6/1 シルト」のブロックあり、Fe・Mn若干あり、人為的埋土?
 - 2、2.5Y6/1 ~6/3 細砂〜シルト、斑状Fe・Mn粒わずかにあり、ラミナ残る
 - 3、「10YR6/1 シルト〜細砂」に「2.5Y5/4 ~6/2 シルト」のブロックあり、ブロックにFe・Mn粒あり 人為的埋土?
 - 4、2.5Y6/2 中砂〜シルト、ラミナあり、Feわずかにあり
 - 5、5Y5/1 ~4/1 シルト〜細砂、ラミナあり、炭化物わずかにあり

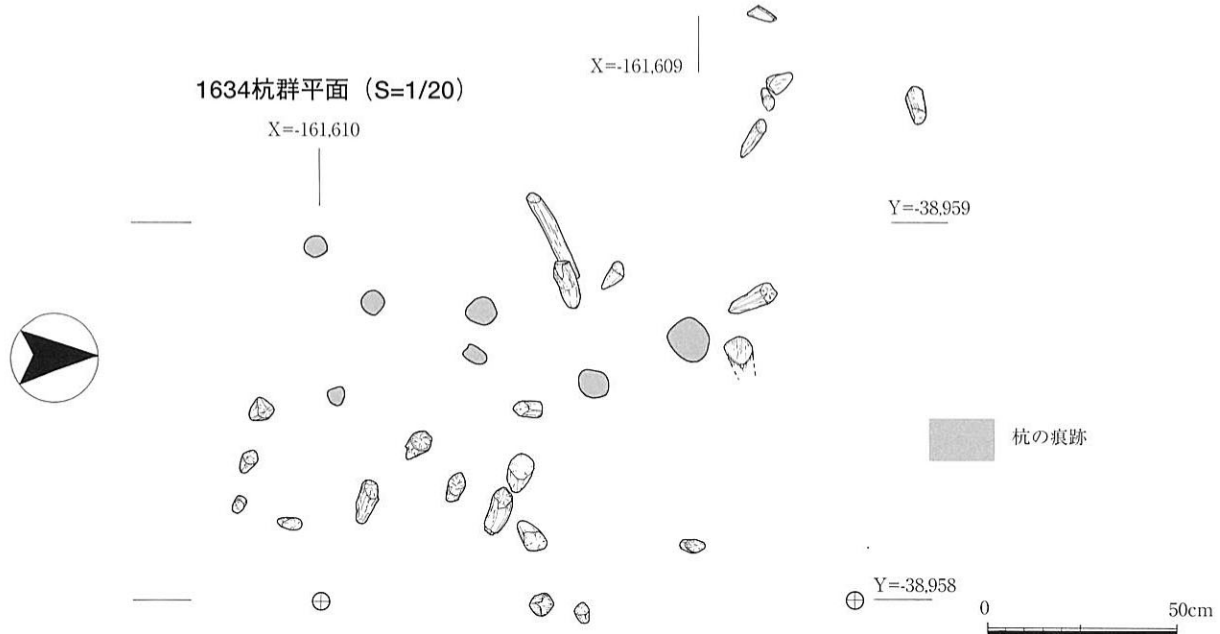
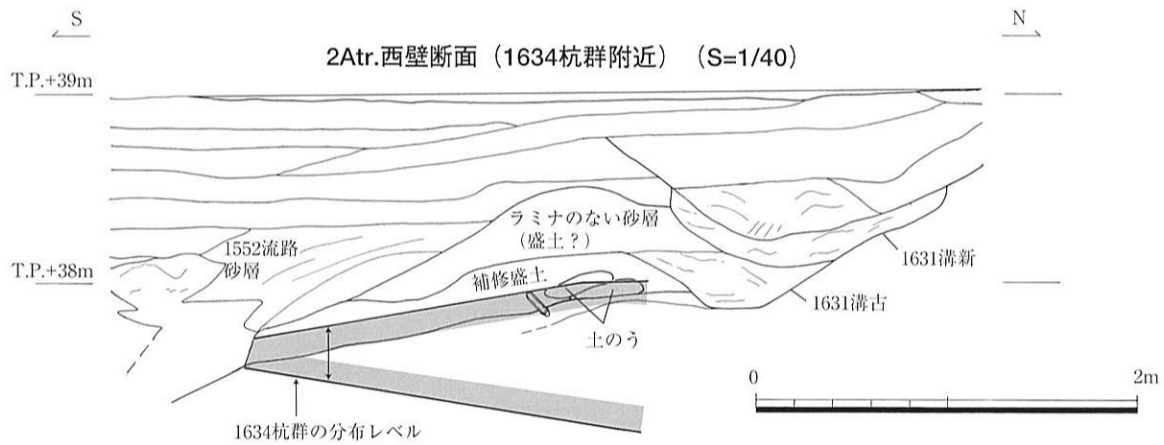


図71 A地区北側4-2面溝群及び1634杭群

ないので、溝の断面形自体はあまり浸食されていないと思われる。遺物は出土していない。

1634杭群 (図71) 4-2面の1631溝のA地区西端部分で、1552流路との間に二次堆積土が見られた。

これを流路の肩を追って除去していくと、この部分が1631溝が流路に開口している取水口で、流路側からかなり、えぐるような浸食を受けている事が分かった。そしてそのえぐれの底面付近に打ち込まれた杭群を検出した。現存する杭23本、痕跡のみ確認できたもの7本を数える。そして、隣接する2Aトレンチ西壁の断面には、杭の横に2段に積まれた土嚢らしきブロック土と、杭群を覆う様な盛土らしき堆積を確認した。その北側の1631溝の断面は新古2段階の変遷が追えた。

杭は、部分的に薄く砂層を挟む部分もあるが、基盤となる粘土層に打ち込まれている。北側の杭の方が長く、深く打ち込まれ、頭が10cm強出た状態で止められているようだ。一見、無秩序に打たれているようだが、北側は、突出した位置にある1本を除いて、直線的に杭が並び北端を成している。断面との関係で見ると、おそらくその北側に接して土嚢列が作られ、1631溝の南肩部のラインを形作ったのであろう。また、南側も直線的だった可能性がある。西側の半円形に杭のない部分は、掘削時の感触から言うと、後の部分的な破壊によるものと思われる。

土嚢は平面的な検出は出来なかったが、断面から見ると長さ40cm弱、厚さ10cm弱で、中は炭化物混じりのシルト、周囲に土嚢袋の痕跡か、炭化物が多い。二段目の土嚢はやや杭側にずらして積まれ、溝壁面が斜めになるようにしている。

断面で確認された杭群を覆う土層は、粘質土で特にブロックは認められない。その上面は杭の頭の高さより10~15cm高い。杭の頭は打設後の腐食や破損もあろうが、土層上面とのレベル差が均一に10cm以上ある事を考えると、杭打設後にそれを覆うように土を盛った可能性が高い。

以上の事から復旧の状況を考えると、破壊された取水口の肩部に密に杭を打って水流を弱め、土の流出を防ぐようにし、それに沿って溝肩部を土嚢積みで復元する。さらに土嚢と杭を覆うように土を盛って復旧の仕上げとしたのであろう。

それが断面に見える古い方の1631溝の形にあたるので、溝はそれよりさらに古くからあった事が分かる。さらに新しい方の溝断面ではその南側、古い方の肩部の復旧盛土の上に、ラミナのない砂層が見られる。これは土砂流的な堆積とも思えるが、取水口が再び被害を受け、砂で埋まったのを、その砂を掘って肩部に盛って復旧した盛土の可能性もある。

以上、この杭群は溝の、流路からの取水口の破壊と復旧のプロセスを示す珍しい例である。

(6) 4面1552流路 (図69・72)

A地区4面において、2Aトレンチ西から入り、4Aトレンチ東壁で東南東へ抜ける流路である。幅7m、深さは底が砂層で分かりにくい、平均1.5mほどのようである。

4層新に覆われた1546流路が、段階的に北へ流路を移動していく動きの最終段階のものとして捉えられ、最終的には洪水による流路移動により廃絶し、その洪水砂で大部分埋没する。

細かく形を見ると、調査区西外側で段丘崖に直接当たっていたと推測され、その部分が弯曲の一番強い部分であったと思われる。東側は調査区を出た部分で反対方向への弯曲が始まるようだ。

北岸へは数度にわたって堆積物を供給するが、顕著なシュートバーは発達しない。その代わりに、その溝群を何回も砂層で埋めている。

南岸へは調査区より西側で破堤する事があったようで、調査区内では微高地状に残された部分をはさんで南側に帯状の凹地が平行して走る。その部分を浸食した水は4Aトレンチ東半付近で再び流路に戻

っていったようである。

肩部には細かい斜面堆積が多く見られるが、それはむしろ北岸の方が多い。主体となる層位は下部は大体粗砂層で、そのほとんどは洪水時に一挙に堆積したものである。その洪水の終息時にはほとんどラミナのないシルト系の層が堆積する。その時点でも流路部分は凹地をなしており、有機分を多めに含んだ3層系の土が堆積していく。

遺物の取り上げは一番上のシルト系の層を最上層とし、洪水堆積の粗砂層を上層、それ以前の肩部の斜面堆積と底部に若干残っていた流路機能時の堆積層を下層とした。

出土遺物の内、図化できたのは図72の21点である。その内1～4が最上層、5～19が上層、20・21が下層出土である。

1は須恵器蓋杯蓋である。胎土には黒色粒・石英・長石を含む。陶邑編年のⅡ-3～4か。

2は須恵器蓋杯身である。胎土には黒色粒・石英・長石・チャート・クサリ礫を含む。外面回転ナデ部分に一部後からのヨコズリが見られるほか、不規則なヘラ沈線が何本かある。Ⅱ-3～4か。

3は土師器高杯片である。2.5YR5/6を呈し、精製胎土だが、わずかに石英・長石・クサリ礫を含む。身部内面には放射状暗文を施し、脚部は差し込み接合である。飛鳥時代のものと思われる。

4は土師器甕片か。7.5YR8/4を呈し、胎土に石英・長石・赤色粒をわずかに含む。時期不明。

5は須恵器甕片である。胎土に石英・長石・黒色粒を含む。口縁端部上面にシャープな突帯が走る。また口縁外面は4条の沈線の下に、幅5mmほどの原体でタテハケ状の痕跡が見られる。文様帯か。口縁端部外側に断面正方形に近い粘土帯を貼りつける甕は飛鳥時代に良く見られるもので、陶邑編年で言えば、Ⅱ-6からⅣ-1まであり得るものである。

6は須恵器蓋杯蓋である。天井部外側は回転ヘラ切り、内面は回転ナデの後、中央に直線ナデを一刷毛入れる。胎土に石英・長石・黒色粒あり。陶邑編年Ⅱ-6。

7も須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英・長石・黒色粒含む。陶邑編年Ⅱ-2～3。

8(図版22-1)も須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英とわずかの黒色粒含む。陶邑編年Ⅱ-3～4。

9(図版22-5)も須恵器蓋杯蓋。胎土に石英とわずかの長石・チャート含む。陶邑編年Ⅱ-1～2。

10は須恵器蓋杯身片である。胎土に石英・長石含む。外面底部に、回転ヘラケズリ後に数往復の乱雑なヘラ沈線が入る。ただ、アタリは浅く、ヘラ記号ではないようだ。陶邑編年Ⅱ-2～4。

11(図版22-6)も須恵器蓋杯身である。胎土に石英・長石とわずかにチャート含む。微細粒子には黒色粒もあり。底部外面にヘラ記号。陶邑編年Ⅱ-3～4。

12も須恵器蓋杯身片である。胎土に石英・長石あり。内面は降灰痕が見られ、底部付近にユビオサエが散在。外面には重ね焼きの痕跡が明確に残り、一部口縁端部の溶着も見られる。陶邑編年Ⅱ-4～5。

13(図版22-3)は須恵器高杯片。胎土に石英・長石・黒色粒含む。おそらく無蓋高杯であろう。陶邑編年ではⅡ-4からⅢ-1まであり得る。脚の短さと、その端部の粗雑さから見るとその中でも後半か。

14(図版22-8)も須恵器高杯片である。胎土に石英・長石含む。身部外面の脚部周辺から始まるヘラ沈線が5本ほど認められ、ヘラ記号かも知れない。身部に2条ほど残る沈線状の横線は粘土接合痕、身部と脚部の接合部内面には身部側に同心円文タタキの痕跡が残る。無透かしである。陶邑編年Ⅲ-2前後、飛鳥時代のものか。

15も須恵器高杯片である。胎土に石英・長石とわずかに黒色粒含む。長脚二段三方透かしか。脚部の下の方に半消しのカキ目が見られる。陶邑編年Ⅱ-3～4か。

16は土師器杯片である。7.5YR 7/6を呈し、胎土は精製だが、わずかに石英・長石含む。器表剥離のため調整は不明。杯Cと思われ、それなら飛鳥Ⅰ～Ⅲ型式の中に法量的に合う。

17(図版22-4)は土師器高杯脚部片である。5YR 5/6を呈し、胎土に石英・長石を含む。器表剥離のため外面の調整は不明だが、脚部内面にはシボリ痕が、脚端部下面には放射状のユビナデが見られる。奈良時代より前としか言えない。

18は須恵器高杯片である。外面はN4/1を呈し、かなり黒い。胎土に石英と、わずかの長石・黒色粒を含む。長脚一段三方透かしである。陶邑編年Ⅱ-1～2。

19は土師質埴輪片である。2.5Y 8/2を呈し、胎土に石英・長石・クサリ礫を含む。下端部の破片であり、底部外側に突帯を付加する。外面のハケはタタキ板状のものを使った粗い目のものである。内面はナデ。6世紀代のものか。

20(図版22-2)は須恵器蓋杯身片である。胎土に長石・黒色粒をわずかに含む。陶邑編年Ⅱ-4～5。

21(図版22-7)は須恵器高杯身部片である。胎土に石英・長石を含む。脚部との接合部に透かしの痕跡が残り、三方透かしと分かる。長脚二段か。陶邑編年Ⅱ-3～4。

以上の図化できたものを見ても、古墳時代後期全般から飛鳥時代までの遺物が時期的空白なしに出土している事が分かり、図化できなかった遺物もこれに合致している。

飛鳥時代の時期的限定は総合的に見れば飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式、飛鳥時代前半と見て良いだろう。それは流路北岸の溝群の中で最新の遺物が出土した1600溝の時期と合致する。つまり、この流路内の遺物は北岸の溝群が掘削を繰り返しながら維持されていた時期を示すと思われる。

しかし、溝群のうち最古の1534溝の遺物が5世紀中葉頃を示すのに対して、流路内には同時期、古墳時代中期に限定できる遺物が一点もないのがやや疑問として残る。流路内の埋土のほとんどを占める上層・最上層は流路を埋没させた洪水堆積物であり、古い時期のものが入る確率は少ないとはいえ、それ故の偶然なのか、1534溝が、遺物の示す時期より新しいものなのかは、問題として残る事を留意すべきである。

流路の埋没時期は決定できたが、1546流路の変遷を経て、何時ごろこの位置に達したのかは問題として残る。遅く見れば古墳時代後期初頭と見る事もできるし、考え方によっては5面時点ですでにこの位置にあったと言っても否定すべき要素はない。

しかし、周辺の堆積状況の画期を見ると、北東岸側にかなり厚めに4層が堆積しており、その中に残存率の良い土器が数点、遺構もなく埋没している状況は、それだけの堆積物を供給する洪水があった事を示しており、その時点で流路が弯曲部攻撃面へ移動しなかったとは考えにくい。

それがおそらくは1552流路の成立である可能性が高いと思われる。そう考えるなら土器の時期からみて、それは古墳時代前期前半、布留式期初めの頃である。

A地区全体で見ると、古墳時代中期～後期の遺物群より時期的に一つ古い時点でまとまる遺物群の時期は弥生時代後期後半から古墳時代前期前半のものがある。おそらく、その時期に流路周辺に見られた人々の活動が、1552流路形成に伴う洪水によって一旦途絶え、その後流路北岸の溝群の掘削が始まるまで空白期が存在したと思われる。

この流路はその移動のしかたを見ても当時の東除川本流と考えて良いだろう。その頃は河川の下刻もさほど激しくなく、河岸段丘も発達せず、微高地と後背湿地の散在する谷底平野の中で、流路が浅い状態で蛇行し、洪水などのたびに蛇行を強めたり、直線化したりしていたのであろう。

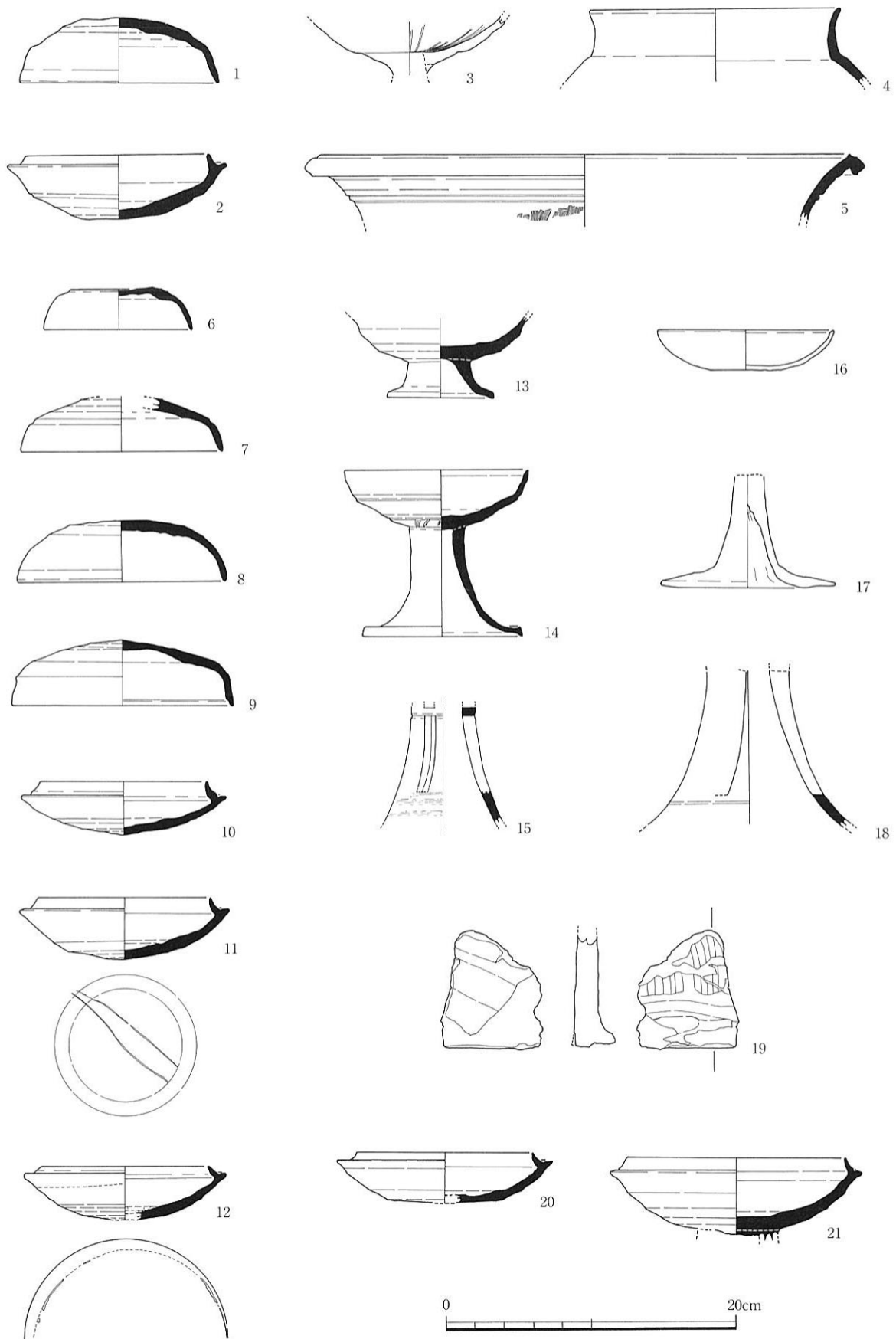


图72 A地区1552流路出土土器(1~4:最上層、5~19:上層、20·21:下層)(S=1/4)

(7) 南側4面 (1552流路以南) (図69)

この部分は1552流路南岸からしばらくは、1546流路の上に堆積した4層新の上面であり、1546流路の最古の肩部より南は、おそらく北側の5面時点でもすでにこの程度の高さで、3層の耕地造成時点でかなり削平されたと思われる4面相当面である。それ故に検出される遺構の時期もまちまちである。

1729不整形遺構 (図69・74) 南北3m、東西1.5mほどの範囲で屈曲する溝のような形を取る。深さは10cm内外、人為的なものかは不明。中からヘラ記号のある蓋杯身片が1点出土している。(図74-2) 胎土に石英・長石を含み、焼成は悪い。陶邑編年Ⅱ-4～5のものか。

遺構は4層新の上であり、後述の1546流路上層の遺物が遺構内に入った可能性もある。

1546流路 (図69・73) 北側は1552流路に切られ、見かけは幅20mほどの流路だが、断面を見れば12～8mほどの幅の流路が3段階ほどで、次第に北に移動している。深さと下層の遺物の有無の確認のため、3Aトレンチ東側で地表より2.5mほど下げたが底面は確認できなかった(図14)。最上層の4層新系統の層にわずかに遺物が包含される以外は全て無遺物である。ただし、南岸に近い最深部、つまり確認したこの流路の中で最古の層内にはかなり大きな流木を含め、植物遺体が多かった。

最上層、4層新は1552流路が成立した以降、浸食と再堆積が繰り返され、当初の時点の4層新はほとんど残っていない事が断面から判明した。つまり、その遺物は1552流路存続時のものである。

それらの遺物の内、図化出来たものは図73-1～4の4点である。

1は須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英・長石・黒色粒を含む。陶邑編年Ⅱ-3～5。

2も須恵器蓋杯蓋片である。胎土に石英・長石含む。陶邑編年Ⅱ-2～4。

3は須恵器蓋杯身片である。胎土に石英・長石・黒色粒を含む陶邑編年Ⅱ-4～5。

4も須恵器蓋杯身片である。胎土に石英・長石わずかにあり、微細粒子には黒色粒もある。5世紀代のもののように見えるが、陶邑編年Ⅱ-1のものである。

この流路の最後の時期は1552流路の形成時期と同じであるが、形成時期については不明と言わざるを得ない。最古の流路の形が南側の4面相当面以下の層を切っているのは確かだが、その南側の層の形成時期を示唆する資料がなく、強いて言うなら古墳時代より前としか言えない。

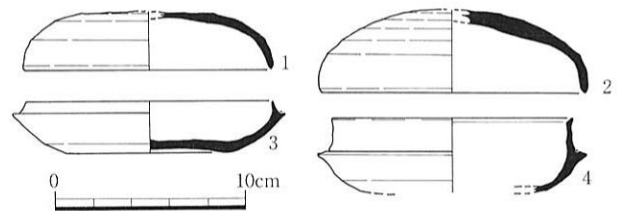


図73 3Atr.1546流路上層出土土器 (S=1/4)

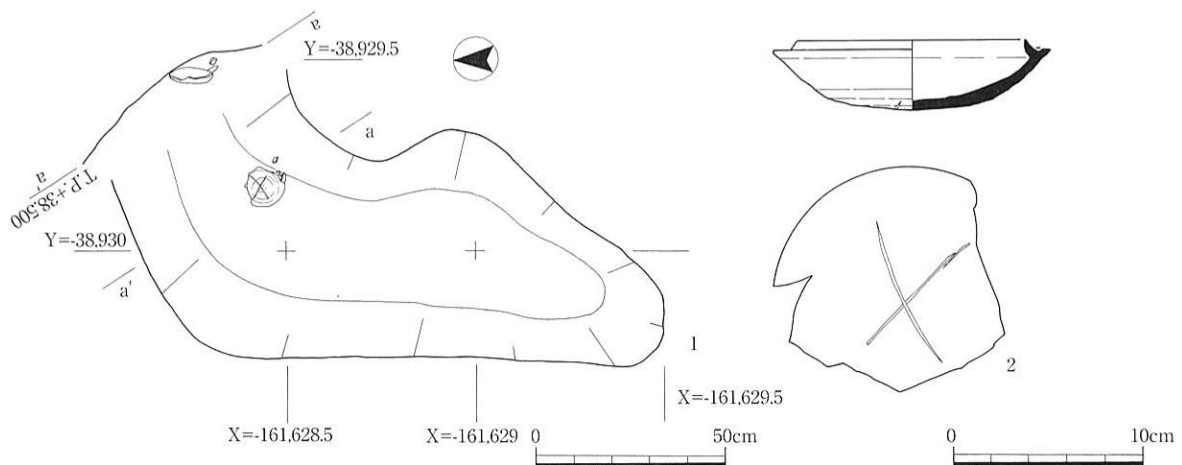


図74 4Atr.4面1729不整形遺構出土土器 (1:出土状況図 (S=1/20)、2:出土土器 (S=1/4))

1679・1692・1693・1728土坑（図69・図版25 - 3） これらの遺構付近の3層を掘削中、椀形滓が出土した。さらにこれらの遺構は3層直下で検出されたが、1728土坑は埋土に多量の炭を含んでいた。そしてその中からも椀形滓が出土した。南北径50cm東西径32cmの楕円で深さ14cm。

1693土坑はそれを切るやや不整な円形の土坑で、径42cm、深さ14cm。

1692土坑はそれらの土坑に長軸を向け、約50cm離れた船底形土坑で長さ78cm、幅32cm、深さ11cm。

1679土坑はそれらの近くで椀形滓を出土した、短い溝状の土坑で、長さ97cm、幅18cm、深さ14cm。

1679土坑は他に土師器の小片が出土したのみだが、1728土坑は土師器皿・甕の小片と瓦質甕片が出土し、13世紀以降のものと思われる。埋土に炭が入るところから、1693土坑と合わせて鍛冶炉の下部構造であった可能性が考えられる。ならば1692土坑も、それに関連した、竈などの痕跡の可能性もあろう。

いずれにしても、4面で検出されたとはいえ、3層が耕土として耕作されている時のものであろう。上屋の痕跡などはない事から、その場限りの野鍛冶のようなものか。

4面相当土器1・2（図69・75） 先述の1728土坑の南西側1.2mほどの所で土器1（図75 - 3、図版23 - 4）が、西へ3.4mほどの所で土器2（図75 - 4、図版23 - 3）が出土した。いずれも4面相当面が北に向かって緩く傾斜した部分にあり、土器2は4層新が薄く被っている中に埋没していた。どちらも出土状況は共通している。遺構に伴わず、面上に破砕した形で、口縁部は胴部片の下で、端部を下に、原位置を保っている。状況から、倒置状態で置いて、破砕したと思われる。どちらも、破砕後で上部にあったはずの底部付近の破片がないのは、後に3層の耕作により削平されたためであろう。

土器1は土師器甕。10YR 7/2 を呈し、胎土に石英・長石の他、チャート・角閃石・赤色粒をわずかに含む。口縁部は内外面ヨコナデ、胴部外面タテハケ、胴部内面は上半ユビオサエ後ユビナデ、下半ユビオサエだが粘土接合痕残る。底部内面ユビナデと棒状工具のナデ混在。外部底面磨滅激し、使用痕か。

タテハケ丸底の長胴甕であり、5世紀後半以降のものか。内面調整の粗雑さから言えば、6世紀代に下るかも知れない。しかし、更に遡る時期のものである可能性もある。

土器2も土師器甕片。下半部の破片はほとんどなし。7.5YR 4/2 を呈し、胎土に石英・長石・赤色粒・角閃石・雲母・クサリ礫を含む生駒西麓産胎土である。典型的な庄内式甕だが、これだけではその中で時期は限定できない。

同じ面の近い位置で同じような状況で出土した二つの土器であるが、時期は大きくかけ離れていると

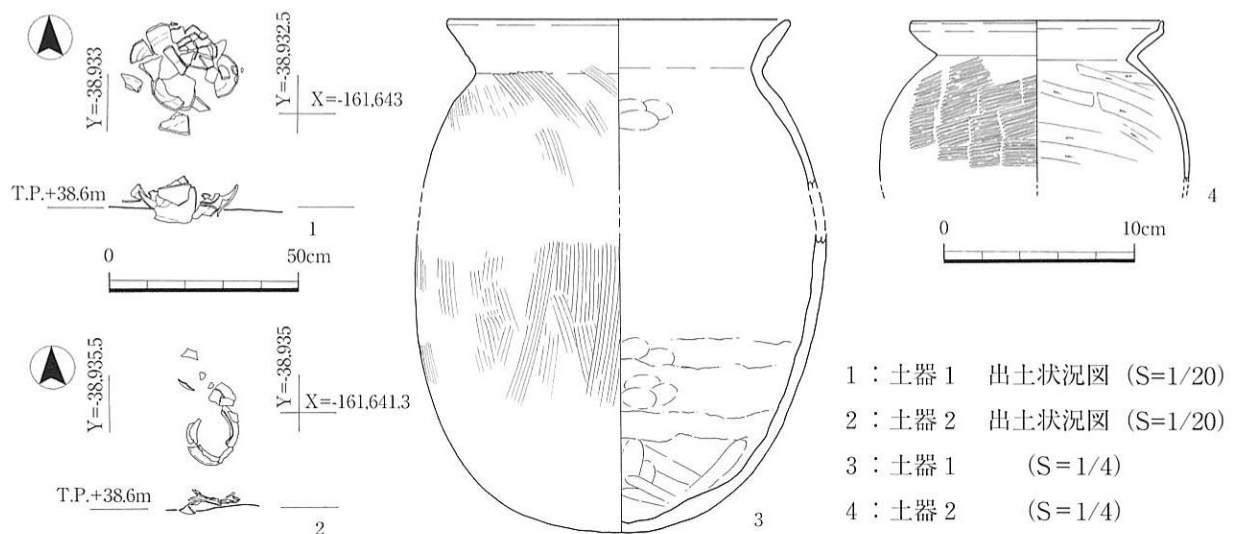


図75 4Atr.4面相当土器1・2

言える。但し、土器1に関して言えば庄内式期に絶対にないとは言えないものであり、1552流路の遺物群の時期に引きつけて考えるか、5面から4層の遺物群の時期と見るかで見解が分かれる所であろう。

(8) 4層出土遺物(図69・76)

3 Aトレンチ調査時点の側溝断面で、1552流路より北側に、4層の下で旧地表面と思われる層の存在が確認された。しかし、その時点では無遺物・無遺構であったため、平面的な調査は行わなかった。

その後、2 Aトレンチで石器包含黒色粘土層の存在が明らかになったため、4 Aトレンチでは、4層より一つ下の土壌化した層を5層として、その上面を調査する事とした。

A地区北東側は、4層の堆積が比較的厚く、平均約30cm、厚い部分で50cm以上あった。そして4 Aトレンチでその中から4点の土器が出土した。いずれも4面の精査では遺構が検出されず、土器検出時の観察でも遺構の存在は全く認められなかった。そのため4層出土土器1～4(図76-4～7)とした。

土器1(図版23-7)は弥生土器無頸壺である。口縁の2/3ほどと胴部上半の1/3ほどを欠くが、これらの破片は周辺から出土していない。割れた部分を上に向けて、斜めの状態で出土した。4面とも5面とも接していない。なお底部は脆弱化していて、取り上げ時に破砕した。

7.5YR 5/6を呈し、胎土に石英・長石・チャートを含む。器表磨滅のため調整不明。頸部に二つの穿孔があり、対向する位置にもう一組あったと思われる。底部は取り上げ時の観察では、かなり小さく、外底面は凹面を成していた。河内V様式のものと思われる。V-3様式を中心とするものか。

土器2・3は接するように並んで出土した。正置状態で、上半が下半内部に落ち込んだ状態である。割れていなければ4面に露出する高さがあったと思われるが、現状では4面より15cmほど下にある。

土器2(図版23-5)は土師器甕。2.5YR 4/6を呈し、胎土に石英・長石を含む。外面は口縁ヨコナデ、それを切り胴部に左傾のタテハケ、内面は口縁ヨコハケ、胴部は左上がりのケズリが全面に入る。上半はその下に粘土接合痕とその継ぎ目に並ぶユビオサエが残る。胴部に外面から焼成後穿孔が1ヶ所ある。

これは長胴甕ではあるが、内面のヘラケズリ、卵形の胴部、やや平底気味の底部などを見ると、須恵器出現以後に成立する長胴甕ではなく、庄内式期・布留式期に少数ながら存在し続ける、口縁外反・胴部タテハケ甕の系統に属すると考えられる。河内地域では美園遺跡D S X 304一括遺物で米田編年庄内Ⅱ型式期に含まれているものを最古とする。土器3と同時期と見て問題ない。

土器3(図版23-6)も土師器甕である。2.5Y 5/6を呈し、胎土に石英・長石・チャートを含む。口縁は外面ヨコナデ、内面ヨコハケ。胴部外面はタテハケ基調で、肩部にヨコハケも見られるが、最終のハケではない。胴部内面は上半ヨコケズリ、下半ユビオサエだが、どちらも粘土接合痕を若干残す。

球胴形で、胴部外面全面ハケは布留式甕的だが、口縁の形態や、肩部に最終のヨコハケがない点は非布留式的である。河内地域では米田編年庄内Ⅱ式期から、布留的要素を持った布留系甕が少数見られるが、そういったものである可能性もある。しかし、内面のケズリが下半で省略されているのは新しい要素とも思われ、時期を限定しがたい。一応古墳時代前期に属するものとしておきたい。

土器4(図版23-8)は弥生土器壺底部片である。これは4層内でもほぼ5面上にのった状態で検出された。長さ1m弱の範囲に破片が散乱していたが、接合した胴部下半以外の破片はなかった。

5YR 5/6を呈し、胎土に石英・長石・赤色粒を含む。やや磨滅するが、外面にはヨコミガキ、内面にはナデの痕跡が残る。V様式系の壺と思われるが、下限は庄内にあってもおかしくはない。

これらの土器群は、おそらく4層が堆積した時の洪水により、その中に埋没したものと思われる。

土器1など、欠失した部分の破片が周辺に認められないものは、割れた後に流されたと考えれば納得がいく。欠失部分や口縁を上に向けるのも土器が水没する状況としては自然であろう。しかし、土器2・3のように甕が二つならんで正置で出土した状況は、若干、人為的な感じもあり、特に土器2は胴部の焼成後穿孔が祭祀的な色合いを持つ。ただ、遺構を伴わない事から、土器2・3が人為的に置かれたとすれば、4層の堆積が落ちつく前、洪水の水が完全には引いていない様な状況で埋められたと考えざるを得ない。また、土器群として同時期的にこれらのものがあり得るのは庄内式期から布留式初頭ぐらい

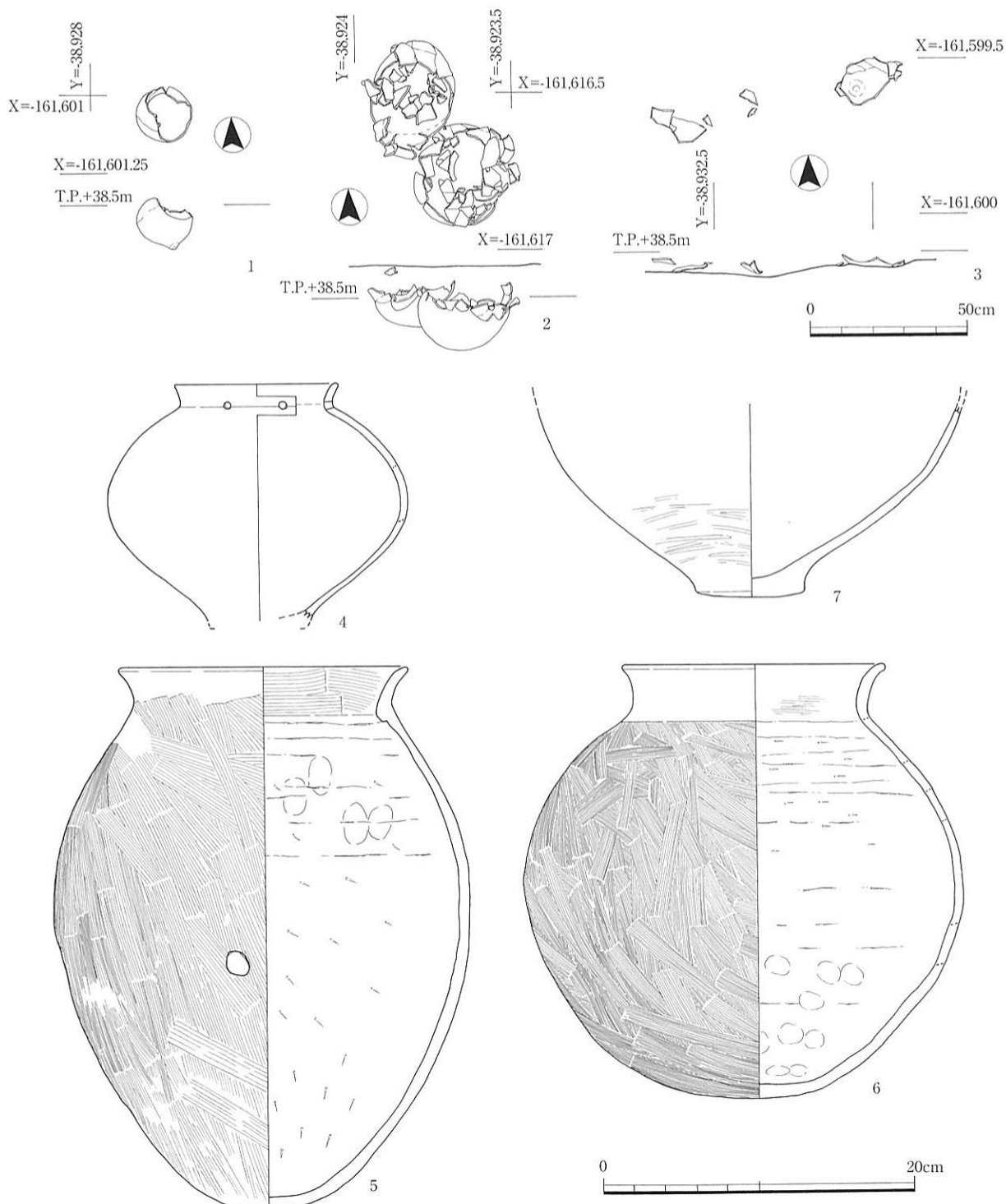


図76 4Atr.4層出土土器 (1:土器1出土状況、2:土器2・3出土状況、3:土器4出土状況(S=1/20))
(4:土器1、5:土器2、6:土器3、7:土器4(S=1/4))

と思われ、その時期の集落が近くにあった可能性を指摘できる。

(9) 5面 (図78)

先述したとおり、4 Aトレンチのみで調査したが、A地区北東側に広がる面である。ただし、北西側の石器包含黒色粘土層とは、レベルは近いが、層的にははるかに上になる。

人為的削平を受けていないので、細かな凹凸がかなりある面である。狭い範囲なので明確にはいえないが、1552・1546流路などと平行するような凹凸は見られず、むしろ直交するような傾向がある。

1772土坑 (図77) 幅82cm、長さ1.22m、深さ20cmほどの土坑で北東から南西に長軸方向を持つ。北東端は丸く、南西端はやや隅丸方形を呈する。

遺物は、土器片が北東側 (土器1) と南西側 (土器2) に分かれて出土した。土器1は埋土の中ほどの高さで中型土師器甕 (土器1-2) 片81片と小型土師器甕 (土器1-1) 片39片が面状に密集していた。中型甕は足りない破片が多く、特に上半部を欠く。しかし、わずかに口縁部片はある。小型甕はほぼ完形に復元できた。土器2は土師器鉢と思われる破片18片で外面ナデ、平底のようだがほとんど接合せず、1個体にはかなり破片が足りない。

土器1-1は土師器甕である。7.5YR 8/4を呈し、胎土に石英・長石・クサリ礫を含む。口縁は内外面ヨコナデ。胴部内面はヨコハケ後、底部は放射状のタテハケ、上半は疎らに左上がりのユビナデ。外面はタテハケ後肩部にヨコハケ、さらにその後疎らにタテハケ。所謂「布留系」の甕で、庄内式期後半から布留式期前半ぐらいか。

土器1-2も土師器甕片である。破片数はかなりあるのに、ほとんど接合せず、特に上半の破片を欠くのは上述した通りである。しかし、同一個体の破片と思われる。口縁片はやや外反気味の、端部の丸いものである。10YR 5/3を呈し、石英・長石を含む。外面はタテハケで一部煤付着、内面は使用痕らしき磨滅が激しいが、ユビオサエ後横方向主体のハケか。おそらく布留式の甕と思われる。

破片の不足や出土状況から、土坑がやや埋まった状態で、土器の破片を投棄したと推測される。

その他の遺構 土坑やピットは散在するが、人為的遺構かどうか判断しかねるものもあり、木根痕も多い。ただ、4面1652溝とかなり重複している1755溝は地形の凹凸の高い部分を走っている事から見てもこの面の確実な溝の一つであろう。また、その溝の埋土上面や周辺で検出された、細く短い溝群は、

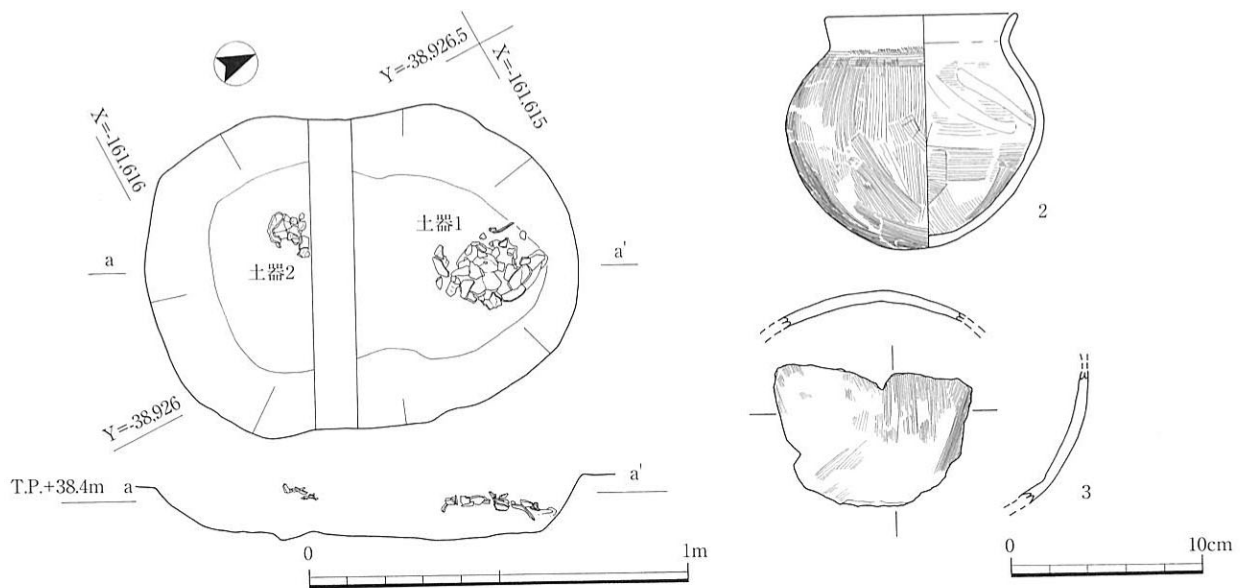


図77 4Atr.5面1772土坑 (1:土器1・土器2出土状況図 (S=1/20)、2:土器1(-1)、3:土器1(-2) (S=1/4))

5面が埋没した後に地震などで起こったひび割れの可能性が高い。

(10) 石器包含黒色粘土層 (図79・80)

2 Aトレンチ北側4面を調査している時点で、完掘した溝の底部などで、4面より1mほど下に、黒色粘土層が存在する事が知られた。それは湿地的な堆積層と思われ、そこから4面の微高地的な環境へ、どのような変遷過程があったかを確認するために断面調査だけでもしようと断ち割りトレンチを設定して下げた。ところが思いもよらず大量の石器が出土し、面的な調査も実施する事になった。

土層の状況 (図79) 5層とこの層の関係は実はよく分からない。3 Aトレンチ西壁断面は浅く止めたため、5層も見えず、東壁では5層があっても黒色層がない。4 Aトレンチ北壁では5層が西へ伸びるのが確認できるが、途中で途切れ、4 Aトレンチ北側深掘りトレンチではわずかに西端で黒色層がかかっただけである (図15)。黒色層は2・3 Aトレンチ境あたりで、上部の幾つかの層と共に切られているようでそこから東へ一度深く落ちる。それは5面あたりまで凹地として残ったようで、黒色層の上の部分と5層の広がる範囲が平坦につながるの4面以後と思われる。

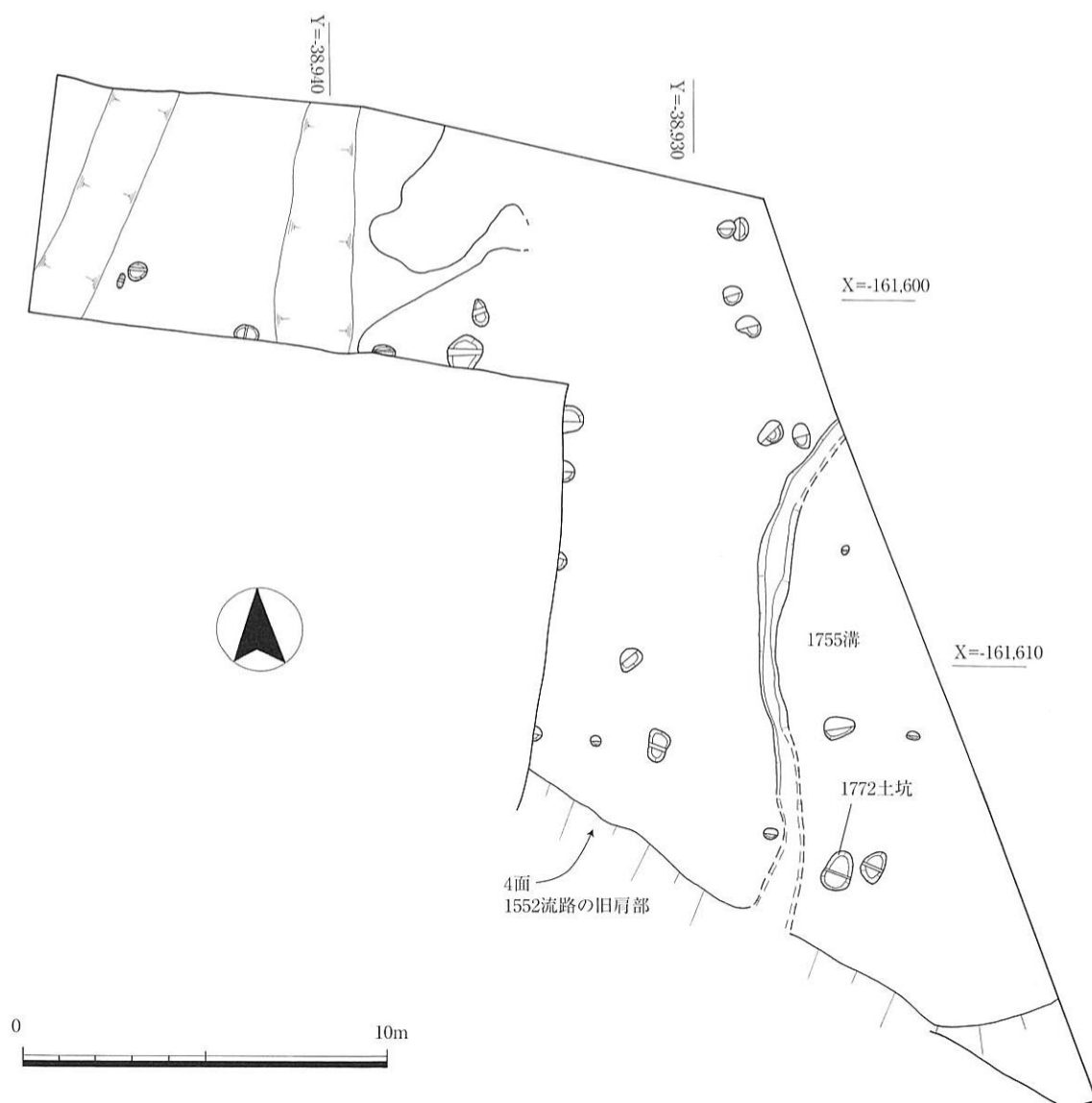


図78 4Atr.北側5面 (S=1/200)

黒色層から4面まで、1m近く、5層以上の堆積があるが、それらが5層やそれ以下の層とどう対応するかは、レベルの差もあり、明確には分からない。

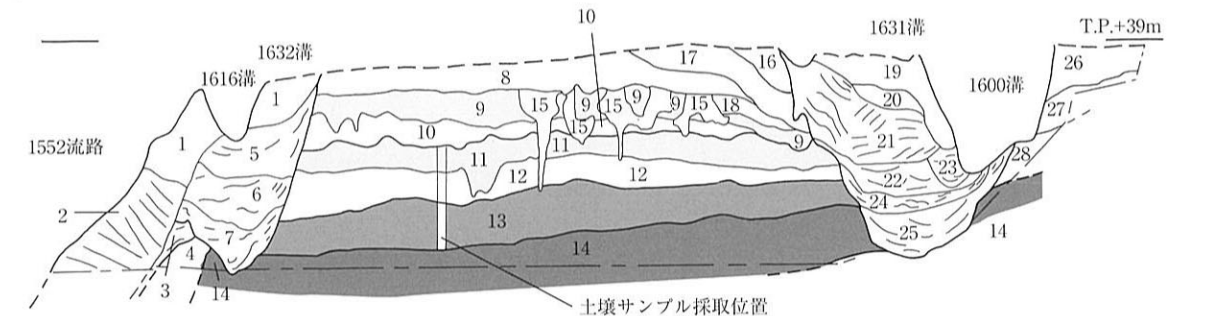
4層直下の土壌化の進んだ層を5層とするなら、図79の8がその候補となるが、3Aトレンチ東壁の5層より、30cmほど高い事になる。その下面に木根痕が多いのは、この層の時点で生えていた木の痕跡が下層に残されたのであろう。続く9・10は洪水堆積層である。

11も土壌化が進行しており、旧地表面であったと思われる。12はそれを形成した洪水堆積物である。ここまでは中位段丘崖へ向かう北側（図79の右側）へ面が落ちていき、後背湿地とまではいかなくても、段丘崖との間に小規模な凹地を形成していたと思われる。つまり、12の堆積以降は自然堤防が発達していくような形で、南側の近くに流路が存在していた可能性が高い。

この図の13・14が黒色粘土層であり、13に石器が包含されていた。どちらも湿地的に止水堆積した、有機分を豊富に含む粘土層だが、13は土壌化が進行し堆積後酸化がすすんだようで、酸化鉄の沈着が多く見られる。どちらも上層とは違い、わずかに南側に下がる傾向にある。全体で見れば、南東へわずかに傾斜しているようだ。

なお、13は珪藻分析によると淡水底生種が高率を占めるとの結果が出て、湿地性の堆積である事を証明している。

黒色粘土層の面的広がり（図80） 黒色粘土層は、南側は4面の1552流路によって切られており、それより南側では同一の黒色粘土層は一切残存していない。西側も流路が溝の取水口を破壊した決りにより、調査区西端は残存していない。



土色・土質

- 1、2.5Y6/4 ~10YR5/4 シルト~細砂、粗砂若干あり、管状Feあり
Mn粒若干あり、1552流路斜面堆積
- 2、2.5Y6/6 ~6/2 粗砂~小礫、ラミナあり、有機分若干あり、
1552流路内堆積
- 3、2.5Y5/2 シルト~粘土と粗砂~極粗砂の混濁、1552流路内堆積
- 4、N4/0シルト~粘土、炭化物わずかにあり、1552流路内堆積
- 5、2.5Y5/4 ~4/3 シルト~細砂、粗砂わずかにあり、Fe・Mn粒あり、
ラミナわずかに残存、1632溝埋土
- 6、7.5Y5/1 シルトと2.5Y6/3 中~粗砂の互層、ラミナあり、管状
Fe・Mn粒若干あり、1632溝埋土
- 7、N3/0粘土~シルトと10GY5/1 シルトと5GY5/1細~中砂の互層、
ラミナあり、植物遺体あり、1632溝埋土
- 8、2.5Y5/4 ~5/2 シルト主体、粗砂若干あり、Fe・Mnあり
- 9、2.5Y6/4 ~6/2 細砂~シルト主体、中~粗砂、Fe・Mn若干あり
一時期の地表土か
- 10、10YR5/6 ~5/1 シルト~細砂主体、中砂多く含む、Feあり、Mn
若干あり
- 11、2.5Y5/1 ~4/1 シルト~粘土主体、細~中砂若干あり、斑状Fe
あり、炭化物若干あり、一時期の地表土壌化層
- 12、2.5Y6/1(Feある部分10YR5/6)シルト~細砂、斑状Feあり、粒状
構造発達
- 13、10YR4/1 粘土、上部から土壌化進む、石器を下部に包含、沼状
の止水堆積から乾燥、土壌化か、石器包含黒色層

- 14、10YR2/1 粘土、有機分多し、土壌化あまりせず、石器包含せず
沼状の止水堆積
- 15、2.5Y7/3 ~6/1 細砂、シルト若干含む、木根痕か
- 16、2.5Y5/6 ~6/6 シルト、Fe多し、Mn粒あり、4層の二次堆積
- 17、10YR5/1 ~5/4 シルト主体、細砂若干あり、粗砂わずかにあり
斑状Fe・Mn粒あり
- 18、10YR5/6 ~5/4 シルト~細砂、Feあり、9地表時の二次堆積
- 19、2.5Y7/4 ~7/2 シルト~細砂主体、粗砂あり、Fe・Mn粒若干あり、
1631溝埋土
- 20、2.5Y7/1 細~中砂、シルト若干あり、1631溝埋土
- 21、10YR7/1 ~4/4 粗砂~小礫、ラミナあり、Feあり、1631溝埋土
- 22、2.5Y6/1 ~6/4 中砂~粗砂、ラミナあり、Fe若干あり、同上
- 23、5Y4/1 ~6/1 シルト~粗砂の混濁、植物遺体若干あり、ラミナ
あり、1631溝埋土
- 24、植物遺体と10Y6/1粗砂~中砂、ラミナあり、1631溝埋土
- 25、5GY6/1粗砂~中砂と、7.5GY6/1シルト~粘土の互層、植物遺体
多し、1631溝埋土
- 26、10YR5/1 ~5/4 シルト~粘土主体、粗砂・Mn粒若干あり、斑状
Feあり
- 27、10YR4/3 シルト~粘土主体、粗砂・Feあり、小礫わずかにあり
- 28、10YR4/3 ~3/2 シルト主体、粗砂あり、小~中礫多し、中位段
丘崖斜面堆積か

図79 2Atr.5面微高地断ち割り断面 (S=1/40 1/80)

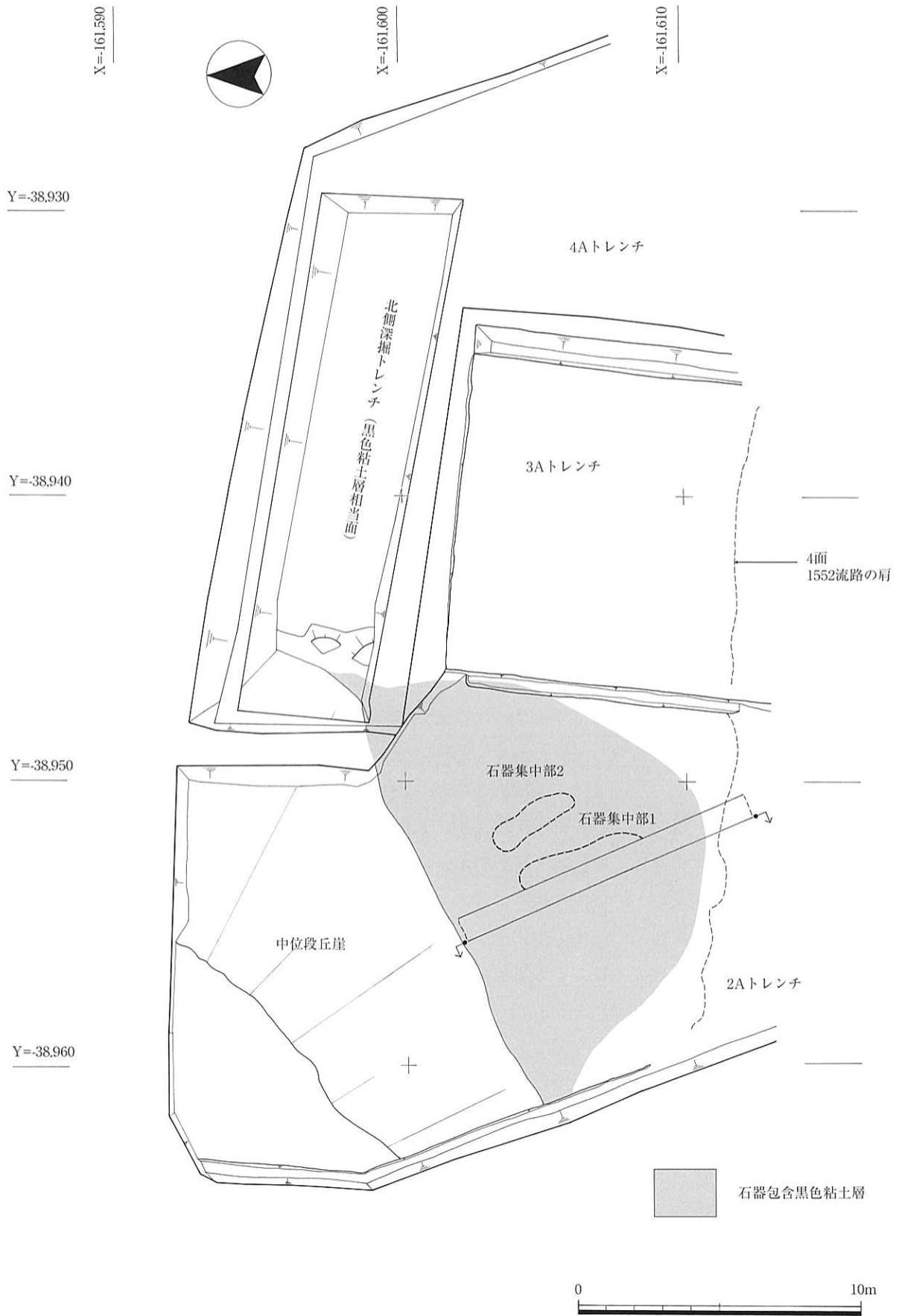


図80 黑色粘土層分布範囲及び4A tr.北側深掘りトレンチ位置図 (S=1/200)

北側は上層の石器包含層の方は4面1631・1600溝あたりで途絶え、下層がさらに北に伸びる。それを追跡したところ、上に斜面堆積を被りながら中位段丘崖直下まで伸び、薄くなって途絶え、中位段丘構成層とは確実に不整合を成す事が確認できた。

東側はほぼ2A・3Aトレンチ境で途絶える。その北端は4Aトレンチ北側深掘りトレンチの西端で確認できた。

この黒色層の残された範囲を平面的に見ると、4面の1552・1546流路などよりもっと前に、調査区より西側で段丘崖に当たって南東に曲がり、またすぐに蛇行して3A・4Aトレンチ北側を北に抜けていくような流路によって浸食された残りであると言える。黒色層がやや南東に傾くのも、堆積後のこういった浸食も含めた後発的な要素もあるかも知れない。

黒色粘土層の形成とその時期 黒色粘土層が上下2層に分かれるのは、単に上部が乾燥酸化し、土壌化が進んだので土壌化層の分類的に分かれたのではなく、堆積的にも途切れがあるようだが、上下とも最大30cmほどの厚みがあり、ややシルトを含むと言っても、有機分を豊富に含む粘土がこれほど厚く堆積するにはかなり長期間の安定した環境が必要だと言える。

即ち、ある程度規模の大きな後背湿地の中で、洪水による砂層などが到達しない奥まった部分で、周辺の植生は豊かで、腐食の分解も活発な環境であったと考えられる。

これより南側は、比較的安定した4面相当面の下部でも、シルト層の下に砂層の洪水堆積があり、激しい下刻と堆積を同時期的に繰り返す、氾濫原的堆積である。黒色層の堆積時期は、東除川の谷底平野の堆積が一つのピークに達し、かつ流路は下刻作用が弱く、洪水も少ない非常に安定した時期であったと推測される。

河川の中流域、丘陵部であるので、一概に沖積平野部と同じとは言えないが、東除川は古天野川の扇状地であった中位段丘面と、大阪層群が主体の羽曳野丘陵が接する部分を集水域とする河川として形成されたもので、その最初の浸食のピークはウルム氷期と思われる。その晩氷期には沖積平野は沖積下部砂層の堆積があり、河川上・中流域は未だ浸食が卓越した状況にあったと思われる。

C14年代から言えば、温暖となって沖積中部泥層、大阪平野では梅田粘土層が堆積しはじめるのが、 -12730 ± 340 年B.P.とするなら、黒色粘土層下層が -10160 ± 40 年B.P.となっているので、2000年ほどの間に東除川の浸食谷は埋没し、中位段丘崖下に谷底平野を形成するようになっていたものと思われる。そして温暖、湿潤な縄文海進期の気候の中、小さな集水域しか持たない東除川は洪水も少なく安定した状況で、谷底平野の後背湿地の中に、この黒色粘土層を形成してきたものと推測できる。

そして、その層などを切る、砂層を中心とした氾濫原堆積物が形成されるのは、5000~2000年B.P.頃の、沖積平野に沖積上部砂層が堆積する時期であったと思われる。洪水が多発し、その度に激しい浸食と堆積を繰り返す状況は、沖積平野に大規模な自然堤防が形成される、この時期の状況と一致する。

そして、次第に増す人為的影響は、おそらく丘陵や中位段丘面の自然保水力を低下させる方向に働き、この部分では東除川の下刻作用を強めて河岸段丘を形成し、河川からの直接の導水を不可能にし、下流域では天井川化を促進したであろう。狭山池の築造はその傾向を決定付けたと思われる。

結論としては、この黒色粘土層は下部に下位段丘構成層を持つものではなく、完新世初め頃に形成された谷底平野で長期に安定した環境で形成された、後背湿地の堆積層である。

その形成される時期は大体12000~5000年B.P.の間で、石器を包含した黒色粘土層上層のC14年代と整合する事になる。

石器群出土時の所見 2 A トレンチ北側で4面から入れた断ち割りトレンチにおいても石器は北側に集中し、南側では密度が低い事が観察された。平面的に検出してみると、石器の集中する所が2ヶ所あり、断ち割りトレンチがその一つをほぼ正確に半割している事が判明した。断ち割りトレンチに切られた方の集中区を石器集中部1とし、もう一つを石器集中部2とした。

石器集中部1は最大幅が、断ち割り以外の残存部でも85cmほどあり、最も石器の密集する部分の中軸とすれば160cmほどの幅があったようである。北寄りの部分に最大幅があり、南南西にやや細くなる舌状の平面形で、長さ4.3mほど。北側は4面の溝で切られているので元々はもう少し長かったと思われる。

特に石器の密集する部分は北側で、北を要に扇形に広がるようである。そこから南は極端に密度が低くなり、南端を何処で区切るかは判然としない。

石器集中部2は石器集中部1の北東に70cmほど間をあけてあり、規模はやや小さいが方向も形状もほぼ石器集中部1と共通する。幅110cm、長さ3.3mほど。

その二つの石器集中部に属さない石器もわずかにあるが、その密度は非常に低い。但し、石器集中部よりレベル的にも高い、北側、段丘崖直下まで石器が分布しているのが注目される。

石器は黒色粘土層上下2層のうち、上層にのみ包含されている。特に密集している部分では大部分が上層の底面に重なるように堆積しているが、若干が層内の上半に存在していた。それらは層の上面に露出するものではなく、上面からやや下で、若干のレベル幅をもって分布しており、底面に付く石器群とはわずかながら間をあけるようである。また、石器の出土状況を見ると、水平から直立まで様々である。

両石器集中部の中の密集区では小型の剥片以下の小さなチップなどが目立ち、大型の剥片や石核類は少ないように思われた。また、位置を記録できないほど、微細なチップが密集しており、押圧剥離のチップと思われるものもあった。さらに、粉碎したサヌカイトと思われる粉末も多く存在した。

石器集中部内では、密集区より、そこから離れた南側に、石核など大型の石器が目立つ。

また、層内には石器以外の礫も若干包含される。亜角礫もあるが、圧倒的に亜円礫から円礫が多い。中礫～大礫がほとんどである。砂岩が多く、表面の風化は進んでいる。敲打痕のあるものは確認されなかった。状況的には中位段丘構成層から、段丘崖を転落してきたようにも思える。

石器集中部がその場で作業した廃棄物の累積か、別の場所で作業してこの場で投棄したのかは後述の出土状況の分析にゆずるが、検出時点で疑問に感じた事に触れておきたい。

何かに集めた石屑を前方に向けて投棄した場合、軽く、風圧を受けやすい、小さなものが近くに落ちて、重いものが遠くに飛ぶ事から考えれば石器集中部の状況は自然に思えるが、重いものが北端からかなり距離が離れているのに、北端の密集区の軽いものがあまり散らばっておらず、一括して投棄されたとは考えにくかった。また、密集区で層の上半に散在していたものは、4面の溝に切られた部分にあったものが二次堆積したものと思われ、そのような軽いものでも50cm以下の移動しかしていない事を考えると、重いものの二次的な移動はほとんどないと考えても良いように思える。

もう一つ、製品としては、石鏃2点や削器などが見られるが、数が少なく、その未製品も見られない事ばかりでなく、その出土位置も石器集中部と離れたものもあり、どの程度の時間差があるかは別としても、全てが同時期のものと短絡するのは、やや危険であると言っておきたい。

小結

黒色粘土層出土の石器に関しては、後に別項をたてて、そこで述べる事にするが、ここでA地区の成

果を簡単にまとめておきたい。

谷底平野の氾濫原であるために、複雑な堆積が見られ、流路による分断もあるため、基本層序や同時期の把握が難しく、現地調査時点での混乱もあった。そのため煩雑な記述になったのは否めないが、おおよそ事実関係の把握はできたと思える。

まず（その1）の調査時点では不明確であったA地区の様相が明らかになってきたのは大きな成果である。特に、古墳時代後期を中心とした溝群の検出と、縄文時代の石器群の発見は大きなものであろう。

順に見て行けば、現代の耕地区画につながる耕地開発が13世紀以降に行われた事が判明し、それ以前にも自然地形を利用した耕地が存在した可能性を読み取る事ができた。

また、2層の成立に洪水堆積物が関わり、それ以降は堆積物の供給が極端に減る事も判明してきた。それは、その洪水以降、東除川の下刻が進み、洪水氾濫が起きにくくなった事を意味すると思われる。おおよそ中世後半ぐらいの時期の事であろうか。

これらの事は狭山池給水範囲中の一地点の動向として重要な意味を持つであろう。

それとは空白期を置くが、さらに古い耕地開発が存在していた事が、古墳時代から飛鳥時代の流路に取水口を開ける溝群の存在によって確認された意義は大きい。

段丘上の古墳時代後期から飛鳥時代の集落の成立と存続が、その耕地によるものであった事は確実に思われ、その集落は農業を基盤としたものであったと言う事ができるようになった。

そして、洪水による流路変更と溝群の廃絶が集落に影響しない理由はなく、中位段丘上の遺物の中に飛鳥時代後半から奈良時代前半にかけてのものがほとんどない事から考えられる、奈良時代集落との間の空白期をその面からも傍証でき、すぐそばに耕地を持つ農業集落と、鍛冶関連の遺構・遺物、漆の付着した土器、瓦、埴輪転用や須恵質円筒の井戸枠のある井戸などを持った特殊性のある集落という、集落自体の性格の違いも考えられるようになった。

ただ、溝群に伴うはずのしがらみが検出できなかった事は今後の課題として残る。調査区内でも流路内を下げられなかった部分はあるが、そこにしがらみが存在していた可能性は低く、おそらく調査区より東側にあった可能性が高い。

また、それらの溝群より下の面で、弥生時代後期から古墳時代前期、布留式期初頭ぐらいまでの土器群の存在を確認できたのも忘れてはならない成果である。当該期の遺跡密度の少ない地域でもあるので、それらの土器を使用していた人々の集落がどこにあったか、そしてどんな性格の集落であったかは今後の大きな課題になるはずである。

そして、黒色粘土層とそこに包含されていた石器群は、縄文時代の石器製作に関する貴重な資料であると共に、その時代の環境に関するデータも提供できるものであった。

以上のように今回の調査では、A地区は中位段丘上とはかなり様相を異にし、しかしまた、中位段丘上の調査成果を補強するような結果を得られたと言える。

8. 2Aトレンチ黒色粘土層出土石器群

(1) 石器遺物について

2Aトレンチ黒色粘土層では、石器遺物として953点が出土した。これは、発掘調査によって平面座標とT.P.値を記録した875点に、断ち割り溝から出土した78点を加えた点数である。さらに黒色粘土層精査中に出土した微細剥片を加えた総数は、1862点である。前述のように黒色粘土層は、中位段丘崖下に対して断ち割りを行った際に確認され、同時に多量の石器遺物が包含されていることも判明した。その後、黒色粘土層を追及する中で、石器遺物の面的な広がりを確認した。これらの石器遺物は、検出が困難な微細なものを含んでいた。石器遺物が面的な広がりをもって出土することの予測される場合、出土分布範囲に細かなメッシュを組んで石器遺物を取り上げ、同時に揚土の水洗篩別を行うことが通常とされる¹⁾。しかし、今回の調査において、2Aトレンチ黒色粘土層から石器遺物の出土が確認されたのは調査期間終了間際であり、時間的制約があったために同上の手法をとることができなかった。よって、調査過程で見逃した石器遺物の存在は否定できず、そのため石器遺物の点数、組成等のデータに影響を与える恐れがある。それでも最大限の注意を払った検出作業によって、長幅5mm以下の微細石器遺物も検出することができた。

石器遺物の母岩分類は、接合資料をとまなう石器遺物研究において旧石器時代遺物を中心に広く行われており、近年では、サヌカイトを石材とする石器遺物に対しても積極的に母岩分類が試みられている²⁾。サヌカイト製石器遺物の母岩分類は、肌の粗密、流理の粗密、風化度合いといった基準によって分類される。河原城遺跡出土石器群の整理作業においても、母岩分類を意識しつつ行ってきた。しかし、接合作業の過程では、さきの母岩分類基準に反した接合結果が多く確認された。肉眼で分類した母岩間で接合する事実や、同一母岩と分類したものが、複数の母岩に復元しうる可能性が生じてきた。肌の粗密は石理の順目・逆目等の要因によって変化が出てくることもあり、風化度合いは石器遺物の埋没状況によって大きく左右されることも、実際の資料で確認された。このような状況により、河原城遺跡出土石器群の観察について、特に母岩分類は行わなかった。ただ、接合資料の中には、同一母岩である可能性が高い個体も明らかに存在する。

(2) 石器遺物の分布と石器集中部

2Aトレンチ黒色粘土層から出土した石器遺物の分布は、図81に示した。なお、分布図にプロットした資料は、上述の平面座標とT.P.値を記録した875点のみである。中位段丘崖下に密集し、東除川方向へ舌状に分布する。黒色粘土層は中位段丘崖直下で検出した後世の河道によって削平されているが、河道の埋土中からも石器遺物が出土し、うち1点が黒色粘土層中の石器遺物と接合する事実から、本来黒色粘土層は中位段丘崖直下から広がっており、同様に石器遺物自体も崖直下から分布する可能性が大きい。

石器集中部の認定については、石器遺物の接合関係や分布密度、同一母岩の分布といった検討を加えた後に認定される場合が多い。個々の石器集中部の境界は、ともすれば恣意的なものになりがちである。

石器集中部の認定に関して、いくつかの基準を設ける試みが行われたこともあるが³⁾、河原城遺跡において出土した石器集中部に関しての認定は、石器遺物の分布と接合関係を優先に行ったところ、2ヶ所の石器集中部を認定した。

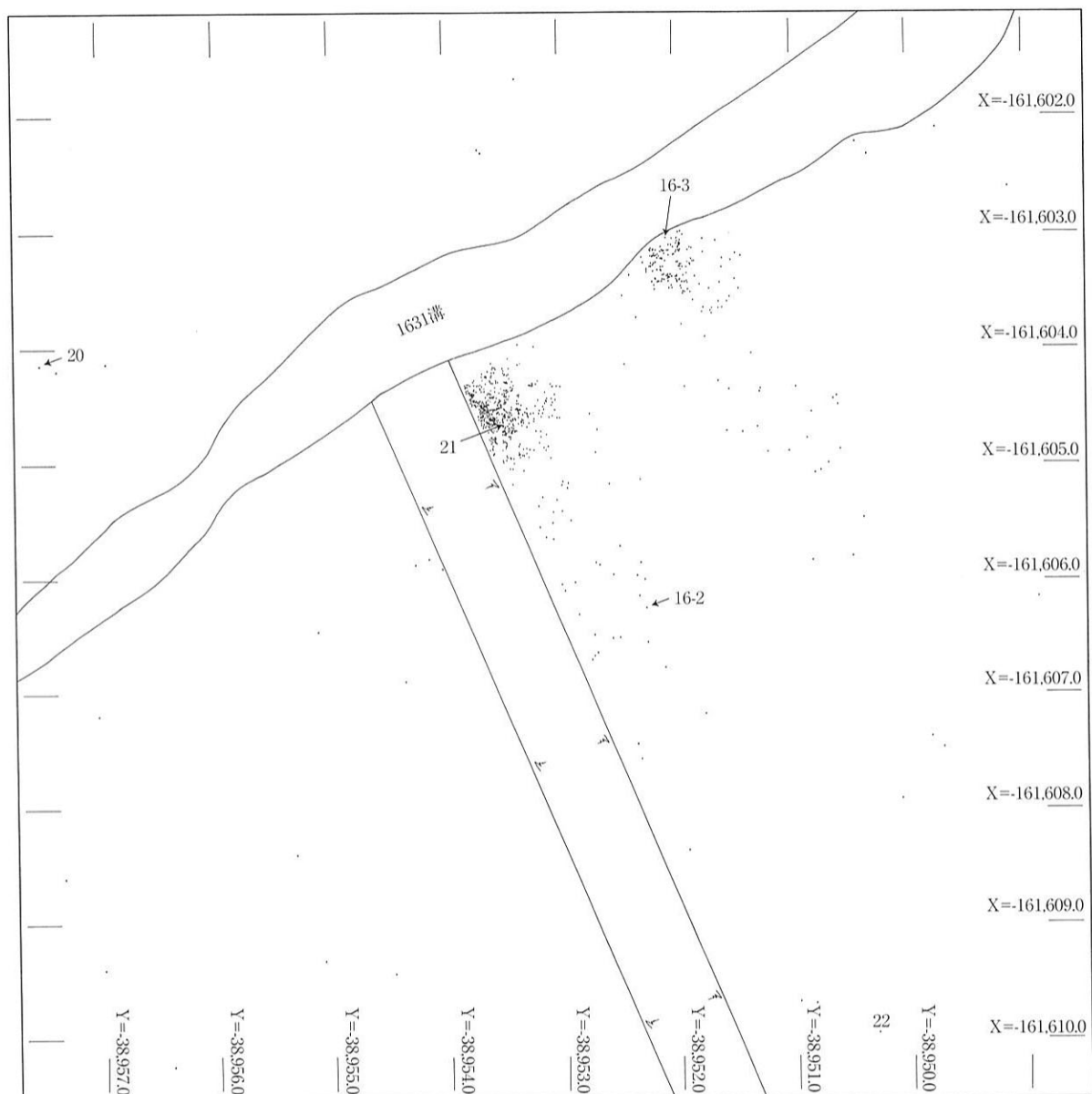


図81 2A tr.石器群出土状況図 (S=1/60)

石器集中部 1 (図82~84) 石器集中部 1 は、中位段丘崖下に密集し、東除川方向へ散漫に分布する。

石器集中部 1 に帰属する石器遺物は、平面座標とT.P.値を記録した658点と、断ち割り溝から出土した78点の計736点である。他に石器集中部 1 の検出中に取り上げた微細な石器遺物をあわせると、1555点にのぼる。平面形は、石器遺物が密集して分布する部位と、そこから東除川方向に散漫に分布する部位とにわかれる。石器集中部 1 に帰属する石器遺物の立面分布は、石器集中部を包含する黒色粘土層に沿って東除川方向へわずかに傾斜している。石器集中部 1 密集部では、最大で約20cmの上下幅をもって分布しており、一部が遊離している状況のようにみえる。散漫部では10cm前後の上下幅をもつ。黒色粘土層は当時の状況として、東除川の後背湿地状の様相を呈していたと考えられ、冠水と陸化によってこのような石器遺物の立面分布となったことが考えられる。そのことを考えると、石器遺物の一括性は高いと言える。このことに関する詳細は自然科学分析の項目を参照されたい。

石器集中部 2 (図85~87) 石器集中部 2 は、石器集中部 1 と同様の分布をなしており、中位段丘崖下に密集し、東除川方向へ散漫に分布する。石器集中部 2 に帰属する石器遺物は、平面座標とT.P.値を記

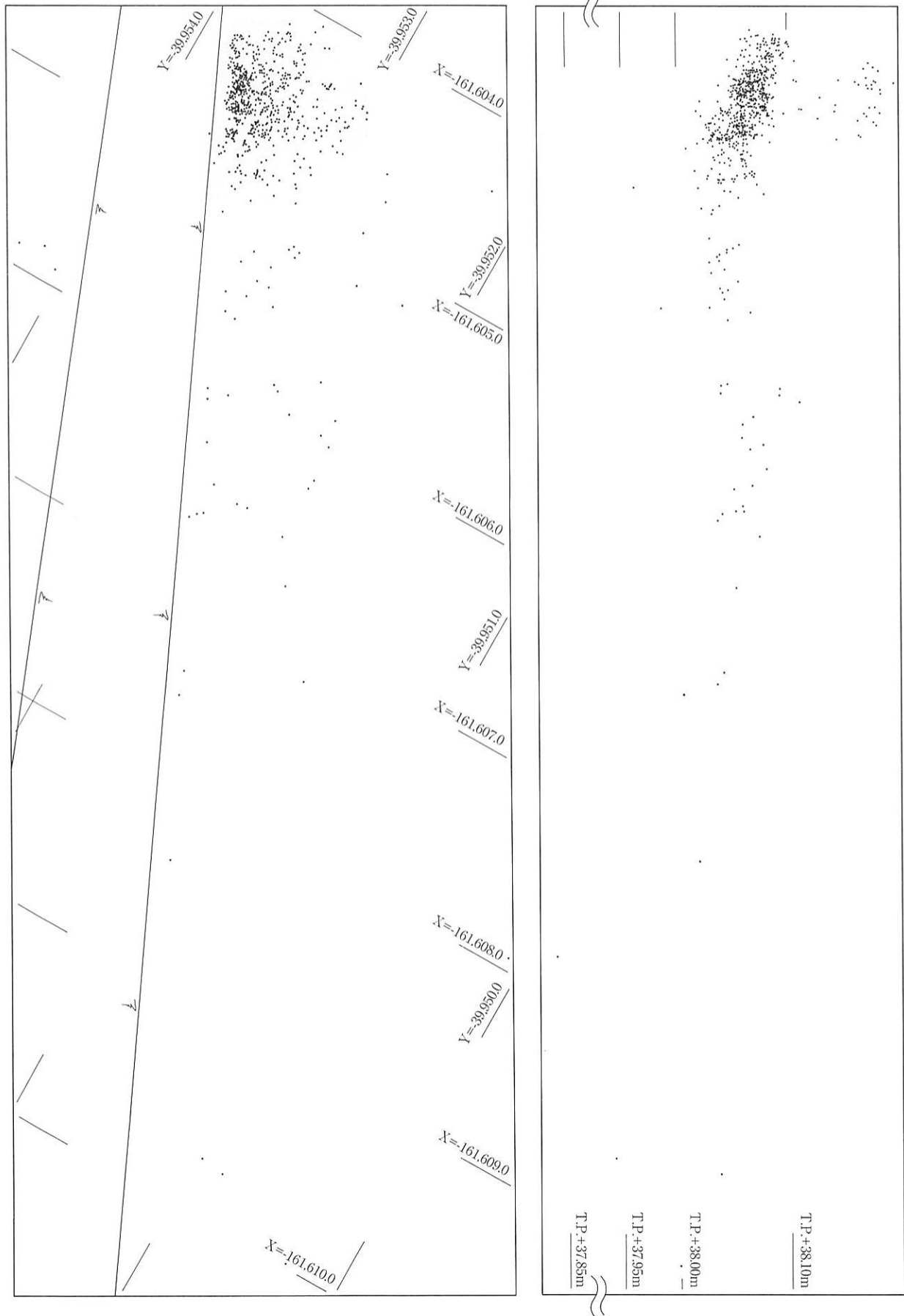


图82 石器集中部1 石器遺物出土狀況図 (S=1/5 1/30)

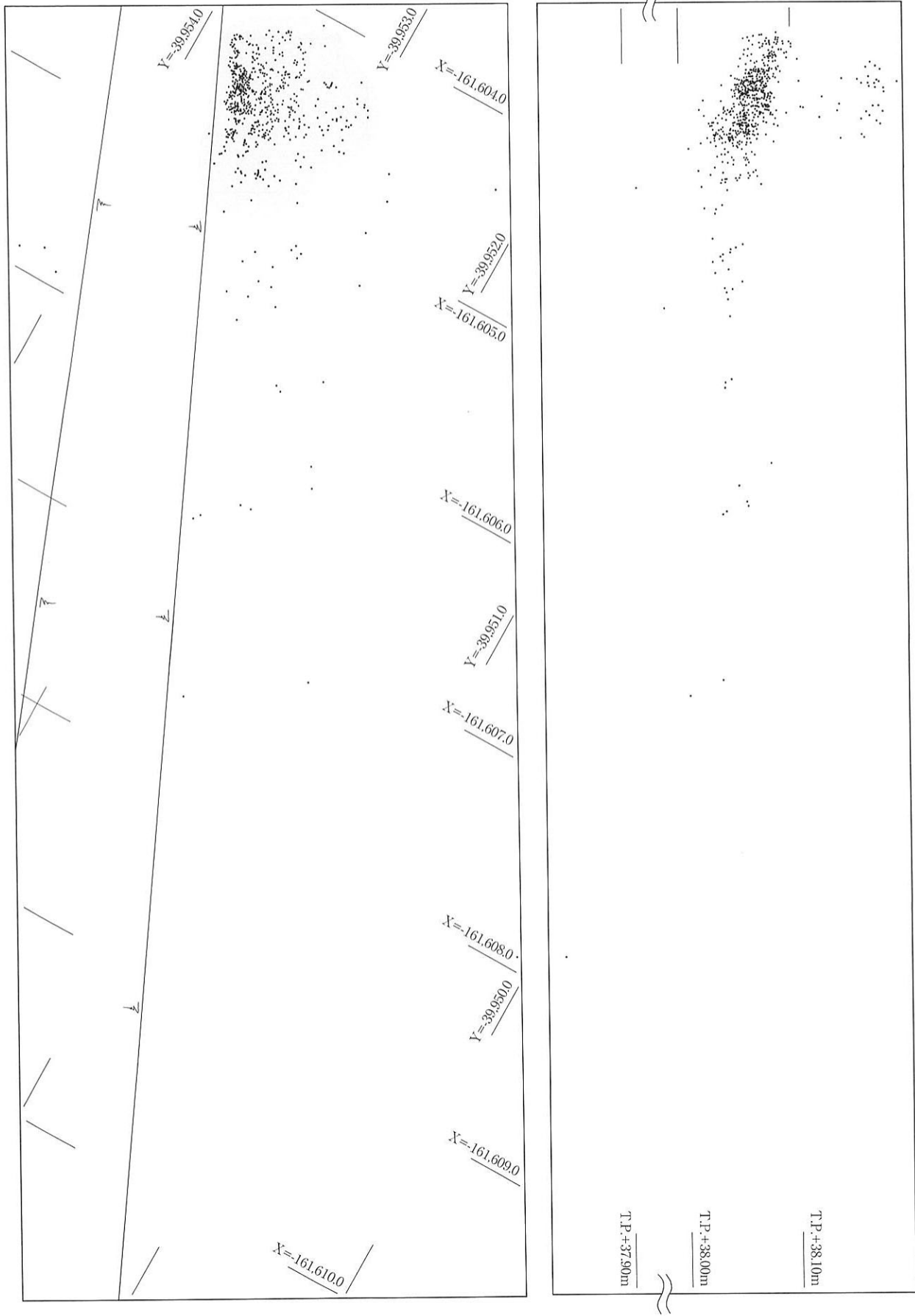


图83 石器集中部1 剥片出土状况图 (S=1/5 1/30)

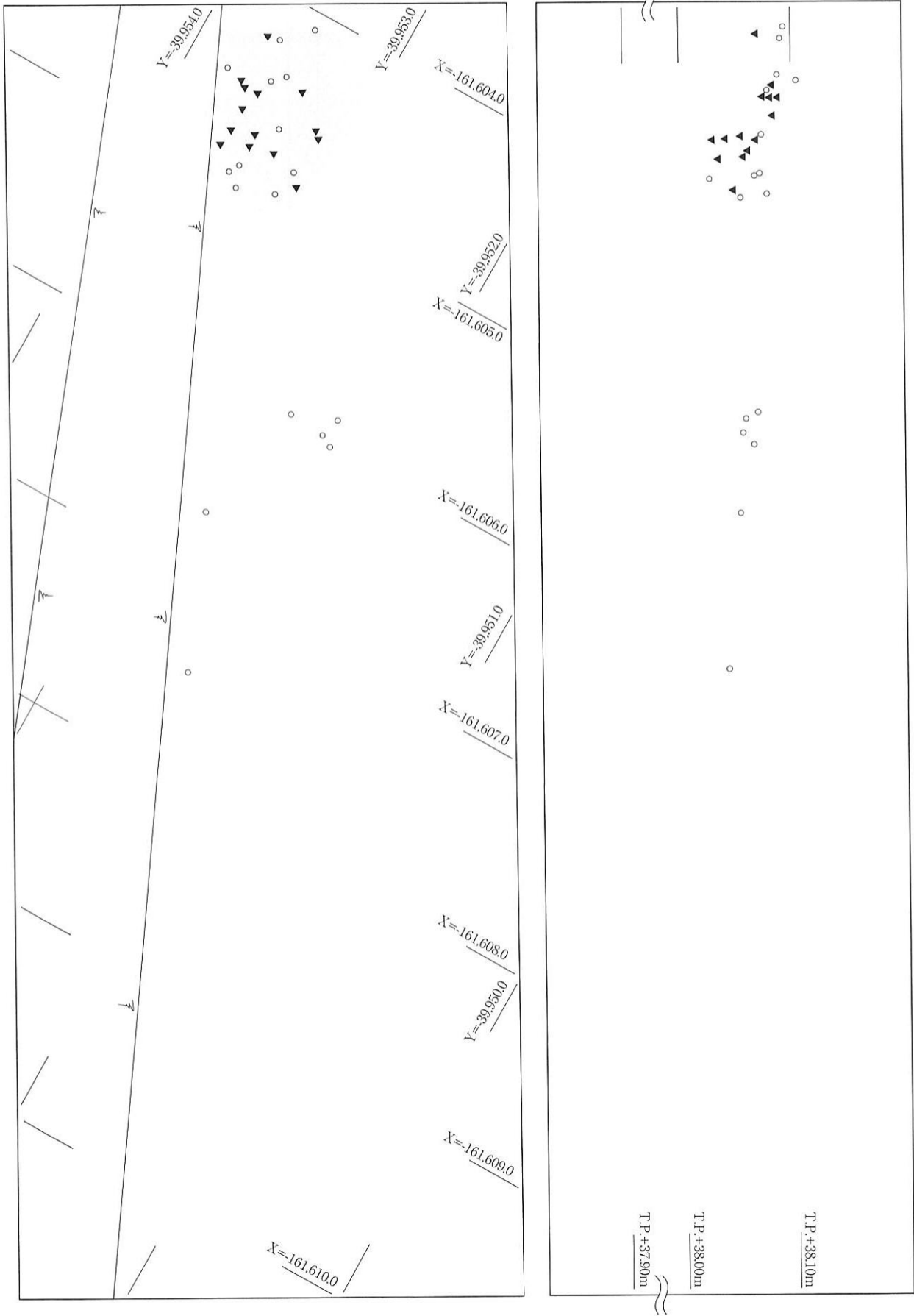


图84 石器集中部1 石核・楔形石器出土状况图 (S=1/5 1/30)

○：石核、▼：楔形石器

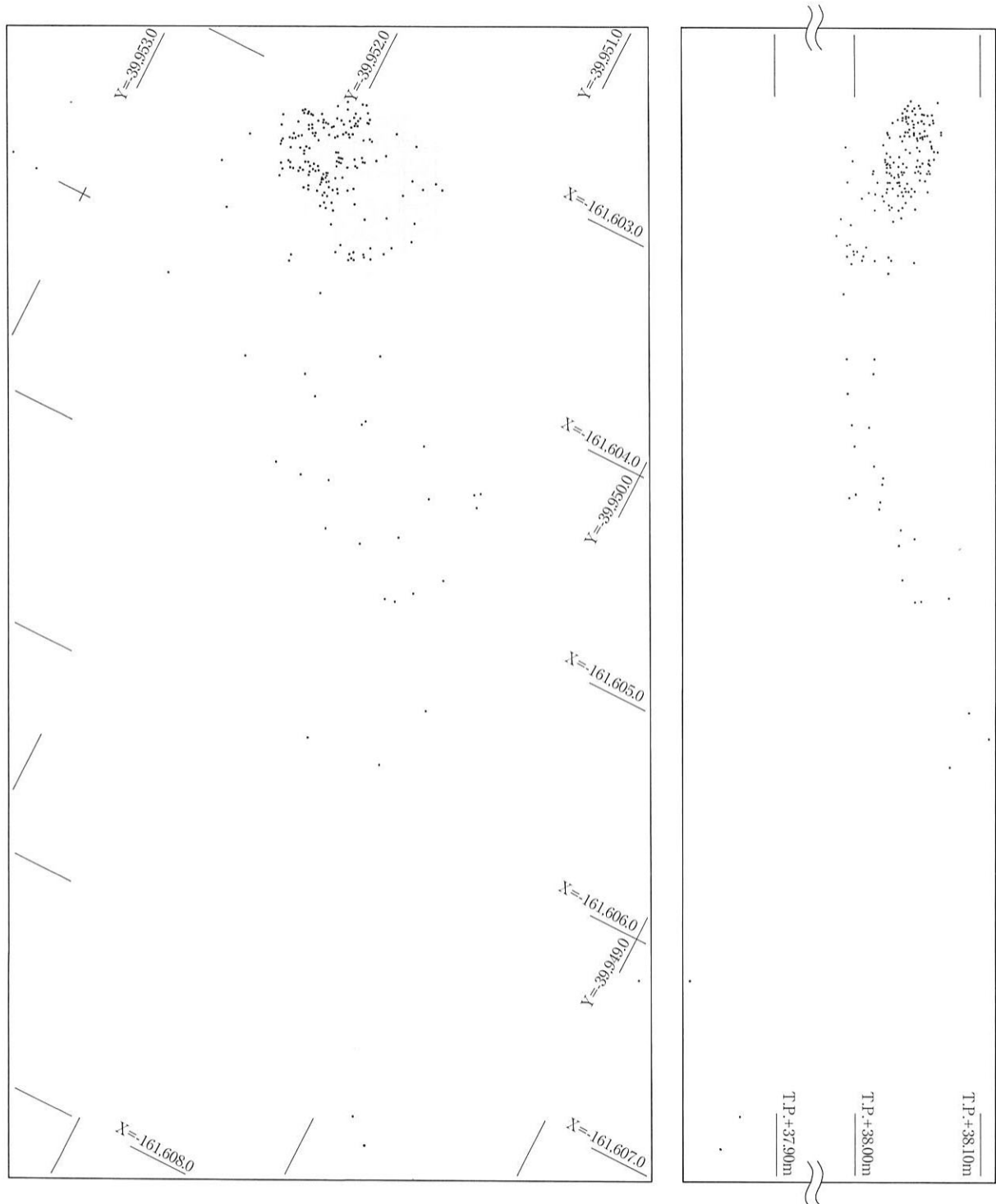


図85 石器集中部2 石器遺物出土状況図 (S=1/5 ← 1/30)

録した198点である。他に石器集中部2の検出中に取り上げた微細な石器遺物をあわせると、288点にのぼる。平面形は、石器遺物が密集して分布する部位と、そこから東除川方向に散漫に分布する部位とに分かれる。石器集中部2に帰属する石器遺物の立面分布は、石器集中部を包含する黒色粘土層に沿って東除川方向へわずかに傾斜している。石器集中部2全体として、最大約10cmほどの上下幅をもって分布している。2ヶ所で検出した石器集中部は、石器遺物の接合関係によって形成時期が同時であることが判明しており、石器集中部2の立面分布にみられる上下幅も、石器集中部1の状況とあわせて考えることができる。このため、石器集中部2も、一括性は高いといえることができる。

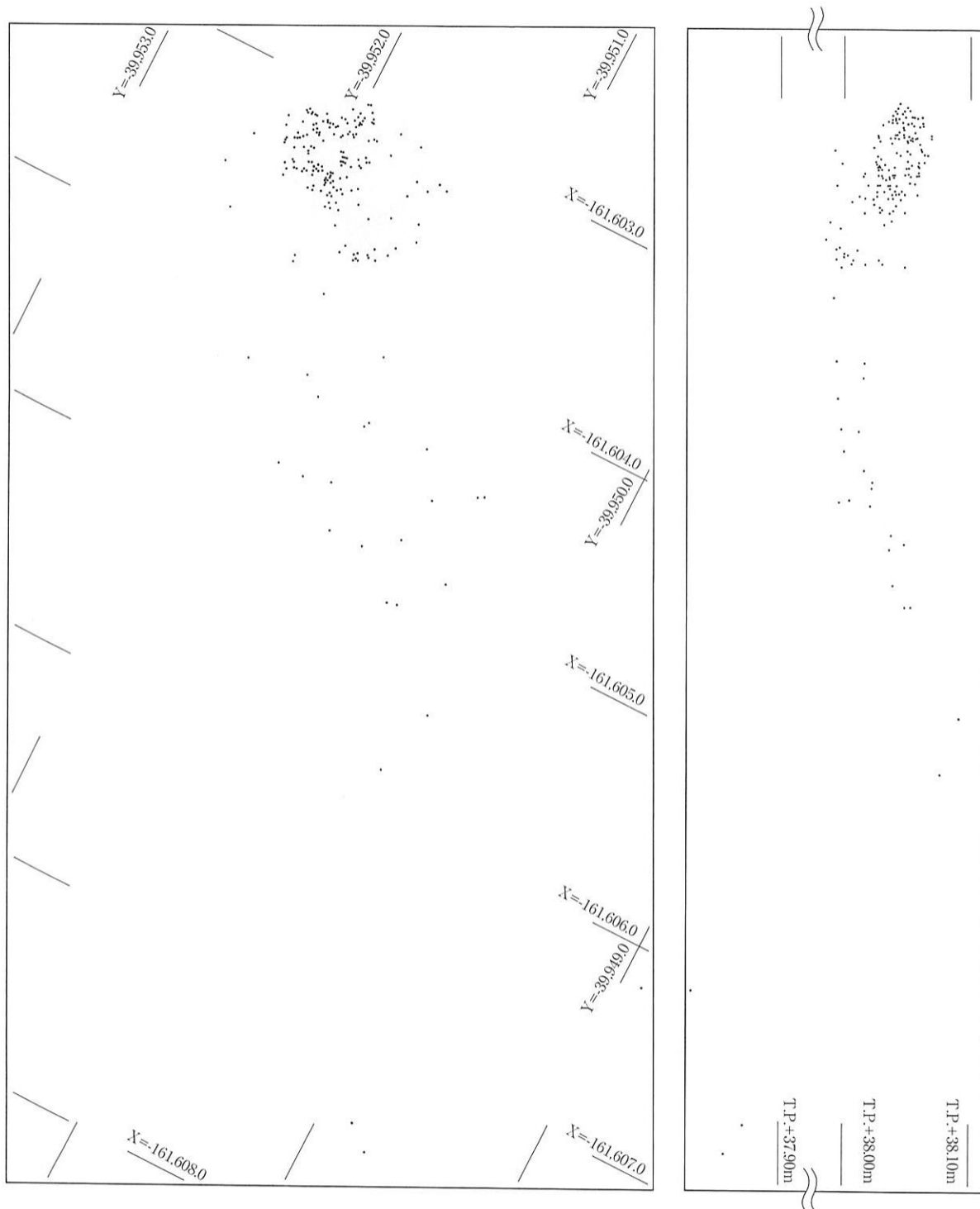


図86 石器集中部2 剥片出土状況図 (S=1/5 ~ 1/30)

(3) 接合資料⁴⁾

接合資料の概要 接合関係の検討は、平面座標とT.P.値を記録した875点と、断ち割り溝から出土した78点を対象に行った⁵⁾。また、接合資料14の14-aは、平面座標とT.P.値を記録する以前に取り上げたものの、黒色粘土層より出土していたため検討対象に含めたところ、接合関係が認められた。このような条件下で検討を行った結果、計20個体を確認した。うち、剥離面接合が含まれる接合資料は17個体、折損面接合のみで構成される接合資料は3個体である。また、接合資料のうち、構成資料に石核を含む資料は9個体である。接合率は、個体比で10.90%、重量比で43.06%である。これらの接合資料は、先述のよ

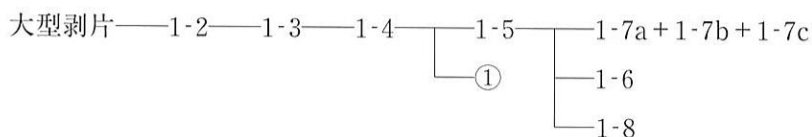


図87 石器集中部2 石核・楔形石器出土状況図 (S=1/5 □ 1/30) ○：石核、▼：楔形石器

うに母岩分類を行っていないため、接合個体同士が一つの母岩となる可能性もある。

石器集中部1に帰属する接合個体は、計12点で、接合資料1～5、7、9、10、14、17～19である。石器集中部2に帰属する接合個体は、計6点で、接合資料6、8、11～13、15である。接合資料16は接合関係が石器集中部1と石器集中部2にまたがっており、このことから、検出した2ヶ所の石器集中部の同時期性を指摘することができる。

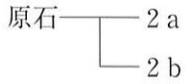
接合資料1 (図91、図版26-1)



接合資料1は、剥片4点・楔形石器1点・石核1点の、計6点からなる。折損資料を含めた接合総数は9点である。接合資料中で唯一、剥片を素材として剥片剥離を行うことが確認できる資料である。石器集中部1に帰属する。背面がすべて自然面で構成される大型の剥片を素材とし、素材となる剥片の打点を取り込むように、背面から石理に沿って1-2を剥離する。そのまま打点を後退させつつ1-3、1-4を剥離し、1-5を剥離する際に垂直割れが生じて左半の①を折損する。その後、さらに打点を後退

させて剥離を行おうとするが、剥離する前に垂直割れが生じ、素材が大きく半截されて1-7a+1-7b+1-7c、1-8と1-6に分かれる。素材を用いた剥離作業はここで終了し、さきに生じた1-8のみを楔形石器として用いる。接合資料1は、構成する石器遺物のほとんどが断ち割りから出土した資料であり、その分布傾向の詳細は不明である。

接合資料2 (図88・91、図版26-2)



接合資料2は、石核2点からなる。石器集中部1に帰属する。原石からの直接打撃によって剥片剥離を行う。石核の両端に敲打にともなうツブレ痕が顕著に観察され、その剥離面の境界は不明瞭である。

上下の打点から生じる剥離痕同士の新旧関係は判然とせず、2点の石核は、垂直割れによって生じた折損面で接合しており、これらのことから接合資料2は、両極打法を用いて剥片剥離を行っていることがわかる。石核から垂直割れが生じた後、剥離作業を終える。石核をみると、ほとんど剥片剥離が行われておらず、垂直割れが剥離作業終止の大きな要因であったことが窺える。

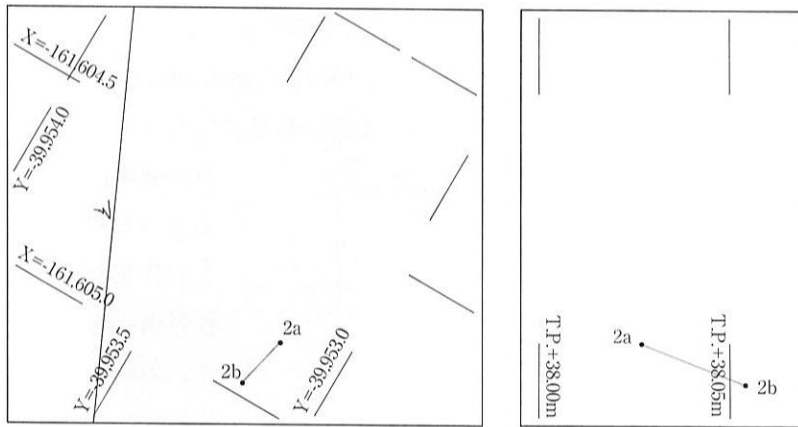


図88 接合資料2 分布図 (S=1/2 ← 1/20)

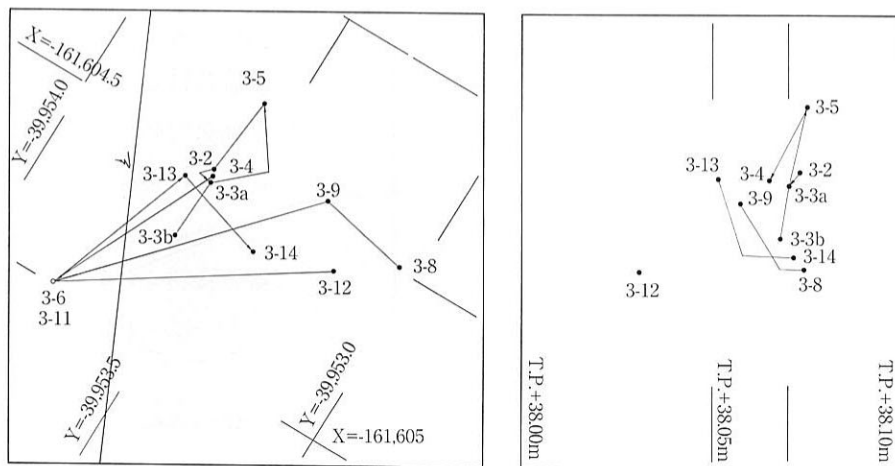
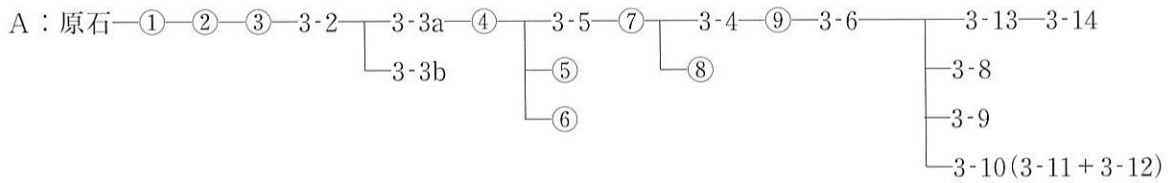


図89 接合資料3 分布図 (S=1/2 ← 1/20)

接合資料3 (図89・92・93、図版26-3)



B: 原石—⑩—⑪—⑫

接合資料3は、剥片8点・楔形石器2点・石核1点の、計11点からなる。折損面で接合する資料を含めて総計12点である。欠落が多く不明な部分も存在するが、原石から石理に沿った剥片剥離を行うと思われる。石器集中部1に帰属する。原石の一辺に直接打撃を加えて、3-2と3-3の背面のネガティブ面に対応する①、②を剥離する。一方で、打面を他の自然面の一辺へ転位して剥離方向を90°振り、3-2と3-5の背面のネガティブ面に対応する③を剥離する。①と③は新旧関係がつかず、剥離順序は不明である。その後、再び剥離方向を90°振って最初の打面に戻り、3-2と3-3を剥離する。両者の新旧関係は不明。3-3は剥離の際に折損し、3-3aと3-3bにわかれる。続いて3-5を剥離。

その際、二方向に割れが生じて⑤、⑥とに折損する。3-4剥離時に打点から垂直割れが生じ、⑧を欠損する。引き続き剥離を行うが、欠落しており詳細は不明である。3-7の剥離面構成から、少なくとも2～3の剥片を剥離していることが窺える(⑨)。次に打点を石核作業面左端に移し、側縁に自然面を取り込むようにして3-6を剥離する。その後も同一打面上で剥離を行うが、作業面全体が大きく剥離し、同時に割れが生じて3-8、3-9、3-10にわかれる。石核の潜在的な割れが影響した結果と思われる。次に90°打面を転位し、3-13を剥離する。打点折損。また、石核にはもう1つ作業面(B)が設定され、剥離面構成から軸を同じくする3つの剥片が剥離されている。この作業面と、接合が認められる作業面(A)との新旧関係がつかず、剥離順序は不明である。ただ、作業面Bは石理に対して半順目で剥片剥離を行っており、自然面の凹凸にも影響されて剥離の末端が蝶番状になっている状況から、作業面Bでの剥片剥離を断念して、新たな作業面Aを設定したとも考えられる。

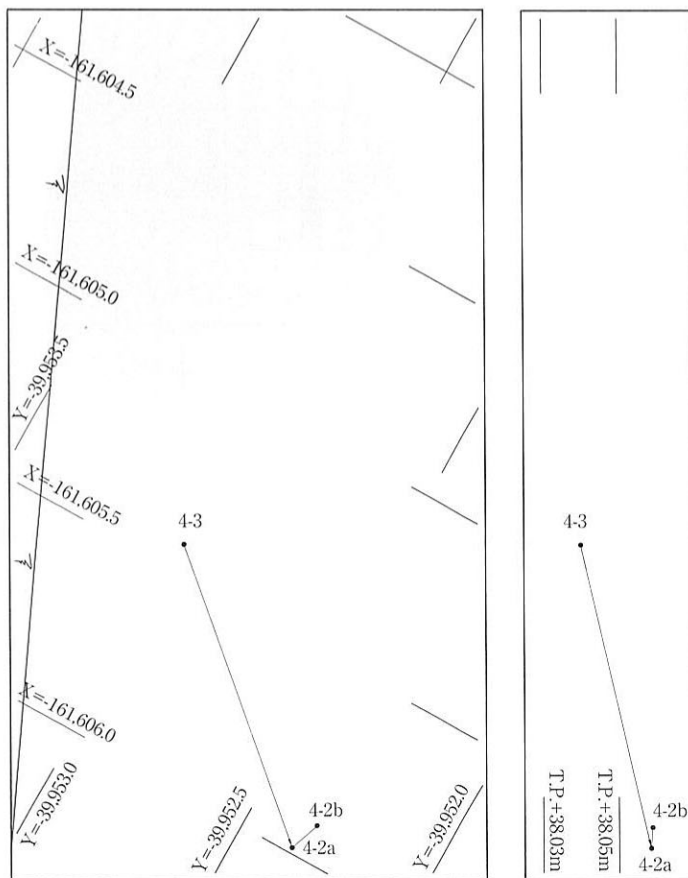
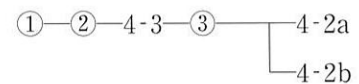


図90 接合資料4 分布図 (S=1/2 → 1/20)

接合資料4 (図90・93、図版26-4)



接合資料4は、剥片1点・石核2点の、計3点からなる。石器集中部1に帰属する。同一作業面において、石理に沿った剥片剥離を行う。4-1の作業面中央には先

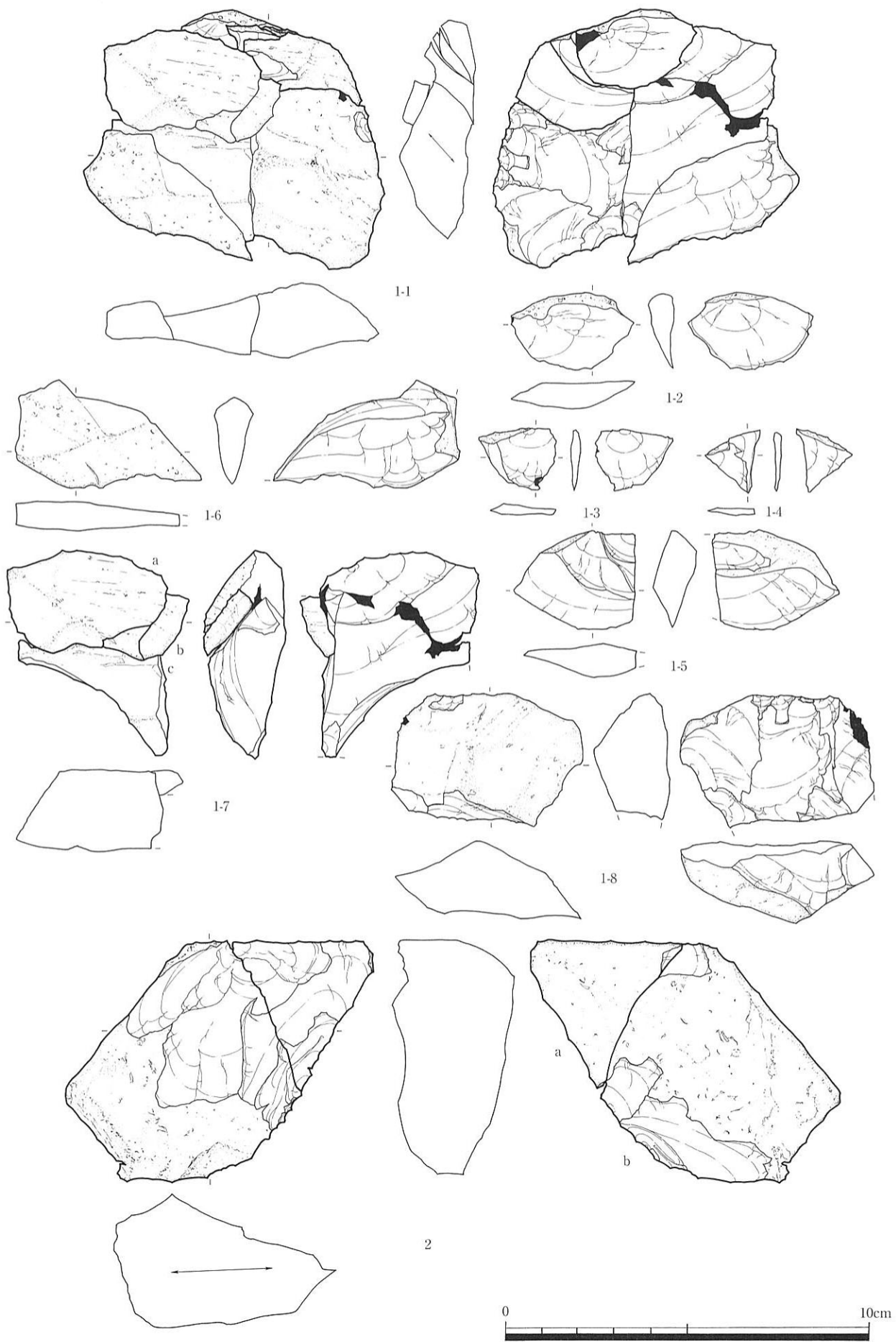


图91 接合資料1・2 実測図 (S=2/3)

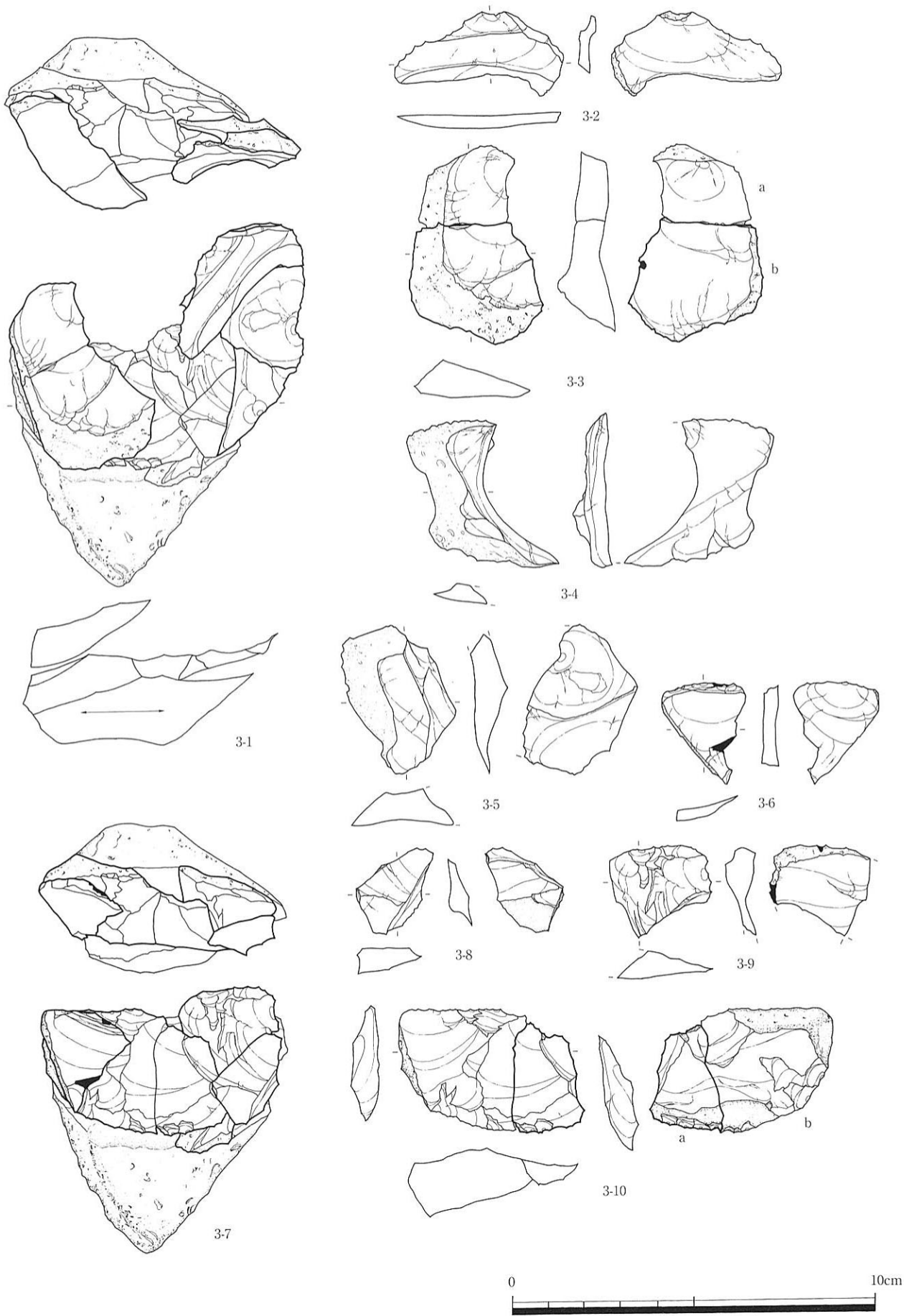


图92 接合資料3(1) 実測図 (S=2/3)

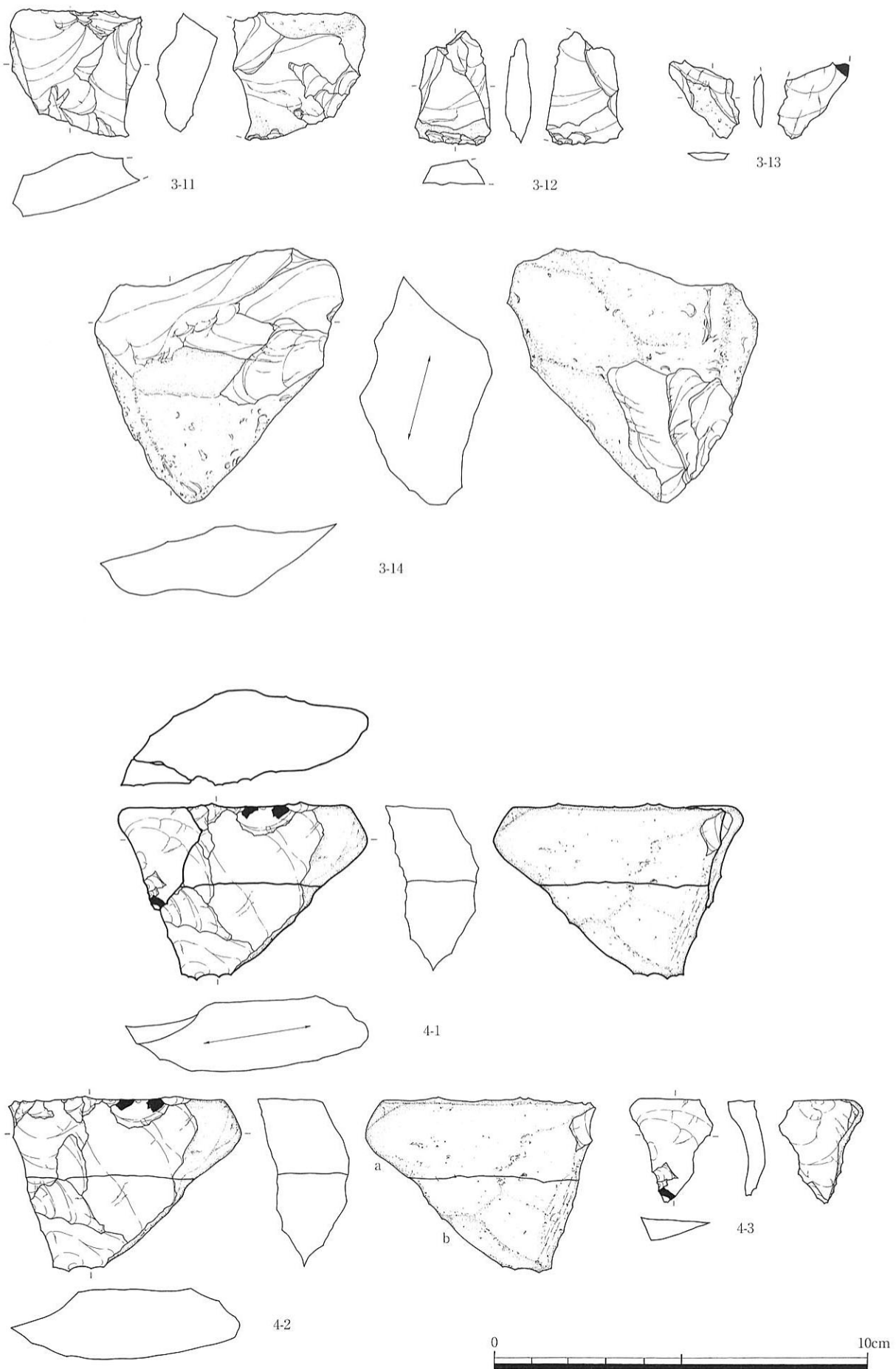


图93 接合資料3(2)・4 実測図 (S=2/3)

行する剥離痕が残存し、それを切るように上辺には細かな剥離が認められ、下辺には急角度の剥離が認められる (①)。これらの新旧関係は不明。次に、上下端の剥離軸と直交するように打面を転位して剥離を続ける (②)。1枚の剥片を剥出したのみで打面転位し、4-1上辺端部から4-3を剥離する。一側縁に自然面を取り込む剥片で、背面の先行剥離面は②の際の影響で外反する。4-3は、外反した状況を取り除く剥離とも考えられる。次に、再び②剥離時の打面に転位し剥離を行うが、石核に割れが生じて4-2aと4-2bにわかれ、作業を終える。

接合資料5 (図94~96、図版27-1)

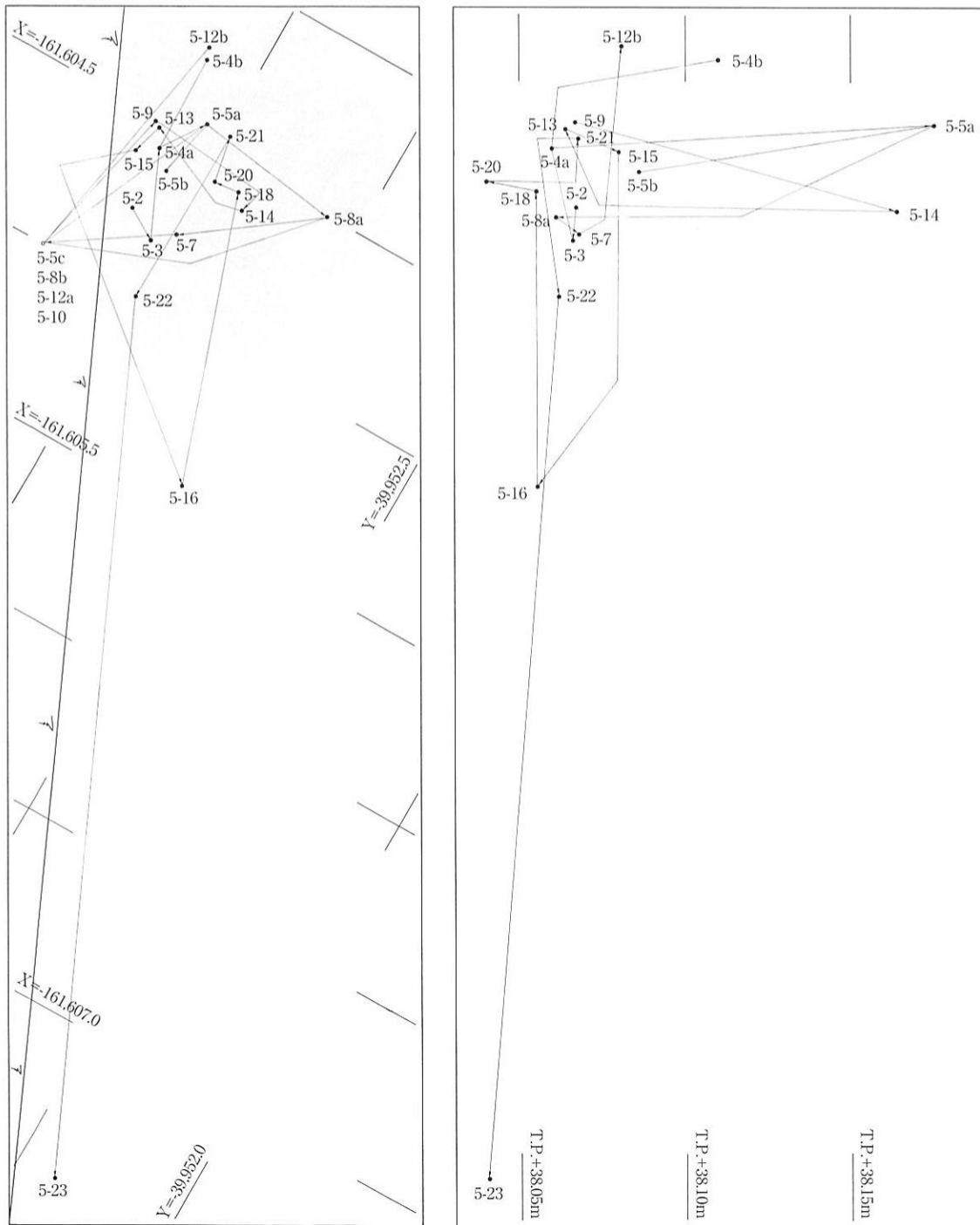


図94 接合資料5 分布図 (S=1/2 t 1/20)

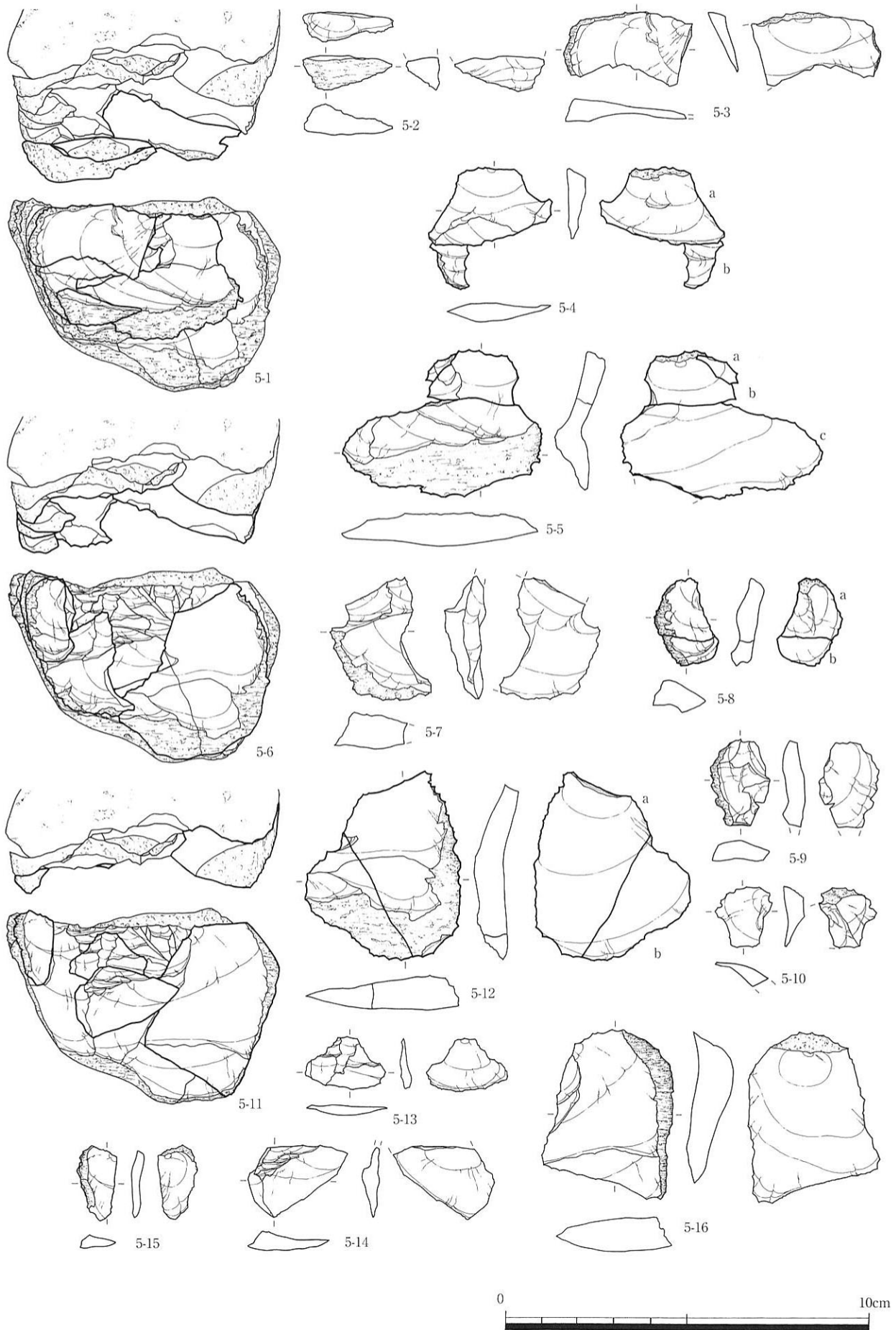


図95 接合資料5(1) 実測図 (S=2/3)

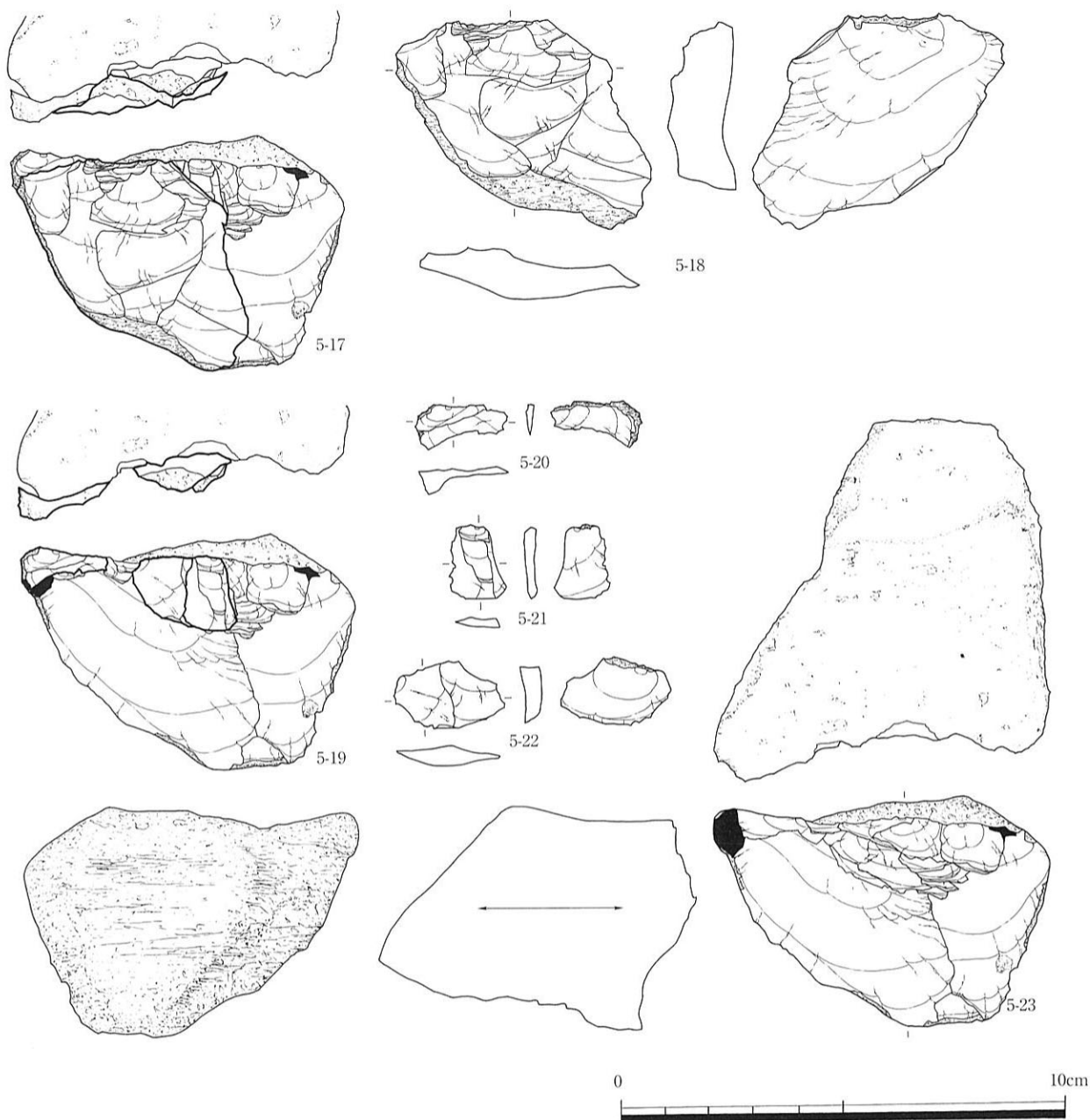
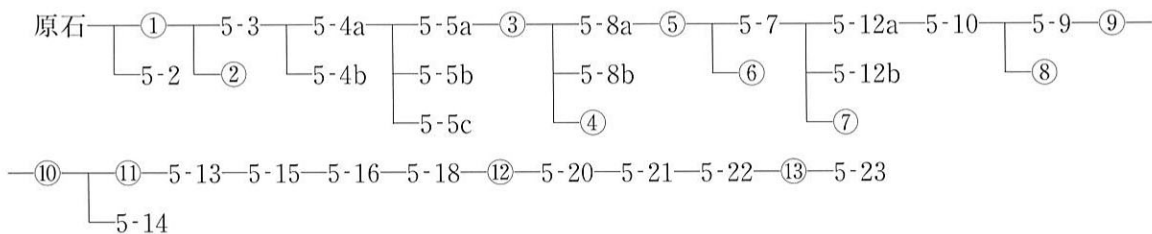


図96 接合資料5(2) 実測図 (S=2/3)

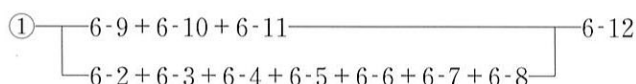


接合資料5は、剥片17点・石核1点の、計18点からなる。折損資料を含めた接合総数は23点であり、接合数資料中最多である。ほぼ原石までの復元が可能である。石器集中部1に帰属する。打面を原石の一面に固定し、半順目の単一作業面、同一打面において、打点を左右に移動しつつ後退して剥片剥離を行う。打面を作出するような行為はなされず、すべて自然面を打面とする。まず、原石に第一打を加えて5-2を剥離する。その際に下半に折れが生じて、上半部①は欠落している。続く5-3は剥離時に垂直割れが生じ、右半を折損して②を欠落する。そのまま打点を後退させ、5-4を剥離する。右下端が

湾曲し突出して剥離しており、加撃の勢いによるためか折損する(5-4a、5-4b)。その後、5-5を剥離するが、下半5-5cを折損し、また打点からの垂直割れによって、5-5aを折損する。続く③は、打点を打面の右半にずらして剥離する。欠落しているが、その剥離状況から、他に剥離された剥片に対して比較的大きなものと思われる。5-8は打点を打面の左端に移して剥離される。末端は蝶番状に剥離し、下半を折損する(5-8a、5-8b)。また、打点から垂直割れが生じて左半を折損し、④を欠落する。打点はそのまま打面の左半に設けて、いくつかの剥片が剥離される(⑤)。その後剥離される5-7の背面に細かい階段状の剥離が見られることから、⑤は微細な剥片が生ずる一連の剥離であると考えられる。欠落。5-7は打点を折損し、左半を打点からの垂直割れによって折損し、⑥を欠落する。先行する⑤の直後に剥離されており、一連の階段状微細剥離の一部と思われる。次に打面右半に打点を移し、5-12を剥離する。他に剥離された剥片に対して比較的大きいが、剥離軸に対し斜めに折れが生じて折損する(5-12a、5-12b)。打点を折損により欠落する(⑦)。再び打点を打面左端に移し、5-10、5-9を剥離する。5-9は打点からの垂直割れによって左半⑧を折損し、欠落する。その後、⑨、⑩を剥離するが、欠落する。欠落状況から、⑨、⑩は他に剥離された剥片に対して比較的大きなものと思われる。推定される打点位置は、⑨は打面左半、⑩は打面右半である。次に打点を打面中央に移し、5-14、5-13を剥離する。5-14は打点を折損する(⑪)。5-14、5-13とも、背面を構成する剥離痕に末端が蝶番状の細かい剥離が認められ、これらの剥離の前段階に、⑤のような剥離が施されたことが考えられる。

打点を打面左端に移し、5-15を剥離。剥離状況は5-10、5-9と類似している。打点を打面右半に移し、5-16を剥離する。幅広・奥深の打面を有する。続いて打点を打面中央左よりに移し、5-18を剥離する。接合資料5を構成する剥片中最大のものである。背面上端に細かい階段状剥離痕が認められ、⑤と同様の剥離が施された後に5-18が剥離されたことが考えられる。さらに打点を打面左端に移し、5-20を剥離する一方で、打面中央で5-21、5-22を剥離する。5-21の背面構成の一部と、5-21と5-22の剥離の間には細かな階段状剥離が認められ(⑫)、5-22剥離後も剥片剥離作業を続行するが、細かな階段状の剥離を施すにとどめる(⑬)。最後に残核として5-23が残り、ここで作業を終えている。

接合資料6 (図97～99、図版27-2)



接合資料6は、剥片10点、石核1点の計11点からなる。内、剥片7点は、敲打にともなう破碎によって生じた剥片である。石器集中部2に帰属する。すでに剥離が進行した状態で接合する。接合関係のある剥片の直前では、打面を石核上半周に固定し、単一の作業面に対して求心状の剥片剥離がみられる(①)。その後、6-9、6-10、6-11と6-2、6-3、6-4、6-5、6-6、6-7、6-8を剥離する。6-9、6-10、6-11は切り合いから剥離順序を追えないが、わずかに剥離面が接する6-9、6-11に関しては6-9→6-11という剥離順序が与えられる。6-2、6-3、6-4、6-5、6-6、6-7、6-8は、これらが接合する石核6-12の剥離面のリングがポット・リッド状に中央に収束しており、各剥片の背面には顕著な敲打痕あるいはツブレ痕も認められる。6-10、6-11の背面に、腹面の剥離と方向を同じくする細かい階段状剥離が認められることとあわせて、これらの状況から接合資料6は、両極打法を用いて剥離された剥片によって構成されていると考えられる。両極打法によって6-10、6-11を剥離し、なおも継続して剥離を施そうとするが、打面あるいは作用面に破碎が生じた結果、作業を終えていると考えられる。

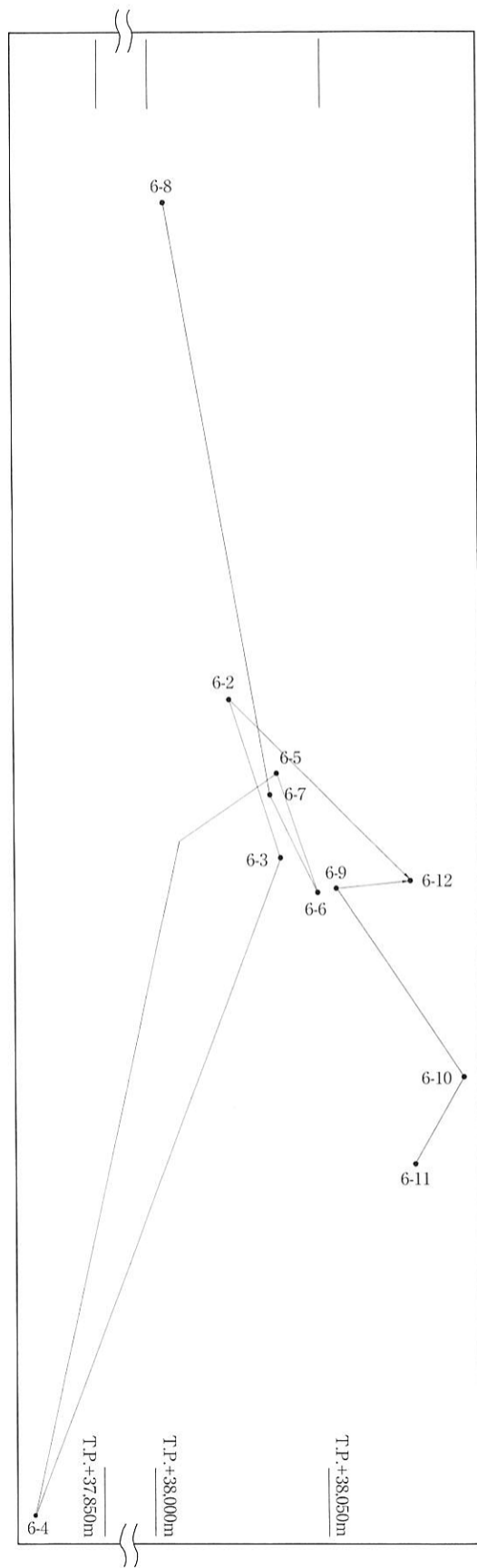
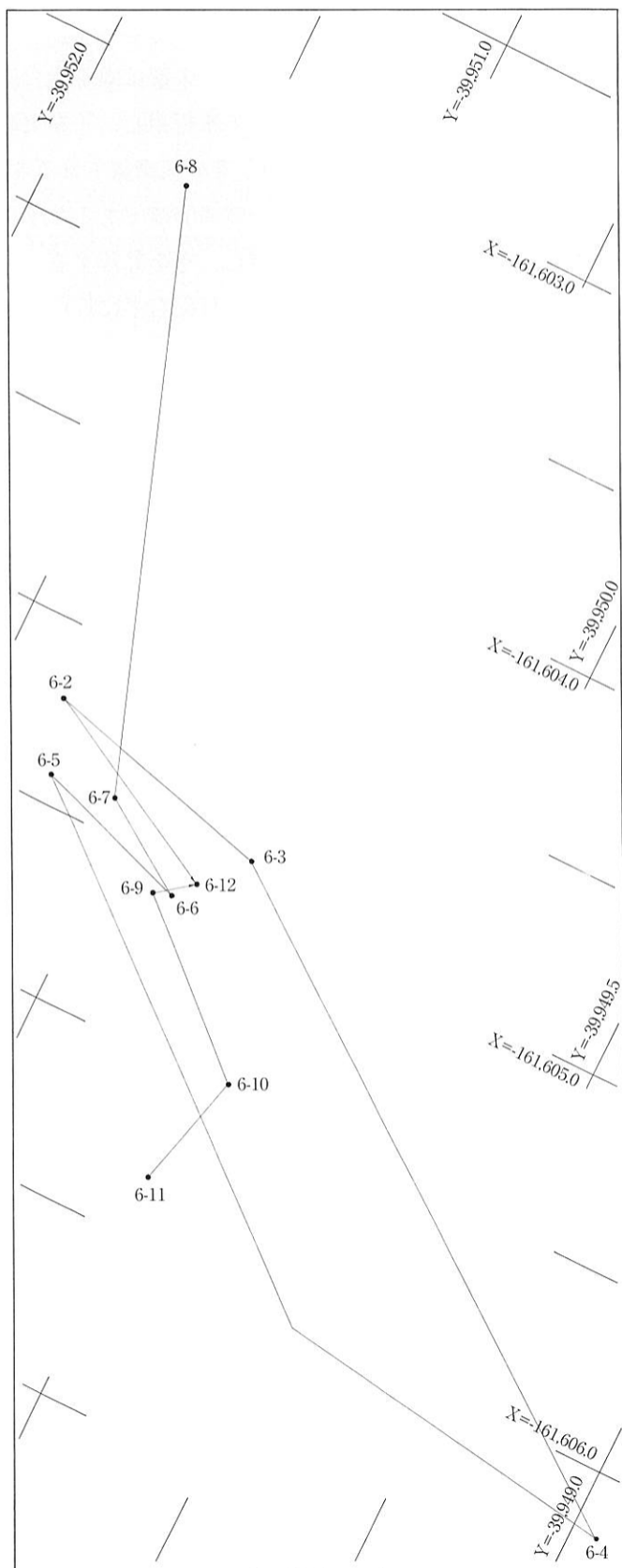


図97 接合資料6 分布図 (S=1/2 1/20)

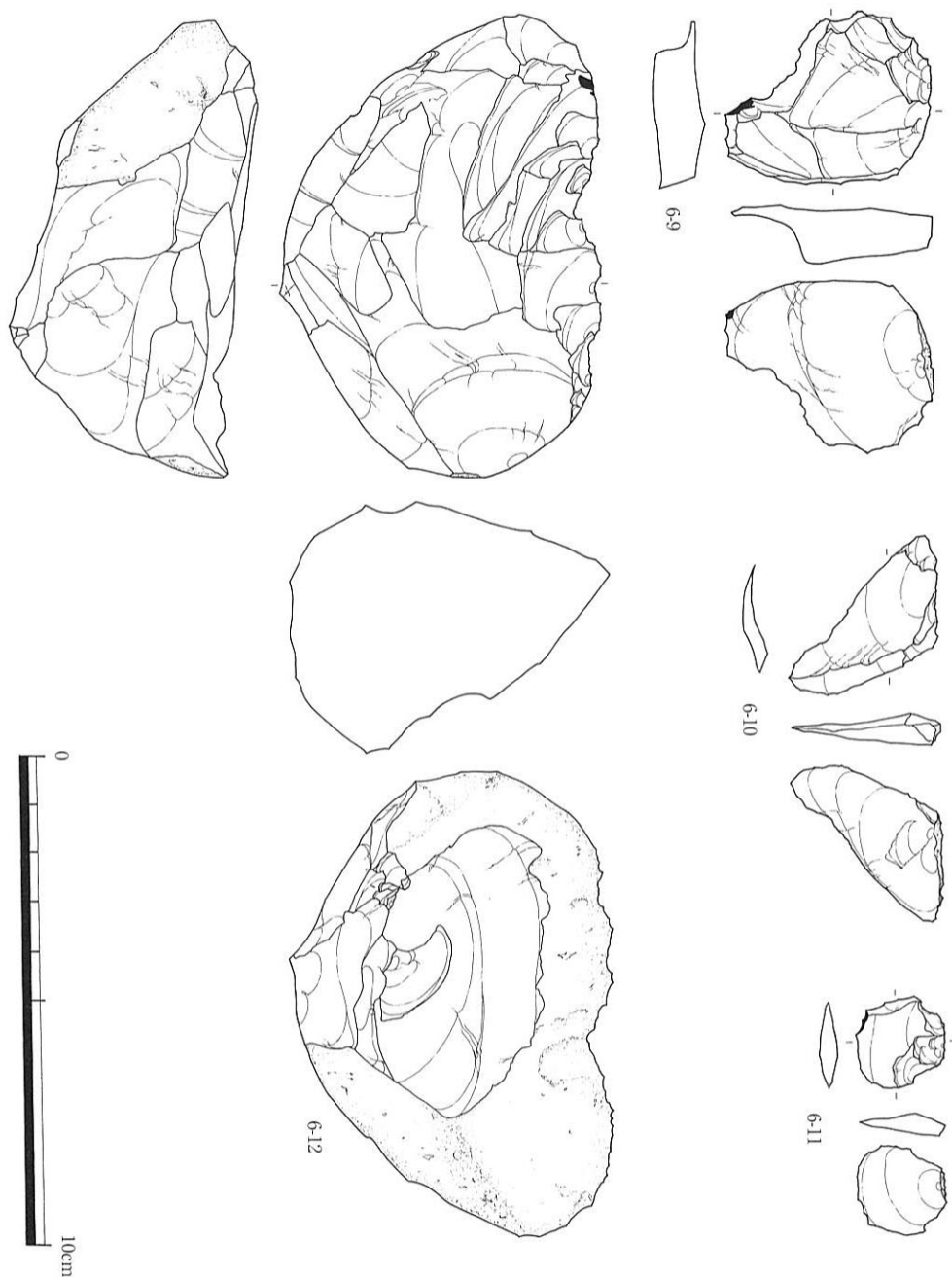


図99 接合資料6(2) 実測図 (S=2/3)

り、打面と直角な単一の作業面において剥片作業を行う。作業面は石理に対して水平。石核の上下端にはツブレ痕と細かな剥離が対応して認められ、両極打法によって剥片剥離が行われていると考えられる。

両極打法によって剥離されたと思われる7-2の末端は蝶番状に剥離し、7-3を折損する。さらに両極打法を行い、剥片剥離を施すが、石核に打点からの垂直割れが生じ、折損する。7-7aと7-7bも同時に垂直割れが生じており、この両者を剥離したとき、石核に垂直割れが生じたと思われ、この時点で剥離作業を終えている。なお、石核作業面の裏面に、両極打法の剥離方向と直交する剥離がある。どの段階で剥離されたのか新旧関係は明らかではない。立方体を呈する石核の頂点を打点に、自然面の稜に沿った剥離を行う。

接合資料8 (図102・113、図版28-2)



図100 接合資料7 実測図 (S=2/3)

8-4—8-3—8-2

接合資料8は、剥片3点からなる。石器集中部2に帰属する。剥離方向を同じくした縦長剥片3点を剥離する。8-4は石核が持つ自然面の稜を背面に取り込んだ剥片である。打面を作出する剥離が行われており、作出された打面に直交する。そのまま打点を後退し、8-3を剥離する。その後、打点をやや左にずらし、自然面を打面にして8-2を斜め方向に剥離する。点状打面を有する。8-4で取り込みきれなかった自然面の稜を取り込んでおり、接合資料8は、一貫して石核が持つ自然面の稜を取り除く行為を行ったものと考えられる。

接合資料9 (図103・114、図版28・5)

9-3—9-5—9-2a

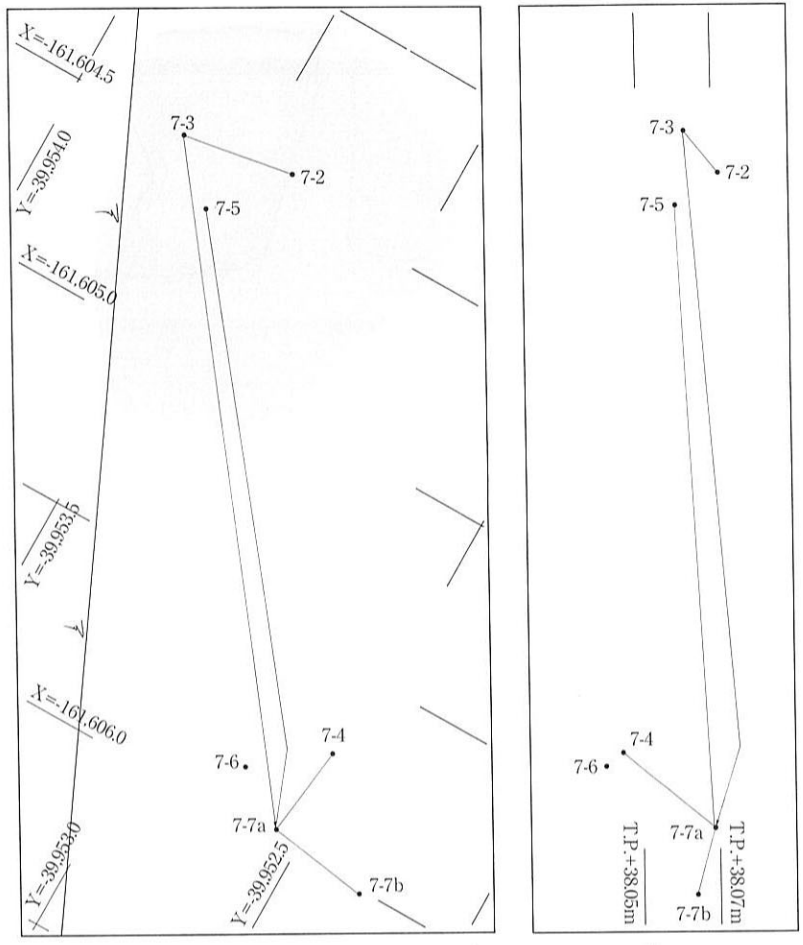


図101 接合資料7 分布図 (S=1/2 ↙ 1/20)

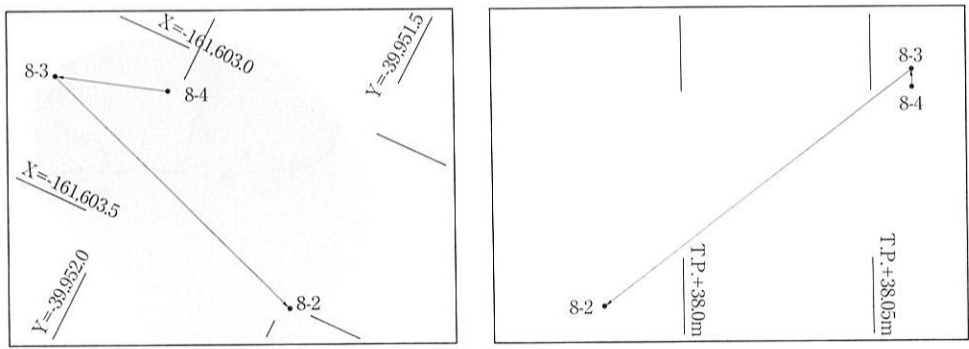


図102 接合資料8 分布図 (S=1/2 ↙ 1/20)

┌ 9-2b
└ 9-4

接合資料9は、剥片3点からなる。折損資料を含めた接合総数は5点である。石器集中部1に帰属する。同一の打面から剥離方向を同じくし、石理に沿った剥離を行う。9-3は自然面の稜に沿った剥離である。背面は先行剥離面が一面と自然面で構成する。続く9-5も9-3と同様に自然面の稜に沿って剥離されており、縦長剥片である。打点にはツブレ痕が認められる。次に9-2が剥離されるが、ツブレ痕とともに打点付近から垂直割れが生じ、9-4を折損する。また、剥離時の衝撃によるためか、9-2a末端の9-2bを折損する。観察される自然面は凹凸に富んでおり、剥離された剥片の厚さも薄いことから、打面あるいは作業面を作出するために行われた剥離であろうか。

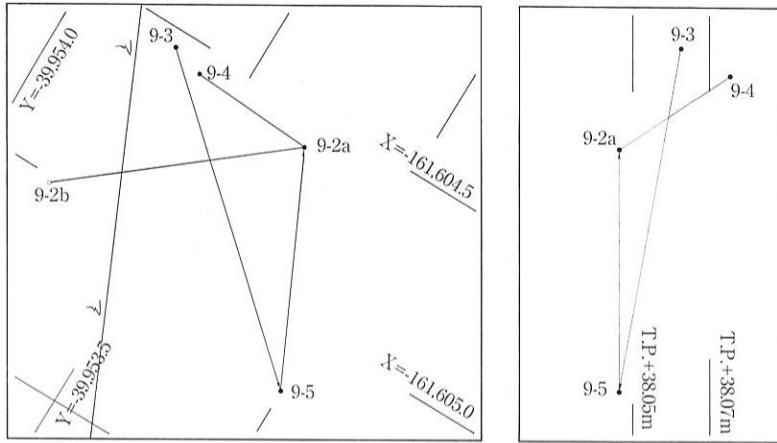


図103 接合資料9 分布図 (S=1/2 ↙ 1/20)

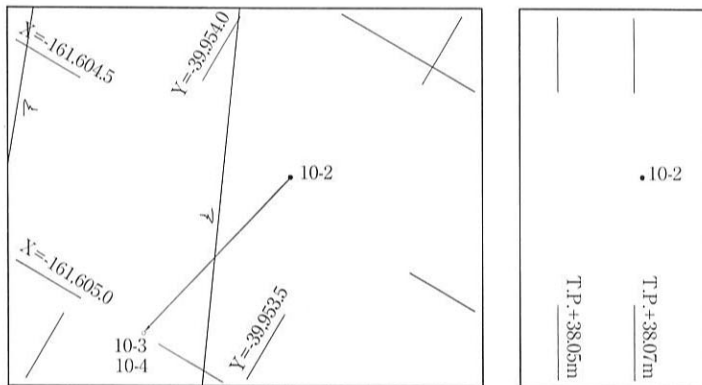


図104 接合資料10 分布図 (S=1/2 ↙ 1/20)

接合資料10 (図104・118、図版29・4)

①—10-2—②—10-3—③—10-4

接合資料10は、剥片3点からなる。石器集中部1に帰属する。自然面を打面に、打点を後退しながら石理に対して半順目の剥離を行う。接合資料を構成する3点は、すべて一側縁に自然面を取り込む。10-2の背面にも同様の剥離を行ったとみられる剥離痕が残存し、10-2と10-3の背面には自然面を取り込まない剥離を行っていることも窺え(②、③)、それらが交互に剥離されていることが確認できる。

接合資料11 (図105・114・115、図版28・3)

①—11-2a—11-3
11-2b

接合資料11は、剥片1点、石核1点の、計2点からなる。石器集中部2に帰属する。11-1は、自然面を打面にし、単一の作業面において石理に沿った求心状の剥片剥離が施されている(①)。一連の求心状剥離の中で11-2が剥離されるが、加撃時に生じたと思われる折損によって上半aと下半bの2点にわかれる。石核の下半には、末端階段状の剥離痕がいくつもみられ、それを取り除こうと試みたと思われる剥離が施されていることが看取できる。11-2剥離後も11-3に対して剥片剥離を行っているが、結局、作業面中央に島状に残された部位を取り除くことができずに作業を終えていると考えられる。

接合資料12 (図106・113、図版28・1)

①—12-3—12-2a
②—12-2b

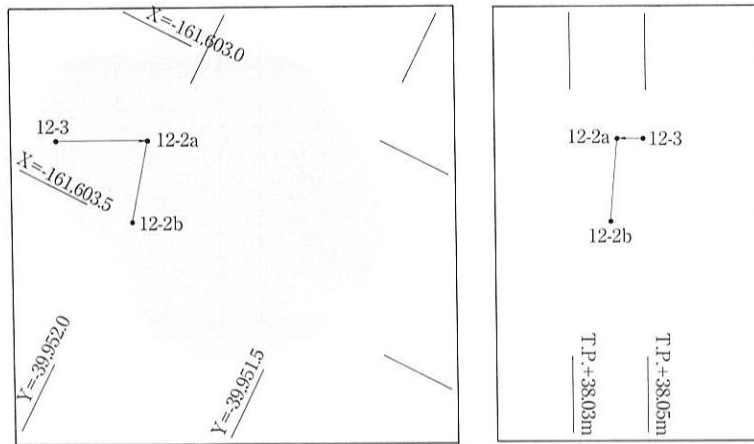


図106 接合資料12 分布図 (S=1/2 L= 1/20)

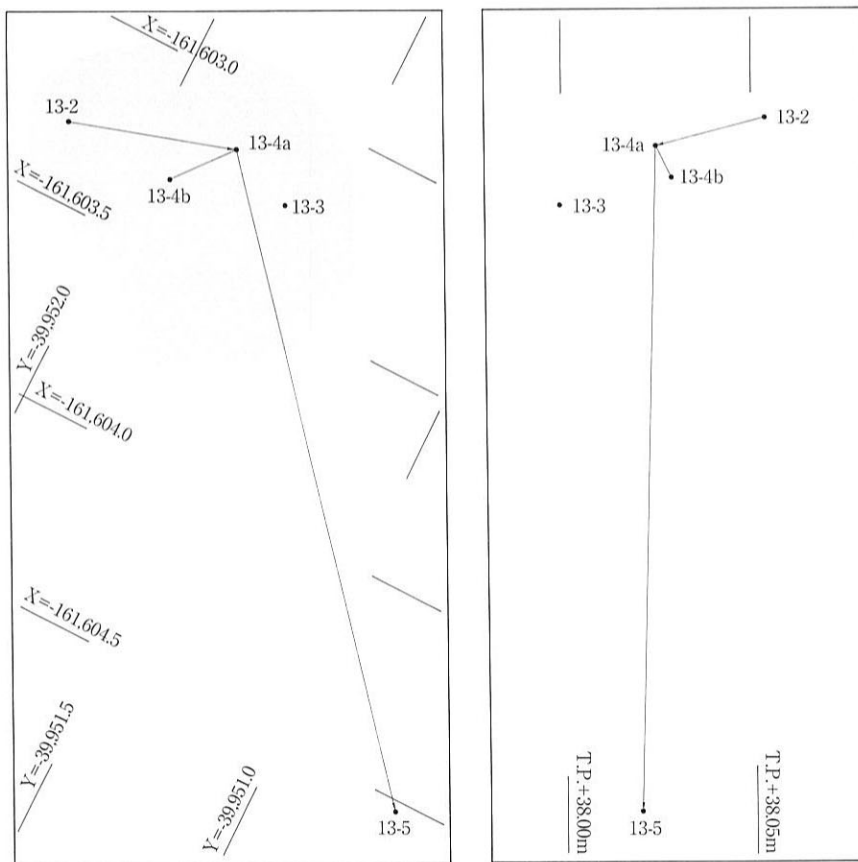
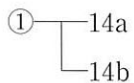


図107 接合資料13 分布図 (S=1/2 L= 1/20)

剥片剥離が施されている (①)。一連の求心状剥離の中で13 - 3が剥離されている。13 - 2も求心状剥離の中で剥離されるが、13 - 3との新旧関係は不明である。剥離の末端は階段状を呈する。13 - 2剥離後、打点を後退させて13 - 4を剥離するが、13 - 2と同様に剥離の末端は階段状を呈する。折損して13 - 4 aと13 - 4 bにわかれる。13 - 5にも折損が生じ (②)、その時点で作業を終えている。

接合資料14 (図108、116 写真28 - 6)



接合資料14は、石核2点からなる。14aは石器集中部1に帰属する。14bは平面座標とT.P.値を記録し

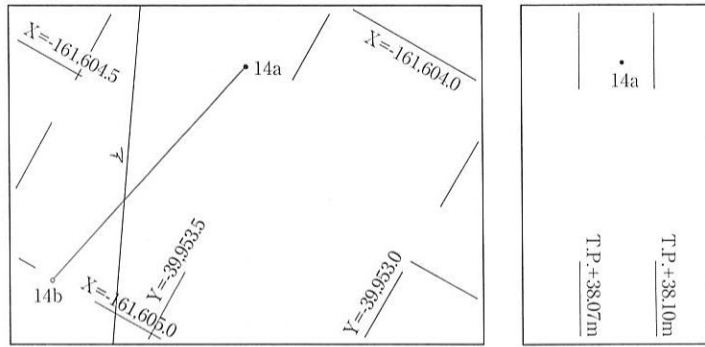


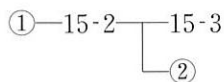
図108 接合資料14 分布図 (S=1/2 1/20)



図109 接合資料15 分布図 (S=1/2 1/20)

て石器遺物を取り上げる以前の資料である。黒色粘土層より出土しているため、接合作業の対象とした。14aと14bは、最終打撃の際に打点部から垂直割れが生じて折損したものが接合する資料である。背面はすべて自然面で構成される。作業面は素材面と思われる剥離痕が残存し、剥離軸は左右側縁と直交する。上下左右の縁辺がツブレ痕をとまなう細かな剥離で構成されている。これらは上下、左右で対応しており、両極打法によって剥片剥離を行う。新旧関係から、左右の剥離の後に上下の剥離が形成されたことが看取できる。左右側縁の下半においてはツブレ痕が顕著に認められ、執拗に打撃が加えられたことを窺わせるが、それ以上は断念して打面を転位させ、再び両極打法を用いて剥片剥離を行ったと考えられる。その後、石理に沿った垂直割れが生じて半截し、作業を終えている。

接合資料15 (図109・117、図版29・5)



接合資料15は、剥片2点からなる。石器集中部2に帰属する。石理に対して半順目の剥離を自然面打面において行う。15-2は横長の剥片である。先行する背面の剥離痕と方向を同じくして剥離を行う。左半を折損する。続く15-3は、15-2の打点から左にずらして剥離を行う。そのとき、打点部から垂直

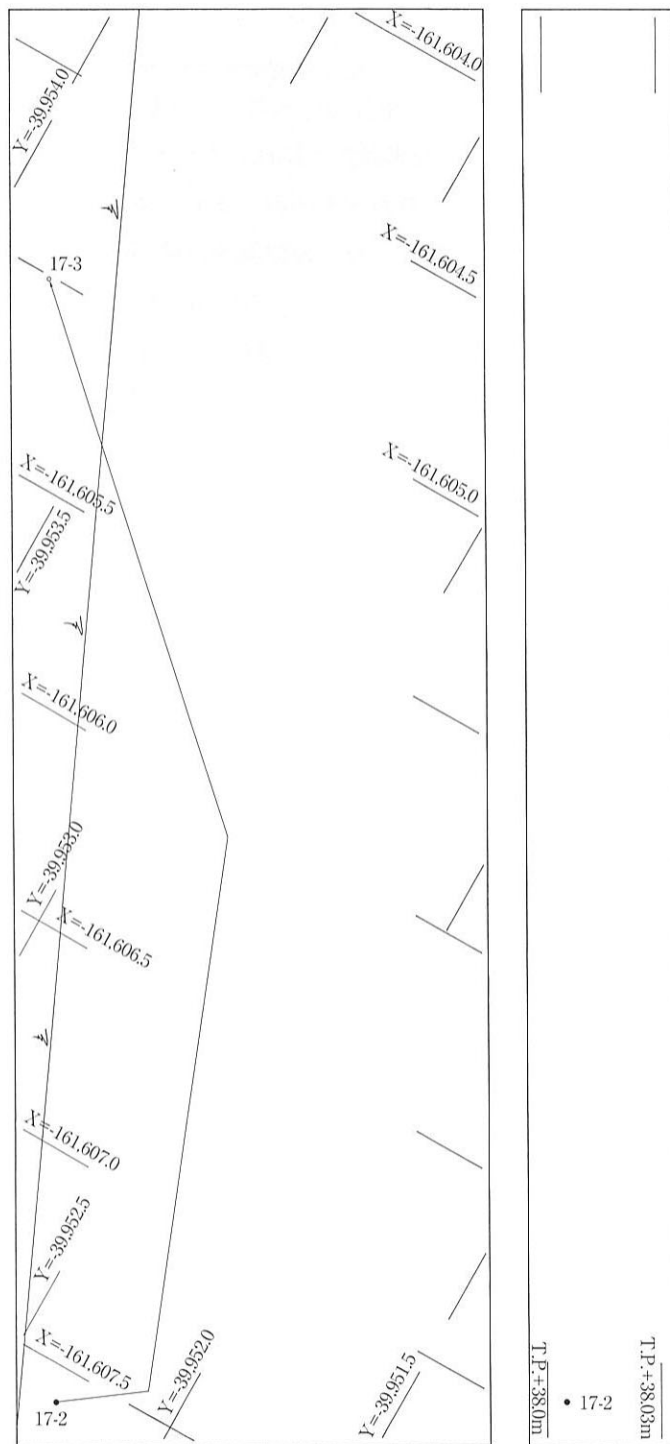


図110 接合資料17 分布図 (S=1/2 ← 1/20)

割れが生じ、右半を折損する。15 - 2、15 - 3 とともに背面の末端に自然面を取り込んでおり、これらの剥離軸とあわせて自然面の稜に沿った剥離が行われていることが窺える。

接合資料16⁶⁾ (図116 写真29 - 1)

- ① — 16-3
- 16-2

接合資料16は、製作に失敗した削器と、刃部調整剥片1点の、計2点からなる。16 - 3 は石器集中部2

に帰属し、16-2は石器集中部1に帰属する。16-3は打面に対して直角に剥離された剥片を素材として、腹面を打面に背面へ求心状の調整加工を施す(①)。背面は腹面の剥離方向と同じくする複数の剥離で構成する。16-3の腹面末端には、まとまった単位の急角度な二次加工が認められ、16-2は、16-3の二次加工を切って剥離されており、一連の刃部調整と同様のものとみることができる。16-2は16-3の腹面末端を打面として剥離されているが、打点が不明瞭であり、本来の打点から奥まったところから割れが生じたものと思われる。16-2を剥離した後、刃部調整は続いておらず、作業を終えている。これは、本来の打点よりも奥まって剥離した16-2によって素材が抉れ、器形が大きく変化したために、以降の作業を断念せざるを得なくなったことによるものと思われる。16-3は刃部調整が失敗したために廃棄されたものであり、従来用いられる、製品の前段階としての未製品とは異なるといえる。

接合資料17 (図110・117、図版29-2)

①—17-2—②—17-3

接合資料17は、剥片2点からなる。石器集中部1に帰属する。自然面を打面にし、打点を後退させながら横長の剥片を剥離する。17-2の背面は、末端蝶番状を呈する比較的小さい剥離面で構成されており、それらを取り込んで剥離されている。17-3も同様の背面構成を持ち(②)、末端蝶番状を呈する比較的小さい剥離と、それを取り込む剥離とが交互に行われている。

接合資料18 (図111・117、図版29-3)

①—18-3—18-2
②

接合資料18は、剥片2点からなる。石器集中部1に帰属する。自然面を打面に18-3を剥離するが、先行する剥片の末端が蝶番状に剥離しており、その影響で18-3の末端も蝶番状に剥離する。その際、

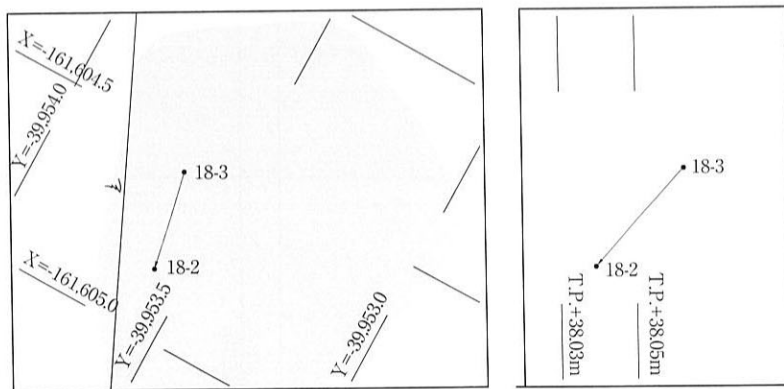


図111 接合資料18 分布図 (S=1/2 L= 1/20)

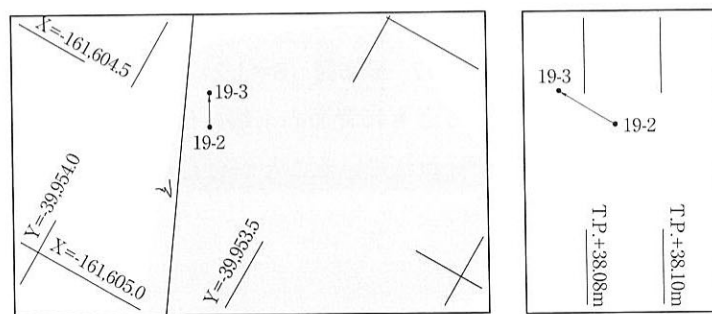


図112 接合資料19 分布図 (S=1/2 L= 1/20)

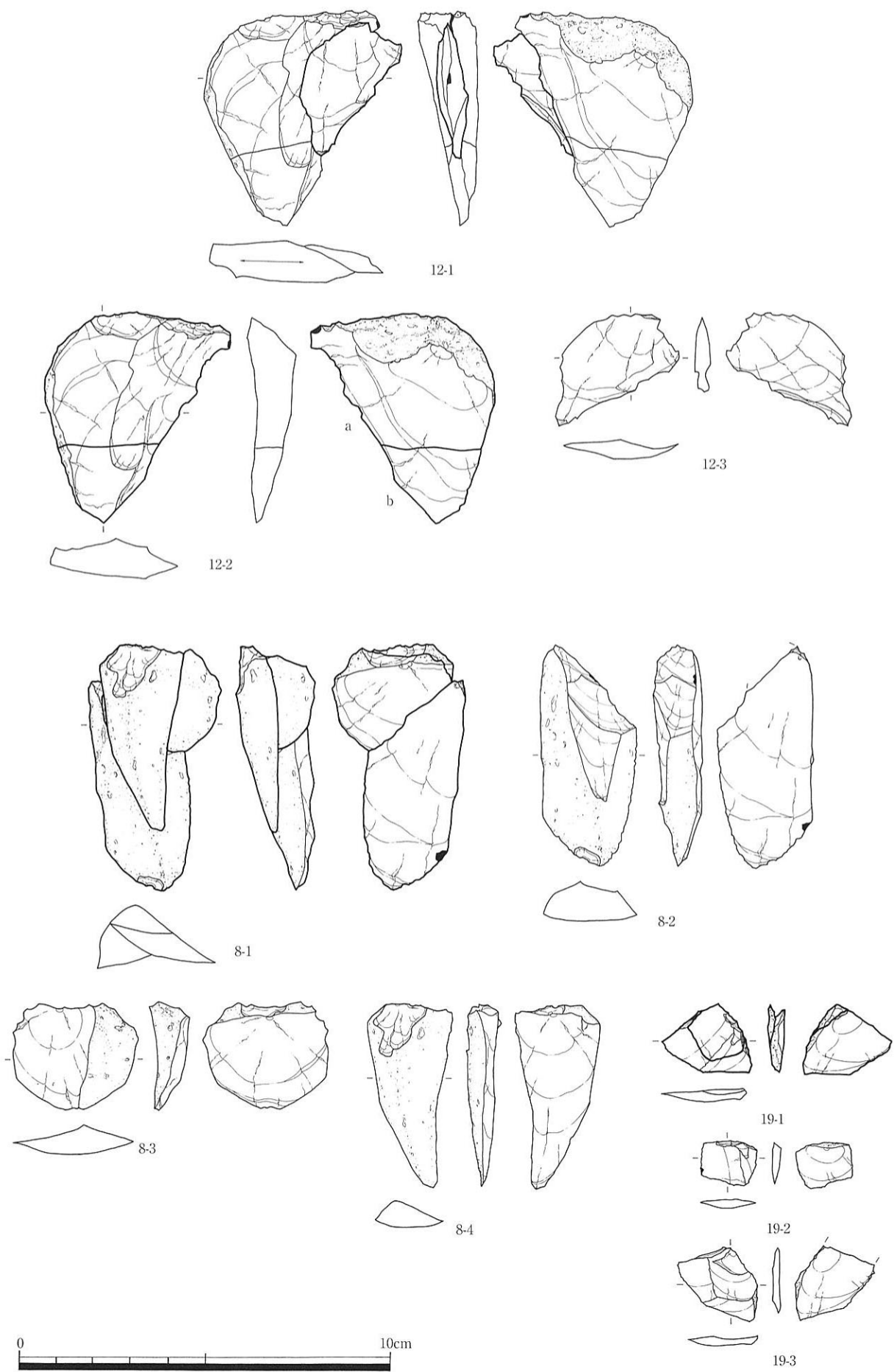


図113 接合資料8・12・19 実測図 (S=2/3)

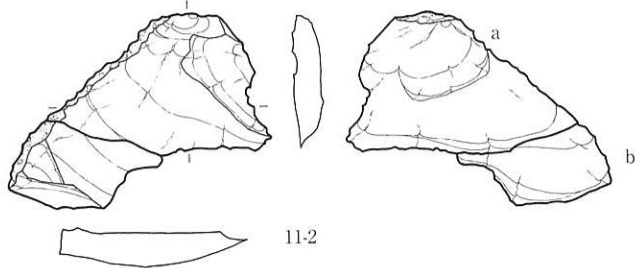
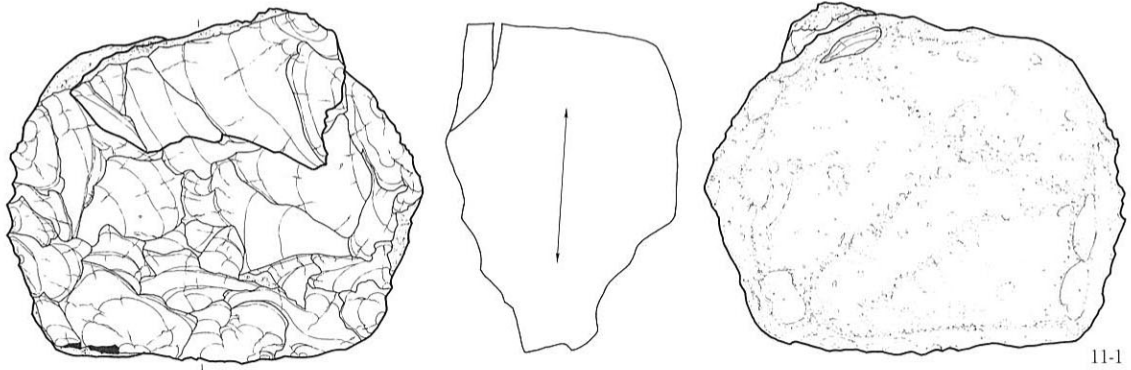
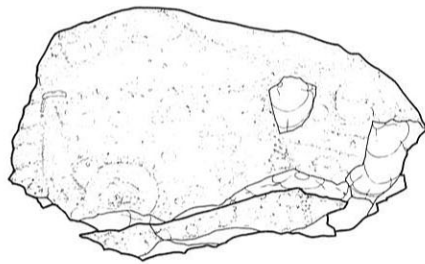
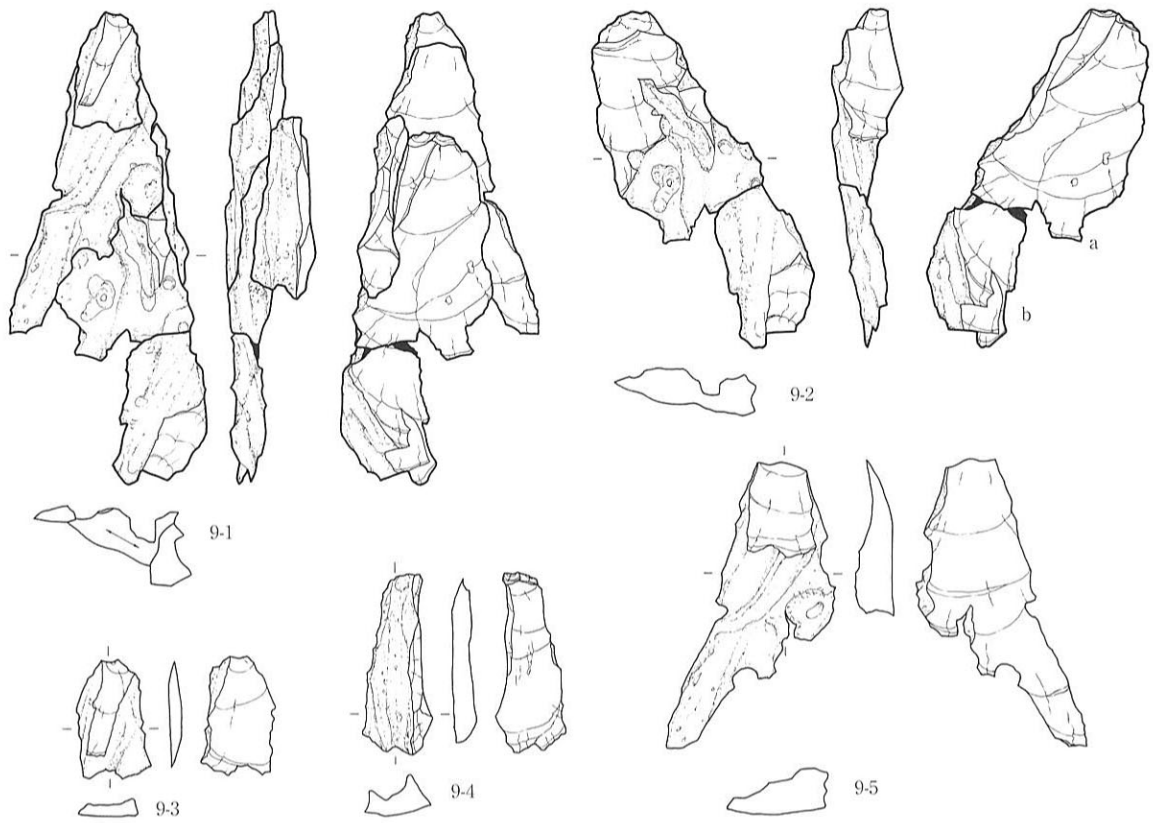


图114 接合資料9・11(1) 実測図 (S=2/3)

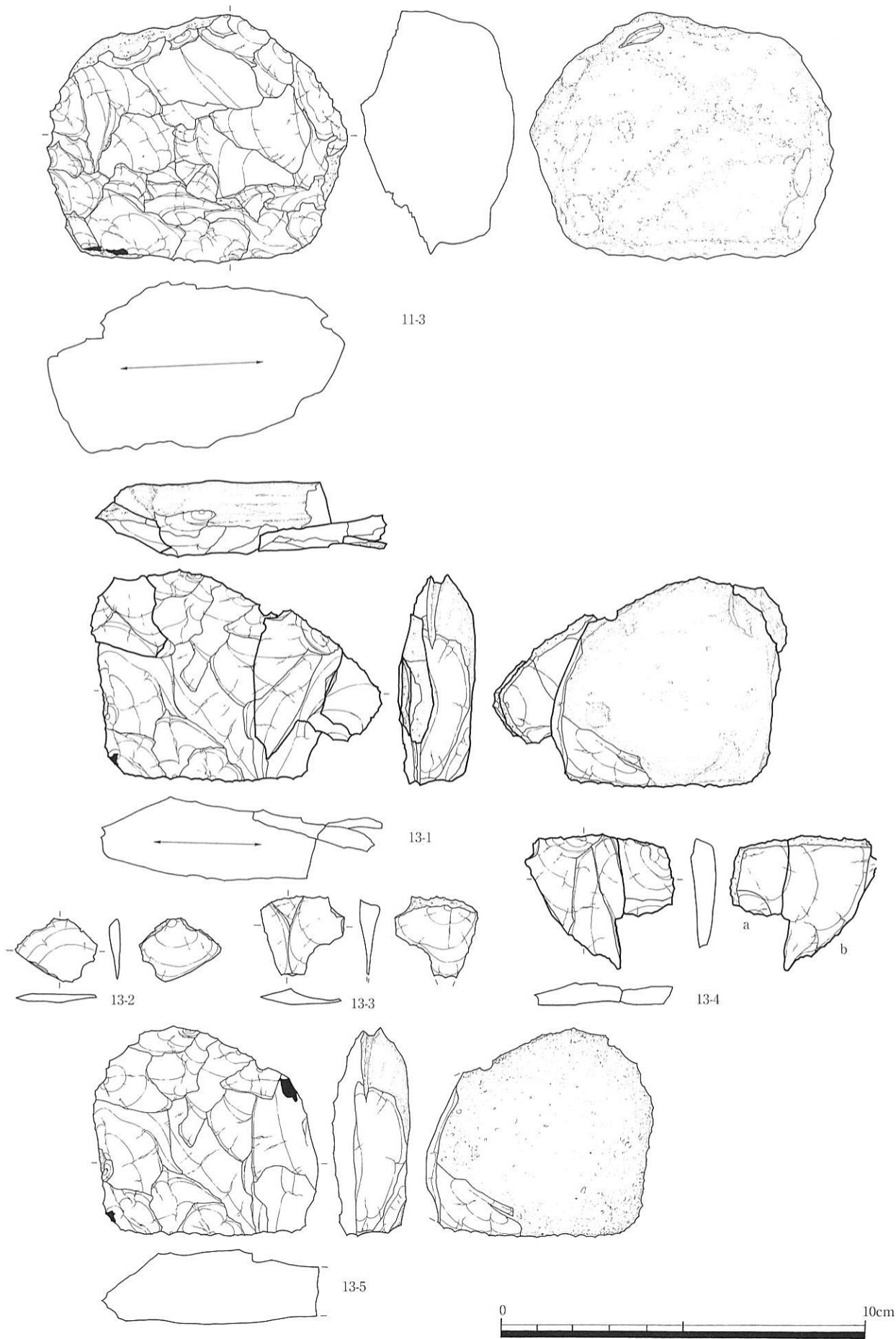


图115 接合資料11(2)・13 実測図 (S=2/3)

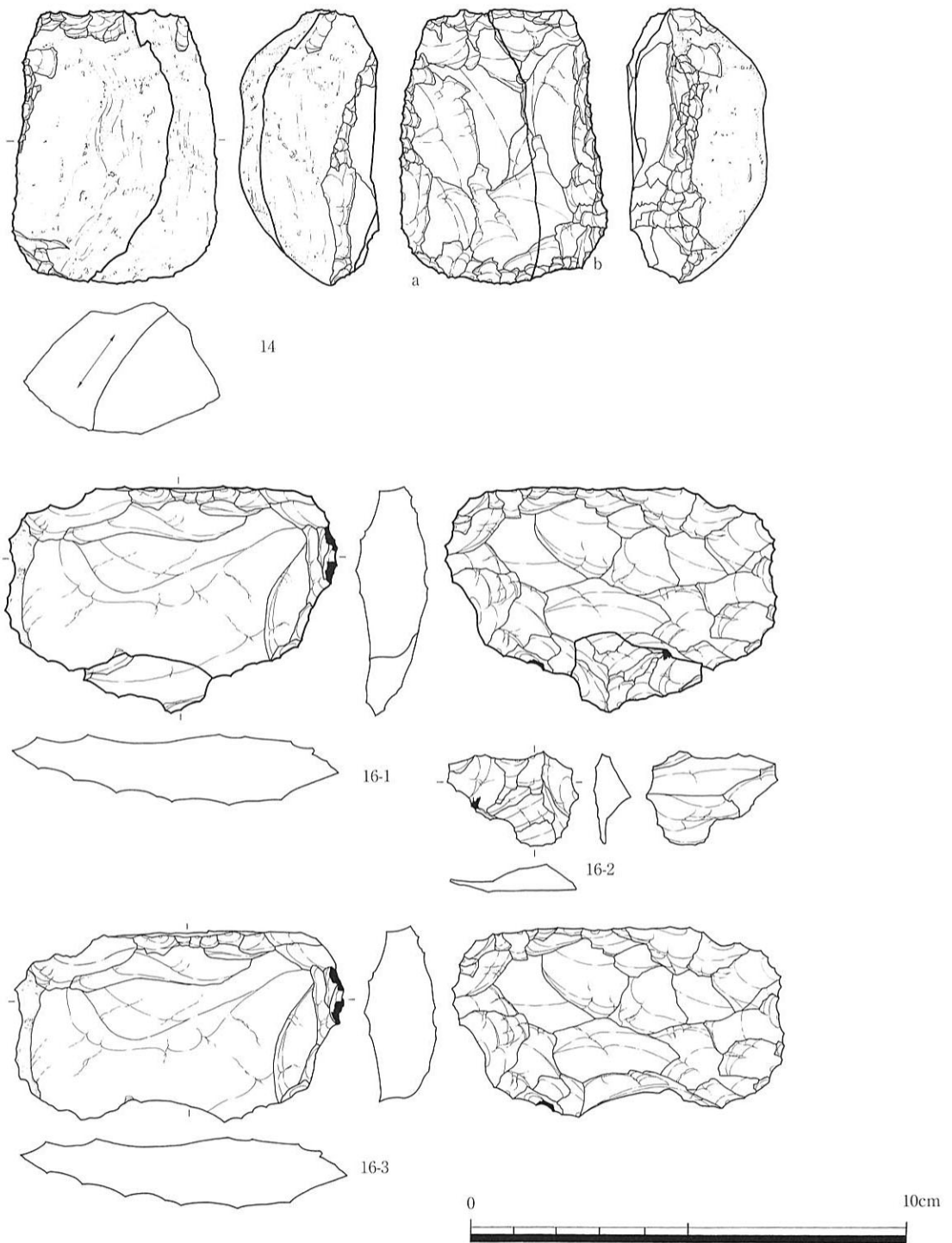


図116 接合資料14・16 実測図 (S=2/3)

打点から垂直割れが生じ、左半を折損する (②)。続いて打点をスライドして18-2を剥離する。先行する18-3の剥離痕を取り込む。また一側縁に自然面を取り込む。

接合資料19 (図112・113、図版28-7)

①—19-2—19-3

接合資料19は、剥片2点からなる。石器集中部1に帰属する。自然面を打面にして19-3を剥離する。

背面には同一の打面から剥離された、先行する細かな剥離がみられる。その後、打面を後退させて19-2を剥離する。横長剥片と思われるが、打点付近から割れが生じて右半を折損する。

(4) 石器器種

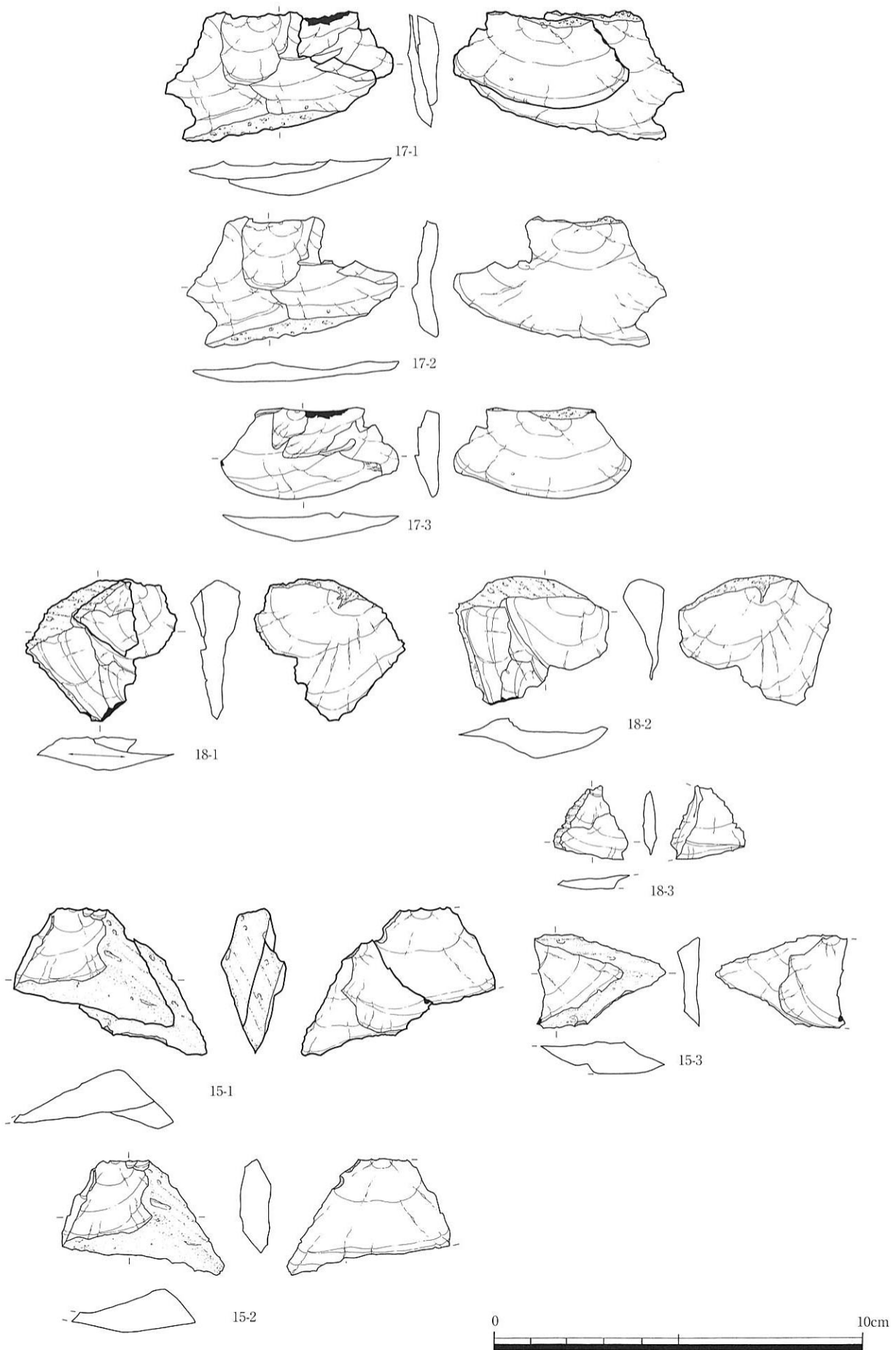


图117 接合資料15・17・18 実測図 (S=2/3)

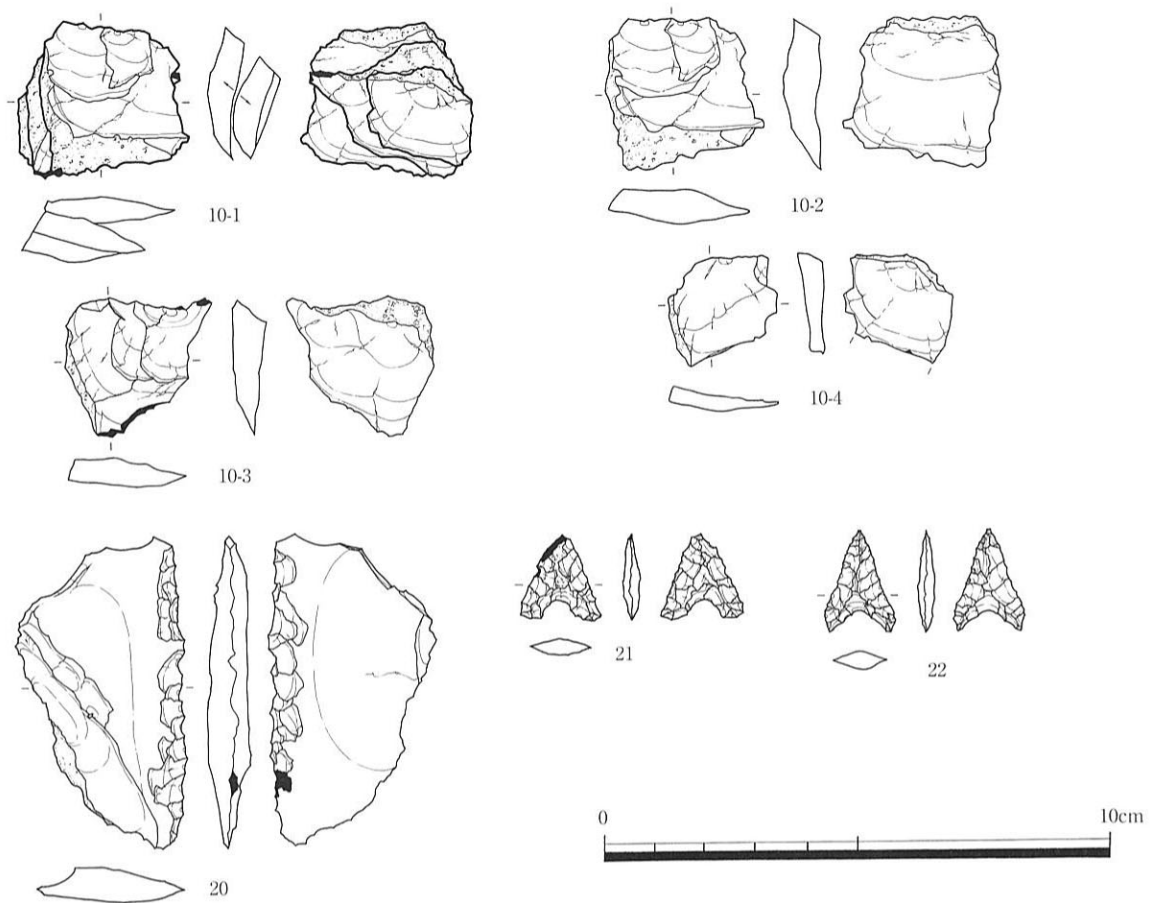


図118 接合資料10・削器・石鏃 実測図 (S=-2/3)

石鏃 (図118、図版29-6) 石鏃は2点出土している。21は、両側縁を直線状に調整し、脚部先端を平坦に作り出す鏃形鏃である。右面中央には素材面が残存している。左面には調整加工によって除去しきれず残る自然面が認められることから、素材面はポジティブな剥離面であろう。剥離単位にまとまりはそれほどない。石器集中部1の密集部位より出土する。

22は、両側縁を外反させ、脚部にかけて内湾させる調整加工を施し、脚部先端を尖らせる。まとまった剥離単位は丁寧な調整加工を窺わせる。剥離面の新旧関係より、先端部から脚部へと調整加工を行ったことが確認できる。石器集中部1に帰属するが、出土位置は散漫部位の中でも舌状の最末端である。

削器 (図118、図版29-6) 削器は1点のみの出土である。20は、横長剥片を素材とし、素材の末端に両面加工によって刃部を作り出す。刃部調整は不規則な剥離で施されているが、新旧関係から、素材の背面側から刃部調整を施した後に腹面側へと移行していることが確認できる。刃部調整のほかに器形に変化を加えるような剥離は無い。素材の背面構成は、自然面と、打点をほぼ同じくする二つの剥離面で構成する。石器集中部には帰属せず、段丘崖直下より出土する。

また、今回図示しなかったが、削器の可能性のある二次加工を有する剥片が1点出土している。刃部とも思われる調整加工が施されているが、折損によって確認しきれず、刃部として認定することは不可能であった。

接合資料16に関しては、該項に記述を譲る。

(5) 小結

2 A トレンチ黒色粘土層出土石器群では、平面座標とT.P.値を記録した875点と、断ち割りから出土し

た78点に加えて、石器集中部2ヶ所の密集した部位から多量の微細剥片が出土した。器種組成は剥片、石核、楔形石器、石鏃、削器である。出土石器遺物の中では剥片、微細剥片がほとんどを占めており、それらの剥片も、折損面を有するものが多く認められる。

黒色粘土層では、時期決定の示標となる土器資料の出土が一切ない。石鏃は2点出土しているが、うち1点(22)は石器集中部1に帰属するものの、その分布の最末端に位置し、削器1点(20)は石器集中部の分布から外れている。石器集中部に直接関係する資料は、石鏃1点(21)と、接合資料16のみである。石器遺物の技術形態的特徴から時期を絞り込んでいくことは、一定量の出土をみない以上、危険をとまなう。以上のことにより、本報告において河原城遺跡出土石器群は、大きく捉えて縄文時代の所産とするにとどめる。ただ、黒色粘土層に関しては、同時に放射性炭素年代測定と珪藻分析を行っている。これらの結果との総合的な判断により、ある程度の時期は推定できたと思われる。後述の分析結果を参照されたい。

2 Aトレンチ黒色粘土層出土石器群で確認された接合資料は、原石まで復元がほぼ可能と思われる接合資料2、3、5を除き、構成する石器遺物に石核を含む資料は、すでに剥片剥離が進行した状態で接合したものであった。接合資料1は大型の剥片を素材として剥片剥離を行っており、他の接合資料も原石からの剥片剥離を行っていたとは到底言及できない。ただ、個別の資料において、背面がすべて自然面で構成されている石器遺物が一定量確認されていることは、少なくともいくつかの原石が河原城遺跡に搬入され、原石の状態から剥片剥離を行っていたことが推測できるであろう。

また、さきに母岩分類を行わなかったことについて触れたが、ここで若干の所見を追記しておく。接合資料で観察される自然面には、いずれもローリングの痕跡は認められず、認められるとしても軽微である。個別の石器遺物の自然面においても同様であり、河原城遺跡で用いられた原石は、石材原産地から直接獲得したものと思われる。転石を用いるとしても、ローリングの軽微さから、原産地に程近い場所からの獲得であったと思われる。ただ、接合資料6にみられる自然面のみ、他の資料と比較してローリングが進行しており、他所からの石材獲得を想起させる。

本報告では、整理期間の問題もあり、接合資料を構成する石器遺物と、いわゆる製品石器のみを図示し、楔形石器、その他の剥片、石核を図示することができなかった。この場で概要を報告したい。

楔形石器は平面座標とT.P.値を記録した16点と、断ち割り溝から出土した3点の計19点出土した。楔形石器の認定は、従来の研究における器種定義をもとに、「対向する二側縁に階段状剥離もしくは敲打痕を有するもの」とした。また、折損したものでも、一側縁に階段状剥離もしくは敲打痕を有するものも楔形石器に含めた。この痕跡の形成は、両極打法の使用によるものという解釈が一般である。しかし、石核として認定した資料の中には、明らかに両極打法を用いて剥片剥離作業を行っているものも存在する。楔形石器の機能・用途に関しては、石器研究史上、使用によるもの、素材取得等の言及がなされてきたが、いまだ定見を得ていない。ただ、河原城遺跡出土の「対向する二側縁に階段状剥離もしくは敲打痕を有する」資料15点の対向する二側縁、すなわち打面と作用面を直交する長さは、最大4.3cm、最小2.0cmである。そのうち、折損またはファシット状の剥離が器形を著しく変形させ、明らかに両極打法の続行が不可能と思われる資料2点を除いた長さは、最大3.5cm、最小2.0cmであった。また、「折損してはいるが一側縁に階段状剥離もしくは敲打痕を有する」資料4点の、打面あるいは作業面と直交する長さは、最大4.3cm、最小3.5cmである。これは、折損によって両極打法の続行が不可能となったために作業を終えたものであろう。「対向する二側縁に階段状剥離もしくは敲打痕を有する」資料の最終剥離痕は細か

く、到底、素材剥片を獲得しようとしていたとは思えない。ここから楔形石器が素材剥片を獲得するための石核であるとする用途は成立しない。

一方、両極打法を用いる石核は、接合資料2、6、7、14にみられる。いずれも垂直割れ等の折損が生じて剥片剥離作業を終えている。このことは、以降の作業において作業遂行者の意図が反映されないために作業を終えたことを示すと捉えることが自然であろうが、折損が生じなかった場合、「対向する二側縁に階段状剥離もしくは敲打痕を有する」資料の程度にまで剥離が進行するかどうかの説明はできない。楔形石器を先述のような器種定義のもとに認定し、両極打法を用いる石核と認定を別にしたのは、これらの石核の持つ不確定要素との傾向的差異がみられたためでもある。

- 1) 「近年の府下旧石器調査が語るもの―旧石器時代研究の目的と意義―」手島美香・森川実・伊藤栄二『大阪文化財研究』第20号 (財)大阪府文化財調査研究センター 2001
- 2) 『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ 1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整備事業施行に伴う発掘調査報告書』(財)大阪市文化財協会 2000 などが挙げられる。
- 3) 「第Ⅶ章 第Ⅴ文化層 (B2L)」五十嵐彰『湘南藤沢キャンパス内遺跡 岩宿時代・縄文時代Ⅰ部』第2巻 1992 慶応義塾
- 4) 各接合資料の文頭には、剥離順序図を付した。図中、左から右へ剥離が進行し、欠損、欠落あるいは接合間に行われた剥離に関しては○で表し、必要に応じて数字を示した。同時剥離あるいは垂直割れ等の折損に関しては、接合を示す線を分岐させて表した。なお、接合資料3の3-10は、その後さらに3-10自体を用いて両極打法を行った結果、3-11と3-12に折損したため、(+)で表した。その他、剥離順序が不明なもの、同時破碎したもの、剥離時に生じた折損かどうか不明なものについても+で表した。また、作業面が複数存在するものには、一方を作業面A、他方を作業面Bとした。
- 5) 石器遺物の接合作業に費やした期間は約2ヶ月で、基本的に一人の人間が従事して行った。母岩分類を行っていないこととあわせて、一人の人間のみで作業を行ったため、先入観等による見落としがある可能性を考慮に入れる必要があることは否めない。
- 6) なお、器種認定に関しては、求心状に剥片剥離を行う石核とする見方も否定しきれない。

9. 出土銭貨

主にA地区と7Cトレンチの、2層内から銭貨が数枚出土した。中位段丘縁辺のトレンチからは出土が確認されなかったが、これは2層の残存度の違いが影響していると思われる。

要するに、比較的平坦で、古い耕土の残りの良い部分で確認されたという事である。

銭貨のみではなく、金属製品が包含されているのを検出する際は、土色の変化が目安にできた。金属製品が包含されている部分は、ほとんど、直径10cmほどの範囲が、周囲より明度の低い色となり、やや還元を受けたかのような色になる。これは、金属イオンの影響によるものようである。

実際、色の変化した部分は周囲の土と粒子の構成は同じで連続しており、平面的には丸い小さなピット状に見えるものの、遺構は存在しない事が確認された。

おそらく、金属製品を中心に、球形に土色の変化が起こっていると考えられる。

また、銭貨などの銅製品と、鉄製品と、どちらも土色の変化をおこしており、銅製品の場合の方が、確認しやすかったような感はあるが、はっきりした違いは認められない。また、かなり大きなもの以外では、さほど製品の大きさによる変色範囲の差はないようで、直径10cmほどの変色の場合でも、ほぼ完形の銭貨が出土する場合と、微小な破片しか認められない場合があった。

銭貨は、完形のもの以外に破片もあり、特に取り上げ不可能なほど小さなものもあった。これは2層に包含された後、耕作が繰り返される間に破損したものと考えられる。実際、唯一遺構から出土した3Aトレンチ3面1523土坑出土の銭は、文字が確認できないほど錆化がすすんでいたが、土坑の底で検出した際には完形であった。

その点からも、小ピット状の土色の変化が遺構ではない事を傍証する事になろう。

出土位置にも偏りがなく、以上のような状況を考えると、これらの銭貨は特別な祭祀などによって2層に包含されたとは言えない。むしろ、貨幣経済の発展により、農地を耕作するような人でさえ、普段から銭貨を所持するようになった時代を反映しているように思える。(三宮)

包含層から出土した銭貨は、どれも錆化が甚だしく、以下の5点のみ銭文の判読・拓影が可能であった(図119-1~5)。

1の祥符通宝(初鑄年1008年)と4の皇宋通宝(初鑄年1039年)は3Aトレンチ2層より出土した。2、3は天聖元宝(初鑄年1023年)で、7Cトレンチ北側の2層から出土した。5の至和通宝(初鑄年1054年)も同じく7Cトレンチ2層から出土したものである。今回の調査における2層が、土器だけでなく出土銭貨からも、11世紀以降のものであることが言える。

さらに3Aトレンチ3面の1523土坑(図119-2)からも銭貨1枚の出土が確認されたのだが、残存状態は良好でなかったため、銭文は全く読めず、拓影も不可能であった。(大庭)



図119 出土銭貨(1:3A2面、2・3:7C2面2層、4:3A2面、5:7C)(S=1/1)

10. 包含層出土石器遺物

本調査区からの包含層出土遺物として、ナイフ形石器6点、石鏃3点、削器3点、楔形石器4点、敲石?1点、石核18点、剥片87点の計122点が出土した。これらの中からナイフ形石器4点、石鏃3点、削器3点、楔形石器1点、石核1点を図示した(図120)。これらはすべて遊離資料であり、それぞれが同一の層中より出土したものは限らない。したがって、石器遺物の時期を確定することは困難であるが、技術形態的特徴などから推測し得るものについて文中に記すことにする。なお、特に記載しない限りサヌカイト製である。

ナイフ形石器(図120-1~4、図版30-1)

1は横長剥片を素材としたナイフ形石器である。素材は右面が一枚のポジティブ面で構成され、左面は二枚のネガティブ面で構成されている。細身の柳葉形を呈しており、下端部を折損する。左面の右側縁において対向調整によるブランディングが施されている。刃部側においても右面を打面に用いてブランディングが施されており、二側縁加工によって尖頭状に作り出されていることがわかる。14Bトレンチ、住居Ⅱの埋土より出土。

2は有底横長剥片を素材としたナイフ形石器であり、上半部を折損によって失う。素材の面構成は右面が一枚のポジティブ面で構成され、左面が石核の平坦なポジティブ面と先行する剥片剥離作業によるネガティブ面で構成されている。左面における二枚の剥離面の加撃方向は若干異なる。ブランディングは全て左面側から施され、右面の主要剥離面を切る内向調整剥離である。素材剥片の打面調整はブランディングによって打面が残存していないため確認できない。14Bトレンチ、1827ピットの埋土より出土。

3は横長剥片を素材とするナイフ形石器である。上半部を折損する。左面に打撃痕と石核のポジティブ面の打点、および素材剥片の打面調整が確認できることから翼状剥片のファーストフレイクを用いたと考えられる。ブランディングは単位が大きい二枚の剥離を確認できる。7Cトレンチ、1369ピットの埋土より出土。

4は有底横長剥片を素材としたナイフ形石器である。基部側を折損しており、風化は極めて著しい。素材の主要剥離面の打点はブランディングによって取り込まれているが、打面調整によるネガティブ面は一枚残されており、このネガティブ面を打面に用いてブランディングが施されている。ブランディングは粗く、厚みを減じるように施されている。左面には先行する剥片剥離作業によって生じたネガティブ面が一部残されているが、ブランディングによってかなりの部分が取り込まれている。7Cトレンチ、第2層より出土。

石鏃(図120-5~7、図版30-1)

5は完形の凹基無茎石鏃である。側縁は直線的に調整されており、脚端部の形状も直線的で鋭く作り出されている。平面の形状が縦長の二等辺三角形に近い形である。右面、左面ともに丁寧に調整剥離が施されている。7Cトレンチ、1378溝の埋土より出土。

6は平基無茎石鏃である。基部から中央部にかけての一方を折損する。側縁が先端付近でやや屈曲し、屈曲点から基部にかけてくびれている。平面形は決して五角形ではないのだが、縄文早期前半に出現するいわゆるロケット形石鏃と呼ばれる小形で特異な石鏃に類似することから、縄文時代前半の所産の可

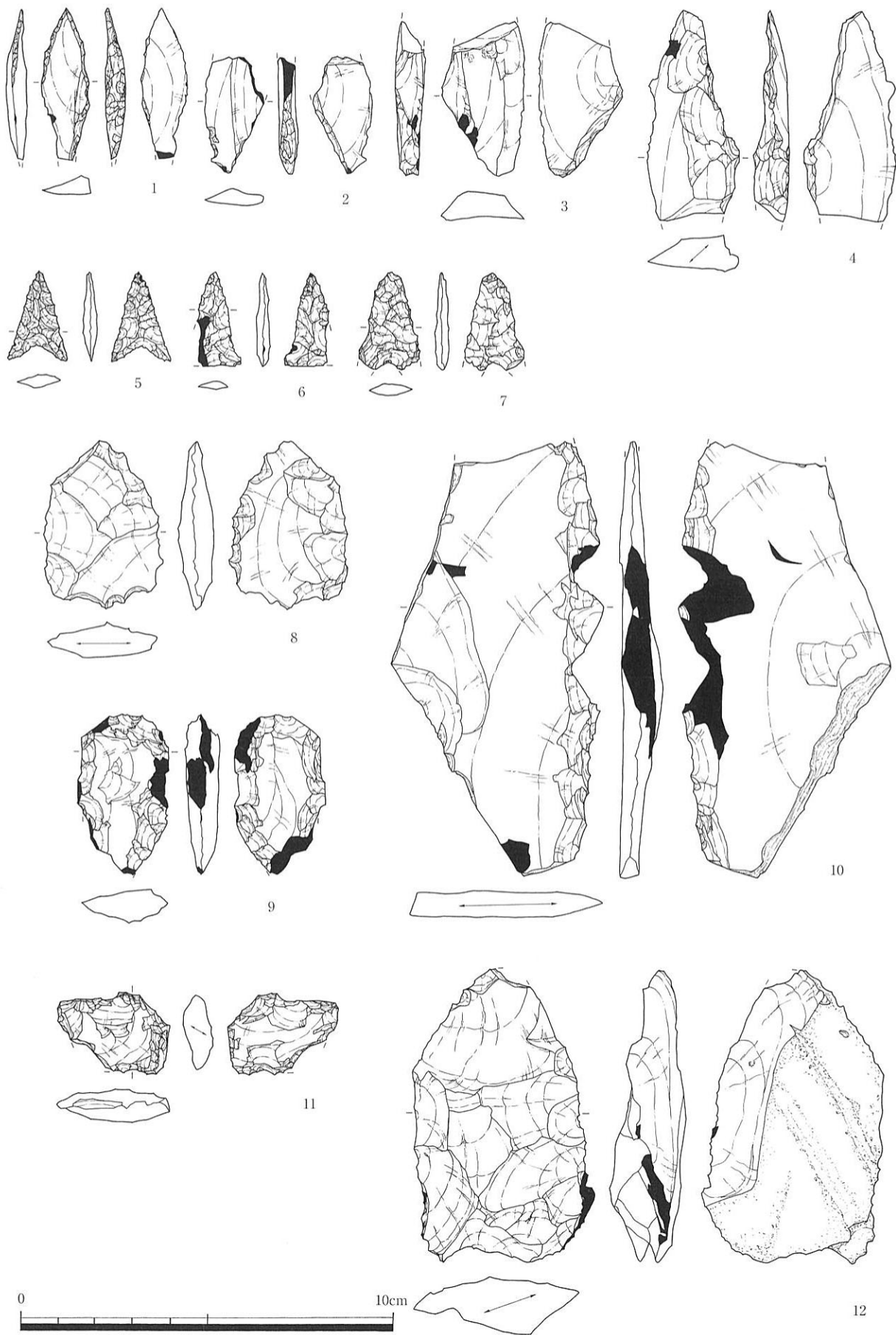


图120 包含层出土石器遗物 (S=2/3)

能性がある。基部は直線的に仕上げられている。14Bトレンチ、1985落ち込みの埋土より出土。

7は凹基無茎石鏃である。側縁は緩やかなS字状を呈しており、先端にかけてすぼまり、先端部に衝撃剥離痕が認められる。両脚端部を折損しているが、基部の抉りはやや深かったものと思われる。あまりまとまりのない調整剥離によって仕上げられている。4Aトレンチ、第3層より出土。

削器（図120-8～10、図版30-2）

8は横長剥片を素材とした削器である。調整剥離は左面を打面に用いて右面中心に行なわれており、右面の右側縁は剥離の単位が大きく、左側縁は剥離の単位が小さい。また、刃部調整はあまり連続的ではなく、刃部も鋭利に作り出されてはおらず未製品とも考えられる。上端部に折損が見られる。この折損面を調整剥離の打面として用いているため、成形時における折損と思われる。石器包含黒色層相当層より出土している。

9は刃部に両面調整が施された削器である。右面、左面ともに一枚のポジティブ面で構成されている横長剥片を素材としており、左面においてバルバー・スカーが残存している。調整剥離は右面、左面ともにほぼ全周にわたって施されている。一部を折損しているが、ほぼ楕円形の形状を呈していたと思われる。刃部はあまり鋭く作り出されていない。4Aトレンチ、機械掘削中に出土。

10は削器である。素材として大形で板状の横長剥片を用いており、側縁全体に素材剥片の打面である自然面を残している。石材の石理方向と素材剥片の剥離方向が並行しており、石理に沿って素材剥片が作出されたことが分かる。素材は右面が一枚のポジティブ面で構成され、左面は三枚のネガティブ面で構成されている。左面を構成する剥離面のうち、最も大きな剥離面は石核から本資料の素材剥片同様の目的剥片を作出したとき生じたものと考えられる。右面と左面の主要剥離面の加撃方向は同一ではない。刃部は両面調整されており、欠損によって一部を失っているがやや外彎する刃部を形成していたと思われる。12Bトレンチ、1524谷1上層（南部）の埋土より出土。

楔形石器（図120-11、図版30-2）

11は灰色チャートを用いた楔形石器である。下端部の一部を折損によって失っているが、平面形が不整形な五角形であったと思われる。縁辺部にはツブレ状の階段状剥離が生じており、右面、左面の上下端・左右側縁に残されている。対辺に向かって伸びる剥離は見られず、素材面を残している。素材面は右面、左面ともに一枚の剥離面で構成されており、石理に沿って剥離したものと考えられる。左面右側縁は平坦面を一部残しており、刃部状を呈していない。石質は石理の多いものを用いており、良質なものはいえない。14Bトレンチ、第3層より出土。

石核（図120-12、図版30-2）

12は分厚い剥片を素材として用いたと思われる石核である。右面は一枚のネガティブ面以外は全て自然面である。この右面のネガティブ面は左面の剥片剥離作業に先行する剥離であり、打点が左面の剥離作業によって取り込まれている。石核作業面は素材となる剥片の主要剥離面側に設定され、いずれも不整形な横長剥片を剥離したものと思われる。12Bトレンチ、1515溝の埋土より出土。

包含層出土石器遺物のトレンチ単位での分布傾向

ここで本調査地における包含層出土石器遺物の分布の傾向について、トレンチ単位で見ることとする。各トレンチは中位段丘平坦面上とそこから東～東南に中位段丘崖を下った東除川側との、大きく2つに分けられる。各トレンチの位置は、中位段丘平坦面上に7C・14Bトレンチ、中位段丘上から氾濫原

にかけて2A・15・13・12Bトレンチ、そして氾濫原に3・4Aトレンチが設定されている。このように、中位段丘上から氾濫原の間の変化に富んだ地形上にトレンチが設定されているため、各トレンチ間における包含層出土石器遺物の分布に何らかの変化が見られる可能性があった。そのため、各トレンチにおける包含層石器遺物の密集度として、10㎡あたりの石器遺物の点数を抽出し、次の表に示した（表1）。

表1 包含層出土石器遺物のトレンチ単位での分布傾向

トレンチ	調査面積(㎡)	ナイフ形石器	石 鏃	削 器	楔形石器	石 核	剥 片	その他	総 数
7C	768	3(0.039)	1(0.013)	0(0)	1(0.013)	8(0.104)	30(0.391)	0(0)	43(0.560)
14B	556	2(0.036)	1(0.018)	0(0)	1(0.018)	2(0.036)	8(0.144)	0(0)	14(0.252)
15B	23	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0.870)	6(2.609)	1(0.435)	9(3.913)
13B	344	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(0.087)	0(0)	3(0.087)
12B	477	1(0.021)	0(0)	1(0.021)	0(0)	4(0.084)	11(0.231)	0(0)	17(0.356)
2A	406	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0.099)	12(0.296)	0(0)	16(0.394)
3A	611	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0.016)	7(0.115)	0(0)	8(0.131)
4A	1039	0(0)	1(0.010)	2(0.019)	0(0)	1(0.010)	7(0.067)	0(0)	11(0.106)

* () 外の数値は項目ごとの個数、() 内の数値は10㎡あたりの分布数

抽出した結果から読み取れる傾向として、まず各トレンチにおける石器遺物の総数を対象とした場合、分布の割合が中位段丘平坦面上から氾濫原に向かうにつれて減少しているように見える。これはやはり氾濫原へ向かうに従って洪水による遺物の流出を受けやすいといった原因が想定される。また、これは先史時代における活動の結果とも捉えることができるかもしれない。しかし、2Aトレンチ内において中位段丘崖直下の黒色粘土層内から石器集中部が確認されたことから、少なくとも縄文時代には氾濫原においても人々の活動が認められたため、一概に一調査区内における包含層の遺物の分布から活動傾向と捉えるのは危険であろう。

他に挙げられる傾向として、ナイフ形石器や石鏃といった狩猟具と考えられる製品の分布が中位段丘平坦面上に若干集中しているようにも見える。このことに加え、2Aトレンチ内の黒色粘土層古環境の分析から、石器集中部が形成された頃は少なくとも丘陵上では落葉広葉樹林が広がり、調査区を含めた谷底平野においては湿地帯が形成されていたことや、付近に縄文集落が存在した可能性が低いことから丘陵上を主に狩猟活動の場として用いていたと拡大解釈できるかもしれない。しかし、このことは出土点数が少ないため予測に止めざるを得ない。

以上のように、包含層出土石器遺物の数値的な分布の傾向と、そこから得られる若干の解釈を示した。しかし、ここで取り上げた資料は全て遊離資料であり遺物の原位置は完全に失われていると言ってよい。そのため、抽出した結果はあくまでも予測に過ぎない。また、ここでは資料数の少なさから包含層出土石器資料全てを対象としたが、ナイフ形石器や縄文時代の所産と思われる石鏃など時期の異なるものを同様に扱ったのは問題である。そのため、ある程度の時期ごとの分布を示す必要があるが、資料数が限られるため、同丘陵上に位置する丹上・真福寺遺跡及び郡戸遺跡等の出土状況から丘陵上全体での比較が求められるところである。

表2 2Aトレンチ出土石器群観察表(平面座標、T.P.値付与分)(1)

NO.	燧石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
1	集中部1	剥片	Sa	0.7	0.1			
2	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			
3	集中部1	剥片	Sa	2.9	3.3			
4	集中部1	剥片	Sa	0.9	0.1			
5	集中部1	剥片	Sa	2.2	1.9			
6	集中部1	剥片	Sa	(5.3)	(13.5)			
7	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.3			
8	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			
9	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.5			
10	集中部1	剥片	Sa	2.3	1.7			
11	集中部1	剥片	Sa	(2.9)	(1.7)	図95-5-14	写真27-1	接合資料5
12	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			
13	集中部1	剥片	Sa	(1.4)	(0.3)			
14	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.4			
15	集中部1	剥片	Sa	2.6	0.6			両極打法による
16	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			
17	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
18	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.4			
19	集中部1	剥片	Sa	2.7	2.6			
20	集中部1	剥片	Sa	0.7	0.1			
21	集中部1	剥片	Sa	2.3	2.4			
22	集中部1	剥片	Sa	(1.3)	(0.2)	図95-5-5a	写真27-1	接合資料5 折損面接合
23	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(1.0)			
24	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(6.1)			
25	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.4			
26	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.4			両極打法による
27	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.8			
28	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
29	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.6			
30	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.3			
31	集中部1	剥片	Sa	2.7	0.7			両極打法による?
32	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.3			破砕
33	集中部1	剥片	Sa	(0.7)	(0.1)			
34	集中部1	剥片	Sa	(1.5)	(0.2)			
35	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.2			
36	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.1			
37	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.2			
38	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(0.8)			
39	集中部1	剥片	Sa	(1.2)	(0.1)			
40	集中部2	—	—	6.5	160.7			自然礫(砂岩)
41	集中部2	楔形石器	Sa	3.7	4.3			破砕
42	集中部1	剥片	Sa	(2.5)	(0.9)			
43	集中部1	石核	Sa	8.6	60.9			自然礫(泥岩?)
44	集中部1	—	—	3.8	12.0			
45	集中部1	剥片	Sa	3.5	3.9			
46	集中部1	剥片	Sa	(1.1)	(0.2)			
47	集中部1	—	—	4.2	28.3			自然礫(凝灰岩)
48	集中部1	剥片	Sa	0.9	0.2			
49	集中部1	剥片	Sa	0.8	0.1			
50	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.5			
51	集中部1	石核	Sa	(6.3)	(61.7)	図116-14a	写真28-6	接合資料14

NO.	燧石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
52	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.2			両極打法による
53	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.1			
54	集中部1	剥片	Sa	0.7	0.1			
55	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.5			
56	集中部1	剥片	Sa	1.0	0.1			
57	集中部1	剥片	Sa	(2.6)	(0.9)			
58	集中部1	剥片	Sa	(2.1)	(0.9)			
59	集中部1	剥片	Sa	2.8	1.5			
60	集中部1	剥片	Sa	(1.4)	(0.4)	図95-5-4b	写真27-1	接合資料5 折損面接合
61	集中部1	剥片	Sa	(3.9)	(5.2)	図95-5-12b	写真27-1	接合資料5 折損面接合
62	集中部1	楔形石器	Sa	3.9	13.0			
63	集中部1	剥片?	Sa	2.7	1.9			
64	集中部1	剥片	Sa	2.6	0.4			
65	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.1			
66	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.6			
67	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.6			
68	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			
69	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.4			
70	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.9			
71	集中部1	剥片	Sa	4.1	8.7	図92-3-5	写真26-3	接合資料3
72	集中部1	剥片	Sa	(1.5)	(0.1)			
73	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.1)			
74	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.5			
75	集中部1	剥片	Sa	(0.8)	(0.1)			
76	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.2			
77	集中部1	—	—	3.6	10.9			自然礫(花崗岩系)
78	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.4			
79	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.1			
80	集中部1	剥片	Sa	(2.6)	(1.3)			背面自然面
81	集中部1	剥片	Sa	(1.5)	(0.3)			破砕
82	集中部1	剥片	Sa	2.2	1.5			
83	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.2			
84	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
85	集中部1	剥片	Sa	2.8	0.9			
86	集中部1	剥片	Sa	(1.8)	(0.3)			破砕
87	集中部1	剥片	Sa	(2.2)	(2.3)			背面自然面
88	集中部1	剥片	Sa	(1.3)	(0.1)			破砕
89	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.4			
90	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.8			
91	集中部1	剥片	Sa	(2.1)	(0.2)			
92	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.4			
93	集中部1	剥片	Sa	0.9	0.1			
94	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.3			
95	集中部1	剥片	Sa	2.5	0.7			
96	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.9			
97	集中部1	剥片	Sa	(1.0)	(0.1)			
98	集中部1	剥片	Sa	(1.1)	(0.2)			背面自然面
99	集中部1	剥片	Sa	2.5	2.3			
100	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.6			
101	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
102	集中部1	剥片	Sa	(2.5)	(1.3)	図113-19-2	写真28-7	接合資料19

表3 2 Aトレンチ出土石器群観察表(平面座標、T.P.値付与分)(2)

NO.	所属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
103	集中部1	剥片	Sa (3.1)	(0.4)				
104	集中部1	剥片	Sa 1.0	0.1				
105	集中部1	剥片	Sa 1.9	0.2				
106	集中部1	剥片	Sa 3.7	3.1				
107	集中部1	剥片	Sa 1.0	0.1				
108	集中部1	剥片	Sa (1.8)	(0.6)				破砕
109	集中部1	剥片	Sa 1.2	0.2				
110	集中部1	剥片	Sa 1.2	0.1				
111	集中部1	剥片	Sa (2.2)	(0.7)				
112	集中部1	剥片	Sa 1.2	0.1				両極打法による?
113	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.3	図113-19-3	写真28-7	接合資料19	
114	集中部1	剥片	Sa 1.7	0.7				
115	集中部1	剥片	Sa 1.0	0.1				
116	集中部1	剥片	Sa (2.4)	(1.5)				
117	集中部1	石核	Sa 3.7	17.0				
118	集中部1	剥片	Sa (3.4)	(8.6)				
119	集中部1	剥片	Sa (1.9)	(1.0)				
120	集中部1	剥片	Sa 1.5	0.5				背面自然面
121	集中部1	剥片	Sa 0.7	0.1				
122	集中部1	剥片	Sa 0.8	0.1				
123	集中部1	剥片	Sa 2.7	1.4				
124	集中部1	剥片	Sa (1.4)	(0.2)				
125	集中部1	剥片	Sa 1.0	0.1				
126	集中部1	剥片	Sa 1.1	0.1				
127	集中部1	剥片	Sa (1.7)	(0.1)				
128	集中部1	—	—	2.4	1.1			自然礫(砂岩)
129	集中部1	剥片	Sa (1.9)	(0.3)				
130	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.3				
131	集中部1	剥片	Sa (1.6)	(0.2)				
132	集中部1	剥片	Sa 1.0	0.2				
133	集中部1	剥片	Sa 1.1	0.2				
134	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.6				
135	集中部1	剥片	Sa 1.1	0.1				
136	集中部1	剥片	Sa 0.8	0.1				
137	集中部1	剥片	Sa 1.2	0.2				
138	集中部1	剥片	Sa (1.7)	(0.9)				
139	集中部1	剥片	Sa (1.5)	(0.3)				
140	集中部1	剥片	Sa (2.2)	(0.4)				
141	集中部1	剥片	Sa 0.9	0.1				
142	集中部1	剥片	Sa 0.8	0.1				
143	集中部1	剥片	Sa 1.0	0.1				
144	集中部1	剥片	Sa (3.2)	(1.6)				
145	集中部1	剥片	Sa 1.2	0.2				
146	集中部1	剥片	Sa (2.0)	(1.2)				
147	集中部1	剥片	Sa (0.9)	(0.2)				
148	集中部1	剥片	Sa 2.5	0.8				
149	集中部1	剥片	Sa 0.6	0.1				
150	集中部1	剥片	Sa 1.2	0.2				
151	集中部1	剥片	Sa (1.2)	(0.1)				
152	集中部1	剥片	Sa (1.6)	(0.3)				
153	集中部1	剥片	Sa (2.0)	(0.3)				
154	集中部1	剥片	Sa (3.5)	(3.6)				
155	集中部1	剥片	Sa 1.6	0.4				
156	集中部1	剥片	Sa (1.4)	(0.6)				
157	集中部1	剥片	Sa (1.9)	(0.6)				
158	集中部1	剥片	Sa 2.1	1.1				
159	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.1				
160	集中部1	剥片	Sa 1.5	0.9				
161	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.3				
162	集中部1	剥片	Sa 1.6	0.5				
163	集中部1	剥片	Sa 1.5	0.4	図118-10-2	写真29-4	接合資料10	
164	集中部1	剥片	Sa 2.9	6.0				
165	集中部1	剥片	Sa 2.4	2.7				
166	集中部1	剥片	Sa 1.9	0.5				両極打法による?
167	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.2				
168	集中部1	剥片	Sa 1.1	0.4				背面自然面
169	集中部1	剥片	Sa 2.2	0.5				
170	集中部1	剥片	Sa 2.2	0.4				
171	集中部1	剥片	Sa 1.0	0.1				
172	集中部1	剥片	Sa 1.9	0.3				背面自然面
173	集中部1	剥片	Sa 1.5	0.3				
174	集中部1	剥片	Sa 2.0	2.3				
175	集中部1	剥片	Sa (4.4)	(8.9)				
176	集中部1	剥片	Sa 1.7	0.4				
177	集中部1	剥片	Sa 3.3	2.7				
178	集中部1	剥片	Sa 0.4	0.1				
179	集中部1	剥片	Sa 1.2	0.2				
180	集中部1	剥片	Sa 1.7	0.3				
181	集中部1	剥片	Sa (1.3)	(0.1)				
182	集中部1	剥片	Sa (1.6)	(0.4)				破砕
183	集中部1	剥片	Sa (2.9)	(1.7)				背面自然面
184	集中部1	剥片	Sa 2.2	1.0				
185	集中部1	剥片	Sa 1.3	0.2				
186	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.3				
187	集中部1	剥片?	Sa 0.9	0.1				
188	集中部1	剥片	Sa 1.4	0.1				
189	集中部1	剥片	Sa 1.7	0.1				両極打法による
190	集中部1	楔形石器	Sa 3.9	10.3				背面自然面
191	集中部1	剥片	Sa 2.0	0.8				
192	集中部1	剥片	Sa (2.0)	(0.6)				
193	集中部1	剥片	Sa 1.9	0.5				
194	集中部1	剥片	Sa (2.1)	(0.3)				
195	集中部1	剥片	Sa 2.0	0.9				背面自然面
196	集中部1	剥片	Sa 0.8	0.1				
197	集中部1	剥片	Sa (3.4)	(5.4)				
198	集中部1	剥片	Sa (2.5)	(1.6)				
199	集中部1	剥片	Sa 1.7	0.4				
200	集中部1	剥片	Sa (0.9)	(0.2)				
201	集中部1	剥片	Sa 1.5	0.1				
202	集中部1	剥片	Sa 2.2	0.7	図95-5-13	写真27-1	接合資料5	
203	集中部1	剥片	Sa 3.3	2.8	図100-7-3	写真27-3	接合資料7	
204	集中部1	剥片	Sa 2.0	0.4				

表 4 2 A トレンチ出土石器群観察表 (平面座標、T.P.値付与分) (3)

NO.	燧石石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
205	集中部1	剥片	Sa	2.3	2.0	図95-5-9	写真27-1	接合資料5 背面自然面
206	集中部1	剥片	Sa	(1.1)	(0.1)		写真26-3	接合資料3
207	集中部1	剥片	Sa	(3.2)	(5.4)	図92-3-3a		
208	集中部1	剥片	Sa	0.7	0.1			
209	集中部1	楔形石器	Sa	3.3	3.2			
210	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(0.7)			
211	集中部1	石核	Sa	6.2	34.2			両極打撃による 楔形石器の 可能性も
212	集中部1	剥片	Sa	2.0	1.4	図117-18-3	写真29-3	接合資料18
213	集中部1	剥片	Sa	2.5	1.0			
214	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.5			
215	集中部1	剥片	Sa	(3.4)	(3.4)	図95-5-4a	写真27-1	接合資料5 折損面接合
216	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			
217	集中部1	剥片	Sa	(3.9)	(5.2)			
218	集中部1	剥片	Sa	12.1	13.0			
219	集中部1	剥片	Sa	(2.2)	(1.0)			
220	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.2			
221	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.4			両極打撃による
222	集中部1	剥片	Sa	3.1	1.9			
223	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
224	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.7	図95-5-15	写真27-1	接合資料5
225	集中部1	剥片	Sa	(1.8)	(0.3)			破砕
226	集中部1	剥片	Sa	(4.0)	(4.1)			
227	集中部1	剥片	Sa	3.9	1.1			
228	集中部1	剥片	Sa	0.6	0.1			
229	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
230	集中部1	剥片	Sa	2.9	1.7			両極打撃による
231	集中部1	剥片	Sa	(3.4)	(0.9)			
232	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.7			
233	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.2			
234	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			
235	集中部1	剥片	Sa	(1.2)	(0.1)			
236	集中部1	剥片	Sa	1.0	0.1			
237	集中部1	剥片	Sa	(1.4)	(0.1)			
238	集中部1	剥片	Sa	(1.6)	(0.1)			
239	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
240	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.2			
241	集中部1	剥片	Sa	(1.3)	(0.3)			
242	集中部1	剥片	Sa	(1.0)	(0.2)			
243	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.5			背面自然面
244	集中部1	剥片	Sa	3.4	1.1			両極打撃による
245	集中部1	剥片	Sa	4.6	7.3	図92-3-4	写真26-3	接合資料3
246	集中部1	剥片	Sa	(4.6)	(3.3)	図92-3-2	写真26-3	接合資料3
247	集中部1	剥片	Sa	3.7	1.4			
248	集中部1	剥片	Sa	(2.9)	(2.1)			
249	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.9			
250	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.4			
251	集中部1	剥片	Sa	3.6	2.2	図114-9-4	写真28-5	接合資料9
252	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.4			
253	集中部1	剥片	Sa	2.9	9.1			背面自然面
254	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.6			両極打撃による?

NO.	燧石石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
255	集中部1	剥片	Sa	(2.4)	(1.9)	図95-5-5b	写真27-1	接合資料5 折損面接合
256	集中部1	剥片	Sa	2.0	1.0			
257	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.3			
258	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.2			両極打撃による?
259	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.2			両極打撃による?
260	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.3			
261	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.4			破砕
262	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(1.5)			
263	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(1.6)			
264	集中部1	楔形石器	Sa	4.4	10.1			
265	集中部1	剥片	Sa	(0.8)	(0.1)			
266	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.2			背面自然面
267	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.7			
268	集中部1	剥片	Sa	0.8	0.1			
269	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.1			
270	集中部1	剥片	Sa	2.1	1.0			背面自然面
271	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.2			両極打撃による
272	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.4			
273	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.3			
274	集中部1	剥片	Sa	0.7	0.1			
275	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.3			背面自然面
276	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.3)			
277	集中部1	剥片	Sa	(2.1)	(0.8)			
278	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(0.3)			
279	集中部1	剥片	Sa	0.7	0.1			
280	集中部1	剥片	Sa	0.8	0.1			背面自然面
281	集中部1	剥片	Sa	(2.2)	(0.4)			
282	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.2			
283	集中部1	剥片	Sa	3.1	4.1			背面自然面
284	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.5			
285	集中部1	剥片	Sa	(1.4)	(0.2)			
286	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.1			
287	集中部1	剥片	Sa	(1.3)	(0.3)			破砕
288	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.5			両極打撃による
289	集中部1	剥片	Sa	2.5	1.9			両極打撃による?
290	集中部1	剥片	Sa	(3.4)	(3.7)			
291	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.7			背面自然面
292	集中部1	剥片	Sa	2.5	0.8			
293	集中部1	剥片	Sa	(3.3)	(14.7)	図92-3-3b	写真26-3	接合資料3
294	集中部1	剥片	Sa	2.3	10.0			両極打撃による
295	集中部1	楔形石器	Sa	4.8	16.0			
296	集中部1	剥片	Sa	(2.5)	(1.7)			
297	集中部1	剥片	Sa	1.9	1.6			
298	集中部1	剥片	Sa	3.0	0.6			両極打撃による
299	集中部1	剥片	Sa	4.3	4.1			
300	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.7			
301	集中部1	剥片	Sa	(3.0)	(3.5)			
302	集中部1	楔形石器	Sa	(6.4)	(12.5)			
303	集中部1	剥片	Sa	2.4	1.9			
304	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.2			
305	集中部1	剥片	Sa	(1.6)	(0.6)			

表5 2 A トレンチ出土石器群観察表 (平面座標、T.P.値付与分) (4)

NO.	帰属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
306	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.8			
307	集中部1	剥片	Sa	2.0	1.4			
308	集中部1	剥片	Sa	2.3	0.9			
309	集中部1	剥片	Sa	3.9	9.9			背面自然面
310	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.2			両極打法による?
311	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.4			
312	集中部1	剥片	Sa	(3.1)	(4.4)			
313	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.7			両極打法による
314	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.5			
315	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			
316	集中部1	石核	Sa	1.6	0.5	図118-22	写真29-6	
317	集中部1	剥片	Sa	2.8	0.9			
318	集中部1	剥片	Sa	2.1	1.0			背面自然面
319	集中部1	剥片	Sa	(2.9)	(0.9)			
320	集中部1	剥片	Sa	2.4	1.4	図95-5-2	写真27-1	接合資料5 背面自然面
321	集中部1	剥片	Sa	(2.5)	(1.5)			破砕 (両極打法による?)
322	集中部1	剥片	Sa	(1.8)	(0.5)			
323	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.6			楔形石器の可能性も
324	集中部1	剥片	Sa	0.9	0.1			
325	集中部1	石核	Sa	6.0	42.6			
326	集中部1	剥片	Sa	(2.2)	(0.8)			
327	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.8			両極打法による
328	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.7			両極打法による (破砕?)
329	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.8)			
330	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			
331	集中部1	剥片	Sa	(2.6)	(3.2)			
332	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.2			背面自然面
333	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.2			両極打法による?
334	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
335	集中部1	剥片	Sa	2.9	1.4			背面自然面
336	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.9			両極打法による?
337	集中部1	楔形石器	Sa	3.1	12.0			折損面形成後も剥離
338	集中部1	剥片	Sa	3.2	2.3			
339	集中部1	剥片	Sa	2.3	1.3			
340	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.6			破砕 (両極打法による?)
341	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.6			両極打法による
342	集中部1	剥片	Sa	2.8	1.4			両極打法による?
343	集中部1	剥片	Sa	3.6	5.9			背面自然面
344	集中部1	剥片	Sa	(3.2)	(5.8)	図95-5-7	写真27-1	接合資料5
345	集中部1	剥片	Sa	(3.9)	(4.0)			
346	集中部1	楔形石器	Sa	3.3	5.5			背面自然面
347	集中部1	剥片	Sa	2.3	0.5			両極打法による?
348	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
349	集中部1	剥片	Sa	3.4	2.2			
350	集中部1	剥片	Sa	4.1	11.8			背面自然面
351	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.8			背面自然面
352	集中部1	剥片	Sa	(3.4)	(3.6)	図95-5-3	写真27-1	接合資料5
353	集中部1	剥片	Sa	2.8	0.7			
354	集中部1	剥片	Sa	3.2	2.2			
355	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.1			
356	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.6)			破砕

NO.	帰属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
357	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.2			
358	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			両極打法による?
359	集中部1	楔形石器	Sa	(2.8)	(2.9)			
360	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.3			
361	集中部1	剥片	Sa	2.8	2.8			
362	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
363	集中部1	剥片	Sa	2.3	0.4			
364	集中部1	剥片	Sa	2.3	2.8		写真29-3	接合資料18
365	集中部1	剥片	Sa	4.1	8.1	図117-18-2		
366	集中部1	石核	Sa	(4.6)	(38.4)			
367	集中部1	剥片	Sa	4.2	3.7			
368	集中部1	剥片	Sa	4.2	17.9	図96-5-22	写真27-1	接合資料5
369	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.2			
370	集中部1	石核	Sa	4.0	15.8			
371	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.4			
372	集中部1	剥片	Sa	2.5	2.9			両極打法による
373	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.9			
374	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			
375	集中部1	石核	Sa	3.1	3.6			
376	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.7			
377	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.6			背面自然面
378	集中部1	剥片	Sa	4.1	3.3			
379	集中部1	楔形石器	Sa	(4.3)	(9.3)			
380	集中部1	剥片	Sa	4.2	9.1			
381	集中部1	石核	Sa	6.8	142.2	図91-2b	写真26-2	接合資料2 両極打法による 背面自然面
382	集中部1	剥片	Sa	3.0	2.9			
383	集中部1	剥片	Sa	3.1	3.3			
384	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.7			両極打法による?
385	集中部1	剥片	Sa	2.3	1.0			
386	集中部1	剥片	Sa	2.4	1.0			
387	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.6			背面自然面
388	集中部1	剥片	Sa	4.9	15.4			背面自然面
389	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.2			
390	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.1			
391	集中部1	楔形石器	Sa	4.0	3.7			
392	集中部1	石核	Sa	4.7	26.8	図91-2a	写真26-2	接合資料2 両極打法による
393	集中部1	剥片	Sa	(1.6)	(0.2)			
394	集中部1	剥片	Sa	2.6	0.9			
395	集中部1	剥片	Sa	2.7	1.8			
396	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(2.7)			
397	集中部1	剥片	Sa	3.6	2.8			背面自然面
398	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.7			
399	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.5			
400	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.2			
401	集中部1	剥片	Sa	2.2	2.0			背面自然面
402	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.5			
403	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.3			
404	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.7			両極打法による
405	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.3			
406	集中部1	石核	Sa	(3.2)	(11.9)			
407	集中部1	剥片	Sa	2.9	0.8			

表6 2Aトレンチ出土石器群観察表(平面座標、T.P.値付与分)(5)

NO.	燧石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
408	集中部1	石核	Sa	6.5	121.8	図93-3-14	写真26-3	接合資料3
409	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.4			
410	集中部1	剥片	Sa	2.8	2.6			両極打法による
411	集中部1	剥片	Sa	(1.9)	(0.6)			
412	集中部1	剥片	Sa	(3.2)	(3.7)			
413	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.2			
414	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.3			
415	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.2			
416	集中部1	剥片	Sa	2.2	1.9			背面自然面
417	集中部1	剥片	Sa	(2.7)	(0.8)			
418	集中部1	剥片	Sa	(2.6)	(6.2)			
419	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.5	図96-5-20	写真27-1	接合資料5
420	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(1.8)			
421	集中部1	剥片	Sa	2.6	0.7			背面自然面
422	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.3			
423	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.6			
424	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.2			
425	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			押し剥離チップ
426	集中部1	剥片	Sa	0.8	0.1			背面自然面
427	集中部1	剥片	Sa	2.5	2.9			
428	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.4			
429	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.4			
430	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3	図100-7-5	写真27-3	接合資料7
431	集中部1	剥片	Sa	(2.1)	(1.0)			
432	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			背面自然面
433	集中部1	剥片	Sa	2.3	0.5			
434	集中部1	剥片	Sa	(1.9)	(0.8)			
435	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.1			
436	集中部1	剥片	Sa	2.6	4.1			
437	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(0.8)			背面自然面
438	集中部1	剥片	Sa	2.9	3.5			
439	集中部1	剥片	Sa	1.9	1.0			
440	集中部1	剥片	Sa	(1.5)	(0.6)			
441	集中部1	剥片	Sa	(1.6)	(0.4)			
442	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.6			両極打法による?
443	集中部1	剥片	Sa	3.3	2.4			
444	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.2			
445	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			両極打法による?
446	集中部1	剥片	Sa	2.3	1.1			
447	集中部1	剥片	Sa	(1.3)	(0.2)			
448	集中部1	石核?	Sa	1.4	0.2			
449	集中部1	剥片	Sa	8.1	48.7			両極打法による?
450	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.6			
451	集中部1	石核	Sa	(4.9)	(16.2)			
452	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.5			背面自然面
453	集中部1	剥片	Sa	4.2	8.5			
454	集中部1	剥片	Sa	2.9	0.5			
455	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.5			
456	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.4			
457	集中部1	剥片	Sa	2.9	2.6			背面自然面
458	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.3			
459	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.8			
460	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.5	図96-5-21	写真27-1	接合資料5
461	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.9			
462	集中部1	剥片	Sa	2.1	1.4			
463	集中部1	剥片	Sa	1.7	1.0			
464	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.1			
465	集中部1	剥片	Sa	(2.2)	(0.2)			
466	集中部1	楔形石器	Sa	2.5	2.9			
467	集中部1	剥片	Sa	(5.1)	(6.0)	図100-7-2	写真27-3	接合資料7
468	集中部1	剥片	Sa	1.9	1.0			
469	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.4			両極打法による?
470	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.7			
471	集中部1	剥片	Sa	4.6	13.2	背面自然面		
472	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.5			
473	集中部1	剥片	Sa	3.0	2.5			背面自然面
474	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.6			
475	集中部1	剥片	Sa	1.0	0.2			
476	集中部1	剥片	Sa	(3.1)	(1.5)			
477	集中部1	剥片	Sa	(1.4)	(0.5)			
478	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.3			背面自然面
479	集中部1	剥片	Sa	2.7	1.6			
480	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.4			
481	集中部1	剥片	Sa	6.5	31.9	図96-5-18	写真27-1	接合資料5
482	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
483	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.9			両極打法による
484	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.3			
485	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.3			
486	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.6			
487	集中部1	剥片	Sa	(4.6)	(9.4)	図114-9-2a	写真28-5	接合資料9 折損面接合
488	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(1.2)			
489	集中部1	剥片	Sa	(2.3)	(0.5)			
490	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.4			背面自然面
491	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.4			背面自然面
492	集中部1	楔形石器	Sa	2.0	2.3			
493	集中部1	剥片	Sa	3.6	2.2			背面自然面
494	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(2.6)	図92-3-8	写真26-3	接合資料3
495	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(4.7)	図92-3-9	写真26-3	接合資料3
496	集中部1	剥片	Sa	4.2	3.4			
497	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.4			
498	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.4			
499	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.3			
500	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.5			背面自然面
501	集中部1	剥片	Sa	3.5	5.5			
502	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.4			
503	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.6			
504	集中部1	剥片	Sa	1.0	0.3			
505	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.4			
506	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(1.8)	図95-5-8a	写真27-1	接合資料5 折損面接合 背面自然面
507	集中部1	剥片	Sa	2.8	1.2			
508	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.3			

表7 2Aトレンチ出土石器群観察表(平面座標、T.P.値付与分)(6)

NO.	燐属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
560	集中部1	石鏃	Sa	1.7	0.5	図118-21	写真29-6	楕形鏃
561	集中部1	剥片	Sa	4.9	15.2			背面自然面
562	集中部外	剥片	Sa	3.2	6.5			背面自然面
563	集中部外	剥片	Sa	6.2	14.6	図118-20	写真29-6	
564	集中部外	剥片	Sa	4.4	21.5			
565	集中部外	剥片	Sa	2.8	2.1			
566	集中部外	剥片	Sa	1.5	0.3			
567	集中部外	剥片	Sa	2.5	0.5			
568	集中部1	剥片	Sa	2.4	1.3			
569	集中部1	剥片	Sa	5.5	6.6			背面自然面
570	集中部1	剥片	Sa	2.4	2.4			
571	集中部外	剥片?	Sa	(7.6)	(45.9)			折れにより詳細不明
572	集中部外	—	—	5.2	76.1			自然礫(砂岩?)
573	集中部外	剥片	Sa	4.5	4.5			背面自然面
574	集中部外	剥片	Sa	6.1	29.9			
575	集中部外	剥片	Sa	(2.9)	(2.9)			
576	集中部外	剥片	Sa	(7.5)	(59.3)			
577	集中部外	剥片	Sa	(4.4)	(4.2)			
578	集中部外	剥片	Sa	3.9	4.8			
579	集中部2	剥片	Sa	5.8	18.2			
580	集中部2	剥片	Sa	(3.9)	(6.8)			
581	集中部2	剥片	Sa	(3.8)	(7.1)			
582	集中部2	剥片	Sa	(4.1)	(10.8)			背面自然面
583	集中部2	剥片	Sa	3.3	1.5			
584	集中部2	剥片	Sa	4.4	8.0			
585	集中部2	剥片	Sa	(4.7)	(20.3)			
586	集中部2	剥片	Sa	(5.1)	(8.1)			折損面接合
587	集中部2	剥片	Sa	(4.4)	(10.6)	図117-15-2	写真29-5	接合資料15
588	集中部2	剥片	Sa	1.4	0.7			
589	集中部2	剥片	Sa	(2.7)	(2.0)			
590	集中部2	剥片	Sa	(1.6)	(0.7)	破砕		
591	集中部2	剥片	Sa	(1.5)	(0.3)			
592	集中部2	剥片	Sa	2.5	4.6			
593	集中部2	剥片	Sa	2.9	6.6			
594	集中部2	剥片	Sa	7.4	63.6	図116-16-3	写真29-1	接合資料16 石核の可能性も
595	集中部2	剥片	Sa	4.8	6.7	図113-8-4	写真28-2	接合資料8 背面自然面
596	集中部2	剥片	Sa	(3.0)	(2.7)			
597	集中部2	剥片	Sa	2.0	1.0			背面自然面
598	集中部2	剥片	Sa	3.7	5.5			背面自然面
599	集中部2	剥片	Sa	2.6	2.0			
600	集中部2	剥片	Sa	2.0	0.4			
601	集中部2	剥片	Sa	2.3	1.1			
602	集中部2	剥片	Sa	1.8	0.6			
603	集中部2	剥片	Sa	2.2	1.3			
604	集中部2	剥片	Sa	(3.2)	(2.1)			
605	集中部2	剥片	Sa	3.1	3.2			背面自然面
606	集中部2	剥片	Sa	(2.4)	(1.1)			
607	集中部2	剥片	Sa	4.0	11.1			背面自然面
608	集中部2	剥片	Sa	(4.2)	(4.8)			
609	集中部2	剥片	Sa	(4.5)	(9.6)			折損面接合
610	集中部2	剥片	Sa	(3.6)	(3.0)			

NO.	燐属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
509	集中部1	剥片	Sa	3.6	4.0			
510	集中部1	剥片	Sa	2.7	0.8			背面自然面
511	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			
512	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.3			両極打法による?
513	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.7			
514	集中部1	剥片	Sa	(2.7)	(2.2)			
515	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.3			背面自然面
516	集中部1	剥片	Sa	5.8	29.1			
517	集中部1	剥片	Sa	5.3	7.7			
518	集中部1	剥片	Sa	2.7	1.4			
519	集中部1	剥片	Sa	6.1	6.8	図114-9-5	写真28-5	接合資料9 背面自然面
520	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.6			
521	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.4			
522	集中部1	剥片	Sa	(3.6)	(2.9)			背面自然面
523	集中部1	剥片	Sa	(2.6)	(2.1)			接合資料5
524	集中部1	剥片	Sa	2.3	1.0			接合資料4
525	集中部1	剥片	Sa	3.3	7.5			両極打法による
526	集中部1	剥片	Sa	4.4	17.8	図95-5-16	写真27-1	
527	集中部1	剥片	Sa	2.9	3.4	図93-4-3	写真26-4	
528	集中部1	剥片	Sa	3.8	2.6			
529	集中部1	剥片	Sa	(3.0)	(0.9)			
530	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.2			
531	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(4.2)			
532	集中部1	—	—	5.0	69.4			自然礫(砂岩)
533	集中部1	—	—	8.9	243.8			自然礫(砂岩)
534	集中部1	—	—	5.6	162.3			自然礫(砂岩)
535	集中部1	—	—	6.4	9.0			自然礫(砂岩)
536	集中部1	剥片	Sa	2.1	1.2			
537	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.6	図100-7-6	写真27-3	接合資料7
538	集中部1	剥片	Sa	(3.2)	(3.6)	図100-7-4	写真27-3	接合資料7
539	集中部1	石核	Sa	(4.8)	(74.1)	図100-7-7a	写真27-3	接合資料7
540	集中部1	石核	Sa	(4.3)	(21.9)	図93-4-2b	写真26-4	接合資料4
541	集中部1	石核	Sa	(5.9)	(37.1)	図93-4-2a	写真26-4	接合資料4
542	集中部1	石核	Sa	(4.4)	(82.8)	図100-7-7b	写真27-3	接合資料7
543	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.9			
544	集中部1	剥片	Sa	(3.0)	(2.7)	図116-16-2	写真29-1	接合資料16 刃部調整剥片
545	集中部1	—	—	6.1	95.3			自然礫(凝灰岩?)
546	集中部1	—	—	4.9	63.2			自然礫(チャート?)
547	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
548	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
549	集中部1	石核	Sa	7.8	73.4			
550	集中部1	剥片	Sa	(5.2)	(13.4)	図91-1-6	写真26-1	接合資料1 背面自然面
551	集中部1	剥片	Sa	2.8	1.3			
552	集中部1	—	—	6.9	142.7			自然礫(凝灰岩)
553	集中部1	—	—	7.9	225.7			自然礫(チャート?)
554	集中部1	石核	Sa	10.2	263.7	図96-5-23	写真27-1	接合資料5
555	集中部1	剥片	Sa	5.7	8.2	図117-17-2	写真29-2	接合資料17
556	集中部1	剥片	Sa	4.8	16.9			背面自然面
557	集中部1	—	—	8.3	233.7			自然礫(石英片岩)
558	集中部1	—	—	5.8	91.2			自然礫(凝灰岩?)
559	集中部1	—	—	3.8	22.3			自然礫(砂岩)

表 8 2 A トレンチ出土石器群観察表 (平面座標、T.P.値付与分) (7)

NO.	燧石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
611	集中部2	剥片	Sa	(3.6)	(6.5)			背面自然面
612	集中部2	剥片	Sa	(4.5)	(8.8)	図114-11-2a	写真28-3	折損面接合 背面自然面 接合資料11 折損面接合
613	集中部2	剥片	Sa	2.3	0.7			
614	集中部2	剥片	Sa	1.9	0.3			背面自然面
615	集中部2	剥片	Sa	2.4	1.9			
616	集中部2	剥片	Sa	1.8	1.6			
617	集中部2	剥片	Sa	(2.8)	(3.3)			
618	集中部2	剥片	Sa	(2.7)	(0.5)			
619	集中部2	剥片	Sa	1.9	1.0			
620	集中部2	剥片	Sa	3.8	6.8			
621	集中部2	剥片	Sa	1.7	0.3			
622	集中部2	剥片	Sa	(2.3)	(2.4)			
623	集中部2	剥片	Sa	(3.9)	(3.7)			
624	集中部2	剥片	Sa	2.6	0.9			背面自然面
625	集中部2	剥片	Sa	(2.8)	(0.7)			
626	集中部2	剥片	Sa	1.1	0.1			
627	集中部2	剥片	Sa	(1.3)	(0.1)			
628	集中部2	剥片	Sa	1.6	2.1			
629	集中部2	剥片	Sa	1.7	0.4			
630	集中部2	剥片	Sa	(2.4)	(2.3)			
631	集中部2	剥片	Sa	1.2	0.2			
632	集中部2	剥片	Sa	(2.0)	(2.1)			
633	集中部2	剥片	Sa	3.3	1.6			
634	集中部2	剥片	Sa	1.8	0.4			両極打法による?
635	集中部2	楔形石器	Sa	3.1	5.9			
636	集中部2	剥片	Sa	2.6	0.6			
637	集中部2	剥片	Sa	(3.5)	(6.4)	図117-15-3	写真29-5	接合資料15
638	集中部2	剥片	Sa	2.3	1.7			
639	集中部2	剥片	Sa	3.3	7.5	図113-8-3	写真28-2	接合資料8
640	集中部2	剥片	Sa	(2.7)	(1.9)			
641	集中部2	剥片	Sa	3.0	2.2			両極打法による 背面自然面
642	集中部2	剥片	Sa	3.4	4.5			背面自然面
643	集中部2	剥片	Sa	2.1	0.6			
644	集中部2	剥片	Sa	1.9	0.7	図115-13-2	写真28-4	接合資料13
645	集中部2	剥片	Sa	3.8	3.5	図113-12-3	写真28-1	接合資料12
646	集中部2	剥片	Sa	1.9	0.8			背面自然面
647	集中部2	剥片	Sa	5.7	5.1			
648	集中部2	剥片	Sa	(3.7)	(6.2)			
649	集中部2	剥片	Sa	(1.7)	(0.9)			
650	集中部2	剥片	Sa	1.8	1.8			
651	集中部2	剥片	Sa	1.2	0.4			
652	集中部2	剥片	Sa	(2.7)	(1.2)			背面自然面
653	集中部2	剥片	Sa	4.2	4.5			
654	集中部2	剥片	Sa	(2.3)	(0.3)			
655	集中部2	剥片	Sa	1.9	1.5			
656	集中部2	剥片	Sa	(4.0)	(10.7)			
657	集中部2	剥片	Sa	3.9	11.5			背面自然面
658	集中部2	剥片	Sa	1.8	0.6			
659	集中部2	剥片	Sa	1.6	0.3			
660	集中部2	剥片	Sa	(2.0)	(0.2)			
661	集中部2	剥片	Sa	2.3	0.4			背面自然面
662	集中部2	剥片	Sa	3.4	1.9			
663	集中部2	剥片	Sa	5.4	24.8			背面自然面
664	集中部2	剥片	Sa	2.4	1.1			
665	集中部2	剥片	Sa	(4.1)	(14.9)			
666	集中部2	剥片	Sa	2.6	0.8			
667	集中部2	剥片	Sa	(1.6)	(0.5)			背面自然面
668	集中部2	剥片	Sa	5.3	23.7			
670	集中部2	剥片	Sa	2.6	2.2			
671	集中部2	剥片	Sa	(2.3)	(0.8)			
672	集中部2	剥片	Sa	(2.2)	(1.8)			折損面接合 背面自然面
673	集中部2	剥片	Sa	1.0	0.4			
674	集中部2	剥片	Sa	(3.7)	(8.1)			
675	集中部2	剥片	Sa	(3.4)	(5.9)			
676	集中部2	剥片	Sa	(2.2)	(2.4)			
677	集中部2	剥片	Sa	2.4	1.6			
678	集中部2	剥片	Sa	6.4	45.1			背面自然面
679	集中部2	剥片	Sa	(4.1)	(12.9)			折損面接合 背面自然面
680	集中部2	剥片	Sa	2.5	1.0			
681	集中部2	剥片	Sa	(4.8)	(20.1)			
682	集中部2	剥片	Sa	6.0	28.4			背面自然面
683	集中部2	剥片	Sa	3.2	10.3			破碎
684	集中部2	剥片	Sa	(2.6)	(2.0)			
685	集中部2	剥片	Sa	2.1	1.2			背面自然面
687	集中部2	剥片	Sa	4.2	9.9			
688	集中部2	剥片	Sa	2.2	1.1			
689	集中部2	剥片	Sa	3.4	2.3			
690	集中部2	剥片	Sa	(5.4)	(26.1)	図113-12-2a	写真28-1	接合資料12 折損面接合 背面自然面
691	集中部2	剥片	Sa	(4.5)	(10.1)			背面自然面
692	集中部2	剥片	Sa	1.9	0.9			背面自然面
693	集中部2	剥片	Sa	6.2	15.9			背面自然面
694	集中部2	剥片	Sa	(3.9)	(6.6)	図115-13-4b	写真28-4	接合資料13 折損面接合
695	集中部2	剥片	Sa	4.4	28.0			
696	集中部2	剥片	Sa	2.3	1.1			
697	集中部2	剥片	Sa	(4.5)	(7.6)			
698	集中部2	剥片	Sa	1.8	0.7			
699	集中部2	剥片	Sa	(3.5)	(4.3)			
700	集中部2	剥片	Sa	(4.2)	(3.0)			
701	集中部2	剥片	Sa	(2.9)	(1.6)			
702	集中部2	剥片	Sa	2.1	1.0			
703	集中部2	石核	Sa	7.1	71.9			
704	集中部2	剥片	Sa	(4.1)	(7.1)			
705	集中部2	剥片	Sa	3.8	8.8	背面自然面		
706	集中部2	剥片	Sa	1.8	0.7			
707	集中部2	剥片	Sa	(2.1)	(2.5)	図115-13-4a	写真28-4	接合資料13 折損面接合
708	集中部2	剥片	Sa	4.4	7.1			
709	集中部2	剥片	Sa	3.1	2.4			
710	集中部2	剥片	Sa	2.0	0.7	図98-6-8	写真27-2	接合資料6 破碎による
711	集中部2	剥片	Sa	(2.7)	(0.5)			

表9 2Aトレンチ出土石器群観察表(平面座標、T.P.値付与分)(8)

NO.	帰属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
763	集中部2	剥片	Sa	3.1	4.5	図98-6-3	写真27-2	接合資料6 破砕
764	集中部2	石核	Sa	9.2	261.6	図99-6-12	写真27-2	接合資料6
765	集中部2	剥片	Sa	4.0	2.9	図99-6-9	写真27-2	接合資料6
766	集中部2	剥片	Sa	3.0	2.6	図98-6-6	写真27-2	接合資料6 破砕
767	集中部2	剥片	Sa	4.9	6.9			背面自然面?
768	集中部2	剥片	Sa	2.2	1.8	図98-6-7	写真27-2	接合資料6 破砕
769	集中部2	剥片	Sa	4.3	8.5	図98-6-5	写真27-2	接合資料6 破砕
770	集中部2	剥片	Sa	3.6	2.5	図99-6-10	写真27-2	接合資料6 両面打法による
771	集中部2	剥片	Sa	1.8	1.1	図99-6-11	写真27-2	接合資料6 両面打法による
772	集中部2	石核	Sa	7.6	306.6	図115-11-3	写真28-3	接合資料11 求心状剥離
773	集中部1	—	—	5.6	84.8			自然礫(砂岩)
774	集中部1	剥片	Sa	2.2	1.5			背面自然面
775	集中部1	—	—	7.8	62.5			自然礫(凝灰岩・粗砂)
776	集中部1	剥片	Sa	1.9	1.5	図91-1-7b	写真26-1	接合資料1 折損面接合
777	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.3			
778	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.4			
779	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.7			
780	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.3			
781	集中部1	剥片	Sa	2.3	1.3	図114-9-3	写真28-5	接合資料9 背面自然面
782	集中部1	剥片	Sa	2.1	1.9			
783	集中部1	剥片	Sa	(1.3)	(0.1)			
784	集中部1	剥片?	Sa	1.2	0.1			
785	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.8			
786	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.3			
787	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.8			
788	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.8)			
789	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.9			
790	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.3			
791	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.2			
792	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			
793	集中部1	剥片	Sa	2.1	1.5			
794	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.2			
795	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.1			
796	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.9			
797	集中部1	剥片	Sa	(1.5)	(0.5)			
798	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.4			
799	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.8			
800	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.4			
801	集中部1	剥片	Sa	0.9	0.1			
802	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.4			
803	集中部1	剥片	Sa	1.0	0.1			
804	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.9			
805	集中部1	剥片	Sa	2.3	0.8			背面自然面
806	集中部1	剥片	Sa	2.5	0.6	図93-3-13	写真26-3	接合資料3 背面自然面
807	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.7			
808	集中部1	剥片	Sa	0.9	0.2			
809	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.1			
810	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.3			
811	集中部1	剥片	Sa	(2.1)	(1.7)			
812	集中部1	剥片	Sa	3.2	4.4	図91-1-2	写真26-1	接合資料1
813	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.4			背面自然面

NO.	帰属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
712	集中部2	剥片	Sa	2.1	1.9	図115-13-3	写真28-4	接合資料13
713	集中部2	剥片	Sa	3.5	4.8			背面自然面
714	集中部2	剥片	Sa	4.1	23.6			背面自然面
715	集中部2	剥片	Sa	(2.7)	(1.0)			接合資料8
716	集中部2	剥片	Sa	5.8	17.4	図113-8-2	写真28-2	
717	集中部2	剥片	Sa	2.8	3.6			背面自然面
718	集中部2	剥片	Sa	2.5	4.4			背面自然面
719	集中部2	剥片	Sa	3.1	1.7			背面自然面
720	集中部2	剥片	Sa	4.3	10.7			背面自然面
721	集中部2	剥片	Sa	2.9	1.0			背面自然面
722	集中部2	剥片	Sa	3.5	3.5			折損面接合
723	集中部2	剥片	Sa	(3.7)	(9.4)			
724	集中部2	剥片	Sa	(3.2)	(5.4)			
725	集中部2	剥片	Sa	(2.1)	(0.9)			
726	集中部2	剥片	Sa	4.9	5.2			背面自然面
727	集中部2	剥片	Sa	(4.0)	(2.8)			
728	集中部2	剥片	Sa	(2.2)	(0.7)			背面自然面
729	集中部2	剥片	Sa	3.1	4.8			背面自然面
730	集中部2	剥片	Sa	3.7	2.8			
731	集中部2	剥片	Sa	4.2	13.8			背面自然面
732	集中部2	剥片	Sa	5.6	31.5			背面自然面
733	集中部2	剥片	Sa	5.1	33.1			破砕
734	集中部2	剥片	Sa	2.9	1.4			
735	集中部2	剥片	Sa	1.8	0.5			
736	集中部2	剥片	Sa	(2.5)	(4.1)	図113-12-2b	写真28-1	接合資料12 折損面接合
737	集中部2	剥片	Sa	(2.8)	(1.3)			
738	集中部2	剥片	Sa	2.8	1.2			
739	集中部2	剥片	Sa	1.7	0.6			
740	集中部2	剥片	Sa	3.6	5.5			
741	集中部2	剥片	Sa	(3.8)	(6.9)			
742	集中部2	剥片	Sa	(2.4)	(1.1)			
743	集中部2	剥片	Sa	(2.7)	(4.4)			
744	集中部2	剥片	Sa	2.8	1.2			
745	集中部2	剥片	Sa	2.5	2.2	図114-11-2b	写真28-3	接合資料11 折損面接合
746	集中部2	剥片	Sa	2.9	6.4			
747	集中部2	剥片	Sa	(2.8)	(2.8)			
748	集中部2	剥片	Sa	5.4	32.2			背面自然面
749	集中部2	剥片	Sa	(5.1)	(16.0)			
750	集中部2	剥片	Sa	5.6	39.2			背面自然面
751	集中部2	剥片	Sa	3.4	4.9			背面自然面
752	集中部1	—	—	9.0	192.7			自然礫(花崗岩)
753	集中部2	剥片	Sa	4.3	10.5			背面自然面
754	集中部2	剥片	Sa	4.4	19.1			接合資料6 破砕
755	集中部2	剥片	Sa	3.3	4.8	図98-6-2	写真27-2	背面自然面
756	集中部2	剥片	Sa	4.8	14.5			背面自然面
757	集中部2	剥片	Sa	2.2	1.8			背面自然面
758	集中部2	剥片	Sa	5.1	21.2			背面自然面
759	集中部2	剥片	Sa	8.5	32.4			背面自然面
760	集中部2	石核	Sa	5.9	97.7	図115-13-5	写真28-4	接合資料13 求心状剥離
761	集中部2	剥片	Sa	3.1	6.1			背面自然面
762	集中部2	剥片	Sa	(4.1)	(3.0)			

表10 2Aトレンチ出土石器群観察表(平面座標、T.P.値付与分)(9)

NO.	帰属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
814	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.3			
815	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.8			
816	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.1)			
817	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.4)			
818	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(1.3)			背面自然面
819	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.6			背面自然面
820	集中部1	剥片	Sa	0.8	0.1			
821	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.2			背面自然面
822	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.3			
823	集中部1	剥片	Sa	(2.1)	(0.7)			
824	集中部1	剥片	Sa	(1.8)	(0.5)			
825	集中部1	剥片	Sa	1.8	0.6			
826	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.1			
827	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
828	集中部1	剥片	Sa	1.1	0.1			
829	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.5			
830	集中部1	剥片	Sa	2.1	2.3			
831	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.4			
832	集中部1	剥片	Sa	(0.8)	(0.1)			
833	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.2			
834	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.4			
835	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.3			
836	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			
837	集中部1	剥片	Sa	3.1	1.9			
838	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.4			背面自然面
839	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.8			
840	集中部1	剥片	Sa	2.5	2.0			
841	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.4			
842	集中部1	剥片	Sa	(3.3)	(1.9)			
843	集中部1	剥片	Sa	2.3	0.5			
844	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.3			
845	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.7			
846	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.6			両極打法による
847	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.5			
848	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.3			背面自然面
849	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.6			
850	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.6			
851	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.2			
852	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.3			
853	集中部1	剥片	Sa	2.3	0.9			
854	集中部1	剥片	Sa	2.4	0.4			
855	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.3			
856	集中部1	剥片	Sa	3.4	1.6			背面自然面
857	集中部1	剥片	Sa	(1.7)	(0.2)			
858	集中部1	剥片	Sa	4.8	3.9			
859	集中部1	剥片	Sa	(0.9)	(0.2)			背面自然面
860	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.9			
861	集中部1	剥片	Sa	(1.4)	(0.2)			
862	集中部1	剥片	Sa	2.0	0.3			
863	集中部1	剥片	Sa	2.2	0.2			
864	集中部1	剥片	Sa	(2.2)	(1.6)			

NO.	帰属石器 集中部	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
865	集中部1	剥片	Sa	(1.1)	(0.3)			
866	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
867	集中部1	剥片	Sa	2.6	0.9			
868	集中部1	剥片	Sa	(2.8)	(0.9)			
869	集中部1	剥片	Sa	0.8	0.2			
870	集中部1	剥片	Sa	1.5	0.4			背面自然面
871	集中部1	剥片	Sa	2.4	3.0			
872	集中部1	剥片	Sa	5.4	8.5			
873	集中部1	楔形石器	Sa	3.1	(5.9)	図93-3-12	写真26-3	接合資料3 折損面接合
874	集中部1	剥片	Sa	1.6	0.3			
875	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.4			
876	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.3			
877	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.5			
878	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.7			
879	集中部1	剥片	Sa	2.1	0.4			
880	集中部1	剥片	Sa	1.7	0.2			
881	集中部1	剥片	Sa	1.3	0.4			
882	集中部1	剥片	Sa	1.2	0.1			
883	集中部1	剥片	Sa	1.4	0.3			
884	集中部1	剥片	Sa	3.3	0.9			
885	集中部1	剥片	Sa	(2.0)	(0.2)			
886	集中部1	剥片	Sa	(1.2)	(1.1)			
887	集中部1	剥片	Sa	1.9	0.4			
888	集中部外	剥片	Sa	3.2	5.6			
889	集中部外	剥片	Sa	1.5	0.5			
891	集中部外	剥片	Sa	4.0	6.1			背面自然面
892	集中部外	剥片	Sa	(2.5)	(1.5)			
893	集中部2	剥片	Sa	5.6	14.0			
894	集中部2	剥片	Sa	5.0	25.9	図98-6-4	写真27-2	接合資料6 破砕
895	集中部2	石核	Sa	2.1	0.7			
895	集中部2	石核	Sa	5.3	29.1			

※最大長は、剥離軸に關係なく器面で最も幅のある部位を計測した値とした。
 ※サヌカイトを略してSaとした。
 ※折損・欠損等により本来の最大長、重量が不明なものは()を付した。

表11 2 Aトレンチ出土石器群観察表 (断ち割り出土分)

NO.	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
1	石核	Sa	(4.6)	(20.4)			
2	石核	Sa	(7.3)	(42.9)			
3	剥片	Sa	(5.5)	(42.9)	図95-5-5c	写真27-1	接合資料5 折損面接合 背面自然面
4	剥片	Sa	(10.0)	(59.9)		写真26-1	接合資料1 折損面接合
5	石核	Sa	(6.8)	(42.2)	図91-1-7a		
6	原石	Sa	6.6	117.3			
7	楔形石器	Sa	5.6	43.4	図91-1-8	写真26-1	接合資料1
8	剥片	Sa	5.7	(35.4)			
9	楔形石器	Sa	6.9	52.7			
10	楔形石器	Sa	4.7	20.2	図93-3-11	写真26-3	接合資料3
11	剥片	Sa	(4.9)	(15.3)	図95-5-12a	写真27-1	接合資料5 折損面接合
12	剥片	Sa	4.1	8.3			
13	剥片	Sa	5.4	20.7			
14	剥片	Sa	6.3	14.9			背面自然面
15	剥片	Sa	(4.0)	(12.0)			
16	剥片	Sa	2.8	4.9			
17	剥片	Sa	(3.4)	(9.9)	図91-1-5	写真26-1	接合資料1
18	剥片	Sa	4.8	7.0	図117-17-3	写真29-2	接合資料17
19	剥片	Sa	(3.7)	(7.8)			
20	剥片	Sa	3.8	4.3			背面自然面
21	剥片	Sa	2.6	4.9			背面自然面
22	剥片	Sa	(2.6)	(5.3)			
23	剥片	Sa	(3.3)	(3.0)	図114-9-2b	写真28-5	接合資料9 折損面接合
24	剥片	Sa	(4.1)	(4.0)			
25	剥片	Sa	3.5	4.7	図118-10-3	写真29-4	接合資料10
26	剥片	Sa	2.5	1.8			背面自然面
27	剥片	Sa	(3.8)	(4.7)			
28	剥片	Sa	3.1	2.1	図92-3-6	写真26-3	接合資料3
29	剥片	Sa	(2.5)	(1.5)			
30	剥片	Sa	2.7	3.3			背面自然面
31	剥片	Sa	(3.2)	(1.3)			
32	剥片	Sa	2.7	1.5			
33	剥片	Sa	0.7	0.1			
34	剥片	Sa	(2.4)	(2.4)			
35	剥片	Sa	(3.0)	(1.9)			
36	剥片	Sa	2.3	1.2			
37	剥片	Sa	(3.0)	(1.2)			
38	剥片	Sa	(2.1)	(2.3)			背面自然面
39	剥片	Sa	2.6	1.8			
40	剥片	Sa	(3.3)	(2.1)			
41	剥片	Sa	(2.5)	(1.4)			
42	剥片	Sa	(2.9)	(1.7)			
43	剥片	Sa	(2.6)	(1.0)			
44	剥片	Sa	(2.2)	(1.2)	図118-10-4	写真29-4	接合資料10
45	剥片	Sa	(2.9)	(0.9)			
46	剥片	Sa	(2.0)	(0.9)			
47	剥片	Sa	2.1	1.2			
48	剥片	Sa	(2.2)	(1.2)	図91-1-3	写真26-1	接合資料1
49	剥片	Sa	2.0	0.8			
50	剥片	Sa	1.8	0.6			
51	剥片	Sa	(1.7)	(0.8)			

NO.	器種	石材	最大長 (cm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
52	剥片	Sa	2.6	0.9			
53	剥片	Sa	2.5	0.7			
54	剥片	Sa	(2.2)	(1.3)			
55	剥片	Sa	1.8	1.2			
56	剥片	Sa	(1.6)	(0.8)	図95-5-8b	写真27-1	接合資料5 破砕?
57	剥片	Sa	(2.2)	(0.9)			
58	剥片	Sa	(1.7)	(0.8)	図95-5-10	写真27-1	接合資料5
59	剥片	Sa	(1.6)	(0.7)			
60	剥片	Sa	1.9	0.5			
61	剥片	Sa	(1.9)	(0.6)			
62	剥片	Sa	(1.9)	(0.5)			
63	剥片	Sa	2.0	0.5			
64	剥片	Sa	1.8	0.4	図91-1-4	写真26-1	接合資料1 背面自然面
65	剥片	Sa	1.8	0.4			
66	剥片	Sa	(2.1)	(0.4)			
67	剥片	Sa	(2.4)	(0.3)			
68	剥片	Sa	(1.7)	(0.8)			
69	剥片	Sa	(1.7)	(0.6)			
70	剥片	Sa	(1.4)	(0.4)			
71	剥片	Sa	(2.0)	(0.3)			
72	剥片	Sa	(1.2)	(0.7)	図91-1-7c	写真26-1	接合資料1 折損面接合
73	剥片	Sa	2.0	0.2			
74	剥片	Sa	1.4	0.2			
75	剥片	Sa	1.3	0.3			
76	剥片	Sa	2.0	0.3			
77	剥片	Sa	(1.0)	(0.1)			
78	剥片	Sa	1.0	0.1			

※最大長は、剥離軸に垂直なく器面で最も幅のある部位を計測した値とした。

※サヌカイトを略してSaとした。

※折損・欠損等により本来の最大長、重量が不明なものは()を付した。

表12 包含層出土石器遺物観察表(1)

登録番号	トレンチ	出土層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
081	7C	1369ビット	ナイフ形石器	サヌカイト	(42)	22	8	(7.7)	図120-3	写真30-3	
009-1	7C	第2層	ナイフ形石器	サヌカイト	(57)	25	10	(10.5)	図120-4	写真30-4	
011	7C	0層	ナイフ形石器	サヌカイト	(34)	(17)	(11)	(4.1)			
059-1	7C	1378溝	石鏃	サヌカイト	24	17	4	0.7	図120-5	写真30-5	
060	7C	1378溝	楔形石器	サヌカイト	53	29	15	(22.1)			
052	7C	1378溝	石核	サヌカイト	84	120	64	804.2			熱破碎
59-2	7C	1378溝	石核	サヌカイト	50	30	13	16.6			
026	7C	第3層	石核	サヌカイト	(67)	(37)	19	(36.1)			
001-1	7C	機械掘削中	石核	サヌカイト	(49)	42	18	(40.1)			
001-3	7C	機械掘削中	石核	サヌカイト	(55)	(65)	(23)	(86.8)			
003	7C	機械掘削中	石核	サヌカイト	35	46	23	45.5			
027-2	7C	第3層	二次調整剥片	サヌカイト	(36)	(30)	(11)	(10.6)			
034	7C	1360溝	剥片	サヌカイト	69	43	7	19.9			
143	7C	1397ビット	剥片	サヌカイト	(28)	(15)	4	(1.6)			
054	7C	1377落ち込み	剥片	サヌカイト	42	32	9	9.1			
053	7C	1378溝	剥片	サヌカイト	33	44	4	6.4			
136	7C	1378溝	剥片	サヌカイト	(38)	24	8	(8.2)			
077	7C	1393土坑	剥片	サヌカイト	26	27	6	3.6			
046-1	7C	1362溝	剥片	サヌカイト	(75)	(54)	14	(50.0)			
046-2	7C	1362溝	剥片	サヌカイト	(27)	(41)	9	(6.8)			
046-3	7C	1362溝	剥片	サヌカイト	(21)	(21)	5	(1.5)			
046-4	7C	1362溝	剥片	サヌカイト	24	21	5	1.7			
039	7C	1361溝	剥片	サヌカイト	45	47	19	(42.3)			熱破碎
027-1	7C	第3層	剥片	サヌカイト	24	(31)	5	(4.1)			
027-3	7C	第3層	剥片	サヌカイト	77	26	8	12.9			
027-4	7C	第3層	剥片	サヌカイト	23	42	8	6.7			
027-5	7C	第3層	剥片	サヌカイト	(23)	(25)	4	(2.2)			
027-6	7C	第3層	剥片	サヌカイト	(21)	(34)	6	(3.8)			
027-7	7C	第3層	剥片	サヌカイト	(35)	(23)	8	(6.3)			
038	7C	第3層	剥片	サヌカイト	34	(53)	11	(16.8)			
028-1	7C	第3層	剥片	サヌカイト	42	(48)	10	(17.2)			
028-2	7C	第3層	剥片	サヌカイト	21	21	5	2.1			
019	7C	第2層東端部	剥片	サヌカイト	45	(24)	15	(14.8)			
025-1	7C	第2層	剥片	サヌカイト	26	(45)	9	(9.3)			
025-2	7C	第2層	剥片	サヌカイト	(26)	(19)	7	(3.7)			
009-2	7C	第2層	剥片	サヌカイト	82	43	28	84.8			
013-1	7C	第2層	剥片	サヌカイト	(29)	19	7	(3.1)			
013-2	7C	第2層	剥片	サヌカイト	(30)	18	6	(3.1)			
015	7C	第2層	剥片	サヌカイト	33	24	8	(5.9)			
007	7C	機械掘削中	剥片	サヌカイト	(28)	(40)	7	(7.4)			
010	7C	機械掘削中	剥片	サヌカイト	48	41	8	17.6			
001-2	7C	機械掘削中	剥片	サヌカイト	28	15	5	2.2			
056	7C	廃土中	剥片	サヌカイト	(11)	(25)	5	(1.7)			
463	14B	1956竪穴住居II	ナイフ形石器	サヌカイト	(41)	13	5	(2.6)	図120-1	写真30-1	
428	14B	1827ビット	ナイフ形石器	サヌカイト	(32)	(16)	5	(2.3)	図120-2	写真30-2	
506	14B	1985落ち込み	石鏃	サヌカイト	25	(11)	4	(0.7)	図120-6	写真30-6	
512-1	14B	第3層	楔形石器	チャート	22	30	7	(5.1)	図120-11	写真30-11	
413-2	14B	第3層	楔形石器	サヌカイト	46	43	18	35.0			
413-1	14B	第3層	石核	サヌカイト	49	27	16	(18.2)			
434	14B	1852落ち込み	剥片	サヌカイト	41	52	10	23.0			
439	14B	1896ビット	剥片	サヌカイト	30	25	5	5.8			
489-1	14B	1943ビット	剥片	サヌカイト	28	49	7	8.6			
489-2	14B	1943ビット	剥片	サヌカイト	21	27	8	4.2			
522	14B	2030ビット	剥片	サヌカイト	40	23	7	(4.4)			
512-2	14B	第3層	剥片	サヌカイト	(28)	(31)	8	(5.3)			
479	14B	第3層	剥片	サヌカイト	17	26	5	2.4			
413-3	14B	第3層	剥片	サヌカイト	67	41	16	34.1			
389-5	15B	第3層	敲石?	サヌカイト	52	51	39	126.1			
404	15B	1776溝	石核	サヌカイト	40	29	18	16.3			
391	15B	第3層	剥片	サヌカイト	(46)	(21)	7	(8.3)			
389-1	15B	第3層	剥片	サヌカイト	(21)	(30)	7	(4.6)			
389-2	15B	第3層	剥片	サヌカイト	22	33	12	6.5			

表13 包含層出土石器遺物観察表(2)

登録番号	トレンチ	出土層位	器種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	図版	写真図版	備考
389-3	15B	第3層	剥片	サヌカイト	(39)	(49)	10	(14.8)			
389-4	15B	第3層	翼状剥片?	サヌカイト	52	32	12	18.9			
390-1	15B	第3層	剥片	サヌカイト	33	55	9	10.4			
390-2	15B	第3層	剥片	サヌカイト	25	(25)	5	(2.5)			
188	13B	1509土坑	翼状剥片	サヌカイト	(31)	(22)	(7)	(4.7)			
166	13B	1480土坑	剥片	サヌカイト	(18)	(37)	6	(4.0)			
014	13B	機械掘削中	剥片	サヌカイト	14	21	6	1.9			
167	12B	1524谷1上層(南部)	削器	サヌカイト	(117)	(56)	11	(68.9)	図120-10	写真30-10	
180	12B	1524谷1下層	ナイフ形石器	サヌカイト	(59)	20	5	(7.9)			
214-1	12B	1515溝	石核	サヌカイト	(79)	(49)	19	(58.1)	図120-12	写真30-12	
168-1	12B	谷1上層(北部)	石核	サヌカイト	(69)	41	22	(65.1)			
168-3	12B	谷1上層(北部)	石核	サヌカイト	(46)	(54)	14	(20.2)			
145-2	12B	第1層相当か?	石核	サヌカイト	(43)	(25)	6	(7.9)			
168-2	12B	谷1上層(北部)	二次調整剥片	サヌカイト	(36)	(30)	6	(7.1)			
214-2	12B	1515溝	剥片	サヌカイト	33	48	9	14.4			
172	12B	谷1上層(南部)	剥片	サヌカイト	(39)	(33)	8	(7.0)			
159-1	12B	谷1上層(南部)	剥片	サヌカイト	29	41	8	7.2			
159-2	12B	谷1上層(南部)	剥片	サヌカイト	20	23	5	1.9			
171	12B	谷1上層(北部)	剥片	サヌカイト	(45)	(16)	(14)	(7.7)			
168-4	12B	谷1上層(北部)	剥片	サヌカイト	(85)	(65)	(21)	(93.7)			
145-1	12B	第1層相当か?	剥片	サヌカイト	(27)	22	4	(2.2)			
145-3	12B	第1層相当か?	剥片	サヌカイト	26	(30)	9	(7.3)			
058-1	12B	第1層	剥片	サヌカイト	(49)	(34)	8	(17.6)			
058-2	12B	第1層	剥片	サヌカイト	(50)	(17)	11	(7.6)			
252-1	2A	1・2層	楔形石器	サヌカイト	(50)	(30)	13	(22.6)			
281	2A	石器包含黒色層	石核	サヌカイト	63	(28)	(25)	(55.5)			接合資料14
253-4	2A	1・2層	石核	サヌカイト	(45)	(46)	13	(38.4)			
252-3	2A	1・2層	石核	サヌカイト	(39)	(37)	14	(18.9)			
342	2A	1600流路	二次調整剥片	サヌカイト	49	31	15	15.2			
253-2	2A	1・2層	二次調整剥片	サヌカイト	(44)	(39)	13	(19.0)			
289	2A	1605溝	剥片	サヌカイト	(22)	(23)	5	(2.2)			
253-1	2A	1・2層	剥片	サヌカイト	(49)	(26)	5	(4.1)			
253-3	2A	1・2層	剥片	サヌカイト	(55)	(36)	8	(20.2)			
252-2	2A	1・2層	剥片	サヌカイト	(29)	(37)	7	(8.5)			
252-4	2A	1・2層	剥片	サヌカイト	24	20	4	(2.0)			
252-5	2A	1・2層	剥片	サヌカイト	34	20	6	3.8			
252-6	2A	1・2層	剥片	サヌカイト	42	48	9	12.3			
285	2A	石器包含黒色層	剥片	サヌカイト	(51)	(12)	(5)	(2.8)			
289	2A	石器包含黒色層	剥片	サヌカイト	(50)	(16)	11	(7.6)			
251	2A	側溝	剥片	サヌカイト	(19)	(29)	9	(3.8)			
199	3A	第2層	石核	サヌカイト	37	29	11	13.5			
202	3A	第2層	剥片	サヌカイト	17	45	10	(5.1)			
241	3A	1534ピット	剥片	サヌカイト	49	48	6	"13.5"			
201	3A	第2層	剥片	サヌカイト	25	(43)	5	(6.7)			
200-1	3A	第2層	剥片	サヌカイト	35	26	8	5.1			
200-2	3A	第2層	剥片	サヌカイト	45	19	6	(6.5)			
200-3	3A	第2層	剥片	サヌカイト	36	15	6	3.5			
177	3A	第1層	剥片	サヌカイト	(22)	(9)	5	(1.0)			
330	4A	第3層	石鏃	サヌカイト	(26)	(16)	3	(1.3)	図120-7	写真30-7	
386	4A	石器包含黒色層	削器	サヌカイト	45	32	10	11.5	図120-8	写真30-8	
312-1	4A	側溝掘削中出土	削器	サヌカイト	(43)	(24)	9	(10.7)	図120-9	写真30-9	
327	4A	第2層	石核	サヌカイト	(20)	(40)	11	(6.9)			
360	4A	1672井戸	石核	サヌカイト	48	52	13	23.3			
344	4A	1552流路上層	剥片	サヌカイト	64	24	7	9.9			
387	4A	1552流路南側	剥片	サヌカイト	(13)	(14)	3	(0.4)			
314	4A	第2層	剥片	サヌカイト	38	(35)	9	(9.5)			
313-1	4A	第2層	剥片	サヌカイト	(28)	(33)	9	(7.8)			
313-2	4A	第2層	剥片	サヌカイト	(33)	(13)	4	(1.1)			
312-2	4A	側溝掘削中出土	剥片	サヌカイト	42	42	11	16.4			
546	—	表採	剥片	サヌカイト	(32)	(31)	7	(6.7)			

V. 基礎分析・考察

河原城遺跡の集落変遷とその背景

三宮昌弘

1、はじめに

河原城遺跡では、(その1)の調査で古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の集落が検出され、その時点で竪穴式住居10棟、掘立柱建物24棟が確認されている。

今回の調査でも竪穴式住居2棟(カマドのみ+2棟)、掘立柱建物12の資料を追加する事ができた。

集落の変遷に関しては既に「河原城遺跡 I」¹⁾において若林邦彦が詳細に論じているが、今回の調査の成果により、時期の設定とその年代比定に疑問が生じ、新たに検証する必要がでてきた。また、前回の調査ではその実態が不明確なまま残った東除川氾濫原の状況が明らかになり、そこで検出された流路に取りつく溝群が、段丘上の集落と不可分の関係があると考えられたので、それらも含め、ここで再び集落の変遷について考え直してみる事とする。

なお、(その1)の調査では竪穴式住居は全遺構の通し番号を振り、掘立柱建物は小文字のアルファベットを振っていたが、(その2)の調査では各々「住居 I」・「建物 I」のようにローマ数字を振った。また、ここでは、主な土器編年は陶邑編年²⁾、飛鳥・平城宮編年³⁾を使用する。

2、前回の集落変遷考察の概要と問題点

前回の考察の集落変遷モデルの設定条件はおおよそ次のとおりである。

- ・掘立柱建物と竪穴式住居の切り合いがあるものは、全て掘立柱建物の柱穴が竪穴式住居の埋土を切っている。また、竪穴式住居260と掘立柱建物 f、竪穴式住居284と掘立柱建物 hのように、竪穴式住居と方向や辺を合わせて重複している掘立柱建物は住居廃絶後、間をあけずそれを踏襲して建てられたと考えられ、竪穴式住居主体の集落から掘立柱建物のみの集落への変化が急速に進行したと考えられる。
- ・竪穴式住居出土の須恵器は全て陶邑Ⅱ-4～5段階であり、掘立柱建物 f は柱穴から陶邑Ⅱ-5段階の須恵器が出土している。これを、竪穴式住居の存続期間と、掘立柱建物への転換期と考えて良いだろう。
- ・掘立柱建物は柱穴底面規模が径55cm以上のものと、50cm以下のものに大別できる。掘立柱建物 f は大型の柱穴で、奈良時代の瓦が柱穴から出土した掘立柱建物 p や奈良時代の鍛冶炉に伴う掘立柱建物 s・t・u・v・w は小型の柱穴のため、大型の柱穴を持つものは飛鳥時代、小型の柱穴を持つものは奈良時代と考える事ができる。
- ・竪穴式住居は3棟が連続して切り合う例が2例あるので、陶邑Ⅱ-4～5の間で3時期に分けるのが細分の限界であろう。
- ・飛鳥時代の掘立柱建物は軸方位が正方位のものと、そこから逸脱し、竪穴式住居と方位を合わすものとに大別でき、後者が古いと考えられる。
- ・結果として竪穴式住居3時期、掘立柱建物3時期の、合計6期が設定できる。各々、6世紀後葉、6世紀末、7世紀初頭、7世紀前半、7世紀後半、8世紀とする。

以上が「河原城遺跡 I」に示された集落変遷考察の手順だが、極めて妥当であり、方法論的に破綻は

ないと考える。

再考の端緒となった最大の問題点は遺物から見た空白期の存在である。今回の調査で、包含層・遺構出土遺物を全てチェックしたが、奈良時代前半の遺物が非常に少なかった。さらに詳細に各包含層・遺構の遺物を見ると、飛鳥Ⅳ型式～平城宮Ⅱ型式に時期を限定できる遺物がほとんど存在しなかった。

翻って「河原城遺跡Ⅰ」でその時期として報告された遺物を見ると、それらも、報告されている時期に限定できないものが多く、掲載遺物で確実なものは溝1188出土の須恵器杯蓋（「河原城遺跡Ⅰ」図7.6-6）が飛鳥Ⅳ型式から平城宮Ⅰ型式でしか法量的にあり得ないものである事ぐらいであった。

従って、古墳時代後期から飛鳥時代の集落と奈良時代の集落との間には空白期があり、連続したものではない可能性が強まってきたのである。

二つの集落の断絶性を考えるには、他にも補強材料がある。

まず、今回の調査で明らかになったA地区の1552流路に取りつく溝群の動向である。これらは流路から取水する農業用水路と考えられ、段丘直下の東除川氾濫原の耕作地の存在を示している。

それらの溝群は最古のものが5世紀代の可能性もあるが、流路内遺物で見れば古墳時代後期を中心とし、一番新しい溝の遺物は1600溝の陶器Ⅲ-2、飛鳥Ⅱ型式に限定できる須恵器杯蓋である。

流路も飛鳥Ⅱ型式期の遺物を最新のものとする洪水砂層により埋没、断絶し、河道が変更した事を示す。そして、それをもって溝群の復旧が途絶える。

つまり、流路とそこからの給水体系が崩壊するのとはほぼ同時期に、同じく古墳時代後期から続いてきた集落も断絶すると考える事もできるのである。

また、鍛冶関連の遺構・遺物、漆の付着した土器、硯、瓦、大型の木枠井戸、須恵質井戸枠の存在など、一般的な集落の遺物とは考えにくいものは全て奈良時代に位置づけられる状況である。

飛鳥時代までの農業を基盤とした集落と奈良時代の集落は性格まで断絶があると言える。

それでは、その断絶を踏まえて、集落変遷を再考するとどうなるかを次に考えていきたい。

3、新規検出の住居・建物を加えた状況（図121）

ここでは、今回の調査で検出された住居・建物を加えて全体を概観すると、どの様な状況になり、どんな問題が出てくるか見てみたい。

まず、北から見ていくと、7Cトレンチでは3棟の建物と一つの柵列が検出された。これらは、全て正方位を向き、柱穴は小型である事から、北側の建物s～wと同時期である可能性が高い。

建物s～wをⅠ群とし、建物Ⅳ～Ⅵ・柵列ⅡをⅡ群とすると、新たに検出された鍛冶遺構1395土坑の南、鉄滓と鞆の羽口の検出された1360溝がⅠ群の南端を画し、それを境にし、同じ大溝（溝1188・1378溝）を区画の東端としてⅡ群が隣接しているような状況になろう。Ⅱ群の方が建物は貧弱だが、地形的には高い。群の間の段差は後世の削平である。Ⅱ群の南端は方墳1009に画されるか。

14Bトレンチでは、建物Ⅺ・Ⅻが位置と方向から見て、8・11Bトレンチの建物l～oの群に含まれる。ただし建物Ⅻは柱穴は小さい。これをⅢ群とする。柵列Ⅲも延長ラインが建物Ⅺの中央を通る位置関係からここに含まれるか。この群も溝659・708など区画を示すような溝を持つ。

建物jと建物eの間に、建物Ⅶ～Ⅹを配すと、竪穴式住居を踏襲して建てられた建物f～hを囲んで弧状に並ぶ。前者をⅣ群、後者をⅤ群とする。

Ⅳ群はⅢ群・Ⅴ群の周辺にありながら、どちらの方位性にもものらないグループと言える。

次に、その南でほぼ方位を合わせて並ぶ建物 a～d の 4 棟をまとめてⅥ群としても良いだろう。

そこより南東側は建物を建てるのにはややきつすぎる斜面と、段丘崖手前で小段状に平坦になる部分に建物が散在しているが、グルーピングがしにくい配置である。

建物Ⅰ～Ⅲが今回確認されてから見直すと、ここには 2×2 間、総柱で平面形が正方形の建物が集中していると言える。それにはⅤ群の建物 h も含まれる。

今は、斜面に建つ建物 k・x・Ⅰ～ⅢをⅦ群、その下の小段の p・q・r・i をⅧ群としておく。ちなみにこの小段部分は、後の削平も若干あるが、基本的には南側の小開析谷の枝的に浸食された、自然地形の平坦面である。

竪穴式住居は住居Ⅰ・Ⅱの検出によって、方向性が大きく異なる住居と、小規模で長方形に近いものの存在が知られ、それまでの等質的な状況から認識が変わった。

住居Ⅰ・Ⅱとも、近くにカマド 1・2 があり、それらに伴う重複する住居があったと考えられる。住居Ⅰの状況からカマドが確認された住居の方が古いと思われる。カマド 1 に伴う住居は外形と思われる落ちの形から方向性が分かり、隣接する 2 B トレンチの住居群の方位性に近いが、微妙に異なる。

基本的に住居は斜面の方向に合わせて建てており、厳密な方向性の統一はないのではないだろうか。前回の調査でも住居 264・346 などがそれを示している。

4、集落変遷の仮説設定

(1) 飛鳥時代建物の抽出

住居 260・206・284 を踏襲して建物 f・g・h が建てられた状況が一つの定点になると考えられる。しかし、その建物の構成に一つ疑問が残る。

建物 g は 2×3 間で中に柱のない長方形、建物 f は 2×3 間総柱の長方形、建物 h は 2×2 間総柱の正方形の建物である。建物 h の形は通常、倉と考えられるものであろう。

するとこれは単なる竪穴式住居から掘立柱建物への転換ではなく、3 棟の住居が平地式住居・高床式住居・倉に、もしくは平地式住居 1 棟と倉 2 棟に変わったという事である。さらに延べ床面積で見れば、建物 g が住居 206 より大きくなったものの、計 60㎡ から計 47㎡ ほどに減少しており、その中で 10㎡ ほどの建物 h のみが倉だとしても、居住面積は半分近くに減っている事になる。

竪穴式住居 3 棟をそのまま 3 世帯と考え、その世帯数が減少していないと仮定すれば、2 世帯はこの範囲から外へ出ていると考えなくてはならない。それを集落全体で考えれば、1 世帯 1 棟の建物構成から 1 世帯複数棟の建物構成となり、結果として居住域の拡大があったと考えられる。

この立替えられた 3 棟をそれ以後の 1 世帯の単位の一例とし、唯一床面積が増加し、以前の 3 棟の竪穴式住居の内、住居 284 の床面積 (21.2㎡) に近い、建物 g (21.6㎡) が確実に中心的な住居とするなら、同じような規模で総柱ではない建物を中心とした小建物群が析出できないだろうか。

同構成として建物 d を中心に a・x が抽出でき、総柱建物が 1 棟のみ付随するものは、建物 p・q、建物 b を東西方向の総柱建物とすれば、それと建物 c の組み合わせが抽出できる。

他に建物Ⅸが総柱ではないが、それと e・Ⅶの組み合わせ、建物 j が総柱ではないが、それと建物Ⅹとの組み合わせ、建物Ⅱが総柱だが両庇が付くので住居とすれば、それと建物Ⅰ・Ⅲとの組み合わせなども候補にあげられるかも知れない。

時期的な変遷を考えず、以上のように分けていけば、他に B 地区の中では建物Ⅷ・r・i・k と、特

異なる一群としてⅢ群が残る事になる。

全体では、建物 a・d・x の内、群と方位性の異なる x を除外すれば、長方形の掘立柱平地式住居と長方形総柱建物の棟方向を直交させた 1 棟ずつの組み合わせが最小基本単位として抽出できる。

そして平地式住居の柱穴が大型である群を選ぶと、Ⅲ群は一括、建物 j・X をⅣ-1 群、Ⅸ・Ⅶ・e をⅣ-2 群、Ⅴ群は一括、a・d をⅥ-1 群、b・c をⅥ-2 群として、小群を抽出でき、これらを飛鳥時代の建物群と仮定したい。(図122)

Ⅵ群が接近しすぎて並立不可能な 2 小群に分かれる事と、小群としてのⅤ群が掘立柱建物へ転換した初めの時期に位置づけられる事を考え合わせると飛鳥時代の建物は 2 期に分かれる事になる。

Ⅴ・Ⅵ-1・Ⅳ-1 群を前期、Ⅲ・Ⅳ-2・Ⅵ-2 群を後期とすれば位置的なバランスも良く、飛鳥Ⅰ～Ⅲ型式の間の 30～70 年間ぐらい、平均 50 年間の時期の事とすれば妥当であろう。

(2) 古墳時代住居の変遷

遡って古墳時代住居の変遷を考えれば、住居 206・260・284 が一番新しい段階の竪穴式住居で、住居 205→204→284 と同じく 3 棟の切り合いがある住居 346→403→349 のうち一番新しい 349 も同じ時期と考えるのは妥当であろう。

この 2 例の 3 棟の切り合いと対応する関係を住居 206・260 に求めると、カマド 1 に伴う住居→住居Ⅰ→住居 260、カマド 2 に伴う住居→(住居Ⅱ)・住居 219→住居 206 となろうか。住居 264 は建物 x と方向を合わせず重複しているが、建物Ⅵ群と方向を合わせ、特に建物 a と南辺のラインが一致しているので、竪穴式住居では最新の時期のものかも知れない。

そうすると古墳時代の竪穴式住居は、最終段階で傾斜部分に極端に集中するように見える。そして竪穴式住居で最新の遺物と建物 f の遺物は共に陶器Ⅱ-5 の時期で、その後、再び居住域は拡大する。

ここで想像を飛躍すれば、建物を一斉に掘立柱に建て替える際、影響の少ない位置に住居をまとめて生活し、建て替えの済んだ順にそちらに引っ越していったのではないだろうか。そう考えるとこの動向は理解しやすいように思う。

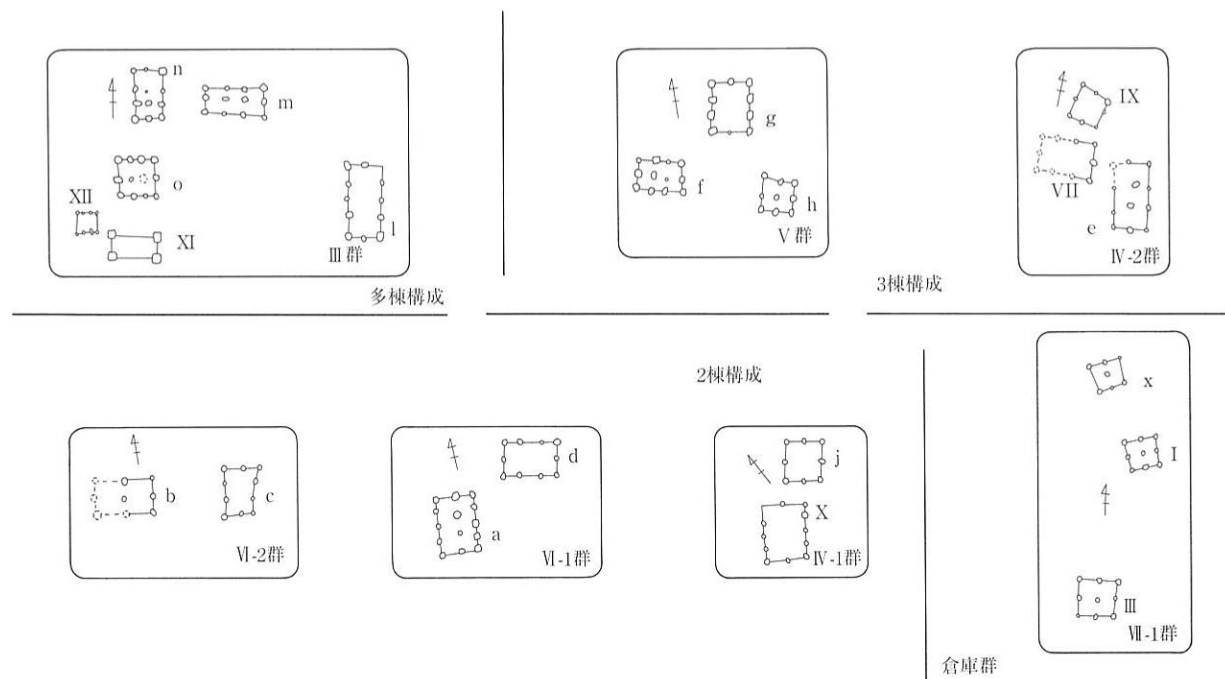


図122 推定飛鳥時代建物の小群抽出 (S=1/800)

大きな問題として残るのは、古墳時代に属する掘立柱建物、特に倉と考えられる総柱建物が特定できない事である。今回の調査でも掘立柱建物の柱穴と竪穴式住居の切り合いがある場合は全て建物の方が切っており、古墳時代の掘立柱建物は依然として確認されなかった。

Ⅶ・Ⅷ群の中の2×2間総柱建物の中に古墳時代のものが含まれている可能性はあるが、連続する飛鳥時代の集落が1世帯に1棟の倉を持つような状況と比べると、各時期3棟ほどの倉があっても良いはずだが、それには及ばない数である。

他に、未調査部分に倉の集中区があった可能性はあるが、それでも、数だけではなく、倉のありかたとして、古墳時代と飛鳥時代の間で、財産の集中管理から私有への社会的大変化があった事になる。

しかし、建物が認識されなかった柱穴がまだ多数存在している事や、古墳時代のものが一番破壊された率が高い事を考えれば、潜在的な可能性は充分にあるとも言える。

(3) 奈良時代建物の抽出

飛鳥時代集落から空白期をおいた奈良時代後半の集落に関しては、先ず、Ⅰ・Ⅱ群がそれに属するというのは妥当であろう。しかし、それより南側に問題が多い。

建物が分布する南側の小開析谷や段丘崖下に奈良時代の井戸がある事から、南側も奈良時代の集落域に属する事は確実で、井戸に伴う建物と考えられる建物iも奈良時代に確定出来る。

だが、Ⅶ・Ⅷ群の建物群は傾向がばらばらで分類の方向性が見えてこない。

2×2間総柱、正方形の建物が、Ⅰ・Ⅲ・q・r・x、柱穴が大型なのがⅠ・Ⅲ・k・r、正方位を向くのがⅢ・q・kである。

柱穴が大きいものを飛鳥時代と仮定し、強い削平を受けた建物xも本来は大型の柱穴であったと考え建物kは柱穴が大きくても不整形なので別とすれば、飛鳥時代は斜面の上半にⅤ群の建物hも含め同規格の倉が4棟並び、下の小段状部分には奈良時代になってから建物が建つと考える事もできる。

単なる仮定にすぎないがそれで良いとすると、B地区で奈良時代の建物の可能性が高いのは、建物Ⅷ・Ⅱ・k・i・p・q・rとなる。すると建物Ⅰ・Ⅱ群との間に大きな空地が存在する事になる。

しかし、屋上屋を重ねるのを恐れずに言えば、集落の中心が地形的に高い調査区南西外にあるとして、Ⅰ・Ⅱ群もⅧ群を中心とした部分もそこからやや突出した周縁部と考えれば矛盾はない。

だが、何故、古墳時代後期から飛鳥時代の集落の中心であった部分を空地として残しているのかは疑問として残ろう。削平により、消滅した建物があった可能性は残る。

なお、Ⅰ・Ⅱ群では建物の重複がないが、Ⅷ群では建物pとr、q自体、と2例の重複が見られるので、奈良時代集落も最低2時期が設定できる可能性がある。

5、建物周辺の遺構と集落範囲の推定

(1) 方墳

「河原城Ⅰ」では方形に溝が巡るものを方墳と推定し、4基を報告しているが、そのうち、方墳1257は隣接トレンチで続きがなく、むしろ落ち込み状に低い部分として検出され、方墳1258は直線的に続く段差である事が判明し、古墳の可能性は否定された。

方墳1009は一つの直角の角しか検出されておらず、北辺が現耕地区画と平行するのが不安材料で、さらに周溝に瓦器椀片が入っているのも問題である。

この部分が耕地化された時期は不明だが、近くに条里制地割りが存在している地域で、瓦器出現時ま

で耕地化されず周溝がオープンであったとは考えにくい。

しかし、完全に周溝が検出された方墳1171は古墳と確定できる材料もないが、否定する要素もない。古墳と仮定するなら、それは古墳時代後期から飛鳥時代の集落の存続時期の初めに近い頃に、集落に係わる溝の可能性の高い溝1188に平行して築造された事になり、奈良時代の集落で鍛冶工房が稼働している時点でも周溝は埋没していなかったという状況が考えられる。

(2) 建物Ⅰ群関連の遺構

建物Ⅰ群は他群と異なり、多様な遺構を伴う。この群を特色付ける、鍛冶炉の下部構造と思われる、焼土や炭の入った土坑群、この群の敷地の範囲を示す溝や落ち込みなどが知られる。

北側は東西方向の溝が何本も通り、古墳時代～奈良時代の遺物や鉄滓しか出土しないものも多いようだが、現耕地区画と平行するラインでもあるので、その全てを建物と同じ時期とは言えない。

しかし、建物wを落ち込み1240と挟みこむような形で止まる溝1147は、完全に同時期のものと言え、この建物群の敷地北辺を画するものと考えられる。

また、建物wはそれらの遺構との関係から、この敷地への門になる可能性を指摘できよう。

建物vは、落ち込み1240・1239、溝1221などに囲まれるように立地する。敷地の北西隅であり、建物内に鍛冶炉を持つのも特徴的である。

また、庇を落ち込み1240側に出すのは、落ち込み1240が、この建物での鍛冶の作業動線に入っている事を示すようで興味深い。

群全体では建物に囲まれた中庭状の部分があり、その中心から東の大溝に向かって排水路のような溝が伸びる。また、鍛冶炉遺構は敷地内の、やや低い南東部以外にまんべんなく分布するが、必ず溝や落ち込みの近くに位置しているのが特徴的である。

(3) 建物Ⅲ群周辺の遺構

建物Ⅲ群も敷地を画する溝として、溝659・708が報告されている。だが、溝708は建物群から北へ約14mも離れており、溝659は現耕地区画と方向性が似るので、確実なものとは言い切れない。

しかし、建物が「コ」の字配置である事と、南西端の建物XIが大きな柱穴4本のみの特異なもので、位置的に門の可能性も考えられる事から、明確な敷地を持っていた可能性は高いと思われる。

また、Ⅲ群の南側には古墳時代から奈良時代の遺物が出土し、方向性が現耕地区画とは関係性のない溝や、柱穴ではない土坑などが幾つか散在する。しかし、それらの性格は明らかではない。

(4) 井戸

今までのところ、中位段丘平坦面では、井戸は江戸時代以降のもののみで集落に伴うものはない。

南側の小開析谷が、古墳時代から奈良時代まで一貫して集落の水場であつたらしい。この谷は調査区よりさらに西側に伸びているのが痕跡として確認でき、集落の南端を画する地形として注目できる。

またこの谷と、その下の氾濫原に掘られた奈良時代の井戸が、立派な木杵を持っていたり、大型円筒埴輪を井戸杵に転用していたり、さらにその周辺で須恵質井戸杵の破片が出土するなど、一般集落では考えにくいものである事は注目されて良いだろう。

(5) 大溝の性格と古墳時代後期～飛鳥時代集落の範囲の推定 (図123)

5C・7C・6Cトレンチで各々溝1015・1378溝・溝1188として検出された溝である。

5Cトレンチでは北北東を指向しているが、6Cトレンチでは北東方向に向き、全体で見ると緩く弧を描いているのが分かる。

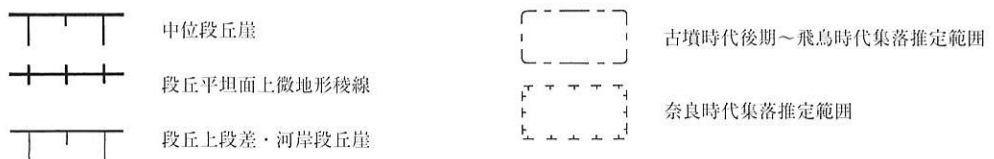


図123 周辺地形と集落推定範囲 (S=1/5000)

底面のレベルは南北もあまり変わりなく、実質的に無勾配といってよい。7Cトレンチ南半を中心にかなり粗い砂層が最大厚30cm以上で堆積し、それが溝の機能を停止させたようで、その後はその砂層を残したままブロック土で埋められる。

その砂層より下は場所によって厚さの違いはあるが、シルト層が何層も見られ、部分的に砂層も存在し、常時流水はないが、時々緩急のある水流があった事を示す。

前回の調査では最下層は古墳時代後期の遺物のみ出土したとされているが、今回は確実に最下層にも奈良時代の遺物が含まれていた。

しかし、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物もかなり大きな破片や個体が量的にも多く含まれ、それらの磨滅や風化の度合いも少ない状況は、この溝が、古墳時代後期に、集落の形成と共に掘削されたと考えないと理解しがたいものである。

また、そう考えるのは、この溝が集落範囲を画する溝の可能性が高いからでもある。

溝の延長を、調査区内で確認された弧状の形に沿って、外側に伸ばして見ると(図123)、北側は、調査区北端で検出された東西方向の流路を東に延長した想定ラインが、中位段丘崖へ抜ける付近にたどりつく。おそらくその付近は、現地形では確認されないが、小規模な開析谷が埋没していると思われる。

また、南側は調査区内で確認された小開析谷の西端に近い位置にくる。

すると、東は段丘崖より手前の段差まで、南北は小開析谷まで、西はこの大溝までと現状で考えられる古墳時代～飛鳥時代の集落の範囲を半月形に囲む溝となるのである。

また、埋土や底面レベルや、2mを越える溝の幅からもこの溝が用水路ではない事を示している。

用水路は、現在近くの中位段丘上を通る、狭山池からの幹線水路でさえ、幅1.5mであるように、水の分配のため、各場所で手軽に水位の調整がしやすい幅と深さが必要だからである。

では、このような大溝の必要性は何かと考えると、調査区外南西に、中位段丘平坦面でもやや高い地形が存在し、その稜線より北東の面に降った雨水は、ほとんどが集落に向かって流れてくると考えられる。溝埋土の砂層の存在は、時にはかなりの水量がこの部分に押し寄せる事を示していると言える。

つまり、段丘縁辺部に立地した集落にとって、段丘平坦面を集水域として段丘崖に向かって流れてくる雨水に対する対策が必要で、南北の開析谷に水を逃がす溝を掘削したと考えられる。

以上、大溝の性格を考える事により、古墳時代後期から飛鳥時代の集落の範囲も推定する事ができ、南北約160m東西約90mの規模であると考えられた。

すると、飛鳥時代の集落の中で突出した規模の建物群と捉えられる建物Ⅲ群が、集落推定範囲の南北長のほぼ中央の西側に立地している事になり、立地としても中心的な建物群である事が分かる。

また、調査範囲は、まだ集落の範囲の半分にも満たず、掘立柱建物への転換直前の住居の特定部分への密集等の動向が、集落内の他の部分でも、別の単位で存在した可能性を考えておく必要があるだろう。

なお、集落から見て、大溝の北西外側に、方墳が存在しているのも注目できるだろう。

(6) 奈良時代集落の範囲推定

奈良時代集落は、調査区内では北側の溝の西側と、南の小開析谷の北側周辺に広がっているのが知られる。その状況から集落の中心部は調査区より西側の段丘平坦面上にあると推測できる。

西側の範囲を推測する材料は少ないが、強いて考えれば、南西にあるやや高い微地形の稜線を越えて西に広がる可能性は薄いと思われる。

段丘平坦面は、多少の凹凸はあっても大阪湾から風をさえぎる高まりが全くない地形で、今でもしば

しばかなり強い風が吹く。そのような場所で、小高い所に軽い上部構造の建物を建てれば、被害は避けようもなく、立地としてはそういった所の風下に当たる部分を選ぶと思われるからである。

南は小開析谷より南側に範囲が広がる余地はあるが、現状では谷をその南端としておこう。

東は段丘崖直上の小段状の部分にまで範囲が広がっているが、その北側で、古い集落の中心部分に奈良時代の建物が確認されていない現状では、水場として井戸の掘られた開析谷にからんで集落中心部から突出した範囲であると考えるのが良さそうである。

北側は建物Ⅰ群の北側に東西に走る区画溝が集落の北端である可能性が強い。もしそこからさらに北に広がるとしても、調査区北端で検出された流路より南までであろう。

また、Ⅰ群は東が大溝と方墳に画され、そこが鉄滓の投棄の場の一つにもなっている事、西側も明らかに空闲地が存在している事から、Ⅱ群が集落中心の北東隅で、そこからⅠ群のみが北に突出している可能性が強いと思われる。火を使う鍛冶工房ゆえの立地だろうか。

この時期には大溝も方墳の周溝もまだ完全には埋没しておらず、充分意識され、利用されていたようである。しかし、集落の一部は大溝を越えて広がり、その本来の機能は失われていたのであろう。

以前の集落と同じく、この集落も西側に溝があった可能性はある。だがこの時期、段丘面上の耕地開発が進んでいたなら、その水路網により、自然な水の動きは抑制されていたであろう。

奈良時代集落は、直径120m前後の範囲で北と東に突出部が付く、南北約160m、東西約190mほどのものと推定できる。

6、変遷時期区分設定と各期の様相

(1) 時期区分設定と年代比定

これまで述べてきた通り、古墳時代が3期、飛鳥時代が2期、奈良時代が2期に分けられると考えられるが、奈良時代は重複する建物が少なく、その前後関係も不明であるので現状では1期にまとめる。

Ⅰ期は古墳時代に集落が成立した時期である。竪穴式住居から出土した土器は少なく、その上限は陶邑Ⅱ-3～4にしか遡りえないが、調査区全体での古墳時代土器の出土量を時期的に見ると、5世紀代のもものが少数あり、Ⅱ-1～2の時期にやや量が増え、圧倒的に量が増えるのはⅡ-3以降である。

集落自体の成立期は古墳時代後期初めにまで遡る可能性はあるが、調査区内の住居の最古のものは状況から陶邑Ⅱ-3のものを見て、6世紀後葉として良いだろう。

そこからⅡ-5までが3期に分かれるのでⅡ期を6世紀末葉、Ⅲ期を7世紀初頭としたい。

住居が掘立柱建物に転換するのをⅣ期とするが、先述した通り、この時期は実際はⅢ期とかなり重複する部分があると思われる。陶邑Ⅱ-5～Ⅲ-1、飛鳥Ⅰ型式期として7世紀初頭～前葉としたい。

Ⅴ期は古墳時代からの集落の最後の時期である。飛鳥Ⅱ型式期からⅢ型式期に入ったあたりまで、7世紀前葉から中葉と見る。

Ⅵ期は奈良時代集落の時期である。始まりは平城宮Ⅲ型式期として8世紀前葉頃と考えられる。終わりは判然としない部分もあるが、平城宮Ⅵ期以降、特に9世紀代の遺物が少ないので、平城宮Ⅴ型式期、8世紀後葉をこの時期としたい。

(2) 各期の様相

Ⅰ期（6世紀後葉）(図124)

住居205・346とカマド1・2に伴う住居がこの時期のものである。2mほどの距離で隣接する2棟

ずつが、14mほど間隔をあけて立地している様相である。

西側を囲む大溝も掘削されている。方墳はこの段階で存在していたかは微妙である。住居群より東の斜面で検出された須恵器甕利用の土器棺墓はこの時期のものか。

この密度で住居が建てられているとすると、集落全体で20棟を越える事はないと考えられる。12棟ぐらいであろうか。おそらく住居に作り付けのカマドを持つのが普遍的であろう。

南の小開析谷は水場として湧水が見られ、そこで祭祀も行われていた。東に見下ろす東除川の氾濫原では河川に作った堰から水が引かれ耕作地が広がっていたであろう。西の段丘平坦面は荒れ野で、近くで郡戸遺跡内の小方墳からなる古墳群が草に埋もれかかっていたはずである。

Ⅱ期（6世紀末葉）（図124）

住居Ⅰ・219・204・403がある。住居Ⅱもおそらくこの時期のものであろう。基本的に住居Ⅰと219、住居204と403が近く、他とは距離があくのはⅠ期と変わらない。

方墳1171はこの時期にはもう存在していたであろう。耕作地は洪水の被害を受けた水路を復旧しつつ維持されている。

もし、南東斜面の倉庫群である建物Ⅶ-1群（x・Ⅰ・Ⅱ）が古墳時代の倉であるなら、この頃に存在していたと思われる。

Ⅲ期（7世紀初頭）（図125）

住居206・260・284・264・349がある。住居264が11mほどとやや離れるが、他の4棟は5mほどの間隔で密集する。

推定集落範囲と、この住居の密集した地点の関係を見ると、集落内に同じような地点が他に2ヶ所ぐらいあってもおかしくないように思える。ならば4～5棟×3=12～15棟がこの時期の住居総数か。

Ⅳ期（7世紀初頭～前葉）（図125）

竪穴式住居が掘立柱建物に転換する時期で、時代も古墳時代から飛鳥時代へ移る。

建物Ⅴ群（f・g・h）・Ⅳ-1群（j・X）・Ⅵ-1群（a・d）がある。実際はⅤ群以外の建物はⅢ期の住居が存続している段階で建築が進んでいた可能性が高い。

また、建物Ⅶ-2群（x・Ⅰ・Ⅲ）が飛鳥時代なら、他の建物と距離を置く、この時期であろう。

集落推定範囲の1/5ほどの範囲で7棟の建物があり、全体の棟数は爆発的に増えたと言えるが、世帯と思われる小群の数でいえば15世帯となり、人口はさほど増加していないと思われる。

村の様相が変わっても東の氾濫原の耕作地は維持されている。

総柱建物を全て倉と見て良いのなら、この時期から集落内の動産の中に各世帯の私有的管理のもとに置かれるものが出てきたと言える。それと共に、前段階までせいぜい住居の多少の規模の差程度しか見られなかったものが、建物3棟で構成される小群と2棟の小群があるように、格差が顕在化してくる。

Ⅴ期（7世紀前葉～中葉）（図126）

建物Ⅲ群（l・m・n・o・Ⅺ・Ⅻ）・Ⅳ-2群（e・Ⅶ・Ⅸ）・Ⅵ-2群（b・c）がある。

この時期では建物Ⅲ群の存在が特筆できる。Ⅳ期に顕在化してきた各世帯間格差の一つの到達点とも言え、かなり明確な差としての棟数・建物配置・専有面積・集落内での位置などから、村落首長の居住域である可能性もあると思われる。

しかし、この時期東除川で大規模な洪水があり、河道が移動し、これまで維持されてきた灌漑水路の体系も復旧されなくなる。氾濫原において耕地自体が全面的に廃絶したかは知られないが、少なくとも

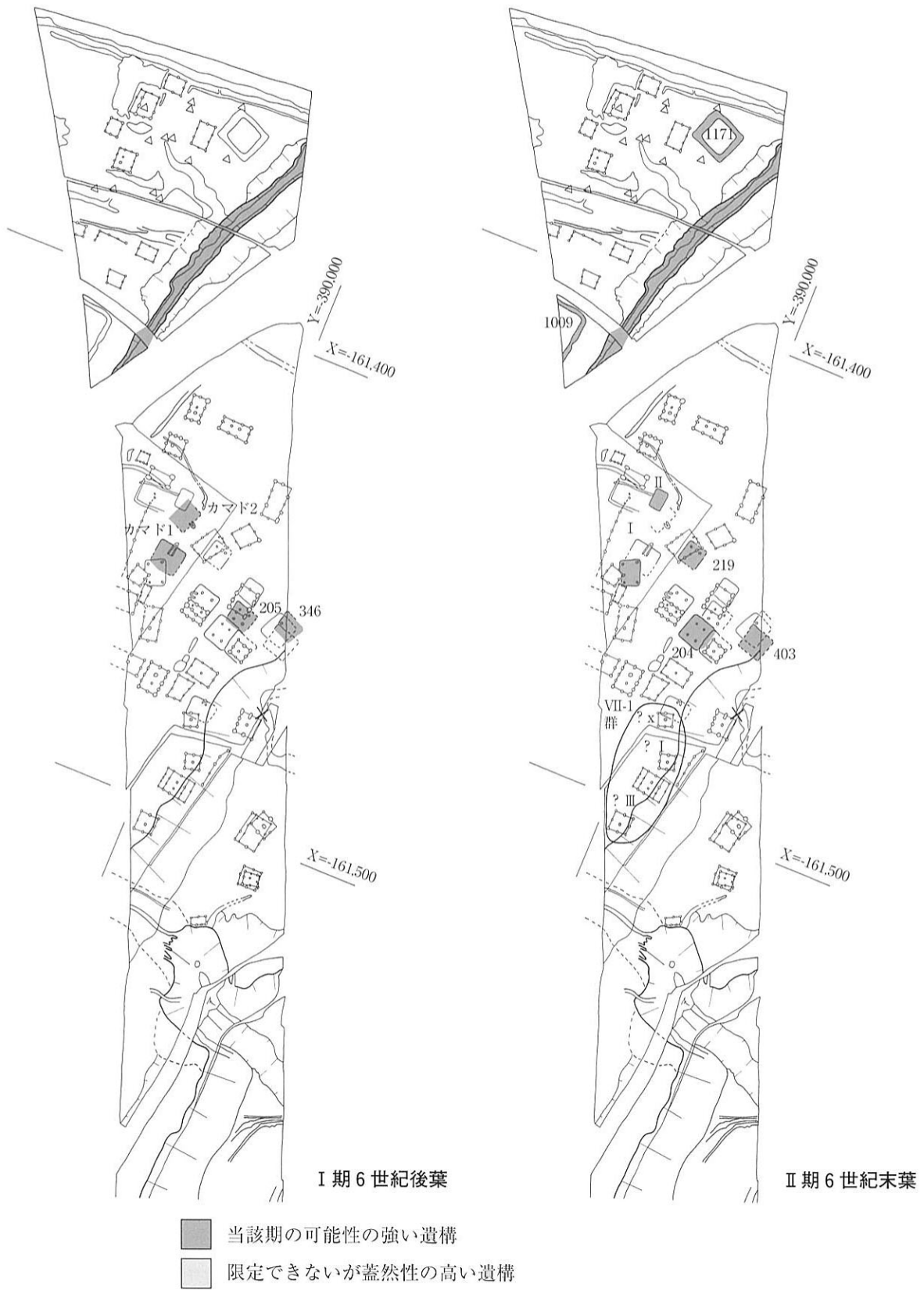


図124 集落変遷模式図（その1）（S=1/1250）

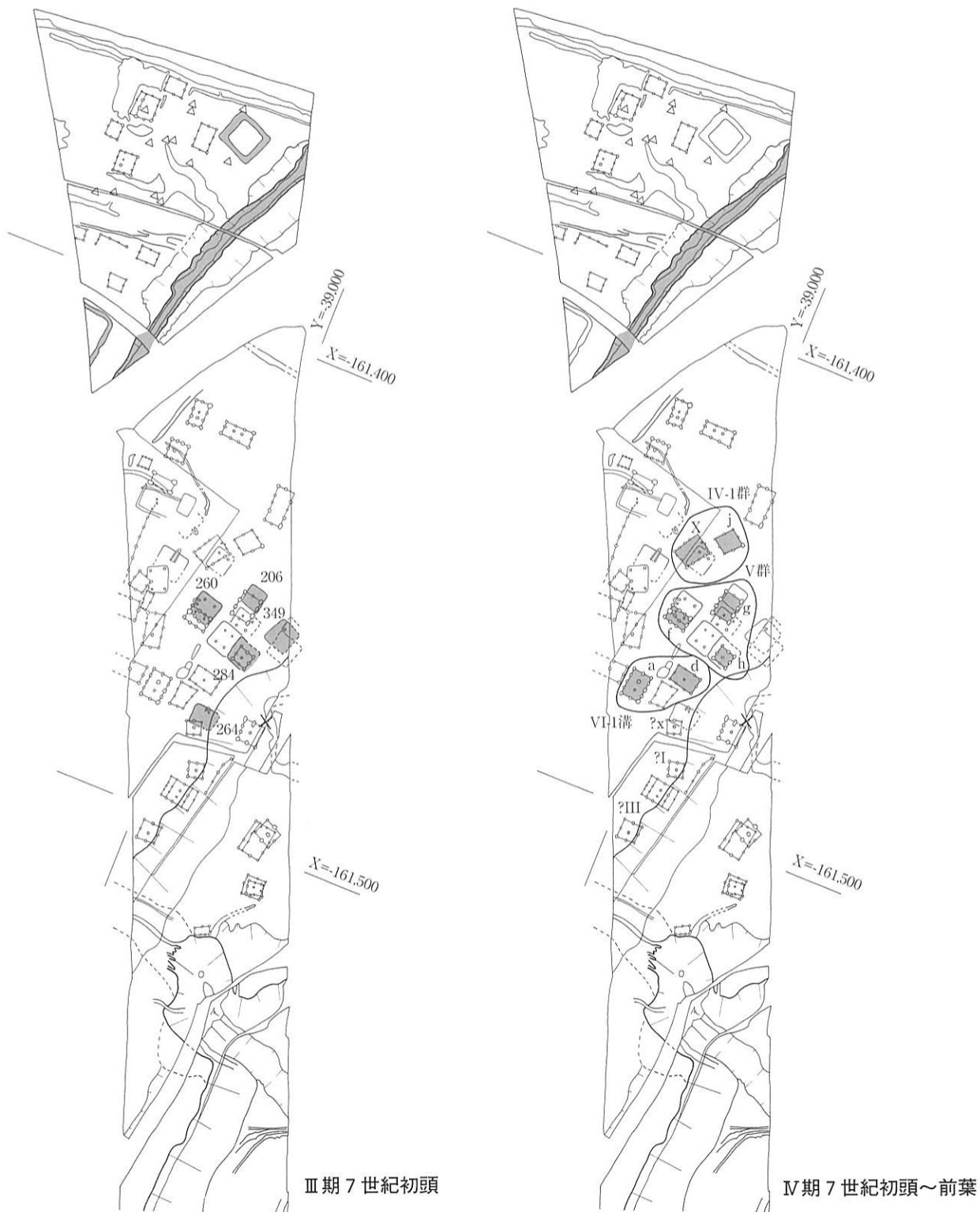


図125 集落変遷模式図（その2）（S=1/1250）

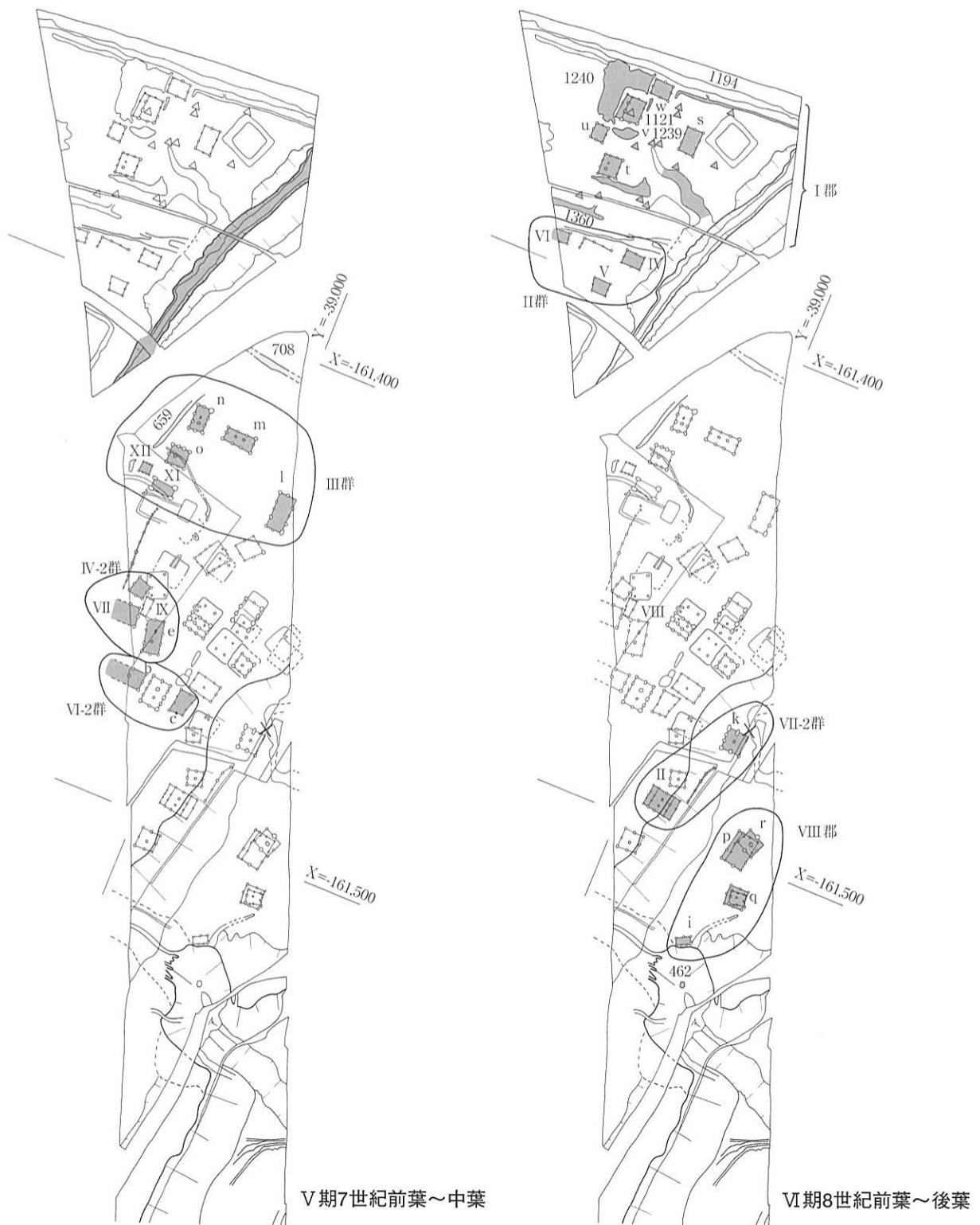


図126 集落変遷模式図 (その3) (S=1/1250)

集落に一番近い位置にあった堰がその位置では復旧できなくなったのは間違いない。

そしてそれを契機とするようにこの集落も廃絶するのである。

Ⅵ期（8世紀前葉～後葉）（図126）

空白期において、調査区内に再び集落が成立し、存続する時期である。

建物Ⅰ群（s・t・u・v・w）・Ⅱ群（Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ）・Ⅶ-2群（k・Ⅱ）・Ⅷ群（p・q・r・i）があり、他に建物Ⅷもこの時期の可能性がある。

以前の集落とは立地や構成だけでなく、その性格も異なると考えられる。

東除川氾濫原には埴輪転用の井戸以外この時期の遺構はなく、包含層に若干の遺物を含むのみだが、段丘上から段丘崖の斜面堆積層までの土器の総数はそれ以前をかなり上回る量である。

少なくとも鍛冶と漆の工人がおり、識字層が存在したのもほぼ間違いない。また、おそらく寺院から廃棄された瓦を持ち込んでおり、特異な須恵質井戸枠の存在も知られる。

以前の、耕作地を基盤とした集落とは異なり、工人を抱え、寺院や権力層と特別な関係を持った集落であったと考えられる。

この頃には集落の南西から西にかけて丹比廃寺と黒山廃寺の伽藍が並び建つのが望まれたであろう。

その手前には丹比神社の杜がひかえる。周囲の段丘平坦面上は狭山池からの灌漑水路が引かれ耕地開発され、部分的には条里制地割りも見られたかもしれない。

7、集落変遷の背景に関して

（1）古墳時代後期～飛鳥時代集落

この集落の成立の契機は、良く分からない。ただ、集落の廃絶の状況と、調査区内で集落成立以前の古墳時代中期後半～後期前半の土器が若干見られ、それが特に南東側の東除川氾濫原の部分に多いというのが示唆的である。

つまり、東除川の氾濫原を耕作地として段丘縁辺部に立地する同じような集落が、以前から付近に存在していた可能性が考えられるのである。その集落は耕作地の水利体系を管理しやすい位置に立地し、この集落の廃絶時のように、洪水による河道の変更など、その水利体系の復旧が不可能になった際に、新たな適地を求めてここに小規模な移動をしたのではないだろうか。

5世紀後半～6世紀前半は、この中位段丘平坦面には、集落がほとんど見られないのかかわらず、黒姫山古墳⁴⁾を端緒として、その回りに古墳群が形成される他、その衛星のように、郡戸遺跡⁵⁾、丹上遺跡⁶⁾などに小規模な方墳による古墳群が形成される。

6世紀の、円墳主体の群集墳に先立って、主に大阪府・奈良県に形成される方墳主体の初期群集墳は、大和政権を支える、大王権力に直属性の強い集団の墓地と考えられる。

この地域がそのような集団の根拠地となり、可耕地の少なから墓域に選定されたのがそれらの古墳群の形成であるなら、同時にその地域の中で耕作可能な部分を開発する努力も、同じ集団の元で行われたと考えられる。その開発に関わる集落の一時期の姿が、この集落ではないかと考えたい。

しかし、集落はここにあった時期にひとつの大きな変化を受けたと言える。それが竪穴式住居から掘立柱建物への転換に始まる、集落内での倉を持つ複数棟小群の成立と、その格差の拡大である。

この変化は、大阪府で見れば高石市大園遺跡⁷⁾に見られるように古墳時代後期に達成された集落もあるが、それはほとんどが大規模な拠点的な集落か、堺市伏尾遺跡⁸⁾のような、古墳の被葬者となるような

上位階層が集住している集落である。

古墳時代の、特に中～後期に新たに成立してくる小規模な集落は、集落内の格差が明確でなく、倉と考えられる建物が特定の住居に付随する配置を取らないものがほとんどである。

また、明らかに、村落共同体の自然な分村などで成立したとは考えられない集落も多い。

例えば須恵器工人の集落と考えられる堺市小阪遺跡⁹⁾では、カマドを持つ2本柱の住居と中央の炉しか持たない4本柱の住居が併存し、出土する須恵器には、製作技術の高い初期須恵器と須恵器製作技術を逸脱した稚拙な作りの須恵器が混在していて、異なる出自の者が小集落に集まっているのが分かる。

また、柏原市大泉遺跡¹⁰⁾や高槻市新池遺跡¹¹⁾のように、鉄器生産や埴輪生産のような特定産業のため成立した集落や、豊中市蛍池東遺跡¹²⁾の5世紀代集落のように大型倉庫群の跡地に成立するものもある。

つまり、支配者階層が、ある目的のため、権力により、支配下の人々を動員して集落を作るといって、一種の植民的な政策が、この時期既に存在しており、それ故に、そういった小集落は未分化で均質的であり、動産・不動産も共同管理の性格が強く、私有財産は強く規制されていたと考えられる。

しかし、そういった集落も、ある程度の期間存続していくと、共同体としての自律性を高め、外からの規制力を弱めようとする傾向を持つ。そしてなんらかのきっかけがあれば、均質で単純な共同体社会から、より複雑な社会へと拡大・発展しようとする。

この河原城遺跡の集落で、そのきっかけとして表出した掘立柱建物への転換という事態が、いかなるより広い地域での動向を背景としているのかは簡単には決しがたい。

しかし、先述した黒姫山古墳を中心とした古墳群の分布が6世紀後半には新たな発展が見られず、東除川対岸に河原城六つ塚古墳¹³⁾が成立し、7世紀初頭には平尾遺跡¹⁴⁾が成立する。その動向と無関係ではないとの若林の指摘は納得できるものである。

この多治比地域でも、古墳時代から飛鳥時代へ、支配形態の再編がなされ、丹比連という「氏」集団が浮上すると共に、丹比道といった交通路の官道化が進行し、河原城遺跡の集落も、前代から続く自律的な集落としての地位向上と共に、新時代の集落として形を整える必要も生じたのだろうか。

西に隣接する郡戸遺跡・丹上遺跡・真福寺遺跡¹⁵⁾にまたがる範囲で、飛鳥Ⅱ型式期頃の短期間だけ、官衙的規模と配置を持った建物群が存在するのも、その動向と関連しよう。

そして、財産のあからさまな私有が可能になった結果、動産が倉として、不動産が建物小群とその占める敷地として、考古学的遺構に表出したと思われる。

その状況の中で財産の不均衡が進行し、それが、階層的分化をも進行させる。その頂点にあったのはおそらく集落首長で、その首長が最終的に集落変遷Ⅴ期の建物群Ⅲのような突出した居住域を獲得したものと考える。

このような状況は、同じ時期、いたる所で進行したであろう。そして一般的な集落の首長が、共同体の代表者から上昇し、やがて支配階層の末端に加わっていく事態は、これ以降も歴史の中で繰り返し起こっていったと考えられる。

7世紀前半代でこの集落が廃絶するのは、集落内の集団の消滅を意味するものではないと考える。

おそらく、河道の移動によって復旧不可能になった取水地点を放棄し、新たな河道で取水・灌漑の効率が良く、管理のため近くの段丘上に集落の築ける地点を探し、移動したのであろう。遺物の多寡はあるが、氾濫原の最新の溝の出土遺物が飛鳥Ⅱ型式期なのに対し、集落自体は飛鳥Ⅲ型式期まで存続していた可能性が強いのも、その移動期間が反映しているのかも知れない。

一つの問題は、この集落があくまで、東除川の氾濫原の耕作地を基盤としていたらしい事である。

7世紀と言えば、その初頭には狭山池¹⁶⁾が築造されていると考えられる。そしてこの東除川と西除川の間の中位段丘は、現在まで、その灌漑範囲の代表と言ってもよい地域である。

築造当初の狭山池は、堤防の高さが低く、中位段丘上までは灌漑できなかったという説¹⁷⁾と、樋の位置が問題で、中位段丘でも樋の位置より標高が低い位置なら灌漑できたとする説¹⁸⁾がある。

河原城遺跡付近の中位段丘平坦面も、築造当初の狭山池の樋門より低い標高で、理論上は灌漑可能な場所である。

もし、集落の存続時期にその周囲の中位段丘面に灌漑網が整備され可耕地となっていて、その耕地開発にこの集落が関与していたなら、氾濫原の洪水の被害によって集落の位置を変える必要性は低くなっていたはずである。少なくともこの集落には狭山池築造の影響は及んでいなかったようである。

しかし、これによって単純に、築造当初の狭山池が中位段丘上も灌漑範囲としていた説を否定できるものではない。灌漑体系の開発は、池の築造と併行しても行われたであろうが、その灌漑可能範囲全域に水路が整うにはかなりの時間と、現地での試行錯誤が必要だろう。また、安定的な灌漑には、段丘上にも溜め池を築造する必要があるだろう。まず、集落周辺地域の狭山池による灌漑体系の完成が、集落廃絶までに間に合わなかった可能性も考えられる。

その他、この集落が新たに創設された水利体系の権利関係の中に参加出来なかった可能性もある。

狭山池の築造は国家規模の開発であり、かなりの労働力が投入されたであろう。そしてそれにより創設された可耕地の耕地化にも大量の人員を新たに投入する必要がある。政策的な効率を考えれば労働力として投入した集団を、そのまま、新たな耕地の開発、維持のために、また築造事業の代償としても、その地に植民していくのが一番簡単で支配者層からも把握しやすい。

そうした集団は、築造事業時点から組織化され、灌漑体系の維持管理からも強い紐帯を持った集団となるが、そうした時点ですでに前代から成立していて、新たな灌漑範囲以外に集落を維持する耕地を持ちえていた、この集落が、その水利権に参加できなかった可能性は充分考えられるであろう。

この集落の動向からは狭山池築造当初からの中位段丘上の灌漑の可否は問えない。それは段丘上で7世紀前半代に成立する、一般的な農耕集落と思われる小規模な集落が、どの程度存在するかが明らかになるまで保留されるべき問題であろう。

(2) 奈良時代集落

集落の始まる時期を厳密に考えると、その下限が平城宮Ⅲ型式期の中にあるという事で、上限は廻りえる遺物が若干はあり、平城宮Ⅱ型式期に入る可能性もある。

それまで、先の集落が廃絶して以降、周辺の遺跡でも動向の良く分からない時期がある。

先述の郡戸遺跡から西に広がる建物群も、飛鳥Ⅲ型式期までしか継続しないようで、それ以降、丹上遺跡で条里制に先行するような溝群が見られる程度の状況になる。東除川から西除川の間は、その期間、ただ平尾遺跡の集落のみが存続するような状況になる。

この地域が再び活況を呈するのは、飛鳥Ⅴ型式期から平城宮Ⅰ型式期である。丹上遺跡の北側、丹比道に比定される竹之内街道の南に接するような位置に、方形に建物が並び、その周囲を柵列が囲い、その西側に倉庫群のある建物群が成立する。

南西側の太井遺跡¹⁹⁾でも正方位を向く立派な建物群が成立する。

そして、この時期に南側に丹比廃寺²⁰⁾が創建されると思われる。黒山廃寺²¹⁾もそれと前後して創建さ

れた可能性が高い。

そして平城宮Ⅱ型式期になると、丹上遺跡の建物群は竹之内街道の北側に当たる観音寺遺跡²²⁾の範囲にも拡大し、太井遺跡の建物群には鑄造工房が付随するようになる。

これらの動向を受けるように、河原城遺跡の奈良時代集落も成立すると見てよいだろう。

その背景を考える上で参考になるのは、この集落が、丹比廃寺と同范の瓦、黒山廃寺と同タイプの瓦を持つ事と、太井遺跡の状況である。

太井遺跡は、丹比廃寺と同時期の建物群の成立から一時期遅れて鑄造工房が成立する。工房の成立は河原城遺跡の集落とあまり変わらない時期である。そして、二つの遺跡を丹比・黒山二つの廃寺を中心に見ると、西と北にほぼ同じような距離にある。

つまり、寺院創建時に動員した工人を、その後も寺院の維持・管理のために近くに集落を形成させて定着させた可能性が考えられる。太井遺跡では、豪族の館か、官衙的な規模の建物が検出されたが、河原城遺跡も集落推定範囲の中心部にそのような建物群が存在していた可能性もあろう。

太井遺跡では鑄造遺構と共に和銅開珎も出土しており、『太井遺跡』の報告書の中で江浦洋が初代鑄銭司長官多治比真人三宅麻呂との関係を指摘しているが²³⁾、まさしく、大阪市細工谷遺跡²⁴⁾で、百済王氏の根拠地内に、氏寺と、隣接して鑄銭も行う鑄造工房の存在が確認された事例と、有力「氏」集団が、自らの根拠地の中に半公半私の形で寺院と、それを維持する工人を抱え、かつ、公的な貨幣鑄造までを行っていた状況が共通すると言える。

同じ時期に、北側で丹比道をはさんで丹上遺跡と観音寺遺跡に展開する建物群は官道に関わる官衙的建物であろう。観音寺遺跡でも和銅開珎が出土しているのが注目できる。

太井遺跡の建物群を豪族の館と見て、それが河原城遺跡にも存在した可能性がある事を考えると、同時期にも存続している平尾遺跡との関係が注目される。

二つの寺院に加え、黒山廃寺の東隣には、今でも丹比神社が存在し、その地域を囲むように位置するこの3集落が、同氏族の支配下にあるのか、擬制的な「氏」集団を形成していたのか、それとも全く異なる「氏」集団なのか、この地域は、丹比連と多治比真人という二つの「氏」が古代に根拠地としていた事が知られているが、丹比連氏が古くからの在地の勢力で、多治比真人氏が新しくそこに定着した氏であるとされている。

吉田晶²⁵⁾は、黒姫山古墳などを造営したのが丹比連の系統で、平尾遺跡が多治比真人氏の館と考え、丹比廃寺、丹比神社も多治比真人氏のものだとしている。

しかし、先述のとおり、黒姫山古墳を中心とした古墳群の形成は6世紀前半頃で終わり、その後の動向は定かでない。また、太井遺跡は黒姫山古墳を含む範囲に広がる。加えて、丹比神社の主祭神は多治比真人の氏神である瑞齒別命であるが、祭神の中には丹比連の氏神である火明命も祭られている。

そこから見ると、この地域の奈良時代の集落と寺院などの状況は、丹比連氏と多治比真人氏という、別の「氏」が並立しているとは思えないような状況である。また、古墳造営から平尾遺跡の出現までの断絶があり、しかし、その中で、一般的な集落である河原城遺跡の古墳時代～飛鳥時代の集落は継続するという複雑な状況を示す。単純に文献史学と接合するにはまだ、問題が多いと言えよう。

その後、丹上・太井の建物群は大体平城宮Ⅲ型式期までしか継続しないようである。そして観音寺遺跡・平尾遺跡の建物群も平城宮Ⅳ型式期までで終息する。河原城遺跡の集落もそれより若干後続するようだが、平城宮Ⅴ型式には廃絶するようだ。そして各遺跡とも、集落が再び見られるようになるのは平

安時代に入って以後の事である。二つの寺院も 8 世紀後半以降の状況は明らかでない。

8 世紀前半に、濃密で整然とした小地域社会が形成された状況が、奈良時代の終わりを待たずに崩壊していきと言え、河原城遺跡の集落もその中で捉えられると考えられる。

この状況は先の吉田晶が、天平宝字元年（757年）に多治比真人一族が橘奈良麻呂の乱に連座して壊滅的打撃を受けた事を指摘しており、興味深い。

8、おわりに

今回、河原城遺跡の集落の変遷について、その存続時期に空白期が存在する事に注目し、『河原城遺跡 I』の若林の論旨の見直しも含め、再考してみた。

ここで再び述べておくが、前回の若林の作業は方法論としては正攻法であり、全く異論がない。しかし、今回はあえて視点を変えてみて、掘立柱建物の構造の違いも視野に入れ、建物の群・小群を抽出してから変遷を考えるという方法をとった。

結果としては、個々の建物がどの時期に入るかは別として、大筋の流れは同じようになったと思えるが、やはり、時期設定の差により、見えてくる問題にも違うものがあつたと言える。

今回は古墳時代後期～飛鳥時代集落と奈良時代集落が空白期の設定によって、その性格の違いも際立って見えるほか、飛鳥時代の掘立柱建物への変化が、単純な変化ではなく、集落内の社会状況の変化を伴うものであると指摘できたのが成果として大きいと思われる。

そしてその変化の背景を考えていくとある程度地域社会の変化も考えられたように思う。

古代の多治比・丹比地域の範囲は時期によって変化したと思われるが、今回対象とした、東除川と西除川の間で、観音寺遺跡から平尾遺跡までの範囲が一つの中心であつた事は間違いあるまい。

その中で見ていくとこの地域の中心的な集団の動向は、古墳時代中期から後期に黒姫山古墳を端緒として小方墳群など墓だけを形成し支配階層の集落は進出しない段階、飛鳥時代の平尾遺跡という支配階層の集落を形成する段階、奈良時代の寺院を中心に館のような建物群が取り囲むように立地し、それに工人集団が付随する段階、と変化していると言える。

その動向の下で、農業基盤の集団や、工人集団が、規制を強く受けたり、自立性を強めたりしながら自らの社会も分化、展開していく姿を、この河原城遺跡の集落で捉えられたのではないかと思う。

古墳群・豪族居館・拠点集落などの研究は今まで一定の進展を見てきて、それにより古代社会の状況がより具体的に見えてきた事は確かだが、小規模な集落や、なんの変哲もないように見える集落に対しても同じように研究を進めていかなければ、社会の一番基礎的な部分の実態を見落とす事になるのではないかというのが、実感される調査でもあつた。

註・引用文献

- 1) 「河原城遺跡の集落変遷と古代地域社会」若林邦彦
『河原城遺跡 I』大阪府文化財調査研究センター 2000年
- 2) 『陶邑Ⅲ』大阪文化財センター 1978年
- 3) 『古代の土器 1 都城の土器集成』古代の土器研究会 1992年
- 4) 『河内黒姫山古墳の研究』末永雅雄・森浩一 大阪府教育委員会 1953年
- 5) 2001年度、大阪府文化財調査研究センターが調査。2002年報告書刊行予定

- 6) 『丹上遺跡』大阪府文化財調査研究センター 1998年
- 7) 「大園遺跡における集落の展開」広瀬和雄
『大園遺跡発掘調査概要Ⅶ』大阪府教育委員会 1982年
- 8) 『陶邑・伏尾遺跡』大阪府埋蔵文化財協会 1998年
- 9) 「初期須恵器製作集団と韓式系土器」三宮昌弘
『韓式系土器研究Ⅱ』韓式系土器研究会 1989年
- 10) 『古代を考える53 柏原市所在の製鉄関連遺跡』古代を考える会 1991年
- 11) 『新池』高槻市教育委員会 1993年
- 12) 『宮の前遺跡・蛍池東遺跡・蛍池遺跡・蛍池西遺跡』大阪文化財センター 1994年
- 13) 『羽曳野市史 第三巻 資料編1』羽曳野市 1994年
- 14) 『古代を考える2 平尾遺跡の検討』古代を考える会 1976年
- 15) (5)に同じ
- 16) 『大阪府立狭山池博物館常設展示案内』大阪府立狭山池博物館 2001年
- 17) 「発掘成果から見た各時代の狭山池」市川秀之
『狭山池 埋蔵文化財編』狭山池調査事務所1998年
- 18) (6)の「遺跡周辺の地形と歴史的環境」阪田育功
- 19) 『太井遺跡』大阪府文化財調査研究センター 1996年
- 20) 『藤井寺市及びその周辺の古代寺院(下)』藤井寺市教育委員会 1987年
- 21) 同上
- 22) 『観音寺遺跡』大阪府文化財調査研究センター 1998年
- 23) (19)の「総括」江浦洋
- 24) 『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』大阪市文化財協会 1999年
- 25) 「文献から見た古代の豪族」吉田晶
『第5回歴史の華ひらく泉南シンポジウム 古代の豪族』泉南市教育委員会 1992年

河原城遺跡出土石器群における「場の機能・性格」

—接合資料5を具体例に—

山内 基樹

1. はじめに

河原城遺跡2 Aトレンチでは、石器遺物が集中して出土する石器集中部が2ヶ所で検出された。石器集中部は石器遺物の分布密度が極端に高い密集部と、分布密度がやや疎に分布する散漫部で構成する。密集部と散漫部において石器遺物が密接な接合関係にあることから、これらを1つの石器集中部として認定したわけである。

これらの分布は何を示しているか。河原城遺跡出土石器群は、どのような人間活動の結果として形成されたのであろうか。ここでは、その分布傾向をみることによって河原城遺跡出土石器群の形成過程、いわば石器集中部の「場の機能」について考えてみたい。同時に原石から石材が消費されていく過程を窺うことのできる接合資料5を具体例に、「場の性格」についても考えていく¹⁾。

2. 「場の機能」としての石器集中部

石器集中部は、人間が意図をもって石を打割し、その痕跡が遺存した結果のものとしてあらわれる。そこで問題とされるものの一つに、その状況が遺棄されたものなのか、廃棄されたものなのか、ということがある。すなわち、石器集中部が検出されたその場において、剥片剥離作業が行われていたのか、あるいは打割したものを別所へ捨てたのか、ということである。このことを検証する手段として、石器集中部における石器遺物の分布状況の分析があげられる。その中には、石器製作実験において飛び散った剥片を詳細に観察して、さまざまな状況での分布をもとに、石器集中部の形成過程を理解する方法を論ずるものもある²⁾。

河原城遺跡の石器集中部は、密集部で出土総数に対してほとんどの剥片、微細剥片が分布する。一方で石核は密集部と散漫部に平均してみられ、さまざまな飛散実験の結果とは分布を異にしている。そこで接合資料を構成する石器遺物の分布をみてみると、構成資料に石核を含む接合資料において、剥片は主に密集部から出土するのに対し、石核はそれらと多少位置が離れて出土する（接合資料4、5、7、11、13など）。なかでも、接合資料4、7は、石核に垂直割れが生じ、そのことが原因で作業を終えたと思われるものであるが、垂直割れによって半截した石核同士が近接して出土しているという特徴をもつ。密集部において剥片剥離作業を行い、半截した残核のみ位置を離し、なおかつそれらを揃えて捨てることは通常考えにくく、石核だけが距離をおいて出土する接合資料5などにおいても同様であろう。

阿子島香氏は、石器製作に伴う剥片の飛散実験とともに、廃棄した場合の分布を観察している。投棄方法や状況によって分布は変化するが、概して軽量の資料は分布の中心に対して手前側に分布するという。しかし先ほどの接合資料4、7のように半截した石核が近接した状態で出土することの説明はできない。むしろこの状況は、その場において剥片剥離作業を行い、石核が半截したことによって作業を終え、そのまま遺棄したものとみることのほうが、より自然な結果であるといえる。そして、これらの石核と密集部から出土する剥片が密接な接合関係にあることから、密集部は剥片剥離作業の結果に生じた剥片、微細剥片を廃棄した状況として捉えることができよう。

また、接合資料6は、両極打法にともなって生じた破碎剥片が、多く接合する資料である。構成資料のほとんどが石核を中心に近接して分布することに、他資料と異なる特徴がある。他の接合資料を構成

する剥片が密集部に分布する中で、接合資料6は両極打法によって飛散した剥片の状況を保っているといえよう。剥片剥離作業の「場」を厳密に示すことはできないが、少なくとも接合資料4、6、7に関しては、石核が出土したごく付近において剥片剥離作業が行われていたと推測できるであろう。

つまり、河原城遺跡出土の石器集中部の「場の機能」は、接合資料4、6、7に特徴的にみられるように剥片剥離作業としての機能と、密集部にみられるように廃棄場としての機能とが、セットとなって検出されたものといえるのである。

3. 「場の性格」としての石器集中部

はじめに 前項では石器遺物の分布から、石器集中部における密集部は、剥片剥離作業で生じた剥片を廃棄したことによって形成されたものと理解した。あわせて石器集中部そのものは、剥片剥離作業を行う「場」と、廃棄した「場」とが組み合わせられて検出されたものであるとした。

密集部を廃棄の場とした時、その場を構成する石器遺物は、剥片剥離時の様相を残しているのではなく、あくまで廃棄時の様相を残しているものである。すなわち、密集部の石器遺物は廃棄されるべきものとしてそこにある。ここで考えなければならないのは、廃棄された石器遺物にみられる特徴であろう。

石器遺物は、どのような属性をもつがゆえに廃棄されたのか、ということである。先述のように、河原城遺跡における石器集中部は、剥片剥離状況と廃棄状況が密接に関係する資料といえる。そのことを転じて言えば、廃棄の場である密集部を構成する石器遺物の属性を抽出することによって、剥片剥離作業において何が目的とされたのかについて迫ることが可能であると考えられる。

接合資料5にみられる石材消費過程 さて、先述した前提をふまえて、接合資料5を具体例に、石材消費過程を検討する。なお、事実報告においては、母岩分類を行わなかったことによる不安要素について言及したが、接合資料5のもつ自然面は、他のそれに対して視覚的に差別化が可能な特徴をもつ。微細な剥離痕についての遺漏は存在するであろうものの、当資料に至っては、接合の完成度は高いといえる。

接合資料5は、いくつかの欠落が存在するものの、ほとんど原石まで復元が可能な資料であり、一原石から剥片が剥離されていく消費過程を推定し得るものである。詳細は事実報告に譲るとして、剥離状況を観察すると、消費過程のなかには意図を同じくすると思われる剥離がいくつか認められる。それらは以下のように分けられよう。

- ・背面に階段状もしくは蝶番状剥離痕を取り込む剥片
5-5、5-7、5-14、5-18が該当する。
- ・剥離の末端が階段状もしくは蝶番状の構成資料の中で比較的小型の剥片
5-4、5-13、5-21、5-22が該当する。
- ・腹面左側縁または右側縁に自然面を取り込む剥片
5-8、5-9、5-10、5-15、5-20が該当する。

接合資料5は、この三種を必要に応じて剥離することによって構成されたといってよい。なお、その他の5-2、5-3、5-12、5-16については、5-2は、原石の状態から作業面を作出するための剥離と考えられ、5-3、5-12は、打点から垂直割れが生じて折損したものである。5-16の打点は打面中央付近で加撃しているものの、一側縁に自然面を厚く取り込んでおり、腹面左側縁または右側縁に自然面を取り込む剥片とは趣が異なると思われる。

作業面を一面に固定し、単一の自然面打面において、打点を後退させながら剥離を施すことが、接合

資料5の基本的な剥片剥離の方法であるが、時折打点を打面の左右にずらして剥離を施していることが確認できる。すなわち、背面に階段状もしくは蝶番状剥離痕を取り込む剥片は打面中央か、その付近で剥離されており、剥離の末端が階段状もしくは蝶番状の構成資料の中で比較的小型の剥片も同様の傾向である。一方、腹面左側縁または右側縁に自然面を取り込む剥片は、側縁に自然面を取り込んでいることからわかる通り、打面左端あるいは右端で剥離されている。それぞれが剥離される状況を観察すると、背面に階段状もしくは蝶番状剥離痕を取り込む剥片は、その背面構成からも窺えるように、剥離の末端が階段状もしくは蝶番状の構成資料の中で比較的小型の剥片が剥離された後に剥離している。また、腹面左側縁または右側縁に自然面を取り込む剥片は、打面中央の剥離作業によって石核作業面の左右端部が部分的に突出した時に剥離されていることが確認できる。

以上の剥離の種類と剥離状況を、接合資料5の石材消費過程の中で位置付けてみる。まず原石の状態から作業面作出のために剥離が行われる。その後、打面中央から剥片を剥離していく。加撃状況が不安定なためか、その作業の過程で、剥離の末端が階段状もしくは蝶番状の構成資料の中で比較的小型の剥片が結果的に剥離される。この剥離が累積すると作業面に凹凸が生じ、そのため、除去することによって作業面を整えるためか、凹凸を取り込む剥離を行う。一連の剥離作業の過程で、石核作業面の左右端部が部分的に突出した時に、作業面を平坦にするためか、腹面左側縁または右側縁に自然面を取り込む剥片を剥離する。

「場の機能」—目的剥片— 接合資料5の石材消費過程をみると、剥片剥離において、作業面の凹凸を除去しようとする意識、すなわち作業面を平坦にする意識が強く作用しているように思われる。接合資料5にみられる剥離の種類は、主に密集部から出土する。密集部が廃棄の場である以上、作業面平坦化のために剥離された資料に目的的な性格をもたせることはできない。すなわち、前述の剥離類型はそのまま、廃棄された石器遺物の特徴とすることができる。

では、接合資料5の剥片剥離作業は、どのような剥片を目的として行われたものなのか。欠落部分を観察すると、その痕跡を5-14、5-16の背面と5-12の腹面、5-12の背面と5-5の腹面とにみることができる。そこから復元できる剥片は、器厚が一定であり、背面に複雑な面構成をもたないものである。欠落剥片を目的的な剥片と捉えるならば、欠落資料で復元された特徴を有する5-12は、本来目的剥片の剥離を意識していたものが折損した結果、廃棄されたものと考えることができる。この状況とあわせて考えると、作業面平坦化という意図が一層窺えるとともに、接合資料5における目的剥片の内容を推測することが可能である。すなわち、器厚が一定であり、背面に複雑な面構成をもたない剥片を獲得するために、石核作業面を平坦にする行為が必要であったと考える。

いうまでもなく、目的剥片は石器製作作業の中で、素材剥片獲得を念頭に剥離された剥片である。獲得した素材剥片に調整加工を施すことによって製品石器に仕上げていくわけだが、河原城遺跡出土石器群を構成する石器遺物には、いわゆる未製品の出土がない。剥片剥離作業を行っている限り、石器を製作することを目的としていることは明白である。目的剥片が存在せず、さらに目的剥片を素材として調整加工を行った痕跡が認められないという状況は、この場において、石器製作工程中、目的剥片の獲得までの作業を行っていることを示しているのではないか。製品石器が極端に少なく、それらの未製品も出土しないという事実は、このことを端的に示しているといえる。

4. おわりに

これまでの検討によって、接合資料5を具体例に河原城遺跡出土石器群の性格を考えてきた。この石

器集中部の「場の機能」は、剥片剥離作業を行う「場」と、それによって生じた不要なものを廃棄した「場」として。続いて「場の性格」は、目的剥片を獲得するための「場」として。石器集中部は、密集部と散漫部が個別に存在するのではなく、剥片剥離作業から不要となった剥片の廃棄まで、一連の活動によって生じたものであった。

しかしながら問題は残る。接合資料5にみられる石材消費過程を、そのまま石器群の特徴とするわけにはいかない。実際に、作業面平坦化の痕跡を他資料において確認することが難しいのである。接合資料5のみにみられる特徴的な剥片剥離作業である可能性は、現時点で否定できない。しかし、ともかくも接合資料5に関する石器集中部の位置付けはできた。このことを基礎分析に、今後他資料の位置付けも行っていきたい。

また、接合資料中で一定量みられた両極打法の位置付けも行う必要がある。本稿の成果に加え、両極打法を用いた剥片剥離を位置付けることによって、河原城遺跡の石器集中部を理解することができるだろう。河原城遺跡では、少ないながら楔形石器も出土しており、楔形石器を含めた考察も意味のあることと思う。いずれ別稿を用意したい。

多くの課題を残しつつ末筆となったが、本稿を執筆するにあたり、多くの方のご意見を賜った。筆者の力不足のため意見を十分に生かすことができなかったが、この場を借りて御芳名を記すことで感謝の意を表したい。また、日頃から御教示頂いている方々にも、御礼申しあげます。

伊藤栄二 近江貝塚研究会 田部剛士 野口淳 森川実（敬称略・五十音順）

1) 本稿では、対象地点の形成過程の要因を「場の機能」とし、それに伴う人間活動の目的を「場の性格」と規定しておく。

2) 阿子島香 1985 「石器の平面分布における静態と動態—実験的研究—」『東北大学考古学研究報告』
1 pp.37~62 東北大学文学部考古学研究室

佐藤宏之 1986 「石器製作空間の実験考古学的研究（I）—遺跡空間の機能・構造探求へのアプローチ—」『研究論集』IV pp.1~41（財）東京都埋蔵文化財センター
などが挙げられる。

3) 前掲注、阿子島論文。

参考文献

- 阿部祥人 1982 「先土器時代の微細遺物—特に小石片検出の意義について—」『史學』第52巻第2号
pp.73~82 三田史学会
- 竹広文明 1988 「中国地方縄文時代の剥片石器—その組成・剥片剥離技術—」『考古学研究』第35巻第1号
pp.61~88 考古学研究会
- 鈴木康二 1996 「‘廃棄’を考える—貝塚出土資料の検討にあたっての試論—」『紀要』第9号 pp.1~10
（財）滋賀県文化財保護協会
- 西秋良宏 1994 「旧石器時代における遺棄・廃棄行動と民族誌モデル」『先史考古学論集』第3集 pp.83~97
- 山田昌久 1985 「縄文時代における石器研究序説—剥片剥離技術と剥片石器をめぐって—」
論集日本原史刊行会編『論集 日本原史』pp.219~252 吉川弘文館

3. 放射性炭素年代測定

(1) 分析の目的と経緯

2 Aトレンチの黒色粘土層出土の石器群は、石鏃が含まれ、縄文時代の所産であろうとは見当がついたが、それのみから時期を特定するのは困難だと思われた。

そのため、石器群発見の端緒となった断ち割りトレンチの断面で、おそらく5層に該当するであろう層から黒色粘土層にかけて各層、上中下3点ずつ土壌サンプルを採取した。

それらを調査担当者により水澆、顕微鏡観察を行ったが、火山灰は認められなかった。

そこで、土壌としての黒色粘土層の放射線炭素年代測定を、株式会社地球科学研究所に依頼した。

その結果報告を次頁に掲載する。なお、資料名のNO. 9は黒色粘土層上下2層のうち、石器を包含する上層の下部の資料、UNDER NO. 9は石器を包含しない下層の中程の資料である。

(2) 分析結果に関して

後掲の分析結果のとおり、かなり古い年代が出たが、それを受けて考えてみたい。

黒色粘土層は、粘土の中に、良く分解した有機物を豊富に含み、30cm前後の厚さを持つ層である。

これは水流による岩屑性粒子の運搬力がシルト以上はなく、かつ、活発な生物活動によって分解の進んだ有機物が供給され続けるという状況がかなり長い間継続したという事である。有機物の供給が現地性、特に現地で生えた植物によるものでない事は、分解途中の粒状の炭化物や、植物の細片と肉眼で認められるものがほとんどない事から分かる。また、珪藻分析では淡水底生種の卓越が認められる。

つまり、低湿地、それも沼の底のような環境で、洪水による粗い粒子の供給なども受けない部分であり、周囲には豊かな土壌を形成した森林があるような環境が考えられる。

それには広い範囲の平坦な地形がなければならない。東除川でも低位段丘崖と思われる地形があり、最終氷期に開析が進んだと思われ、縄文時代に低位段丘平坦面に湿地が存在するとは考えにくい。

やはり、その開析谷が、黒色粘土層下層の示す年代、B.P.10160 ±40年までに埋没が進行し、谷底平野に蛇行河川、自然堤防、後背湿地などが見られ、植生も豊かな状況が出来ていたと考えられよう。

そして、堆積単位が上下2層に分かれているのは、上層が堆積する前、一旦水が干上がり、下層が脱水して自然加圧により締まり、その上にまた、滞水して上層が堆積したのではないかと考えられる。

石器が投棄されたのは、接合資料の分布、密集部に微細なチップも下層上面に他の剥片などと平面的に堆積している状況などから、この上下層を分ける短い渇水期であると考えざるをえない。

そして再び冠水した後、上層が堆積していく中で、その岸辺に近い部分の石器が二次移動して密集部の上に再堆積したようで、一部上層上面から下降したような分布を示す石器群が存在する。

上層はかなり酸化・土壌化の形跡が残り、埋没前に乾燥化が進んだと思われる。

有機物の供給が周囲の土壌からと思われる事、層の堆積速度がかなり遅いと思われる事から、堆積した有機物の示す時期は石器の投棄された時期より確実に前となる。しかし、石器から考えられる縄文時代早期頃と上層が示すB.P.9450 ±40年とはある程度整合性を持つようである。

結論としては、今回の分析は石器群の時期の一つの上限を示したと言える。

また、土壌を資料とする時、その成因、堆積後の変化などが、測定結果にいかなる影響を及ぼすかの検討を、調査者も分析者も考えていく必要があるように感じた。

報告内容の説明

14C age (y BP) : 14C年代測定値
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期として5568年を用いた。

補正 14C age (y BP) : 補正 14C 年代値
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

δ 13C (permil) : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta \text{ 13C } (\text{‰}) = \frac{(\text{13C/12C})[\text{試料}] - (\text{13C/12C})[\text{標準}]}{(\text{13C/12C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C[標準] = 0.0112372である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サングのU-Th年代と 14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース(“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000年までの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 : BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL 33155, U.S.A

C14年代測定結果

20000050

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	δ 13C(permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 146337	9430 \pm 40	-23.5	9450 \pm 40
試料名 (15442) NO.9 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など organic sediment acid washes			
Beta- 146338	10160 \pm 40	-24.6	10160 \pm 40
試料名 (15443) Under NO.9 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など organic sediment acid washes			

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

(Variables: C13/C12=-23.5:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-146337**

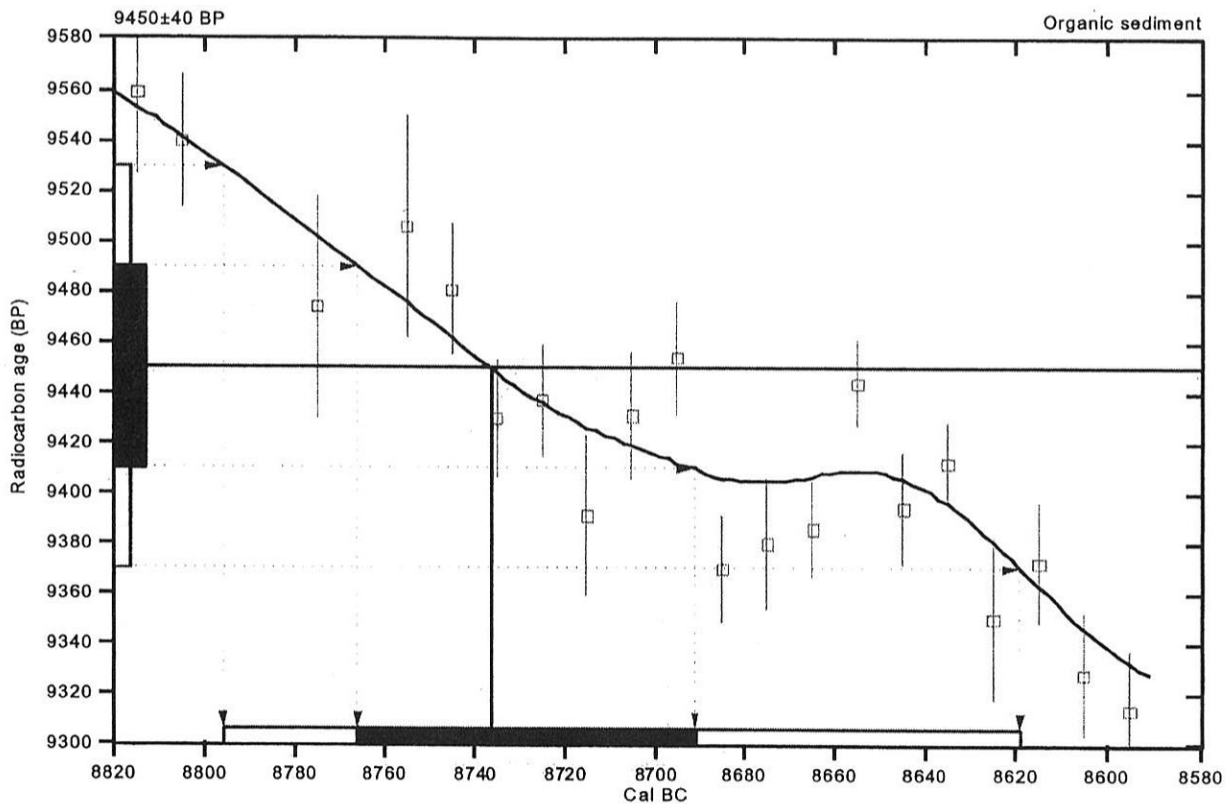
Conventional radiocarbon age: **9450±40 BP**

2 Sigma calibrated result: Cal BC 8800 to 8620 (Cal BP 10750 to 10570)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 8740 (Cal BP 10690)

1 Sigma calibrated result: Cal BC 8770 to 8690 (Cal BP 10720 to 10640)
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database
Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

(Variables: C13/C12=-24.6:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-146338**

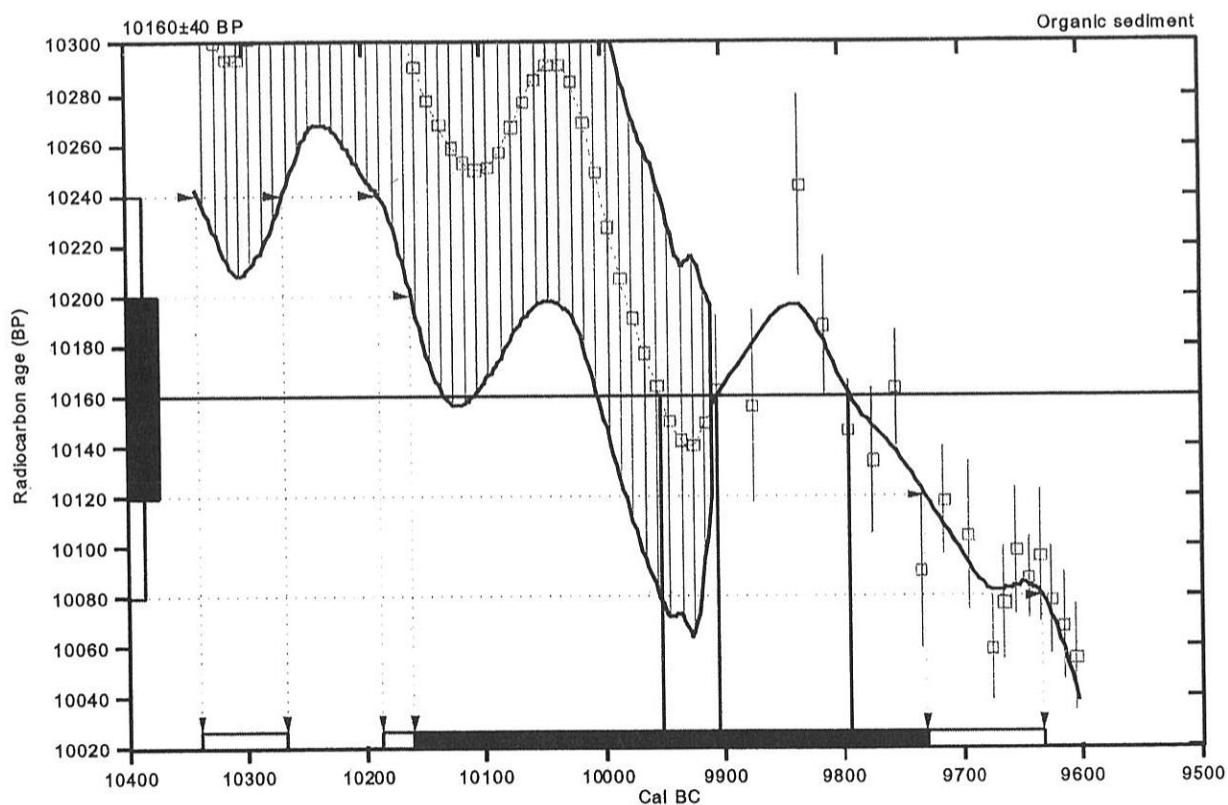
Conventional radiocarbon age: **10160±40 BP**

2 Sigma calibrated results: **Cal BC 10340 to 10270 (Cal BP 12290 to 12220) and
(95% probability) Cal BC 10190 to 9630 (Cal BP 12140 to 11580)**

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve: **Cal BC 9950 (Cal BP 11900) and
Cal BC 9900 (Cal BP 11860) and
Cal BC 9790 (Cal BP 11740)**

1 Sigma calibrated result: **Cal BC 10160 to 9730 (Cal BP 12110 to 11680)**
(68% probability)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxi-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

4、花粉・珪藻分析

(1) 分析の目的と経緯

2 Aトレンチで出土した石器群が包含されていた黒色粘土層に関しては、水成堆積であると考えられるが、粒径の細かい粘土と豊富な有機物がこのように厚く堆積するのはどのような環境でありえるのかが問題として残った。

また、石器群の上下分布を見ると、上下2層に分かれる黒色粘土の中で、ほとんどが上層下面に着くように分布し、密集部の中で、一部上方に遊離して分布するものがあるという状況があり、その分布の形成過程を考える上で、黒色粘土層の堆積環境に関する情報が必要となった。

そこで、断ち割りトレンチ壁面で採取した土壌サンプルを以て試料とし、川崎地質株式会社に花粉・珪藻分析を委託した。

土壌サンプルは、黒色粘土層の堆積環境とそれより上の堆積環境の変化を捉える事を期待し、石器の包含されている黒色粘土層上層とその上に堆積した2層のものを選んだ。また、1層につき上中下の3点採取したサンプルの内、巻き上げ・降下などの影響の少ない中位のものを各々選んだ。

なお、分析委託当時、石器群の時期に関して不明な部分が多く、縄文時代でも早い時期のものではないか、としか考えられなかったため、分析者に対しては縄文前期頃と伝えた。そのため、報告では縄文前期である場合と、放射性炭素年代測定法による年代の場合との両論併記となっていた。

そのため、ここでは原文を一部改変しており、その場合は「(担当者改)」と注記する。

また、図表番号は報告書全体からは独立し、この分析報告内で完結している。

(2) 平成12年度河原城遺跡花粉・珪藻分析委託報告書 川崎地質株式会社

(担当者改 前2頁省略)

2 試料採取層準

試料採取地点の土層図は図2-1のとおりであり、②、⑤、⑧(担当者注、当方が採取した時点での採取番号である)の位置で試料採取された。

なお、土層図は、財団法人大阪府文化財調査研究センターより提供を受けた原図をもとに作成した。土層の説明は基本的に財団法人大阪府文化財調査研究センターの観察に従った。また、今回分析した試料はすべて財団法人大阪府文化財調査研究センターによって採取されたものである。

3 分析方法

3-1 花粉分析方法

(1) 原理

粘土層などの堆積物や遺跡の土壌には、動物性もしくは植物性の微小な化石(=微化石)が含まれており、それらを物理・化学的処理によって抽出し、顕微鏡で化石の種類や数を検定し、種々の目的に沿

った調査を行う方法が微化石分析であって、花粉分析はその一つである。

堆積物に含まれる花粉化石は、その堆積当時陸上に生育した樹木や草が生産した花粉が、水系や大気系を經由して堆積物粒子とともに埋積したものである。

陸上に生育する樹木や草、つまり“植生”は気候の変化や時代とともに変化し、その変化が堆積物中の花粉化石の構成や量の変化として反映する。

従って、花粉構成や消長データは、地層の識別や対比、古植生の復元に利用することができる。

(2) 分析処理法

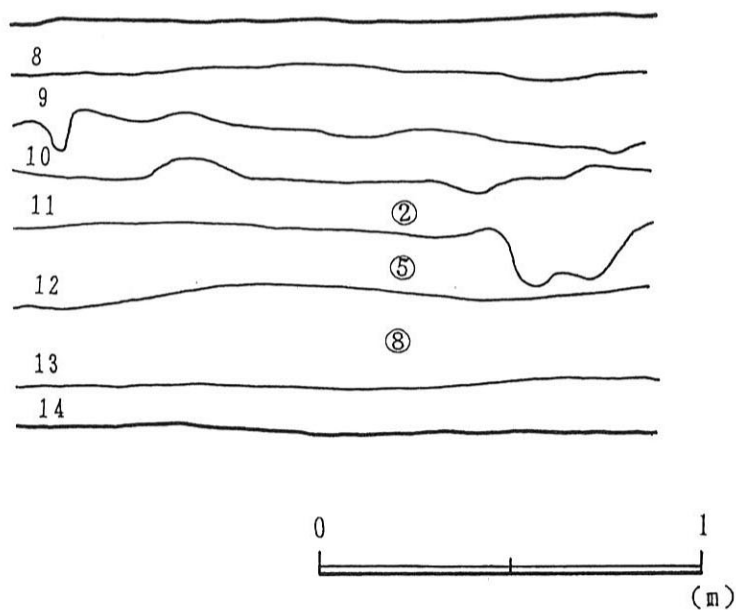
①分析試料

分析に供する試料は、シルト又は粘土で、その量は10~200 g (湿潤重量)である。試料は花粉化石の形状を保持するため湿潤状態のまま使用する。

分析に供する試料の採取間隔は、堆積層の状態と目的によって数センチメートルから数メートルと異なるが、遺跡調査の場合は一般に遺物に基づく土層区分に対応した採取間隔をとることが多い。

②分析処理

分析処理の手順は図3-1に示す分析フローのとおりである。1ミクロン振動マイクロフィルターを



8:2.5Y5/4~5/2粘質シルト(粗砂少含) 9:2.5Y6/4~6/2細砂~シルト(中、粗砂含)

10:10YR5/6~5/1シルト~細砂(中砂多含)

11:2.5Y5/1~4/1シルト~粘土(細~中砂若干含) 12:2.5Y6/1シルト~細砂

13:10YR4/1粘土 14:10YR2/1粘土

図2-1 試料採取層準

使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

分析処理に要する薬品・器具設備の概要は以下のとおりである。

- 1) 処理薬品 : 水酸化カリウム、硫酸、フッ化水素、塩化亜鉛 他
- 2) 処理器具、設備 : 遠心分離機、振動マイクロフィルター、他一般分析器具

③顕微鏡による検定・計数

抽出した花粉化石はグリセリンゼリーと混合してスライドガラス上に滴下し、カバーガラスをかけて封入してプレパラートを作成する。プレパラートを顕微鏡（パノックスA H B L B 1 万能顕微鏡）により400-1000倍で観察し、メカニカルステージによる帯分析で通常木本花粉で100個から250個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉の検定、計数も行う。

(3) 解析法

花粉分析結果の解析の手順は

- 1) 各花粉種類の出現率（パーセント表示）計算と花粉ダイアグラムの作成
- 2) 各地点における花粉消長パターンの読み取りと花粉帯分帯
- 3) 地層対比や古植生・古気候の復元
の順で進める。

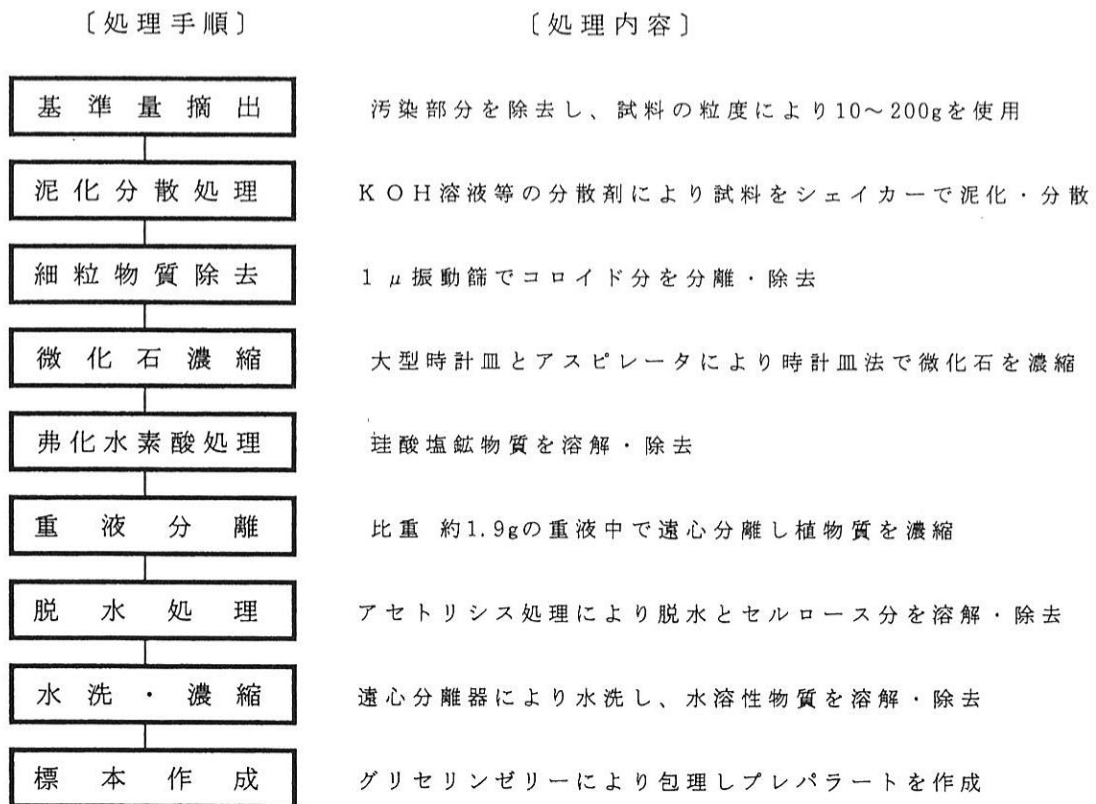


図3-1 花粉分析処理フロー

3-2 珪藻分析方法

(1) 原理

珪藻は珪質の殻をもつ単細胞の植物プランクトンの一種で、主に河川や湖沼などの淡水域と河口、湾、大洋などの汽水もしくは海水域に生息する。珪藻分析は堆積物の中に含まれている珪藻化石を物理・化学的処理によって抽出し、堆積物生成当時の水域の環境を推定し、あるいは年代に関する検討をおこなう方法である。

珪藻は水域の水温、塩分濃度、酸性度などの環境要因に対応した種類が各々の環境許容範囲をもって生息する。抽出された珪藻化石が堆積物生成当時その水域に生息したものであれば、その種類構成や相対量やその変化から当時の水域の環境を復元することができる。

(2) 分析処理法

分析処理の手順は図3-2に示す分析フローのとおりである。1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

分析処理に要する薬品・器具設備の概要は以下のとおりである。

- 1) 処理薬品 : 過酸化水素、ピロリン酸ナトリウム、ほか
- 2) 処理器具、設備 : 遠心分離機、振動マイクロフィルター、他一般分析器具

(3) 顕微鏡による検定

珪藻プレパラートを光学顕微鏡(400~1000倍)で観察し、帯分析して通常100個から250個の珪藻化石の検定、計数をおこなう。

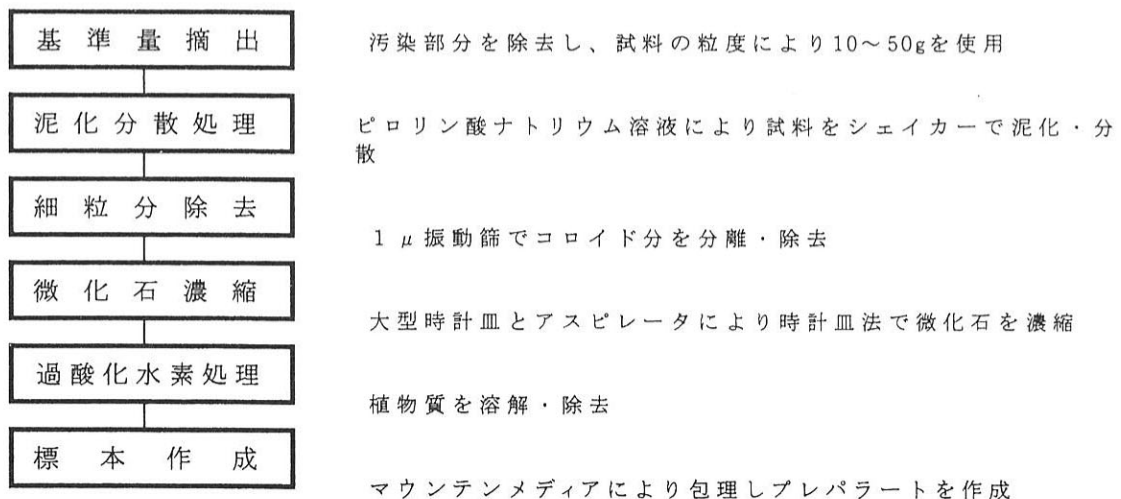


図3-2 珪藻分析処理フローチャート

(4) 解析方法

珪藻ダイアグラムを作成して、各珪藻種類の変遷傾向から、分帯と堆積環境変遷の推定をおこなう。推定できる堆積環境要素は以下のようである。

- ・全種類について
 - 生息域
 - 海水域～汽水域～淡水域
- ・淡水種について
 - 塩分濃度
 - 好塩～不定～嫌塩
 - pH
 - 好酸性～不定～好アルカリ性
 - 流水
 - 好止水～不定～好流水
 - 生活
 - 浮遊～不定～底生、陸生

4 分析結果

4-1 花粉分析結果

(1) 花粉化石の含有状況

3試料の花粉分析をおこなった結果、全ての試料から花粉化石が検出された。しかし、試料No. 2、5では花粉化石の含有量が少なく、統計処理に十分な量の花粉化石が検出できなかった。

(2) 検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は表4-1に示す21種類であった。これらのうち、全試料を通じて花粉組成を特徴づける種類は、以下に示すようなものであった。

- ・卓越木本花粉
 - ハンノキ属、コナラ亜属
- ・卓越草本花粉（栽培種と推定される種類を除く）
 - キク亜科

(3) イネ科の細分について

イネ科花粉を粒径から、40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。

稲作が行われる前の自然堆積物ではイネ科（40ミクロン未満）花粉が高率となることはあるが、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われだしたと考えられる弥生時代以降においては、自然堆積物でもイネ科（40ミクロン以上）花粉が高率となることが多くなる。さらに稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で検出される。

表4-1 検出花粉化石種類一覧表

[樹木花粉種類]		
8	<i>Abies</i>	(モミ属)
12	<i>Picea</i>	(トウヒ属)
13	<i>Pinus(Diploxylon)</i>	(マツ属：複維管束亜属)
23	<i>Tsuga</i>	(ツガ属)
24	<i>Sciadopitys</i>	(コウヤマキ属)
26	<i>Cryptomeria</i>	(スギ属)
46	<i>Juglans-Pterocarya</i>	(クルミ属－サワグルミ属)
50	<i>Alnus</i>	(ハンノキ属)
51	<i>Betula</i>	(カバノキ属)
53	<i>Carpinus-Ostrya</i>	(クマシデ属－アサダ属)
59	<i>Fagus</i>	(ブナ属)
62	<i>Quercus</i>	(コナラ亜属)
66	<i>Ulmus-Zelkova</i>	(ニレ属－ケヤキ属)
88	<i>Tilia</i>	(シナノキ属)
[草本花粉種類]		
230	Cyperaceae	(カヤツリグサ科)
232	Gramineae(<40)	(イネ科：40ミクロン未満)
233	Gramineae(>40)	(イネ科：40ミクロン以上)
279	<i>Echinocaulon-Persicaria</i>	(ウナギツカミ節－サナエタデ節)
347	Carduoidaceae	(キク亜科)
349	<i>Artemisia</i>	(ヨモギ属)
350	Cichorioideae	(タンポポ亜科)

一方図4-1に示すように、イネ科（40ミクロン以上）花粉はイネ属（*Oryza*）を含んでいるが、すべてがイネ属であるわけではない。

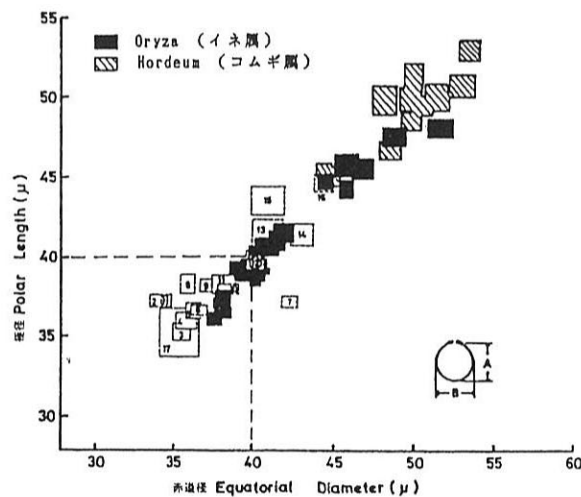
これらの状況証拠と事実から、弥生時代以降に高率で検出されるイネ科（40ミクロン以上）花粉について、すべてがイネ属に由来するわけではないが、その多くはイネ属に由来すると推測される。

（4）分析結果

花粉分析の結果を、下記の花粉ダイアグラムと花粉分析結果表、ならびに巻末の検出花粉化石数量表に示す。花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、各々の木本花粉、草本花粉について百分率で表した。花粉化石含有量の少ない2試料については種類を「*」で示した。

（5）花粉組成の特徴

試料No. 2, 5では花粉化石の含有量が少なく、統計処理に十分な量の花粉化石が検出できなかった。これらの試料では顕微鏡写真で示すように（担当者注 顕微鏡写真の掲載は省略した）、花粉化石の外、孢子化石、植物片、炭もほとんど検出できなかった。



〔图中のイネ・コムギ以外のイネ科〕

1. *Zizania latifolia* (マコモ)
2. *Isperata cylindrica* var. *koenigii* (チガヤ)
3. *Trisetum bifidum* (カニツリグサ)
4. *Arthraxon hispidus* (コブナグサ)
5. *Digitaria adscendens* (メヒシバ)
6. *Echinochloa crusgalli* subsp. *edulis*
7. *Polypogon monspeliensis* (ヒエガエリ)
8. *Phalaris arundinacea* (クサヨシ)
9. *Beckmannia syzigachne* (カズノコグサ)
10. *Echinochloa crusgalli* var. *longiseta*
11. *Alopecurus aequalis* var. *aurensis* (スズメノチャボウ)
12. *Echinochloa crusgalli*
13. *Paspalum thunbergii*
14. *Alopecurus japonicus*
15. *Echinochloa crusgalli* var. *oryzicola*
16. *Agropyron ciliare* var. *minus* (アオカモジグサ)
17. *Phragmites communis* (アシ)

図4-1 イネ科花粉の粒径比較図（中村、1974）

試料No. 8では、コナラ亜属が53%の出現率を示すほか、ハンノキ属が25%の出現率を示す。また僅かではあるがトウヒ属も出現する。草本花粉ではキク亜科が30%の出現率を示す。また、孢子化石の含有率が多い。

4-2 珪藻分析結果

(1) 珪藻化石の含有状況

3試料を分析した。分析の結果、すべての試料から統計処理に十分な量の珪藻化石が検出できた。また、今回の分析で検出された珪藻化石の種類は表4-3に示す32種類である。

(2) 分析結果

珪藻分析の結果を、下記の珪藻ダイアグラム、珪藻総合ダイアグラムと珪藻化石組成表、ならびに巻末の検出珪藻化石数量表に示す。珪藻ダイアグラムは計数した総数を基数にし、百分率で示した。珪藻総合ダイアグラムのうち、左端の「生息域別グラフ」は同定した全ての種類を対象にそれぞれの要因(生息域)毎に、百分率で表したものである。そのほかの4つのグラフは、淡水種についてそれぞれの要因毎に百分率で示したものである。

(3) 珪藻組成の特徴

試料No. 2、5ではActinocyclus normanii, Cyclotella stylorumなどの海～汽水種が40～60%を示すほか、淡水浮遊種のMelosira granulata, Stephanodiscus astraeaが高率を示す。

試料No. 8では、淡水種がほとんどを占める。特に底生種のDiploneis属やPinnularia属が高率を占める。

5 考察

5-1 花粉分帯

通常は花粉組成の特徴から地域花粉を設定し解析を行うが、今回は十分な量の花粉化石が検出できた試料が少なかったために、花粉分帯を行えなかった。

5-2 珪藻分帯

各地点毎に珪藻分析結果をもとに、地域珪藻帯を設定した。以下に各珪藻帯の特徴を示す。また珪藻帯の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載する。

1) II帯(試料No. 8)

淡水種底生種がほとんどを占める。

2) I帯(試料No. 5、2)

海～汽水種、淡水浮遊種が高率を示す。

5-3 既知の試料との比較

今回分析を行った試料No. 8層準(13層)下部、14層上面から縄文時代前期(担当者注 後の検討によれば縄文時代早期の可能性が高い)の様式を持つ石鏃が検出されている。一方、13層・14層のAMS

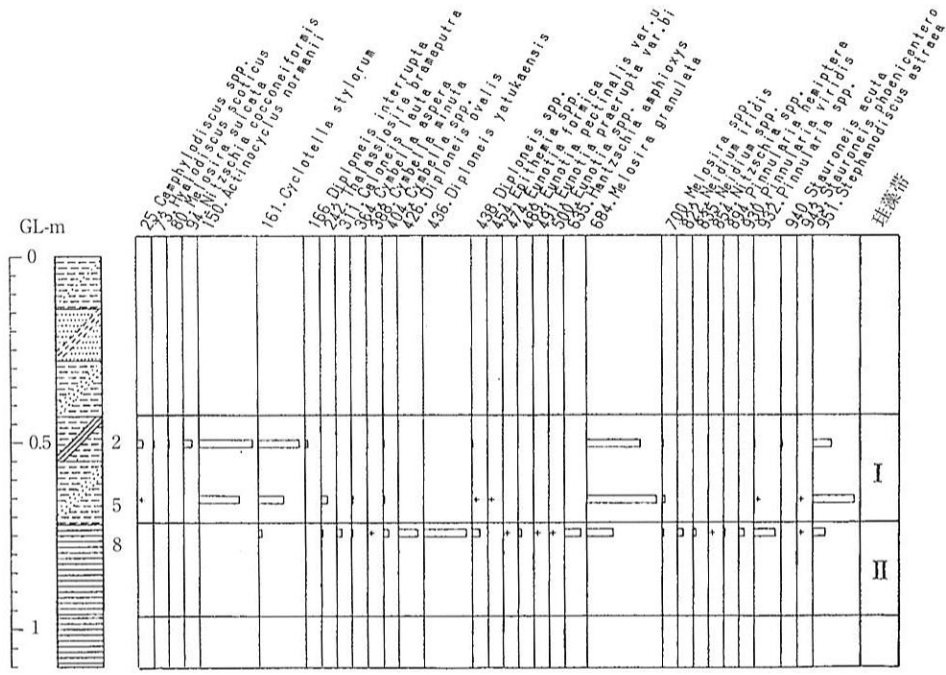


図4-3 珪藻ダイアグラム

表 4-3 検出された珪藻化石の種類一覧表

コード	種名	生息域	水深	塩分	pH	流水	生活
25	<i>Camphylodiscus</i> spp.	1	0	0	0	0	0
73	<i>Hyalodiscus scoticus</i>	1	0	0	0	0	0
80	<i>Melosira sulcata</i>	1	0	0	0	0	0
94	<i>Nitzschia cocconeiformis</i>	1	0	0	0	0	0
150	<i>Actinocyclus normanii</i>	2	0	0	0	0	0
161	<i>Cyclotella stylorum</i>	2	0	0	0	0	0
166	<i>Diploneis interrupta</i>	2	0	0	0	0	0
242	<i>Thalassiosira bramaputrae</i>	3	0	0	0	0	0
311	<i>Caloneis lauta</i>	415243443					
364	<i>Cymbella aspera</i>	415233243					
388	<i>Cymbella minuta</i>	415223243					
404	<i>Cymbella</i> spp.	417243443					
426	<i>Diploneis ovalis</i>	415223243					
436	<i>Diploneis yatakaensis</i>	415243143					
438	<i>Diploneis</i> spp.	417243443					
454	<i>Epithemia</i> spp.	417243443					
474	<i>Eunotia formica</i>	415223443					
489	<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>unduiata</i>	416213243					
491	<i>Eunotia praeupta</i> var. <i>bidens</i>	416213243					
500	<i>Eunotia</i> spp.	417243443					
635	<i>Hantzschia amphioxys</i>	415233244					
684	<i>Melosira granulata</i>	415233141					
700	<i>Melosira</i> spp.	417243441					
822	<i>Neidium iridis</i>	416223143					
835	<i>Neidium</i> spp.	417243443					
854	<i>Nitzschia</i> spp.	417243442					
894	<i>Pinnularia hemiptera</i>	416223143					
930	<i>Pinnularia viridis</i>	415223243					
932	<i>Pinnularia</i> spp.	417243443					
940	<i>Stauroneis acuta</i>	415233243					
943	<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	415223243					
951	<i>Stephanodiscus astraea</i>	415233141					

生息域	凡例	塩分濃度	pH	流水	生活
1	海水	15 好塩	21 酸性	31 止水	41 浮遊
2	海～汽水	16 不定塩	22 不定性	32 不定水	42 不定性
3	汽水	17 嫌塩	23 アルカリ性	33 流水	43 底生
4	淡水	18 不明	24 不明	34 不明	44 陸生
					45 不明

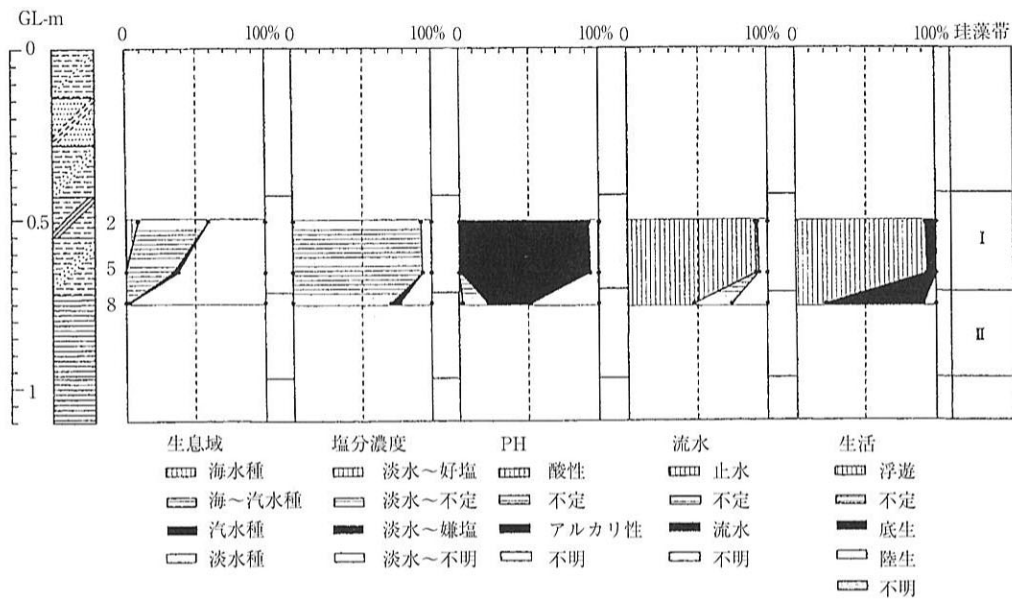


図4-4 珪藻総合ダイアグラム

表 4-4 珪藻化石組成表

河原城遺跡

NO.	DEP,U	DEP,L	25	73	80	94	150	161	166	242	311	364	388	404	426	436
2	0.48	0.53	4	1	1	6	37	29	2	-	-	-	-	1	-	-
			(3)	(1)	(1)	(4)	(27)	(21)	(1)	-	-	-	-	(1)	-	-
5	0.63	0.68	1	-	-	-	43	28	-	7	-	2	-	2	-	-
			(0)	-	-	-	(20)	(13)	-	(3)	-	(1)	-	(1)	-	-
8	0.72	0.77	-	-	-	-	-	4	-	2	6	2	1	6	20	45
			-	-	-	-	-	(2)	-	(1)	(3)	(1)	(0)	(3)	(10)	(22)
NO.	DEP,U	DEP,L	438	454	474	489	491	500	635	684	700	822	835	854	894	930
2	0.48	0.53	1	-	-	-	-	-	-	37	1	-	-	-	-	-
			(1)	-	-	-	-	-	-	(27)	(1)	-	-	-	-	-
5	0.63	0.68	1	1	-	-	-	-	-	75	3	-	-	-	-	-
			(0)	(0)	-	-	-	-	-	(36)	(1)	-	-	-	-	-
8	0.72	0.77	8	-	1	4	1	1	17	27	2	6	3	1	2	6
			(4)	-	(0)	(2)	(0)	(0)	(8)	(13)	(1)	(3)	(1)	(0)	(1)	(3)
NO.	DEP,U	DEP,L	932	940	943	951										
2	0.48	0.53	1	1	-	13										
			(1)	(1)	-	(10)										
5	0.63	0.68	1	-	1	45										
			(0)	-	(0)	(21)										
8	0.72	0.77	22	-	1	13										
			(11)	-	(0)	(6)										

上段数字は化石種類コード，()内は%

14C年代測定値として 9450 ± 40 y B. P. (Beta-146337) :13層、 10160 ± 40 y B. P. (Beta-146338) :14層が得られている。

完新世における大阪平野近辺の平均的な花粉組成変遷は図5-1に示すとおりであり、今回得られたようなコナラ亜属花粉の卓越は、古谷(1979)ではF1~2帯(10000年前(完新世初頭)から7000年前頃)で認められる現象である。

したがって、花粉組成の上からはAMS14C年代値を支持する結果となった。

(担当者改 縄文前期と仮定した文を、以下3行省略)

5-4 花粉化石含有量の少ない原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のようなことが考えられている。

1. 堆積速度が早いために堆積物中に花粉化石が含まれない。
2. 花粉化石の平均的粒径(数~100 μ)と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
3. 土壤生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5. 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

今回の試料No. 2, 5では、植物片及び炭片もほとんど含まれていなかった(試料観察で試料の色は黄色みを帯び、有機質の存在はあまり期待できなかった)。このことから、3の「土壤化」の影響は考えにくい。一方で珪藻化石の含有量は花粉化石に比べ多く、1の「堆積速度」や4の「堆積後の化学変化」が原因とは考えにくい。プレバート中には有機物がほとんど含まれず、5の「回収困難」も考えられない。以上のことから花粉化石の含有量が少なかった原因として、2の「堆積後の分別」が最も有力である。

つまり、珪藻、プラントオパールは共に珪質であり、その比重は岩片や鉱物などに近い。一方花粉や植物片、炭の比重ははるかに低い。分析試料は砂質であり、比重の低い植物質の物質が分別され流されていったと考えられる。

しかし、後述のように珪藻化石が二次堆積したものとすれば、1の「堆積速度」も有力な原因となり、1および2の複合である可能性が高くなる。

5-5 古環境復元

ここでは、花粉分析結果および珪藻分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

(担当者改 縄文時代前期と前期完新世の両方の場合を併記していたが、前期完新世のみを掲載する)

(1) 前期完新世(放射性炭素年代測定値による年代観)

美原丘陵(扇状地)から羽曳野丘陵にかけては、ミズナラやカシワを主要素とする落葉広葉樹林で覆われていたと考えられる。

一方遺跡内および周辺には湿地が広がり、ハンノキ類を要素とする湿地林が存在していたと考えられ

る。湿地内にはアシ原が広がり、乾燥した場所にはヨモギなどのキク類が繁茂していたと推定される。珪藻分析でも淡水・止水・底生種が卓越し、試料最終地点が湿地環境であったことが示唆される。

(2) 時期不明 (11、12層堆積時期)

珪藻分析結果からは、湾奥河口域あるいは河川の河口域の環境であったことが示唆される。しかし試料採取地点の標高から、たとえ谷筋であっても高潮などによる表層水の逆流や、塩水楔による低層水の逆流などでは説明がつかない。海～汽水生珪藻は周囲に分布する大阪層群からの二次堆積によると考えられる。しかし、花粉化石がほとんど検出できないことから急激な堆積も推定され、検出された淡水生珪藻も海～汽水生珪藻同様に二次堆積したものであった可能性もある。

6. まとめ

河原城遺跡における花粉分析および珪藻分析の結果、以下の事が明らかになった。

(1) 花粉分析では、試料No. 8で統計処理に充分な量の花粉化石が検出できたものの、他の試料からは花粉化石がほとんど検出できなかった。このため、花粉分帯を行わなかった。また、花粉化石検出量が少なかったことは、堆積過程での、植物化石の比重による分別のほか、堆積速度が速すぎたために花粉粒が取り込まれなかったことに起因すると考えられる。

(2) 珪藻分析結果から、I、II帯に分帯した。

(3) 花粉層序学的見地から、13層の堆積時期は前期完新世と推定される。

(4) 13層の堆積時期が明確でないが(担当者註 当初の縄文時代前期説のため)、花粉分析結果、珪藻分析結果を基に、調査地周辺での古環境を復元した。

特筆すべき点は以下の事柄である。(担当者改 縄文前期とした場合のものは省略)

①13層堆積時には遺跡内から周辺にかけて湿地が広がっていた。湿地にはハンノキ林やアシ原が広がり、乾燥する場所にはヨモギや他のキク類が生育していた。

②12、11層は河川での堆積も考えられるが、洪水などにより急激に堆積した可能性もある。

(3) 分析委託報告を受けて

まず、黒色粘土層の形成に関して、珪藻の淡水、止水、底生種の卓越により、湿地的環境の中で堆積が進んだ事が判明したのは大きい。

層内に良く分解した有機分が多量に含まれているのに対し、肉眼で確認できる植物遺体がほとんど存在しない状況とあわせると、石器の包含されていたこの部分は、湿地の中でも、その場には植物が繁茂しないような、沼状の冠水域であると考え事ができる。石器の含まれない、黒色粘土層下層に関して、より後の土壌化を受けてない状態から言って同じ状況であろう。

そして上下2層の層境を形成する短い渇水期に石器群が投棄されたであろう事は放射性炭素年代測定の部分でも述べたとおりである。

やや眼を広げれば、東除川の開析谷に谷底平野が形成され、そのほとんどが湿地で、その中を浸食力の弱い蛇行河川がながれているような状況を復元する事が出来よう。

草本植物花粉のキク科の存在は、近接する中位段丘上のものの可能性もあるが、その中にヨモギも含まれるように、谷底平野内に、おそらく小規模ながらも乾燥した自然堤防が散在していた可能性を示唆

するものかもしれない。

また、黒色粘土層を埋没させた層が珪藻において海～汽水種、淡水浮遊種が高率を示し、花粉化石がほとんど含まれない状況から、大阪層群などの二次堆積の可能性と、花粉化石が分別されるような急速な堆積速度の可能性が示された事は大きい。

これらの層はシルトを主体としてやや細砂などが混じる層ではあるが、シュートバーを形成するような破堤的洪水の時、その縁辺に堆積したものだということが今回の分析からも裏付けられる。

それと、黒色粘土層上層が上面から最終的にかなりの土壌化を受けている事を合わせると、この部分は黒色粘土層の形成が終了した後、完全に渇水して地表化し、おそらく谷底平野の湿地全体も乾燥化が進んだのであろう。それは、河川がこの部分でやや下刻した事によると思われる。

それと同時期的に河川の流路も不安定になり、破堤的な洪水がしばしば起こるようになったのであろう。それが最終的には黒色粘土層を次々と浸食し、結果として調査区内では2 A トレンチの段丘崖直下のこの部分のみに残すような事になったと思われる。

また、大阪層群の二次堆積の可能性を考えると、この東除川の谷に供給される土砂は、その東側に沿うように伸びる羽曳野丘陵のものを主としていた事を示唆しているように思う。同じく含まれる淡水浮遊種の珪藻化石は、古天野川の扇状地であった西側の中位段丘から供給されたものかも知れない。

今回の分析で予想外の収穫としては、花粉化石による植生復元により、放射性炭素年代測定の結果が裏付けられた事である。この事から、石器群も、コナラ亜属花粉の卓越する10000年前から7000年前の間に位置づけてもほぼ間違いはないと言えよう。

総合して古環境の変化を見て気づくのは、丘陵地帯で河川中流部の谷部であるこの部分と沖積平野の状況の違いである。

最終氷期に開析された谷が沖積下部砂層と併行する時期にかなり埋まり、正に縄文海進が本格化し、沖積平野に中部泥層が形成され始める時期、温暖化は進行しているといってもコナラなどの落葉広葉樹林の広がるやや冷涼な状態の時、ここには黒色粘土層が形成され、非常に穏やかな安定した状況が生まれる。そして、むしろ縄文海進のピーク期に向かっては、湿地の乾燥化が進み、河川の浸食力も増すような状況が生まれてくる。

これは、非常に個別的な、この地域での状況であろう。そして、丘陵・山地など河川の中・上流域の環境が、気候的な要因によっては共通性を持ちながら、個別地形的要因により、沖積平野の状況とは必ずしも一致しない事があるという例として心に留めておくべきかも知れない。

検出花粉化石数量表

河原城遺跡

試料No. 2 深度 0.48 m ~ 0.53 m 総数 4

TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)	TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)
8 モミ属	0 (0)	62 コナラ亜属	0 (0)
12 トウヒ属	0 (0)	66 ニレ属	0 (0)
13 マツ属 (複維管束亜属)	0 (0)	88 シナノキ属	0 (0)
23 ツガ属	0 (0)	230 カヤツリグサ科	0 (0)
24 コウヤマキ属	0 (0)	232 イネ科 (40ミクロン未満)	0 (0)
26 スギ属	0 (0)	233 イネ科 (40ミクロン以上)	0 (0)
46 クルミ属 - サワグルミ属	0 (0)	279 ウナギツカミ節 - サナエタデ節	0 (0)
50 ハンノキ属	3 (75)	347 キク亜科	0 (0)
51 カバノキ属	0 (0)	349 ヨモギ属	1 (25)
53 クマシデ属 - アサダ属	0 (0)	350 タンポポ亜科	0 (0)
59 ブナ属	0 (0)		

試料No. 5 深度 0.63 m ~ 0.68 m 総数 1

TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)	TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)
8 モミ属	0 (0)	62 コナラ亜属	0 (0)
12 トウヒ属	0 (0)	66 ニレ属	0 (0)
13 マツ属 (複維管束亜属)	0 (0)	88 シナノキ属	0 (0)
23 ツガ属	0 (0)	230 カヤツリグサ科	0 (0)
24 コウヤマキ属	0 (0)	232 イネ科 (40ミクロン未満)	1 (100)
26 スギ属	0 (0)	233 イネ科 (40ミクロン以上)	0 (0)
46 クルミ属 - サワグルミ属	0 (0)	279 ウナギツカミ節 - サナエタデ節	0 (0)
50 ハンノキ属	0 (0)	347 キク亜科	0 (0)
51 カバノキ属	0 (0)	349 ヨモギ属	0 (0)
53 クマシデ属 - アサダ属	0 (0)	350 タンポポ亜科	0 (0)
59 ブナ属	0 (0)		

試料No. 8 深度 0.72 m ~ 0.77 m 総数 172

TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)	TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)
8 モミ属	5 (3)	62 コナラ亜属	55 (32)
12 トウヒ属	1 (1)	66 ニレ属	2 (1)
13 マツ属 (複維管束亜属)	4 (2)	88 シナノキ属	1 (1)
23 ツガ属	2 (1)	230 カヤツリグサ科	2 (1)
24 コウヤマキ属	1 (1)	232 イネ科 (40ミクロン未満)	14 (8)
26 スギ属	1 (1)	233 イネ科 (40ミクロン以上)	8 (5)
46 クルミ属 - サワグルミ属	2 (1)	279 ウナギツカミ節 - サナエタデ節	7 (4)
50 ハンノキ属	26 (15)	347 キク亜科	31 (18)
51 カバノキ属	1 (1)	349 ヨモギ属	5 (3)
53 クマシデ属 - アサダ属	2 (1)	350 タンポポ亜科	1 (1)
59 ブナ属	1 (1)		

検出珪藻化石数量表

河原城遺跡

試料No. 2 深度 0.48 m ~ 0.53 m 総数 135

TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)	TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)
25 Camphylodiscus spp.	4 (3)	489 Eunotia pectinalis var.undul	0 (0)
73 Hyalodiscus scoticus	1 (1)	491 Eunotia praerupta var.bidens	0 (0)
80 Melosira sulcata	1 (1)	500 Eunotia spp.	0 (0)
94 Nitzschia cocconeiformis	6 (4)	635 Hantzschia amphioxys	0 (0)
150 Actinocyclus normanii	37 (27)	684 Melosira granulata	37 (27)
161 Cyclotella stylorum	29 (21)	700 Melosira spp.	1 (1)
166 Diploneis interrupta	2 (1)	822 Neidium iridis	0 (0)
242 Thalassiosira bramaputrae	0 (0)	835 Neidium spp.	0 (0)
311 Caloneis lauta	0 (0)	854 Nitzschia spp.	0 (0)
364 Cymbella aspera	0 (0)	894 Pinnularia hemiptera	0 (0)
388 Cymbella minuta	0 (0)	930 Pinnularia viridis	0 (0)
404 Cymbella spp.	1 (1)	932 Pinnularia spp.	1 (1)
426 Diploneis ovalis	0 (0)	940 Stauroneis acuta	1 (1)
436 Diploneis yatukaensis	0 (0)	943 Stauroneis phoenicenteron	0 (0)
438 Diploneis spp.	1 (1)	951 Stephanodiscus astraea	13 (10)
454 Epithemia spp.	0 (0)		
474 Eunotia formica	0 (0)		

試料No. 5 深度 0.63 m ~ 0.68 m 総数 210

TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)	TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)
25 Camphylodiscus spp.	1 (0)	489 Eunotia pectinalis var.undul	0 (0)
73 Hyalodiscus scoticus	0 (0)	491 Eunotia praerupta var.bidens	0 (0)
80 Melosira sulcata	0 (0)	500 Eunotia spp.	0 (0)
94 Nitzschia cocconeiformis	0 (0)	635 Hantzschia amphioxys	0 (0)
150 Actinocyclus normanii	43 (20)	684 Melosira granulata	75 (36)
161 Cyclotella stylorum	28 (13)	700 Melosira spp.	3 (1)
166 Diploneis interrupta	0 (0)	822 Neidium iridis	0 (0)
242 Thalassiosira bramaputrae	7 (3)	835 Neidium spp.	0 (0)
311 Caloneis lauta	0 (0)	854 Nitzschia spp.	0 (0)
364 Cymbella aspera	2 (1)	894 Pinnularia hemiptera	0 (0)
388 Cymbella minuta	0 (0)	930 Pinnularia viridis	0 (0)
404 Cymbella spp.	2 (1)	932 Pinnularia spp.	1 (0)
426 Diploneis ovalis	0 (0)	940 Stauroneis acuta	0 (0)
436 Diploneis yatukaensis	0 (0)	943 Stauroneis phoenicenteron	1 (0)
438 Diploneis spp.	1 (0)	951 Stephanodiscus astraea	45 (21)
454 Epithemia spp.	1 (0)		
474 Eunotia formica	0 (0)		

試料No. 8 深度 0.72 m ~ 0.77 m 総数 201

TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)	TAXA CODE & NAME	NUMBER (%)
25 Camphylodiscus spp.	0 (0)	489 Eunotia pectinalis var.undul	4 (2)
73 Hyalodiscus scoticus	0 (0)	491 Eunotia praerupta var.bidens	1 (0)
80 Melosira sulcata	0 (0)	500 Eunotia spp.	1 (0)
94 Nitzschia cocconeiformis	0 (0)	635 Hantzschia amphioxys	17 (8)
150 Actinocyclus normanii	0 (0)	684 Melosira granulata	27 (13)
161 Cyclotella stylorum	4 (2)	700 Melosira spp.	2 (1)
166 Diploneis interrupta	0 (0)	822 Neidium iridis	6 (3)
242 Thalassiosira bramaputrae	2 (1)	835 Neidium spp.	3 (1)
311 Caloneis lauta	6 (3)	854 Nitzschia spp.	1 (0)
364 Cymbella aspera	2 (1)	894 Pinnularia hemiptera	2 (1)
388 Cymbella minuta	1 (0)	930 Pinnularia viridis	6 (3)
404 Cymbella spp.	6 (3)	932 Pinnularia spp.	22 (11)
426 Diploneis ovalis	20 (10)	940 Stauroneis acuta	0 (0)
436 Diploneis yatukaensis	45 (22)	943 Stauroneis phoenicenteron	1 (0)
438 Diploneis spp.	8 (4)	951 Stephanodiscus astraea	13 (6)
454 Epithemia spp.	0 (0)		
474 Eunotia formica	1 (0)		

VI. まとめ

1. 旧石器時代

今回の調査において、包含層資料ではあるが旧石器時代の石器遺物が数点出土した。7 C、14 B トレンチの包含層から出土したナイフ形石器 6 点と翼状剥片 1 点は確実に旧石器時代の所産といえよう。

ナイフ形石器は復元長 4 cm 前後の小型品が 1 点、5 cm 以上の大型品が 5 点で、前者は二側縁加工や対向調整を施した特徴的なものである。同様の資料は同一台地北端部に位置する大阪市長原遺跡や八尾市八尾南遺跡でも出土している。長原遺跡では大型のナイフが搬入品であるのに対し、上記のような小型のものは現地で製作された臨機的、便宜的なものにとらえられている。

今回の資料は遊離したものであるが、二上山まで約 10 km と石材産地付近での状況を知る上で興味深い。

2. 縄文時代（石器群）

今回の石器群の発見は、今まで、上部包含層からのみ遺物が出土する状況であったこの地域において縄文時代に関する初めての遺構的性格をもった資料と言える。

主に目的剥片の獲得作業の址と思われるが、石器製作過程や、製作址においての遺物の残存状況の実例としても貴重な物と言える。

また、接合資料の例などから、持ち込まれた素材の状態まで推測できるものがみられ、二上山からの一日行程圏内で、石材原産地から離れた場所での石器製作にいかなる石材が持ち込まれたかという問題に対しても資料を提供できるものであった。

中位段丘の上部包含層出土の石鏃などによって、この地域が縄文時代にはそれらの消費地であった可能性が推測されるが、それに使用する石鏃製作の場が段丘崖を下った谷底平野で発見された事になる。

しかし、この地域では縄文土器の出土は非常に少なく、過去の河原城遺跡の調査で、縄文時代晩期の土器片がわずかに出土しているにすぎない。今後発見の可能性は残るが、現状では、集落が存在した可能性は低いように思われる。キャンプサイト程度のもは存在したと思われるが、集落から狩猟の場へ出かけ、その場で使用する石器を製作している状況が考えられ、縄文人の生活行動のパターンとして興味深いものがある。

また、その頃古環境に関する情報が得られたのも一つの成果である。少なくとも 10000～9000 年前、温暖化に向かいながらもやや冷涼な時期、落葉広葉樹林の広がる、東除川中流域のこの部分では、谷の埋没が一旦終息し、形成された谷底平野は湿地状態で長期安定していた状況が復元できた。そしてその後、湿地は次第に乾燥し、土砂の供給と流失がほぼ均衡しながらも河川活動が活発化していく状況が読み取れた。

しかし、残された課題もまた多い。石器群の立地としては、同一母岩の石核が近い位置で出土している例や、一回の打撃で割れたものが一ヶ所に集中している例などから、その場で石器製作を行っていたと考えざるをえないが、その包含される層は滞水状態での堆積と思われる。黒色粘土層が上下 2 層に分

かれ、石器がその上層下面に接して分布する事から、一時的な濁水で下層が固まった状態の時にそこで石器を製作したと解釈する以外になかったが、何故、そのような場所を選択したのか、人が乗っても沈まないような状態まで乾燥した場合、乾痕などが後に残らない事もあり得るのかなど疑問は残る。

また、石器群自体に対しても、剥片の破損品が多いのに対し、そこから先の工程の未製品が皆無である事が疑問として残る。さらに、量的にまとまって出土した楔形石器が、新たな資料として提示できるものの、石器製作の中でいかなる位置づけができるのかは結論が出せない問題として残った。

その他、ほとんど調整を行わず、礫面をそのままに剥片を採取しようとしているためか、剥片の破損・失敗品が非常に多い事や、まだ剥片採取が可能と思われるような石核がそのまま残されているなど、実際に石器群に接して感じる疑問も多かった。

もう一つ、今回は石器の製品による時期の推定と放射性炭素年代測定、花粉・珪藻分析による古環境復元から考えられる年代が、整合性を持つものとなったが、数少ない製品からの年代推定は考古学的に不確定要素の強いものである。縄文時代早期の実年代も未だ不確定な部分も多いなか、土器の出土していない今回の石器群は、むしろ、花粉・珪藻の分析により裏付けもとれた放射性炭素年代測定の結果に純粋に従ったほうが良いと思われる。

3. 古墳時代前期

ここでまとめるのは、A地区において東除川の氾濫原より出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器に関しての事となる。

1991～2年に、大阪府教育委員会がやや下流側で調査した際も布留式の土器群が出土しており、(その1)の調査でも、今回の4Aトレンチより川側に一段河岸段丘を下った1Aトレンチにおいて、砂層中より弥生時代後期から布留式期後半までの土器が出土している。

それらと、今回の調査で出土した土器群を見ると、弥生時代後期の土器と思われるものは、数も少なく、器種も限られているので明確には判断できないが、庄内式併行期のものである可能性もあるように思われる。そして、生駒西麓産胎土の庄内式甕が存在している事から庄内式期は確実に、率的に一番多い布留式土器の様相を見れば、布留式期初期から半ばまでは確実にあり、後半の中でも末は含まない時期までのように思われる。

器種としては甕が多く、壺が若干見られ、手焙り形土器も1点ある。また府教育委員会の調査では高杯も出土しているので、組成的には集落の土器構成を反映している感が強い。

問題は、中位段丘上では、当該期の遺物が皆無であるという事である。その事と調査区の立地から、そこより東側の段丘上にはまず集落の立地する余地はないように思える。しかし、出土土器は完形率の高いものが多く、器面もほとんどローリングを受けていない。可能性としては、さらに上流の、調査区より南側の中位段丘縁辺に集落が立地していたように思える。上流側で谷の幅がせばまり、段丘が東へ突出しているあたりであろうか。

ともかく、これらの土器は、この地域の開発が古墳時代初頭頃には始まっていた事を示唆する。その内容は東除川の谷底平野の耕地開発であろう。現在、東除川左岸のこの地点では、土地条件図では下位面に分類され、地質図でも下位段丘面に分類される事もある部分が、完新世以降の河岸段丘である事が調査によって明らかになったが、それらの河岸段丘が形成される前の時点での水利体系の構築はさほど

困難を伴わなかったのかも知れない。

これらの土器のもう一つの特徴は、1例を除いて遺構出土のものがなく、それでいて完形率の高いものが存在している事である。特に4Aトレンチ4層内に埋没していた土器は、洪水による埋没か、あるいはその直後に掘り方が定かでないような状態の時に埋められたとしか考えられない状況であった。

そして、それ以後、古墳時代後期の集落の成立まで空白期が存在するように見える。しかし、府教育委員会調査時出土の遺物がやや新しい傾向があり、調査区内でもわずかに古墳時代中期の遺物も見られるので、将来的にその空白が埋まる可能性はあるように思える。

なお、今回の調査で出土した4Aトレンチ4層出土土器2は、庄内式から布留式に併存する、外反口縁胴部タテハケの長胴甕としてその全体形が分かる貴重な例である。また、その胴部に焼成後穿孔が見られるのも興味深い。

まとめて見ると、まだまだ、わずかな量の土器のみで、遺構もほとんどないような状況であるが、今回の調査でその出土状況のバリエーションが増え、少しは古墳時代前期の動向への手掛かりが増えたとは言えるかもしれない。当該期の古墳などが見られない地域ではあるが、それでも人の活動が存在した事を確実に土器の存在が示している。前後の時期を含め、将来その社会像が浮かび上がってくる事を期待したい。

4. 古墳時代後期～飛鳥時代

古墳時代後期後半からの集落は、今回、東除川の氾濫原で、流路から取水する溝群が発見され、それらがこの集落と併存する事から、氾濫原を耕地とした農業集落と考えられるようになったと言える。

この集落が決して唐突に出現したものではない事は、集落の変遷の考察の中で古墳時代中期から後期前半の土器の存在を示して述べたとおりである。

つまり、その前身となり、時期的につながる集落の存在を想定したのであるが、それなら、同じような集落はどこまで遡る事ができるのか。調査では古墳時代前期の土器が確認されており、東除川氾濫原の耕地開発が古墳時代前期に遡る可能性も考えられる。

しかし、調査区内での須恵器は最古のものでも、やや初期須恵器の雰囲気を残す、古墳時代中期中葉のもので、典型的な初期須恵器は確認されなかった。現状では遺物的には古墳時代前期の土器群との間には空白期を認めざるをえない。

だが、開発の契機となった動向としては、他に、黒姫山古墳を端緒とし、また盟主的存在とする古墳群の形成がある。黒姫山古墳の年代が、先述の、調査区内最古の須恵器と時期的に合うのである。

古墳群を形成するような勢力がこの地に進出し、その権力の下で耕地が開発され、集落が形成、維持されていく流れの中にこの集落を捉える事ができるのである。

隣接する郡戸遺跡で5世紀後半から6世紀前半の小方墳からなる古墳群が確認され、この集落と黒姫山古墳との間の時期を埋める。

また、この集落自体にも古墳が存在したかどうかは、周溝の巡る遺構が1基検出されただけの状況では不確定だが、調査区内にも須恵器甕の土器棺墓が存在する事などから、可能性を否定できないと思われる。しかし、古墳が存在したとするなら、集落との関係が問題となろう。

集落存続期間で最大の画期は飛鳥時代への境目で、竪穴式住居から掘立柱建物への一斉転換にある。

特にそれが、私有財産、敷地概念の顕在化として現れ、その後世帯格差が広がる傾向を見せるのは、それが単なる住居形態の変化に止まらなかった事を示している。

おそらくは推古朝の対外政策において大阪湾岸に通じる道路の重要性が増し、その中で丹比道も中央権力による支配が強まった事がそのきっかけであろう。隣接する郡戸遺跡の北西端で検出された、飛鳥時代に短期間出現する建物群はその動向と関係するものかもしれない。

その中で従来、在地的な勢力による統制を受けていた集落が、村の姿を一新する事を契機にある程度その統制を抜け出したかのように思える。

しかし、同じ時、在地首長の館と考えられる平尾遺跡が近くに成立しており、直接支配は強まったようにも思える。

つまり、中位段丘を葬地とし、氾濫原の開発に植民的集落を作り、それを統制するのみだった地域支配者が、中央権力の進出に伴って直接支配に乗り出し、いままでの均質的な統制よりも、さらなる開発のために、集落の内的発展を利用するようになったとも考えられる。

しかし、この集落の廃絶が、氾濫原の河道変更による取水施設の廃絶に伴うものであった事は一つ象徴的である。狭山池築造による中位段丘上の灌漑の可能性とは無縁のこの動向は、むしろ狭山池よりも前から存続していた集落が、その開発とは関係の薄いものとして切り離されていた可能性を示唆しているように見える。

5. 奈良時代

この時期の河原城遺跡周辺には、丹比廃寺、丹比神社、黒山廃寺といった社寺が存在する。集落は当遺跡の他、丹上遺跡、太井遺跡、平尾遺跡などで見つかっており、前述の社寺をとりまくように分布する様相が見られる。また、丹上遺跡の北側には古代以来大和へ至るルートとして重要な竹内街道（丹比道）が東西に走っている。この地域は『古事記』や『日本書紀』などにみられる「丹比連」、「丹比真人」などの本拠地と推定されており、上記の社寺・遺跡もこれに関わる施設と考えられる。

河原城遺跡の調査成果を振り返ってみると、古墳時代後期～飛鳥時代の建物群はB地区を中心に分布していたが、8世紀になると希薄になり、南側の開析谷周辺や北側のC地区に分布するようになる。今回の調査では7Cトレンチで検出された掘立柱建物群に該当する。なお、集落は8C後半頃廃絶する。

奈良時代の建物群に関して注目されるのは、鍛冶関連遺構の存在である。今回の調査では、建物群の周辺で炭・焼土を含む1395土坑が検出された。また、韃の羽口・鉄滓も出土している。（その1）の調査地でも鍛冶炉の下部構造と推定される土坑が確認されており、出土した鉄滓・鍛造剥片の理化学的分析も行われている。その結果、一定程度精製された鉄塊を持ち込んで、それを鍛冶作業によって刀子などの道具へと加工していたと考えられている。これらのことから、集落内に鍛冶集団が存在し、建物の内部や周辺で作業を行っていた状況が推定されるようになった。

また、今回の調査では中空円面硯や圈脚円面硯といった特殊な硯も出土している。さらに、軒丸瓦片が1点と、この時期に属すると考えられる平瓦片が少量出土している。軒丸瓦は細片であり型式・同範関係は不明瞭な点が多いが、（その1）調査時には複弁形式軒丸瓦で、平城宮6282A型式系に属する丹比廃寺同範軒丸瓦が出土している。これらのことから周辺寺院との関連も示唆される。

以上のように今回の調査からも、古代多治比地域に位置する一集落の内容の一端が明らかになったと

いえよう。

6. 平安時代以降

相対的にみると平安時代以降の遺構・遺物は希薄であるため、遺跡の状況は不明な点が多い。しかし、後世の削平により遊離していたものの、須恵器・土師器片とともに平安時代のものとみられる緑釉陶器、灰釉陶器片も少数ながら出土した。また、今回の調査では7Cトレンチの1360溝から中国黄釉耳付壺（10～11世紀）も確認された。

この様な遺物は通常の集落からは出土しがたく、平安時代にも調査区周辺では新たな展開があった可能性がある。

なお、近世までには河原城遺跡のような段丘上でも耕地開発は行われていたとみられ、調査区ではそれに伴うと考えられる井戸や溝が検出されている。

写真図版

1、7Ctr.4面（北東から）

左端は1378溝、中央に建物Ⅳ、その奥に建物Ⅴ、右に柵列Ⅱ、建物Ⅵ



2、7Ctr.1378溝（北から）

手前、溝両側に、溝埋めた後の耕地区画が残る。

断面セクションにかかるのは井戸1379



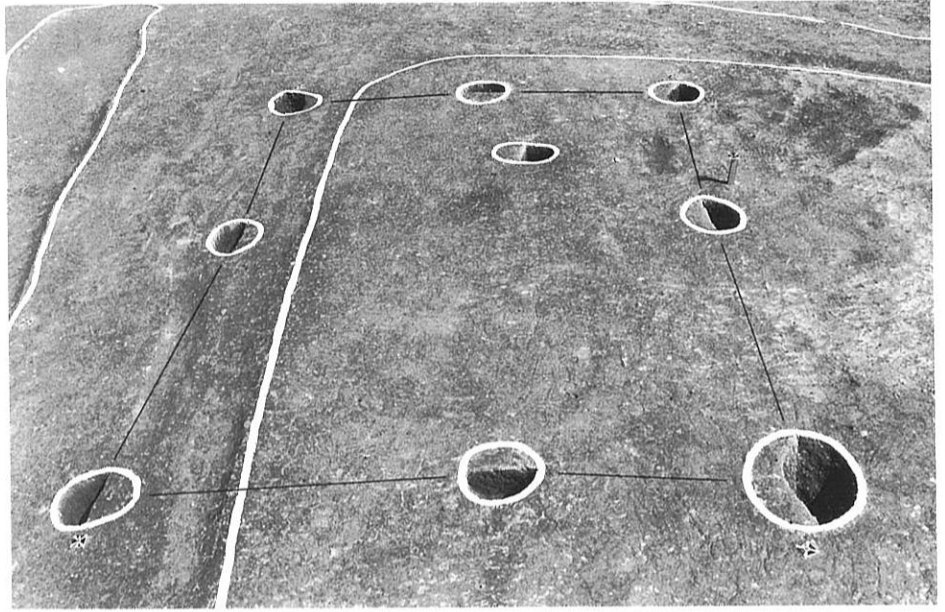
3、7Ctr.1378溝土器13出土状況（西から）



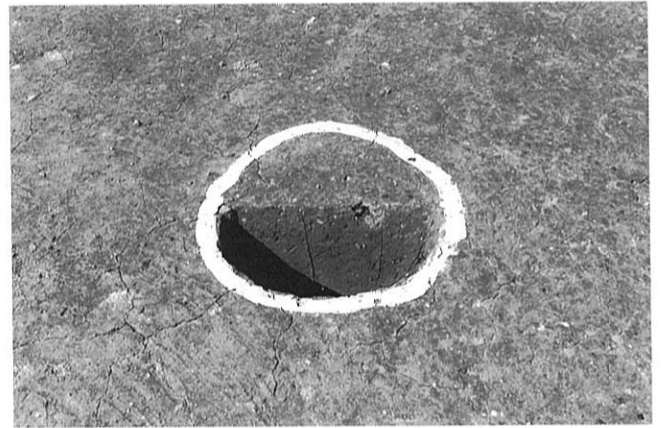
4、7Ctr.1378溝断面（北から）

図版 2

1、7Ctr.建物Ⅳ（西から）

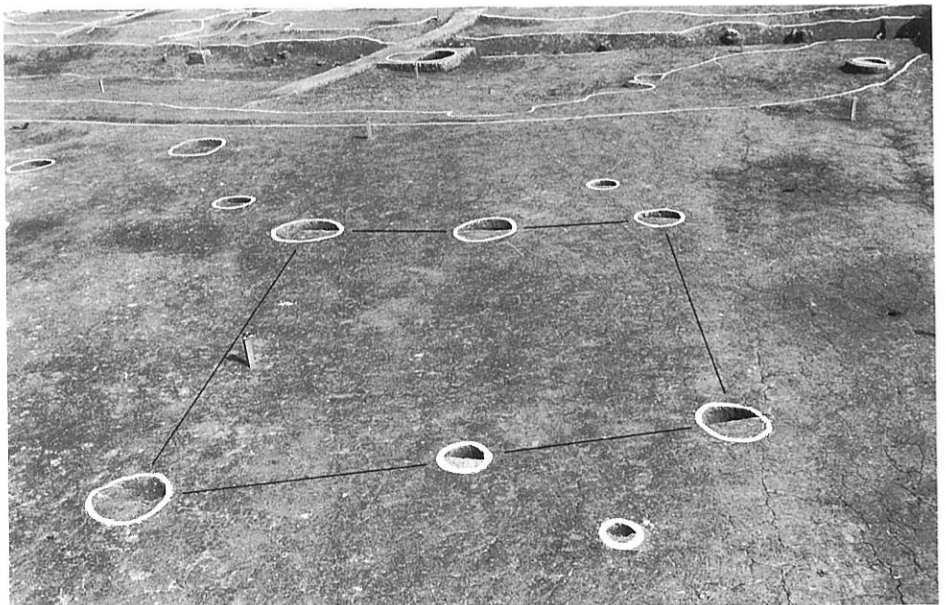


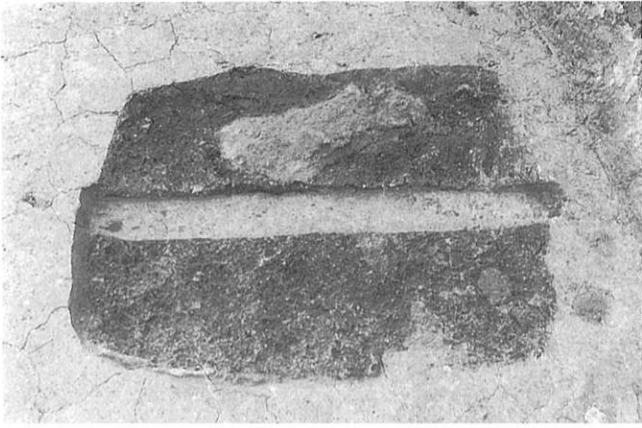
2、7Ctr.1379井戸断面（南から）
背景は1378溝、底はこの後上部除去して確認



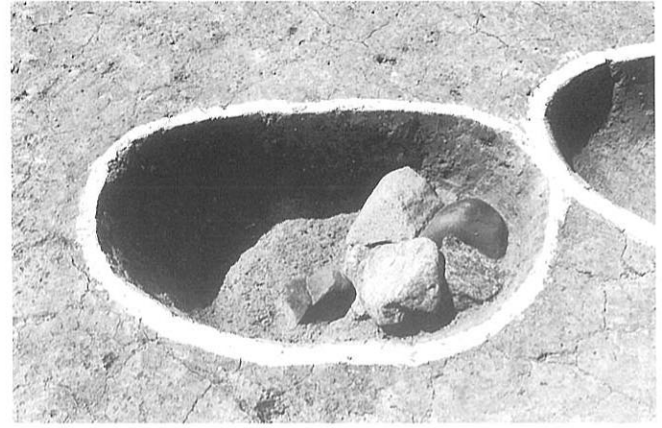
3、7Ctr.建物Ⅳ1367柱穴（東側棟持）断面（東から）

4、7Ctr.建物Ⅴ（西から）





1、7Ctr.1395土坑炭・焼土検出状況（東から）



2、7Ctr.1435土坑礫出土状況（北東から）



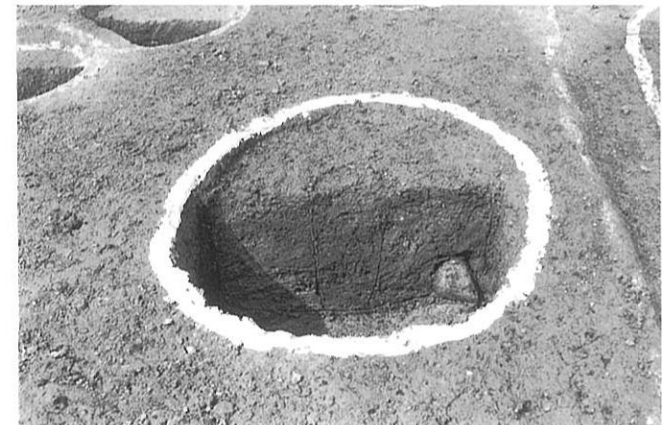
3、7Ctr.1360溝土器4(韃羽口)・鉄滓出土状況（南から）



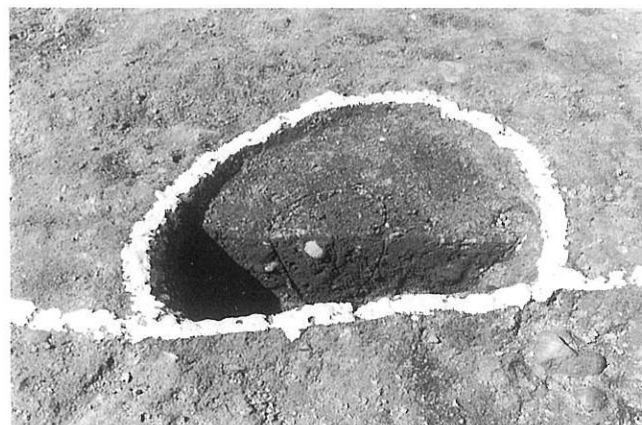
4、12Btr.北東壁断面（段丘崖斜面堆積）



5、13Btr.北壁断面（南西から）



6、13Btr.3面相当建物Ⅱ1310柱穴断面（東から）



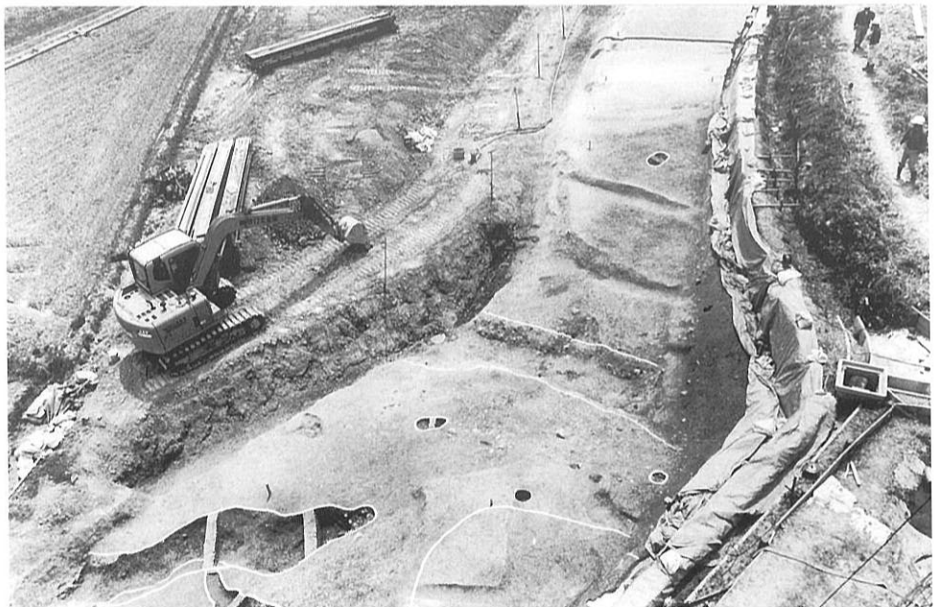
7、13Btr.3面相当面建物Ⅲ1339柱穴断面（東から）

図版 4

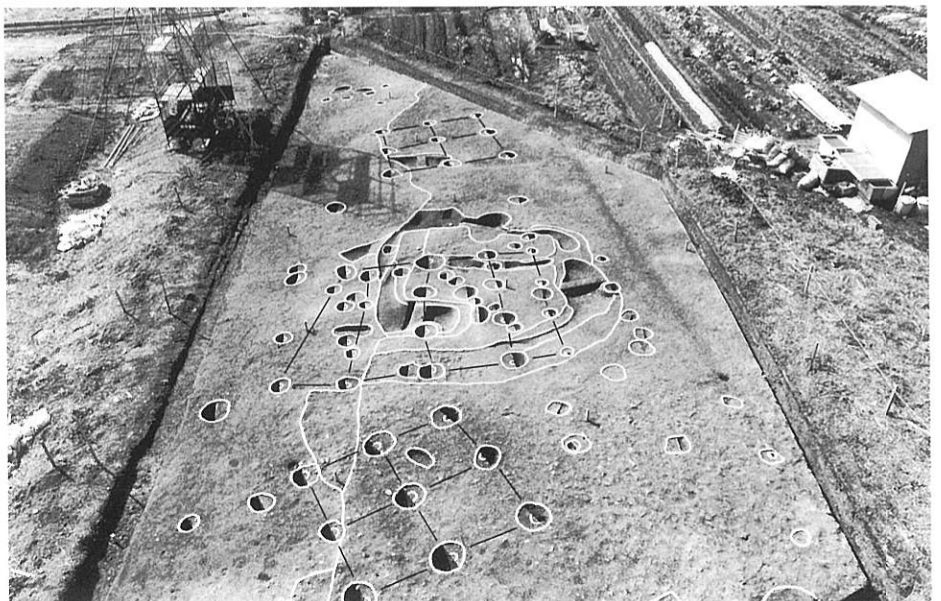
1、12Btr.北側2～4面
谷1(南から)
奥の段差上の遺構は中～近世
のもの

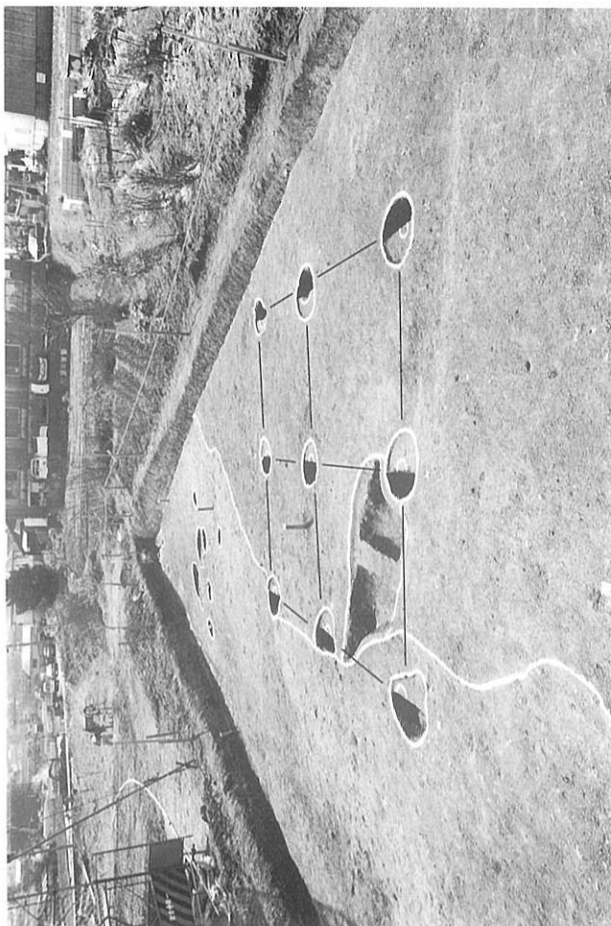


2、12Btr.4面谷2
完掘状況(北から)
谷1よりひとまわり大きい

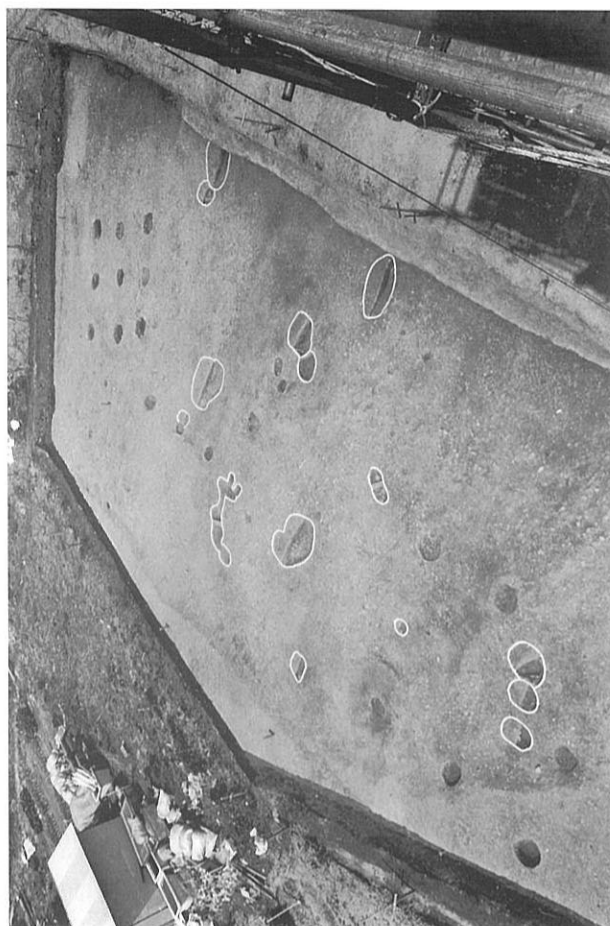


3、13Btr.3面相当面(北から)
手前から建物Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ

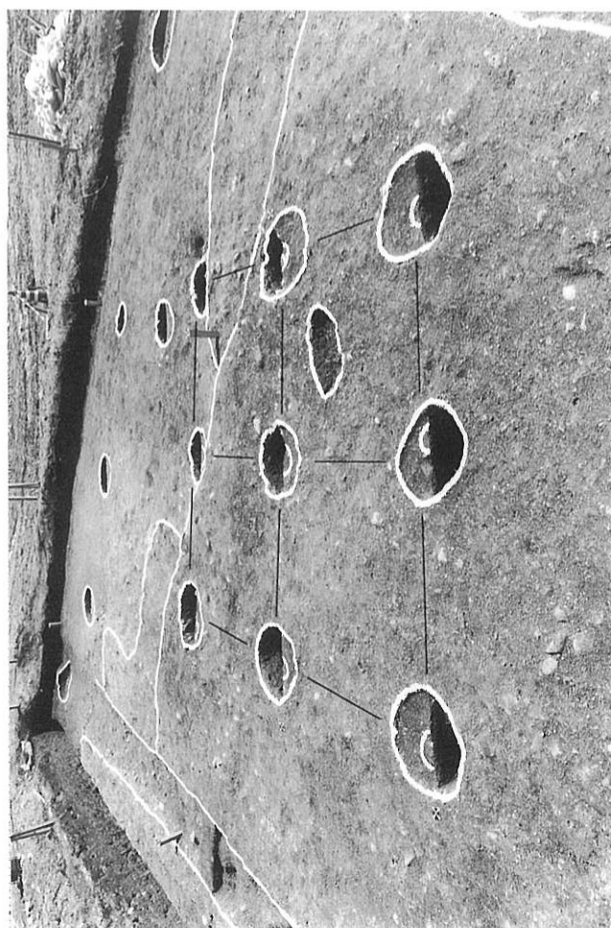




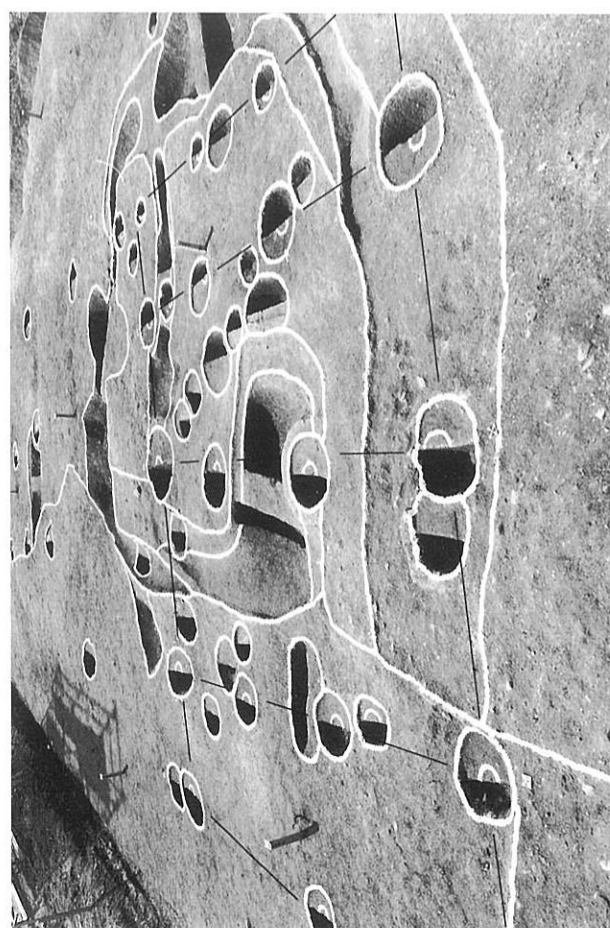
3、13Btr.建物Ⅲ (北から)



4、13Btr.4面 (南から)



1、13Btr.建物Ⅰ (南から)



2、13Btr.建物Ⅱ (北から)



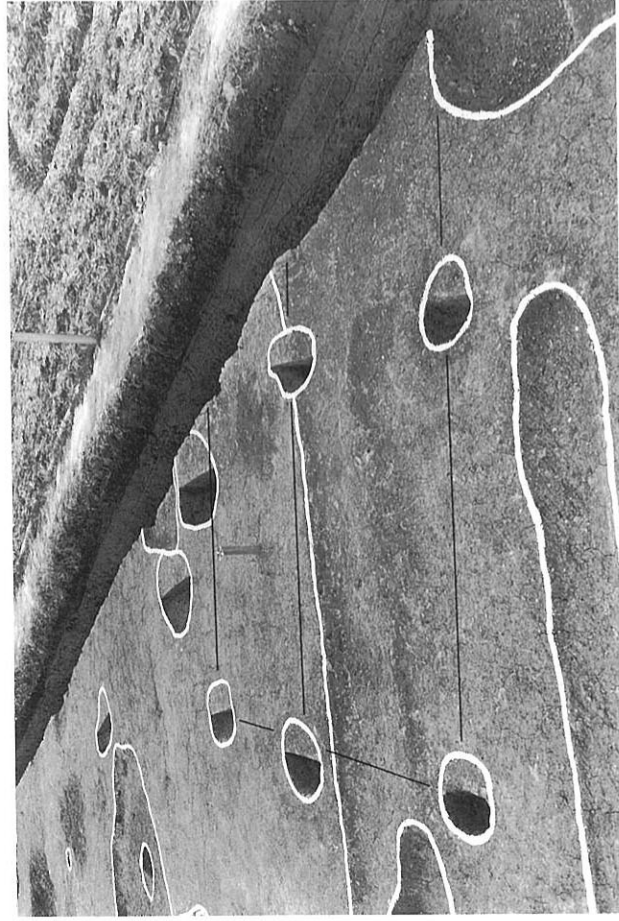
2、14Btr.4面東半南側（北西から）中央は住居Ⅰ、左下暗色はカマドⅠ



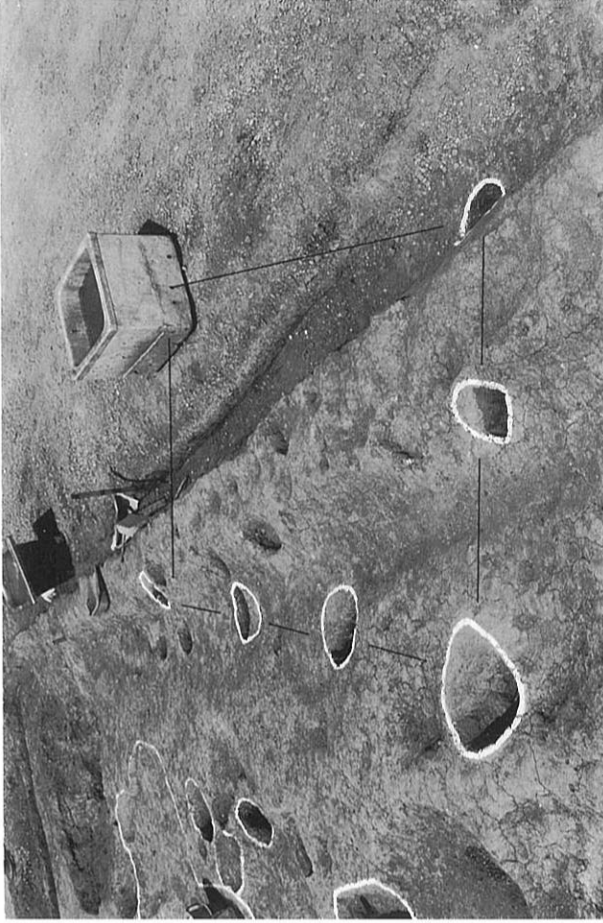
4、14Btr.建物Ⅶ（北から）



1、14Btr.4面東半北側（南西から）左は住居Ⅱ



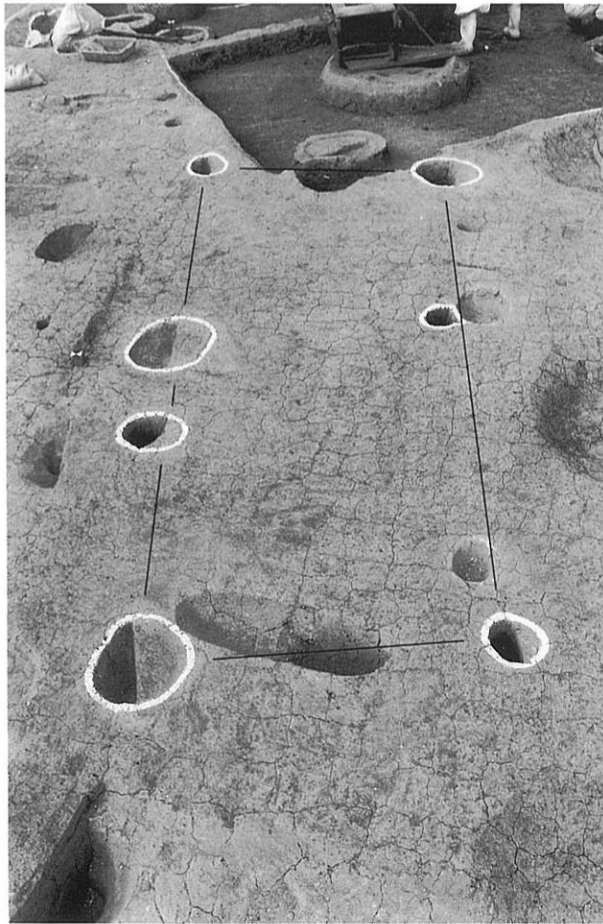
3、7Ctr.建物Ⅵ（北から）



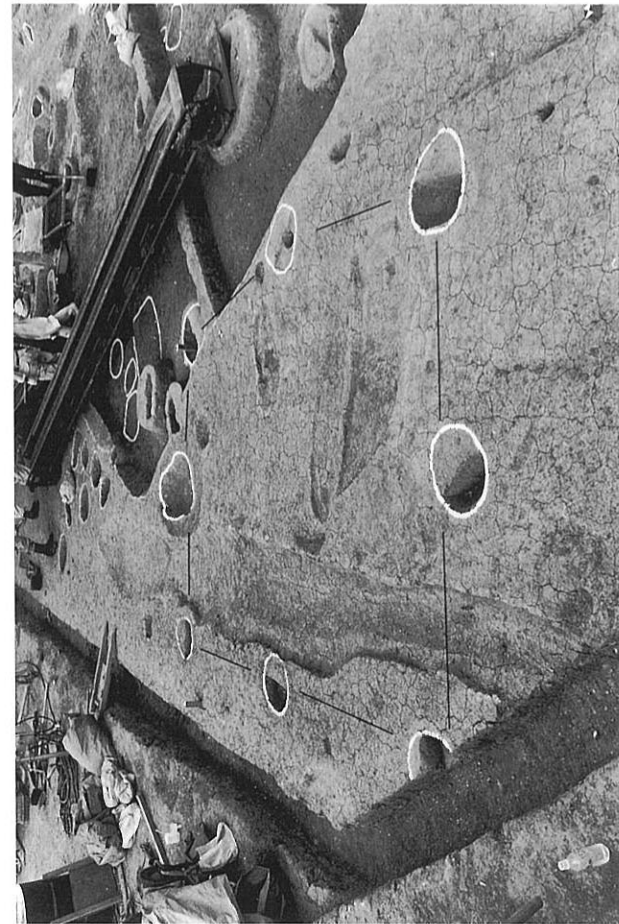
3、14Btr.建物X (南西から) 右上は (その1) の調査にあり



4、14Btr.住居Ⅱ完掘状況 (北から)



1、14Btr.建物Ⅷ (南から)



2、14Btr.建物区 (南から)

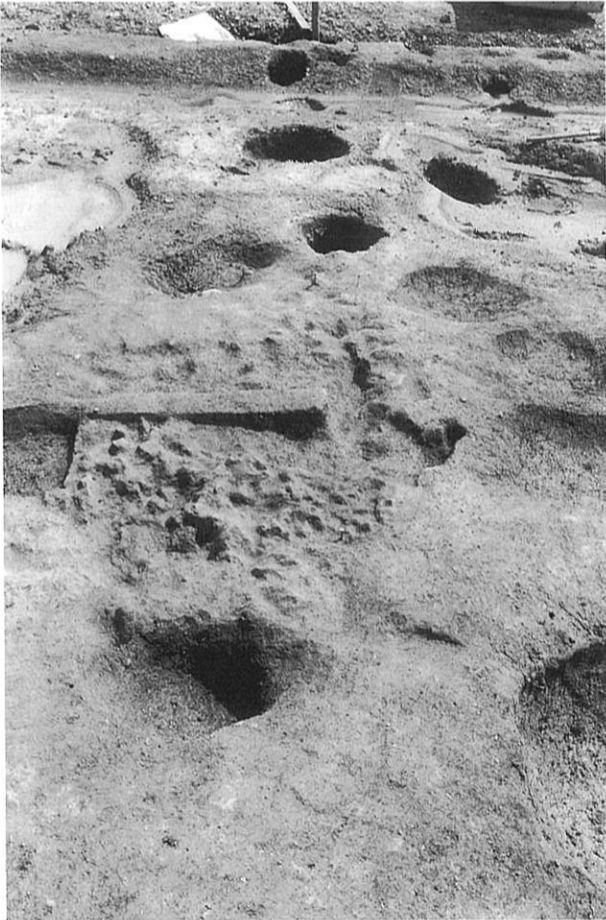
図版 8



1、14Btr.1786ピット土器出土状況（西から）



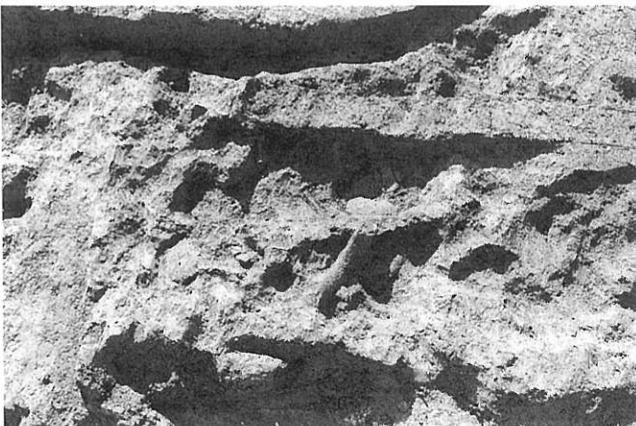
2、14Btr.1787溝土器3出土状況（南から）



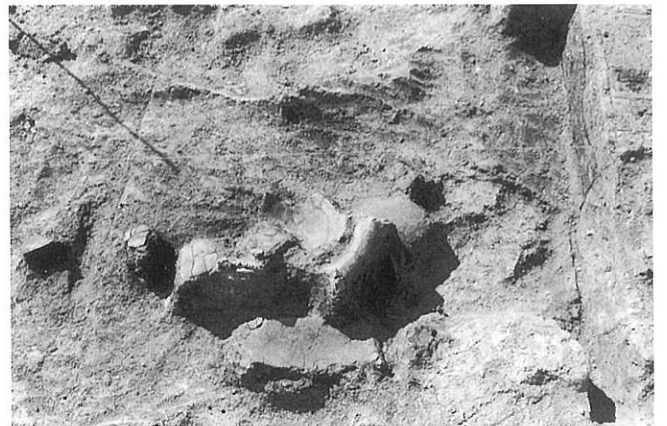
3、14Btr.カマド2検出状況（西から）



4、カマド2完掘状況（西から）



5、14Btr.カマド1掛口附近検出状況（東から）



6、カマド1掛口附近土器出土状況（東から）

1、14Btr.カマド1検出状況

(南から)

手前が焚口、その左側で焼土の下から炭化物が見える。



2、カマド1完掘状況 (南から)



3、カマド1焚口附近検出状況 (東から)



4、カマド1煙道部検出状況 (東から)

図版10

1、15Btr.4面（北から）

斜めに横切っているのが1776溝



2、2Atr.北端1～2面相当

（南東から）

段丘崖に斜面堆積・盛土のある状態



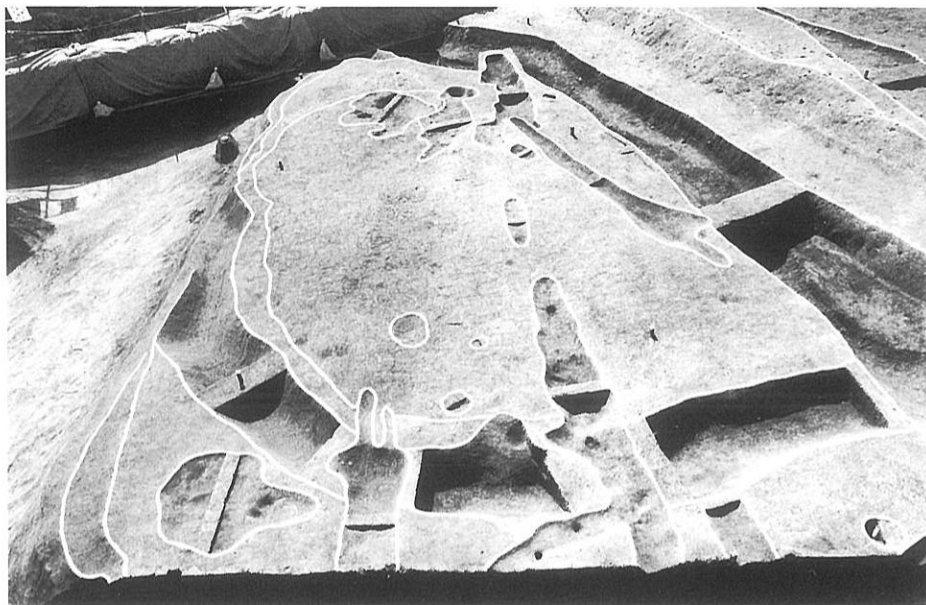
3、2Atr.北端3～4面相当

（南東から）

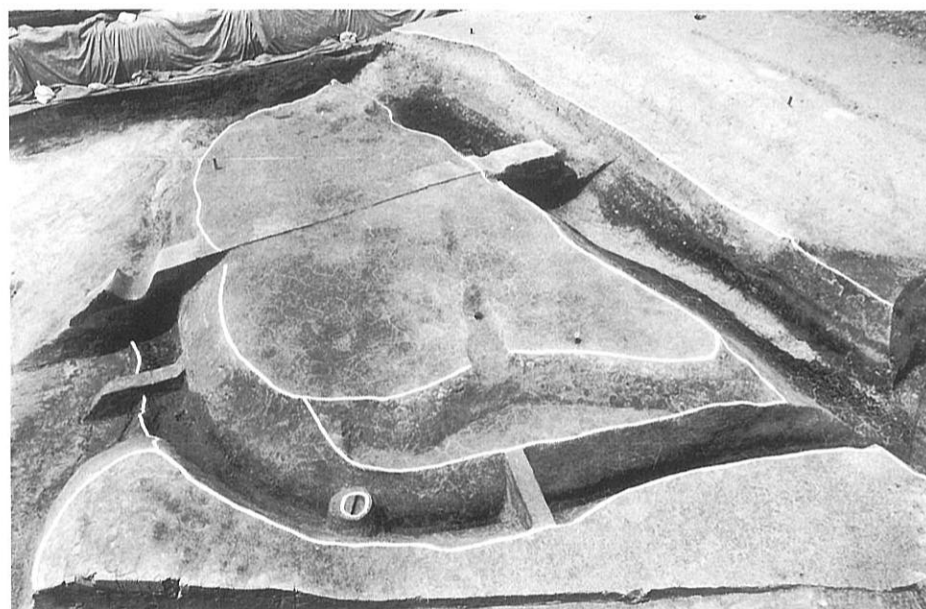
中世に整形を受けた段丘崖。左下は氾濫原側の4面



1、2Atr.北側4-1面（東から）
 段丘崖下、古墳～飛鳥時代溝群
 （右上1600溝、左～下1616溝）
 左側は1552流路



2、2Atr.北側4-2面（東から）
 右上1631溝・左～下1632溝

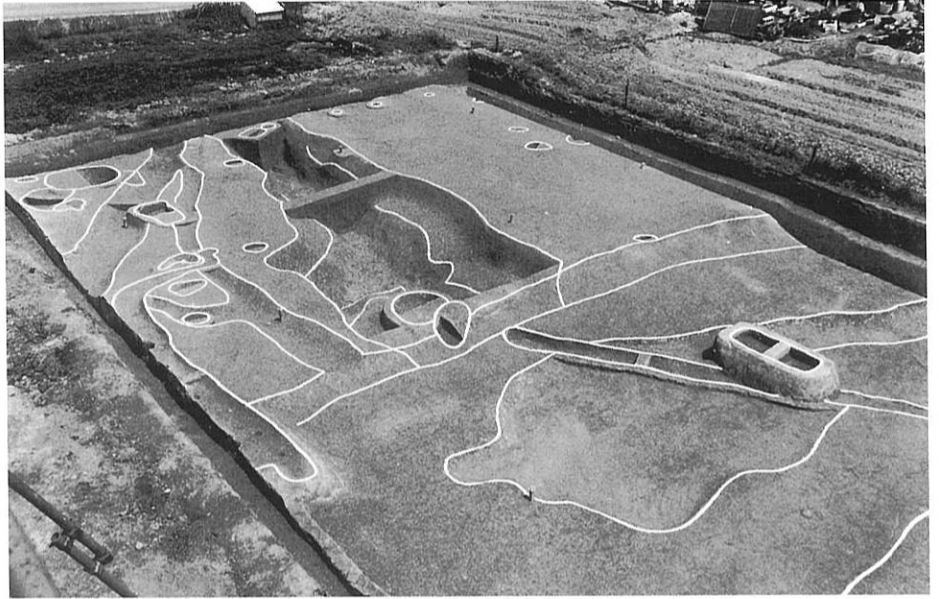


3、2Atr.南側4面（北東から）
 右下は1552流路、その左上は4
 面新（1546流路上面）

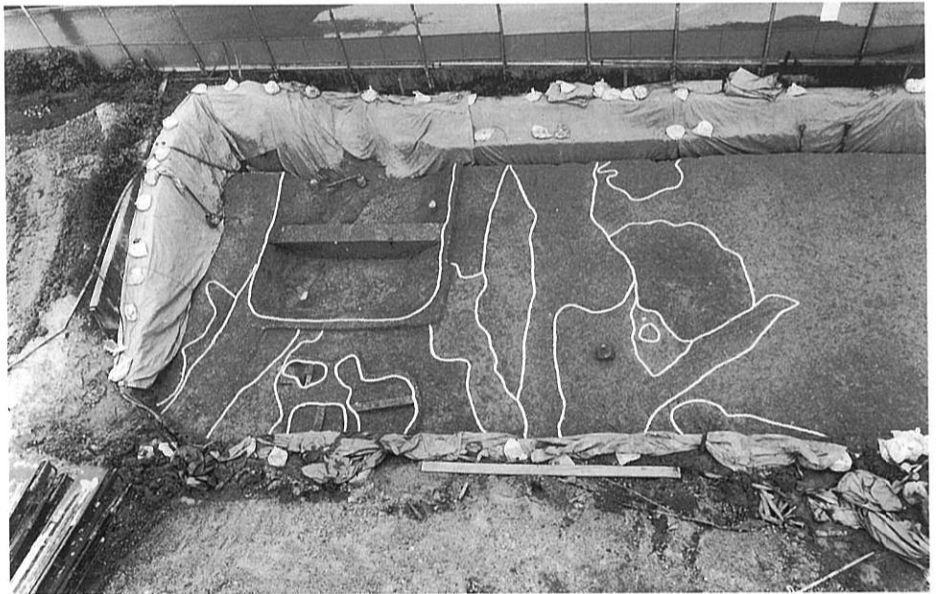


図版12

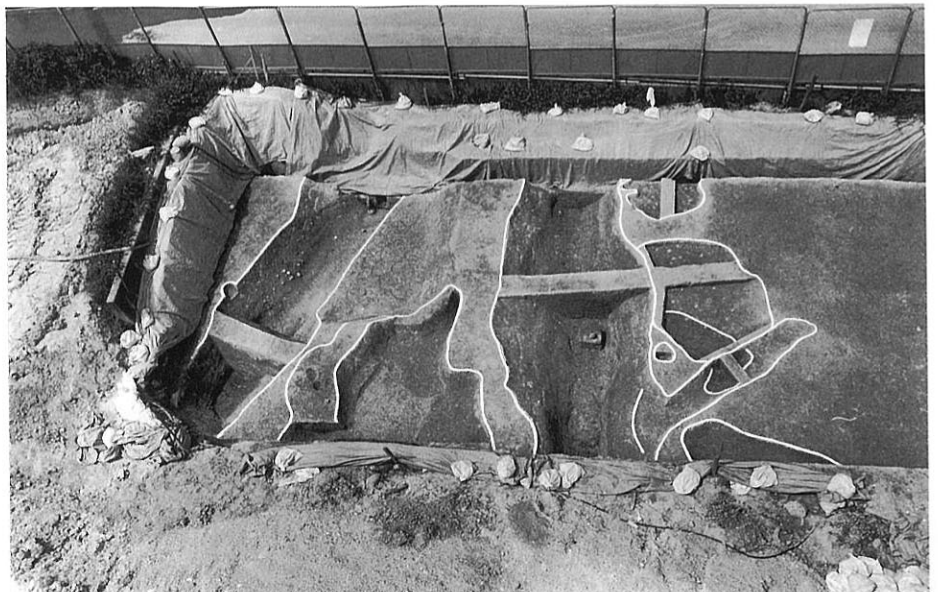
1、3Atr.北側3・4面（南西から）
台上の遺構は3面、右下1552流
路最上面、奥は1534溝（4面）



2、4Atr.北端部3面完掘、4面検
出状況（南から）
左上は1635土坑

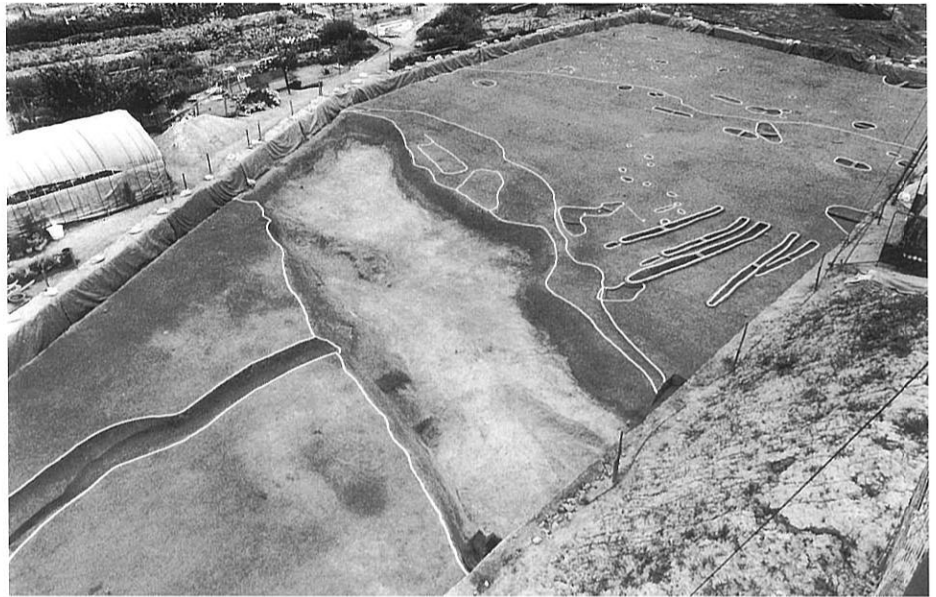


3、4Atr.北端部4面（南から）
左1600・1631溝（重複）右1534
溝



1、 4Atr.4面南側（北西から）

中央は1552流路、右上の白線は1546流路の肩（それより左下は4面新、右上は4面相当）



2、 3Atr. 南側3・4面（北西から）

台上の遺構は3面、右奥の白線が1546流路の肩、その右手前が1586落ち込み

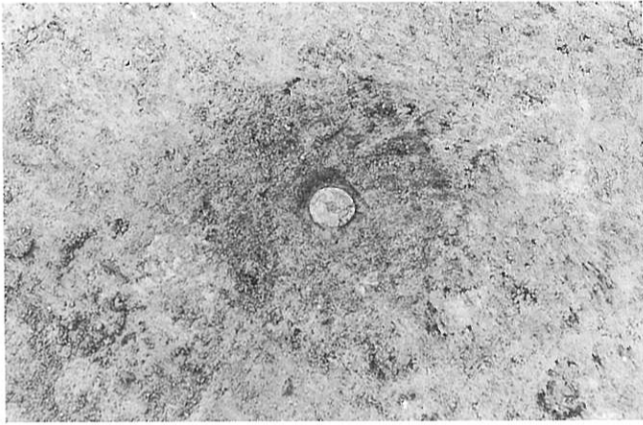


3、 4Atr.4面北側（西から）

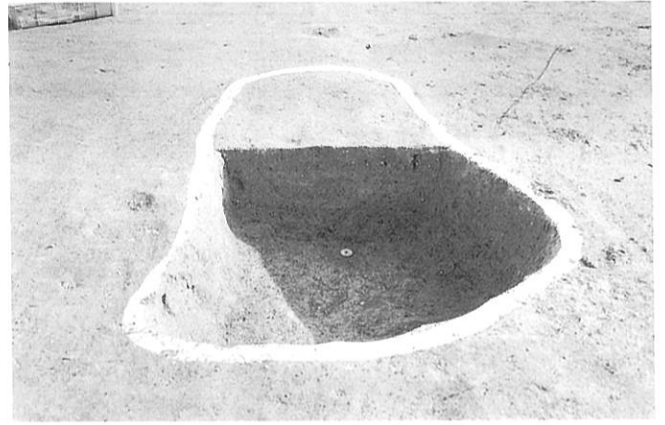
右は1552流路、中央の溝が1652溝



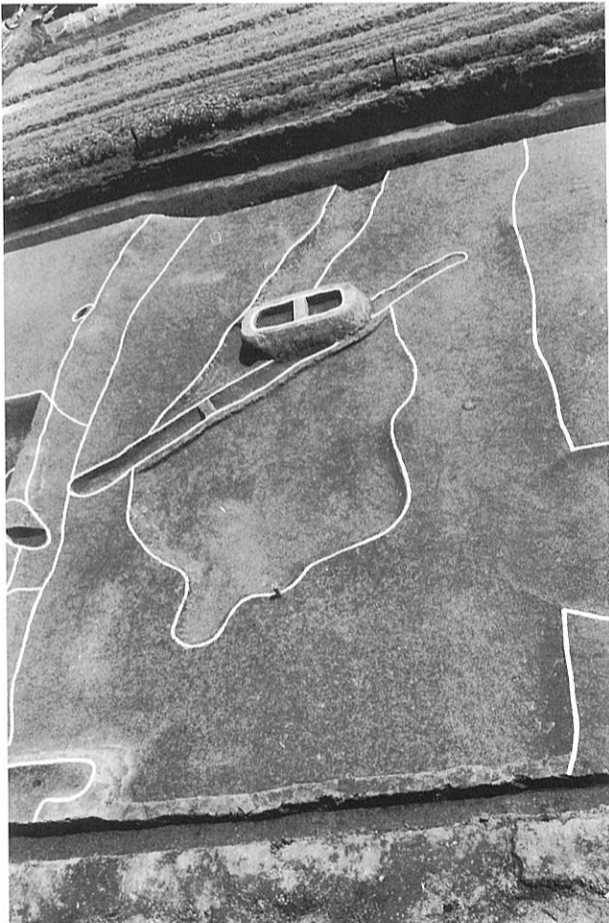
図版14



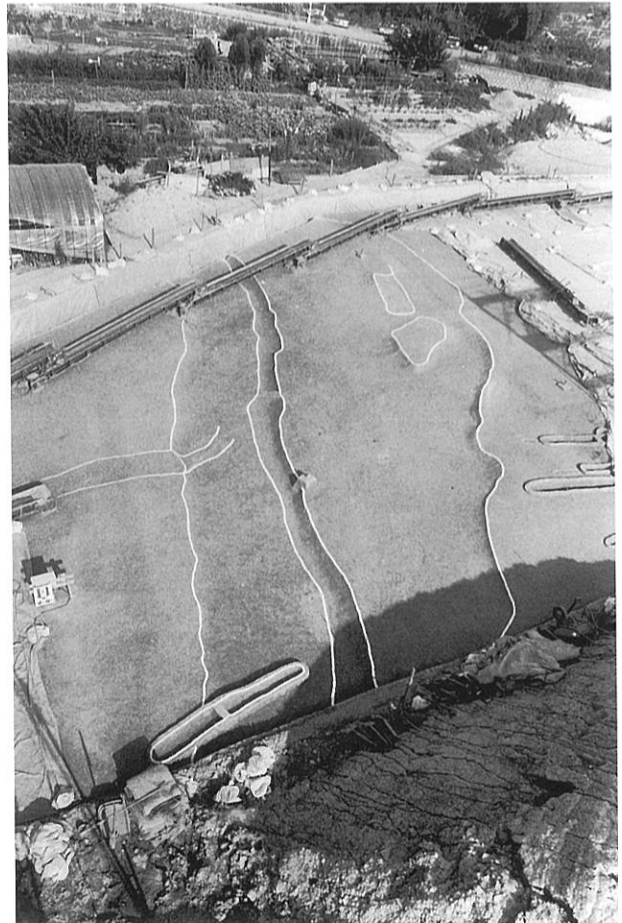
1、3Atr.2面銭出土状況
まわりの変色は金属イオンによるもの



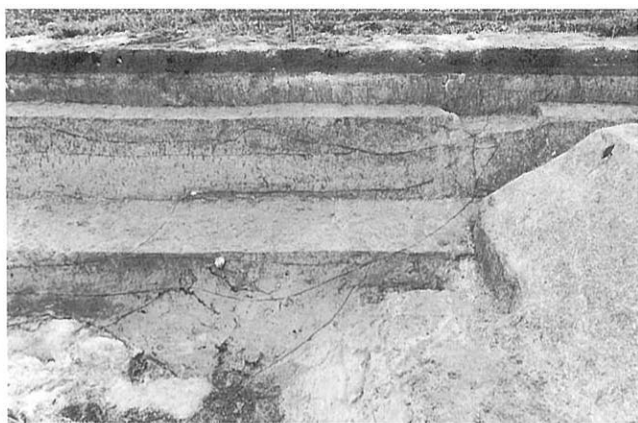
2、3Atr.3面1523土坑銭出土状況（北から）



3、3Atr.4面1552流路最上面（西から）
台上の遺構は3面



4、4Atr.4面1552流路最上面（西から）
左から1652溝が中程まで伸びる



1、3Atr.東壁断面1546流路南肩部（西から）



5、3Atr.4面1534溝断面（南から）



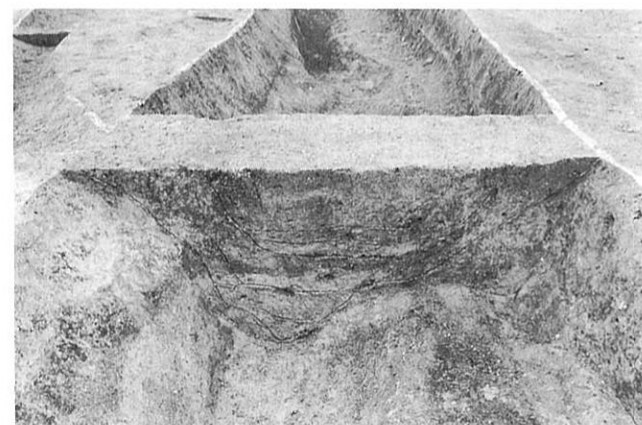
2、3Atr.東壁断面1546流路内噴砂（西から）



6、4Atr.4面1534溝土器出土状況（南から）



3、3Atr.東壁断面1552流路北側肩部（西から）



7、2Atr.4面1600・1631溝（重複）断面（東から）



4、3Atr.東壁断面1552流路以北（西から）



8、4Atr.4面1600・1631溝断面（西から）

図版16



1、2Atr.4-1面1616溝断面（北から）



2、2Atr.4-2面1632溝断面（北から）

3、2Atr.4面1634杭群
検出状況（東から）

奥はトレンチ西壁断面（右方に
土のう痕跡あり）、左は1552流路、
右は1631溝



4、4Atr.4面相当面土器1出土状況（南西から）



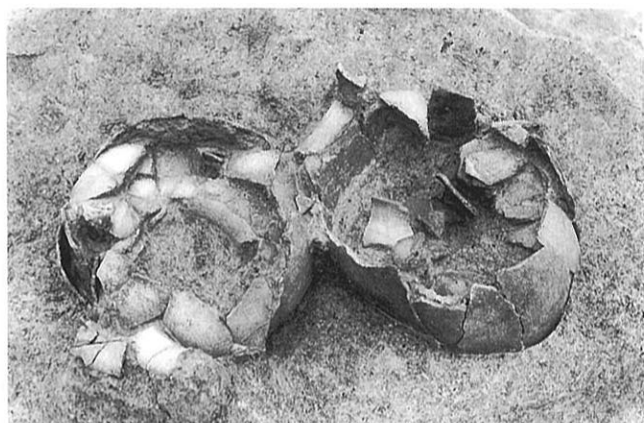
5、4Atr.4面相当面土器2出土状況（西から）



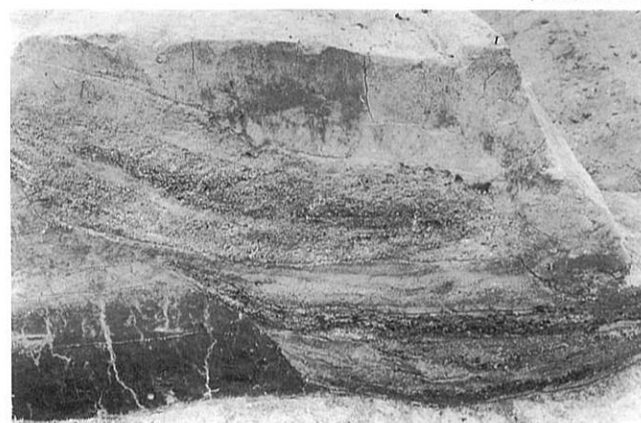
1、4Atr.4層内土器1出土状況（南から）



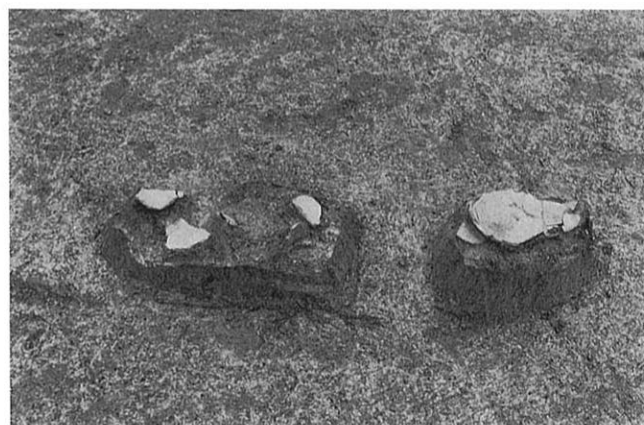
5、2Atr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁
（北東から）



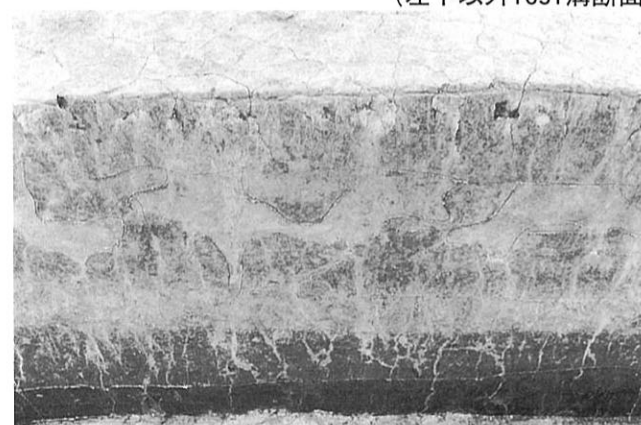
2、4Atr.4層内土器2・3出土状況（北東から）



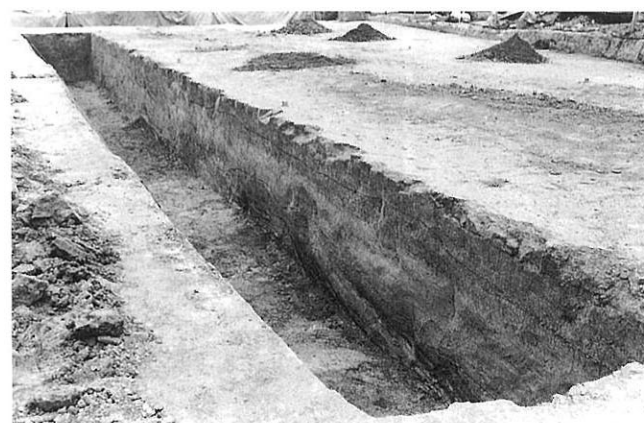
6、2Atr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁北端
（左下以外1631溝断面）



3、4Atr.4層内土器4出土状況（南から）



7、2Atr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁中央

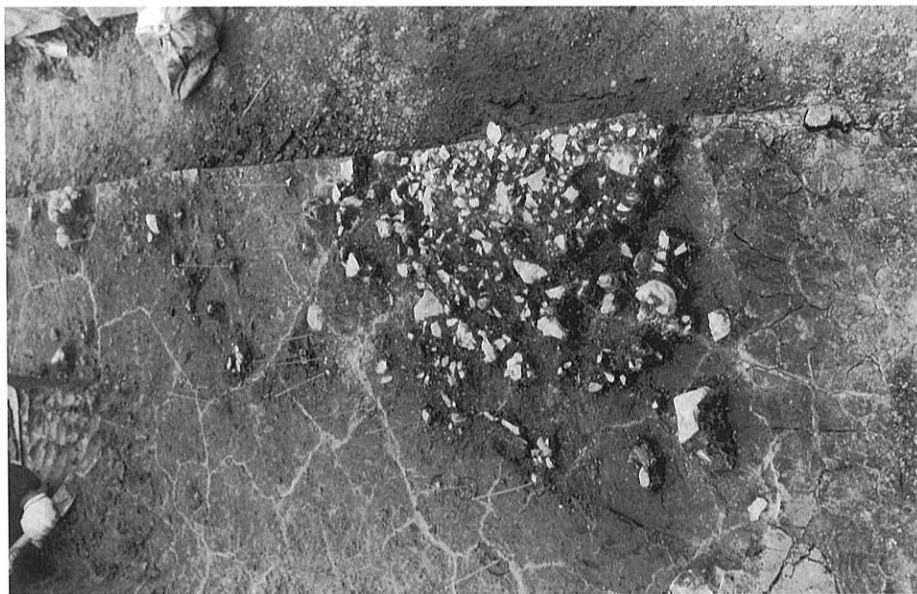


4、4Atr.南側4面以下深掘トレンチ西壁（北東から）



8、2Atr.北側4面以下断ち割りトレンチ西壁南端

2、2Atr.黒色粘土層内
石器出土状況（北から）
石器集中部1



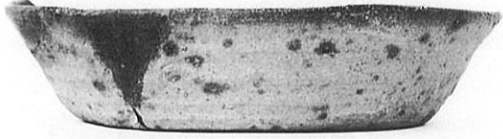
1、2Atr.黒色粘土層内石器出土状況石器集中部1 検出はじめ（西から）



3、2Atr. 黒色粘土層内石器出土状況石器集中部2(北から)



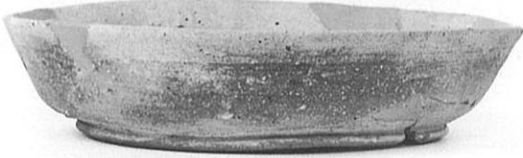
4、4Atr.北端深掘トレン
チ南壁西端（北東から）



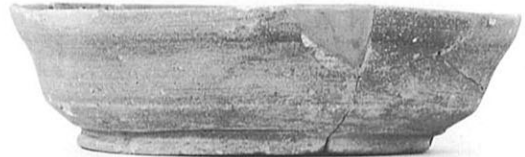
1



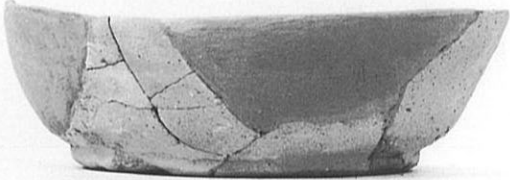
7



2



8



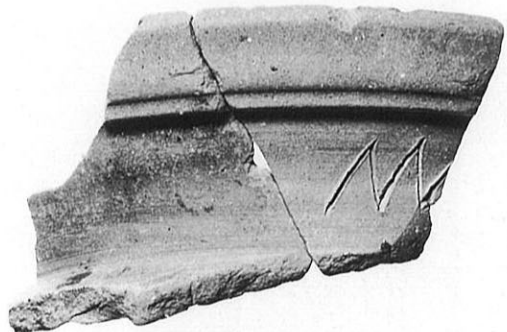
3



9



4



10



5



11



6



1



2



3



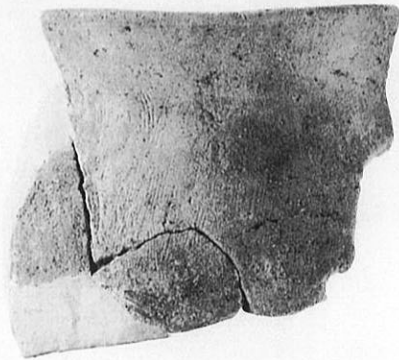
4



6



5



7



8



9



1



2



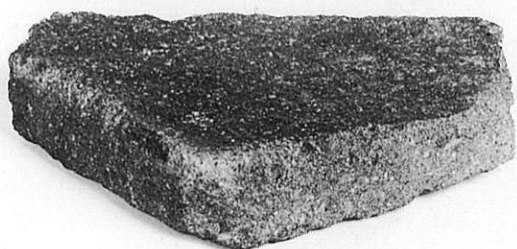
3



7



8



10-1



4



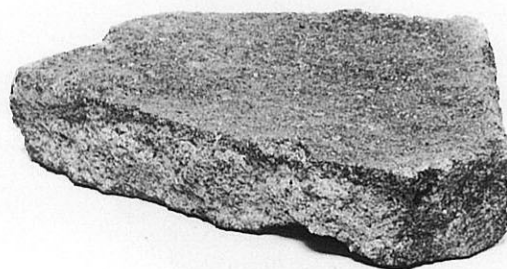
5



6



9



10-2



1



5



2



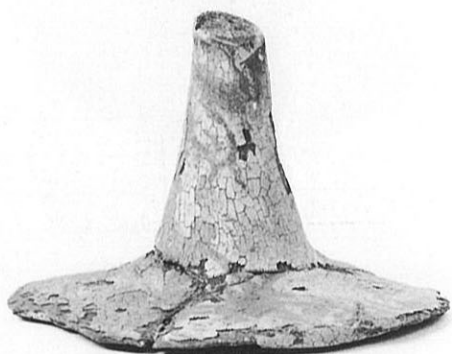
6



3



7



4



8



9



11



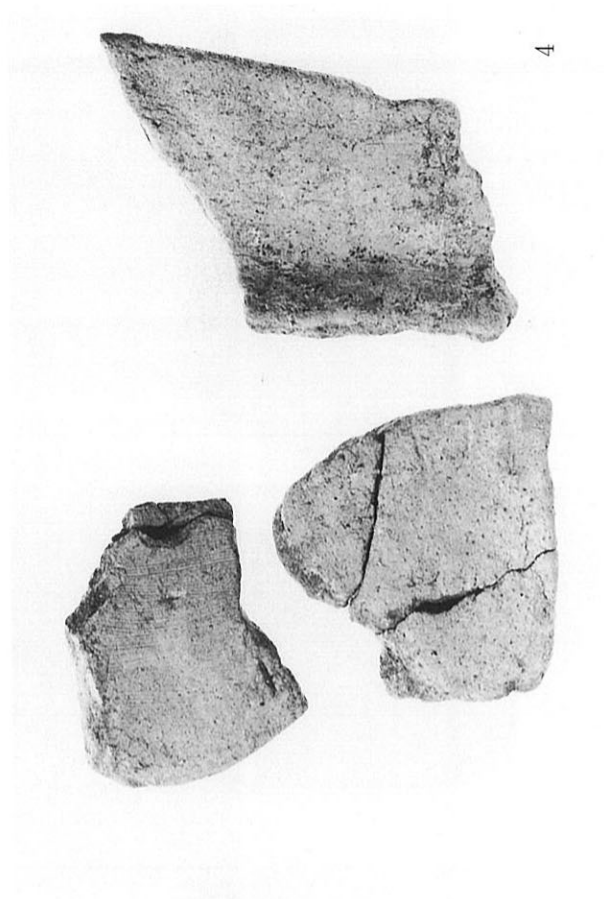
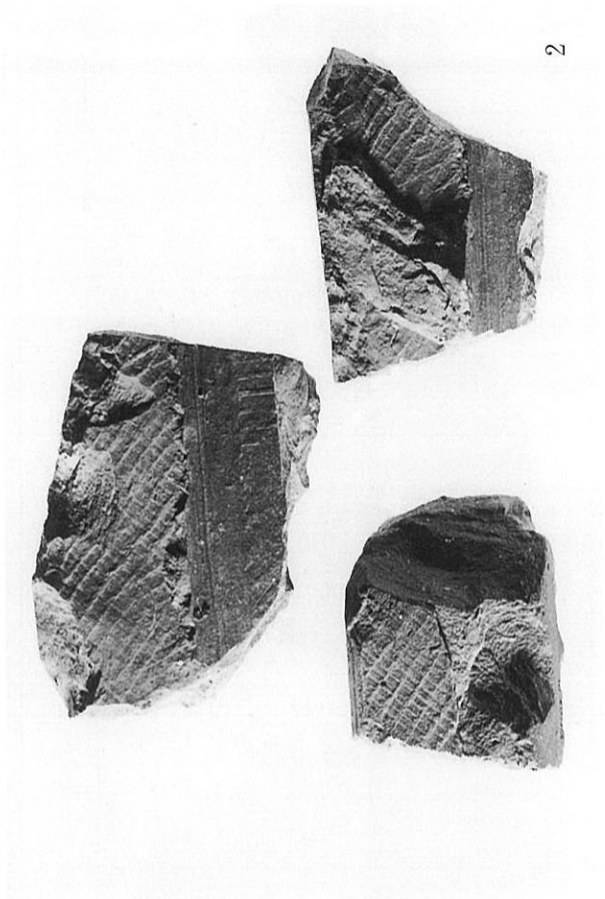
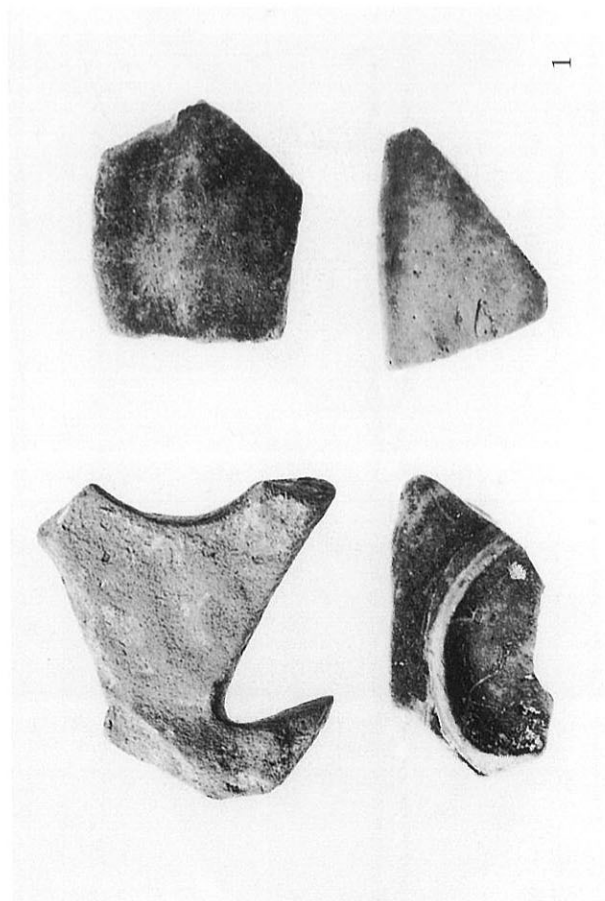
10

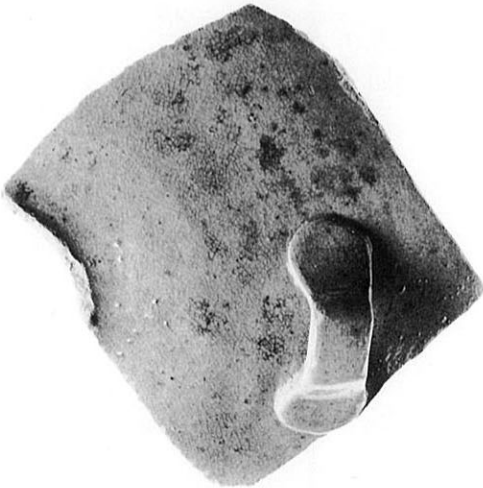


12

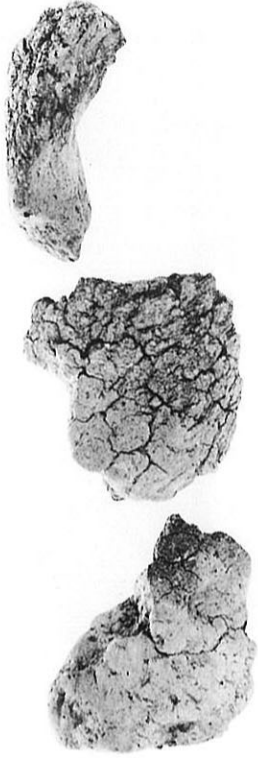


A地区 包含層出土遺物

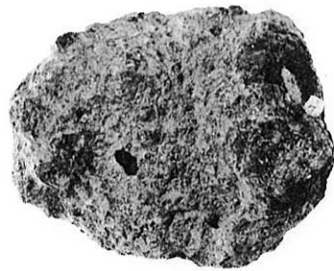




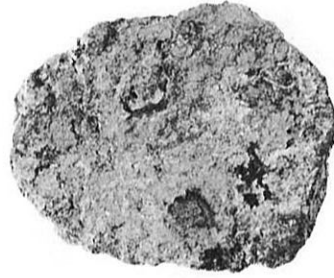
1



2

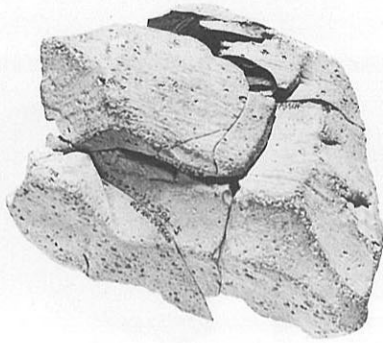


3-1

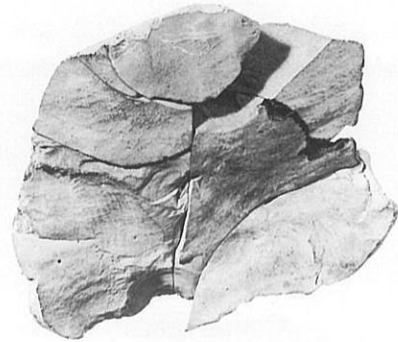


3-2





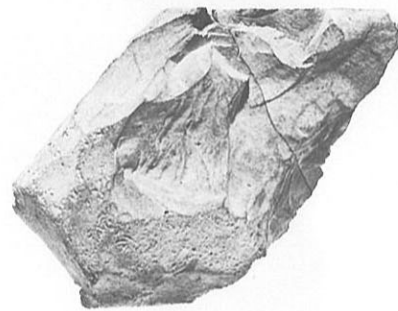
1-1



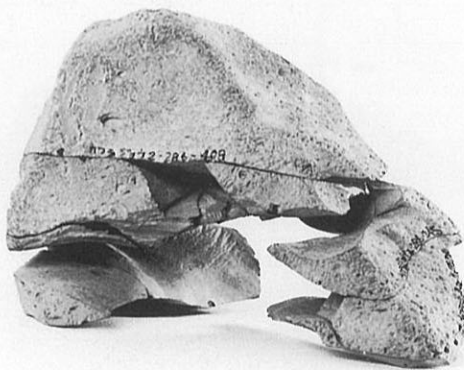
1-2



2-1



2-2



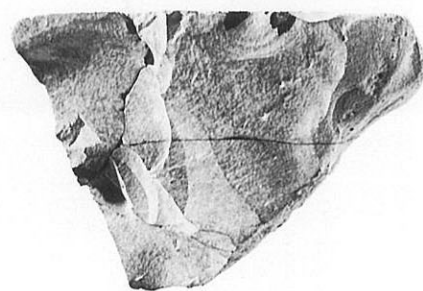
3-1



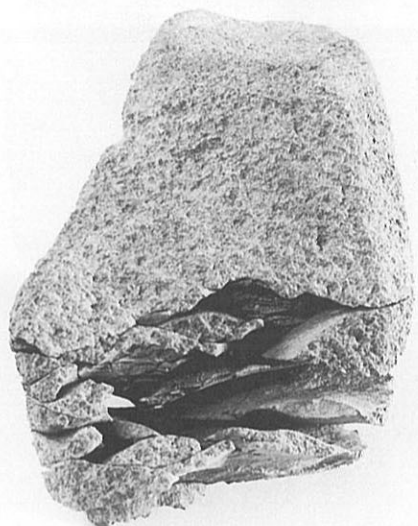
3-2



4-1



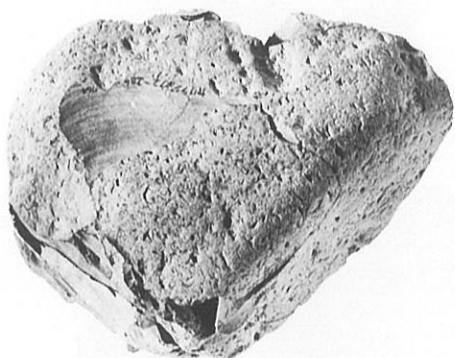
4-2



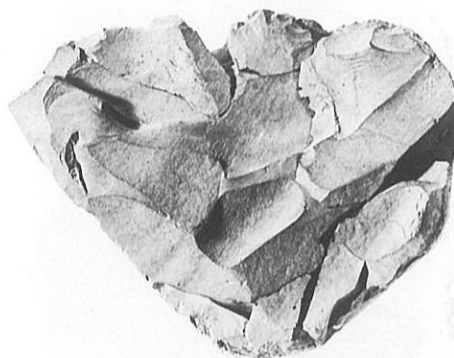
1-1



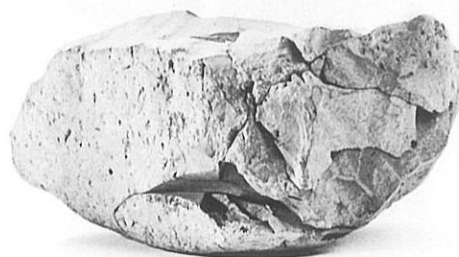
1-2



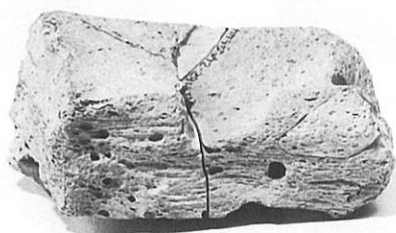
2-1



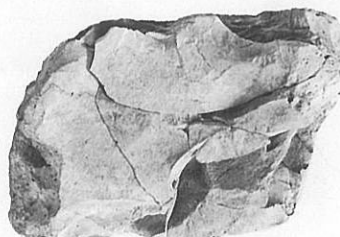
2-2



2-3



3-1



3-2



1-1



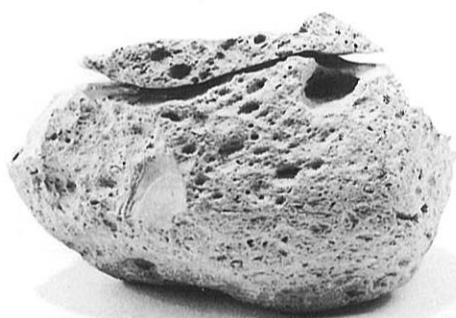
1-2



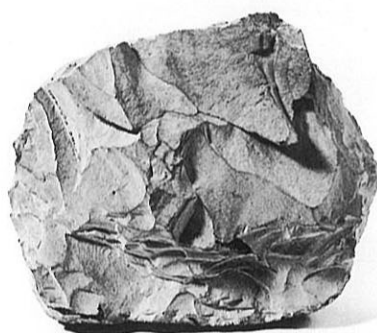
2-1



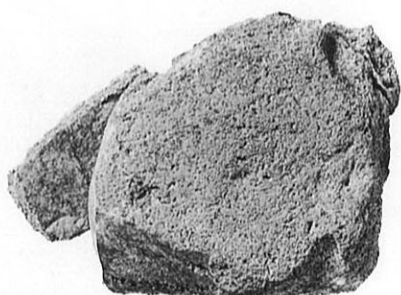
2-2



3-1



3-2



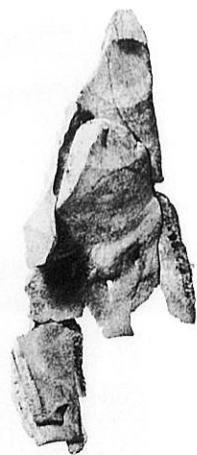
4-1



4-2



5-1



5-2



6-1



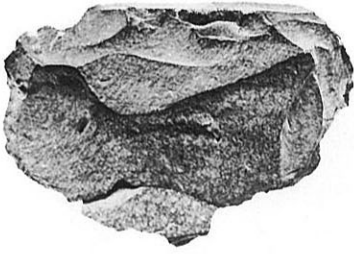
6-2



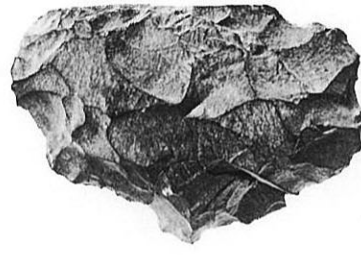
7-1



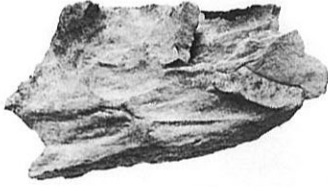
7-2



1-1



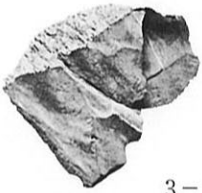
1-2



2-1



2-2



3-1



3-2



5-1



5-2



4-1



4-2



6-1



6-2



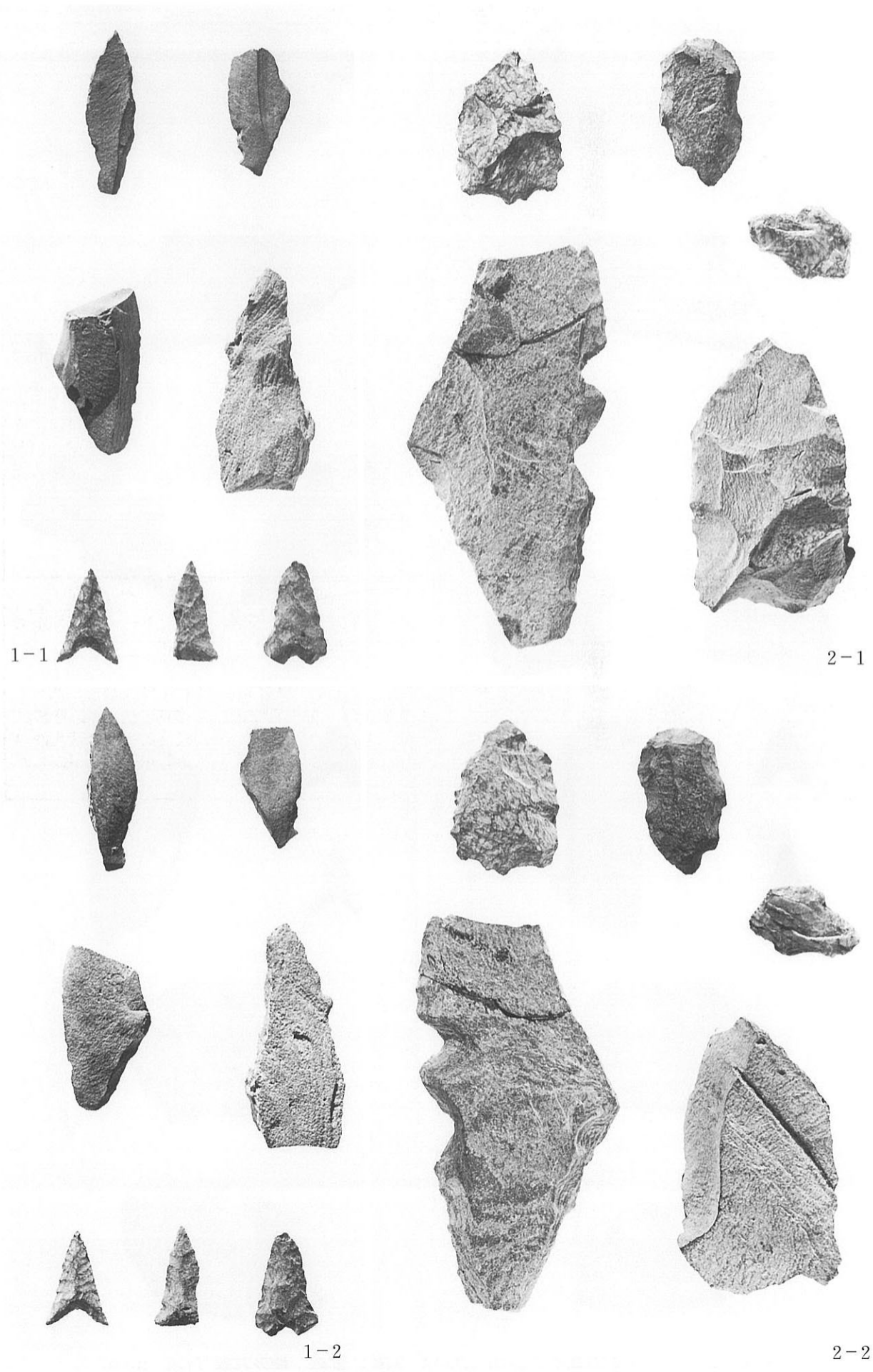
7-1



7-2



2Atr.黑色粘土層出土石器接合資料10、15~8、石鏃、削器、楔形石器 (1-8、3-10)



1-1

2-1

1-2

2-2

報告書抄録

ふりがな	かわらじょういせき に							
書名	河原城遺跡 II							
副書名	南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第68集							
編集者名	佐伯博光・三宮昌弘・大庭みゆき							
編集機関	(財)大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791 / FAX072(299)8905							
発行年月日	2002年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわらじょういせき 河原城遺跡	おおさかふ 大阪府 はびきのしかわらじょう 羽曳野市河原城 みほらちようたじい 美原町多治井	27222	131	34°32'44" ～ 34°32'34"	135°34'25" ～ 135°34'34"	2000.2.16 ～ 2000.10.3	4185㎡	南阪奈道路 建設に伴う 事前の埋蔵 文化財の調 査
		27385	29	X ～ -38900 ～ -39160	Y ～ -161250 ～ -161700			
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
河原城遺跡	製作址 集落	縄文時代 古墳時代後期 ～飛鳥・ 奈良時代	石器集中部 竪穴住居 カマド 掘立柱建物 溝・鍛冶址	サスカイト製石器遺物 須恵器・土師器・円筒埴輪 瓦・硯・磚・フイゴ羽口 鉄滓・移動式カマド		縄文時代石器製作址の 検出。 古墳時代後期～飛鳥・ 奈良時代の集落遺跡。 奈良時代には鍛冶関連 の遺構・遺物がみられ る。		

(財)大阪府文化財調査研究センター 調査報告書 第68集

河原城遺跡Ⅱ

－南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書－

発行年月日／2002年2月28日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財調査研究センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

TEL072(299)8791・FAX072(299)8905

印刷・製本／明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良県南京終町3丁目464番地